

人間の現実的・生物的解析

浅川朋彦

目次

1. 概要	1
1.1. 概要	1
1.1.1. 概要	1
1.1.2. 人間・現実と規則	2
1.1.3. 認識の修正	3
1.1.4. 全体像	4
1.2. 中核構造	6
1.2.1. 中核構造の概要	6
1.2.2. 精神疾患・問題行動	6
1.2.3. 社会	7
1.2.4. 中核構造の流れ	9
1.3. 「人間・現実と規則」の解析	10
1.3.1. 人間・現実	10
1.3.2. 知的生物	11
1.3.3. 規則	13
1.4. 解析の方法論	15
1.4.1. 人間・現実と規則	15
1.4.2. 情報処理の応用	15
1.4.3. 演繹的論理構造	16
1.5. 利用方法と特徴	19
1.5.1. 利用方法	19
1.5.2. 記述の特徴	20
1.5.3. 当解析の研究の経緯	20
1.6. 各章の要約と利用案	22
1.6.1. 基礎	22
1.6.2. 人間の各機能	22
1.6.3. 精神疾患・問題行動	24
1.6.4. 社会	25
1.6.5. 応用	27
2. 基礎	29
2.1. 脳	29
2.1.1. 解析方法	29
2.1.2. 機能一覧	29

2.1.3.	大脳新皮質以外	30
2.1.4.	大脳新皮質.....	33
2.2.	生人間と生現実.....	35
2.2.1.	認識・知性と認識外	35
2.2.2.	生感情・生自己・生現実.....	36
2.2.3.	生人間.....	38
2.2.4.	評価と生満足と認識の正誤	39
2.3.	規則と明確・曖昧.....	42
2.3.1.	規則と正しさ	42
2.3.2.	規則と生満足.....	44
2.3.3.	明確・曖昧.....	45
2.3.4.	単純・複雑.....	46
2.3.5.	複雑の単純・明確化.....	48
2.4.	二重人間と知性.....	51
2.4.1.	感情・感覚・行動と二重自己	51
2.4.2.	二重自己・二重人間と現実	52
2.4.3.	現実から生人間	54
2.4.4.	無認識感情.....	56
2.4.5.	他者認識と相互影響.....	57
2.4.6.	知性と暴走.....	58
2.5.	開放・閉鎖.....	61
2.5.1.	開放・閉鎖.....	61
2.5.2.	閉鎖枠と多閉鎖	63
2.5.3.	開放現実から生人間	65
2.6.	変数時空と多要素	68
2.6.1.	変数時空	68
2.6.2.	多要素と関係距離.....	69
2.6.3.	多要素階層.....	71
2.6.4.	多要素と開放・閉鎖	73
2.6.5.	多要素と時間と人間・現実	74
2.7.	規則化	76
2.7.1.	規則のスケール	76
2.7.2.	不規則の規則化	77
2.7.3.	規則発見と実験選択	78
2.8.	近辺・遠方.....	81
2.8.1.	近辺・遠方と正しさ・開放.....	81
2.8.2.	近辺から遠方へ開放.....	83
2.9.	人間と開放.....	86
2.9.1.	人間・現実と近辺・遠方.....	86
2.9.2.	自己・他者と開放・閉鎖.....	87
2.9.3.	自己・他者と曖昧な閉鎖.....	89

2.9.4.	人間・現実の中間.....	91
2.10.	局所・広域と実区分.....	94
2.10.1.	局所・広域とマイクロ・マクロ.....	94
2.10.2.	局所広域閉鎖.....	95
2.10.3.	生現実根拠と実区分.....	96
2.10.4.	実区分と開放・閉鎖.....	98
2.11.	多個人と社会.....	100
2.11.1.	多個人.....	100
2.11.2.	多個人と開放現実.....	102
2.11.3.	自己・社会と開放・閉鎖.....	104
2.11.4.	連携と相互生満足と信頼.....	106
2.11.5.	多個人の信頼と認識共有.....	108
3.	人間の各機能.....	111
3.1.	感情と満足.....	111
3.1.1.	知的生物の生感情.....	111
3.1.2.	感情・感覚・行動と開放現実.....	113
3.1.3.	感情種類と地味感情.....	114
3.1.4.	感情種類と開放現実.....	116
3.2.	時間と行動.....	119
3.2.1.	時間と予測.....	119
3.2.2.	短期・長期生満足.....	120
3.2.3.	行動と環境と成果.....	122
3.2.4.	下落成果と暴力.....	125
3.2.5.	行動最適化.....	127
3.3.	行動と局所・広域と自由.....	130
3.3.1.	局所・広域行動.....	130
3.3.2.	行動と局所広域閉鎖.....	131
3.3.3.	曖昧な自由.....	133
3.4.	実規則化.....	137
3.4.1.	実規則化.....	137
3.4.2.	行動・環境実規則化.....	140
3.4.3.	人工物と自然物.....	141
3.4.4.	内・外実規則化と局所・広域.....	143
3.5.	適切な実規則化.....	146
3.5.1.	行動実規則化と内・外.....	146
3.5.2.	人工物と実規則化.....	148
3.5.3.	実規則化と人間・現実.....	149
3.5.4.	実規則化の設計・計画.....	151
3.6.	認識知性伝達.....	154
3.6.1.	認識知性伝達.....	154
3.6.2.	認識知性伝達と開放現実.....	155

3.7.	認識遷移.....	157
3.7.1.	認識遷移と知性.....	157
3.7.2.	最終状態と開放・閉鎖範囲.....	159
3.7.3.	修正と最終状態とモデル.....	161
3.7.4.	認識遷移と人間・現実.....	162
3.7.5.	正・誤状態と開放現実.....	164
3.7.6.	閉鎖枠と認識遷移.....	165
3.7.7.	認識遷移と多閉鎖.....	167
3.8.	正・誤評性.....	169
3.8.1.	正・誤評価と正・誤評性.....	169
3.8.2.	正・誤評性と人間・現実.....	170
3.8.3.	人間・現実と認識・満足.....	172
3.8.4.	正・誤評性のグラフ.....	174
3.8.5.	現実の変形と正・誤評性.....	175
3.8.6.	感情種類と正・誤評性.....	176
3.8.7.	感情種類・実区分と正・誤評性.....	178
3.9.	認識遷移と近辺・遠方.....	180
3.9.1.	近辺・遠方.....	180
3.9.2.	近辺・遠方と正・誤評性.....	182
3.9.3.	局所・広域.....	183
3.9.4.	局所広域閉鎖と正・誤評性.....	185
3.10.	認識遷移と時間.....	187
3.10.1.	子供と思春期.....	187
3.10.2.	過去・現在・未来.....	188
3.10.3.	時間閉鎖と移動・停止時間系.....	190
3.10.4.	人間・現実と様々な時間閉鎖.....	192
3.10.5.	過去への近現実開放.....	194
3.11.	多個人の認識遷移.....	196
3.11.1.	最終状態の複写と正・誤者.....	196
3.11.2.	共有・非共有状態.....	197
3.11.3.	仮面・妥協・嘘攻撃状態.....	199
3.12.	対人関係と距離.....	202
3.12.1.	対人関係と開放現実.....	202
3.12.2.	対人感情と対人距離.....	203
3.12.3.	対人感情と閉鎖.....	204
3.12.4.	認識遷移と対人距離.....	206
3.12.5.	正・誤者と対人距離.....	209
3.13.	集約状態と多個人多閉鎖.....	212
3.13.1.	勝利状態と集約状態.....	212
3.13.2.	多個人多閉鎖.....	213
3.13.3.	最終状態の分布と集約.....	215

3.13.4.	多個人の局所広域閉鎖	217
3.13.5.	認識知性伝達と実区分	218
4.	精神疾患・問題行動.....	221
4.1.	精神分析・心理学と正誤	221
4.1.1.	精神分析・心理学.....	221
4.1.2.	誤状態の種類による分析.....	222
4.1.3.	認識遷移と正誤	223
4.2.	正常・普通と認識の正誤	225
4.2.1.	正常・異常と認識の正誤.....	225
4.2.2.	普通の満足と正誤.....	227
4.2.3.	不良・善良と常識.....	229
4.3.	正常・異常に関する構造	231
4.3.1.	恒常性と正誤.....	231
4.3.2.	薬物療法	232
4.3.3.	満足・不満.....	234
4.3.4.	活動性.....	236
4.4.	認識・知性の修正	238
4.4.1.	高意識と修正	238
4.4.2.	修正全般と継続的修正	239
4.4.3.	近辺・遠方と修正.....	243
4.4.4.	時間と修正.....	244
4.5.	認識・知性の誤り・問題	248
4.5.1.	現実の誤り	248
4.5.2.	認識破壊	249
4.5.3.	開放・閉鎖の誤り	251
4.5.4.	局所広域閉鎖.....	254
4.5.5.	感情の問題.....	257
4.5.6.	過去の感情の問題.....	261
4.6.	精神疾患・問題行動の種類と療法	263
4.6.1.	精神疾患・問題行動の種類	263
4.6.2.	精神疾患の療法	264
5.	社会	266
5.1.	行動実規則化と共同行動	266
5.1.1.	行動実規則化.....	266
5.1.2.	共同行動と参加・不参加.....	267
5.1.3.	行動資源と需要・供給	270
5.1.4.	参加生満足.....	271
5.1.5.	不参加と怠慢	272
5.1.6.	規定共同行動.....	273
5.2.	行動実規則化の複合的分析	275
5.2.1.	現実的行動実規則化と因習	275

5.2.2.	多環境適応と多様性	277
5.2.3.	多個人の集約・分散と規則	279
5.3.	権利	282
5.3.1.	権利と競争と需給	282
5.3.2.	競争と需給と接近・離反	284
5.3.3.	実規則化権利	285
5.3.4.	制限付き・無制限権利	287
5.3.5.	実規則化権利の崩壊	289
5.4.	貨幣と価値	291
5.4.1.	権利交換と貨幣	291
5.4.2.	価値と貨幣と需給	292
5.5.	権利の複合的分析	295
5.5.1.	権利と人間・現実	295
5.5.2.	対自然物・人工物権利	296
5.5.3.	権利と人口	299
5.5.4.	主導集約と正者	300
5.5.5.	小権利と多様性	302
5.6.	集団・社会と規則	304
5.6.1.	集団・社会と共同行動	304
5.6.2.	時空広域の規則	305
5.7.	主権国家	307
5.7.1.	主権国家	307
5.7.2.	国家と暴力と小権利	309
5.8.	様々な集団	312
5.8.1.	複合同行行動と複合集団	312
5.8.2.	勤務集団と家族の分離	314
5.8.3.	固定集団と因習集団	316
5.8.4.	国家と内部集団	318
5.9.	集団・社会の複合的分析	321
5.9.1.	集団・社会と人間・現実	321
5.9.2.	共同制約	322
5.9.3.	広域社会と閉鎖	325
5.9.4.	集団・社会と集約状態	327
6.	応用	330
6.1.	宗教・民族・家族への応用	330
6.1.1.	宗教と民族	330
6.1.2.	国家の多数派・少数派	331
6.1.3.	血統と家族	333
6.2.	経済への応用	337
6.2.1.	権利と貨幣と資本	337
6.2.2.	市場	339

6.2.3.	権利と経済学	340
6.3.	政治・法・国際への応用	343
6.3.1.	政治と法と行政	343
6.3.2.	国際政治と世界	344
6.3.3.	途上国への認識知性伝達	346
6.4.	自然科学への応用	349
6.4.1.	自然科学と医学	349
6.4.2.	自然保護	352
6.4.3.	数学と明確・曖昧	355
6.5.	情報処理への応用	359
6.5.1.	情報処理	359
6.5.2.	人工知能	360
6.6.	産業・都市・農村への応用	364
6.6.1.	産業の進化と実規則化	364
6.6.2.	産業と都市・農村	367
6.6.3.	大都市の集約・分散	368
6.6.4.	人口と大都市数	370
6.6.5.	農村の開発	372
6.7.	総合的な応用	374
6.7.1.	文化・本・マスメディア	374
6.7.2.	実用系・文芸系の生現実化	375
6.7.3.	学問	378
6.7.4.	学問と産業の区分	380
6.7.5.	教育	381
6.7.6.	犯罪	384
6.8.	発展への応用	385
6.8.1.	人類の発展	385
6.8.2.	歴史と未来の発展	386
7.	結論	390
7.1.	解析の結論	390
7.2.	認識・知性の修正	390
7.3.	まとめ	391
	参考文献	392

1. 概要

1.1. 概要

1.1.1. 概要

人文・社会科学は厳密さにおいて自然科学・医学に劣っている。また自然科学・医学は全体としての整合性を持つが、人文・社会科学にはない。自然科学・医学が一体的な繋がりを持つのに比べて、人文・社会科学の繋がり是不明確である。

これらを改善するため、人間の包括的・網羅的な理論解析を考案した。徹底した論理性・現実性と情報処理的手法に特徴がある。当解析は非常に難解であり、論理的な難解さと、普通から遠い難解さを兼ね備えている。

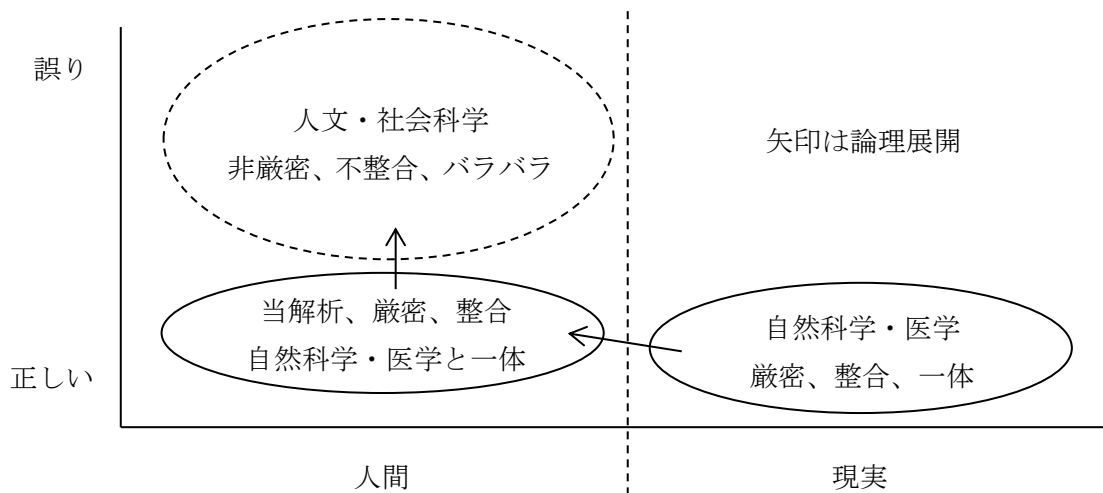
当解析は人間に関する事象を自然科学・医学の側に寄せて繋げ、人間を「現実化・生物化」するものである。人文・社会科学を含む、人間に関する様々な事象を包括的に解析した。現実と「メタな認識・規則」を使い、具体的な各種の精神疾患や社会構造などを説明できる。人間の現実化・生物化により解析を明確化でき、全体としての整合性を持たせる事ができる。これにより、人間に関する事象を自然科学・医学のように発展させる事が可能になる。

人間も一種の情報処理体 [1]と言えるので、情報処理の手法を応用して厳密な解析を行った。当解析は人間の情報処理的なリバースエンジニアリングに近い。厳密な演繹的論理構造を積み上げる事で、包括的・網羅的な理論解析を可能とした。

既存学問に対する適用を以下に示す。機械学習・強化学習の概念を人間の解析に適用できる（概要～人間の各機能章）。精神疾患の多くを構造的に解析でき、薬物療法の意味が分かる（精神疾患・問題行動章）。「普通の人間」の正誤を分析できる（精神疾患・問題行動章）。生態学を社会科学に適用できる（人間の各機能～社会章）。経済・国家・産業の根本的構造が分かる（社会～応用章）。中国が自由民主主義なしで先進国に近い発展をした理由が分かる（応用章）。巨大都市への人口集約の問題と、その改善策が分かる（応用章）。移動・交通に関する都市・農村の構造分析ができる（応用章）。犯罪・暴力の問題を個人から社会まで複合的に解析できる（全体）。共通論理を持つ様々な定量分析を、個人から社会まで行える（全体）。共通論理を持つ様々なシミュレーションを、個人から社会まで作成できる（全体）。

当解析の位置付けを以下に示す。自然科学・医学は厳密で整合しており、全体として一体的である。人文・社会科学は非厳密で不整合であり、全体としてバラバラである。自然科学・医学は現実が対象で正しい。人文・社会科学は人間が対象で、相対的に誤っている。当解析は厳密で整合しており、自然科学・医学側に対して一体的である。論理展開は自然科学・医学を元にして人文・社会科学に向かう。

当解析は厳密・現実的で難解である。厳密・現実的な議論でないと、当解析で検討できない。厳密な言葉の定義や、論理への当てはめなどが必要である。事象に対して当解析の論理を当てはめるのが難しい。既存の人文・社会科学の曖昧な議論では、当解析での評価をする事もできない。



当解析は厳密・現実的で難解
 厳密・現実的でないと当解析で検討不能、言葉の定義などが必要
 事象と論理の間を埋める作業が難しい

図 1-1 当解析の位置付け

当解析は論理構造が通常と異なり難解である。根本的に論理構造自体をメタに扱っている。また多方向の論理が相互に関連したり、途中で論理が方向転換したりする。紛らわしい概念も多く、正しく理解するには論理を追う必要がある。適用部分だけ見ても正確には分からない。それでも中核構造はある程度単純である。精神疾患・犯罪・暴力・国家・戦争・貨幣・産業などが中核構造と関連する。

理論解析として必要なのは全体としての整合性と具体性である。これについては十分な検討ができていない。細部の事象の検討は十分とはいえないが、具体的な検証が可能な状態にはある。

現代でも人間・社会には様々な問題が存在する。当解析を元に現実的・具体的分析をすれば、これらの問題を改善できる。ただし当解析は難解なので容易でない。当解析は現代人にとって厳しい内容である。

当解析は「人間的で素晴らしいもの」でなく、「現実的・論理的で役立つもの」である。必要なのは「素晴らしい曖昧な人間」でなく「現実的・明確で整合した真の人間」である。当解析が示す行先は現実的・生物的で整合した世界であり、普通から遠い世界である。普通から遠いため現実的・論理的に見ないと意味が分からない。当解析は、普通の人間にとって感覚的・感情的に受け入れがたい内容である。実際には普通レベルから問題の多い現代を、当解析により現実的に改善できる。

1.1.2. 人間・現実と規則

特に重要なのは「人間・現実と規則」の解析である。人間は曖昧で現実には明確である。現実の明確さにより自然科学・医学は発展してきた。人間も現実化・生物化すれば明確化・整合し発展できる。人間は知的生物である。「現実化・生物化した人間」と現実に向かうという制限下で、可能な限り明確な規則を作成する必要がある。

「現実化・生物化した人間」は生息状況として見るのが分かりやすい。

「人間・現実と規則」の解析に基づく「人間に対する考え方の正誤」を以下に示す。これも難解なので注意が必要である。

表 1-1 人間に対する考え方の正誤

正誤	考え方	詳細
正しい	現実的かつ生物的	明確・整合、生息状況、真の人間・感情 知的生物
条件付	現実的	生物的なら正しい
	論理的、合理的	現実的かつ生物的なら正しい
誤り	人間的、感情的	曖昧・不整合
	機械的	生物的でない
	動物的、野性的、人間以外の生物的	知的でない

「人間・現実と規則」の解析については、本章の該当節で記載している。この論理構造を理解する事が重要である。この部分は当解析の中核であり、かつ当解析の方法論を示すものでもある。

「人間・現実と規則」の解析による「人間が曖昧な理由」を簡単に説明すると、人間の内部を明確に見る事ができないからである。

1.1.3. 認識の修正

当解析では認識をモデルの集合体とする。モデルの対象は認識の外にある。誤った認識において、人間は曖昧でバラバラ・不整合である。現実には「人間と別のもの」と理解される。この認識全体を修正する必要がある。人間の認識を「現実的・生物的な真の人間」に修正すれば、人間全体で明確化・整合する。現実も人間と整合するように修正する。これが正しい認識である。

認識：モデルの集合体、モデルの対象は認識の外

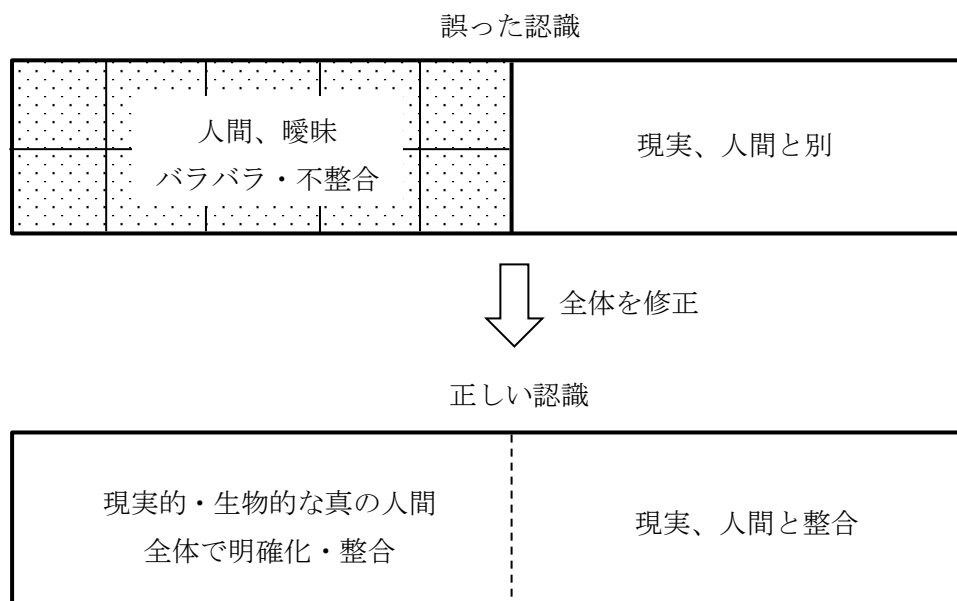


図 1-2 当解析による認識の修正

動物と人間の脳の先天的・後天的部分を比較する。「現実化・生物的な真の人間」は先天的部分であり、認識は後天的部分の一部である。動物の後天的部分は弱く、先天的部分に追従する。一方で人間の脳の後天的部分はとても強い。そのため先天的部分から独立して不整合を起こす。これは後天的部分の根本問題であり、先天的部分に合わせる必要がある。現実に対する科学技術は後天的部分の進歩によるものであり、人間の生物的進化ではない。後天的部分にはさらなる進歩が必要である。

認識の修正対象として自己の理解が重要だが、真の自己は分かりにくい。自己の生息状況として見るのが分かりやすい。

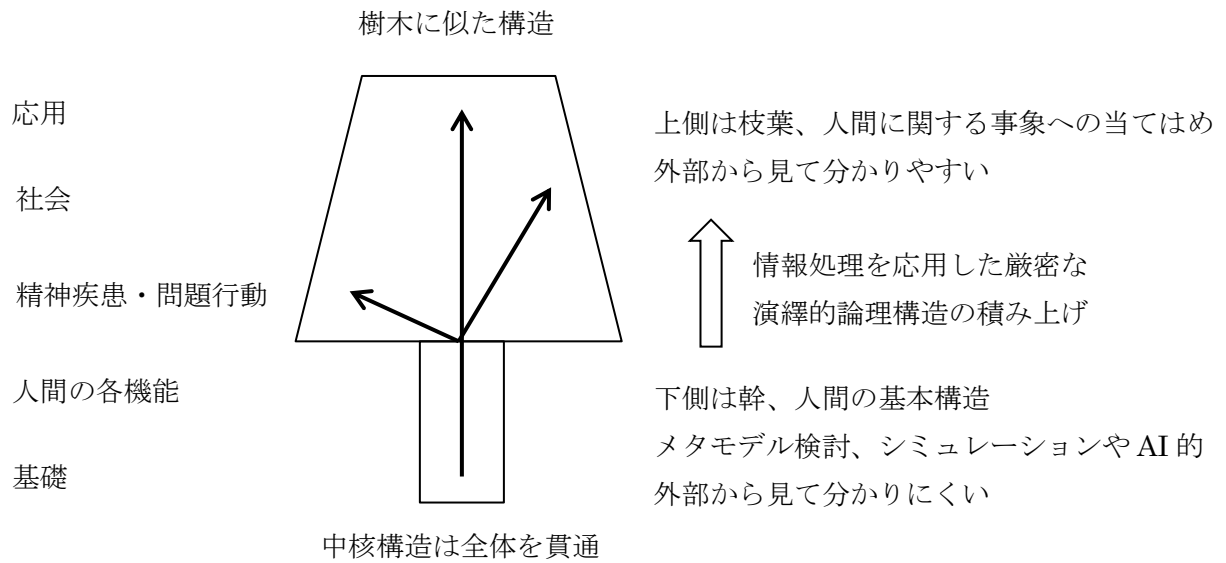
正しい認識が不十分なまま現実化すると、うつになる可能性がある。

当解析を使えば、「正しい感情」や「誤り方」なども具体的に分析できる。

1.1.4. 全体像

各章は、基礎、人間の各機能、精神疾患・問題行動、社会、応用、となっている。これらは模式図で書くと樹木に似た構造になる。下側は幹で、上側は枝葉になる。幹の部分では、人間の基本構造を論理的に追っていく。これは人間の基本構造に適したメタなモデルの検討であり、シミュレーションやAIのモデル検討に近い。このような研究は他に例がなく、外部から見て分かりにくい。枝葉の部分では、論理構造を人間に関する事象に当てはめていく。こちらの方が外部から見て分かりやすい。

当解析には幾つかの中核構造が存在し、この論理は全体を貫通している。全体の論理構造は長く難解だが、中核構造だけなら単純化できる。上側の枝葉と中核構造を理解するだけで、外部からある程度は理解可能である。



人文・社会科学を含む、人間の包括的・網羅的な理論解析、情報処理的手法
 自然科学・医学に寄せ人間を現実化・生物化・明確化、全体としての整合性
 現実と「メタな認識・規則」を使い、具体的な各種の精神疾患や社会構造などを説明
 全体は長く難解、上側と中核構造だけで、外部からある程度は理解可能

図 1-3 当解析の全体像

1.2. 中核構造

1.2.1. 中核構造の概要

中核構造には、認識・現実・規則・開放・実規則化などがある。認識・規則などをメタに扱っている。認識をモデルの集合体とし、知性を「認識を含む脳全体」の制御とする。認識と知性を分けて扱う。認識の機能は側頭連合野にあり、知性の機能は前頭前野にある。現実化・生物化した人間を生人間と呼ぶ。生人間は人間の生息状況として見るのが分かりやすい。生人間と現実を合わせたものを生現実と呼ぶ。開放は生現実における各規則の相互影響を示し、実規則化は行動による生現実の規則化を示す。生現実における明確な規則の発見が重要である。

認識・現実・規則は基盤となる構造であり、生現実の延長線上にある。ここから開放を經由して精神疾患の種類などを分析する。また基盤から実規則化を經由して具体的な社会構造を分析する。この際に生態学を応用して人間に適用できるようにする。

解析の対象はすべて具体的なものである。曖昧な思想を排除する事で解析を明確化でき、全体としての整合性を得られる。

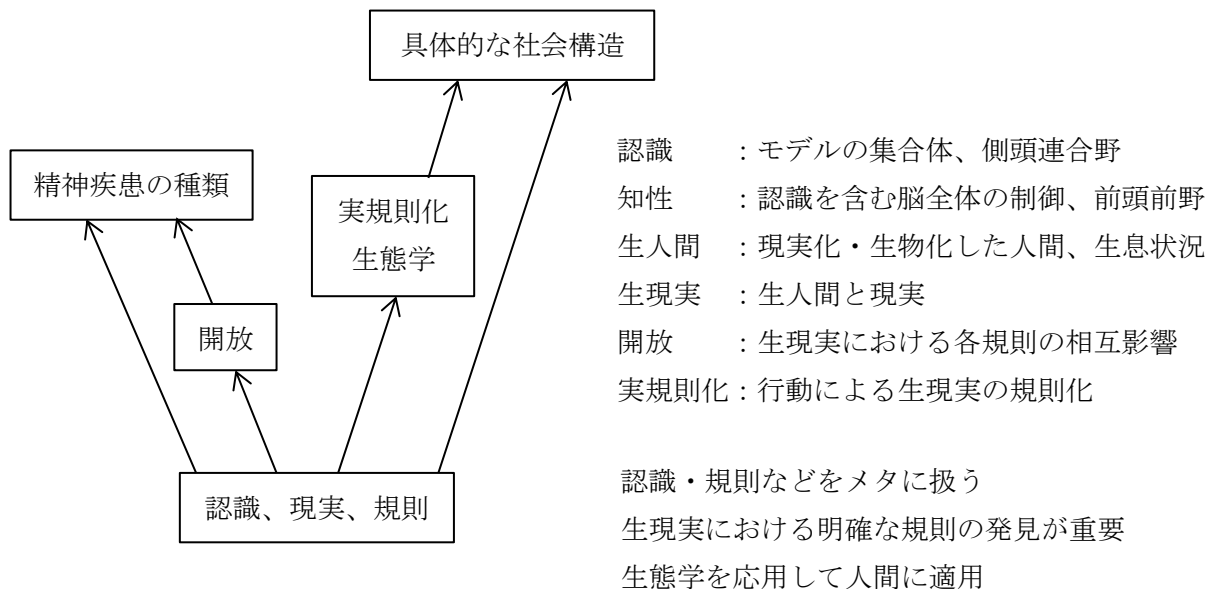


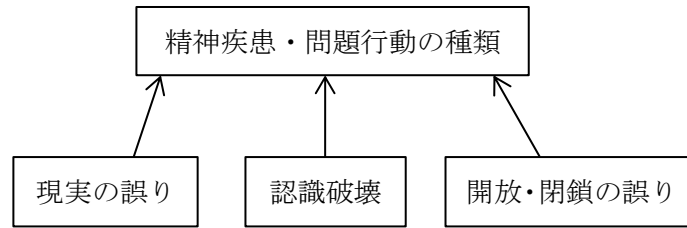
図 1-4 中核構造の概要

1.2.2. 精神疾患・問題行動

精神疾患と問題行動をまとめて扱い、演繹的に一般化する。精神疾患・問題行動の種類を分析する。認識の誤りを精神疾患・問題行動の原因の一部として捉え、現実の誤りと開放・閉鎖の誤りから分類する。

認識の破壊をうつ症状の原因として捉え、精神疾患の分類に利用する。認識破壊は正しいと評価した認識がない状況である。認識の評価は知性によるものである。閉鎖は生現実における各規則の相互影響を理解していない状況であり、誤った理解である。

当解析は精神分析の総合性を代替する事ができる。



精神疾患と問題行動をまとめて扱い、演繹的に一般化
 精神疾患・問題行動の原因の一部は認識の誤り
 うつ症状の原因は認識破壊、正しいと評価した認識がない、認識評価は知性
 閉鎖は開放の逆で誤った理解
 当解析は精神分析の総合性を代替

図 1-5 精神疾患・問題行動に関する中核構造

精神疾患・問題行動の原因を認識の誤りと見て、その種類を表で区分する。

表 1-2 精神疾患・問題行動の種類

種類	現実の誤り	認識破壊	開放・閉鎖の誤り	大区分
統合失調症	大きい		強い閉鎖	大きな認識の誤り
解離症	大きい		強い閉鎖、多閉鎖	
物質中毒	大きい		強い閉鎖	
双極性障害	大きい	あり	強い閉鎖	
従来型うつ		あり	社会への閉鎖*	中程度の閉鎖
新型うつ		あり	自己への閉鎖*	
犯罪、引き籠り、浪費			自己への閉鎖*	

*正しいと評価した方が問題、認識破壊は破壊前、不良・善良も自己・社会への閉鎖の一種

精神疾患・問題行動に関する中核構造の利用案を以下に示す。

- 現実と自己の生息状況の理解による認識修正を検証
- 人間・現実までの開放理解による認識修正を検証
- 精神疾患・問題行動における閉鎖枠内外での現実の変形を検証
- うつにおける認識破壊を検証
- 精神疾患・問題行動における自己・社会の閉鎖を検証

1.2.3. 社会

規則発見の延長として実規則化を分析し、人間の遺伝的規則と比較する。実規則化により人工物・自然物を分析する。人工物は内部まで実規則化できるが、自然物・人間は外部しか実規則化できない。人間内部の遺伝的規則は変更できないが、外部の遺伝的規則は変更できる。

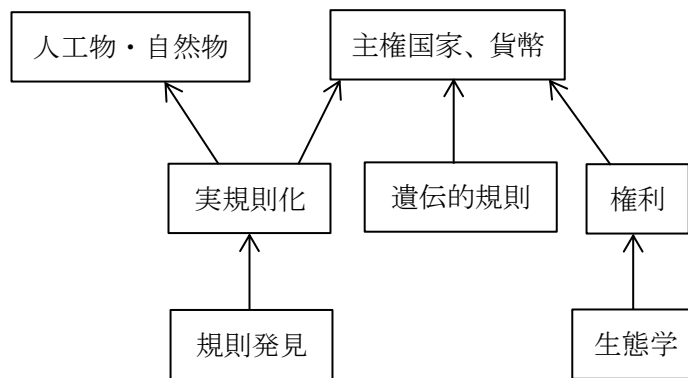
生態学を応用して権利を分析する。権利を「行動資源の優先度」と定義する。これは動物の縄張りや順位などである。権利などを元に主権国家や貨幣などを分析する。

遺伝的権利は暴力が付随するが、実規則化権利は暴力を止めて破壊を抑制できる。主権国家は実規則化権利を規定するものであり、国家間には暴力が残る。国家間の暴力は戦争である。

貨幣は権利交換のための実規則化権利である。地位のように貨幣にならない権利もある。需要・供給は行動資源から存在し、貨幣だけのものではない。需要・供給は生物でも存在する。

貨幣は人間・現実の中間に位置し曖昧さが残る。現実的権利の方が明確に分析できる。現実的権利には物・時空間の所有量などがある。

第一・二・三次産業を自然物・人工物・人間で分析する。



人工物は内部まで実規則化可能、自然物・人間は外部だけ実規則化可能
人間内部の遺伝的規則は変更できない、外部は変更できる
権利を「行動資源の優先度」と定義、動物の縄張りや順位など
遺伝的権利は暴力が付随、実規則化権利は暴力を止めて破壊抑制
主権国家は実規則化権利を規定、国家間には暴力が残る、戦争
貨幣は権利交換のための実規則化権利、地位のように貨幣にならない権利もある
需要・供給は貨幣以前の行動資源から存在し、生物でも存在
貨幣は人間・現実の中間、現実的権利の方が明確、物・時空間の所有量など
第一・二・三次産業を自然物・人工物・人間で分析

図 1-6 社会に関する中核構造

社会に関する中核構造の利用案を以下に示す。

- シミュレーションで実規則化・人工物・自然物を試行し実態と比較
- 貨幣以外の権利における需給を検証
- 生物における需給・権利を検証し人間と比較
- 物・時空間の所有量、生物的権利、養育人数など、様々な現実的権利を分析
- 実規則化・権利・国家などを使った歴史・世界の統一的解釈
- 壊れて困る権利の所有量と暴力抑制の検証

- 第一・二・三次産業における人工物・自然物・人間の多寡・価値を比較
- 人・物・時空間・現実的サービスなどの増減と出入りを分析
- 貨幣的な発展に対して、人口・現実的権利の増加が連動しているかを検証
- 現実的権利の増減に基づく仕事の必要性判別
- 犯罪を暴力・閉鎖・問題行動・権利・国家などで複合的に検証

1.2.4. 中核構造の流れ

中核構造の流れを以下に示す。今までの説明より少し広く記載している。

- 認識と規則を解析、論理構造自体をメタに扱うための準備
- 認識と人間・現実の構造を解析、人間の生現実化が必要
- 無認識感情を解析、無認識感情は認識を止めた感情
- 規則から開放・閉鎖を解析、開放が正しく閉鎖は誤り
- 開放・閉鎖は物理的手法を当解析に応用したモデルの一つ
- 正しい・誤りと評価した認識と、付随する満足・不満を解析
- 認識の正誤から精神疾患・問題行動や薬物療法を解析、現実・開放などを使用
- うつ症状の原因として認識破壊を解析
- 精神疾患・問題行動の具体的な種類と治療方法を解析
- 規則発見から実規則化を解析、実規則化から人工物・自然物・人間を解析
- 人間外部の行動実規則化を解析、遺伝的規則と実規則化を比較
- 生態学を応用して参加・不参加や権利を解析
- 参加・不参加・権利・実規則化を組み合わせ、多くの具体的な社会構造を解析
- 特に権利が重要で、実規則化権利から貨幣・主権国家などを解析
- 規則と生態学の多様性について解析、集約・分散を解析
- 人工物・自然物・人間を元に産業を解析
- 大都市の集約・分散を解析

1.3. 「人間・現実と規則」の解析

1.3.1. 人間・現実

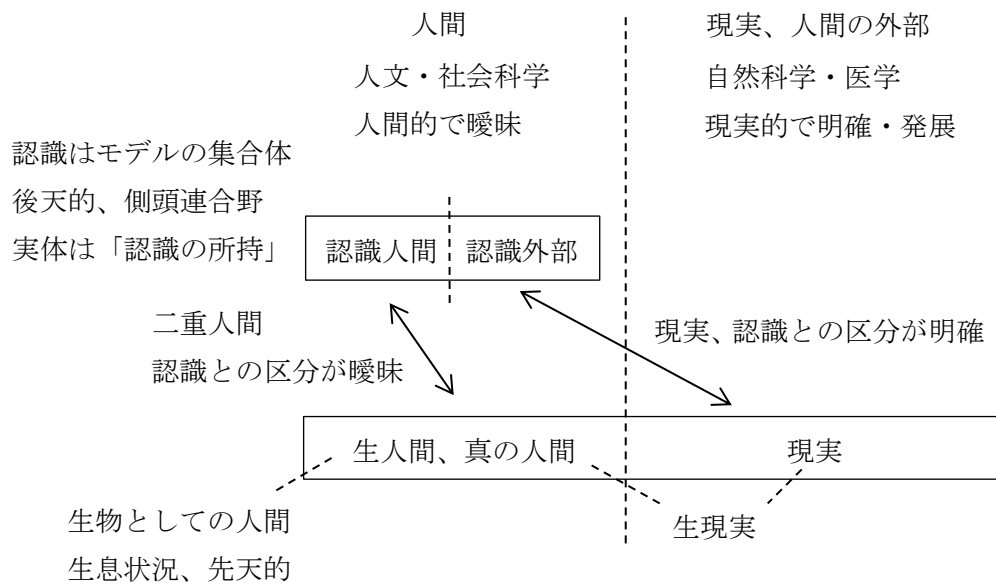
当解析で最も重要な概念は、曖昧な二重人間と明確な現実である。これが人間に関する事象の正しい方向性を示すものとなる。

人間の外部を「現実」とし、人間と現実の比較を行う。人間は内部に認識を所持しており、認識の上に、人間と外部の現実が再現されている。認識はモデルの集合体であり、後天的である。認識の機能は側頭連合野にある。認識の内容は「認識の外側」を再現しているだけで、実在はしていない。実在しているのは「認識の所持」だけである。

認識上の人間でない真の人間を「生人間」と呼び、生人間と現実を合わせて「生現実」と呼ぶ。生人間は先天的な生物としての人間であり、人間を外部から見た生息状況である。現実には人間の外部にあるので、認識との区別が明確である。生人間は認識人間と同様に人間の内部にあるため、認識との区別が曖昧になる。人間の内部で認識人間と生人間が二重化している状態を「二重人間」と呼ぶ。二重人間は人間の本質的問題であり、一部の認識人間だけの問題ではない。

人文・社会科学は人間を対象としており、そのままでは人間的で曖昧になる。自然科学・医学は現実を対象としており明確である。医学の対象は人間だが、方法論が生物学から来ているために現実的になる。人間の解析も生現実化すれば明確にでき、自然科学・医学と繋げて整合性を得る事ができる。これにより曖昧な人間的概念は不要になる。現実を見るだけでは人間側が修正できず不十分である。人間を生現実化し認識を修正する必要がある。誤った認識を壊すのではなく、正しい認識を作るべきである。

人間は曖昧で現実には明確である。現実の明確さにより自然科学・医学は発展してきた。人間的な認識は誤りであり、現実的・生物学的な認識が正しい。人間も生現実化すれば明確化・整合する。これにより生息状況が改善し発展できる。



二重人間が人文・社会科学の曖昧さの根本原因
人間に関する事象の生現実化、自然科学・医学と繋げて整合
人間の生現実化による明確化と発展、曖昧な人間的概念は不要
現実を見るだけでは不十分、人間の生現実化が必要
誤った認識を壊すのではなく、正しい認識を作る

図 1-7 二重人間と現実と科学

1.3.2. 知的生物

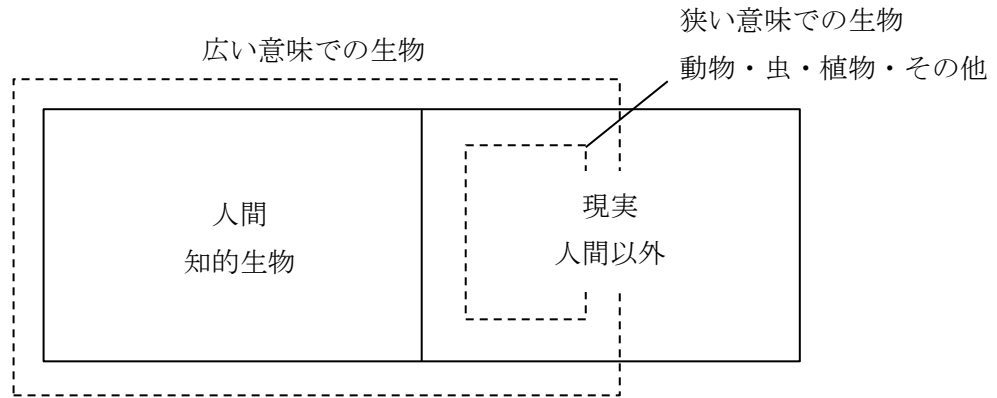
一般に生物と言った場合、人間以外の生物を示す。生物学の研究範囲は基本的に人間以外である。狭い意味での生物は人間以外であり、これは現実の一部である。狭い意味での生物には、動物・虫・植物などがある。広い意味での生物には人間も生物に含まれる。

人間は生物の一部であり、生現実化と言っても機械化する訳ではない。人間を生物として扱い、人間以外の生物に合わせる必要がある。人間的な理解は誤りであり、生物的な理解が正しい。

知性を「認識を含む脳全体」の制御とする。認識・知性とも後天的である。知性の機能は前頭前野にある。知性は AI の教師や、認知療法の自動思考に近い。人間は強い知性のため通常の動物と異なり、特殊な知的生物である。動物化でもなく生物化が必要である。強い知性により高度な認識を持つ事ができるが、暴走により認識が生現実から乖離する可能性もある。

人間的なこだわりは認識人間における感情の中にあり、これを無くすべきである。認識を止めた感情を理解する必要がある。

人間は知的生物である。人間の生現実化とは、生物化であり機械化ではない。人間的なこだわりを無くす事で現実化・生物化できる。

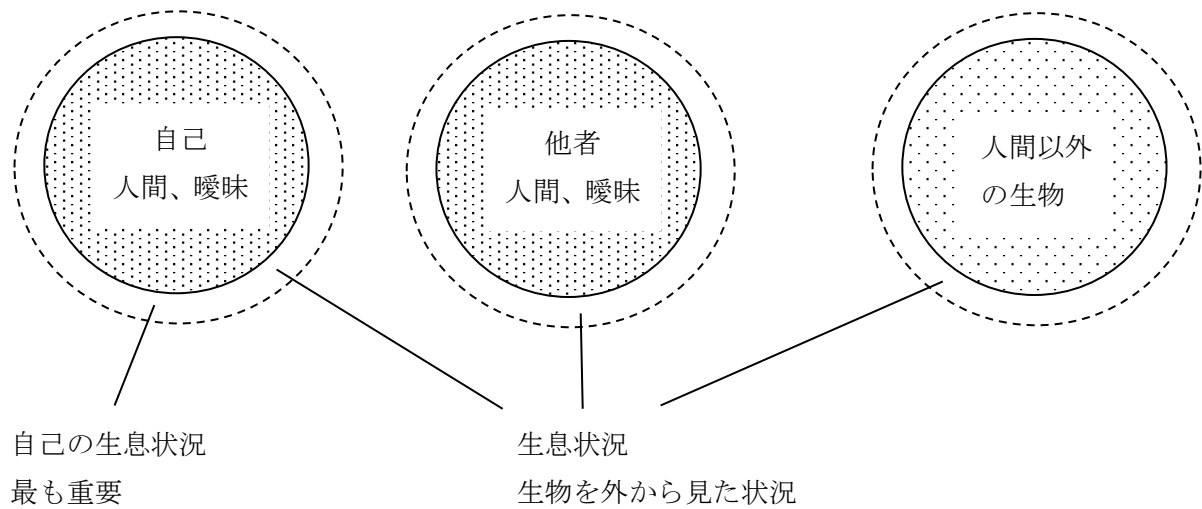


人間の生現実化、生物化であり機械化ではない
 知性は「認識を含む脳全体」の制御、後天的、前頭前野、AIの教師、自動思考
 人間は強い知性のため動物と異なる、動物化でもない
 強い知性により高度な認識、暴走により生現実から乖離

図 1-8 人間・現実と知的生物

生息状況は、生物を外から見た状況である。自己も他者も人間は曖昧であり、明確な現実から見るべきである。現実とは人間以外である。

人間以外の生物も内部は見えにくいいため、生息状況で判断している。人間も同様に生息状況で判断すべきである。自己の生息状況が最も重要である。生息状況は客観的でなく現実的・生物学的である。「客観」には他者の意味が含まれるため、適切な見方ではない。



人間以外の生物も内部は見えにくい、生息状況で判断している
人間も同様にすべき、客観的でなく現実的・生物的、客観は他者を含む

図 1-9 生息状況

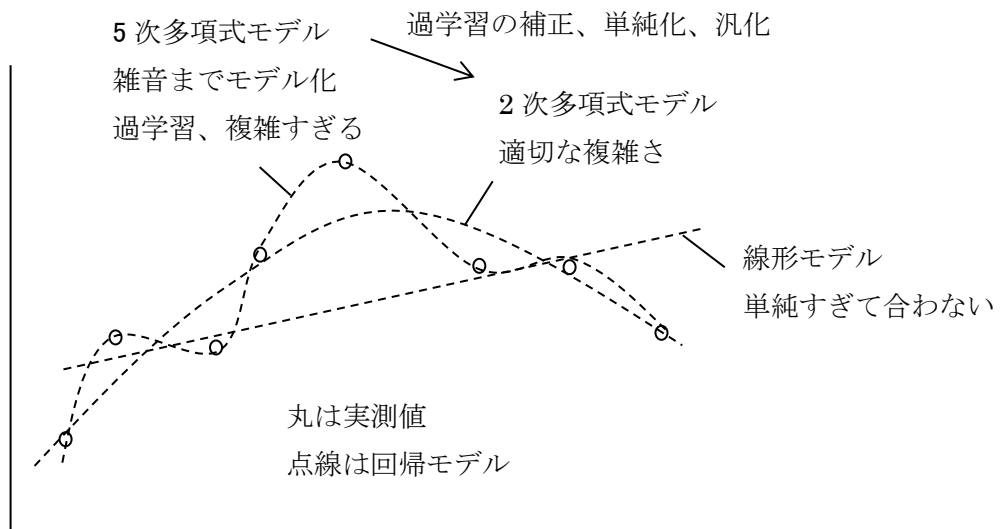
1.3.3. 規則

当解析では規則も重要な概念である。これは機械学習の方法論に基づいている。

機械学習においては学習パラメータが多すぎて汎化できない状態を過学習 [2] と呼び、複雑なモデルを可能な限り単純化する事が求められる。過学習と汎化について、連続変数を予測する回帰モデルで説明する [3]。下図の例では線形モデルは単純すぎる。5次多項式モデルでは雑音までモデル化しており、過学習で複雑すぎる。2次多項式モデルが適切である。

情報理論における情報量またはエントロピーは、事象の曖昧さ・混沌さを表す量である [4]。これは複雑さと曖昧さが本質的に近いことを意味する。

生現実にあうという制限下で、可能な限り単純・明確な規則を作成する必要がある。



情報理論では、情報量・複雑さ・曖昧さが本質的に近い
生現実に合うという制限下で、可能な限り単純・明確な規則を作成

図 1-10 機械学習の過学習・汎化と規則

1.4. 解析の方法論

1.4.1. 人間・現実と規則

解析の方法論として最も重要なのは、人間の生現実化である。人間の生現実化を行わないと論理が曖昧になってまとまらない。自然科学・医学の手法を人間に応用する事で生現実化ができる。神経科学による脳の構造、物理的手法、生態学などを人間に応用している。

人間と現実の構造は、解析自体においても重要である。人間の事象と現実的事象を区分する事で、これらの正しさの違いを明示できる。人間的な人文・社会科学と、現実的な自然科学・医学も、この方法で区分している。

規則の方法論も重要であり、当解析の全体像にも詳細にも深く影響している。当解析の全体像においては、人間の複雑な基本構造に対して、単純な中核構造を導入した。中核構造がないと人間に関する様々な事象まで「汎化」できないからである。当解析の詳細においては、中核構造の一部である規則・実規則化の論理構造の元となった。

現実とよく似た言葉に「具体的」があるが、「具体的」は個々の事実という意味を持つ [5]。具体的なものだけでは不十分であり、現実の概要も必要である。

1.4.2. 情報処理の応用

機械学習の応用については前述の通りである。それ以外に情報処理の図を応用した構造の明示を行った。一部で数式等の数値解析的手法も用いた。

数学は厳密な論理構造を持つが、人間に関する様々な事象を網羅するのは不可能である。経済の全体的解析などには数値解析が用いられているが、様々な分野にまたがった数値解析まではできない。通常的人文・社会科学で使われているような「普通の論理」では、十分な厳密性を確保できない。

数学と普通の論理の中間的な性格を持つ論理として情報処理がある。情報処理は数式を複雑化したものである。自然科学の数値計算から事務処理まで適用可能で、複雑なものに対応できる。数学ほど厳密でないが、人間の解析も可能である。人間の解析を厳密に行うには情報処理を使うしかない。通常はプログラムのために情報処理の設計技法を用いるが、ここでは人間の解析のために情報処理の設計技法を用いた。

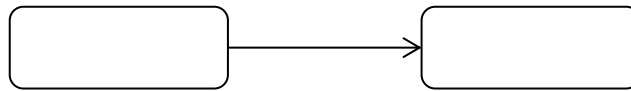
人間とコンピュータは違うものだが、人間も情報処理体 [1]であり、情報を処理する点は同じである。情報処理的手法を修正すれば人間を解析できる。ただし人間の解析において使用できるように修正する必要があり、通常の情報処理と同じではない。

情報処理と数学は根幹では繋がっており、情報処理的なモデルを厳密化していくと数学的モデルになる。数式を人間の解析で使う事は難しいが、数学的概念は使用可能である。情報処理モデルのための数学的概念を使用した。数式自体はあまり使用していないが、情報処理的な構造から数式化する事は可能である。

情報処理の設計・解析は主に図を用いて行われる [6] [7]。特にブロック線図が良く用いられる。矢印にはデータフロー（入出力）や状態遷移など様々な意味がある。

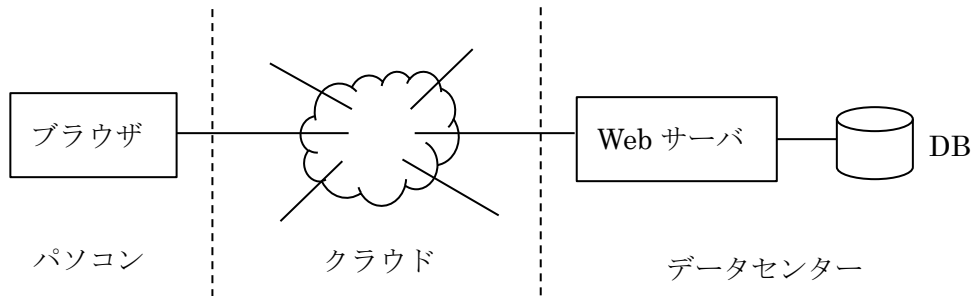
情報処理では模式図も多用される。以下に WWW に対する模式図の例を示す。模式図は区分、関係、個々の特徴などを示している。ブロック線図と比べて厳密さに欠けるが汎用的であり、全体像を示すのに有効である。

情報処理ではブロック線図や模式図以外にも様々な図が用いられる。これらを人間の解析に合うように修正しながら解析に適用した。



ブロック線図

データフロー（入出力）や状態遷移など様々な意味



模式図の例、WWW

区分、関係、個々の特徴などを示す

厳密さに欠けるが汎用的、全体像に有効

図 1-11 ブロック線図と模式図

1.4.3. 演繹的論理構造

最初に演繹・帰納そのものを検討する。前提から結論に至る論理構造において、演繹は前提に実体的根拠があるもの、帰納は結論に実体的根拠があるものである。実際には演繹の結論も実体的検証が行われるので、演繹は各段に実体的根拠がある事になる。演繹の前提から結論への論理が厳密に行われるのに対して、帰納は前提を類推するに過ぎず、演繹より厳密性は低い。実体的根拠の量と論理厳密性が、演繹と帰納の違いになる。この2つの問題は演繹・帰納に関わらず存在し、演繹と帰納の中間的な論理構造もあり得る。

帰納は演繹より実体的根拠が少なく論理厳密性も低いいため、多段化は困難である。大規模な論理構造を作るには向いていない。演繹なら十分な実体的根拠があれば一般化も可能である。人間の活動全体を解析するには演繹的手法でなければならない。

人文・社会科学では一般的に帰納的論法を用いており、経済などの数値解析でも帰納的である。厳密な解析は本質的に困難である。帰納では扱える領域も限られるため、統合的解析も困難になる。統合的かつ厳密な人間の解析を行うには、演繹的な解析が必須である。自然科学・医学の根幹には演繹的論法があり、これが厳密性を支えている。

演繹でも実体的根拠や論理厳密性が不足していれば誤りである。逆に帰納でも十分な実体的根拠があればある程度正しくなる。人文・社会科学だけでなく自然科学でも帰納的論理は様々な場所で多用されている。例えば実験データによる数式やグラフなどがこれに当たり、実体的根拠が十分にあればこれでも使用可能である。

人文・社会科学では帰納的論理の扱いも自然科学より不正確である。数値化が難しい面もあるが、実験・観察データによる数式やグラフ化などはあまり行われず、曖昧で非論理的である場合も多い。これでは正確な帰納的論理は難しい。できるだけ実体を明確化し、厳密に扱う必要がある。

演繹的論理構造を構築するには、厳密な論理が必須である。数学では汎用性に欠け、普通の論理では厳密性に欠ける。ある程度の厳密性を持って人間全体を解析するには、情報処理の論理が必要である。

演繹的論理構造の構築は、人間に関する複雑な事象を整理する事から始めた。論理的な網目を解き、論理の前後関係を整理した。これにより演繹的構造が作れる順番に事象を並べた。並べた事象に対して情報処理的な図と言葉による厳密な論理を付けた。問題発生時は関連する一番下の部分を修正し、再び演繹的論理構造を積み直した。最後に全体を貫く論理を抽出し、広域の事象を説明するための一般化を行った。これらすべての作業を行う事で、人間に関する演繹的論理構造を構築した。

すべての記述において、可能な限り前に出てきた概念だけで説明を行っている。これにより全体が演繹的論理構造となるようにしている。

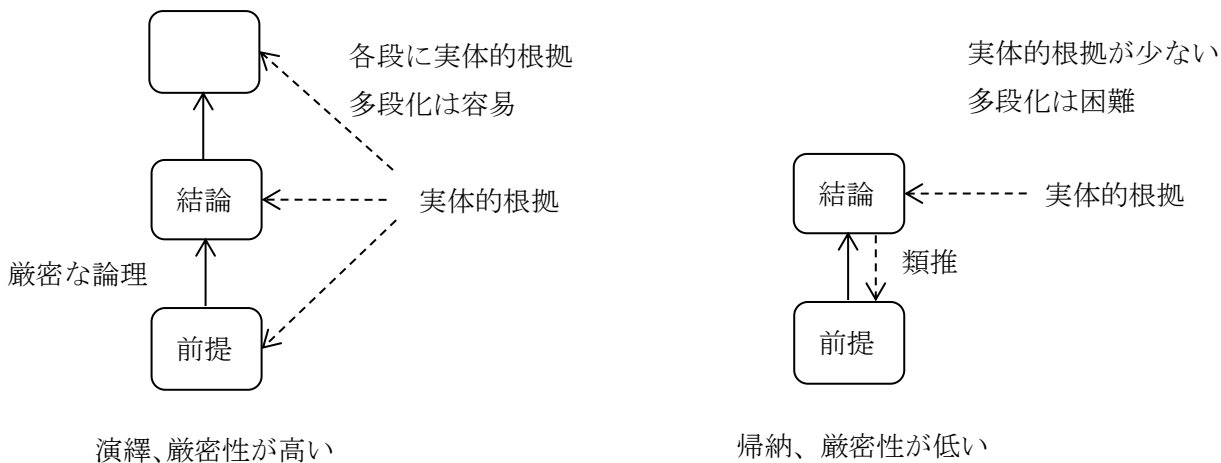


図 1-12 演繹・帰納

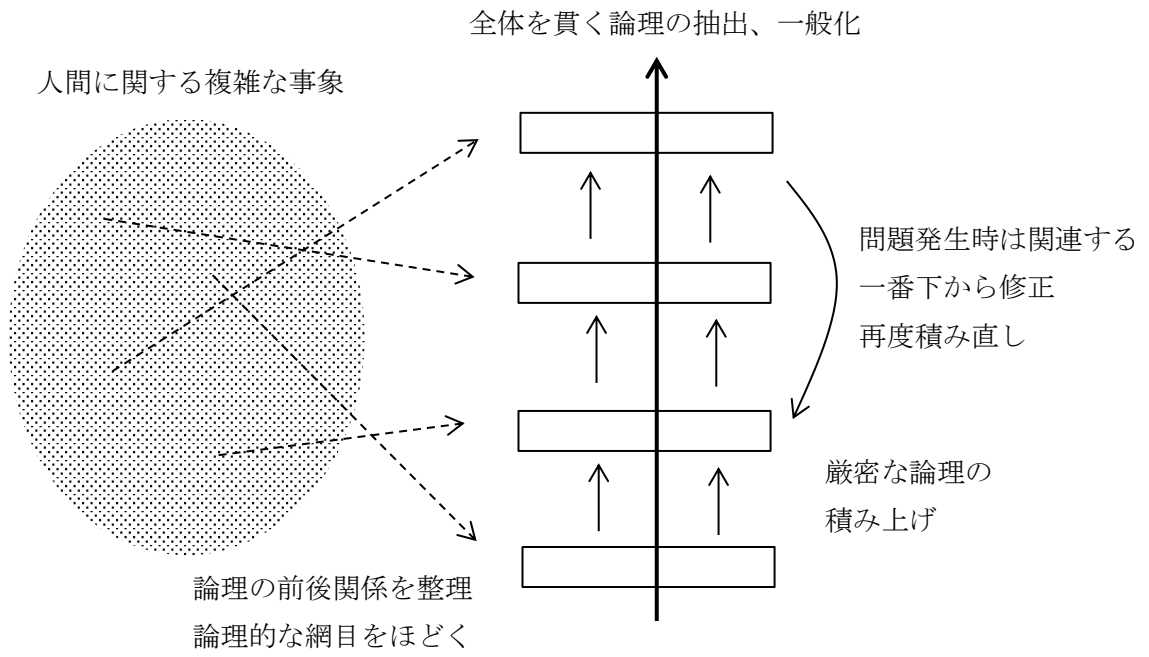


図 1-13 演繹的論理構造の構築

1.5. 利用方法と特徴

1.5.1. 利用方法

物理理論は演繹的で厳密である。自然科学・医学には様々な帰納的・演繹的論理があり、かなり厳密で物理理論と整合している。すべての論理が物理理論上にある訳ではなく、根幹に物理理論を置いて相互に連携している。

人文・社会科学には様々な帰納的論理があるが、厳密さに欠ける。個々の論理は連携せずバラバラである。

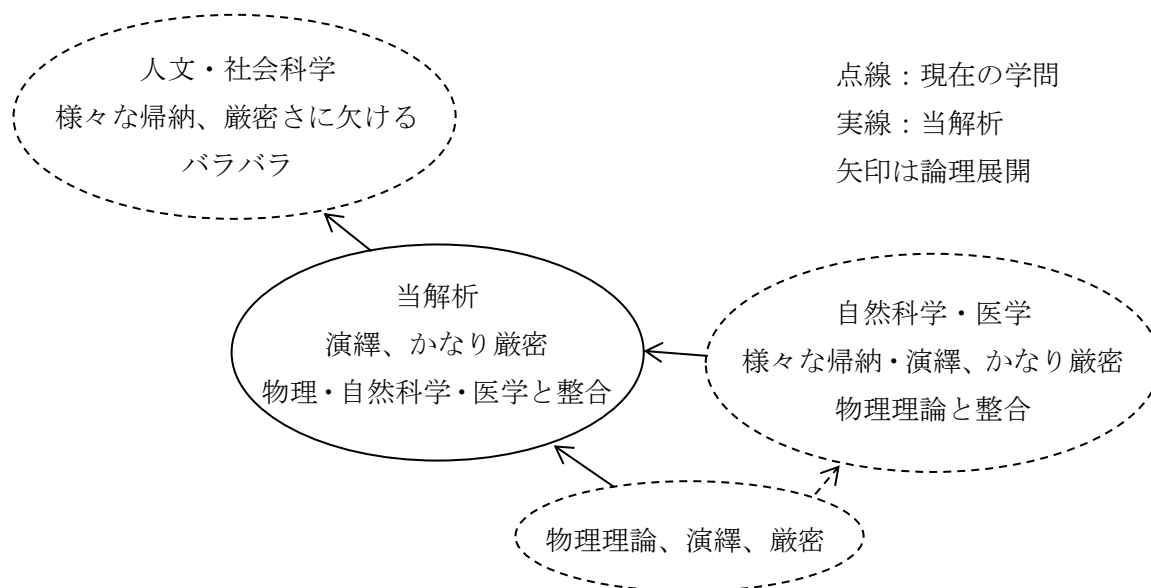
当解析は演繹的でかなり厳密であり、物理・自然科学・医学と整合している。当解析は人間に関する学問の根幹に入る事ができる。論理展開は自然科学・医学を元にして人文・社会科学に向かう。当解析は学問全体と連携しており、学際的利用が可能である。

当解析は定性的だが厳密で情報处理的であり、多数の情報处理的モデルの集合体である。そのため定量的に数値比較・統計・データ科学などで利用できる。情報处理的なのでシミュレーションなどによる利用もできる。

当解析は論理構造が重要であり、言葉・論理を厳密に理解しないと利用できない。これは定性的利用でも同様である。表面的に適用部分を理解しても、正確な意味は分からない。すべての論理を追うのは困難なので、部分的な論理を正確に追って利用すべきである。中核構造を見れば部分的な論理でも全体の流れが分かる。

「現実化・生物化した人間」に対して、厳密に当解析を当てはめる必要がある。当解析の対象は人間だが、利用方法は現実的論理と同様になる。物理学でも厳密に物理的数値を取得し、適切な数式を選ばないと利用できない。人間に関する事象が簡単に分かる訳ではなく、当解析への当てはめ方を検討する必要がある。

当解析は定性的だが、一例として「人口と大都市数」だけ簡単な定量的解析を行っている。これは「人口と大都市数」が定量的に扱いやすいためである。



当解析は学問全体と連携、学際的利用が可能
 定性的解析だが厳密で情報处理的、定量的に利用できる
 言葉・論理を厳密に理解しないと、定性的にも利用できない
 「現実化・生物化した人間」に対して、厳密に解析を当てはめる必要
 対象は人間だが、現実的理論・法則と同様の利用方法

図 1-14 当解析の利用方法

1.5.2. 記述の特徴

当解析における記述の特徴について、補足的に説明する。

当解析は難解で図が多いので、それに由来する特徴が幾つかある。多くの図に箇条書きで説明が付記されている。これは重要な個所を見やすくするためである。解析において先に図を書いてから文章を書いているためでもある。また図の内容と文章が重複している。これは図だけ見ても論理の流れが分からない場合があるためである。図の意味が分からない場合も、文章を追えばある程度分かると思う。

文章においては、「～が必要である」や「～とすべきである」などの強い語調が多い。これは解析から導かれる認識の正しい方向性を明示するためである。人間的・曖昧な事象に対して、現実的・明確な方向性を明示するために、このような書き方になる。この点をご理解いただきたい。

1.5.3. 当解析の研究の経緯

当解析は非常に難解なので研究を進めるのは大変だった。研究には20年以上の年月が掛かっている。そもそもの発端は自分の正しい「生き方」について悩んだ事である。心理学を調べると著者によって勧める「生き方」がバラバラである事に気づいた。正しい生き方を知るために心理学を情報処理により整理しようと試みた。このため自分の考え方自体が研究の対象であり、当解析の内容を自分の考えに合わせる行為は行っていない。逆に当解析の結果に自分の考え方を合わせている。

幹となる基本構造の研究を試行しているうちに、当解析の内容が心理学に収まらない事に気づいた。対象が膨大であるため研究は一時的に進まなくなった。その後、演繹的論理構造を積み上げれば対象が膨大でも対応

できる事に気づいた。これにより人間に関する事象を包括する理論解析を目指す事となった。

最終的な内容ができたのは、データ科学や機械学習を理解してからである。機械学習における過学習 [2]や汎化の概念を理解する事で、解析の精度が向上した。これにより中核構造の導入や規則・実規則化の解析が可能になった。

普通・満足の問題の解析は最終盤で行った。これらは自分自身においても納得するのは困難で、とても苦労しながら解析を進めた。

出発点は心理学の延長であり、普通の人文・社会科学に近いもので、それほど厳密ではなかった。最終的に、当解析は自然科学・医学に近づき、厳密なものとなった。また前述のとおり心理学に収まらず、人間に関する事象を包括する内容になった。結果的に人間に関する全体としての整合性を与えるものとなった。

研究の前半はモデル検討を中心に行っており、具体的な人間に関する当てはめは少なかった。人間に関する事象への明確な当てはめは、終盤で現れたものである。

人間の生現実化・包括性・厳密さ・整合性・普通からの遠さは最終的な特徴であり、これらを目指した訳ではない。過去の研究と最終形態は大きく異なり、結論も違う。理論解析を実用に足るレベルにするには、これらの内容に至る必要があったと思われる。

1.6. 各章の要約と利用案

各章の要約と利用案を以下に示す。中核構造で挙げた利用案も、各章との関係を示すため再掲している。一部については中核構造と少し内容を変えている。

1.6.1. 基礎

(1) 要約

神経科学による脳の構造を情報处理的に解析する。主要な機能である知性・認識・感情・感覚・行動を解析する。これらの情報处理的な全体像を作る。

知性・認識・感情・感覚・行動の構造を解析する。生人間・生現実と二重人間の構造や、無認識感情などを解析する。知性による認識の正しい生現実化について解析する。

これと並行して、規則について解析する。規則は認識内の推論を正しく行うために重要である。正しさ・生満足・明確・曖昧・単純・複雑などの基本的内容を解析する。

規則の延長として、物理的手法を当解析に応用するためのモデルを解析する。これは開放・閉鎖・変数時空・多要素・近辺・遠方・局所・広域などである。開放・閉鎖は重要で、生現実における各規則の相互影響の有無を示す。生現実には常に開放しており、閉鎖した認識は誤りである。開放は精神疾患などの分析で多用される。

これと並行して、規則化を行うための規則発見と実験選択について解析する。実験選択は遺伝的多様性に相当する生態学的な概念である。

多要素を人間に適用した多個人を使用し、社会の基礎的な解析を行う。

(2) 利用案

- 開放・閉鎖認識の空間と時間の連動を検証
 - ▶ 空間における開放・閉鎖認識を持つ人間が、時間においても開放・閉鎖認識を持つかどうかを検証する。
- シミュレーション・AIで規則発見と実験選択を試行し生物・人間と比較
 - ▶ シミュレーション上で規則の理解により行動が改善する状況を作る。AI的な規則発見による理解と、実験選択による理解を試行する。これを生物・人間と比較する。
- 知性により誤解が強化されるかを大人・子供・動物で検証
 - ▶ 特定の作業を行わせる際に、最初に誤解を招く情報を与える。これで作業がどれだけ失敗するかを、大人・子供・動物で検証する。

1.6.2. 人間の各機能

(1) 要約

人間の機能のうち、感情・行動・認識・知性について詳細に解析する。感情種類や地味感情を解析する。

物理的手法を応用した近辺・遠方・局所・広域と、行動を組み合わせた解析を行う。その中で暴力の問題を解析する。

行動の延長として実規則化を解析する。これは行動により生現実の一部を規則化するもので、社会の解析に

において重要になる。人工物・自然物・人間に対する実規則化の差異を解析する。

認識・知性について、認識知性伝達や認識遷移を使って詳細に解析する。認識遷移は情報処理の状態遷移図を認識に応用したもので、認識・知性の解析において多用される。認識遷移と現実・開放の組み合わせが重要である。

認識・知性・感情・満足を合わせた正・誤評性を解析する。正・誤評性は認識による満足の増減分であり、精神疾患などの分析で多用される。曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさが必要である。

物理的手法を応用した近辺・遠方・局所・広域と、認識遷移を組み合わせた解析を行う。

対人関係や多個人における認識・知性のあり方を、認識遷移を中心にして解析する。

(2) 利用案

- 無認識感情と感情種類開放の関係を検証
 - 無認識感情によりこだわりを無くした際に、理解できる感情種類が増えるか検証する。
- 開放・閉鎖認識における感情種類と外部現実の連動を検証
 - 感情種類の開放・閉鎖認識において、連動する外部現実の開放・閉鎖認識を検証する。
- AIの強化学習で短期・長期生満足や行動最適化を試行し人間と比較
 - AIの強化学習を使い、人間に見られるような短期・長期生満足や行動最適化を試行する。これを実際の人間と比較する。
- シミュレーション・AIで短期・長期・下落成果を試行し人間と比較
 - シミュレーションやAIの強化学習を使い、短期・長期・下落成果を試行する。これを人間と比較する。
- シミュレーション・AIで局所・広域での開放・閉鎖と行動最適化を試行し人間と比較
 - シミュレーションやAIの強化学習を使い、時空間の局所・広域で開放・閉鎖した行動最適化を試行する。これを人間と比較する。
- シミュレーションで実規則化・人工物・自然物を試行し実態と比較
 - シミュレーションで規則を自律的に変更可能な状況を作り、実規則化・人工物・自然物を試行する。これを人間などの実体と比較する。
- 質問票による認識遷移図の作成
 - 回答により認識遷移図を作成可能な質問票を作り、精神疾患・問題行動などに対して検証する。
- シミュレーション・AIで正・誤評性や現実の変形を試行し人間と比較
 - シミュレーション・AIで疑似的に正・誤評性が発生する状況を作り、その動作や現実の変形を試行する。これを人間と比較する。
- 満足側・不満側感情種類と正・誤評性の関係を検証
 - 満足側・不満側の感情種類にも正・誤評性がある事を検証する。これらの精神疾患・問題行動での振る舞いを検証する。
- 時間開放・閉鎖と移動時間系・固定時間系を検証
 - 時間的に開放・閉鎖した認識において、移動時間系・固定時間系の認識があるか検証する。
- 対人での共有・非共有状態と開放・閉鎖の関係を検証
 - 対人において共有・非共有状態の認識がある場合、開放・閉鎖の認識の振る舞いを検証する。

- 最終状態の分布と多個人多閉鎖を検証
 - 多数の人間の認識における最終状態を調べる。これらの分布と多個人多閉鎖を検証する。

1.6.3. 精神疾患・問題行動

(1) 要約

精神分析・心理学・正常・異常と認識の正誤について解析する。精神疾患と問題行動をまとめて扱っている。認識を正しくする事による精神疾患・問題行動の修正について解析する。認識の正誤を判定する手段として現実・開放・閉鎖を使用する。正常・異常・普通について分析し、その手段として正・誤評性などを使用する。恒常性・薬物療法・満足や、原因・症状の治療などを分析する。認識の修正方法の詳細を、認識遷移を使って解析する。

認識の誤りと問題の種類について、認識遷移を使って解析する。現実・開放・閉鎖と正・誤評性を使う。大うっは認識が破壊され、正しいと評価した認識がない状況と見なす。感情は人間的で正誤が不明確であるため、認識の誤りでなく問題として捉える。

ここまでの解析をまとめて、精神疾患・問題行動と療法について解析する。

(2) 利用案

- 現実と「自己の生息状況」の理解による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、現実と「自己の生息状況」の理解を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 「曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさ」による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、「曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさ」の理解を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 「人間的認識による生不満」の理解による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、「人間的認識による生不満」の理解を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 「満足感でなく自己の生息状況」による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、「満足感でなく自己の生息状況」の理解を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 様々な普通の満足による閉鎖分断・不整合を検証
 - 様々な普通の満足がどのように閉鎖分断・不整合を起こしているか検証する。
- 精神疾患・問題行動における満足の問題点を検証
 - 精神疾患・問題行動において、満足がどう悪影響を及ぼしているか検証する。
- 人間・現実までの開放理解による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、人間・現実までの開放理解を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 無認識感情による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、無認識感情の理解を指導する。これにより問題の改善が

あるか検証する。

- 現実的な部屋の整理・掃除による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、現実的な部屋の整理・掃除を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 植物・動物から生物的な感情に繋げる事による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、植物・動物から生物的な感情に繋げる事を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 時空間の近辺・遠方開放による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、時空間の近辺・遠方開放の理解を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 「自然の中で現実を見てこだわりを無くす事」による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、「自然の中で現実を見てこだわりを無くす事」を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 精神疾患・問題行動における閉鎖枠内外での現実の変形を検証
 - 精神疾患・問題行動において、閉鎖枠内外で現実がどのように変形されるかを検証する。
- うつにおける認識破壊を検証
 - うつにおいて認識が破壊されているかを検証する。また認識破壊がどのような状況になっているかを検証する。
- 精神疾患・問題行動における感情種類の閉鎖を検証
 - 精神疾患・問題行動において、感情種類が閉鎖されているかを検証する。また閉鎖がどのような状況になっているかを検証する。
- 特定の感情種類への閉鎖に対し、開放による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動において特定の感情種類への閉鎖がある人間に対して、開放の理解を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 地味感情まで含めた開放的な感情種類による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、地味感情まで含めた開放的な感情種類の理解を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 「一点で高い満足でなく全体での満足」による認識修正を検証
 - 精神疾患・問題行動がある人間に対して、「一点で高い満足でなく全体での満足」を指導する。これにより問題の改善があるか検証する。
- 精神疾患・問題行動における局所広域閉鎖を検証
 - 精神疾患・問題行動において、局所広域閉鎖があるかを検証する。また閉鎖がどのような状況になっているかを検証する。

1.6.4. 社会

(1) 要約

社会の構造について、行動自体の実規則化である行動実規則化を中心として解析する。人工物の実規則化を含め、実規則化はこの章全体で使用している。行動における遺伝的規則と実規則化の比較が重要である。

行動資源・需要・供給・共同行動・参加・不参加について解析する。

行動実規則化と人間・現実を合わせて解析し、因習の問題を提示する。

多環境適応と多様性について解析する。多環境適応は種の多様性に相当する生態学的な概念である。規則性の低い規則である多様性と、人間が求める規則との関係を分析する。その延長として多個人の集約・分散について解析する。

権利・競争・需要・供給について解析する。権利を「行動資源の優先度」と定義する。権利は生態学とも関係する重要な概念である。実規則化権利の構造を共同行動・暴力と組み合わせて解析する。権利と貨幣・価値・現実・自然物・人工物・人工物・多様性などを組み合わせて解析する。

ここまでの解析を用いて集団・社会を解析する。主権国家・勤務集団・家族・固定集団などについて解析する。集団・社会と人間・現実・開放・閉鎖・認識などを組み合わせて解析する。

(2) 利用案

- シミュレーションで行動資源と需要・供給を試行し生物・人間と比較
 - シミュレーションで行動資源と需要・供給を試行する。これを生物・人間と比較する。
- シミュレーションで共同行動への参加・不参加と需要・供給を試行し人間と比較
 - シミュレーションで共同行動への参加・不参加がある状況を作り、参加に対する需要・供給を試行する。これを人間と比較する。
- 貨幣以外の権利における需給を検証
 - 貨幣以外の権利には地位などがある。これらに対して需給を検証する。
- 生物における需給・競争・権利を検証し人間と比較
 - 生物の行動資源に対して、需給・競争・権利を検証する。これらを人間と比較検討する。
- シミュレーションで怠慢を試行し人間と比較
 - シミュレーションで共同行動における怠慢を試行する。これを人間と比較する。
- シミュレーションで多環境適応を試行し人間と比較
 - シミュレーションで様々な環境がある状況を作り、多環境適応を試行する。これを人間と比較する。
- 生物の遺伝的多様性・種の多様性を人間の実験選択・多環境適応と比較
 - 生物の遺伝的多様性・種の多様性は、当解析の実験選択・多環境適応に相当する。これらを生物と人間の場合で比較する。
- 生物の制限付き権利を検証し人間と比較
 - 生物において権利の拡大に制限がある事を検証し、人間と比較する。
- 物・時空間の所有量、生物的権利、養育人数など、様々な現実的権利を分析
 - 様々な現実的権利を調査し、関係性の分析や予測などを行う。
- 対自然物・対人工物・対人間の権利と、人口増加の関係を検証
 - 対自然物・対人工物・対人間の権利について、人口増加時の1人あたり権利の変化を検証する。
- 実験選択・多環境適応における小権利の必要性を検証
 - 小権利が離反・怠慢した場合に、実験選択・多環境適応が困難になるかを検証する。
- 小権利の離反と国家内暴力を検証
 - 小権利が国家から離反している場合の国家内暴力と、小権利の認識の正誤を検証する。

- 勤務集団と家族の途上国・先進国での差を検証
 - 勤務集団と家族の構造について、途上国と先進国での差を検証する。
- 様々な固定集団の程度と問題点を検証
 - 因習集団・強権的国家などの固定集団に関して、固定の程度と問題点を検証する。
- 実規則化・参加・不参加・権利・国家などを使った歴史・世界の統一的解釈
 - 実規則化・参加・不参加・権利・国家などを使い、歴史・世界の様々な部分を統一的に解釈する。
- 壊れて困る権利の所有量と暴力抑制の検証
 - 壊れて困る権利の所要量と、暴力が抑制される程度の関係を検証する。

1.6.5. 応用

(1) 要約

ここまでの解析を人間に関する事象の様々な分野に応用する。宗教・民族・家族・経済・政治・法・国際などを解析する。人文・社会科学以外の分野にも応用する。自然科学・数学・情報処理・産業・都市・農村などを解析する。最後に総合的な応用として、文化・学問・教育・歴史・未来などを解析する。

(2) 利用案

- 国家の多数派・少数派と開放・閉鎖を検証
 - 国家の多数派・少数派における開放・閉鎖認識を調べ、閉鎖認識による問題点を検証する。
- 家族・準家族による養育の状況を検証
 - 様々な家族・準家族がどのように養育を行っているかを検証する。
- 女性の社会進出における勤務者1人当たりの養育人数と出生率の変化を検証
 - 女性が社会進出する状況において、勤務者1人当たりの養育人数がどう変化しているかを検証する。これと出生率の関係も検証する。
- 経営者・従業員の立場を含む企業の様々な権利を検証
 - 企業の権利について、貨幣の権利だけでなく様々な権利を検証する。これには経営者・従業員の立場も含まれる。
- 様々な権利交換・市場における単純化の程度を検証
 - 様々な権利交換や市場に対して、種類や場所などの単純化の程度を検証する。
- 欧米の実規則化階層構造と実験選択・多環境適応の関係を検証
 - 欧米の実規則化階層構造において、実験選択と多環境適応がどう作用しているかを検証する。
- 先進国から途上国への認識知性伝達における人間的・現実的な伝達を検証
 - 先進国から途上国への認識知性伝達において、人間的・現実的な認識・知性がどう伝達されているかを検証する。これらと途上国の発展との関係を検証する。
- 可換・原料・その他自然物と人工物の需給・価値を検証
 - 人工物を可換・原料・その他で分ける。これらと人工物の需給と価値を検証する。
- AIを知性・認識・開放・認識遷移などで検証し人間と比較
 - AIに対して人間と同じように知性・認識・開放・認識遷移などで検証する。これを人間と比較する。

- 農村での人工物・自然物の混在と区分けを検証
 - 農村において人工物・自然物がどれだけ混在し、どれだけ区分けされているかを検証する。それを元に農林水産業の効率や自然保護について検討する。
- 第一・二・三次産業における人工物・自然物・人間の多寡・価値を比較
 - 第一・二・三次産業の様々な状況において、人工物・自然物・人間の多寡・価値を比較検討する。
- 農村・工場・都市における自然物・人工物・人間の多寡・価値を比較
 - 農村・工場・都市において、人工物・自然物・人間の多寡・価値を比較検討する。
- 文芸系の様々な閉鎖種類と閉鎖の程度を検証
 - 文芸系にある様々な閉鎖の種類を検証し、閉鎖の程度を調べる。
- 教育の分野ごとの仕事における利用度を検証
 - 教育の分野ごとの内容が、仕事でどれだけ利用されているかを検証する。
- 人・物・時空間・現実的サービスなどの増減と出入りを分析
 - 人・物・時空間・現実的サービスなどの増減と出入りを調査する。これらの関係性を分析し、発展のための予測を行う。
- 貨幣的な発展に対して、人口・現実的権利の増加が連動しているかを検証
 - 貨幣的な発展と人口・現実的権利の増加を計測し、これらが連動しているかを検証する。
- 現実的権利の増減に基づく仕事の必要性判別
 - 様々な仕事による現実的権利の社会全体での増減を計測して、仕事の必要性を判別する。
- 出生率と時空間・現実的権利の関係を検証
 - 出生率と養育時間・居住面積などの時空間・現実的権利との関係を検証する。
- 出生率と大都市・実家までの移動時間の関係を検証
 - 出生率と時空間の関係の一部として、大都市・実家までの移動時間との関係を検証する。
- 大都市への移動時間による発展・衰退状況を検証
 - 大都市への移動時間により、周辺部や農村がどう発展・衰退しているかを検証する。
- 先進国・途上国の行動実規則化と法・因習・宗教・マスメディア・ネットなどとの関係を検証
 - 先進国・途上国において、行動実規則化と法・因習・宗教・マスメディア・ネットなどがどう関係しているかを検証する。
- 犯罪を下落成果・暴力・閉鎖・問題行動・権利・国家・教育などで複合的に検証
 - 犯罪に関して、下落成果・暴力・閉鎖・問題行動・権利・国家・教育などを使い複合的に検証する。

2. 基礎

2.1. 脳

2.1.1. 解析方法

現在の神経科学の研究（[8] [9] [10] [11]など）に基づき総合的な検討を行う。特に器質的な研究を用いる。これは今後の演繹的論理構造で利用するためのものである。

まず主な各部位の具体的機能を列挙した後、これらを情報処理的見地から整理する。人間の脳で最も重要なのは大脳新皮質だが、それ以外も含めた総合的分析を行う。細かい部位で分けて、可能な限り明確な機能を抽出する。これを情報処理的な大枠でまとめる。

各部位の機能を元に情報処理的な機能区分をまとめる。複数部位をまとめて一つの機能とみなし、今後の演繹的論理構造で利用する。ここで言う機能は情報処理的な意味であり、生物学的構成よりも情報の処理方法を重視する。

これにより神経科学と心理学を統合的に分析できるようになる。精神分析 [12] [13]においては言葉が曖昧かつ非論理的に扱われる事が多いが、これに似た概念を明確な論理構造で説明可能である。

2.1.2. 機能一覧

大脳新皮質以外の主要部位と具体的機能を列挙する。大脳新皮質より古く基礎的な機能である。

大きく分けて大脳、間脳、中脳、橋、小脳、延髄に分類できる。これは発生による区分であり、機能としては必ずしも重要でない。基本的にはより細かい部位で分析する。

ドーパミン・ノルアドレナリン・セロトニンはモノアミン神経伝達物質の一種である。モノアミン神経系は脳全体の司令塔的な役割を担っている [14]。

大脳新皮質以外の主要部位は、様々な制御を行っている場合が多い。

表 2-1 大脳新皮質以外の部位一覧

部位名	大区分	機能
海馬	大脳	記憶制御
線条体	大脳	大脳新皮質、視床、黒質などの中継
扁桃体	大脳	情動的情報付加
視床	間脳	脳全体の制御、各部位ごとに通り道
視床下部	間脳	自律神経中枢、情動関連の各部位と連携
網様体	中脳－橋－延髄	脳のほぼ全域と中継
黒質	中脳	ドーパミン作動、報酬
青斑核	橋	ノルアドレナリン作動、興奮
縫線核	橋－延髄	セロトニン作動、抗ストレス [14]
小脳	小脳	運動制御、フィードフォワード制御
延髄	延髄	感覚神経と運動神経

大脳新皮質の主要部位と具体的機能を列挙する。特に人間で発達している最も高度な部位である。

大きく分けて前頭葉、側頭葉、頭頂葉、後頭葉に分類できる。これも大脳新皮質以外と同じく、細かい部位で分析する。

大脳新皮質の主要部位は、記憶や高度情報処理を行っている場合が多い。コンピュータの記憶と異なりニューロンによる記憶なので、処理機能的な意味も含んでいる。

表 2-2 大脳新皮質の部位一覧

部位名	大区分	機能
前頭前野 (前頭連合野)	前頭葉	意思決定、作業記憶
ブローカ野	前頭葉	言語構成
運動前野	前頭葉	運動構成
運動野	前頭葉	運動
前頭葉底内側面	前頭葉	情動記憶 [9]
側頭連合野	側頭葉	認識 [8]、長期記憶
ウェルニッケ野	側頭葉	言語感覚
一次聴覚野 聴覚連合野	側頭葉	聴覚
中心後回	頭頂葉	体性感覚
頭頂連合野	頭頂葉	感覚統合
後頭葉	後頭葉	視覚

2.1.3. 大脳新皮質以外

(1) 意識制御

視床は脳全体を制御しており、大脳新皮質以外で最も重要な部位である。大脳新皮質以外には制御を行う部位が多いが、視床は特に制御の中枢にある。

視床内の各部位ごとに様々な情報の通り道があり、視床全体で情報の統制を行っている。視床を包む網様核は意識の調整を行っている [8]。視床は前頭前野と強く連携している。大脳新皮質側から見ると、視床から汎性視床皮質投射系により刺激を受ける事により覚醒状態が維持される [11]。この投射は大脳新皮質全体に及んでいる。

視床を中心とした脳全体の制御を意識制御と呼ぶ。視床からの伝達を中継している部分も意識制御に含める。視床の上側に線条体があり、下側に網様体がある。視床、線条体、網様体が意識制御の主要部位になる。意識制御は、他の大脳新皮質以外の部位と全体的に連携している。

意識制御は視床を中心とした神経回路と呼ばれるものに近い。ただし情報処理的な機能を重視するため、情動に関する部分は除外している。

意識制御は脳全体を制御するものであり、特に覚醒に直結している。大脳新皮質は意識制御により活動性が変化すると考えられる。大脳新皮質の部位が意識制御により刺激を受けて活動性が高い状態を高意識、そうでない状態を低意識と呼ぶ。高・低意識は精神分析における意識・無意識に近い観念であり、それを厳密かつ明確に定義したものである。

意識制御と連携する前頭前野は作業記憶を持っており、意識制御と作業記憶を合わせると一般的な「意識」という概念に近いものになる。視床による刺激は大脳新皮質のすべての領域に存在する。意識のあり方は脳全体の構造に依存するため、人間の「意識」は他の動物や人工知能の意識とは別の物という事になる。

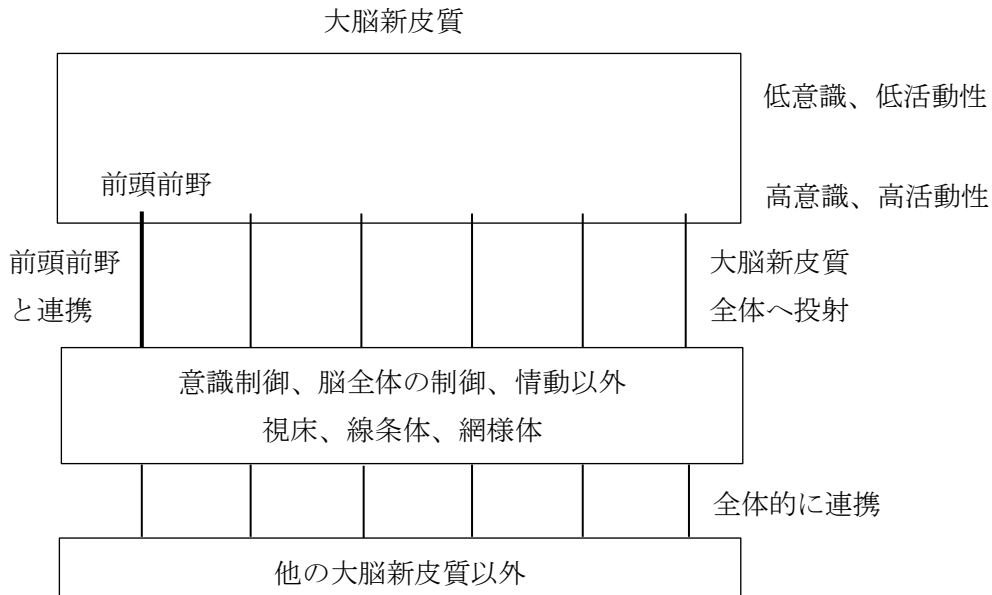


図 2-1 意識制御

(2) 感情制御と遺伝的感情

神経心理学では「情動」という言葉を使うが、より一般的な「感情」という言葉を使用する。これは今後の演繹的論理構造で利用するためである。

感情に関する部位をまとめて感情制御と呼ぶ。これには視床下部、扁桃体、黒質、青斑核、縫線核が含まれる。特に視床下部は感情制御の中心的な部位になる。感情制御は意識制御と関係が近く、視床に関する神経回路としてまとめられる場合も多い。ここでは情報処理的な機能を見て、意識制御と感情制御を分けている。

前頭葉底内側面は扁桃体を介して感情制御と繋がっており、感情記憶の機能を持っている [9]。前頭葉底内側面は前頭前野と位置的・関係的に近く、扁桃体からの接続が前頭前野と記載される場合もある [8]。ここも情報処理的な機能を見て部位を分けている。

黒質、青斑核、縫線核はモノアミン神経系の中枢であり、大脳新皮質全体への投射を行っている。この構造も意識制御とよく似ている。感情制御も意識制御と同じく、他の大脳新皮質以外の部位と全体的に連携している。

大脳新皮質には記憶された感情がある。人間も生物の一種なので、記憶とは異なる遺伝的情報に基づく先天的な感情があるはずである。これを遺伝的感情と呼ぶ。遺伝的感情は感情制御の内部に存在すると思われる。

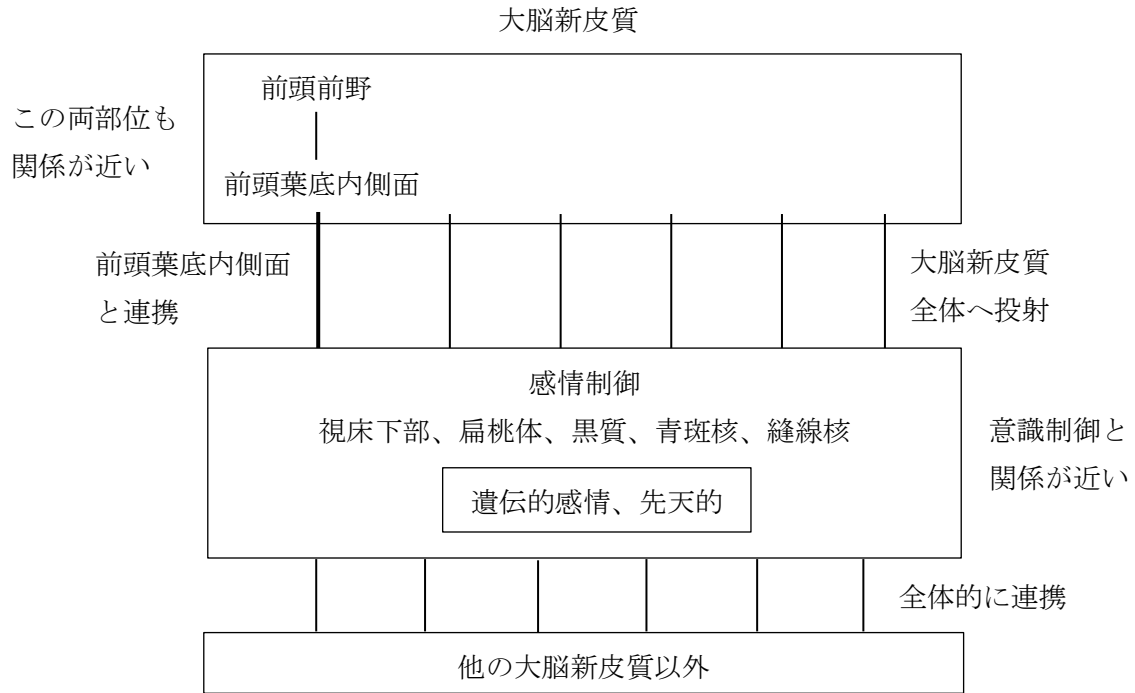


図 2-2 感情制御と遺伝的感情

(3) 記憶制御

記憶制御は海馬の機能である。記憶制御は大脳新皮質の連合野と連携している [8]。連合野には作業記憶を持つ前頭前野（前頭連合野）や、認識・長期記憶を持つ側頭連合野などがある。記憶制御には意識制御・感情制御のような投射の機能はない。他の大脳新皮質以外の部位とは全体的に連携している。

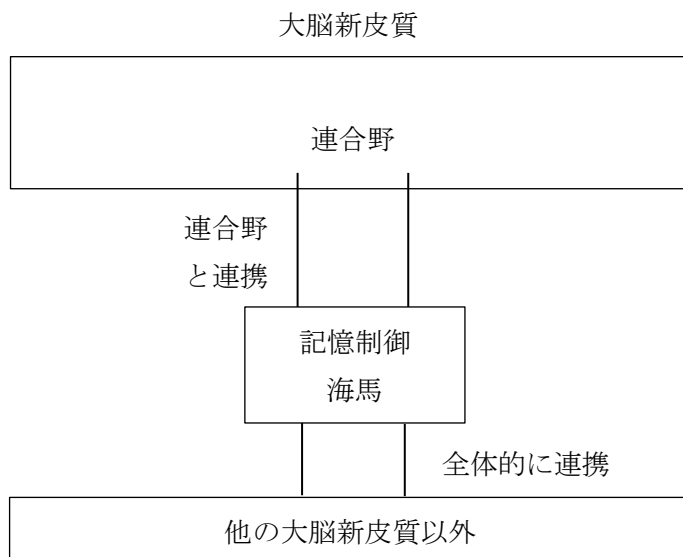


図 2-3 記憶制御

(4) 感覚と運動・行動

神経心理学では「運動」という言葉を使うが、より一般的な「行動」という言葉を使用する。これは今後の演繹的論理構造で利用するためである。行動は、特定の目的を持つ複数の運動をまとめたものと言える。

感覚・行動の情報は、延髄などを通して脳の外部と伝達される。運動制御は小脳で行われ、主にフィードフォワード制御により位置や速度などが制御される。

2.1.4. 大脳新皮質

大脳新皮質は記憶や高度情報処理を担っており、後天的である。

脳の高度機能は一般に「認知」と呼ばれる。しかし前頭前野が持つ全体制御の機能と、側頭連合野が持つ認識の機能は、情報処理的に見て別である。前頭前野と側頭連合野は部位としても別なので、それぞれを別の機能と見なす。前頭前野の全体制御機能を知性と呼び、側頭連合野の機能を認識と呼ぶ。

認識の機能は、大脳新皮質内の様々な情報を統合するものである。大脳新皮質には感情・感覚・行動に関する情報があり、これらを統合する事で認識が生じる。認識により統合されているという意味で、大脳新皮質内の感情・感覚・行動を認識感情・認識感覚・認識行動と呼ぶ。

側頭連合野にある長期記憶も、時間的な情報を統合したものと見なせる。長期記憶にはエピソード・意味・技術・習慣など様々な種類がある [8]。長期記憶は時間的・種類の統合された記憶と言える。

認識感覚は頭頂連合野において情報統合される。頭頂連合野は認識感覚の中でも認識に近い機能を持つ事になる。認識感覚の各部位は、ウェルニッケ野、一次聴覚野、聴覚連合野、中心後回、後頭葉などがある。

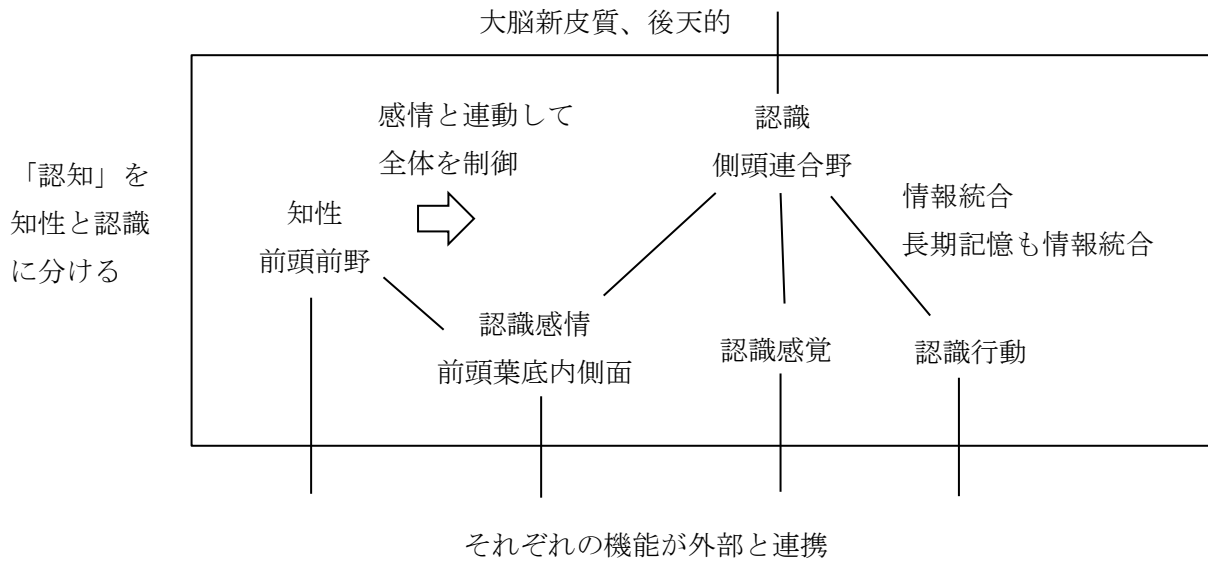
認識行動の各部位は、ブローカ野、運動前野、運動野などがある。

認識感情の部位は前頭葉底内側面になる。認識感情は知性と近い関係を持ち、知性と感情が連動して全体を制御している。

知性は脳全体を制御する、人間の中で最も重要な機能である。サルと比較して3倍以上もあり、15才ごろにやっと成熟する [10]。強力な知性を持つ事が人間の特徴である。知性は作業記憶を持ち、一般的用語としての「意識」も制御している。

それぞれの機能が外部と連携している。大脳新皮質と大脳新皮質以外が連動する事で、各機能が実現されている。

知性・認識・感情は、精神分析の超自我・自我・エスに近い観念である。超自我・自我・エスとも意識・無意識と同様に曖昧かつ非論理的で扱いにくい。知性・認識・感情の内容は明示されており、明確で論理的な観念である。



認識感覚：頭頂連合野で情報統合

ウェルニッケ野、一次聴覚野、聴覚連合野、中心後回、後頭葉

認識行動：ブローカ野、運動前野、運動野

図 2-4 大脳新皮質

2.2. 生人間と生現実

2.2.1. 認識・知性と認識外

認識は感情・感覚・行動を統合した情報であり、外部の模倣である。模倣はシミュレーションや機械学習的モデル [3]とみなす事ができる。認識は情報統合を行っており、モデルの集合体である。認識上の空間は仮想的に存在し、その外にある空間を模倣している。認識の目的は、シミュレーションや機械学習的モデルにより感覚や記憶を超えた推測を行う事である。推測により感覚や記憶を高度化できる。機械学習ではこのような推測を「予測」と呼ぶが [2]、未来予測だけとは限らないのでここでは「推測」と呼ぶ。

「認識の正しさ」とは認識の外の空間との差の小ささだと言える。認識の外の空間を「認識外」と名付ける。認識外は現実・事実・実体とほぼ同じである。認識外に近い方が正しく、遠い方が誤りである。実体から離れた認識はすべて誤りである。実体としての認識は「認識の所持」でしかなく、認識の内容ではない

単なる感覚だけでは認識外の一部しか分からない。記憶により過去の情報を集めても限界がある。認識が認識外を正しく模倣すればその限界を超えられる。認識は認識外をよりよく見るためのものである。

認識を認識外に近づける事が重要であり、認識外を探究する必要がある。実体的根拠を収集しなければならない。認識の中に留まるのは誤りであり、認識外に向かう必要がある。理解とは可能な限り認識を認識外に近づける作業になる。

形だけで実体のない知識は誤りであり、正しいのは実体や具体性である。絶対的な正しさは認識外にしかないため、認識の正しさは常に認識外に対して相対的になる。重要なのは認識が認識外にどれだけ近いかである。実効性は認識外に近い認識の質と量の問題になる。正確に認識外を推測できる高度な認識が必要である。

認識には複数の種類があり得るが、模倣の対象となる認識外は1種類で連続している。つまり認識外に向かえば認識は一意で連続的になる。これを認識外の一意連続性と呼ぶ。固体-気体間のような急激な変化はあり得るが、微細レベルで見ればそれらも連続的に変化している。変化と連続・分断を分けて考える必要があり、認識外は変化が急激でも分断はない。一意連続性は時空間の両方で存在する。一意連続性を理解しない誤った認識は分断される。

認識外が一意連続である事は、認識外が全体として整合性を持つ事でもある。認識外を正しく模倣すれば、認識も全体として整合性を持つ事ができる。認識外と認識との間にも整合性が生まれ、全体として繋がったものになる。

すべての認識の外に向かう必要がある。別の認識が基準になるのは誤りであり、基準はすべての認識外のみである。認識を集めて平均を取っても意味はない。

知性は認識を制御するものなので、知性により認識が認識外に向かうように制御する必要がある。知性により認識の高度化が可能になる。知性は認識を制御するため、認識の評価基準を持っている。認識外を評価基準としない知性は誤りである。

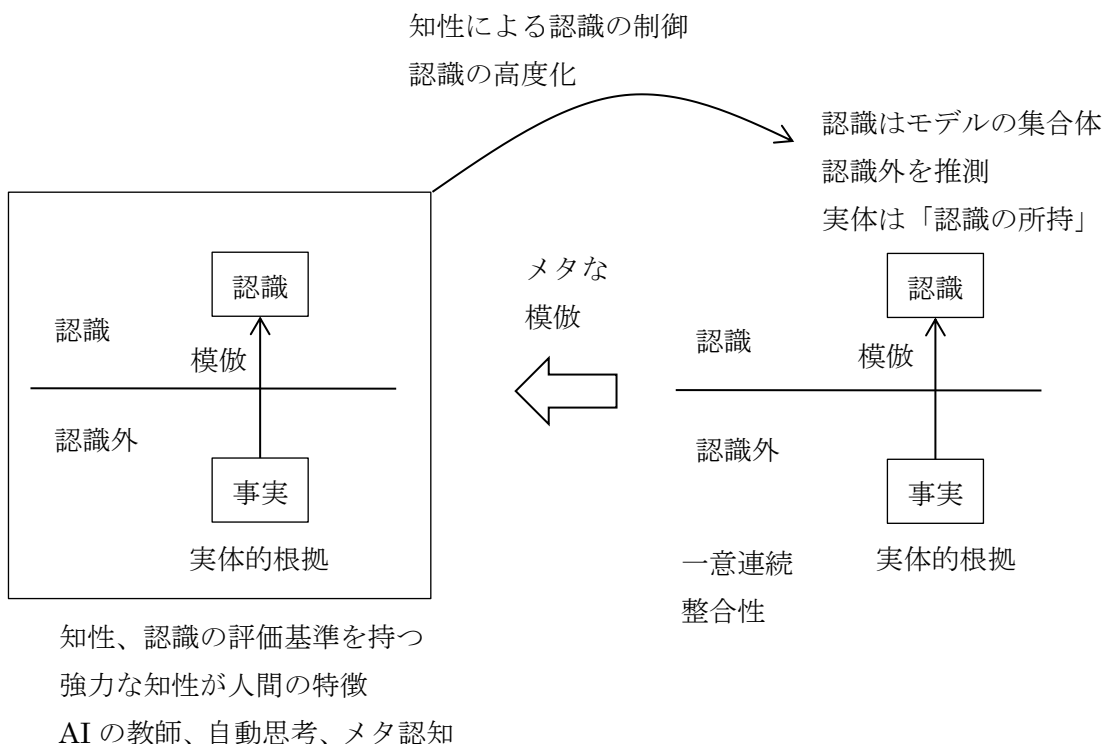
強力な知性が人間の特徴であり、十分な検討が必要になる。知性により認識外を理解しなければならない。知性が認識を正しく制御するためには、認識が認識外を模倣する、という事実のメタな模倣が必要になる。このメタな模倣は知性の中に存在し、認識外の情報を使って認識を制御する基礎となる。

強力な知性は人間の長所ではあるが、それが常に正しく働くようにはできていない。誤った知性・認識も多く、科学技術も後天的に得られたものである。正しい知性が必要である。

AI・機械学習においては正解を示すデータを教師と呼ぶ [15]が、これは知性に近い。認知療法においては「自動思考」 [16]として認識の方向性が示されており、これも知性に近い。教育分野では「メタ認知」と言

う知性に近い概念があり、重要視されている [17]。9 才頃から発達が始まり、思考過程をモニターして学習計画を立てられるようになる。これは前頭前野の 15 才ごろでの成熟 [10]と合致する。

人間以外の動物の認識は、例えどんな記憶力があっても目の前の事象を入力して集めたものに過ぎない。人間の認識は知性により強く改造され、目の前の事象だけでなく微小世界や遠い世界までも推測できるよう高度に進化した。これは生物的進化だけでなく文化的進化に大きく依存する。その分適切な扱いは容易でない。常に知性が正しく働き、認識が認識外を正しく模倣できるように努力しなければならない。



模倣はシミュレーションや機械学習的モデル
 強力な知性は人間の長所だが、常に正しく働くようにはできていない
 科学技術も後天的に得られたもの、正しい知性が必要

図 2-5 認識・知性と認識外

2.2.2. 生感情・生自己・生現実

感情は認識外（遺伝的感情）と認識内（認識感情）に分かれる。遺伝的感情が正しい感情であり、認識感情は模倣である。

遺伝的感情を一般的な言葉で表す場合、本能的という言葉は不適切である。本能は「動物」的な感情であり、人間の持つ強い知性と適合しない。強い知性的傾向は感情の中にもある。本能よりもっと根源的な「生物」の感情、略して「生感情」という言葉を用いる。人間の強い知性を伴う生感情が「動物」とかけ離れていても、人間が「生物」である事には変わりはない。遺伝的という言葉は遺伝子レベルで存在するという意味であり、生命と適合している。

生感情は生物としての感情であり、現実的な生物学に基づいている。以降は「生」を同様の意味で扱う。人

間は強い知性のため通常の動物と異なる。動物化でなく生物化が必要である。

生感情は自発的かつ自然に内部から現れるものである。強制的や人工的、または外部から与えられる感情は誤りである。認識感情は認識によって統合される後天的情報であり、必ずしも生きていない。生感情は認識外の一部であり、知性により認識外に探究する必要がある。単に内から外への感情ではなく、認識外が生感情でなければならない。生感情と認識感情による複雑な二重構造を理解する必要がある。

人間の存在意義は生きる事であり、生命力を出す必要がある。気力や情熱や魂や命などの本質は生きる事である。死んだ気力は意味がなく、生きた気力でなければならない。形だけの気力は病的な状態につながる可能性がある。生感情を正しく理解する事で、初めて強い真の気力を発揮できる。

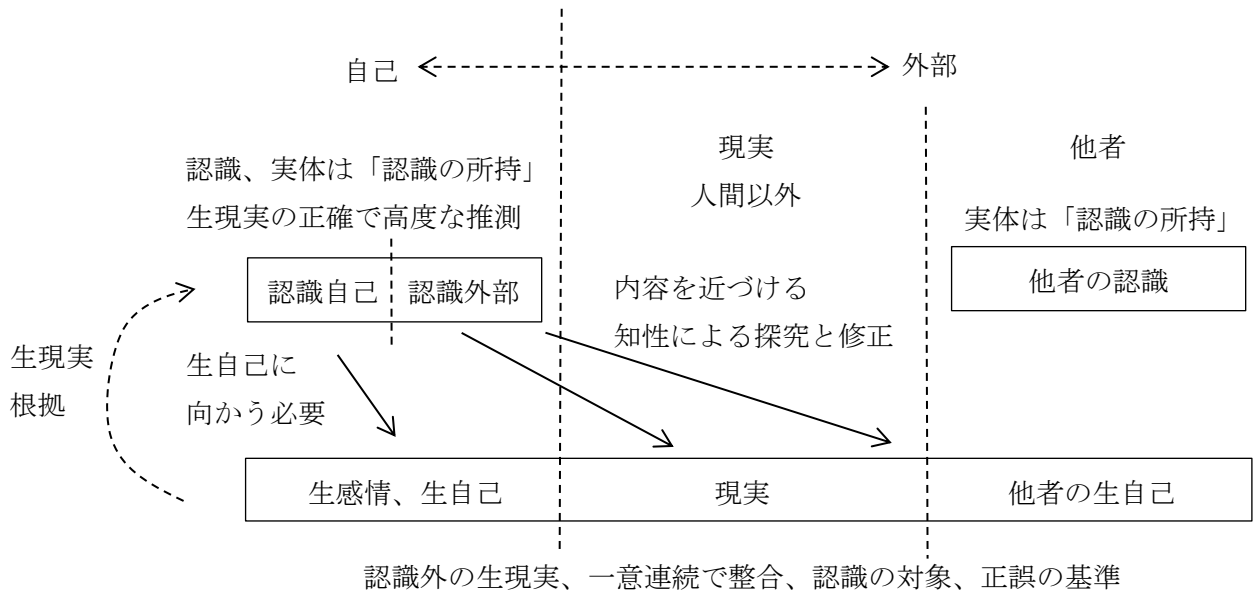
単体の人間を個人、主体としての個人を自己と呼ぶ。すべての個人の外部にあるものを現実と呼ぶ。現実人間を除いたすべてである。自己の外部には現実と他者が存在する。

脳の機能構成図より、生感情に対して認識感情が存在する。生感情は「生物」としての人間の一部である。また外部の感覚と行動に対して、それぞれ認識感覚と認識行動が存在する。認識感覚・認識行動・認識感情により認識自己が形成され、感覚・行動・生感情により生自己が形成される。生自己の感覚・行動を生感覚・生行動と呼ぶ。

外部には他者の認識や生感情や生自己も存在する。他者を含む生自己と現実が認識外の構成要素であり、これを「生現実」と名付ける。知性により認識を生現実にならざるに近づけるように修正しなければならない。正確に認識外を推測できる高度な認識にするため、知性による探究と修正が必要である。

現実だけでなく生感情を合わせる必要がある。外的な現実だけでは不十分で、内的な生感情も必要である。自然科学であれば現実も生現実もほぼ同じだが、人間に関しては生現実である事が必須である。生感情を持つ認識外の自己を生自己と名付ける。生自己と外部の現実は一意連続で整合性を持つので、連動して理解する必要がある。

自己を生現実化する事により、生自己を正しく理解できる。内的であっても認識が正しいのではない。認識の実体的な意味は「認識の所持」でしかなく、生自己の内部に仮想空間が所持されているに過ぎない。認識外の実在の自己を理解する必要がある。生物としての正しい「生自己」は、認識外が生感情を中心に自己の体内に存在する。認識も認識自己と認識外部に分けられる。正しいのは自己でなく生自己である。生が正しく死が誤りであり、認識自己でなく生命活動で判断する必要がある。知性により認識自己を生自己に近づけなければならない。生自己に向かう事で初めて真の自己同一性が得られる。



生感情は生物としての感情、他の「生」も同様
 自己の生現実化により生自己を理解できる

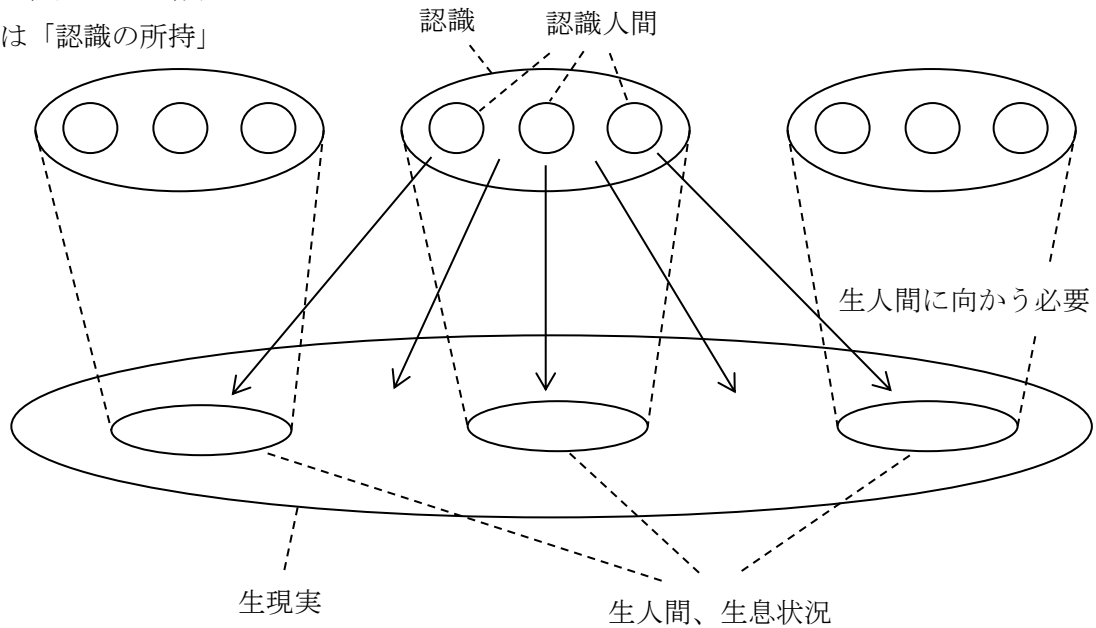
図 2-6 生感情・生自己・生現実

2.2.3. 生人間

他者に対しても生自己へ向かう必要がある。他者の認識も実体は「認識の所持」でしかない。他者の認識を正しいと理解するのではなく、「そう思っている」と理解する必要がある。

認識自己・生自己の問題は、すべての人間に対して存在する。生現実上の人間を生人間、認識上の人間を認識人間と呼ぶ。生人間は生息状況として見るのが分かりやすい。認識は個人ごとに存在し、その中に複数の認識人間がある。すべての認識人間が生人間に向かわなければならない。どの個人の認識も実体は「認識の所持」でしかなく、正しいのは生人間である。時として現実是非人間的な側面を持つが、冷酷な現実であっても対峙しているのは生人間であり、認識人間ではない。人間の生現実化により生人間を理解できる。

認識は個人ごとに存在
 実体は「認識の所持」

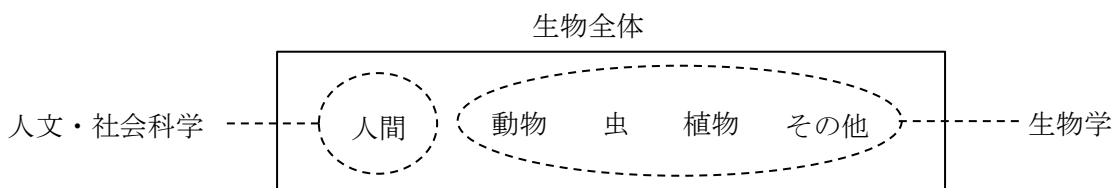


人間の生現実化により生人間を理解できる

図 2-7 認識人間と生人間

生物全体を見ると、大きな区分けとして動物・植物があり、その他の生物がいる。人間は強い知性のため通常の動物と異なり、特殊な「知的生物」と見るべきである。人間は知的である点において、人間以外の生物とも異なる。動物・虫・植物の区分けと同程度に人間は動物と異なる。これは人間を扱う人文・社会科学と、人間以外を扱う生物学という区分けにも適合している。

人間は動物とは異なるが生物の一種であり、人間に対しても生物的理解が必要である。生人間として人間を理解すべきである。



人間は強い知性のため通常の動物と異なる、知的生物
 人間は知的である点において、人間以外の生物とも異なる
 人間は動物とは異なるが生物の一種、生物的理解が必要、生人間

図 2-8 生物全体と人間

2.2.4. 評価と生満足と認識の正誤

感情は特定の目的行動を持ち、それが実現されると評価が得られる。評価はある目的に対しての達成度合い

である。人間的な評価、すなわち生人間の行動に対する評価は生感情によるものでなければならない。生感情による評価を生満足・不満と定義する。認識外の生感情と生満足がすべての人間的な評価の基準である。評価を行うには知性により生感情を知る必要がある。認識感情による評価を認識満足・不満と定義する。認識満足での評価は誤りであり、生満足で評価しなければならない。

人間的な評価には様々な基準がある。成績・地位・名声などである。これらはすべて最終的に生感情と生満足で評価されなければならない。評価基準が生感情から離れ、認識上の成績などだけで評価されるのは誤りである。自分の生感情から自発的に表れる評価でなければならない。

「正しい」というのも評価の一種で、論理構造の目的への達成度合いである。正しさの目的は、論理的な正しさと、認識外への正しさの2種類に分かれる。認識全体に関して重要なのは認識外に対する正しさである。論理的に合っけていても認識外から離れていては意味がない。

認識が認識外に対して正しければ生満足を得られる。この2つの評価は連動している。認識がなくても多少の生満足は得られるが、正しい認識があればそれを増大できる。誤った認識なら生満足を減らす可能性もある。

生満足の評価を s 、認識の正誤評価を r とすると以下の式が成り立つ。 s の最小値は 0 とする。 s_b は認識に寄らない満足の基礎部分であり、認識がない場合の満足である。 s_r は認識の正誤を生満足に変換する関数で、正の相関を持つ。正しい認識により基礎部分を改善できる。 s と s_b は正の値だが、 $s_r(r)$ は負になる可能性もある。誤った認識により不満が増える場合である。

$$s = s_b + s(r) \quad (2-1)$$

認識外は根源的・物理的には非常に論理的であるため、論理的正しさは認識外への正しさに繋がる。ただし認識外から離れた論理的正しさもあり、これは生満足へは繋がらない。

認識の正しさに対しては、認識外の生現実が絶対的な基準になる。論理的な意味での正しさは別に存在するが、論理的に正しくても生現実から離れていれば誤りである。認識上の整合性でなく生現実との整合性が必要である。認識外の生現実には一意連続・整合性があり、知性によりそこに向かう事で真の安定した認識が得られる。認識は生現実を推測する道具であり、生満足を得るための手段である。

認識は認識外を模倣したシミュレーションであり、その目的は感覚や記憶を超えた認識外の推測を行う事である。推測は未来予測だけでなく感覚以外の情報すべてであり、これにより生満足増加が可能になる。正確な推測が可能な認識を得る事は困難であり、精度の高い認識にするよう改善に努めなければならない。

人間は知性と認識により高度な推測ができる。高等動物なら記憶や知性によりある程度の推測ができるが、人間はそれが非常に大きい。特に知性が強力であり、これにより認識を制御して高度な推測を行う事ができる。その力は他の動物と比べて圧倒的である。動物は生感情に従うか、低度の推測により行動する。人間は高度な推測に基づくまったく別の行動を行う。ただし生満足を得るための行動である事は同じである。

知性は認識を制御して、正しい認識を作成する。これにより生満足が得られるようになる。評価基準の点から見ると、知性と感情は密接に関係している。脳の構造にある意識・知性と感情の近さは、評価基準により説明できる。

人間は知性により高度な認識を形成できるのと同時に、生現実から離れた誤った認識も形成できる。正しい認識であれば高い推測能力により通常の動物を超えた生満足を得られるが、誤った認識ならまったく生満足が得られなくなる可能性もある。

生自己と外部の現実は一意連続で整合性を持つ。他者の生自己まで含めて、認識自己と認識外部を連動して

理解する必要がある。感情だけを見る本能的・感情的な認識も、外部だけを見る理性的な認識も誤りである。生現実の一意連続・整合性から離れ、満足を得る事ができない。認識自己でなく生自己へ向かう必要がある。現実を見るだけでは不十分であり生満足が得られない。人間の生現実化が必要になる。

現実的・生物的な生息状況から見て、生人間・生感情・生満足を理解すべきである。外部の生息状況から見れば、これらを理解できる。生不満は生息状況の問題であり、現実的に見てうまく行かない事である。満足感があっても生息状況が悪ければ意味がない。

所有する知性・認識が、その生人間の能力に直結する。知性・認識が常に正しい訳ではない。知性・認識が常に正しいなら、犯罪者の知性・認識も正しいのか、という話になる。知性・認識は、生現実に基づいた評価を行わなければならない。



認識の正しさにより生満足が得られる
 現実を見るだけでは不十分、人間の生現実化が必要
 生息状況から生人間・生感情・生満足を理解、生不満は生息状況の問題
 満足感があっても生息状況が悪ければ無意味
 評価基準から見ると、知性と感情は密接に関係

図 2-9 生現実と認識の正誤

2.3. 規則と明確・曖昧

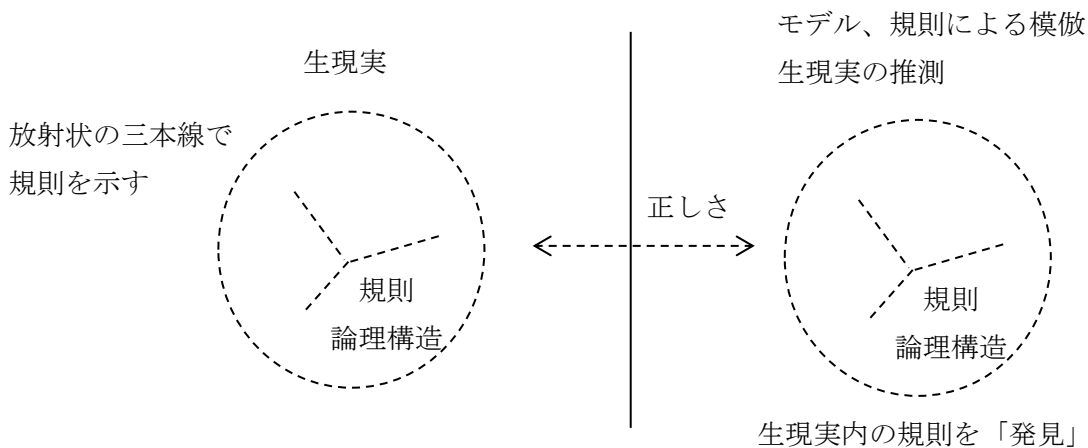
2.3.1. 規則と正しさ

生現実には論理構造が存在し、それを理解する事で推測が可能になる。論理構造を規則と呼ぶ。モデルは規則を使った生現実の模倣である。図を描く際には、放射状の三本線で規則を示す。

規則はモデル内に作成されるものではなく、最初から生現実内に存在するものである。そうでなければ規則による推測はできない。規則を作成するのではなく、生現実内の規則を「発見」するのが正しい。生現実内にある規則でなければ役に立たない。

規則の正しさは認識の正しさに直結する。認識の正しさは人間の様々な能力の基礎になるものであり、非常に重要である。認識の量や推論速度は必ずしも認識の正しさと直結しない。正しい規則を理解する方が重要であり、より生満足を得やすくなる。規則的であれば行動もそれに合わせる事ができるため、行動も容易になる。

規則のない認識は推測不能であり、役に立たない。生現実に対して正しい規則のある認識は、推測可能であり目指すべきものである。誤った規則は役に立たない。ある程度正しい所がある規則であれば多少は推測可能であり、規則がないよりも良い。規則が正しい状態を高正確、多少正しい所もある状態を低正確と呼ぶ。低正確であっても可能な限り規則を発見すべきである。



認識の正しさ=人間の能力に直結
認識の量や推論速度は必ずしも直結しない
認識の生現実への正しさにより生満足を得る

図 2-10 規則

規則なしの認識
推測不能
役に立たない

?

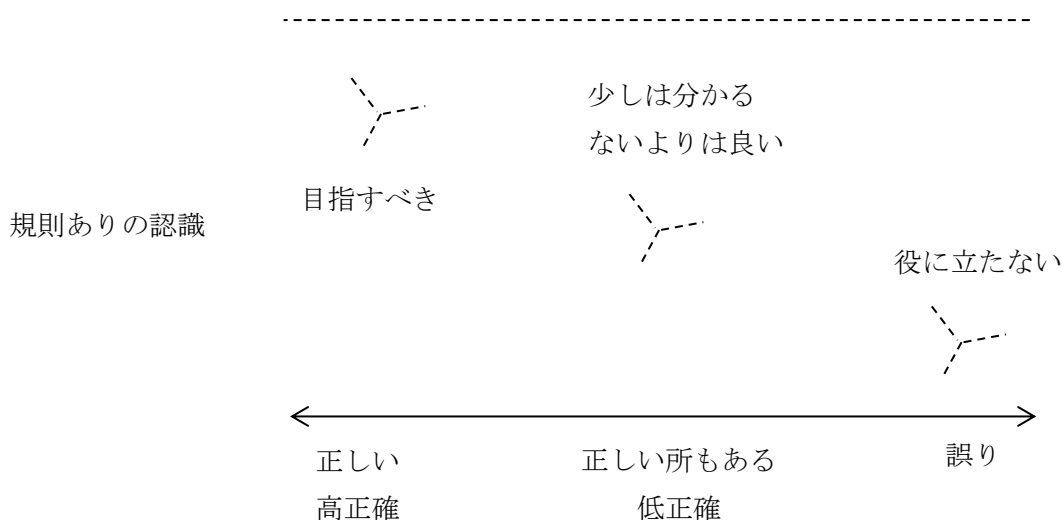


図 2-11 規則の有無と高正確・低正確

精密に見ればすべての事象は物理的法則により成立しており、完全な不規則は存在しない。流体でも乱流構造、確率統計でも平均値や分散等の特徴を抽出できる。推測が困難な物理的意味でのカオスであっても、エントロピー、アトラクタ、リャプノフ指数等 [18]で特徴を抽出する事は可能である。規則性を理解する事で推測が可能になるので、規則性は非常に重要である。

反復・統合・区分・連動・流動などまで考えると、規則は無数に存在する。低正確の規則から高正確の規則まであり、できるだけ高正確の規則を見つける必要がある。正しさが同程度の規則であっても同じ規則ではない。規則の正しさだけでなく種類を見る事が重要である。

全体としての規則的（高正確）・不規則（低正確）は、複数の規則の正しさをまとめたものとなる。高正確の規則が適用できる状態や、同じ規則でも高正確になる状態なら全体も高正確になる。逆に低正確の規則しか適用できない状態なら、全体も低正確になる。

全体としての規則性を見るには、適用できるすべての規則を使用しなければならない。可能な限り高正確の規則を見つけ、それを使用する事により推測を向上できる。低正確の規則だけを使い、全体が不規則と理解するのは誤りである。

認識上の規則でなく、生現実の規則を理解しなければならない。思っているだけの規則では意味がない。生現実に誰でも理解できるような当然の規則があるなら、それは必ず受け入れなければならない。多くの人の認識で共有されている規則でも、それが実体的に存在しなければ意味はない。認識外の生現実においてどのような規則が存在するかを追求し、認識外の規則を受け入れなければならない。

特定の規則に対し、それが成立しないという状態も規則の一種と解釈できる。これを逆の規則と呼ぶ。その規則に当てはまらない、という意味で推測可能だが、低正確になる。逆の規則のように低正確の規則まで導入すれば、どのような状況でも何らかの規則を当てはめる事はできる。完全な不規則は存在せず、推測可能な何

らかの規則を使用する事が重要である。

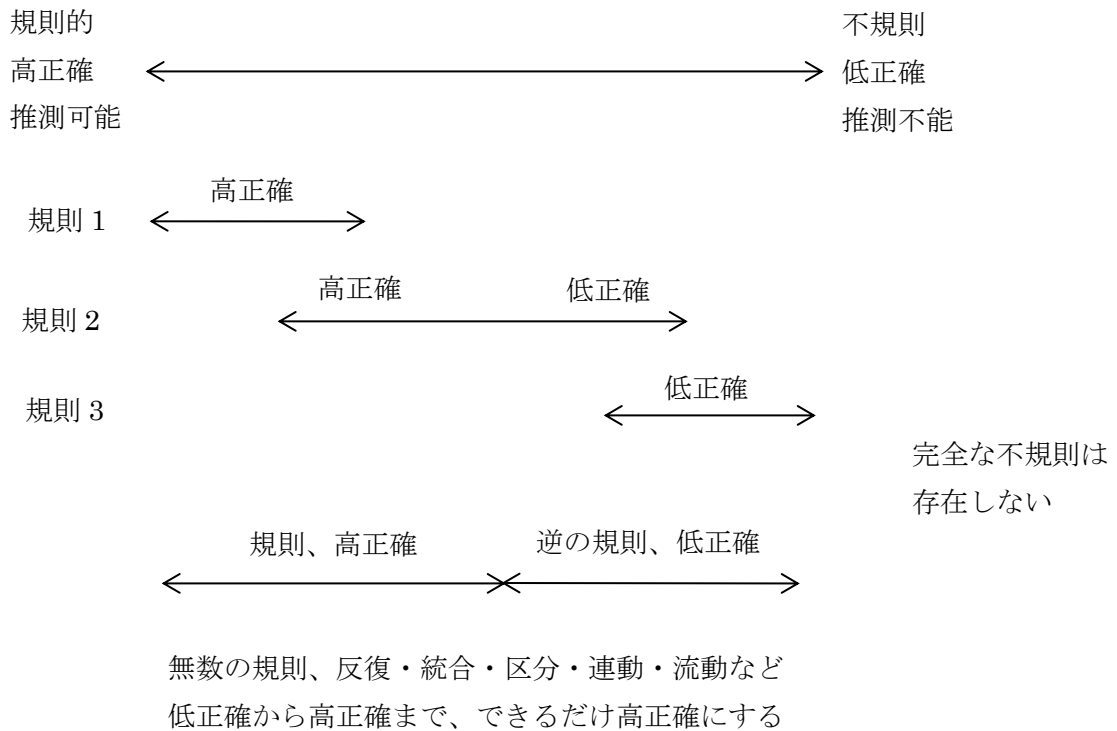


図 2-12 規則と不規則

2.3.2. 規則と生満足

人間の生命活動の目的は生満足であり、人間的評価は生満足でなければならない。認識上の規則においても評価基準は生満足である。生満足への影響が大きい規則は重要であり、高正確にすべきである。生満足への影響が小さい規則は重要でなく、高正確にしても意味はない。認識を発見するにも行動などが必要であり、それにより生満足が下がったら悪い影響しかない。

すべての規則について、生満足まで含めた形で見べきである。生満足への影響が少ない規則でも、生満足との関係まで理解できれば重要になる。

キノコを例にとると、最も重要なのは毒の有無であり、生満足に直結する。毒の有無が低正確や誤りなら意味はない。また毒の有無に繋がらない色や形状をいくら理解しても意味はない。キノコの色や形状を毒の有無に繋げて理解する事で、初めて規則として重要になる。

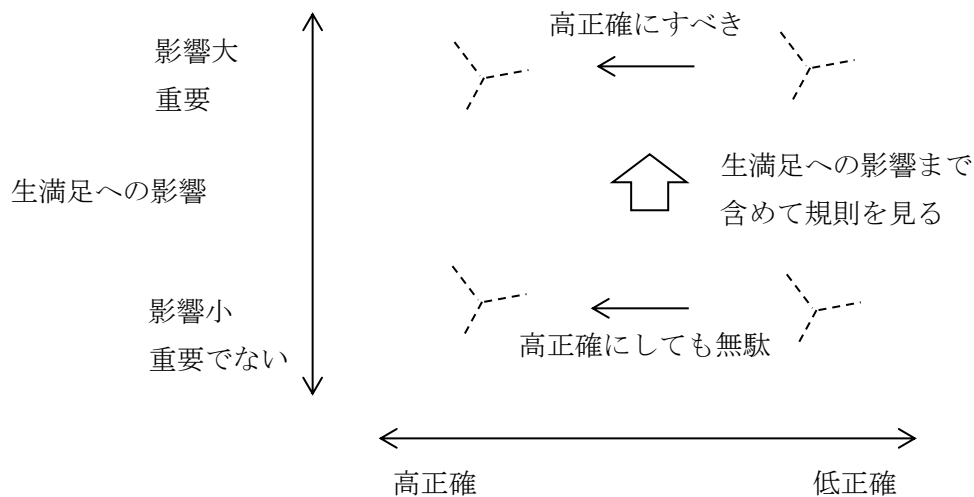


図 2-13 規則と生満足

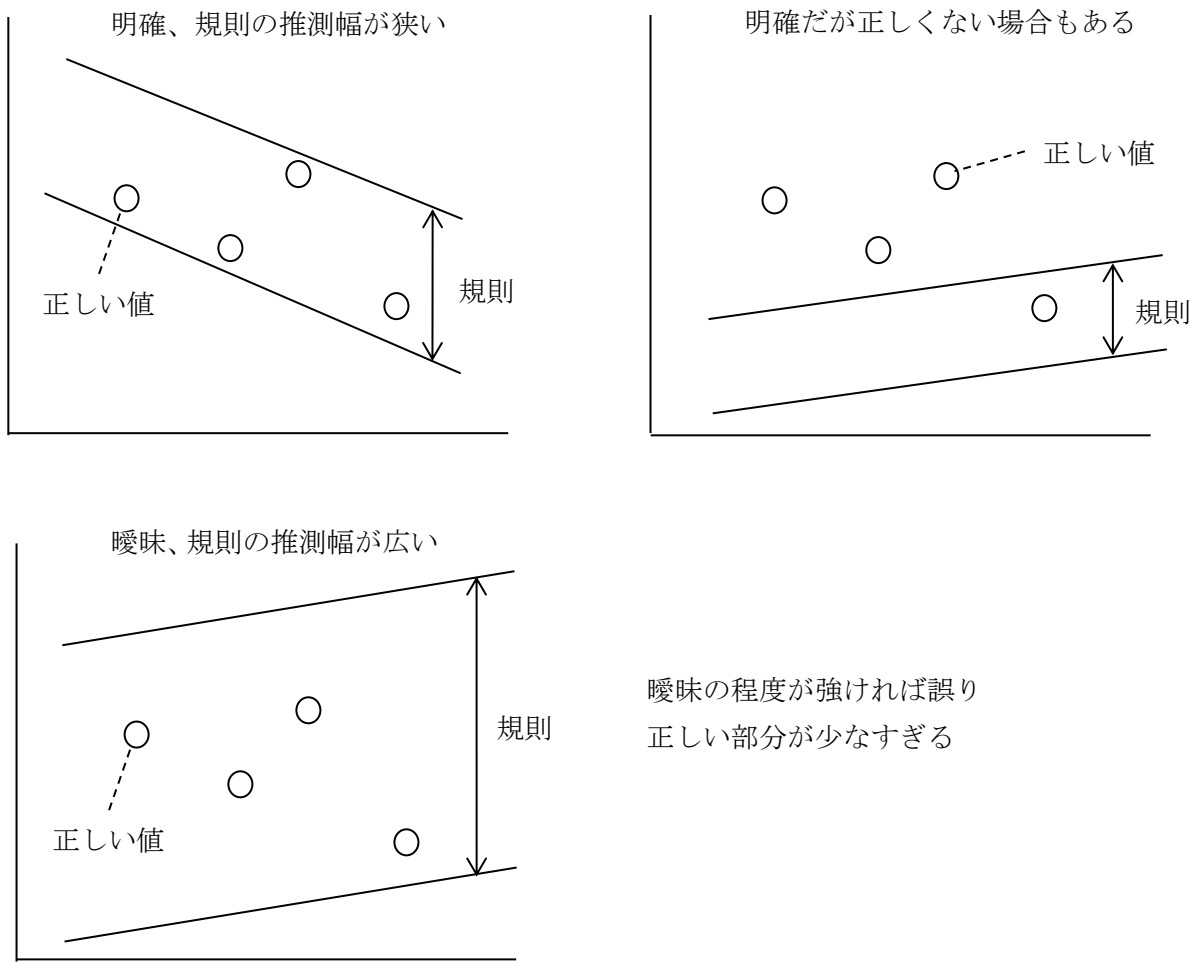
2.3.3. 明確・曖昧

明確・曖昧を規則の面から見ると、規則の推測幅が狭い・広いと言う事ができる。明確で規則の推測幅が狭く、正しい値がその中に含まれれば、規則は高正確と言える。明確な規則でも正しい値が含まれず、正しくない場合もある。曖昧で規則の推測幅が広ければ正しいとは言えない。曖昧の程度が強ければ、正しい部分が少なすぎるため誤りである。

明確・曖昧は誤差や分散 [4]などを一般化したものである。誤差や分散が大きければ推測値として使う事はできない。明確・曖昧は、規則の生現実に対する正しさの一部と言える。機械学習においては、予測における正解値との差（バイアス）と、予測の分散（バリエーション）を見て、両者が共に小さくなるようにモデルを設定する [2]。これらの値は学習データと予測データを分ける事で算出する。

生現実において明確な規則を正しく理解すれば、認識は高正確になる。生現実において曖昧な規則を正しく理解しても、認識は低正確にしかならない。生現実の規則から外れていれば、どんな理解でも誤りである。

正確な事実だけを多数理解しても、規則性を理解しなければ曖昧な理解にしかならない。事実に基づく推測ができないからである。生現実を正しく模倣する明確な規則を理解する必要がある。



明確・曖昧は、規則の推測幅が狭い・広い
誤差や分散などの一般化
規則の生現実に対する正しさの一部

図 2-14 明確・曖昧と規則

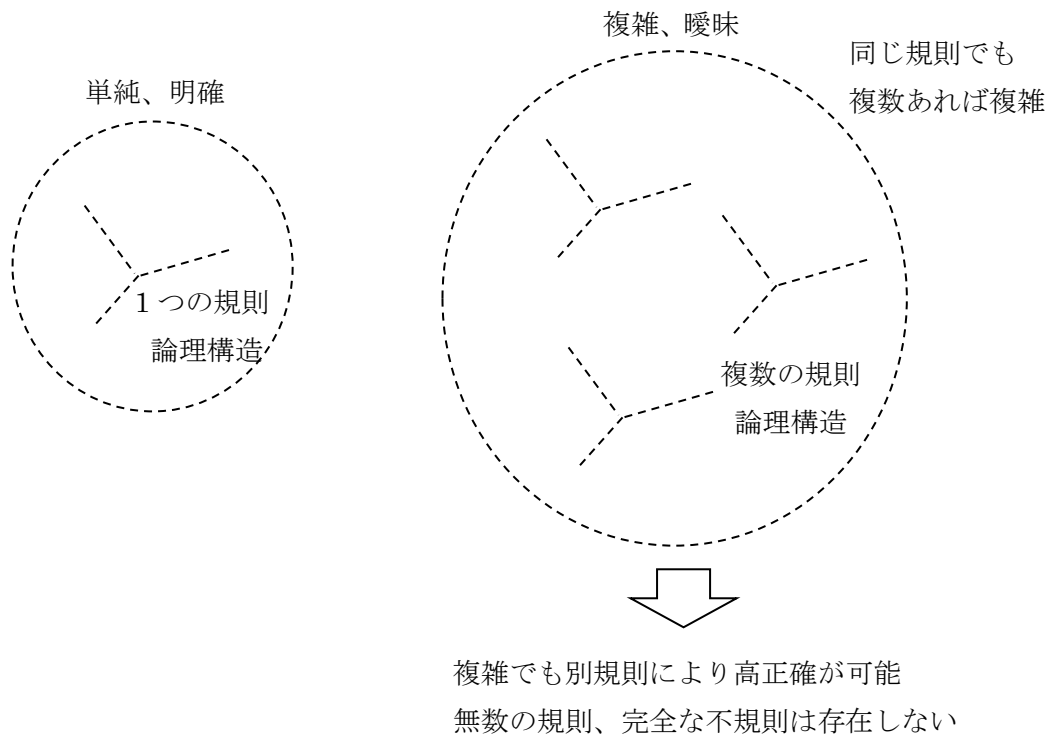
2.3.4. 単純・複雑

生現実において規則は無数に存在する。1つの規則だけの状態を単純、複数の規則がある状態を複雑と呼ぶ。同形の規則でも複数存在すれば複雑になる。規則により推測可能になる。単純であれば規則の推測幅が狭く明確になり、複雑なら曖昧になる。単純で明確な規則の方が高正確で、推測も容易である。複雑であっても単純な規則の積み上げで推測は可能だが、その低正確になる。

情報理論における情報量またはエントロピーは、事象の曖昧さ・混沌さを表す量である [4]。これは複雑さと曖昧さが本質的に近いことを意味する。

複雑な状態でも、高正確な別の規則を発見できれば推測は容易になる。このような規則を発見する事は重要であり、追求すべきである。複雑であっても別の規則で推測する事は可能なので、単純・複雑は必ずしも推測可能性と直結しない。複雑で曖昧でも、明確な別の規則を求める必要がある。単純・複雑よりも規則の方が重

要である。規則は無数にあり、完全な不規則は存在しない。複雑だからと言って理解をあきらめるのは誤りであり、可能な限り規則を追求しなければならない。



情報理論、情報量・複雑さ・曖昧さが本質的に近い

図 2-15 単純・複雑

単純である事も規則の一種として捉える事ができる。規則が1つである、という事が規則になる。複雑も逆の規則として捉える事ができる。複雑なら「単純でない」という意味で推測が可能になる。ただし単純であれば規則は高正確になるが、複雑なら低正確になる。

特定の規則に対する変数の変化をグラフ化して考える。値が1つである状態は単純、値が複数である状態は複雑と捉える事ができる。つまり安定なら単純、不安定なら複雑になる。安定という規則に対しても、不安定という逆の規則を作る事ができる。安定でないという意味で推測可能だが、低正確になる。

単純でも複雑でも、最終的な生現実に対する正しさが高くなる規則を用いる必要がある。生現実合わない規則は意味がない。複雑で不規則に見える場合も、生現実からより高正確な規則を見つける事ができる場合もある。単純・複雑に囚われず、生現実を正しく見なければならない。

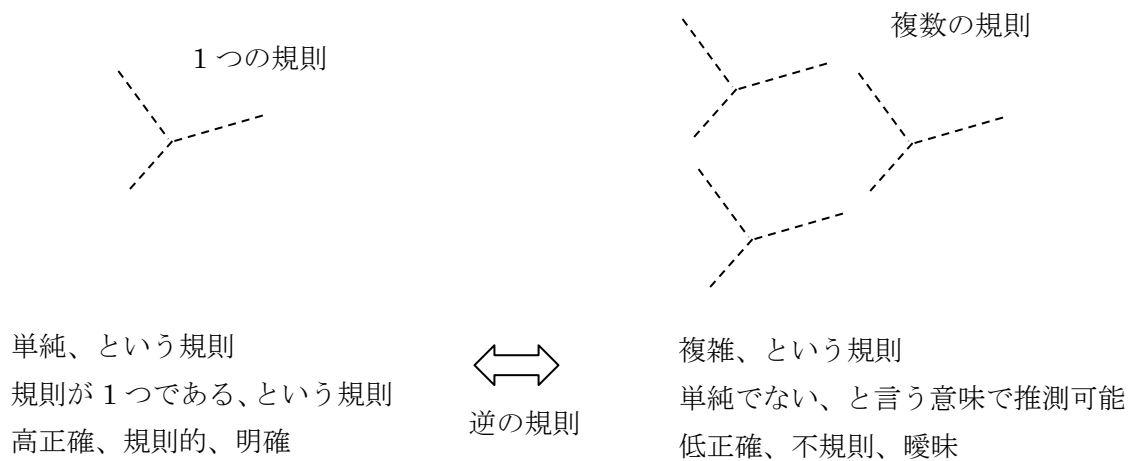


図 2-16 単純・複雑と逆の規則

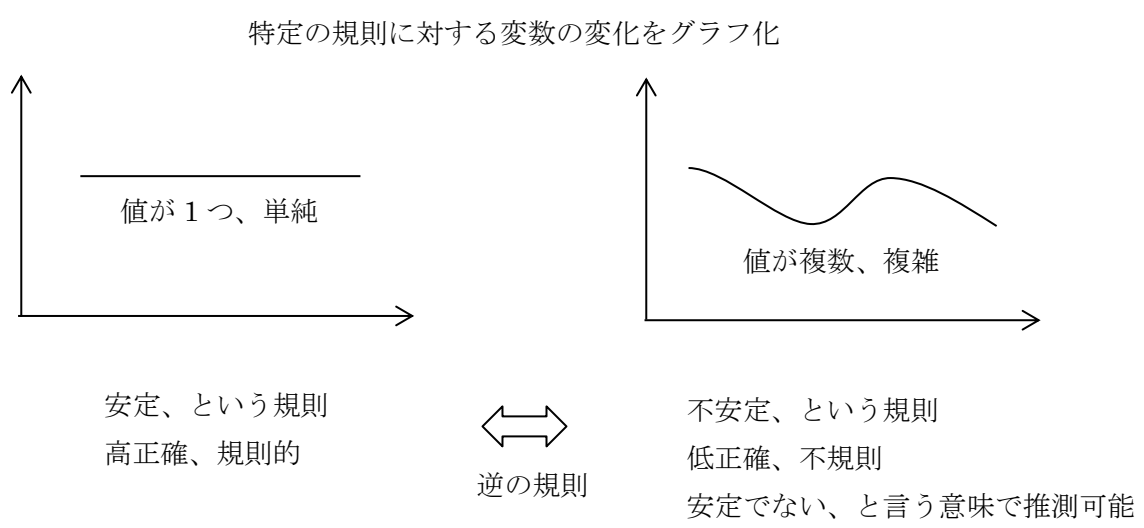


図 2-17 安定・不安定と逆の規則

2.3.5. 複雑の単純・明確化

規則が曖昧であれば低正確になる。可能な限り明確化し高正確にすべきである。曖昧の程度が強ければ誤りである。

機械学習においては学習パラメータが多すぎて汎化できない状態を過学習 [2] と呼び、複雑なモデルを可能な限り単純化する事が求められる。

連続変数を予測する回帰モデルで説明する [3]。下記の例では線形モデルは単純すぎる。5次多項式モデルでは雑音までモデル化しており、過学習で複雑すぎる。2次多項式モデルが適切である。

推測性能が低く複雑すぎるモデルは単純化すべきである。AIC やクロスバリデーションなどの数理的方法により厳密な単純化が行われる。予測の分散 (バリエーション) を調べて、これを減少させる方法などが取られる。実体に即した単純化でなければならない。

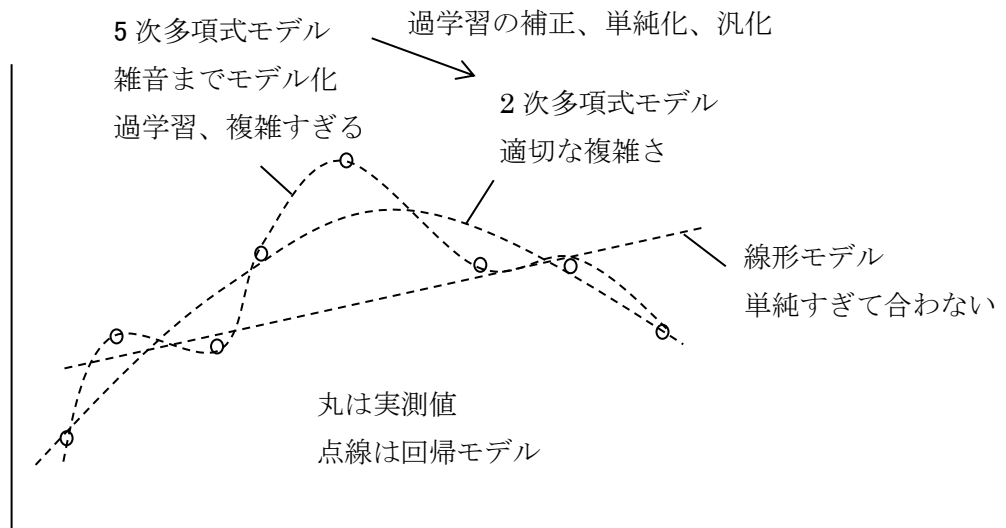
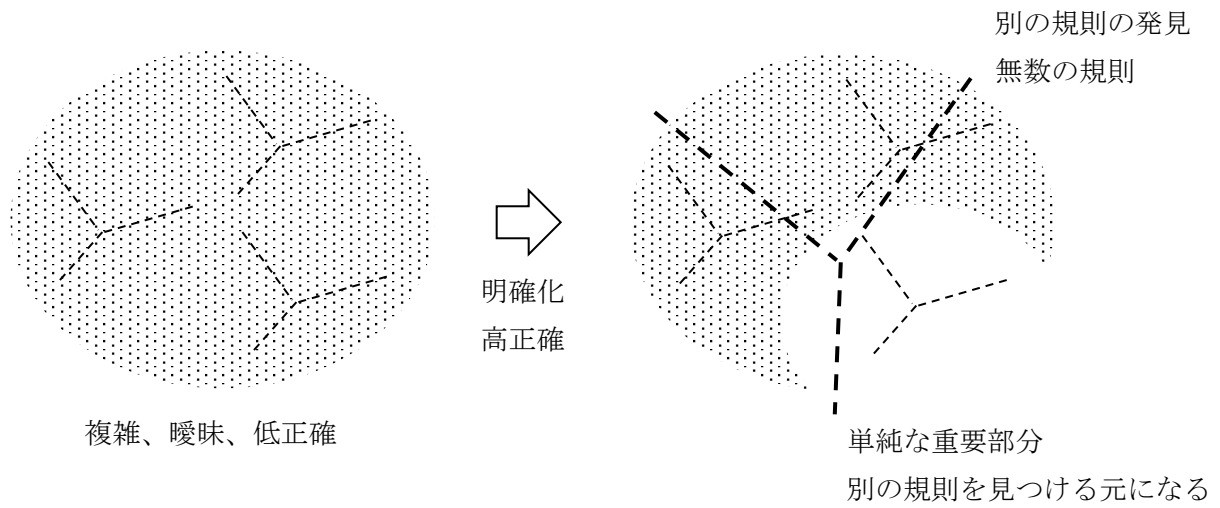


図 2-18 過学習と汎化

生現実には無数の規則があり、別の規則を発見する事で明確化できる。全体では複雑でも、重要な部分だけを抽出すれば単純化できる。明確な重要部分は別の規則を発見する元にもできる。これらの方法で可能な限り複雑な規則を単純・明確化すべきである。

最終的に必要なのは、生現実に対する正しさである。明確だと認識するのでなく、生現実に対して明確でなければならない。認識の量より質が問題であり、曖昧な認識を多量に持っても役に立たない。現実的で明確な規則を理解する必要がある。

複雑系には曖昧さがある。複雑系の最初期の検討であるブライアン・アーサーの「新・旧経済学」のメモでも、内容は明確でない [19]。物理的なカオス理論が明確な数学的根拠を持っているのとは対照的である。複雑系は現在の社会シミュレーションの原点となっているが [20]、社会シミュレーションも明確な答えが出なければ役に立たない。社会シミュレーションは複雑さが分かるだけで十分とされる部分もあるが、曖昧では役に立たず、明確な特徴が分かる所まで解析すべきである。曖昧な状態では、別の規則を見つけてシミュレーションに適用する事もできない。



認識の量でなく質の問題、現実的で明確な規則を理解

図 2-19 複雑の明確化

2.4. 二重人間と知性

2.4.1. 感情・感覚・行動と二重自己

生命活動は感覚で情報を入力し、感情で評価し、行動で外部を変更する、というループで成立する。これらは遺伝的な要素であり、人間にもある。感情・感覚・行動中心に生自己が形成されている。

大脳新皮質も最初は単純な情報蓄積と分析の装置だったと思われる。認識が形成されて情報が統合されると、認識に従属する認識感情・認識感覚・認識行動による仮想的な認識自己のループが形成される。生自己と認識自己の二重性を二重自己と呼ぶ。二重自己は相互に複雑な情報交換を行う。

感情・感覚・行動は二重自己のため曖昧である。これを避けるため、認識側の感情・感覚・行動に限定する際には、接頭語として「認識」を付ける。生自己側の感情・感覚・行動に限定する際には、接頭語として「生」を付ける。感覚・行動に関しては現実に近いため、感情や自己ほど曖昧でなく、用語を分ける重要性は少ない。

「感情・感覚・行動」と言った場合、生現実系か認識系か判別できない。「感情・感覚・行動」に基づいて評価するのではなく、「生現実」に基づいて評価する必要がある。

認識があっても人間のような強い知性がなければ、認識は記憶により形成され、基本的に生現実から離れる事はない。認識が更新され続けていけば、二重自己も大きく離れる事はなく、構造的な問題は起こらない。その代わりに認識の能力は過去の経験を越えられない。単純な感覚と記憶で見える認識外は極一部である。

人間は知性により認識を大きく変更し、感覚や記憶を超えた推測ができるように進化した。その代わりに認識が生現実から大きく離れる危険性も生まれた。認識感情・認識感覚・認識行動は認識に統合されているため、これらも生現実から大きく離れる可能性がある。人間の二重自己は本質的に離反する可能性があり、感情・感覚・行動ともに絶対的な正基準ではない。生自己と認識自己を明確に分け、生自己に向かわなければならない。正しいのは自己でなく生命活動である。知性により認識感情・認識感覚・認識行動が生現実へ向かうように修正する必要がある。

二重自己は相互に情報交換をしているので、認識により生満足が発生する場合もある。文芸や空想などの場合である。ただしこれらは一種の遊びでしかなく、生現実から得られる生満足と比べれば部分的なものでしかない。生満足でなく認識満足でしかない可能性もあり、認識が生現実から離れれば実際の行動に障害をもたらす。文芸や空想でも生現実に近づけなければならない。

認識満足と生満足を対等に比較するのは意味がない。人間の存在理由は生物としての満足であり、認識上で満足する事ではない。誤った認識満足は形だけで実体がない。幸福だと思っても生息状況が悪ければ意味がなく、幸福だと思ふ事で生息状況が改善しなくなる。誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪である。

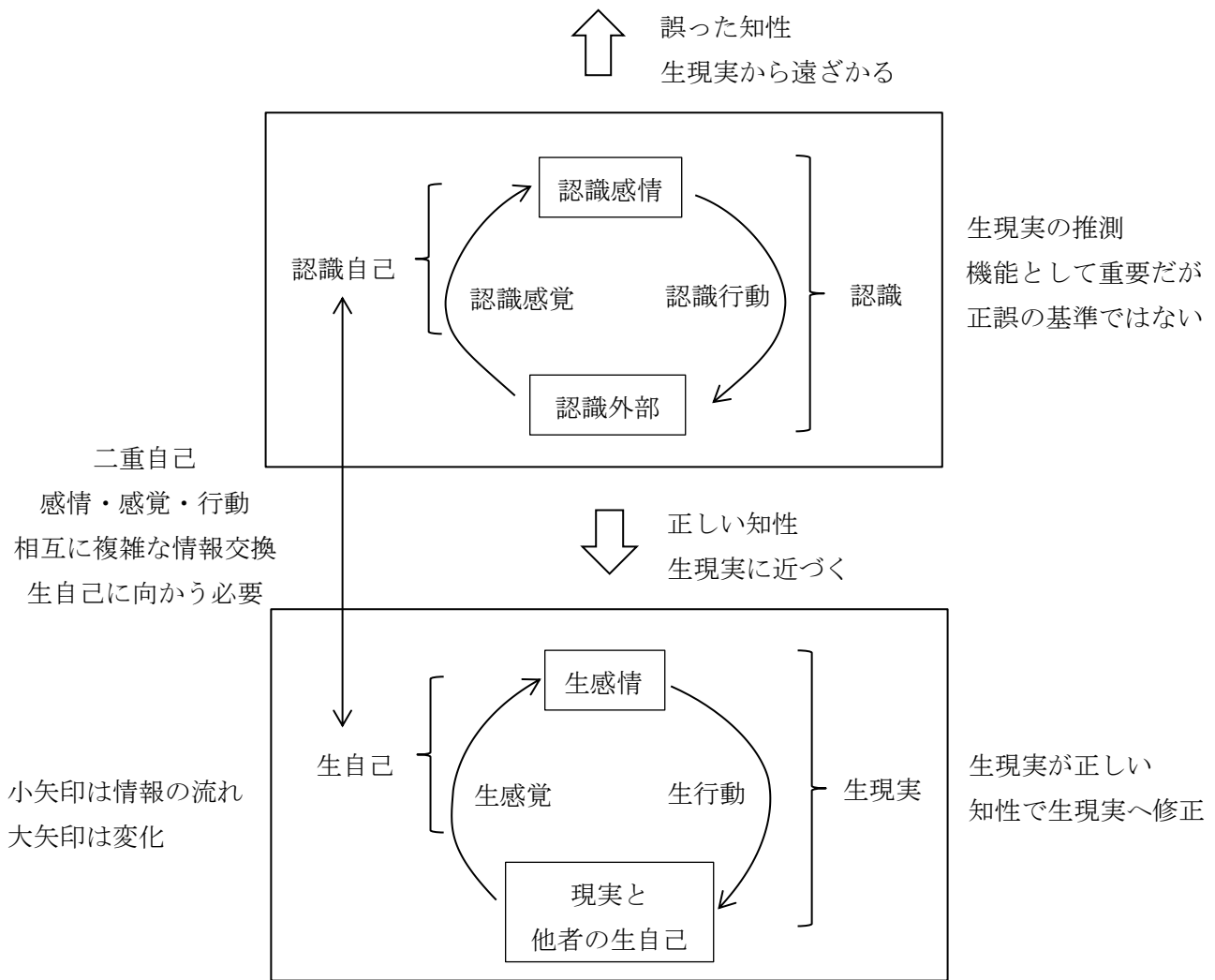


図 2-20 二重自己と感情・感覚・行動

2.4.2. 二重自己・二重人間と現実

自己は二重自己のため、認識と生現実の区分が曖昧になる。現実自己の外部にあるため、認識と生現実の区分が容易である。他者の生自己は他者の認識が関係するため、また曖昧になる。生自己は非常に重要であるにもかかわらず、現実より理解しにくいという問題が生じる。認識自己は認識現実より不正確になる。

生現実は一貫連続で整合しており、生自己と現実も繋がっている。現実側から生自己を見て、自己を生現実化する必要がある。これにより理解しにくい生自己も理解でき、二重自己の問題を回避できる。問題の根幹は認識自己にある。認識の実体は「認識の所持」でしかない事を正しく理解し、現実を元にして生現実を理解する必要がある。

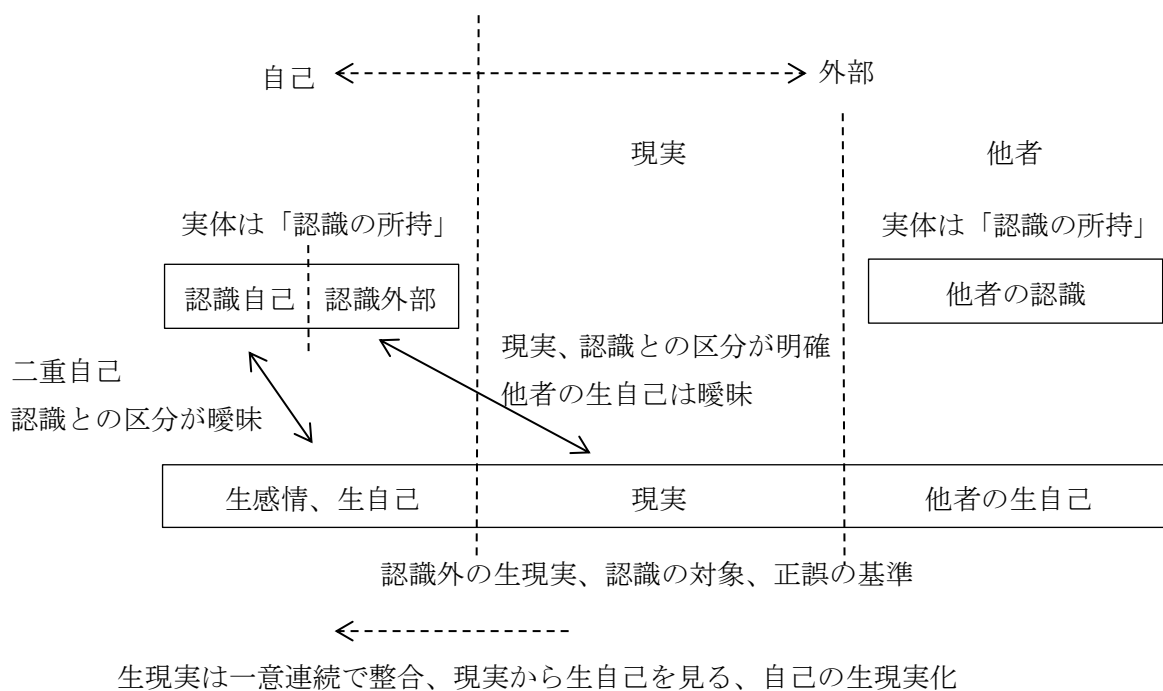


図 2-21 二重自己と現実

認識人間と生人間の間にも、二重自己と同じ問題がある。これを二重人間と呼ぶ。二重自己と同様に、二重人間も認識との区分が曖昧になる。直接の認識所有者は自己と別だが、他者の認識自己から間接的に影響を受けるため、二重自己と同様の二重性を持つ。二重人間は人間の本質的問題であり、一部の認識人間だけの問題ではない。

二重人間に対しても、現実には認識との区分が明確で分かりやすい。生現実の一意連続・整合性より、現実から生自己を見るべきである。現実から生人間を見て、人間を生現実化する必要がある。どの個人の認識も、実体は「認識の所持」でしかない事を理解しなければならない。感情・感覚・行動も、人間的でなく現実的である必要がある。

人間は生物に対して、生物の外から生息状況を見て理解している。人間の内部は二重人間により理解しにくい、生物と同じように「人間の外」から生息状況を見れば理解できる。「人間の外」と「自己の外」が違う事に注意する必要がある。「自己の外」から見ると他者の認識を含むので曖昧になる。

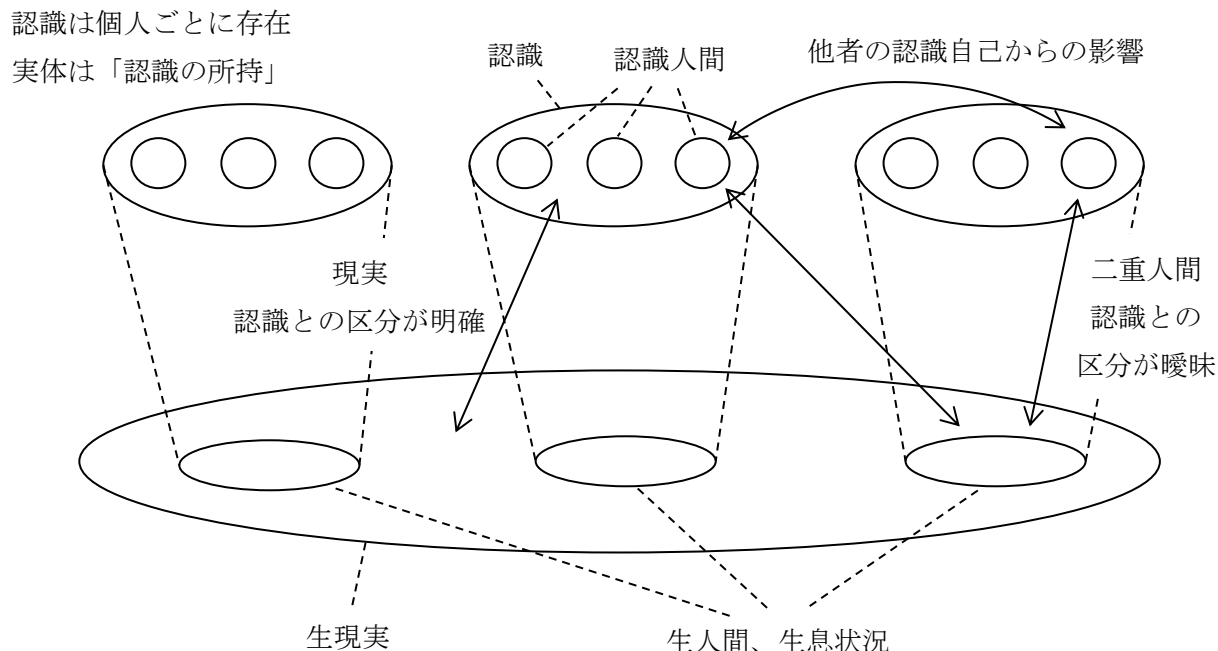
人間の存在意義は、生物や遺伝的な意義である。人間も生物の一種なので、その点は他の生物と変わらない。人間の存在意義は認識にあるのではない。この点は二重人間のため曖昧になってしまうので注意する必要がある。二重人間のため認識人間と生人間を混同し、あたかも認識上の人間が存在意義のように見えてしまう。これは哲学などで発生する問題である。人間の存在は生物としてのものであり、眠って意識のない状態でも生物としては人間である。

人間が重要でないという事ではなく、対象としては重要である。現実の重要さは、理解する上で明確であるという点にある。現実には理解の手段として重要である。

二重人間の問題の本質は、仮想と現実の一体化にある。情報処理的な「現実」のシミュレーションであれば、人間がそれを現実と錯誤する事はない。人間そのものに対する認識上の人間を、生人間そのものと錯誤する事が問題になる。人間以外の動物の場合は知性が低いので、認識が高度化されない代わりに現実から大きく離れ

る事もない。二重人間の問題は人間にだけ発生する。

二重人間の問題は、人間に関連するすべての事象に影響する。影響範囲は人文・社会科学や文化などを含めて非常に広い。これらすべてにおいて、現実を拡張した生現実を正しく理解しなければならない。人間もできるだけ現実的な所から見るべきである。



現実から生人間を見る、人間の生現実化、生物と同じく生息状況を見る
感情・感覚・行動も、人間的でなく現実的
人間の存在意義は生物や遺伝であり、認識ではない
人間は対象として重要、現実的理解の手段として重要

図 2-22 二重人間と生人間と現実

2.4.3. 現実から生人間

人間は二重人間のため認識との区分が曖昧であり、現実には認識との区分が明確である。現実から生人間を見て、人間を生現実化する必要がある。認識の実体は「認識の所持」であり、後天的である。生人間は人間を外側から見た生息状況であり、先天的である。現実から生人間を見るには、人間・現実の中間を現実的に見る事が重要である。これは現実から生人間への過程に当たる。現実的な人間・現実の中間を元にすれば、曖昧な二重人間を避けて生人間を明確に理解できる。

感覚・行動と対象の現実性は、人間・現実の中間に当たる。感覚・行動を現実から見るべきである。行動で扱う現実と、行動の物理量などを繋げれば、曖昧な行動も明確化できる。感情は人間的であり、現実的な部分は少ない。認識の現実性は、対象が人間か現実かで異なる。

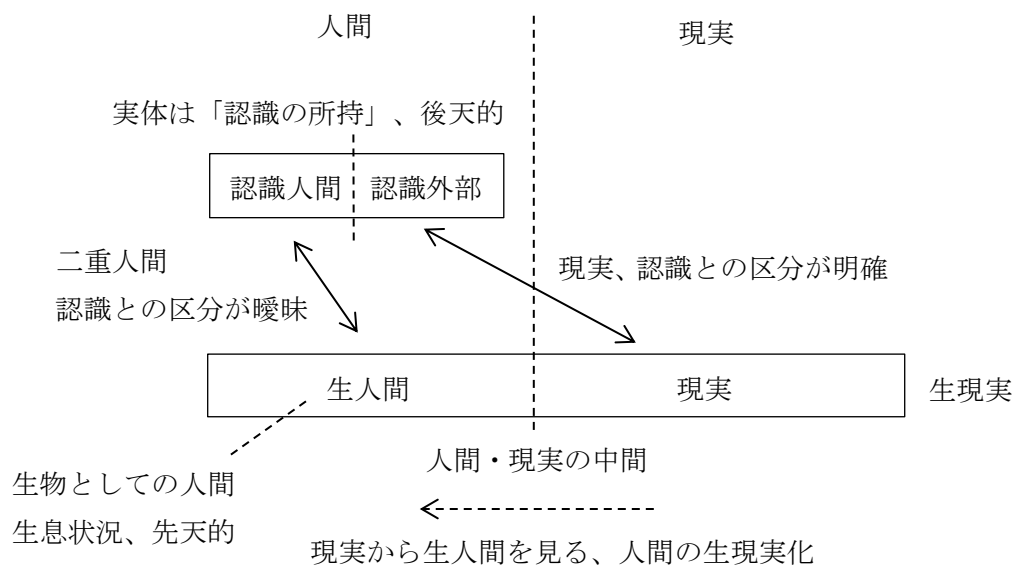
生物・物理などの人間の現実的側面も、人間・現実の中間と言える。生物・物理などは生人間にも当てはまる。それらを理解する事により、生人間の理解に繋がる。例えば起床・食事・就寝などの生物的事象は人間でも明確である。食事量や時間などの物理量も明確である。生人間は生物としての人間であり、この言葉自体が

人間・現実の中間的意味を持つ。

身体も人間の現実的側面の一種である。身体は生物的であり、「心」を含んでいないので二重人間の問題が少ない。

人間的で曖昧な感情・満足は誤りであり、現実的・生物的で明確な感情・満足が正しい。生物として健康的な食事・睡眠・運動の感情・満足であれば、明確な理解が可能である。このような感情を拡張して全体の感情を理解すべきである。

現実には生人間を囲むように存在する。周囲すべての現実を理解すれば、様々な方向の現実から生人間を理解できる。



人間・現実の中間を現実的に見る、現実から生人間への過程
 感覚・行動と対象の現実、感覚・行動を現実から見る
 人間の現実的側面、生物・物理・身体など
 人間的で曖昧な感情・満足でなく、現実的・生物的で明確な感情・満足

図 2-23 人間・現実と中間

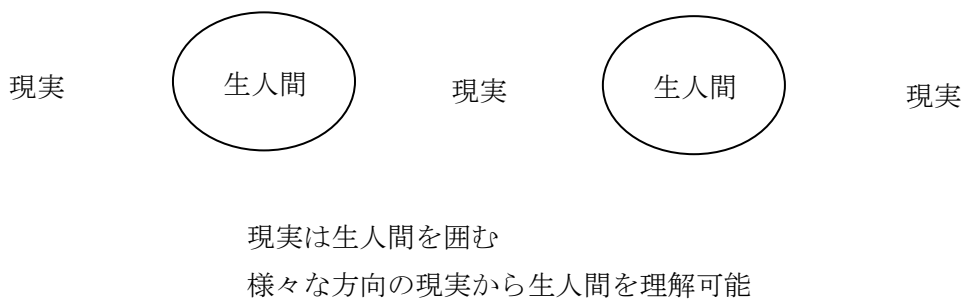


図 2-24 生人間を囲む現実

2.4.4. 無認識感情

認識感情・満足は認識内にあるため、認識から直接的に発生する。生感情・満足は認識外にあるため、認識から間接的に発生する。認識感情と生感情は空間的に近い位置にあり、人間と現実のような空間的判別ができない。しかし認識を止めれば生感情を見る事ができる。これを無認識感情と呼ぶ。

無認識感情は、認識感情から一步引いた感情と言える。機械の騒音を止めて鳥の声を聞くようなものである。「囚われない・こだわらない」などが無認識感情に近い。

二重人間のため人間は曖昧であり、生人間を理解しにくい。大抵は現実側から見て生人間を理解するしかない。無認識感情は人間側から分かるので重要である。ただし現実のように全体で重要と言う訳ではなく、感情においてのみ重要である。無認識感情により、認識に付随する満足の誤りを見る事ができる。

無認識感情を理解するには、認識を止めて感情を捉え、それを理解し直す必要がある。二重自己は相互に情報交換をしているので、認識を止めてすぐ無認識感情を見れば、認識に対する無認識感情を見る事もできる。

無認識感情は「考えない」という事ではない、最終的には無認識感情を認識しないと行動には役立たない。あくまで正しい認識感情を得るための方法論である。

感覚・行動は人間・現実の中間にあり、現実側から見て理解できる。感情は現実から遠いので現実側から見にくい。その意味でも無認識感情は有効である。無認識感情は知性からも離れるので、生物的・動物的な感情に繋げる事もできる。現実的・生物的で明確な感情と、無認識感情を繋げる必要がある。

現実的状况と無認識感情の理解は連動する。認識感情から一步引く事で、現実的状况と無認識感情の両方が見える。金持ちの本を読んで気分が良くなっている時に、ふと本から離れて貧乏で不幸なのに気づく、という例を考える。本から離れて無認識感情の不幸を理解すると同時に、現実的状况を見て貧乏を理解している。問題なのは貧乏な現実的状况と無認識感情の不満であり、本の中にある金持ちと満足を追っても意味がない。

人間・感情から離れて現実的になると感情がないように見えるが、実際には生物的な感情がある。無認識感情により現実的な生感情が見えるようになる。

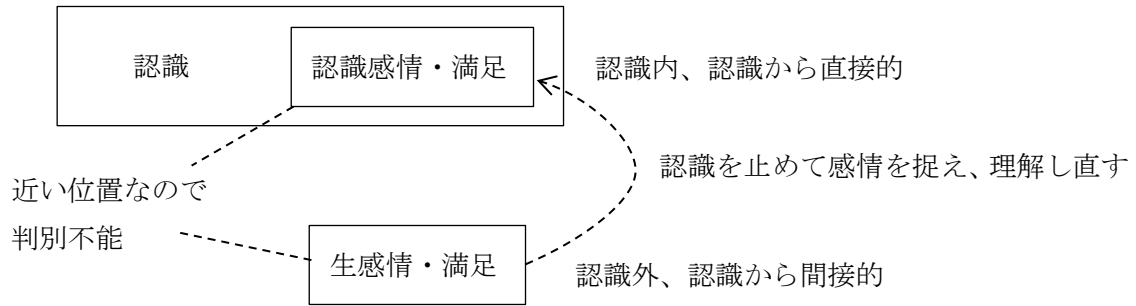
無認識感情とは認識を止める事であり、感情・行動を止める事ではない。誤解しないよう注意する必要がある。

無認識感情と感情を抑える事は次元が異なる。無認識感情は認識感情から離れるだけで、感情を抑える訳ではない。感情を抑えるのは機械的であり、生物的でないので誤りである。感情を抑えるのは、活動性の低い感情になるとも考えられ、この場合は認識感情から離れていない。「冷静」などは感情を抑える意味であり、無認識感情ではない。

「囚われない・こだわらない」などは宗教に似ているように見えるが、宗教は感情を抑える事が多く無認識感情とは異なっている。宗教によくある禁欲主義は感情を小さくする事であり、人間的で誤りである。

感情が大きくても小さくても、人間的なら誤りである。人間的な感動や凄さなども誤りであり、現実的・生物的でこだわらないようにすべきである。

無認識感情は行動を止め活動性を下げる事ではない。「穏やか」なども活動性を下げているだけで、認識感情から離れていない。「冷静」「穏やか」などの認識からも離れる必要がある。



認識を止めれば生感情が見える、無認識感情
 認識感情から一步引いた感情、現実的で明確な感情に繋げる
 「囚われない・こだわらない」などが近い、現実的・生物的でこだわらない
 無認識感情は人間側から分かるので重要
 感情・行動を止める事ではない、宗教のような禁欲主義ではない

図 2-25 無認識感情

2.4.5. 他者認識と相互影響

自己の認識も他者の認識も正基準ではなく、生現実が正基準である。認識に留まらず知性により認識外へ向かうのが正しい。他者の考えは現実でなく、考えているという事が現実である。それに合わせるのは誤りである。誤った認識なら、双方の認識は別々になる可能性もある。双方の認識が生現実へ向かえば、一意連続・整合性により認識を繋げる事ができる。

ある物が別の物を変化させる事を影響と呼ぶ。すべての物は互いに影響を受けながら存在している。これを相互影響と呼ぶ。動物は自発的な生感情により周囲に影響を与えるが、逆に周囲から影響も受けて存在している。人間の影響は行動の延長である。自発的な生感情であっても周囲からの影響が無視できるわけではなく、逆に周囲からすべてを押し付けられるわけでもない。常に相互影響の中にある事を理解しなければならない。支配でも完全に一方的にはならない。ある対象を支配する場合も、そこからの影響は必ずある。一方的な支配感誤りである。

人間の相互影響は二重人間が絡む複雑な話になる。生自己と他者の生自己が相互影響するだけでなく、認識自己を含む認識全体も相互影響する。認識の相互影響は、認識が生現実に向かう方向に進むのが正しい。相互に生現実の相互影響を正しく理解する必要がある。重要なのは自己でなく、相互の生命活動である。自発・押し付けだけの部分に区切った認識は、生現実の一意連続・整合性に反しており誤りである。自発・押し付けだけでは認識上の誤りである可能性がある。

生人間を含む生現実を正しく理解し、知性で認識が生現実に向かうよう修正しなければならない。人間より現実の方が理解しやすいため、現実から生人間を見る必要がある。人間を生現実化すべきである。生現実相互の生自己を含み一意連続で整合している。誤った認識は誤った相互影響を起こす場合がある。二重人間のため自己・他者とも理解は難しい。現実から自己・他者を見る事で、誤った認識の相互影響を回避できる。

自己・他者とも認識が誤っていたら相互に修正すべきである。これを自発・押し付けと考えて拒絶するのは意味がない。認識における正しい相互影響は、認識の正しい修正である。たとえ認識自己であっても、誤って

いれば相互に修正するのが正しい。これは生感情の自発性とは何の関係もない。感情・感覚・行動的に自発・押し付けを捉えても、認識だけの誤りである可能性がある。正しいのは自発・押し付けではなく、相互の生命活動である。

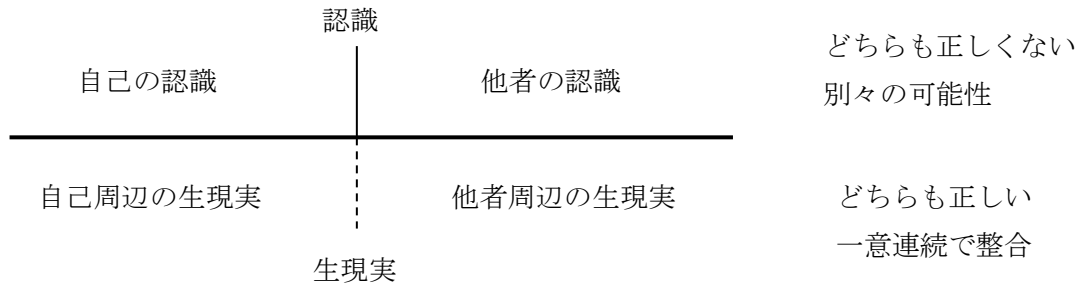


図 2-26 自己・他者と生現実・認識

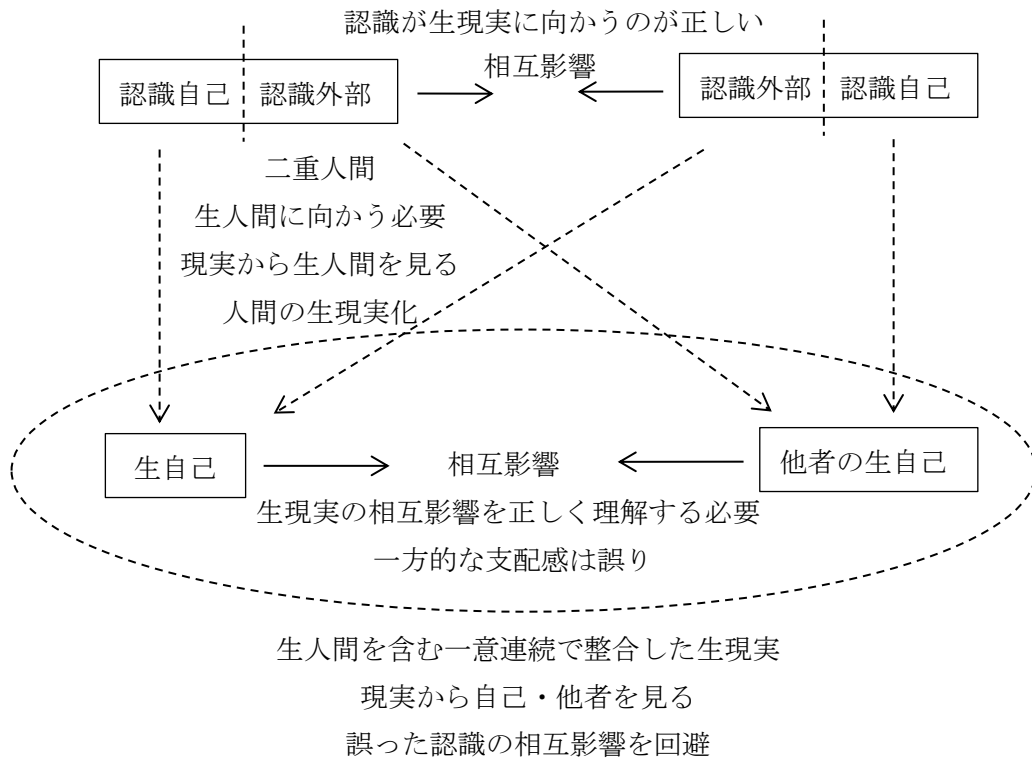


図 2-27 相互影響と生現実・認識

2.4.6. 知性と暴走

知性は認識を制御し修正する。人間の最大の特徴は「知的生物」という点であり、知性により認識を変形させる能力こそが人間の能力の根源である。生現実を推測した高度な認識により生満足を得る事が可能になる。重要なのは認識でなく知性であり、知性により認識を超えて認識外に向かう必要がある。認識量でなく認識を

制御し変える力が重要である。単なる記憶の蓄積では動物と大差ない。知性による認識の制御が人間の脳を中心機能であり、知性の欠落は人間として許されない。

重要なのは何が正しいかの基準であり、認識外の生現実に向かわなければならない。生現実を探究し、それを元に認識を修正する必要がある。知性により認識を超えなければならない。認識を生現実近づけ、高度化する強力な知性が人間の特性である。推測できる認識の形成は困難であり、知性による認識の高度化が必要である。生現実に向かわない知性はすべて誤りである。記憶力より賢さや適応力が必要である。単に学習により認識をコピーするだけでは駄目で、生現実に対して正しいかを検討する必要がある。生現実へ向かう真の知性や賢さが必要である。

二重人間のため人間は現実より理解しにくく、知性による暴走の可能性も特に高い。現実から生人間を見る事で、知性による暴走を防ぐ必要がある。人間・現実の中間を現実的に見るべきである。現実から見た感覚・行動の理解や、生物・物理・身体などの人間の現実的側面の理解が重要である。

強い知性は強い知的生感情によりもたらされる。強い知的生感情と知性は暴走を起こす可能性がある。暴走により認識が生現実から乖離する。生現実逆らう知性は誤りであり、形だけの理性でなく生現実に従う必要がある。認識上に留まるのは知性の暴走でしかない。記憶力、理解力、知識量なども生現実に向かわなければ意味がない。

認識は機能として重要だが、正誤の基準ではない。生現実を模倣し高度に推測するための装置であり、それ自体が正しい訳ではない。生現実が正しく、知性により認識を生現実へ修正しなければならない。認識を生現実近づけるのが正しい知性であり、生現実から遠ざけるのは誤った知性である。知性による正しい方向性が非常に重要である。

動物の行動の多くは条件づけ（訓練）によって習得される [12]。動物の学習の多くは外部からの直接的な情報入力によって作成され、人間のように知性による変形は行われぬ。動物はこのような学習により自然界に適応している。情報源が生現実なので大きな誤りはないが、単純な感覚と記憶しかないので生現実の極一部しか分からない。

自然界であれば外部からの情報入力は生現実しかなく、過去の経験が将来の行動を決定づける単純な学習になる。人間は自然界とは別の特殊な認識を人為的に作り出す事が可能で、それを外部から入力させる事で動物にも人間の認識を学習させる事ができる。人間社会は動物とは次元の違う高度な認識により形成されており、その一部を動物に与える事で動物も人間社会に適応させる事ができる。

猫と犬を比較すると、猫はあまり学習能力や意欲が高くなく、そのままの状態人間社会に適応している。犬は学習能力が高いため人間によるしつけが重要になる。学習は他の動物と同様に行動による条件付けにより行われる [21]。しつけがうまく行けば人間社会に適応できるが、うまく行かなければ問題行動を起こす。これは人間により与えられた誤った認識のためである。

子供も幼児期においては、犬と同じように大人によるしつけが重要である [22]。その成否により人間社会への適応・不適応が起こる。学校へ行くようになると、社会行動だけのしつけを超えた教育が重要になる。9才頃からメタ認知が発現し [17]、大人と同じように内からの認識修正が行われるようになる。

大人になると内からの知性により認識を修正するようになる。優秀な大人なら社会に適応できるが、犯罪者や精神疾患になれば適応できない。これは時として大人がペット以下になる事を示す。特に猫は十分なしつけもなしに人間社会に適応できる。猫が問題行動を起こさないのに人間が起こすのはおかしい。ペットは人間社会に適応できるよう進化したと思われるが、そもそも人間社会は人間が作ったものなので、人間も生来それに適応できるはずである。野獣のように人間社会を破壊するのは知性による暴走であり、ペット以下の行動であ

る。

外からの認識修正の場合、誤った認識も入力されるが、同時に生現実の情報も入力される。正誤の情報は混在した状態になり、完全に誤った認識にはならない。内からの認識修正だと認識全体が変形されるため、完全に誤った認識になり得る。子供であれば外部入力により生現実の影響もあるが、大人は内から認識を修正するので完全に誤る可能性がある。誤ったしつけの犬や子供には不満感もあるが、犯罪者や精神疾患なら不満感も正しく理解できない。

愚かで正しい認識を作れない人間なら、ペットや子供のように優秀な他者に依存する方が幸福である。適切に扱われたペットなら十分幸福に生きられる。野獣よりペットとして生きる方が人間らしい生き方である。すべてを知ることができる人間はいないので、優秀な他者から情報を受け取る作業は程度の差こそあれ誰でも必要である。他人から修正を正しく修正されるのは、誤った押しつけではない。

表 2-3 知性による認識修正と自然・人間社会適応

主な情報源	適応	知性による認識修正		
		なし・弱い	外から	内から
生現実	自然適応	猫、野犬		
	人間社会適応	猫		
誤認識	人間社会不適応		誤ったしつけの犬・子供	犯罪者、精神疾患
正認識	人間社会適応		正しいしつけの犬・子供	優秀な大人

2.5. 開放・閉鎖

2.5.1. 開放・閉鎖

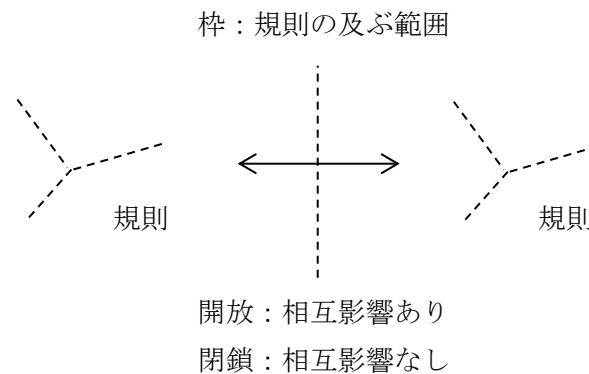
生現実は一意連続で整合性を持つので、生現実にある規則は常に別の規則と相互影響を持つ。規則間に相互影響がある事を開放、ない事を閉鎖と定義する。開放は一意連続を規則の面から見たものであり、開放により規則間に整合が得られる。開放は規則に対するメタな規則であり、基本的で重要な規則である。認識外はすべて「開いた」状態にあり、厳密な意味で「閉じた」状態にある部分はない。閉じた認識は誤りであり、常に開放が必要になる。開放・閉鎖は物理的手法を当解析に応用するためのモデルである。

規則の及ぶ範囲を枠と呼ぶ。開放とは、生現実において枠を超えた相互影響がある事である。枠はシミュレーションの微分方程式などで使われる境界 [23]を、より一般的な言葉にしたものである。物理ではすべての事象は開放しており、常に外部との相互作用を考える必要がある。数値解析を行う際には相互影響があると解析が困難になるので、疑似的に境界を制約する事が多い。その場合も境界の外を考慮した適切な境界条件を選択し、境界における問題が小さくなるようにする。

開放は無認識感情とも繋がる。無認識感情における囚われない・こだわらない事は、閉鎖をしない事に近い。人間的にこだわるから閉鎖するのであり、一歩引けば開放して見える。

枠はシミュレーションにおける境界であり、エキスパートシステム [24]における専門性である。エキスパートシステムにはフレーム問題というものがあるが、このフレームは「境界」の意味ではない [25]ので注意する必要がある。フレームは「境界」より「基礎」に近い意味である。

シミュレーションやAI的モデルにおいては、外部との連携を制約しないと計算が困難になる。複数のシミュレーション・AIを同時に動かして外部との連携を計算する事もあるが、大抵は人間が扱う。様々なモデルを連携させる能力は、コンピュータでなく人間が持つ能力である。

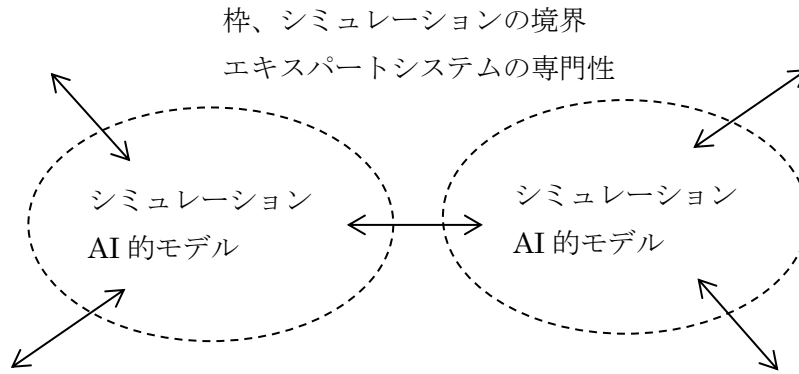


生現実は一意連続で整合、一意連続を規則から見ると開放

開放はメタで基礎的な規則

無認識感情、人間的にこだわるから閉鎖、一歩引けば開放

図 2-28 開放・閉鎖と枠



外部との連携を制約しないと計算困難
外部との連携を計算する事もあるが、大抵は人間が扱う

図 2-29 枠とシミュレーション・AI

生現実には無数の規則があり、複雑で理解が困難である。開放して見えるのが正しい認識であり、閉鎖して見えるのは誤った認識である。閉鎖すると部分的に単純に見えるが、実際には全体として複雑である。

生現実全体としては複雑だが、開放・閉鎖だけを見れば単純である。「閉鎖したら誤り」とする開放の規則は、複雑な規則を単純化したものと言える。全体として複雑な規則に対しても、開放により理解が容易になる。複雑な規則を開放して理解するのが正しい。全体の複雑さに対しては、別の規則を理解する事で対応可能である。

開放は一意連続・整合性という認識外の特徴に基づいているので、認識外に向かう可能性が高い。よって開放は極めて重要である。開放なら常に正しい訳ではないが、開放でなければ誤りである。開放は外部との関係だけを見ればわかるため、認識の正誤基準として扱いやすい。現在は正誤基準として広まっておらず、生現実の基本的な規則として非常に重要である。開放した認識が正しいのではなく、生現実の開放を理解する必要がある。

正しく開放した認識は外部と繋がるが、誤って閉鎖した認識は断裂する。開放的に連続した認識が正しく、閉鎖的に分断した認識は誤りである。生現実に急な変化はあるが分断はない。閉鎖した枠の中だけを見る内向きの認識は誤りであり、開放により回避できる。誤りなのは閉鎖枠や分断であり、分断の程度が強いほど誤りも大きい。断片的認識は閉鎖されており誤りである。断片的認識では内容が繋がらず、広く集めても意味がない。生現実を正しく理解すれば、一意連続・整合性によってすべて繋がる。

複数の規則、複雑で理解が困難

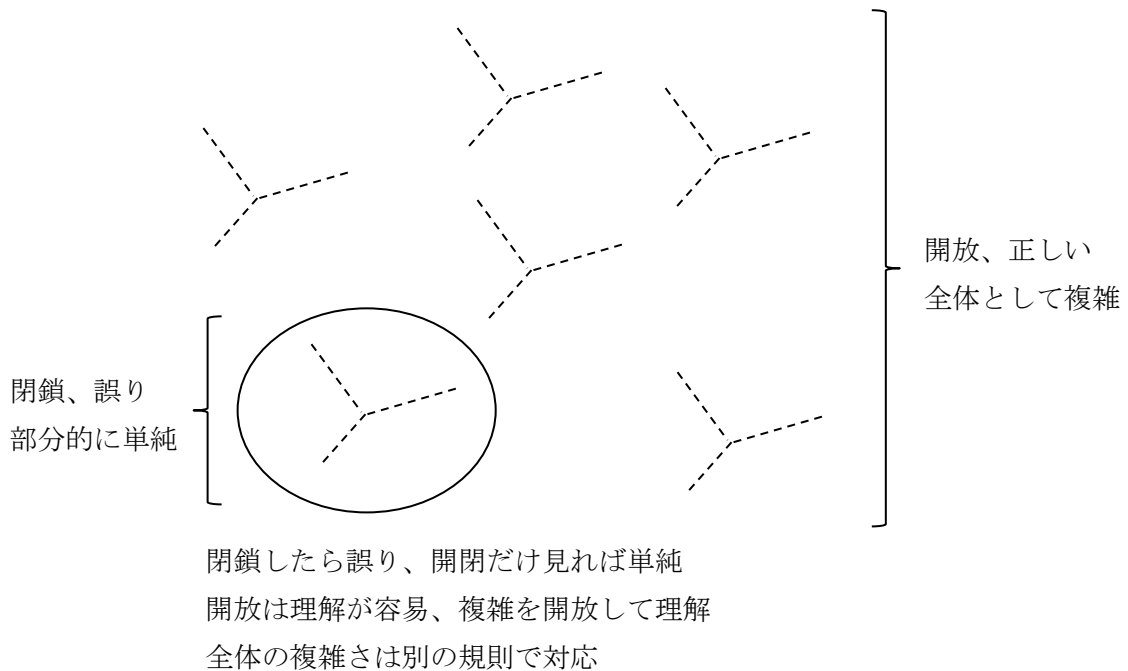


図 2-30 開放と複雑

2.5.2. 閉鎖枠と多閉鎖

どんな枠の内外でも、少なくとも弱い関係がある。枠内外は閉鎖していない。開放して見えるのが正しい認識であり、閉鎖して見えるのは誤った認識である。どのような状態でも生現実は開放している、と言う事を理解する必要がある。弱い関係を無視して「閉鎖して見える」と言う方が誤りである。

枠の内外で急にすべてが変わる感覚も閉鎖で誤っている。内外で関係がなくなる訳ではないので、内外が同時に見えるのが正しい。

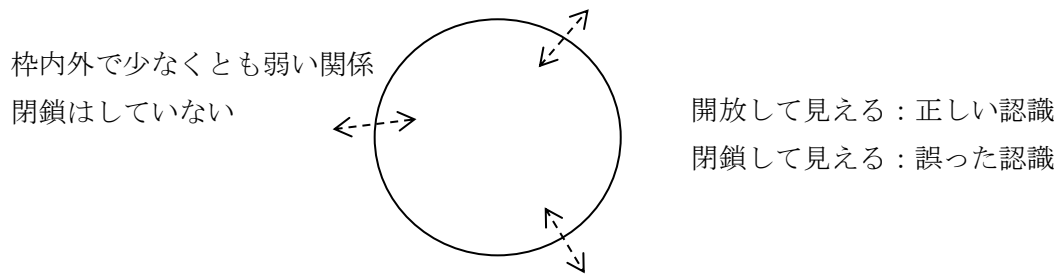
閉鎖枠ができると、枠内外の規則が分断する。枠内外の分断が誤りであり、開放的に連続しなければならない。枠内側だけ見て枠外側との関係を見なければ、枠内側を理解していない。枠内外を繋ぎ、閉鎖の壁を壊して開放しなければならない。

閉鎖枠は枠の内側にも外側にも影響するので、閉鎖枠内外の両方が誤りである。閉鎖枠を開放しなければならない。閉鎖枠の内側だけ見えて外側が見えないように認識していても、実際には両方見えていない。複数の閉鎖枠がある場合、内側でも外側でも中間でもすべて誤りであり、開放しなければならない。

閉鎖枠外は閉鎖枠内に比べて一見「開放的」に見える。しかし範囲が広いだけで閉鎖している事に変わりはない。閉鎖枠内から閉鎖枠外に出ても意味はなく、閉鎖の内外が変わるだけで状況は大差ない。閉鎖枠外に突き抜けても、閉鎖枠が残っていたら閉鎖のままである。閉鎖枠内外の移動でなく、閉鎖枠を含めた全体を修正すべきである。閉鎖枠を壊して内外の関係性を理解する必要がある。閉鎖枠内・枠外をつなぐ現実的論理を構築する事で、真の開放が理解できる。

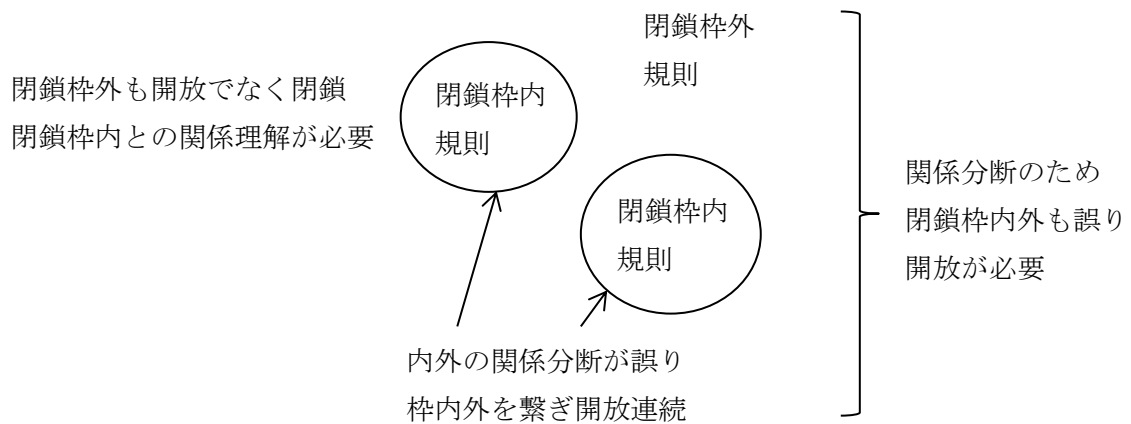
正しく開放された認識には周囲の情報が増加される。誤って閉鎖された認識はそれが理解できず、不必要な情報に見える。これは誤りであり、周囲の情報は必ず追加できる状態でなければならない。閉鎖により関係を

切る事で、完全な理解が得られたと判断するのは誤りである。生現実は開放的に無限に広がり、遠くは見えにくいだけで、壁がある訳ではない。



弱い関係を見逃して「閉鎖して見える」と言う方が誤り
急にすべてが変わる感覚も閉鎖で誤り、内外が同時に見えるのが正しい

図 2-31 開放・閉鎖と正しい見方



閉鎖枠内から閉鎖枠外に出ても無意味、状況は大差ない
閉鎖枠外に突き抜けても、閉鎖枠が残っていたら閉鎖のまま
閉鎖枠内外の移動でなく、閉鎖枠を含めた全体を修正

図 2-32 閉鎖枠と閉鎖枠内外

誤って閉鎖した認識は、閉鎖枠の延長により閉鎖が増える。これを多閉鎖と呼ぶ。元々外部との関連性を失っているのだから、単に外部をどこと判別するかの違いだけで多閉鎖が生まれる。閉鎖した認識は、1つの閉鎖でも2つの内外に分断される。外側を内側と同じように閉鎖認識すれば、元の閉鎖枠に追加する形で外部も閉鎖される。最終的に内部と外部の2閉鎖が生じる。すべての閉鎖を全開放しなければならない。

閉鎖を直さない状態で閉鎖枠外を見ても、そこでまた閉鎖が生まれてしまい意味がない。閉鎖の増え方によっては、閉鎖が多重化する場合もあり得る。

多閉鎖の全閉鎖枠が誤りであり、開放が必要である。多閉鎖の内側でも外側でも中間でもすべて誤りであり、閉鎖枠を開放修正する必要がある。

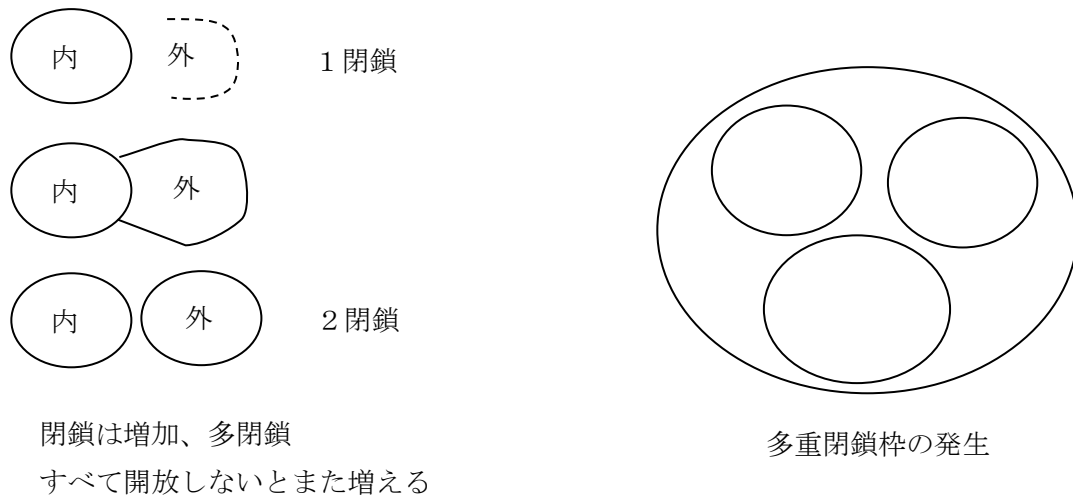


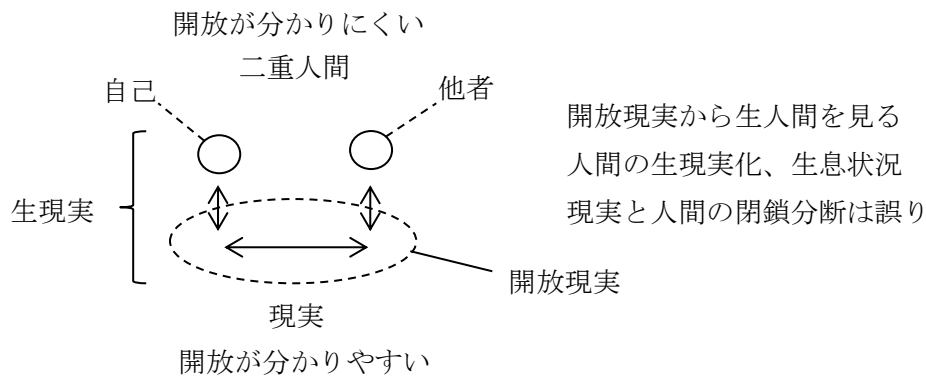
図 2-33 多閉鎖

2.5.3. 開放現実から生人間

生命活動は外部との関係が必須であり、生感情は必ず開放される。開放的な生きた気力や情熱を理解する必要がある。生感情を正しく理解すれば、認識や行動は自然に外部と関係する開放的なものになる。二重人間により感情・感覚・行動のすべてに誤りの可能性があり、生人間を理解しなければならない。理性的・本能的という捉え方も、感情的・感覚的・行動的という捉え方も、すべて閉鎖の可能性はある。人間的で曖昧な感情・感覚・行動により閉鎖認識が発生する。感情・感覚・行動を含むすべてが開放連続している事を正しく理解する必要がある。感覚・行動は人間・現実の中間にあり、感覚・行動を現実的にする事で感情も現実的にできる。

自己や他者などの人間は二重人間のため開放が分かりにくい。認識人間において誤って閉鎖分断して見える可能性がある。人間より現実の方が開放を理解しやすい。現実から生人間を開放的に見て、人間を生現実化する必要がある。これにより二重人間の問題を回避できる。開放が分かりやすい現実部分を開放現実と呼ぶ。開放現実から生人間を見る事で、人間の開放も理解できる。生人間は人間の生息状況である。現実と人間の閉鎖分断は誤りであり、現実だけ開放して見ても生人間に繋がらなければ意味がない。

当解析において「現実」は最も重要な概念であり、「開放」も重要な概念である。開放現実は両者を合わせたものとなる。現実を見なければ開放を明確に理解する事もできない。開放現実の上に乗った形で自己・他者を理解すれば、自己・他者まで開放的な理解ができる。



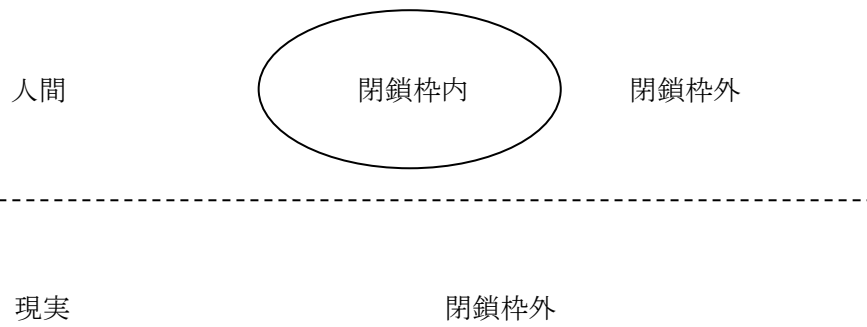
当解析において現実是最も重要、開放も重要
 開放現実とは両者を合わせたもの
 現実を見なければ開放も分からない
 開放現実の上に乗った自己・他者を理解

図 2-34 開放現実

曖昧な人間で閉鎖した場合、人間は閉鎖枠内と閉鎖枠外に分断される。現実も閉鎖枠外に置かれ、結果として現実も閉鎖する。人間・感情と現実が無関係に見える、現実是非人間的なものと感じる。人間と現実の閉鎖分断のため、「人間・感情なし」や「現実なし」に見える。十分に現実的であれば開放により人間・感情と繋がって見える。

現実を見るだけでは不十分であり、人間の生現実化が必要である。開放現実から生人間を見る事で、人間と現実を開放的に繋げる事ができる。開放現実から見て人間は常に存在するが、「人間的な人間」とは異なるものになる。現実だけを閉鎖的に見るのも誤りであり、人間と開放的に繋げなければならない。人間の生現実化においては、無認識感情の利用も重要である。人間的にこだわるから閉鎖するのであり、一歩引けば開放して見える。

「冷たい現実」も閉鎖による誤りであり、人間の外に閉鎖して冷たく見える。実際には現実には生物を含むものであり、温かい部分もある。



曖昧な人間で閉鎖すれば、現実も閉鎖、人間・感情と現実が無関係に見える
閉鎖分断のため、「人間・感情なし」や「現実なし」に見える
現実を見るだけでは不十分、人間の生現実化が必要
「冷たい現実」も閉鎖による誤り、現実には生物を含み、温かい部分もある

図 2-35 人間・現実の閉鎖

2.6. 変数時空と多要素

2.6.1. 変数時空

生現実の根本的な規則を考えると、時空位置を持つ変数群が近くの周囲と関係している規則が考えられる。この規則を変数時空と呼ぶ。変数時空は非常に根本的な規則で、自然科学における様々な規則の基本形と見なす事ができる。基本形であるために人間の解析にも適用できる。変数時空も開放・閉鎖と同じく、物理的手法を当解析に応用するためのモデルである。

生現実は一意連続で開放しているので、近くの周囲との関係も時空間上で連続している。変数群や関係には規則性があり、正しく理解する事で生現実の推測が可能になる。ただし変数群も関係も多量で複雑なので、全体の推測は非常に難しい。

近くの周囲との関係だけなら単純で規則的だが、遠くまで含めば複雑で不規則になる。ただし完全な不規則は存在しない。生現実には無数の規則があり、複雑でも別規則により高正確が可能である。変数時空の1変数群でも正しさの差がある。

変数時空においても開放は重要である。生現実は一意連続なので、時空位置の内部変数群と外部変数群の間に開放的な関係がある。

開放は時間変化の意味でも存在する。現在と過去・未来を分断して認識するのではなく、連続して認識しなければならない。時間変化は同じ事の繰り返しではなく、時間変化による過去・現在・未来の繋がりを理解する必要がある。複雑な生現実の未来予測は困難だが、時間開放した認識を持つ事である程度可能になる。過去は現在・未来に直結しており、未来予測のために過去-現在の繋がりを理解する事も重要である。

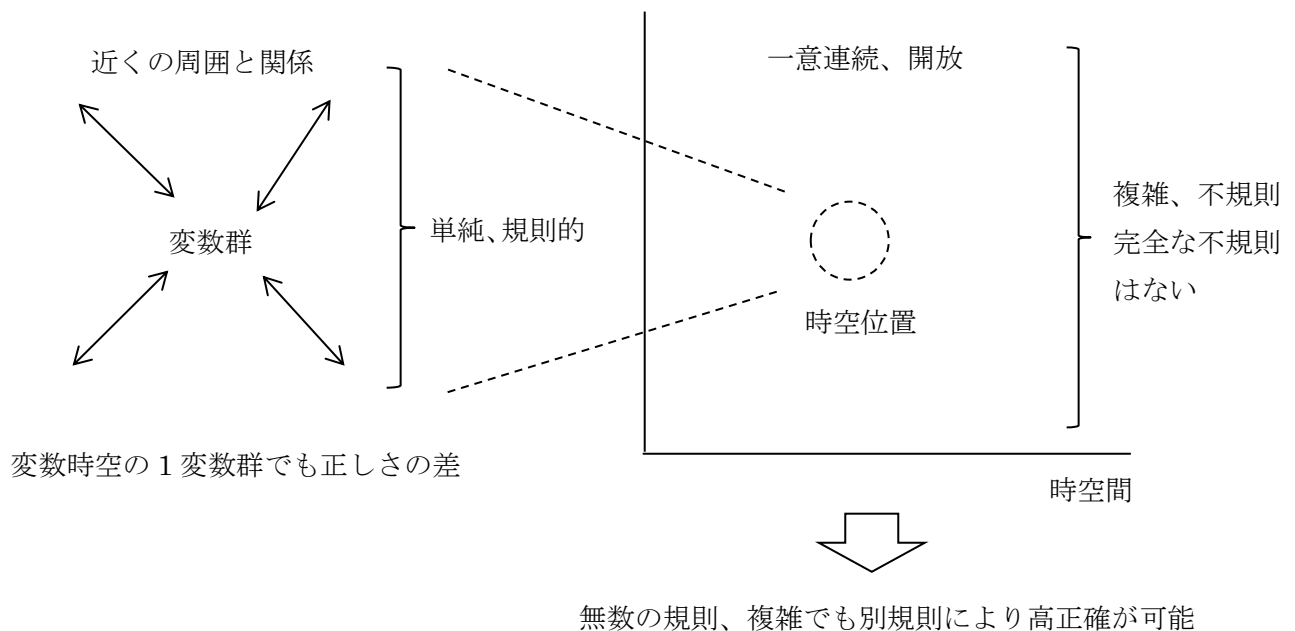


図 2-36 変数時空

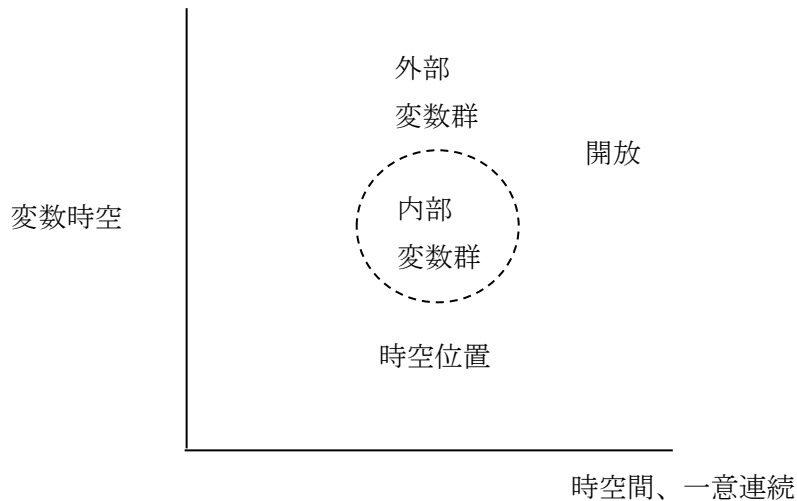


図 2-37 変数時空と開放

変数群との間の近い関係を積み上げていくと、遠くまで影響が及ぶ。生現実は一意連続で開放しており、近い関係 1 つだけで終わる事はない。近い関係の積み上げは複雑であり、簡単に理解はできない。生現実には無数の規則があり、近い関係の積み上げを単純化する別の規則もあり得る。近い関係自体の応用である場合もあれば、まったく別の規則である場合もある。物理的に言えば、近くの力の延長として遠くまで波動が伝わる場合もある。近くの力とは無関係に電磁界などが伝わる場合もある。

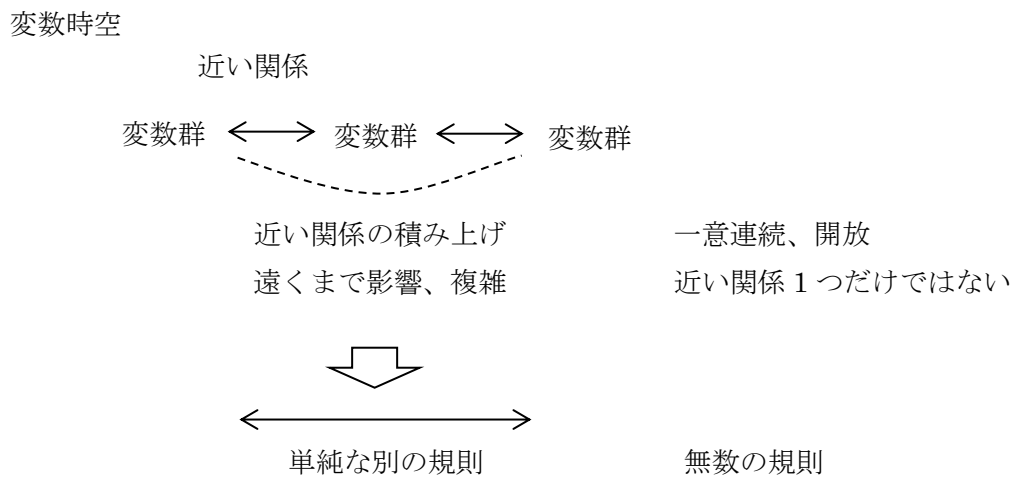


図 2-38 関係と規則

2.6.2. 多要素と関係距離

すべての物質は無数の素粒子で構成されているという「物理」的事実がある。素粒子が集まり原子になり、原子が集まり分子や固体になり、分子や固体により人間が形成される。素粒子や人間などは、複数の変数群をまとめたもので、同形のまとまりが多数あると解釈できる。1つのまとまりを要素、複数のまとまりを多要素と定義する。多要素も開放などと同じく、物理的手法を当解析に応用するためのモデルである。

多要素は変数時空の空間において、変数群を 1 要素としてまとめた規則である。変数時空の空間を離散化した規則と解釈できる。時間側は離散でなく連続である。生現実の一意連続・開放は分断をしていないという意味なので、離散化したモデルでも問題は無い。多要素は生現実における一般的な規則性であり、空間上に存在する。要素の数が増えれば多要素は複雑になる。複雑でも完全な不規則は存在しない。

多要素は物理学における多体問題 [26]を一般化したものとも言える。「生物」的に見て人間は遺伝子を中心とするマイクロ構造を持つため [1]、「生物」的事実の延長とも言える。

変数時空も多要素も生現実に対する規則の一種であり、他の規則も存在する。規則は無数にあり、複雑な状態に対して別の規則を適用して高正確にする事が可能である。このような規則を発見する事は重要であり、追求すべきである。

変数時空の 1 変数群や、多要素の 1 要素でも正しさの差はある。原子の 1 要素なら高正確だが、植物の 1 要素だと低正確である。低正確なら別の規則を探す事も重要である。

生現実上の規則が重要であり、生現実にはない規則は意味がない。変数時空も多要素も生現実にある形式でなければならぬ。生現実上にある、変数時空や多要素以外の規則の発見も重要である。

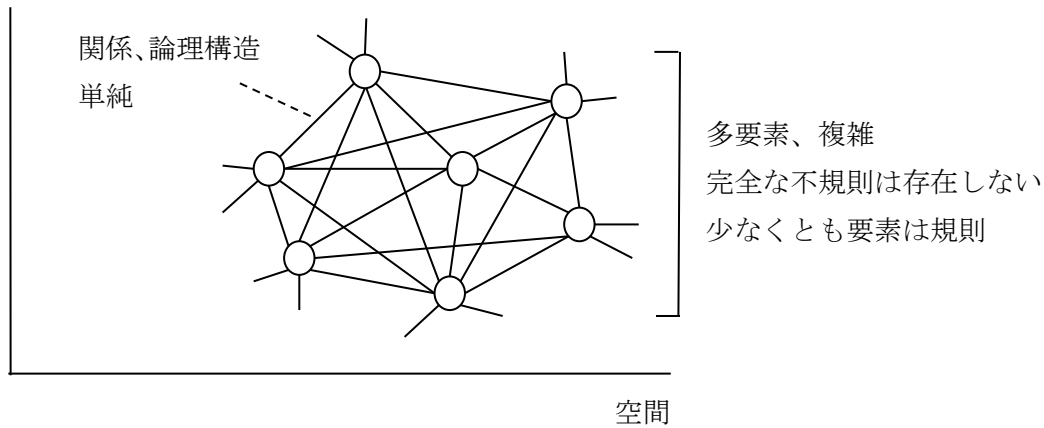


図 2-39 多要素

時空間を表現する際、距離として簡単に使用できるのは物理的な距離である。空間を物理距離で表記すると、関係は強くても遠い場合があり、関係が分かりにくい。強い関係を近く書けば関係が分かりやすくなる。これを関係距離と呼ぶ。空間は基本的に関係距離を使う。時間に関しては、事象の判断が時間ごとなので物理距離でないと扱いにくい。

物理距離の次元数は少ない。関係は種類が多い上に要素間で別々になるため多次元になる。図示した関係距離は、多次元の関係次元削減 [2]したものになる。使う「関係」により要素の位置は変わる。

関係距離なら、関係の線を省略しても関係の強さは分かる。これにより図を単純化できる。関係の強さは距離で図示されるが、関係の多寡は図示されない。

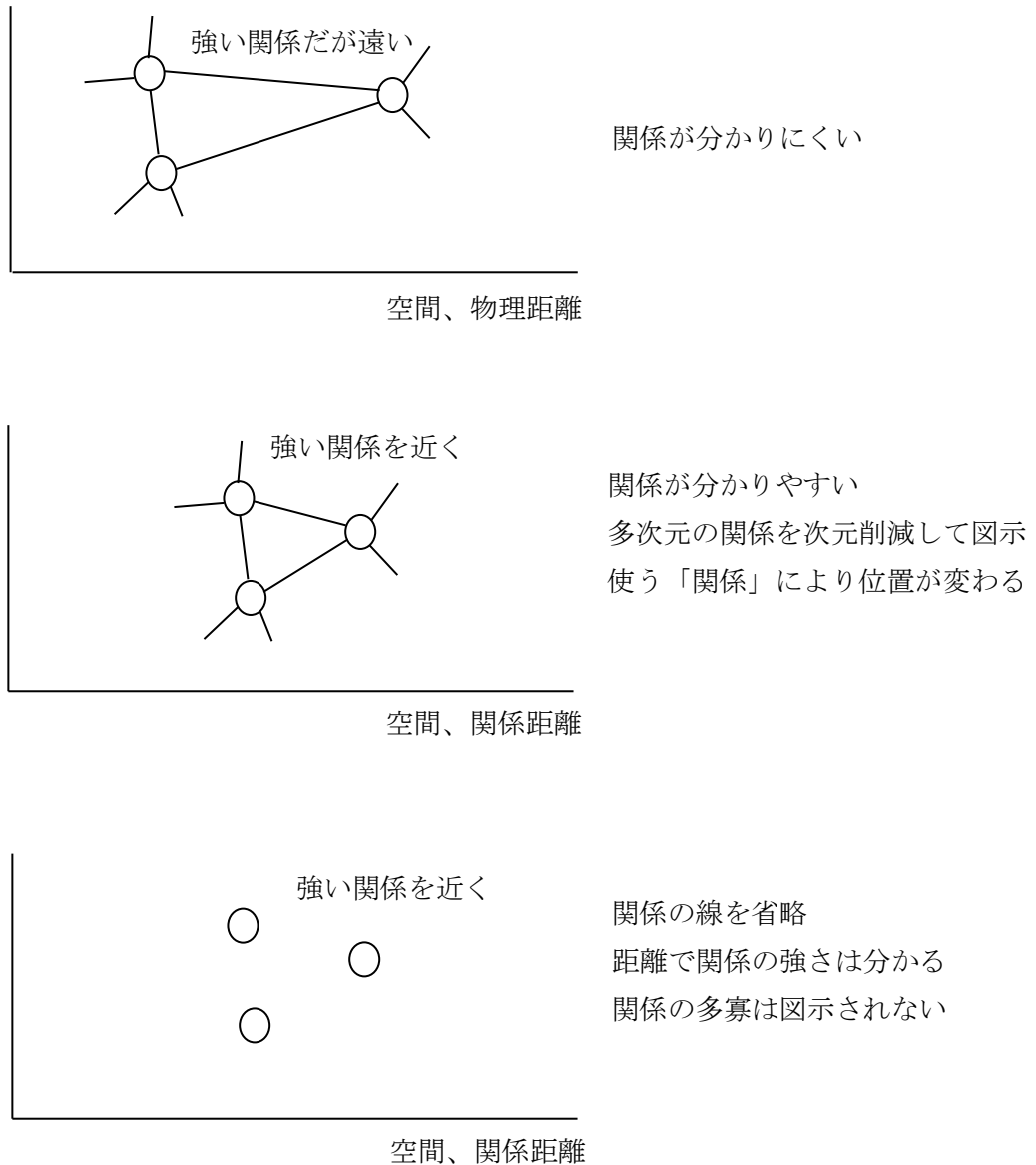


図 2-40 多要素と関係距離

2.6.3. 多要素階層

複数量要素をまとめられれば単純化できる。ただ完全な単純化ではなく、まとめた中も多要素である。これを多要素階層と名付ける。多要素階層は内部と外部の関係をまとめられる場合に成立する。階層は構造的・論理的・規則的になる。多要素階層を正しく理解できれば複雑さを押さえられる。「言葉」でも厳密かつ明確に多要素階層でまとめれば論理化できる。

固体のように強く結合した多要素は1要素と見なせる。流体のように結合が弱ければ1要素とは見なせないが、完全に不規則な訳ではない。流体の多要素間にも規則性はある。規則は無数にあり、多要素の位置・内部変数・関係に対しても様々な規則が存在する。階層化できない多要素でも別の規則を見つける事が重要である。

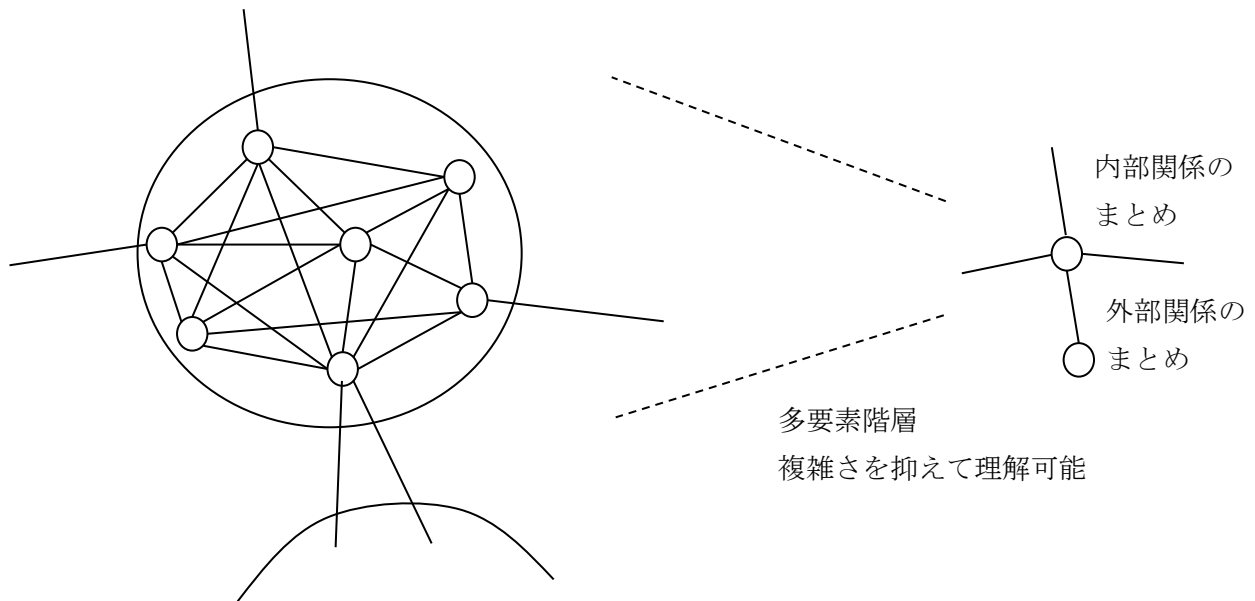


図 2-41 多要素階層

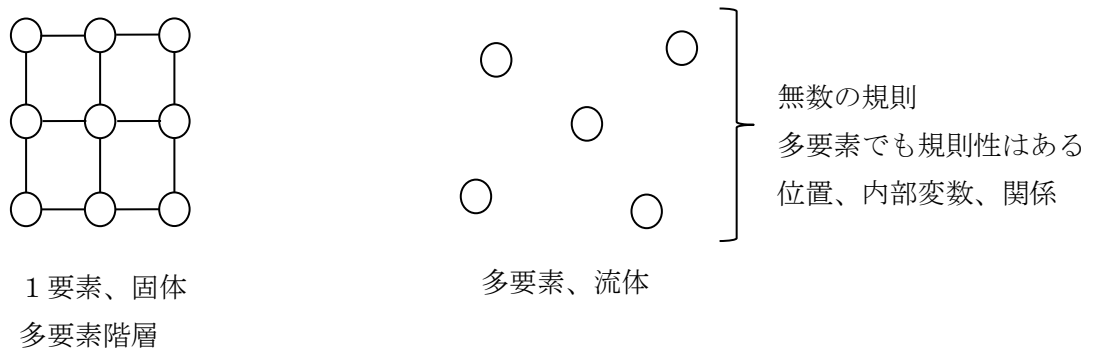


図 2-42 多要素と規則性

多要素階層により 1 要素と見なせれば推測が容易になる。1 要素なら単純だが、多要素なら複雑になる。1 要素にならなくても規則性があれば推測は可能である。流体でも層流であれば比較的推測ができる。乱流なら規則性は低くなるが、多少の規則性はある推測不能ではない。多要素でも規則性を理解する事は非常に重要である。

生現実の規則が重要であり、多要素階層でも生現実上にある規則でなければ意味がない。誤って階層を付けて単純化する事は避けなければならない。単純化して理解できたと誤解しても、誤った推測しかできない。

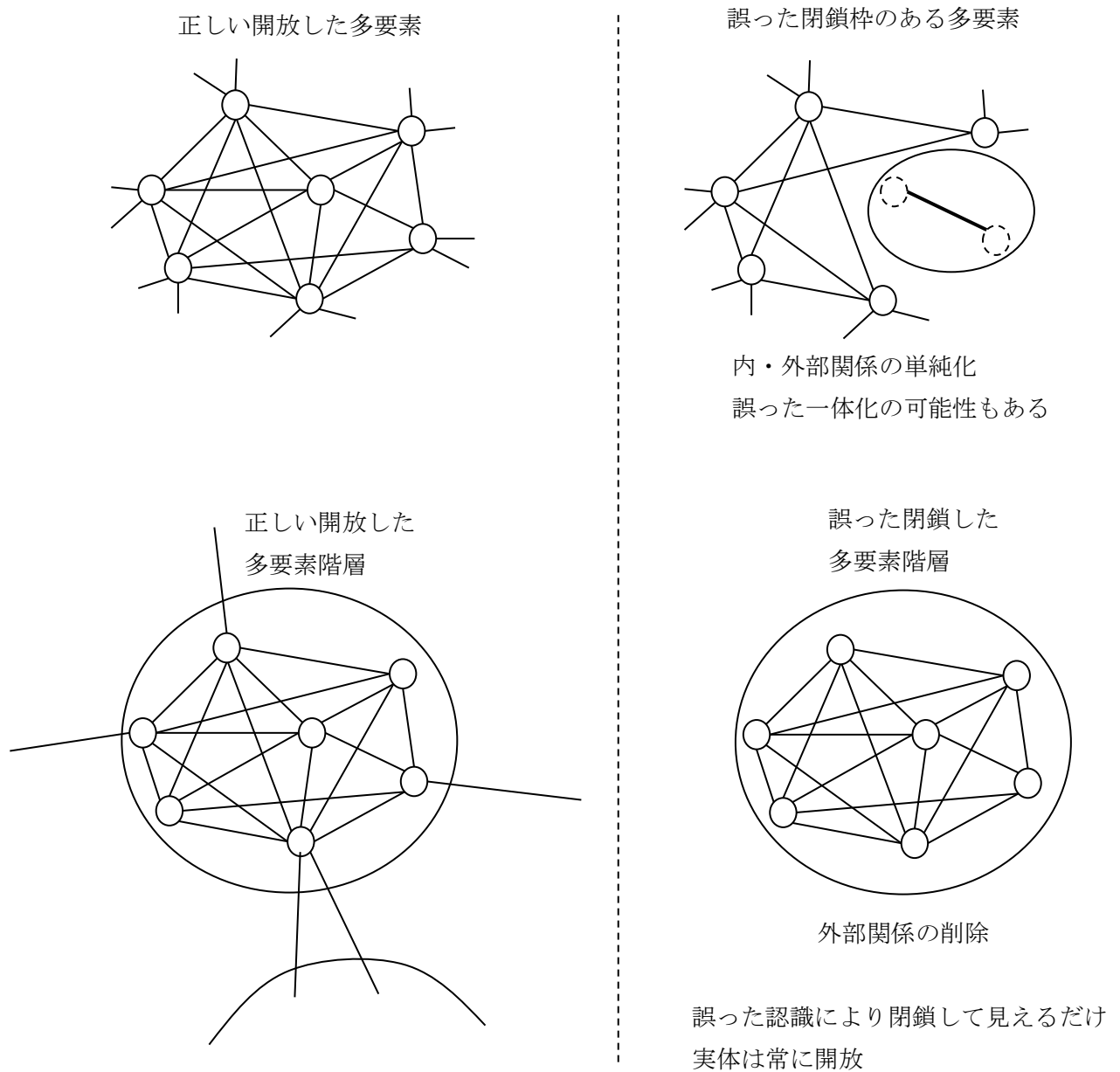


図 2-44 多要素の閉鎖枠

2.6.5. 多要素と時間と人間・現実

多要素は空間上の特性であり、時間的には同一構造で継続する。空間上の多要素を時間軸で見ると、要素と関係は時間的に変化する。特定の時間だけを抽出すると、時間ごとの要素がそれぞれ関係しているとも言える。時間の経過とともに要素が生成・消去する場合もある。

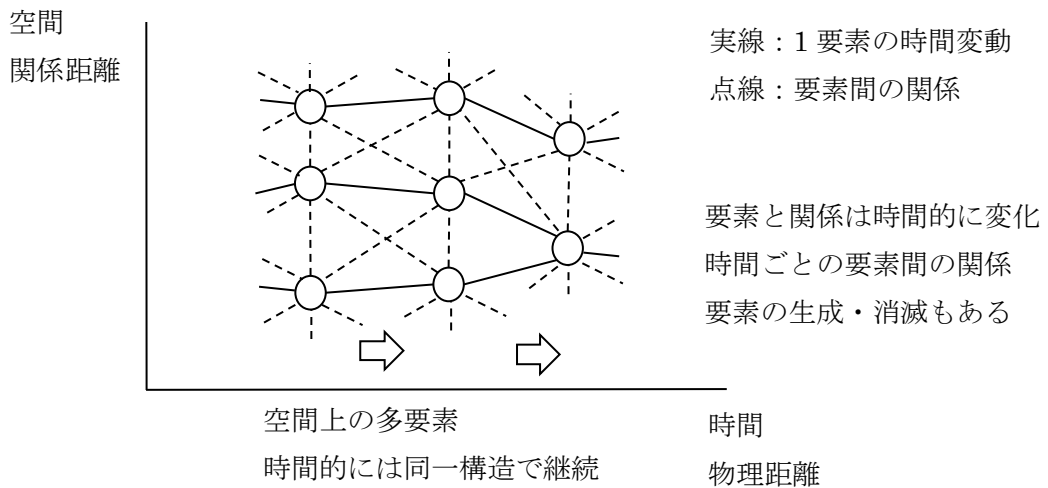


図 2-45 多要素と時空間

人間を多要素として見た場合、時間的に見れば同一構造で継続している。人間・現実とは空間の区分となる。時間は人間・現実の区分ごとに人間的だったり現実的だったりする。現実的で物理的な時間は明確であり、人間的な時間は曖昧である。現実的で明確な時間を基準とすべきである。

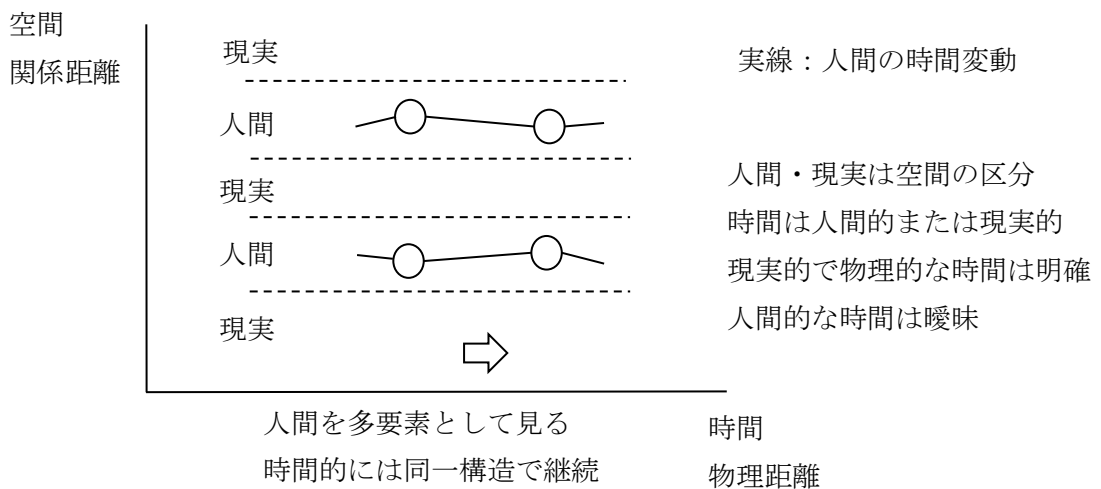


図 2-46 人間・現実と時空間

2.7. 規則化

2.7.1. 規則のスケール

不規則に見えても、スケールを変更する事で規則的になる場合がある。変数時空において、変数群と関係をミクロ的に見れば常に規則的である。変数群が複数になると不規則化するが、別の規則を使ってマクロを高正確化する事は可能である。

多要素もスケール変更により規則化できる。多要素の1要素だけを取り出せば常に単純で規則的である。多要素になれば複雑で不規則化するが、多要素階層でまとめる事ができれば、上位の1要素として規則化できる。

規則を理解する事により推測可能になるので、規則化は非常に重要である。規則化できる適切なスケールを探す必要がある。特定の不規則なスケールだけを見て理解不能と考えるのは誤りである。

規則には様々な種類があり、規則性を考える際はすべての規則を見る必要がある。特定の規則が成り立たない、と言う逆の規則もあり、完全な不規則は存在しない。多要素のため複雑になるスケールでも、複雑であるという規則は存在する。高正確な別スケールの規則と、低正確な逆の規則を組み合わせる事で、不規則なスケールでも推測が可能になる。

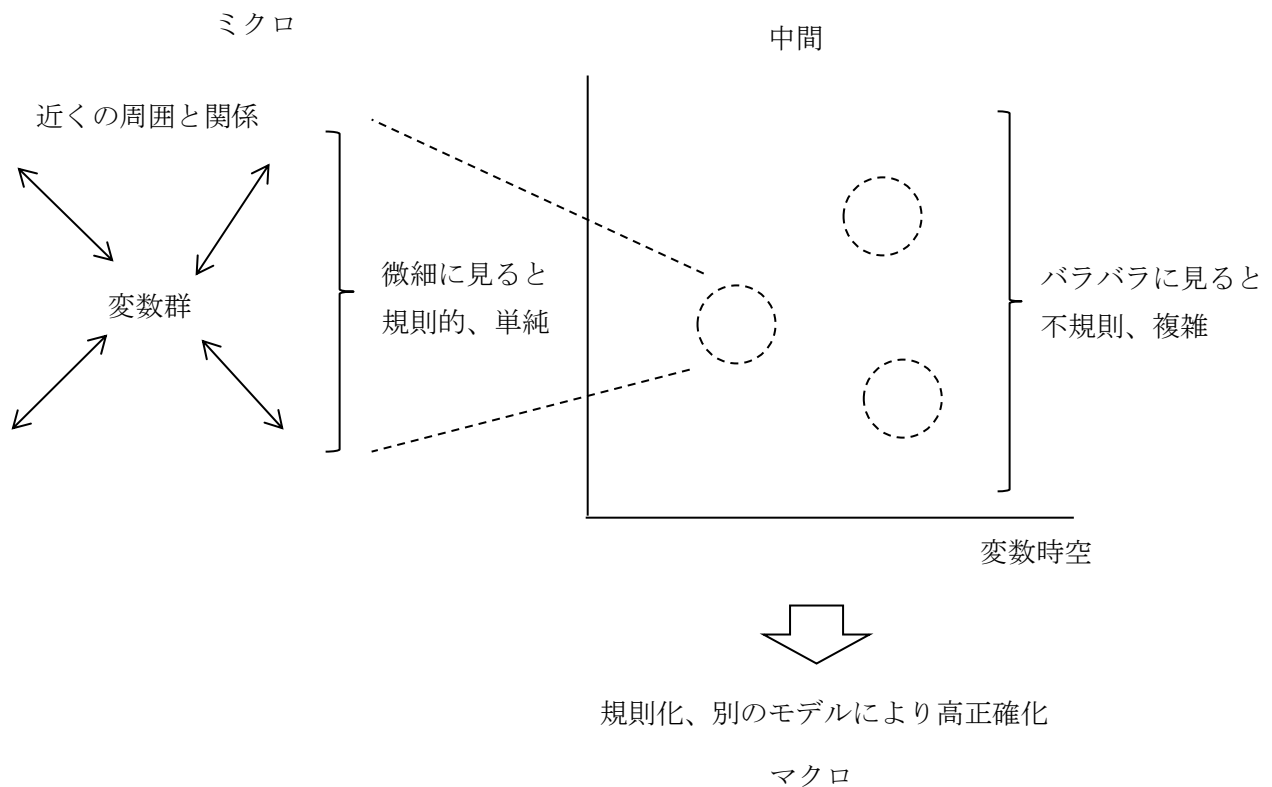


図 2-47 スケール変更による規則化

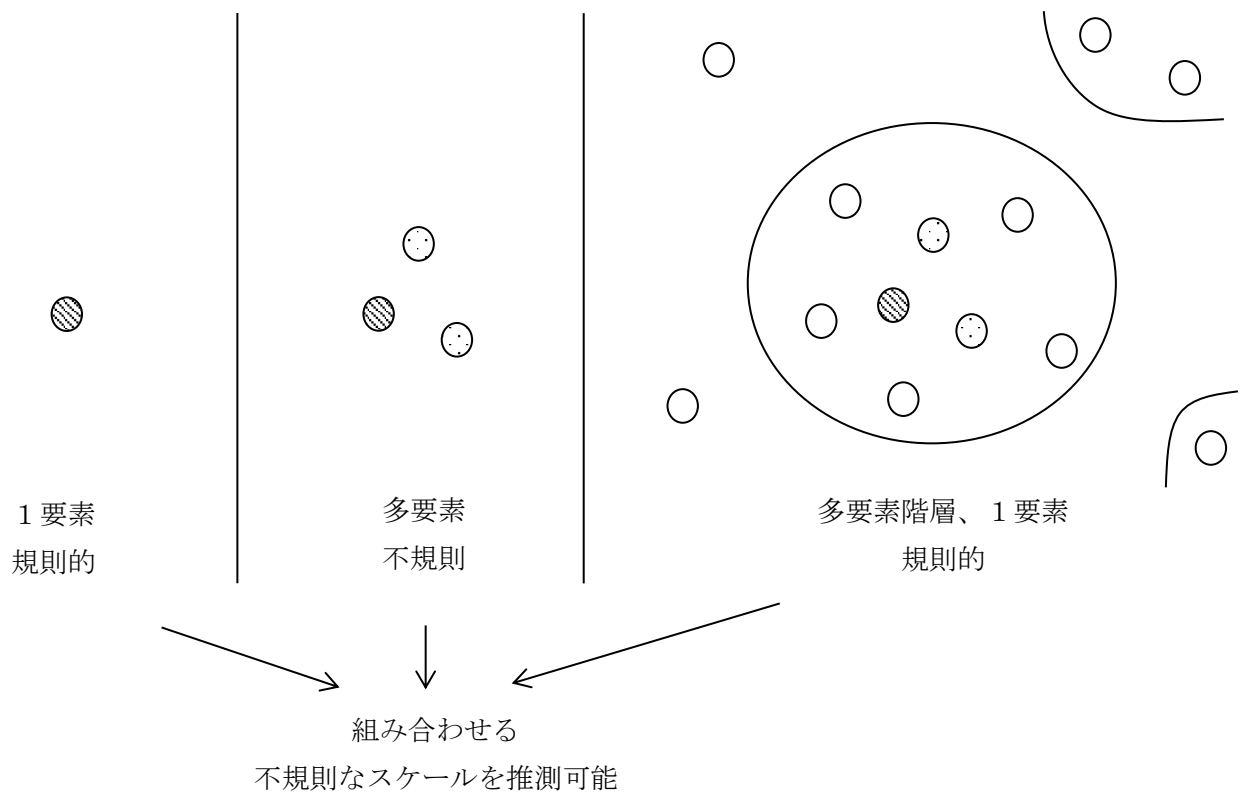


図 2-48 多要素階層のスケールと規則

2.7.2. 不規則の規則化

不規則な状態でも可能な限り規則化して理解しなければならない。規則は無数にあり、できるだけ高正確な規則を探す必要がある。無数の規則を組み合わせる事で、高正確化が可能になる。可能な限り認識を高正確にして、生満足を得る必要がある。

低正確な既知の規則しかない場合、最善なのは高正確な新しい規則を発見する事である。スケールの大小を変更する事で高正確な規則が使える場合もある。高正確な規則が当てはまらない場合にも、「規則が当てはまらない」という逆の規則なら使える。ただしこれは低正確が問題になる。

複雑な変数時空や多要素をすべて理解する事はできない。情報量を減らし特徴を抽出して認識する必要がある。適切な複数の変数を選択して、その規則性を発見すれば、高正確な推測を行う事が可能になる。特徴抽出による簡略化は、規則性の理解と同じである。論理構造が明確であれば、そこから何らかの特徴を抽出して情報量を減らす事ができる。多要素階層にまとめる事ができれば大幅に情報量を減らせる。乱流のカオスでも特徴領による解析は可能である。

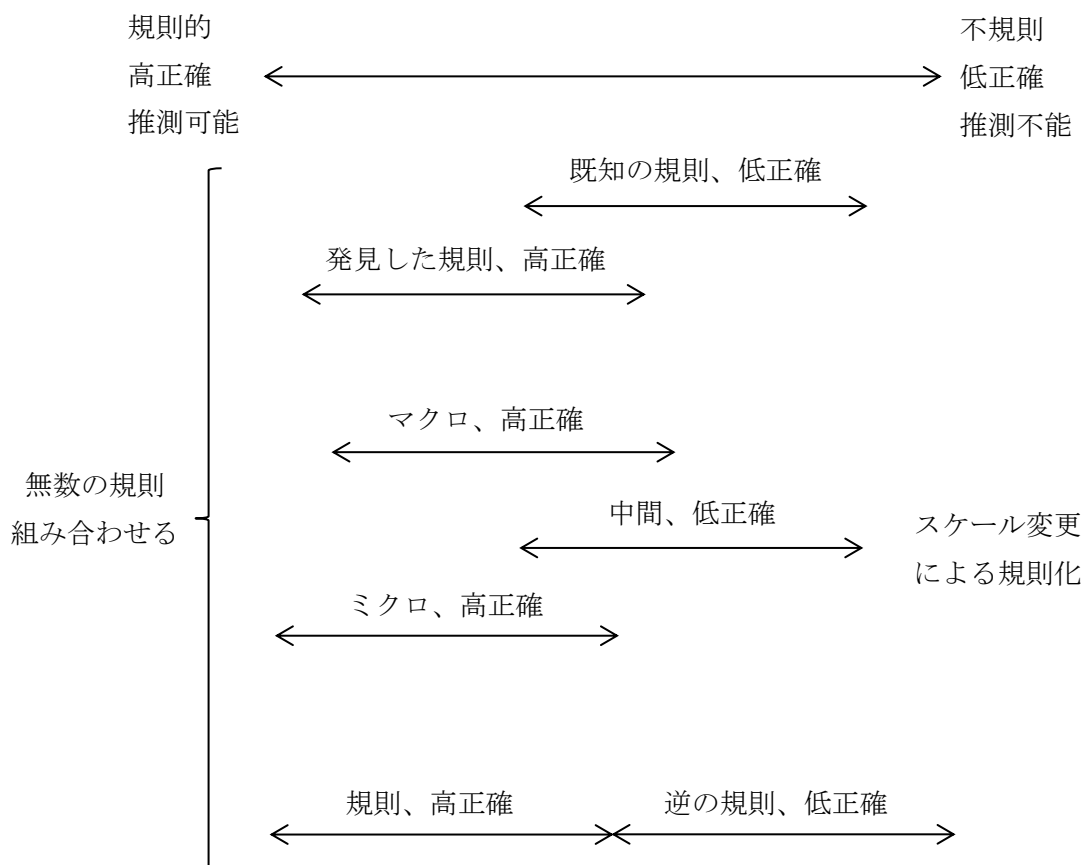


図 2-49 不規則の規則化

2.7.3. 規則発見と実験選択

規則を発見する方法について検討する。生現実の情報を実験や観察などで収集し、そこから推測により規則を発見する方法がある。推測を行うには、推測の元となる規則を知っておく必要がある。また情報収集も必要であり、効率的ではあるが汎用的にできる訳ではない。生現実の情報や元となる規則を集めて、可能な限り推測で規則を発見するべきである。

情報収集や推論ができない場合、複数の規則を生現実には当てはめてから実験する方法がある。最終的にその規則の正誤が分かるようにしておいて、複数の規則で実験する。正しいという結果が出れば、規則を発見したと言える。これを実験選択と呼ぶ。

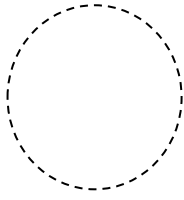
実験選択による規則発見は、効率は悪いが汎用的である。論理的な推論がほとんど不要で、粗い帰納であると言える。帰納でも推論により論理構造を作成した方が効率的である。個人が連続的に実験選択を行う場合は、試行錯誤とも呼べる。

実験選択は汎用的なので、様々な場面で利用される。自然科学や工学にも存在するし、企業の存亡なども実験選択の一種と言える。遺伝子の「正しい規則」を遺伝子が存続しうる状態と見なせば、生物の遺伝的多様性による自然選択 [27]も実験選択の一種と言える。これを遺伝実験選択と呼ぶ。

人間は二重人間や知性の存在により推論が困難である。人間に対しても実験選択なら規則の発見が可能である。効率が悪くても、ある程度は実験選択を利用するしかない。

生現実の情報

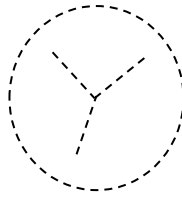
実験や観察で情報収集



推測



規則発見



推測による規則発見

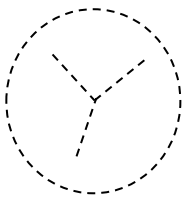
効率的、汎用的ではない

推測の元となる規則が必要

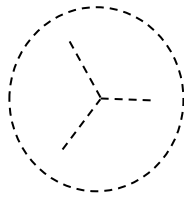
できるだけこちらにすべき

情報収集や推測ができない

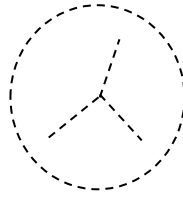
複数の規則を当てはめてから実験



正しい
規則発見



誤り



誤り

実験選択による規則発見

非効率的、汎用的、粗い帰納

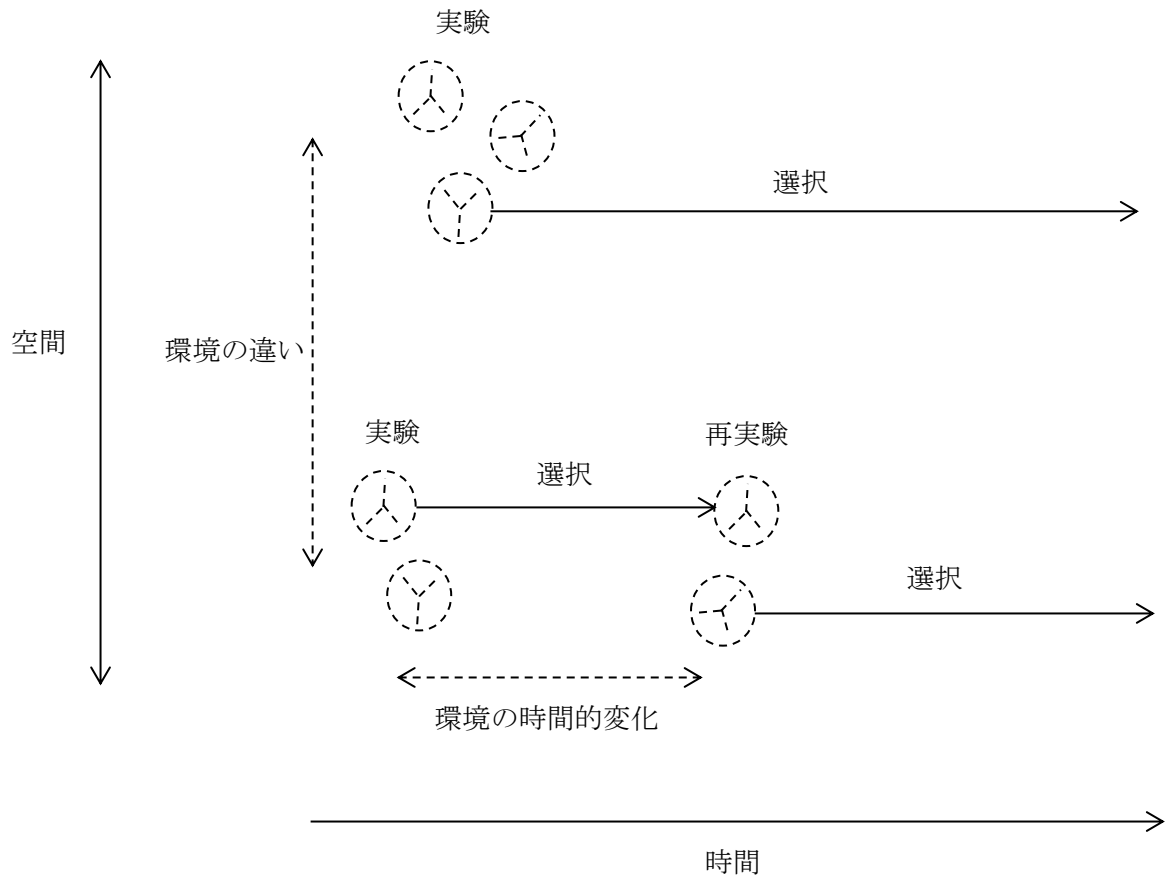
自然科学、工学、企業など

遺伝実験選択、遺伝的多様性と自然選択

人間は推論困難、ある程度は実験選択をするしかない

図 2-50 規則発見と実験選択

時空間と実験選択について検討する。時空間で実験環境が異なれば、実験結果も変わる可能性がある。空間において環境が違う場合や、環境が時間的に変化する場合がある。推論による規則発見なら、環境の違いを推論に入れて対応できるが、実験選択では環境の違いに対応できない。別環境では実験選択をやり直す必要があり、非効率的である。環境も含めた推論による規則発見が望ましい。



別環境では実験選択をやり直す必要、非効率的
 環境も含めた推論による規則発見が望ましい

図 2-51 時空間と環境と実験選択

2.8. 近辺・遠方

2.8.1. 近辺・遠方と正しさ・開放

生現実をすべて理解するのは不可能なので、重要な部分を切出す必要がある。この部分を明確に理解する事で、全体として曖昧な生現実でも適切な対応が可能になる。解析の中心となる対象からの距離が短い部分を近辺、大きい部分を遠方と呼ぶ。近辺は重要で正しく理解する必要があるが、遠方は重要でない。近辺・遠方も開放などと同じく、物理的手法を当解析に応用するためのモデルである。空間は関係距離なので、物理的距離が遠くても関係が強ければ近辺となり重要である。

生現実と認識の誤差分布を、近辺と遠方でグラフ化する。認識誤差は近辺が最も小さく、遠方に行くほど知覚が難しくなる。近辺の理解は明確であり、遠方の理解は曖昧である。近辺は明確・重要であり、遠方は曖昧・非重要である。重要なのは認識と生現実の差の少なさであり、これが正しさになる。空間だけでなく時間に関しても同様である。

生現実を明確に理解し、誤差を小さくする必要がある。曖昧な認識のままでは役に立たない。近辺ならば生現実の理解も容易だが、遠方は容易でない。それでも可能な限り誤差を小さくする必要がある。

時空間は無限であり、すべては理解できない。重要なのは自己に直接影響のある近辺である。近辺の明確な理解が必要である。近辺の正しさが確保できれば局所的に正しい行動を行う事ができる。遠方を多少理解しても近辺の正しさがなければ、正しい行動が行えず意味がない。遠方の正しさは近辺の正しさの延長線上になければならない。

変数時空として見ると、生現実は一意連続であり、近接する変数はすべて相互に関連している。近辺を理解する際の境界を考えると、近接するすべての境界内外も開放的に関係している。開放は生現実の持つ基本的な規則である。

近辺の理解が必須であるため、それに直結する開放の理解も必須となる。内外の相互影響を正しく理解する必要がある。「近辺の正しさと開放」の確保が生現実を正しく認識する必要条件となる。遠方は情報入手が困難で情報量も多く容易に理解できない。近辺の理解には開放境界の理解が重要になる。近辺と開放境界を明確に理解する事で、遠方の曖昧さに対処する事が可能になる。生現実を明確に理解しなければならない。近辺の正しさと開放は時空間の両方で必要である。

近辺の正しさはある程度の正しさを確保できるが、遠方は複雑すぎて難しい。近辺の正しさと開放を元に可能な所まで理解するしかない。理解を広げる時も正しさが必要であり、簡単に広げる事はできない。未知なものも近辺よりも遠方に存在する。関係の強い近辺を優先的に理解すべきである。

明確な近辺認識の外側を開放する事で、他者の明確な近辺認識と連携する事ができる。曖昧な遠方は他者の明確な認識を受け入れる事で対処できる。

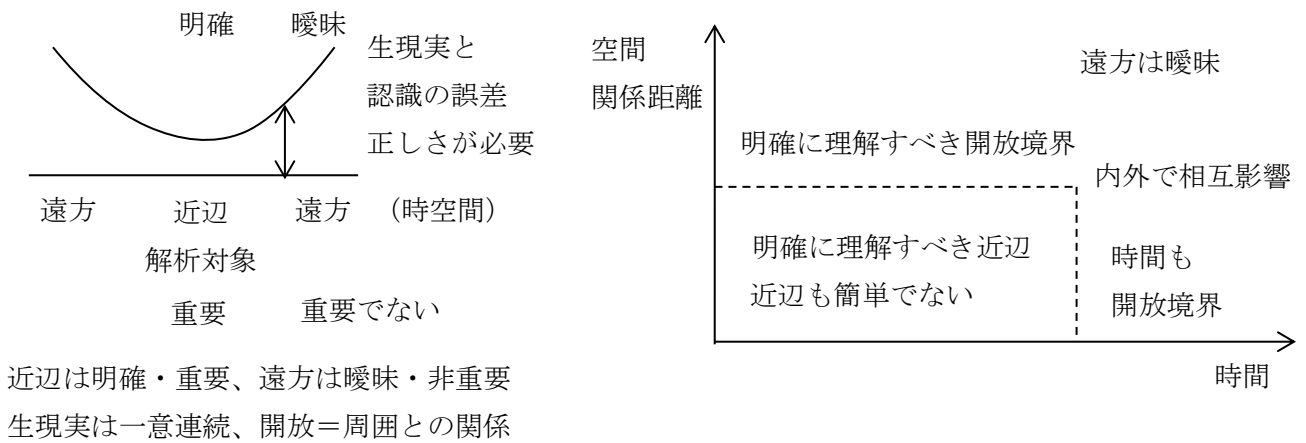
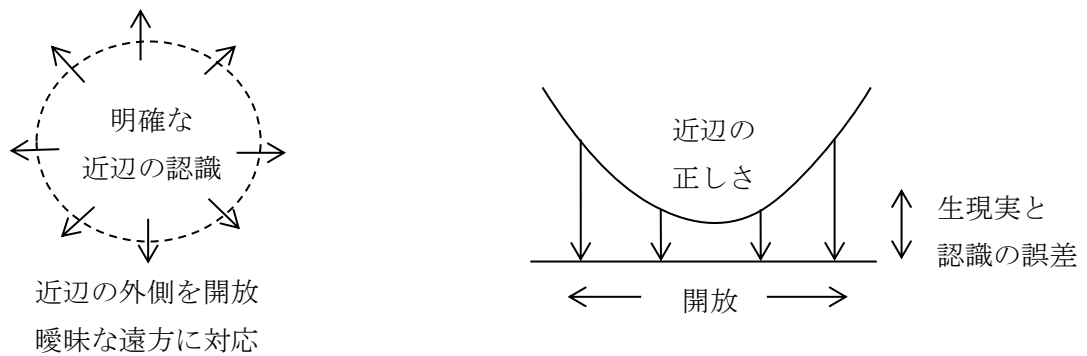


図 2-52 近辺・遠方と正しさ・開放



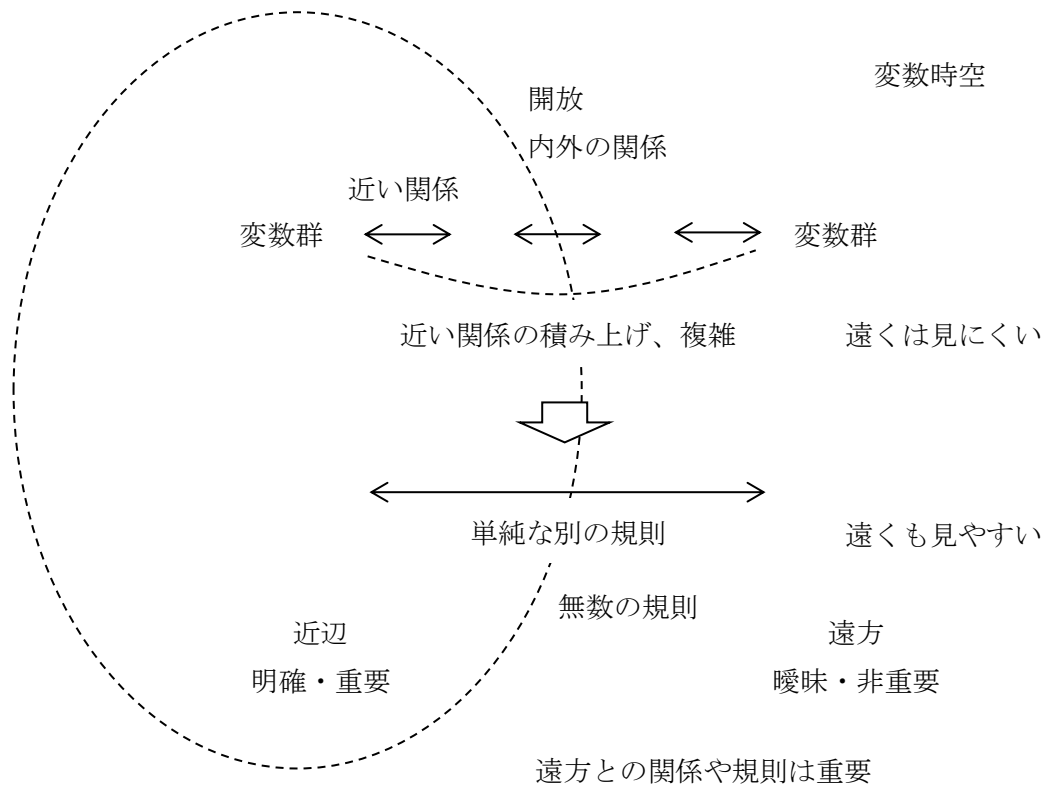
近辺の正しさから遠方へ開放
一意連続性によりつながる

図 2-53 明瞭・曖昧と近辺・遠方

誤った閉鎖枠により規則間の相互影響がないと認識すると、関係距離が遠く見える。これは閉鎖枠による誤った関係距離の理解である。正しく開放して見れば、閉鎖時よりも近くに見える。

閉鎖認識の結果として行動も遠くなる。開放して見れば容易にできる行動も、閉鎖枠の外にあると行動が難しくなる。結果として正しく開放していれば世界全体は近いのに、誤って閉鎖すると世界全体が遠くなる。

近辺・遠方の認識においては深さ・広さという言い方が良く用いられる。しかしこれは基準が曖昧であり、認識基準になる可能性がある。認識でなく生現実を正誤の基準としなければならない。認識基準であれば、深く広い認識であってもすべて誤りである。人間的な曖昧さや閉鎖分断により情報量が増え、深さ・広さに見える可能性がある。情報量が多くても生現実基準でなければ誤りである。



別の規則でも近辺から遠方への開放は同じ

図 2-56 近辺・遠方と開放関係

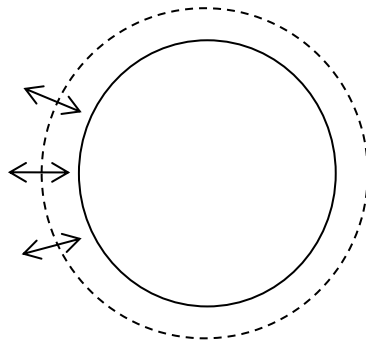
近辺から遠方までの一部分に対して、境界付近でしか関係を見なければ実質的には閉鎖認識である。これは表面だけを見ている、と言う事もできる。表面的理解は閉鎖でしかなく、開放が必要である。見る角度を変えても表面だけでは意味がない。内部までの開放的な関係を理解しなければならない。全体を開放した規則の理解が必要である。

時空は別次元なので、時空の一方だけに閉鎖枠があり他方が開放される可能性もある。ただし閉鎖枠と開放端の交点では、閉鎖した状態と開放した状態が混在して不安定になる。時空間も相互に関連しているので、時空の一方に開放した関係が見えれば、他方でも見える筈である。よって長期的には時空の両方が閉鎖・開放のどちらかに収束していく。

変数時空

近辺

見る角度を
変えても同じ



遠方

表面は境界付近でしか関係がない
表面は閉鎖、開放が正しい
開放した規則の理解が必要

図 2-57 表面と閉鎖

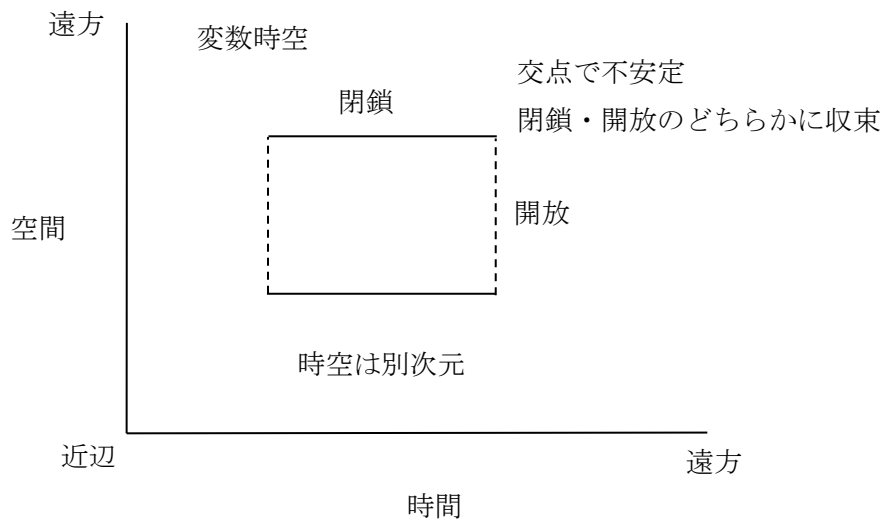


図 2-58 閉鎖枠と時空

2.9. 人間と開放

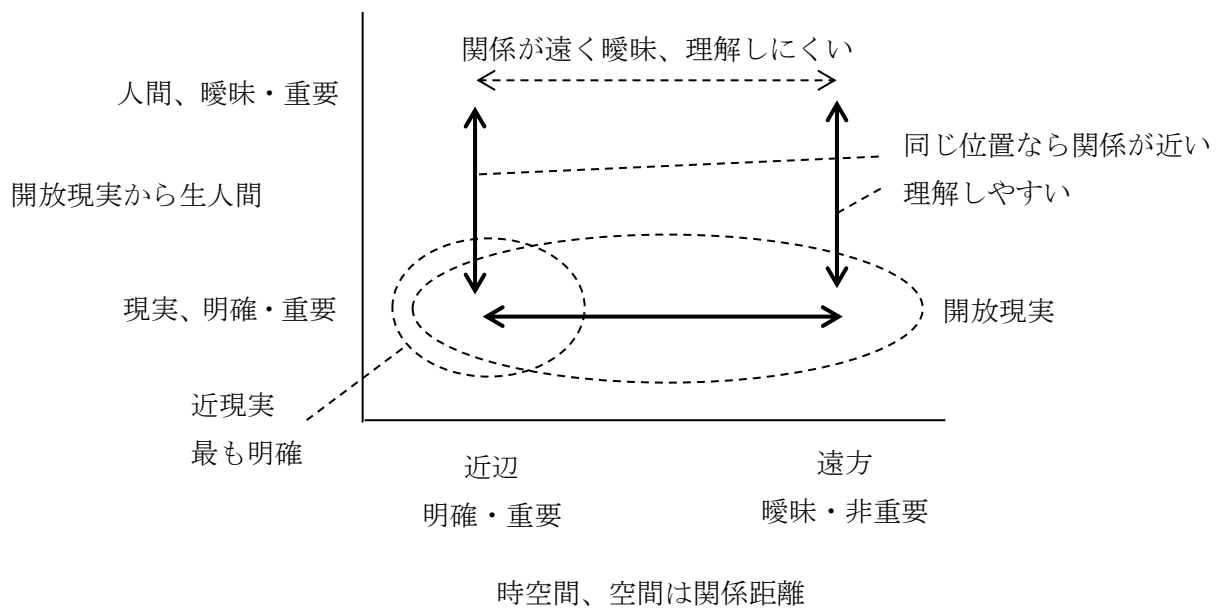
2.9.1. 人間・現実と近辺・遠方

近辺が明確で遠方が曖昧、という構造は、現実が明確で人間が曖昧なのと同じである。ただし他の構造は大きく異なる。人間と現実はどちらも対象として重要だが、遠方は対象として重要でない。遠方は重要性が低く、理解をする必要性も低い。遠方は理解が困難であり、現実でも曖昧になる。

現実を理解の手段として重要である。空間は関係距離であり、近辺と遠方では時空間とも関係が小さくなる。時空間の位置が同じならば関係が近く理解しやすい。近辺と遠方の人間関係は、関係が遠く曖昧なので理解しにくい。明確な開放現実であれば近辺・遠方の関係も理解できる。

近辺の現実が最も明確で理解しやすく、その理解が重要である。近辺の現実を近現実と名付ける。近現実を理解の始点とし、近現実から生人間と遠方に開放した理解を持つのが正しい。これを近現実開放と呼ぶ。開放現実から生人間を理解する必要がある。遠方は重要でなく、近辺と遠方の繋がりだけを理解すればよい。

誤った認識を持つ場合も、近現実の理解が重要である。誤った認識においても近現実是最も正しくなる。これを修正した後に人間や遠方に展開する事で、全体的な認識を修正できる。



現実を理解の手段として重要、開放現実により近辺・遠方の関係理解
 近現実を始点として開放理解、近現実開放
 遠方は重要でない、近辺への影響のみ理解

図 2-59 人間・現実と近辺・遠方

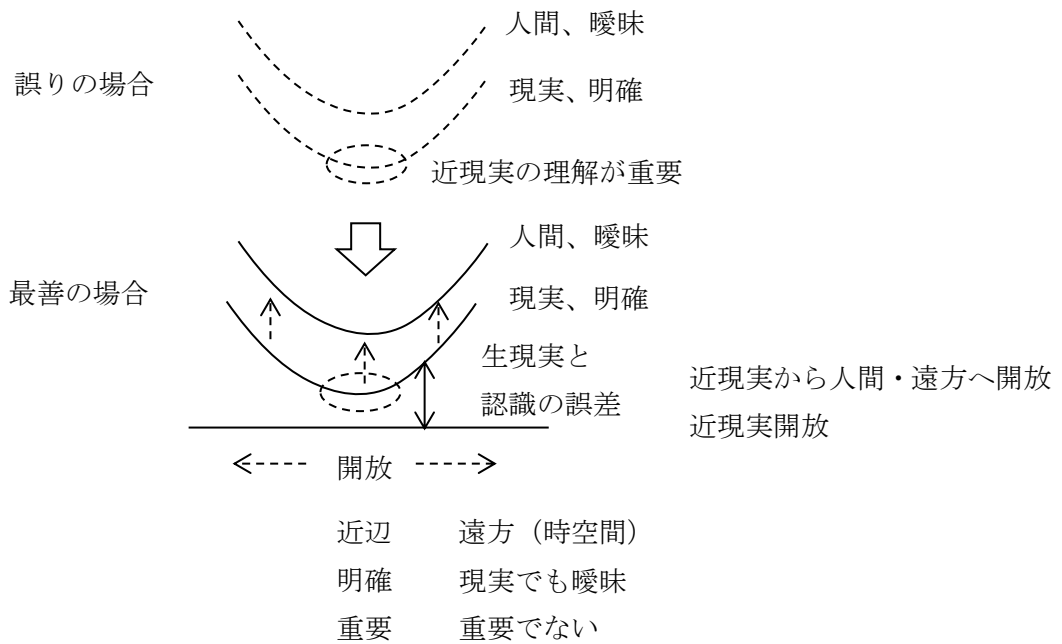


図 2-60 誤った認識の修正

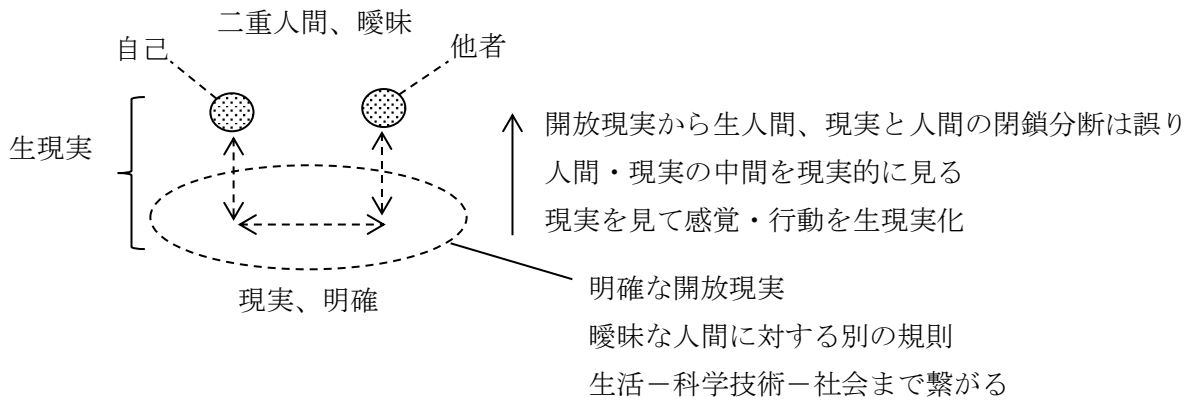
2.9.2. 自己・他者と開放・閉鎖

二重人間のため、自己や他者に対する認識は曖昧になり扱いにくい。現実なら明確で扱いが容易である。開放現実から生人間を見るのが正しく、現実と人間の閉鎖分断は誤りである。明確な開放現実を理解すれば、生活や科学技術や社会までを繋げて理解する事ができる。明確な開放現実は、曖昧な人間に対する別の規則になる。

人間に関する分析でも、できるだけ生現実化すべきである。これは当解析自体に関しても同様である。

人間は二重人間のため理解しにくい。哲学、精神分析、宗教など、人間に関する多くの分野で曖昧な言葉が使われている。曖昧なら役に立たず、明確な認識に修正する必要がある。開放現実から生人間を見る事で明確化が可能である。

人間・現実の中間を現実的に見る必要がある。現実から感覚・行動を見て明確化する必要がある。現実を見て感覚・行動を生現実化するのが正しい。人間の現実的側面である、生物・物理・身体などの理解が重要である。

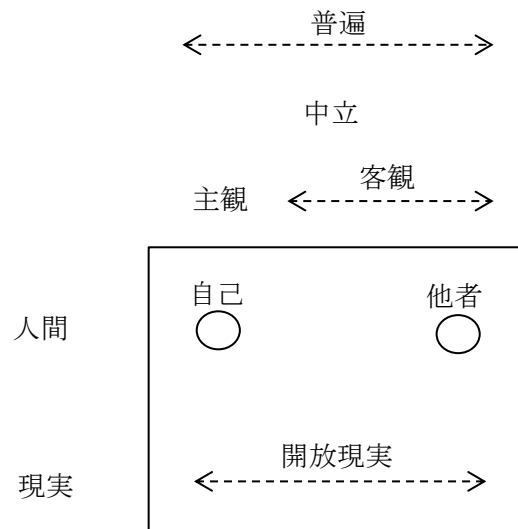


人間の分析をできるだけ生現実化、当解析でも同様

図 2-61 自己・他者と開放現実

主観・客観・中立・普遍という概念は、自己・他者における位置・範囲を示すものである。これらは人間・現実とは次元が違う。「主観的」だと人間的な場合が多いが、常に人間的である訳ではない。客観・中立・普遍は人間的な場合もあれば、現実的な場合もある。客観・中立・普遍でも人間的なら誤りである。主観・客観などが不整合なら閉鎖分断で誤りである。開放現実からみれば自己・他者まで整合して見える。

「自己の外」と「人間の外」の違いにも注意が必要である。「自己の外」は客観であり、「人間の外」は現実である。「人間の外」から見るのが正しい。



主観・客観・中立・普遍は自己・他者における位置・範囲
 これらは人間・現実と次元が違う、人間的なら誤り
 主観・客観などが不整合なら閉鎖分断で誤り、開放現実なら整合
 「自己の外」は客観、「人間の外」は現実、「人間の外」から見る

図 2-62 主観・客観・中立・普遍と人間・現実

2.9.3. 自己・他者と曖昧な閉鎖

人間に基づく認識は全体的に曖昧になり、開放現実に基づく認識とは別の構造になる。自己・他者などを含めて全体的に曖昧になる。閉鎖枠は様々な形式で存在し得る。

人間に基づく認識、全体的に曖昧
開放現実に基づく認識とは別構造

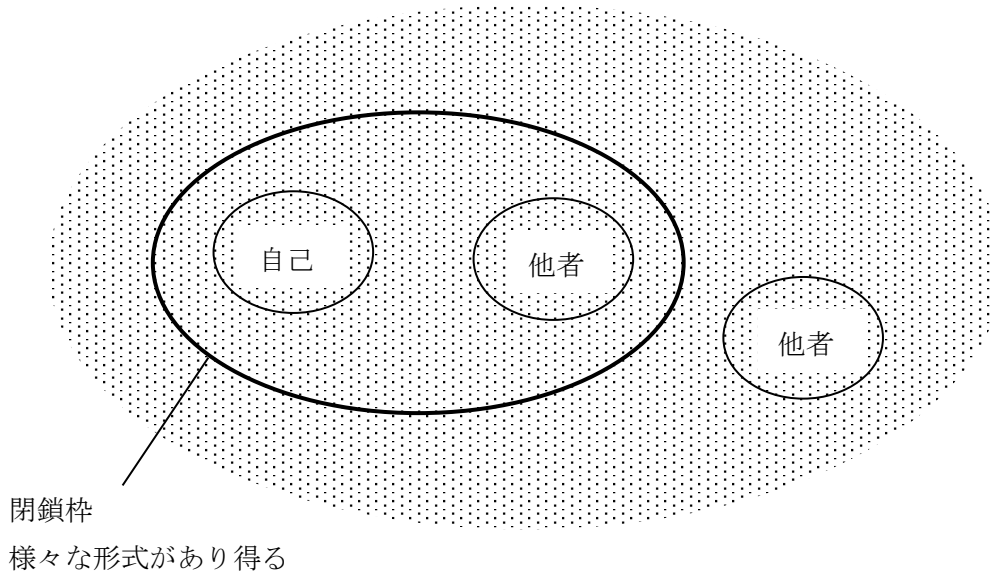


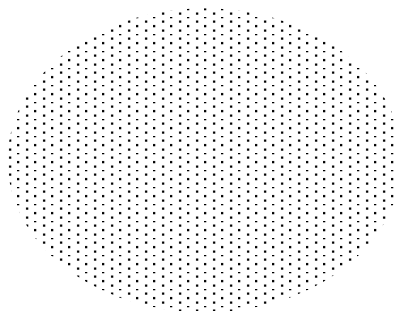
図 2-63 曖昧な人間に基づく認識

曖昧で、誤って閉鎖した認識は役に立たない。二重人間だけを見ていると、曖昧な認識になる可能性がある。自己と他者の認識が曖昧かつバラバラで、相互影響が見えず不整合になる。相互の距離も遠くなる。

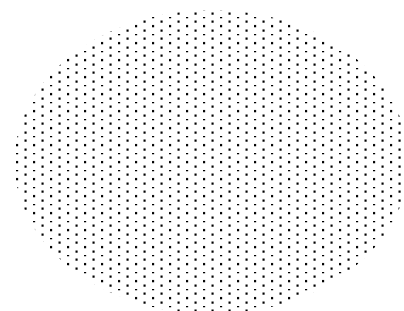
明確かつ開放した認識なら、他者認識との相互影響も可能である。開放現実を見る事で明確な理解が可能になる。自己と他者の認識の「重なり」が明確に見えるため、開放的な相互影響も明確に見え整合する。相互の距離も近くなる。

愚かで明確な認識を作れなければ、自分の認識より他者の明確な認識を受け入れた方がいい。ペットや子供でも正しくしつけられれば人間社会に適応できる。開放的に他者の明確な認識を受け入れる必要があるのは、程度の差こそあれ誰でも同じである。

曖昧で誤って閉鎖した認識
役に立たない
二重人間のため曖昧な可能性
距離も遠くなる



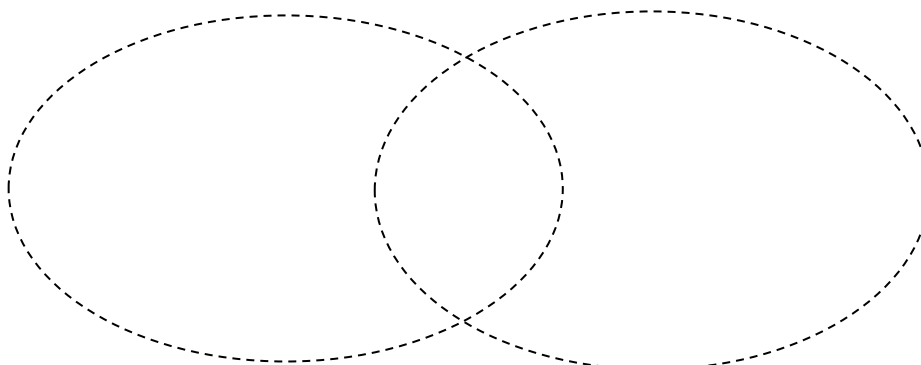
自己の認識、曖昧



他者の認識、曖昧

閉鎖、相互影響が見えない、不整合

明確かつ開放した認識
他者認識との連携も可能
開放現実なら明確
距離も近くなる



自己の認識、明確

他者の認識、明確

開放、相互影響が見える、整合
認識の「重なり」が明確

図 2-64 開放と自己・他者の認識

2.9.4. 人間・現実の中間

開放現実から生人間を理解する事で、人間の明確な理解が可能になる。人間の生現実化が必要である。開放現実から生人間を見るためには、人間・現実の中間が重要である。人間・現実の中間を生現実化する事で、人間を生現実化する事ができる。

関係距離で見た人間と現実の中間には、感覚・行動がある。人間の一部である感覚・行動と、現実の一部である感覚・行動の対象は、関係距離で見ると重なっている。感覚・行動の対象を元に、感覚・行動を生現実化する事ができる。感覚・行動と現実が重なっているため、感覚・行動の生現実化は感情などと比べて比較的容易である。

感覚・行動と重なる現実の理解だけでは、人間の生現実化は難しい。感覚・行動の外にある現実まで理解する必要がある。感覚・行動の内側だけを見るのは閉鎖で誤りである。近辺であってもすべてが感覚・行動の範囲内ではない。近現実でも感覚・行動の外まで理解する必要がある。感覚・行動より現実的理解が重要である。感覚的でなく、感覚を現実に合わせてべきである。

特性として見た人間・現実の中間には人間の現実的側面がある。これには生物・物理・身体などが相当する。

生物・物理などの特性を見れば、人間を明確に理解できる。これには睡眠などの生物的特性や、時間などの物理量が挙げられる。仕事による満足が良くわからなくても、睡眠不足や長い勤務時間は明確に分かる。これらは人間を外部から見た生息状況である。

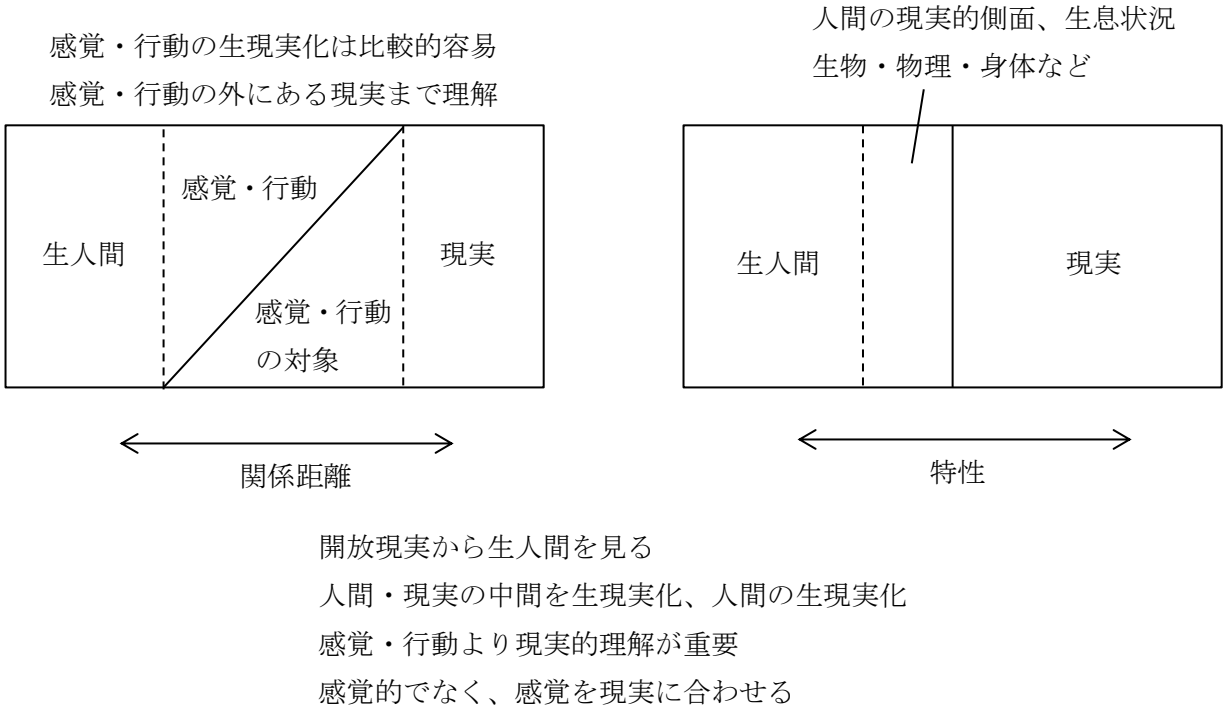


図 2-65 人間・現実の中間と開放

人間の本体に対して、感覚・行動は広い。感覚・行動は人間・現実の中間なので、二重人間による曖昧さは小さくなる。明確な開放現実には人間を囲っており、中間的な感覚・行動を経由する事で人間全体を生現実化できる。人間の外から内へ理解を行う必要がある。感覚・行動の外を見て、そこから内へと理解すべきである。感情なども感覚・行動と連動しており、感覚・行動を生現実化すればどんな人間的な事象でも生現実化できる。

感覚・行動は広いので、この部分を現実的にできれば広範囲が明確になる。逆に感覚・行動が人間的なら広範囲が曖昧になる。

生物や動物は開放現実の一部であり、二重人間のような曖昧さが存在しない。生物や動物から人間を類推する事で、人間を明確に理解できるようになる。生物としての人間や生息状況も、人間・現実の中間にある。人間は普通の動物と異なり知性が強い事に注意しなければならない。動物的と言っても非知性的になるのは誤りである。人間が知的生物である事を正しく理解する必要がある。

人間は自律的に行動しており、機械や家畜とは異なる。この点は野生動物に近い。知的で自律的な生物としての人間を理解する必要がある。

人間・現実の中間と共に無認識感情も重要である。一步引いて感情を見れば開放的に理解できる。

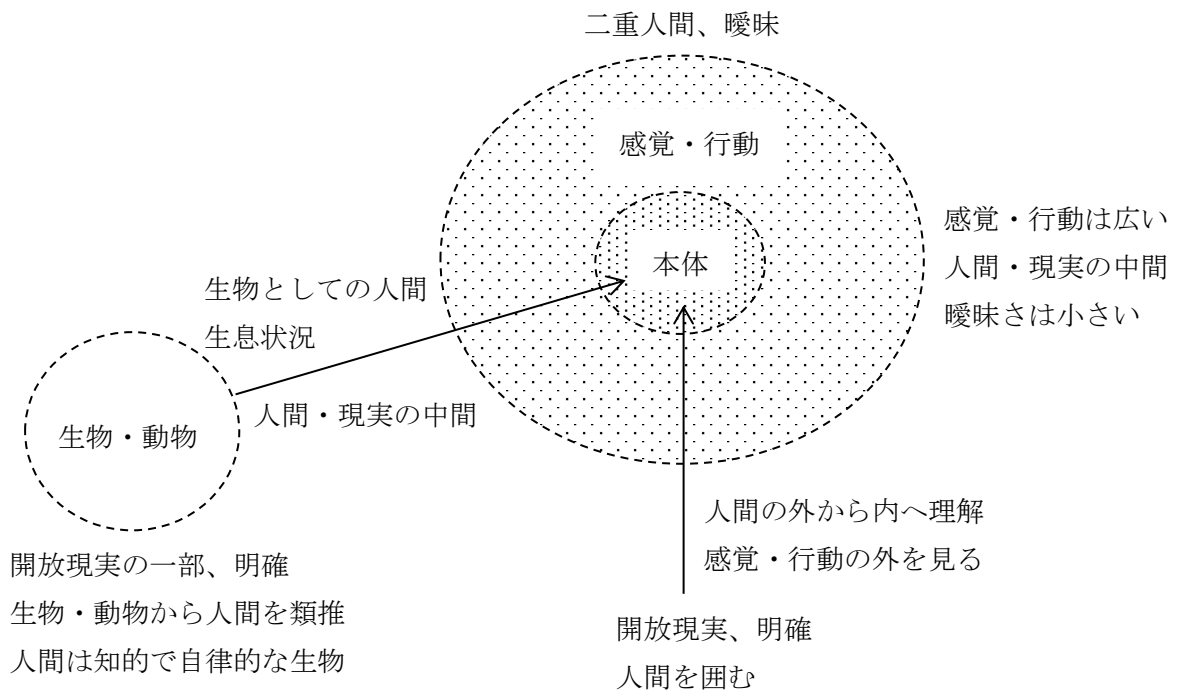


図 2-66 人間・現実の中間からの理解

2.10. 局所・広域と実区分

2.10.1. 局所・広域とマイクロ・マクロ

近辺から遠方までを認識する場合、近辺は明確だが遠方は曖昧である。近辺付近を局所、近辺から遠方までを広域と定義する。局所は細かいマイクロな認識を使い、広域は粗いマクロな認識を使う。マイクロとマクロでスケールごとの規則を使用する。規則が使用できる適切なスケールを選択し、スケールごとの規則を開放的に組み合わせる必要がある。近辺・遠方も開放などと同じく、物理的手法を当解析に応用するためのモデルである。

局所・広域は距離に基づく範囲であり、距離との違いを明確に理解する必要がある。近辺・遠方は距離である。重要なのは近辺であり、遠方は重要でない。局所・広域はどちらも近辺を含む範囲なので重要である。広域が近辺を含み重要である事に注意する必要がある。遠方で重要なのは近辺に影響する部分だけであり、遠方は広域でのみ重要とも言える。

マイクロな理解では広域は複雑すぎて追い切れない。規則は無数にあり、マクロでも高正確な規則の発見が重要である。明確な近辺の理解はその元になる。広域において細かい規則を追うのは無理であり、全体としての別の規則が必要になる。マクロはマイクロに対する別の規則になる。

生現実の整合・開放・一意連続を理解する必要がある。マイクロとマクロは局所において同じ生現実を示しており、認識上も全体として一意でなければならない。局所や広域の遠方も連続的に存在しており、遠方で認識が切れるのは理解の限界でしかない。

正確な局所と重なる部分により、広域の認識を正確化できる。広域でも近辺は明確で、遠方は曖昧になる。重要な近辺を理解するため、近辺と遠方を繋ぐ広域の理解が重要である。

局所の遠方側では外部からの影響があるので、広域の方が正しくなる可能性もある。マイクロ・局所認識とマクロ・広域認識の両方が重要である。生現実を正しく検証し、マイクロ・マクロを開放的に組み合わせる正しい認識を作らなければならない。

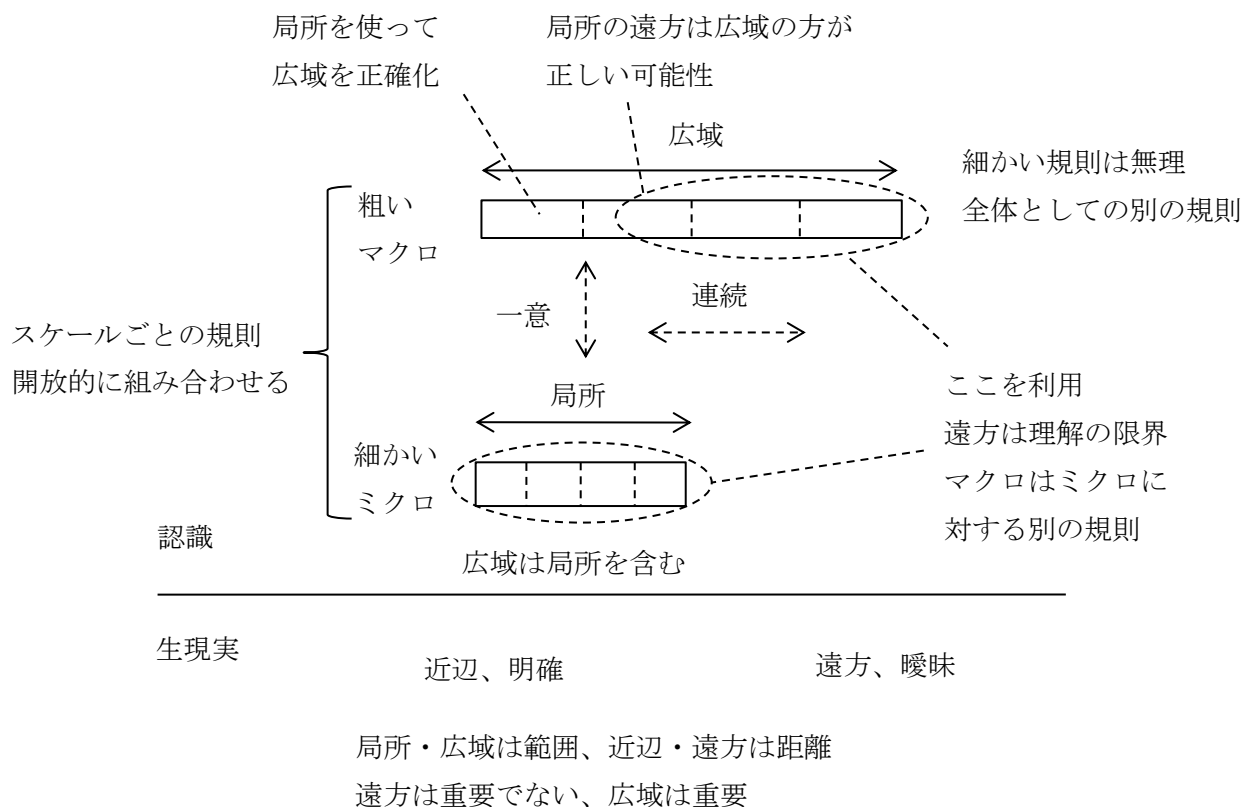


図 2-67 局所・広域とマイクロ・マクロ

2.10.2. 局所広域閉鎖

広域は近辺から遠方まで開放連続している。正しい広域は近辺を含み、局所と広域は近辺で重なっている。局所と広域の規則が誤って閉鎖分断すると、局所と広域は別のものになってしまう。広域は遠方の比率が大きいため、広域の近辺が抜ける。結果として誤った広域は遠方と同じものとして理解される。

本来局所を含むはずの広域は、局所の手前で分断され、局所と広域が誤って別々に見える。これを局所広域閉鎖と呼ぶ。局所広域閉鎖は、マイクロ・マクロの規則の閉鎖が時空間に反映されたものである。局所広域閉鎖により、距離（近辺・遠方）と範囲（局所・広域）が誤って混同される。閉鎖により近辺と遠方の距離が遠くなる。

広域は局所を含むので、「局所・広域」のように局所と広域が並立しているような見え方自体が誤りである。正しい広域は、近辺から遠方まで開放連続している。正しい広域を理解する必要がある。

近辺は重要で理解しやすい。近辺から遠方を見る事で、正しく開放した広域を理解できる。特に近現実には理解しやすく、ここから見るべきである。正確な近辺の認識が抜けたら、広域の認識を正確化できない。近辺・遠方を正しく理解し開放する必要がある。

正誤基準は認識外の生現実であり、局所・広域認識と生現実を比べる必要がある。閉鎖した局所認識と広域認識を比べても意味がない。局所広域閉鎖により別々になった局所・広域認識を比べるのは誤りである。認識が生現実に向かえば、正しく開放連続した局所・広域認識を得る事ができる。

空間を局所広域閉鎖で認識した場合、広域閉鎖がドーナツ化する。広域により閉鎖的に包囲された局所、というのは不自然である。

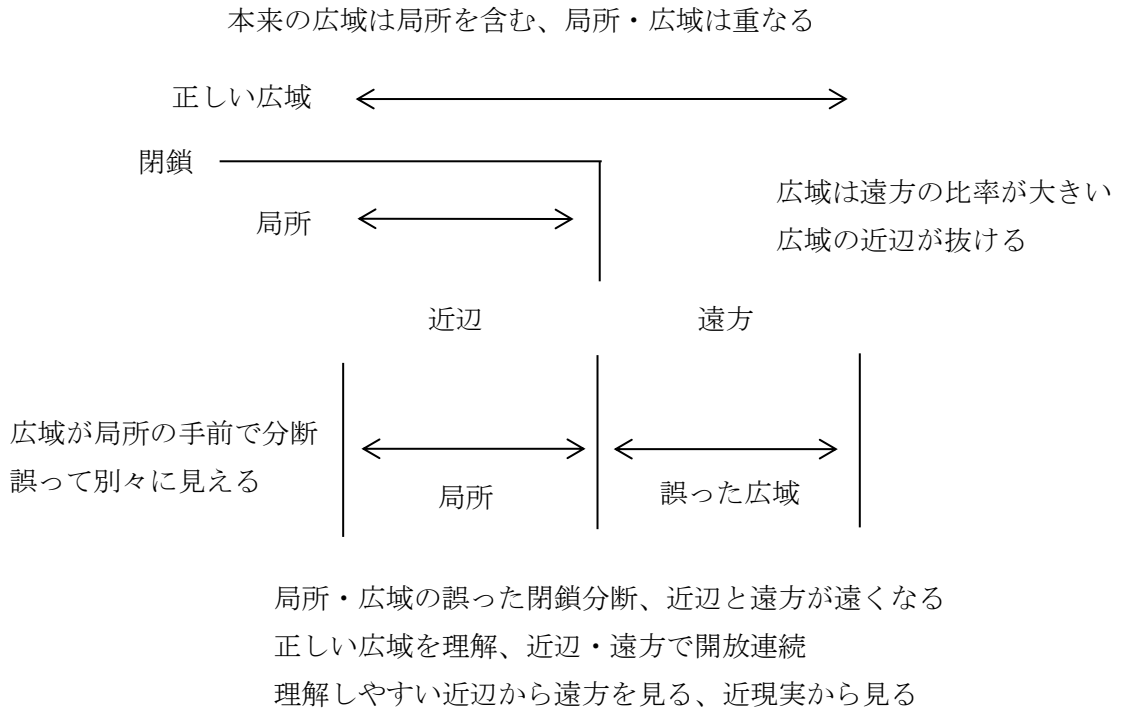


図 2-68 局所広域閉鎖

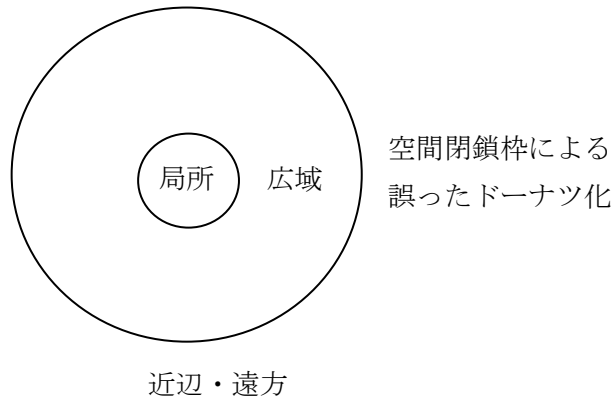


図 2-69 広域閉鎖のドーナツ化

2.10.3. 生現実根拠と実区分

生現実における実体的根拠を生現実根拠と呼ぶ。演繹は前提から厳密に結論を導き、前提にも結論にも生現実根拠を与える事ができる。帰納は生現実根拠を持つ結論から前提を類推しており、論理性も演繹より曖昧である。どちらの場合でも生現実根拠があれば、別モデルへ開放的に繋げる事が可能になる。生現実根拠はモデルの適切さを検証する上で重要である。

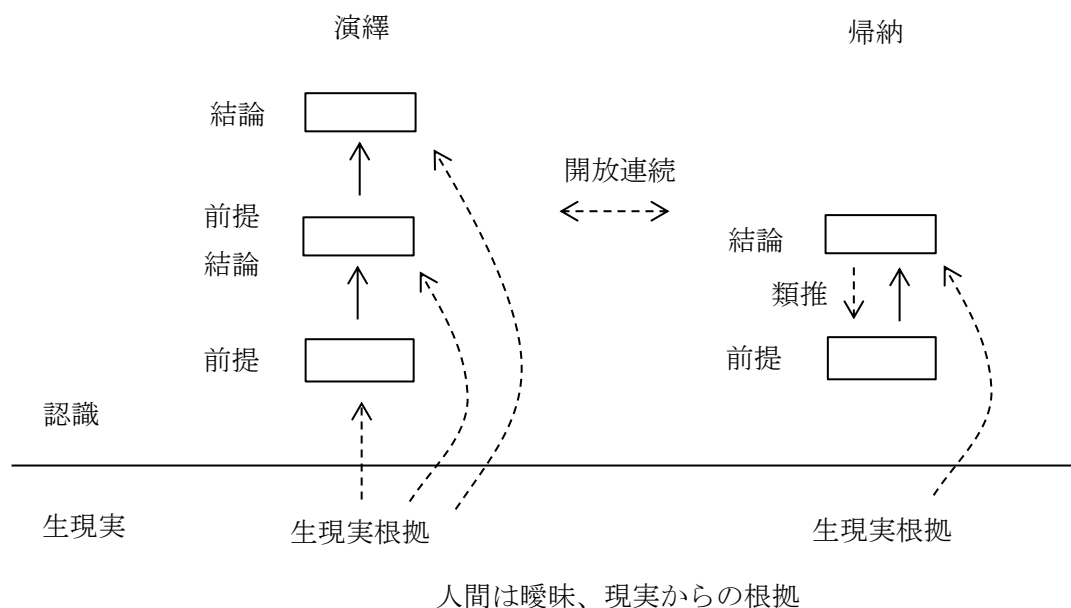
人間は二重人間で曖昧であり、現実 is 明確である。生現実根拠も現実から取るべきである。人間から生現実根拠を取ろうとしても、曖昧で役に立たない。

生現実根拠により別モデルに繋がるのは、ミクロ・マクロでも局所・広域でも同じである。演繹の場合は論理が厳密なので多段論理を作る事が可能だが、各段に生現実根拠がなければ正しさを失い、別モデルにも繋が

らなくなる。演繹でも生現実根拠が足りなければ役に立たない。

帰納において生現実根拠を増やさずに多段化すれば、曖昧で役に立たない論理になる。自然科学でも帰納は多用されているが、実験データによる数式やグラフのように明確な生現実根拠から厳密に用いられる。人文・社会科学においてもこのような帰納の用い方をすべきである。

演繹・帰納に関わらず、重要なのは生現実根拠と論理の厳密さである。生現実根拠を無視して論理の構造にこだわっても意味がない。収束しない論争になるのは生現実根拠がないからであり、無駄な論争をするよりも新たな生現実根拠を求めるべきである。



演繹でも帰納でも生現実根拠があれば開放的に繋がる
ミクロ・マクロでも局所・広域でも多段論理でも同様
繋がらずに無駄な論争になるより生現実根拠を増やすべき

図 2-70 演繹・帰納と生現実根拠

生現実上の区分を実区分と呼ぶ。認識上の区分ではない事に注意する必要がある。量的変数であれば位置、質的変数であれば種類などが実区分として扱える。生現実根拠と同じく、実区分も現実から見るべきである。人間から実区分を見ても曖昧で役に立たない。現実から見る事で、開放を正しく理解できる。

局所・広域を位置で見ると、局所と広域は同一位置で重なっており、広域の遠方は別位置にある。生現実開放連続しており、生現実根拠を元に局所・広域認識を作れば、同一位置でも別位置でも一貫した認識になる。生現実は一意であり、同一位置において正しい局所・広域認識は一意になる。

種類の場合も、位置と同じように扱う事ができる。位置でも種類でも重要な方を近辺と見なせば、距離が不明確でも近辺・遠方や局所・広域を定義できる。種類においても開放や生現実根拠が重要である。

実区分は生現実上の区分、認識上の区分ではない
 量的変数なら位置、質的変数なら種類

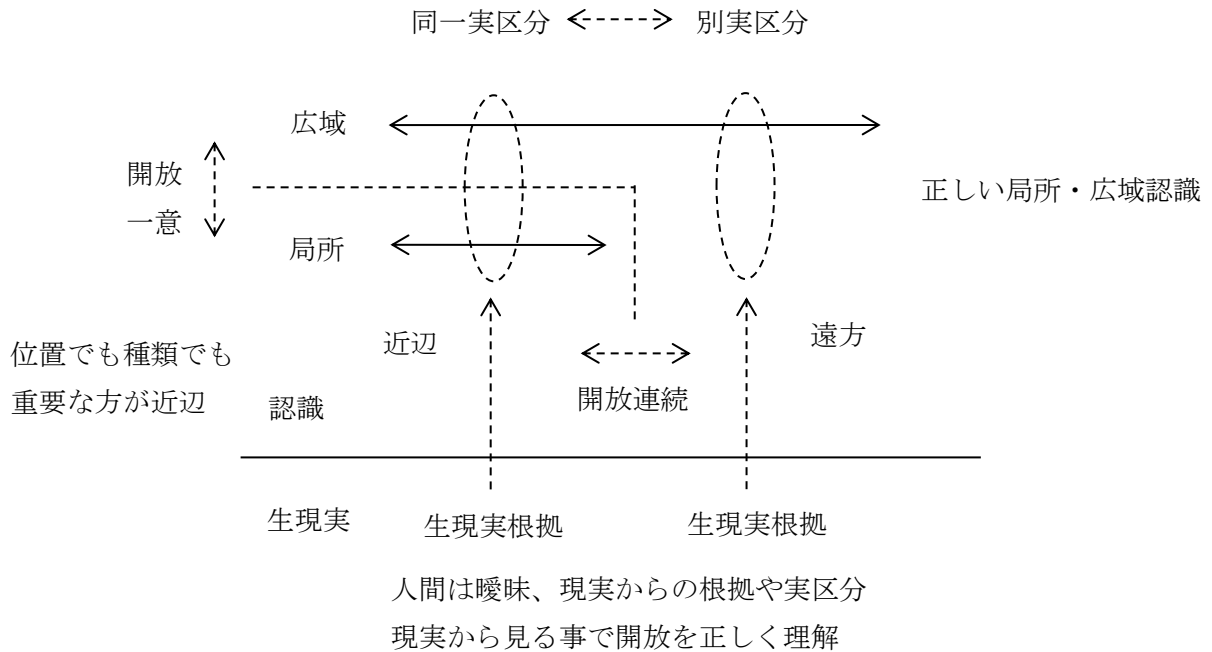
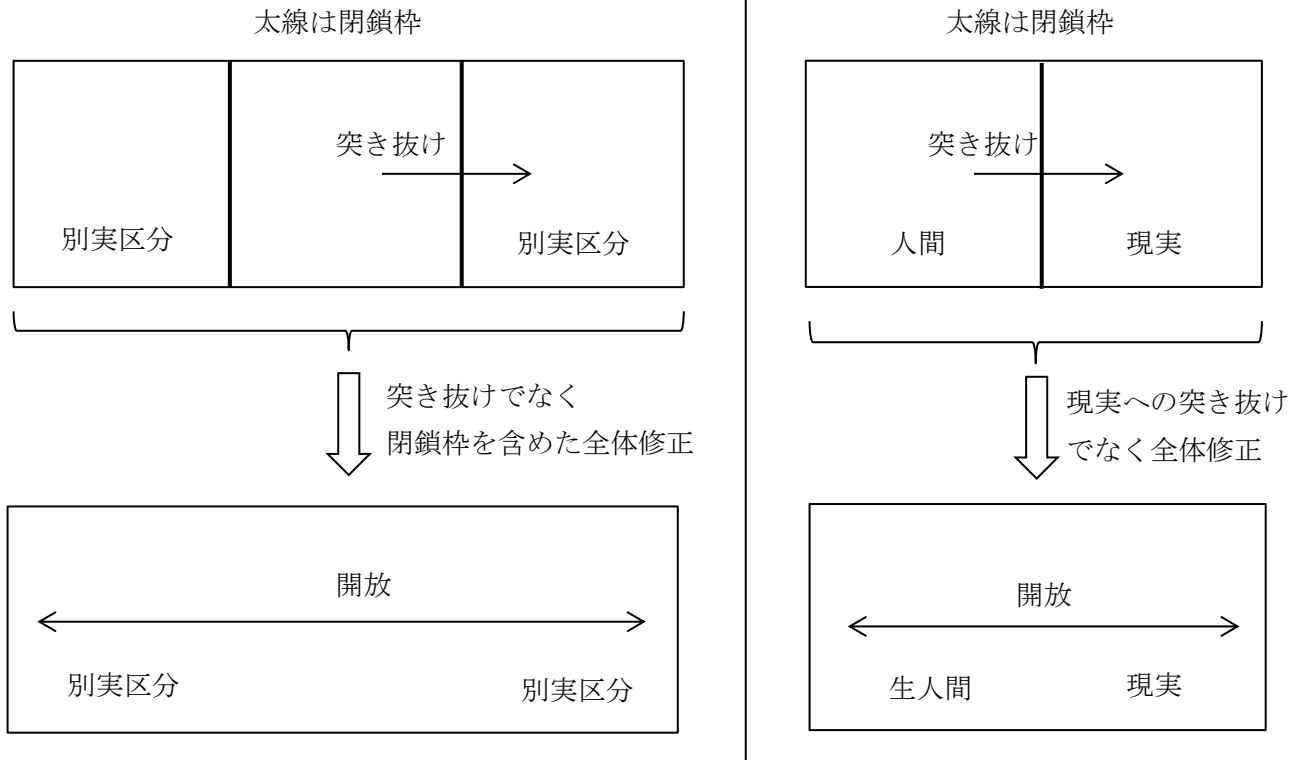


図 2-71 実区分と生現実根拠

2.10.4. 実区分と開放・閉鎖

実区分で閉鎖している状態を考える。区分の閉鎖枠外に突き抜けても、閉鎖している状態は変わらない。区分だけ変えて別実区分に行っても、別の閉鎖となり出口がない。突き抜けてなく、閉鎖枠を壊して開放する必要がある。突き抜けてなく閉鎖枠を含めた全体を修正すべきである。移動感も突き抜けて誤りである。移動でなく全体修正が必要である。

突き抜けが駄目なのは、人間と現実の閉鎖でも同様である。現実への突き抜けてなく全体修正と開放が必要であり、現実だけを閉鎖的に見ても意味がない。現実の認識も生人間に合うよう修正が必要である。正しく開放現実を見れば、生人間・生息状況への繋がりまで理解できる。これにより全体として開放した理解が可能になる。



区分の閉鎖枠外に突き抜けても閉鎖のまま、別の閉鎖で出口がない
 移動感も突き抜けて誤り、移動でなく全体修正
 現実の認識も生人間に合うよう修正
 開放現実から生人間・生息状況、全体として開放

図 2-72 実区分と開放・閉鎖

2.11. 多個人と社会

2.11.1. 多個人

人間が生きている単位は個人である。個人に対して多要素の考えを適用すると、個人の多要素としての存在が対人・社会の基礎になる。生きた個人を要素とする多要素を「多個人」と名付ける。生現実の多個人を認識する必要がある。個人は生命単位であり、個人ごとに感情、知性、認識、行動などが存在する。多個人も開放などと同じく、物理的手法を当解析に応用するためのモデルである。

多個人のモデルは、個人をエージェントとするマルチエージェントのモデルと同じである [28]。関係距離を使う事でセルオートマトン等において物理的距離から離れた社会構造を表現できる。

個人は遺伝子レベルで独立しており、アリなどの真社会性とは異なる。個人ごとの一意な評価（生満足）はあるが、全体の一意な評価はない。これは集団の構造が絶対的でない事を示す。大半の動物の集団は、境界での出入りがあり絶対的構造ではない。多要素階層として見ると、多個人は非常に明確な多要素階層になるが、集団はそこまで明確でない多要素階層になる。特に人間の集団は他の生物と比べても構造が複雑になる。

人間が個人ごとに独立しているのは、人間が生物的に進化するためである。進化は遺伝実験選択に基づいている。アリなどでも群れでは遺伝子が異なり独立している。

人間の集団の区切りは曖昧で絶対的でない。しかし多個人の区切りは明確である。個人の厳密な解析の上に多個人の解析を積み上げる事が重要になる。複数の原子・分子が完全に結合した固体より、結合の緩い流体のような構造になる。個人の詳細な解析が必要であり、その相互作用として多個人が解析できる。

集団の多要素階層が明確でないため、対人・社会の理解には別の規則が必要である。多個人における近い関係の積み上げだけでは複雑で曖昧にしかならない。多個人を元に別の規則を見つける事で、対人・社会もある程度明確に理解できるようになる。生現実には無数の規則があり、流体でも層流や乱流などの規則により高正確にする事は可能である。

孤立した個人は1要素しかなく誤りである。多要素である多個人が正しい。個人ごとに自律して行動し、個人ごとに生満足がある。個人ごとに行動の中心があるので自己中心ではない。利己的なのは自己だけの1要素化で誤りである。開放した生自己を正しく理解すれば利己的や自己中心にはならない。多要素ごとに中心があり、集団の中でも個人が自律的に行動する。完全に統合された集団にはならない。

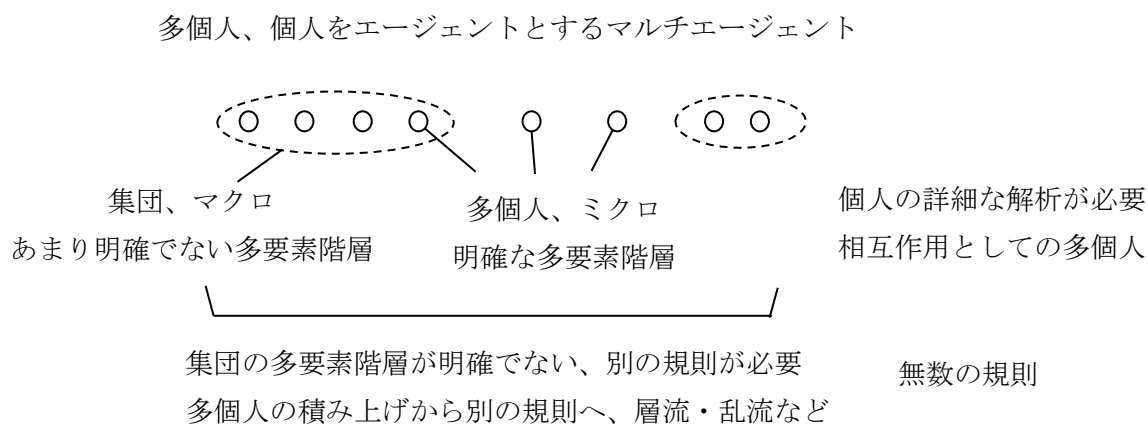


図 2-73 多個人と多要素階層

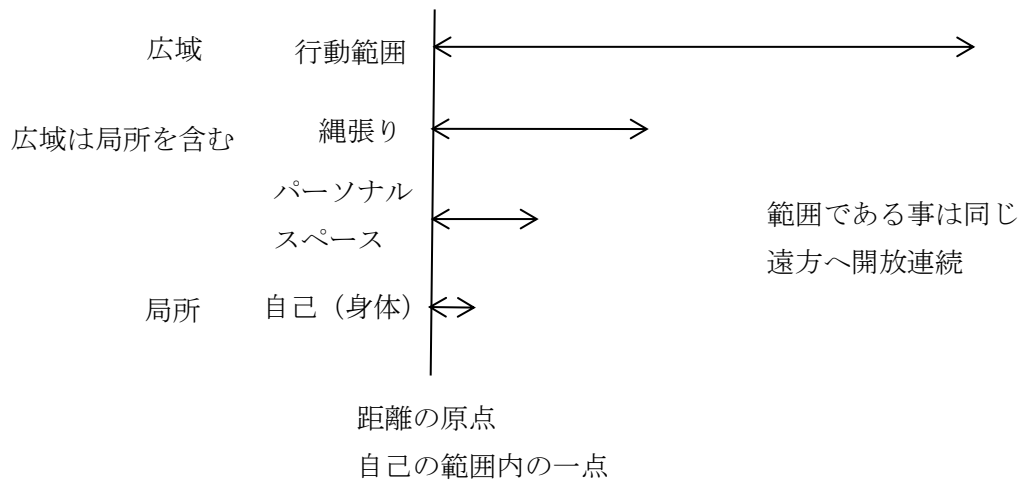


図 2-75 自己に関する様々な範囲

2.11.2. 多個人と開放現実

多個人は自立的な生感情と行動を持ち、完全にはまとまらない。明確な個人の区分けで解析する必要がある。多個人は別々の知性・認識・感情・満足を持ち、一人でも複雑である。中心が多数ある構造になり、多個人は非常に複雑になる。社会が広がるほど個人が増え、複雑さが増大する。

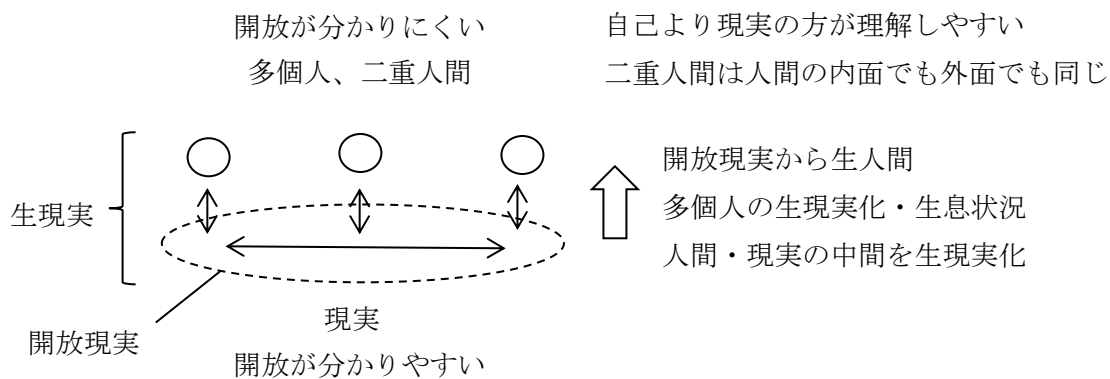
生現実には開放しているが、二重人間のため多個人の開放は理解しにくい。生人間と認識人間が混在するため、閉鎖した認識人間を実体と錯誤する場合がある。現実の方が見やすいため開放も理解しやすい。現実と各個人の開放が理解できれば、そこから多個人の開放に繋げる事ができる。開放現実から生人間の多個人を見る必要がある。

多個人だけを見ていると、二重人間のため不十分な理解しかできない。自己より現実の方が理解しやすい。自己から離れた現実まで開放的に見なければならぬ。二重人間は人間の内面でも外面でも同じであり、どちらも曖昧な人間でしかない。開放現実から生人間を見る必要がある。人間・現実の中間を生現実化すべきである。これには感覚・行動や、人間の現実的側面がある。現実と人間の閉鎖分断は誤りであり、開放現実を見ても多個人と繋げなければ意味がない。多個人を生現実化し、多個人の生息状況を見るべきである。開放現実の上に乗った形で多個人を理解すれば、多個人まで開放的な理解ができる。開放現実から見ないと関係距離も分からない。「身近に感じる話」は人間的で誤りである。

近辺・遠方の生現実と認識の誤差をグラフ化する。遠方より近辺人間より現実の方が誤差は小さい。近辺は明確で遠方は曖昧、現実には明確で人間は曖昧である。ただし近辺・遠方と現実・人間の構造は異なる。

近現実開放により、近現実から生人間と遠方に開放した理解を持つ必要がある。自己が最も重要な対象なので、近現実から生自己への開放を理解すべきである。近辺が重要で、遠方は重要でない。重要で理解しやすい近現実を正しく理解し、そこから開放する事で複雑な多個人を理解する必要がある。

無認識感情も重要であり、一歩引いて感情を見れば開放的に理解できる。一歩引いて対人感情を見れば、仕事も交友も同じである。



現実と人間の閉鎖分断は誤り、開放現実の上に乗った多個人を理解
無認識感情も重要、一步引いて対人感情を見れば、仕事も交友も同じ
開放現実から見ないと関係距離も分からない

図 2-76 多個人と開放現実

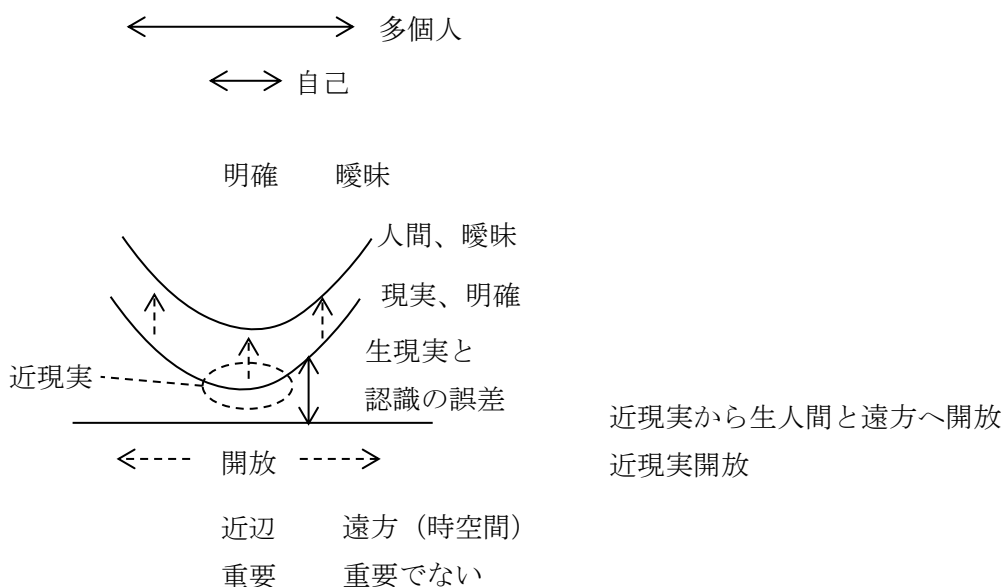


図 2-77 近辺・遠方と開放現実

自己から多個人関係を積み上げて理解すると、複雑で理解しにくい。二重自己の問題もあり理解は容易でない。生現実には無数の規則がある。明確な現実による別の規則を使う事で、複雑な多個人でも理解できるようになる。人間の集団は明確な多要素階層ではない。集団より開放現実を使うべきである。開放現実を理解し、近現実から規則を全開放する必要がある。

明確な近現実を理解する事により、他者の認識との連携が可能になる。相互に明確な理解を持つ事で、相互の認識を連携させる事ができる。広い認識を得るには他者との連携が必須である。本などで情報量を増やす事ができる。生現実に向かう情報でなければ意味がなく、生現実の正確な伝達が重要である。広くなるほど伝達

は難しくなる。知性により認識外へ向かえば、認識は自然に自己の外へ広がる。開放部分も可能な限り正しさが必要で、広い理解でも誤りなら意味がない。認識自己の外側を開放する事で、他者の認識と連携できる。

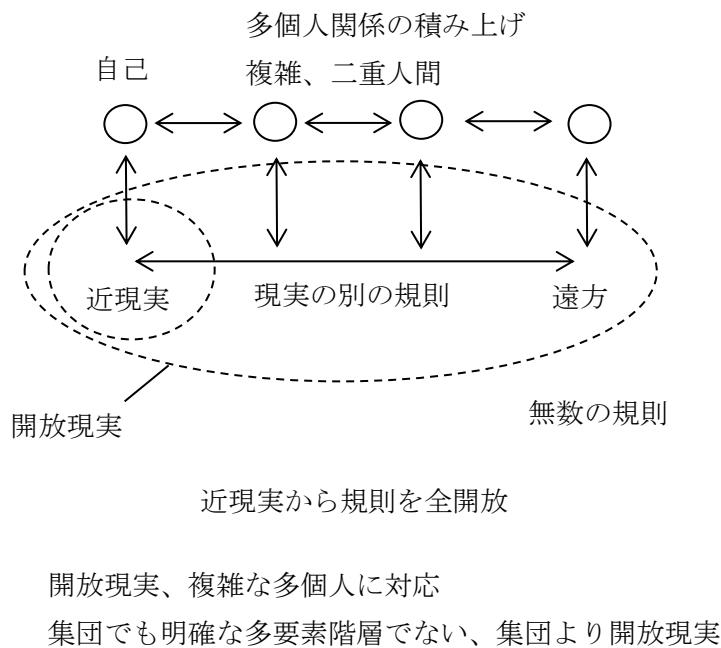


図 2-78 近現実から多個人へ開放

2.11.3. 自己・社会と開放・閉鎖

局所広域閉鎖が多個人で起こると自己社会閉鎖になる。空間の近辺と遠方が分断され、社会が自己に繋がらなくなる。本来の社会は自己を含み、自己の範囲と繋がるはずである。閉鎖により近辺と遠方が遠くなる。

多個人は二重人間や人間社会の複雑さのため理解が難しい。理解しやすい現実から開放的に理解する事で、複雑さを回避できる。近現実開放を行い、開放現実から生人間を見るのが正しい。自己・社会を生現実化すべきである。これにより誤った自己社会閉鎖を修正できる。局所広域を開放現実で見る必要がある。

生現実とは広く一意連続であり、近辺から遠方まで開放的に広がる。社会の閉鎖枠内だけを見る閉鎖的社交性は誤りである。近現実開放を理解すれば閉鎖枠を回避できる。二重自己のため認識自己には誤りが多く、近辺の中心としては不十分である。近現実開放により、社会への繋がりを明確に理解できる。

開放的な連携の理解は非常に重要である。生感情の開放を理解し、生感情の相互作用を行う事が重要である。相互影響が正しく、単に感情を自己の外に出すだけでは開放ではない。社会への行動量が多くても、閉鎖的で相互作用を理解してなければ意味がない。重要なのは量ではなく開放である。閉鎖的な社会に入るのではなく、開放現実を経由して多個人に繋がるのが正しい。

開放した連携のためにも生自己や生感情の理解は重要である。生感情は生人間の行動の基礎であり、他者と開放的な相互作用する事で正しい対人関係が成り立つ。感情を閉鎖してしまうと正しい対人関係を持ってない。近現実から生自己や生感情を開放的に理解する事により、対人関係にも繋がる。

自己・社会と開放・閉鎖の詳細を検討する。自己には自発・内向などが付随し、社会には義務・外向などが付随する。これらが閉鎖すると問題になる。本音・建前や不良・善良などは閉鎖的であり、根本的に問題があ

る。このような自己・社会の閉鎖は普通に存在する。普通の人間でも多少は局所広域閉鎖を持っており、修正する必要がある。

自発と義務の閉鎖分断も、局所広域閉鎖の一種で誤りである。正しい義務は自己を含む社会全体に存在する。自己の評価基準は自発的な生満足であり、社会的義務も自発的な生満足で評価される。社会的義務に従うのも自己が生満足を得るためであり、生満足が得られない社会的義務に従う必要はない。人間は社会的生物なので、生満足に従っても社会が壊れる事はない。

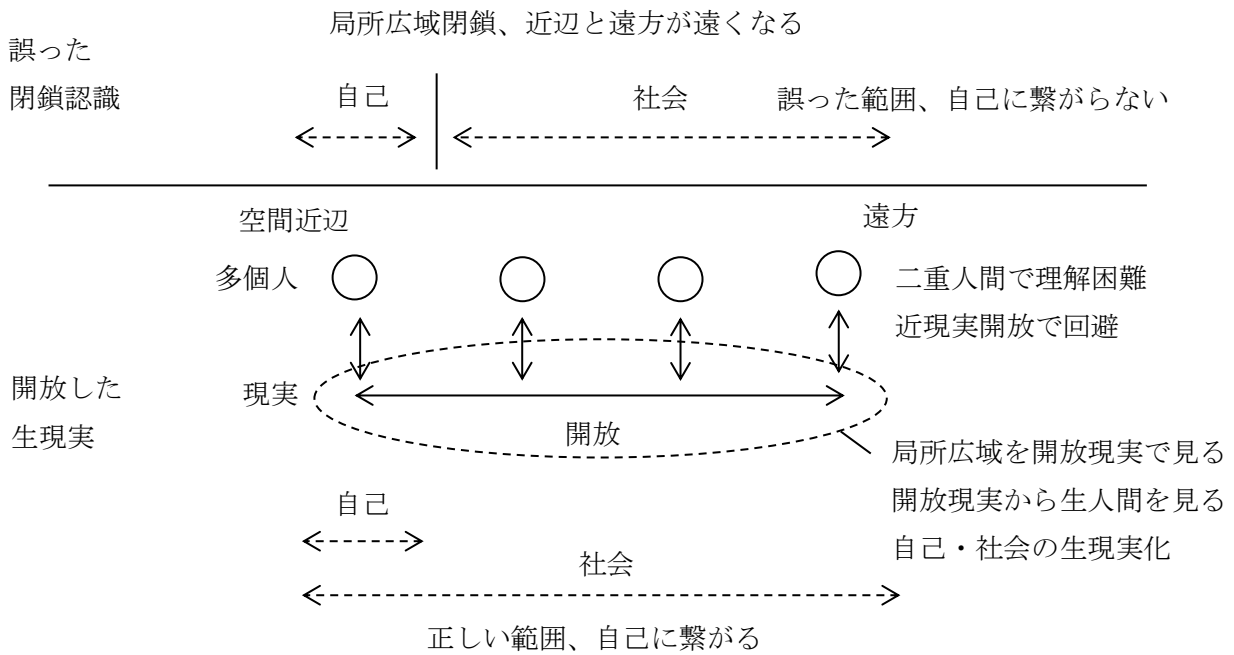


図 2-79 自己・社会と開放・閉鎖

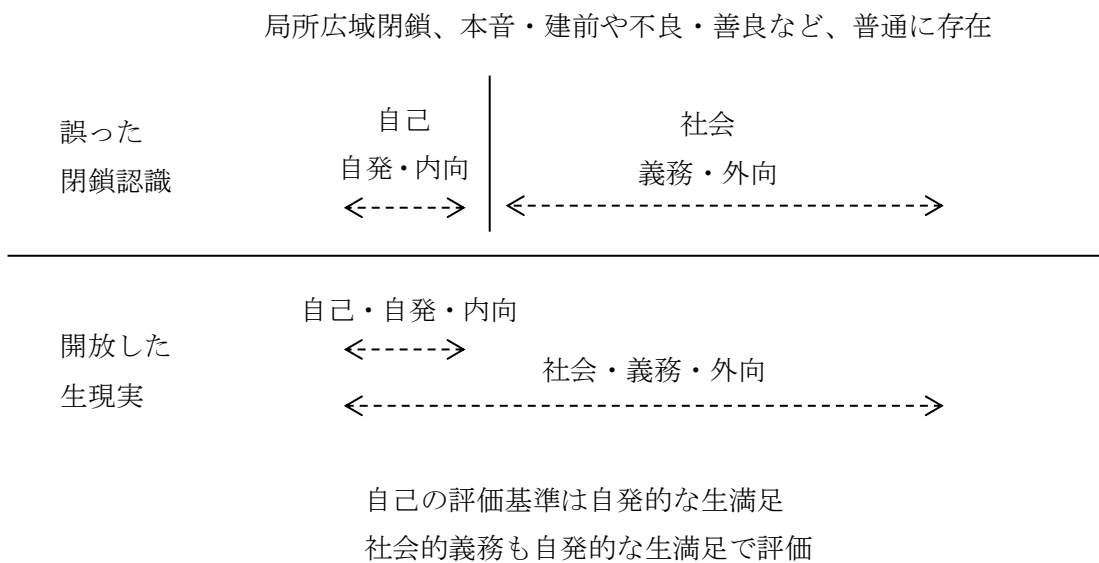


図 2-80 自己・社会と開放・閉鎖の詳細

多個人はそれぞれの自己を持つ。他者との同一化や全体の一体化は誤りである。閉鎖的で局所的な多個人は誤りである。多個人の理解にも生現実への正しさが必要であり簡単ではない。認識上の多個人に留まるのは誤りであり、認識外へ向かう必要がある。各個人の近現実を見る事で誤った一体化を回避できる。近現実開放を理解すれば多個人の構造も理解できる。

閉鎖した認識自己は広がらないが、生自己なら自然に広がる。知性により個人ごとに開放した理解が必要である。これにより個人主義にある死や反社会への方向性を回避できる。生現実の多個人を理解し、互いの生自己を尊重する必要がある。

自己・対人・社会・世界等に関する局所広域閉鎖の位置や広さには様々な種類があり得る。多閉鎖を起こす可能性もある。閉鎖していればどれも誤りであり、近現実から遠方へ全開放しなければならない。

開放・閉鎖は多個人を明確に解析できるため、扱いやすく重要である。対人・集団・社会を閉鎖分断するのは誤りである。対人・社会は範囲でしかない。自己も範囲であり、区切りは大きい外部と開放連続している。自己と対人・社会を別々に考えるのは閉鎖的な誤りである。開放現実とは生活－科学技術－社会まで繋がる。自己・対人・集団・社会などをすべて現実から開放的に理解する事で、生現実全体の開放を理解できる。

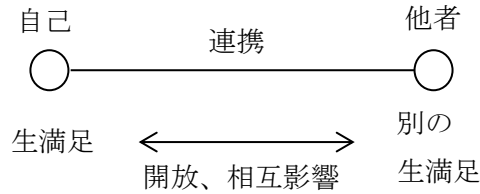
2.11.4. 連携と相互生満足と信頼

多個人の生満足増加のためには様々な形で連携する必要がある。多個人が開放的に連携しなければならない。生現実の多個人に基づく開放的な連携が正しい。対人関係も生現実化する必要があり、人間的より生物的・動物的な対人関係を持つべきである。人間的・感情的な対人で生不満になるのは誤りであり、現実的に満足・不満を見る事で回避できる。感情のやり取りも生物的・動物的にする必要がある。

自己と他者には別々の生満足があり、連携の評価も別々である。連携全体としての評価は、開放した相互生満足になる。相互生満足は満足感でなく生息状況である。相互生満足は win-win に近い概念であり、片方の満足だけを閉鎖分断して見るのは誤りである。

多個人が主体的に行動するので、多個人の連携は孤立でも一体化でもない。自分の分しか見ないのは閉鎖的で誤りであり、全体を全員で行うのも誤りである。行動は個人ごとに行われ、集団化も多個人を主体として行う。個人ごとに相互に実用的でなければならない。多個人の専門性や相性などを考慮する必要がある。個人ごとに適切な連携方法は違い、固定的ではない。

社会的義務も相互生満足で評価する必要がある。個々の生満足が得られなければ、社会的義務に従う必要はない。



対人関係も生現実化、人間的より生物的・動物的
 人間的・感情的な対人で生不満になるのは誤り
 連携全体としての評価は、開放した相互生満足、満足感でなく生息状況
 win-win、片方の満足だけの閉鎖分断は誤り、孤立や一体化も誤り

図 2-81 相互生満足

個人は生感情に基づいて行動するため、連携に参加する程度も生感情に基づいて決定される。多個人が連携に参加する程度を決める感情を信頼と定義する。信頼は連携により自分の生満足が得られるかどうかによって依存する。生満足は個人の評価基準なので信頼の程度は非常に重要である。信頼が対人感情の基礎になる。信頼は生満足を求める多個人感情である。信頼度により多個人の関係のある程度単純化して解析できる。ただし多個人感情は複雑であり信頼だけでは完全には解析できない。

社会性や個体間の適度な距離は生物ごとに異なり、接近と離反のバランスは個々の生感情により変わる。信頼があれば適度な距離は短くなり、不信があれば長くなる。信頼すれば関係が強まり接近し、不信になれば関係が弱まり離反する。ただし信頼があっても距離が0になる訳ではなく、生感情に基づく個々の適度な距離の上での変化である。

接近・離反を開放的に理解し、対人距離のバランスを取る必要がある。開放現実から見る事で、接近・離反を開放的に理解できる。どんな相手に対しても生満足・生不満の両方が同時に存在し、片方だけになる訳ではない。これらの大小を見る事でバランスを取る事ができる。接近・離反のうち一方だけを閉鎖的に見るのは誤りである。

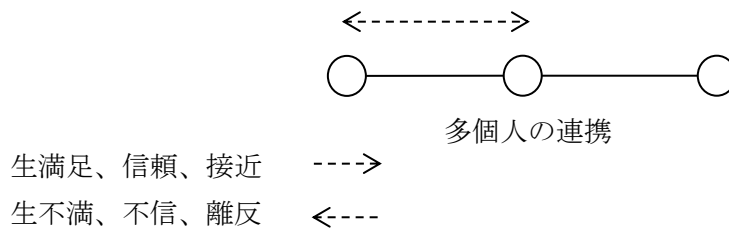
正しい信頼・不信は、認識感情が正しく生感情に近い場合のみ成立する。認識感情が誤りなら誤った信頼・不信となり、多個人の距離も誤った状況になる。この状況では真の生満足は得られない。

多個人が独立して生満足増加を求めるため、信頼がなければ多個人の連携もない。生現実の信頼が必要である。形式的な対人でなく、認識外の信頼による対人が正しい。相互生満足を与える事で相互に信頼が生まれる。相手を信頼するかどうかは個人が決める。無条件に信頼する事が正しい訳ではなく、信頼の程度を判別する必要がある。状況ごとに信頼・不信の程度は異なる。複雑な信頼度を理解する必要がある。周囲に対する開放的認識と信頼を受ける事が多個人の基礎となる。

自己・他者が連携すると信頼・接近し近辺になる。連携のある他者は近辺なので重要であり、その相互生満足も重要である。連携のない他者は遠方なので重要でない。

個人の生満足はそれぞれ別であるため、生満足を得られる行動は基本的に一致しない。互いに妥協点を見つけながら行動する必要がある。

個々の生感情による最適な距離
 生物ごとの社会性とバランス
 開放現実から見て、接近・離反を開放理解しバランス



認識感情が正しく生感情に近い場合のみ、正しい信頼・不信
 認識感情が誤りなら、誤った信頼・不信、真の生満足は得られない
 連携のある他者は近辺なので重要、連携なしなら重要でない

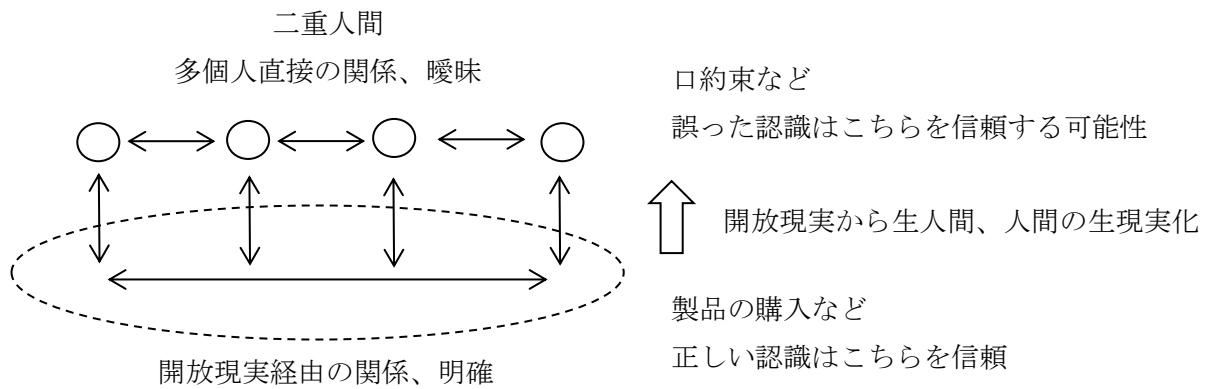
図 2-82 多個人の連携と信頼

2.11.5. 多個人の信頼と認識共有

二重人間のため、多個人間の直接の関係は曖昧になる。開放現実経由の関係は明確であり、開放現実から生人間へ開放的な関係を作るのが正しい。人間を生現実化すべきである。これにより多個人間で信頼を持った関係を構築できる。

曖昧な二重人間の関係には、口約束などが挙げられる。誤った認識はこちらを信頼する可能性がある。明確な予測ができないため、信頼しても生満足は得られない。開放現実経由の関係には、製品の購入などが挙げられる。正しい認識はこちらを信頼する。明確な予測ができるため生満足を得る事ができる。現実的機能・説明が正しく、人間的すごさ・懇願は誤りである。

人間的な感覚でなく現実は何をするかが重要である。仲良し感・敵対感などでなく、現実の接近・離反を見るべきである。人間的な共感でなく、現実的な関係が重要である。無認識感情も重要であり、一歩引いて信頼・不信を見る必要がある。人間的魅力も誤りであり、現実的・生物的に見る必要がある。



現実的機能・説明が正しく、人間的すごさ・懇願は誤り
人間的な感覚でなく現実は何をするか

図 2-83 開放現実と信頼

生現実の情報を正確に伝達しないと、適切な連携ができない。開放的な認識共有が必要である。相互に明確な理解を持つ事で適切な連携が可能になる。近現実の正しさと開放による、多個人の正しい理解が必要である。知性により双方の認識が生現実へ向かえば、一意連続・整合性により認識がつながり、適切な連携が可能になる。

自己・他者の認識には二重人間の問題があり、誤った自己・他者の認識は誤った相互影響をする可能性がある。現実から自己・他者を見る必要がある。近現実から生人間への開放で二重人間を回避できる。例え正しい認識を持っているとしても、人間経由で伝えると誤った認識の中に埋もれてしまう。開放現実経由で「実体化」した後に伝える事で誤った認識を回避できる。

個人の認識には限界があるため、どんな優秀な人間でも他者の明確な認識を受け入れる必要がある。開放的な認識共有をしなければならない。生現実は一意連続で整合しており、それを正しく認識すれば認識を重ねる事ができる。ただし多個人の自己・他者は別々であり、その違いを理解する必要がある。多個人が開放した理解をする事で効率的に連携可能であり、開放しないと効率が落ちる。相互に開放的な連携により広域的な関係を保つ事が可能になる。閉鎖認識の場合は広域的な関係が難しくなる。

開放的な認識共有
近現実から生人間への開放で二重人間を回避
正しい認識を開放現実経由で「実体化」

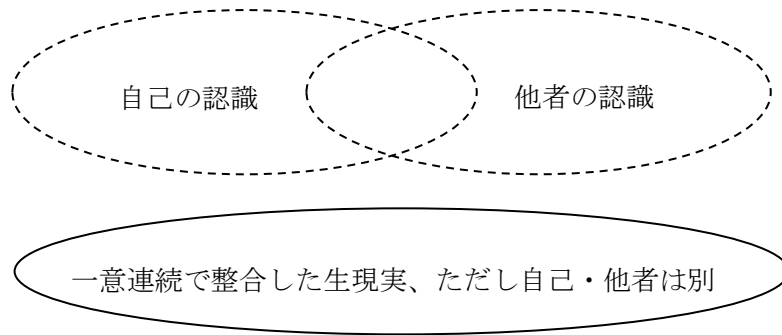


図 2-84 開放的な認識共有

3. 人間の各機能

3.1. 感情と満足

3.1.1. 知的生物の生感情

認識の正誤と生満足の式(2-1)を再掲する。s は生満足の評価、r は認識の正誤評価、s_b は認識に寄らない生満足の基礎部分である。s_r は認識の正誤を生満足に変換する関数で、正の相関を持つ。s と s_b は正の値だが、s_r(r) は負になる可能性もある。正しい認識により基礎部分を改善できるが、誤った認識により不満が増える場合もある。

$$s = s_b + s(r) \tag{3-1}$$

知性により正しい認識を得る必要がある。正しい認識と生満足は連動している。これは知性と感情の連動の一種である。

生満足を増加させるには、明確な認識を持つ必要がある。生満足の基礎部分は変化しないが、認識による増分が大きく変わる。曖昧な認識だけを使い生満足に限界を持たせるのは誤りであり、明確な認識により限界を超えなければならない。二重人間のように根本的な曖昧さを持つ認識に頼るのでなく、開放現実のように明確な認識を使わなければならない。人間の感情は曖昧だが、開放現実から見れば明確化できる。外部の生息状況から生感情・生満足を理解すべきである。無認識感情も重要であり、一步引いて感情を見る必要がある。

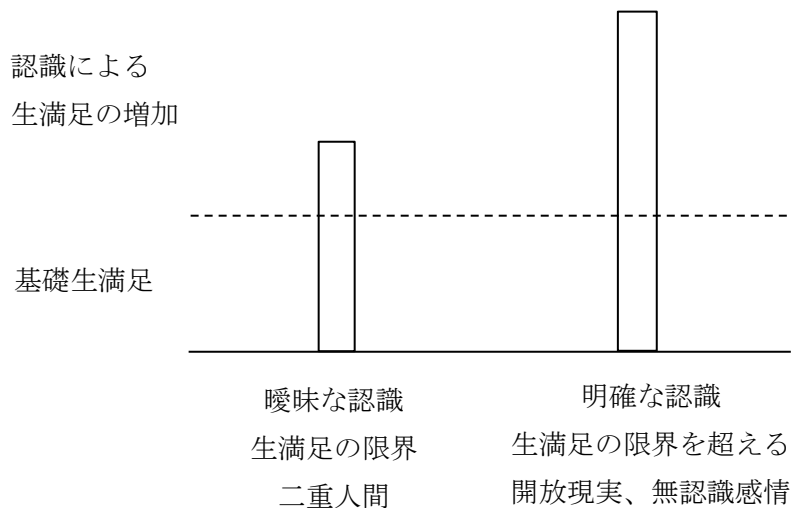


図 3-1 明確な認識と生満足

人間の生感情の特異性として、非常に強い知的生感情の存在がある。知的好奇心等の強い生感情を持っている。知性は認識の制御であり、認識を変形させる事自体が人間の欲求となる。

知性を持つのが人間の特性であり、否定するのは誤りである。「本能」という言葉は知性に対して否定的であり、誤解を与える危険性がある。本能でなく生感情が正しい。知性を求める生感情を理解する必要がある。必要性がなくとも空想として遊びで知性を使うように、考える事自体が生きる目的の一つである。遺伝的に「考える葦」であり、生感情の時点から他の動物とは決定的な差がある。

知的生感情も生現実へ向かわなければならない。生現実を推測する認識により、大きな生満足を得る事が可能になる。知的生感情は非常に強く、暴走の可能性もある。知性のみを求める事は、一部の生感情に基づく暴走でしかない。知性を生現実に繋ぎ止める必要がある。空想でも開放的でなければならない。認識より知性が重要であり、知性により認識を超える必要がある。知性が認識に固着するのは誤りである。

人間の生感情にも規則はあり明確である。遺伝子に記録されたものであり、遺伝的な規則性を持っている。規則のない曖昧な感情と捉えるのは、誤った認識感情である。二重人間により曖昧になるのは、認識のためである。人間の生感情は、動物的な感情の上に知的生感情が加わった形になる。知的生物の生感情が正しく、開放現実に繋がる。曖昧な感情を人間的で正しいと捉えるのは誤りであり、開放現実に繋がらない。

食事を例にとると、健康的で美味しく、かつ知的好奇心を満たす食事なら明確に満足できる。健康は身体的状況から開放現実に繋がり、その規則は明確である。健康を求めるなら食事の量や時間にも規則性が求められる。不健康で味や量などに偏りがあり、面白みのない食事は明確に不満である。このような食事を「人間的」だから正しいと考えるのは誤りである。食事に対する満足も曖昧でなく明確に理解する必要がある。開放現実から健康に繋がれば、食事の満足も明確に理解できる。

生感情の明確な規則を理解する必要がある。単に現在の生感情を写しただけの認識では役に立たない。そこから規則性を理解し、推測を行う事で生満足増加につなげる事ができる。

知性により生現実の生感情を正しく理解する必要がある。生感情と認識感情は別である。認識感情でなく認識外に向かう必要がある。形だけの感情でなく生感情が正しい。現実でも感情がなく「死んだ」状態は誤りである。生物としての実体を理解する必要がある。開放的な生感情が正しく、そこから真の気力が生まれる。閉鎖的で分断した感情は誤りであり、歪んだ気力しか生まれない。

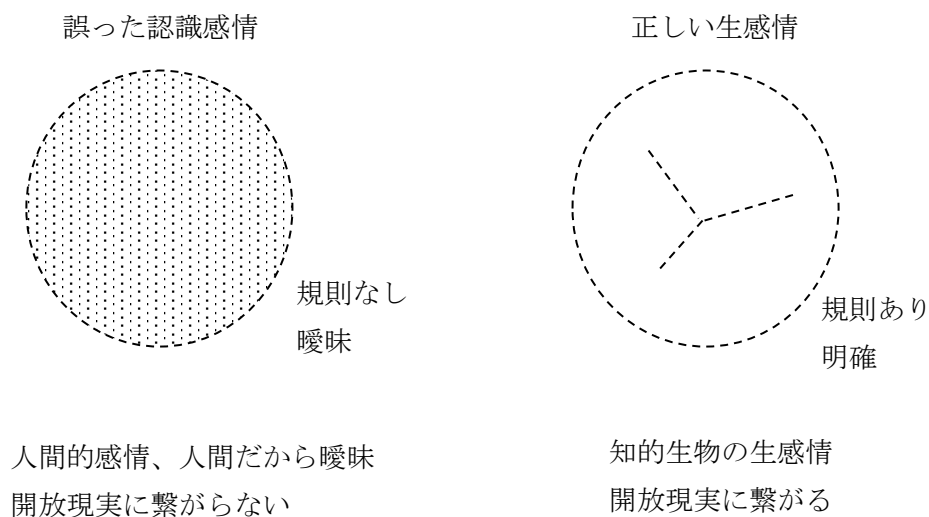


図 3-2 生感情の規則

3.1.2. 感情・感覚・行動と開放現実

人間は二重人間のため開放が分かりにくい。認識上の感情は閉鎖の可能性がある。生現実の感情は開放している。開放現実から生人間へ理解するのが正しい。開放現実から生人間を見て、開放した感情を理解する必要がある。感情を生現実化すべきである。感情も、人間的でなく現実的でなければならない。二重人間は曖昧であり、開放現実による明確な理解をすべきである。

感覚・行動は人間・現実の中間にあり、感情より現実を見やすい。感覚・行動を経由して感情を生現実化すべきである。現実を見て感覚・行動を生現実化する必要がある。感情の現実的側面も、感情と現実の中間にあたる。生物・物理・身体などから見れば、感情も明確に理解できる。

生現実の個人が持つ生感情が正しい。生現実の個人ごとに別々の生感情と生満足を持つ。生感情に基づいて行動欲求が生まれ、行動の結果として生満足が生まれる。多個人の生感情による相互影響を正しく理解する必要がある。

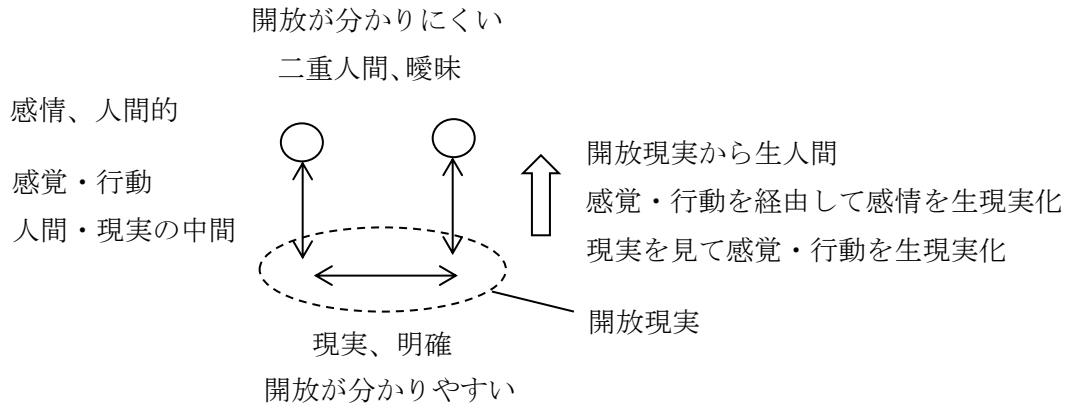
生物としての感情は、開放現実から多個人へ繋がる。感情も人間より現実側で見るべきであり、それが生物としての人間に繋がる。例えば買った製品に問題があった場合、「人間的な」苦情を長々とと言っても改善する可能性は低い。その企業の製品を二度と買わない、などの方が現実的な対応であり、生物的に見ても自然である。

二重人間により人間の生感情と認識感情は大きくずれる可能性がある。生人間と生感情を正しく理解し、認識や認識感情を生現実へ修正する必要がある。感情が絶対的に正しい訳ではなく、生感情を見なければならない。近現実開放により生人間と生感情を明確に理解できる。開放現実から感情を見なければならない。

人間的感情でなく知的生物の生感情を理解する事で、開放現実に繋げる事ができる。動物は感情について語る事はなく、動物の感情を理解するには外的な状況の理解が重要である。人間は感情を語る事ができて曖昧で正しくない。人間の生感情も、外的な開放現実から理解すべきである。この方法は動物の感情理解に近い。ただし人間は言葉以外の感情表現も曖昧になるため、動物よりも生感情の理解は困難になる。

無認識感情も重要であり、一步引いて感情を見る必要がある。これも言葉を止めるという意味では動物的な理解に近い。認識を止めた際の動物的な挙動から、無認識感情と動物的感情を同時に理解できる。

頑張っている感覚・行動や、集中している感覚・行動は「正しい」と評価されがちだが、これらも人間的で曖昧である。時間や成果などの現実的な計測可能量で評価すべきである。現実的な計測可能量は、認識感情から一步引いた無認識感情と連動する。感情が大きくても人間的なら誤りであり、現実的・生物的でこだわらないようにすべきである。



感情の現実的側面を見る、生物・物理・身体なども感情と現実の中間
人間的感情でなく知的生物の生感情、動物の感情理解に近い
無認識感情も動物的感情に近い

図 3-3 感情・感覚・行動と開放現実

3.1.3. 感情種類と地味感情

生感情には一次欲求・二次欲求、マズローの5段階欲求階層 [12]、喜怒哀楽など多数の種類がある。これを感情種類と呼ぶ。感情種類に特定の感覚・行動・満足が付随する。感情種類ごとに生満足があり、その総和が個人の生満足になる。満足の総和は個人ごとに一つだが、その原因となる感情種類は多数存在し複雑になる。感情種類は人間の解析を困難にする大きな要因になる。

実区分としての感情種類には開放の概念を当てはめる事ができる。同一種類の感情だけでなく、別種類の感情を含む開放的な理解が必要である。

感情種類ごとの生満足でなく、総合的な生満足が必要である。感情種類は複雑で曖昧だが、総和により明確化できる。すべての感情種類を見て満足を最大にする必要がある。一つの感情種類だけに囚われるのは誤りである。無認識感情を見て囚われない・こだわらないようにすべきである。

感情種類をまとめて満足増加する別の規則が重要になる。これには開放現実などが当てはまる。生満足が一つに統合される事で困難な行動の代替が可能になり、昇華の理由を説明できる。一つの感情種類を押さえても全体として生満足できれば問題ない。

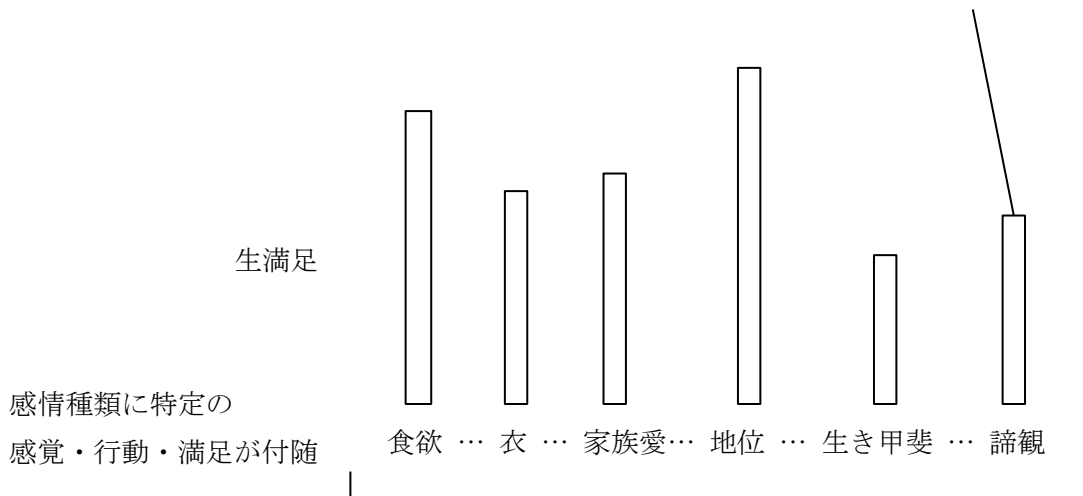
地味で分かりにくい感情を地味感情と呼ぶ。地味感情には諦観・まったり・開き直り・皮肉などがある。これらは1種類の感情でも分かりにくく、分かりにくいので地味に見える。地味感情まで見る必要があり、それにより真の豊かな感情が分かる。

無認識感情により地味感情を見る事ができる。認識感情を止めて一步引けば、分かりにくい地味感情も見えてくる。ただし分かりにくいので理解するのは簡単ではなく、地味感情の存在を理解しておく事が重要である。生物・動物から地味感情を見るのも重要であり、諦観は人間より動物の方が明らかである。

地味感情、地味で分かりにくい感情

諦観・まったり・開き直り・皮肉など、地味感情まで見る必要

無認識感情から分かる、諦観は人間より動物の方が明らか



感情種類ごとの生満足でなく、総合的な生満足が必要

感情種類は複雑で曖昧、総和により明確化

すべての感情種類を見る、一つの感情種類に囚われるのは誤り

無認識感情を見て囚われない・こだわらない

まとめて満足増加する別規則が重要、開放現実など

図 3-4 感情種類と地味感情

統一した生満足を s 、感情種類 i の生満足を e_i とすると、式(2-1)により以下の式が成り立つ。 e_{bi} は生満足の基礎部分で、 e_{ri} は認識の正誤を生満足に変換する関数である。基礎部分は何も認識がない場合の満足であり、正しい認識により基礎部分を改善できる。 e_{ri} を最大にするのではなく、総和の $\sum e_{ri}$ を最大にしなければならない。

$$s = \sum_{i=1}^n e_i = \sum_{i=1}^n (e_{bi} + e_{ri}(r_i)) = \sum_{i=1}^n e_{bi} + \sum_{i=1}^n e_{ri}(r_i) \quad (3-2)$$

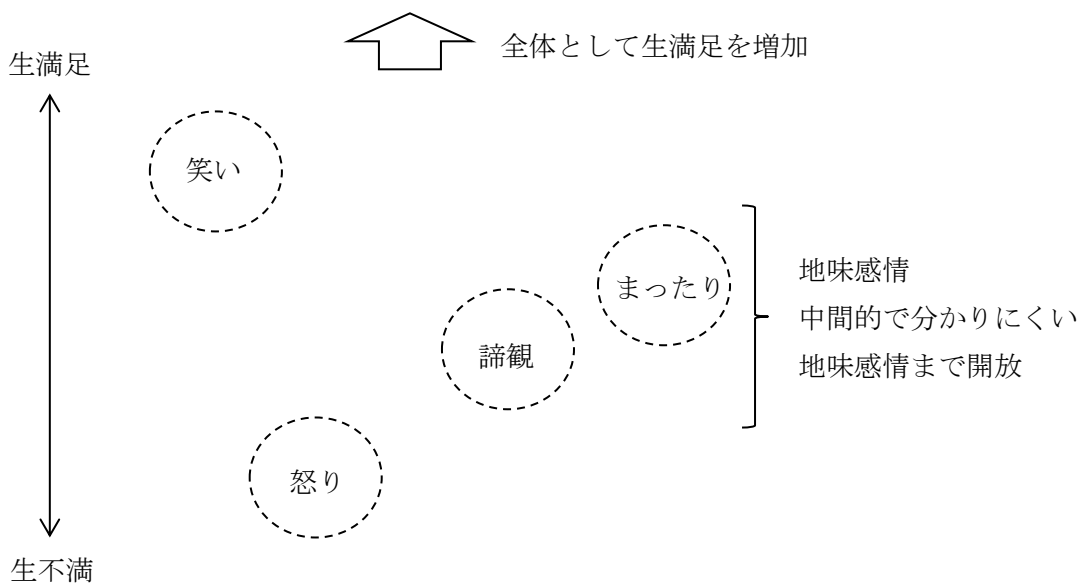
感情種類には、生満足に近いものと生不満に近いものがある。怒りであれば生不満に近く、笑いであれば生満足に近い。諦観・まったりは中間的である。これらをすべて開放的に理解し、全体として生満足を増加させる必要がある。生不満側を無視するのは誤りであり、実際にはすべての感情種類が相互に関連している。感情種類の閉鎖枠を開放する事で、開放現実繋げる事が可能になる。

生感情の評価基準は全体としての生満足であり、特定の感情種類ではない。喜び・楽しみ・笑い・明るさ・リラックス・安心・愛情など、すべての生満足に近い感情種類に対して同様である。1つの感情種類でなく、すべての感情種類による生満足を求める必要がある。この事を正しく理解しないと、形式的で「死んだ」感情になる可能性がある。

悲しみ・怒り・不安・憎しみなど生不満に近い感情種類でも、生不満を減らす事は可能である。これらの感情種類も正しく理解し、全体として生満足が得られるように行動する必要がある。

地味感情は満足・不満において中間的で分かりにくくなる。諦観・まったり・開き直り・皮肉はどれも中間的である。地味感情まで開放的に理解し、すべての感情種類を繋げる必要がある。地味感情がないと満足・不満の振れ幅が大きく不安定になる。愛情と怒りだけで家庭内暴力になる場合が典型である。不満側の怒りと悲しみだけでも不安定になり、諦観まで見えれば安定する。

満足種類は満足側・不満側・中間に多数存在し、状況により複合的に作用する。重要なのは全体としての生満足・生不満である。どんな状況でも「満足だけ」「不満だけ」という事にはならない。「満足だけ」「不満だけ」というのは閉鎖した認識感情による誤りである。美味しい食事をしていても多少の疲労感はある。



生不満側を無視するのは誤り、実際は相互に関連
感情種類の閉鎖枠を開放、開放現実繋げる
感情種類は多数、「満足だけ」「不満だけ」なのは閉鎖による誤り

図 3-5 生満足・生不満に近い感情種類

3.1.4. 感情種類と開放現実

特定の感情種類への閉鎖は誤りであり、現実的な問題を引き起こす。例えば食欲に閉鎖した場合の肥満などが挙げられる。「感情的」な状況は、対象となる感情種類によりバラバラになる。これらはすべて誤りである。激情・強い憂うつなども感情的閉鎖で誤りである。

開放現実から見る事で、感情も開放可能である。感情を具体的な生息状況に近づけ、開放的に理解すべきである。具体的な生息状況は、食欲に対する食事などが挙げられる。感情種類には特定の感覚・行動・満足が付随している。付随する感覚・行動を経由して感情を生現実化する事で、感情を生現実化できる。無認識感情も重要であり、一步引いて感情を見れば開放的に理解できる。

食事に付随する感覚・行動を食欲の延長で閉鎖的に見れば、肥満の問題を改善する事はできない。食欲に関

する生満足が増えたとしても、他の生満足が下がってしまう。食事に付随する感覚・行動を現実的に見れば、食事の量や自分の体形まで開放的に繋がる。ここから感覚・行動を現実的に修正する事で、過大な食欲を抑える事が可能になる。

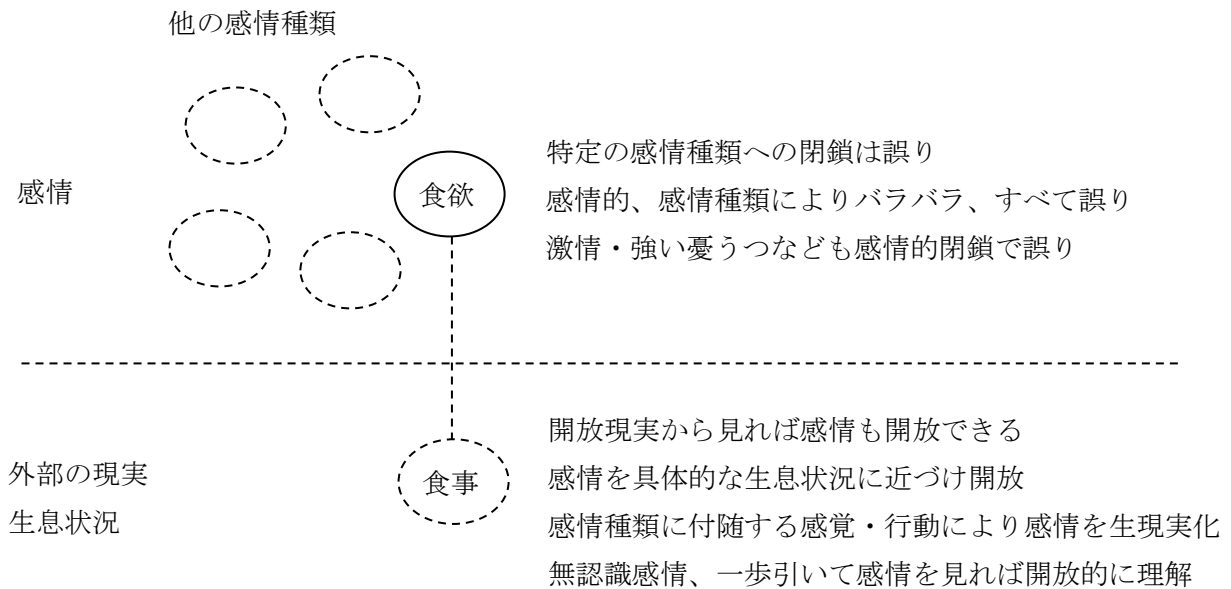


図 3-6 感情種類の開放・閉鎖

感情や外部の現実を含む全体を開放して理解する必要がある。散歩を例にとると、散歩に対して「健康的」「気持ちいい」「疲れる」「面倒」などの感情が同時に働く。これら1つずつでなく、まとめて満足を増加させる必要がある。しかしすべての感情種類を理解するのは容易でない。散歩の現実部分である場所や時間などを明確に理解する事で、感情種類全体の満足増加に繋げる事ができる。開放現実から生人間を見る必要がある。快適に散歩できる「散歩コース」を設定し、そこを何度も歩けばいい。

二重人間と複雑な感情種類のために、人間の感情は曖昧である。開放現実から生人間を見る事で、感情を生現実化すべきである。そのためには人間・現実の中間を現実的に理解する事が重要である。人間・現実の中間にある感覚・行動を現実的にする事により、感情と現実を繋ぐ事ができる。現実を見て感覚・行動を生現実化する必要がある。現実的な「散歩コース」の状況を感覚・行動に反映させる事で、感情まで生現実化できる。

感情の現実的側面も、感情と現実の中間にあたる。これには生物・物理・身体などがある。感情の現実的側面を理解する事も重要である。散歩の物理的距離が長ければ、疲れる事は明確に理解できる。

特定の感情種類だけを閉鎖的に理解するのは誤りである。散歩に対して「健康的」という感情種類だけを閉鎖的に理解すると、近所で急に高負荷なウォーキングを始めるような行動を起こす。これは開放現実から見て明らかに適切でなく、長続きする可能性は低い。「健康的」という感情に付随する感覚・行動や、感覚・行動の先にある現実まで見れば、散歩の開放現実が見えてくる。

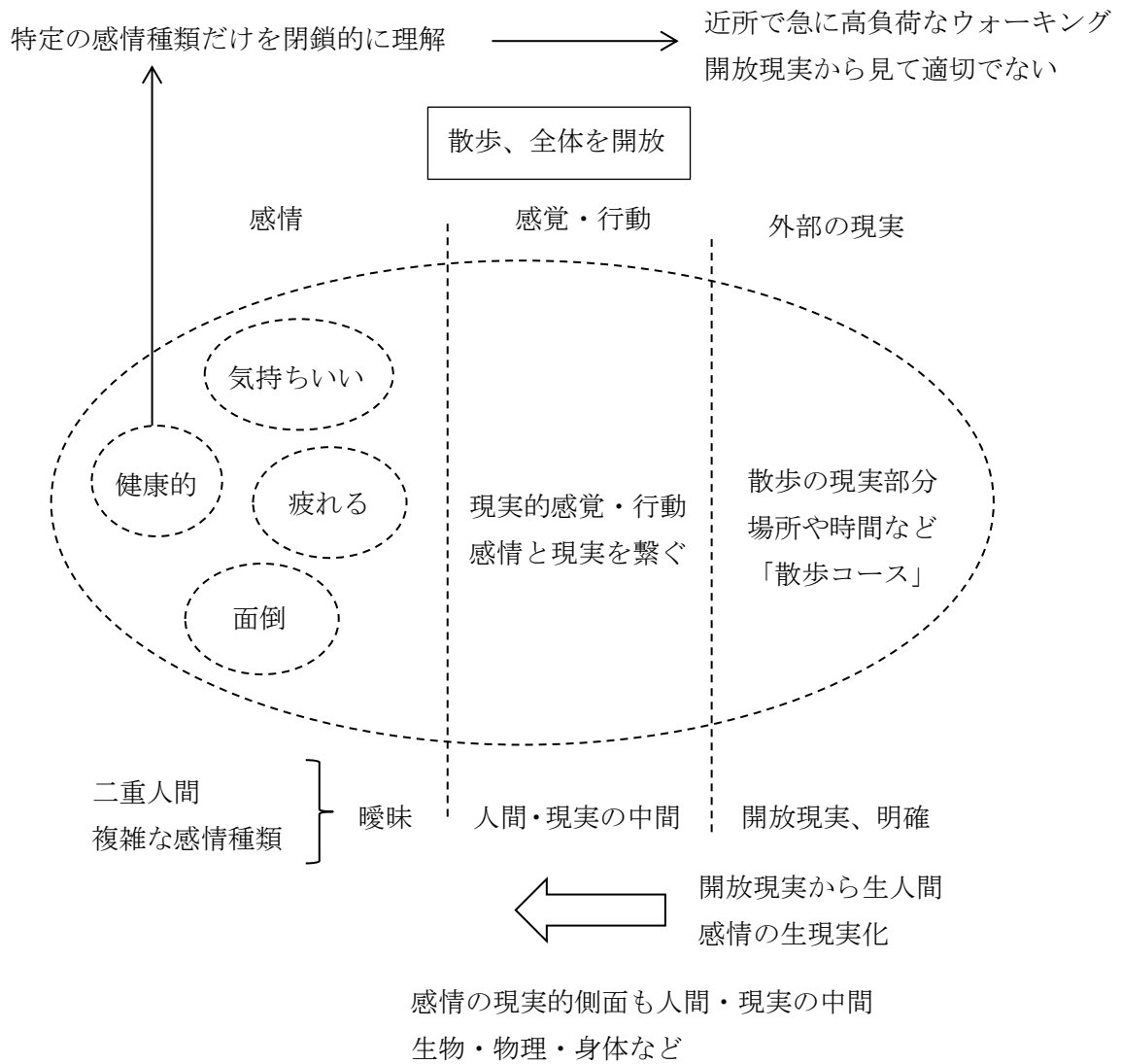


図 3-7 感情種類と開放現実

感情種類には満足・不満も付随するので、不満側の感情種類への閉鎖も起こり得る。例えば怒りに閉鎖した場合の他者攻撃などが挙げられる。

「感情なし」も閉鎖分断による誤りであり、感情が閉鎖枠外になる事で「感情なし」に見える。感情と外部が開放連続している事を理解すれば「感情なし」にはならない。

人間的・感情的であることを止め現実近づくと、感情が無くなるように見える。しかし正しく生現実近づけば、人間的・感情的な状況より感情種類は多くなる。

閉鎖的な感情の切り替えは、仮面を付け替えているようなものである。何度付け替えても実際の感情からは遠く、生満足が得られない。

3.2. 時間と行動

3.2.1. 時間と予測

生現実と認識の誤差を距離で区分すると、近辺は誤差が近く遠方は少ない。近辺は影響が大きく重要で、遠方は重要でない。空間は関係距離で判別するが、時間は物理距離で判別する。

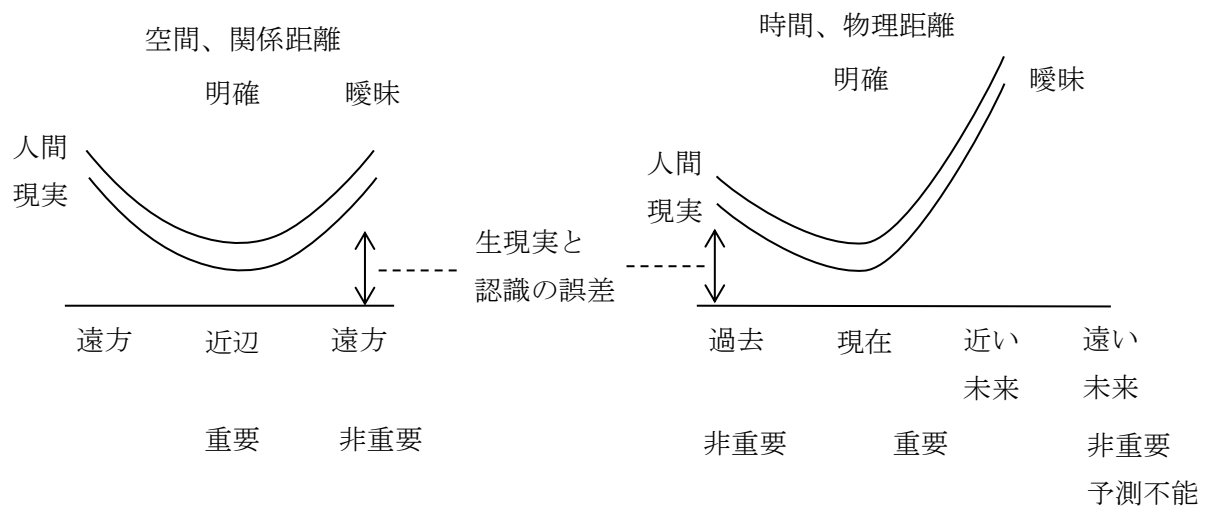
近辺・遠方を時間的に考えると、近辺は現在、遠方は過去・未来、局所は短期、広域は長期である。短期と長期が分かれるのは閉鎖による誤りである。長期は短期を含み、現在から過去・未来まで開放しているのが正しい。

空間と時間では、生現実と認識の誤差が異なる。過去の認識は容易だが、未来の予測は困難である。空間の近辺は明確で、遠方は不明確になる。時間の場合はそれに加え、過去が明確で未来が不明確になる。

空間と時間では重要度も異なる。重要性は未来の方が大きく、過去は重要でない。過去と現在の繋がりだけが重要である。遠い未来になるほど予測は急激に困難になるため、認識の重要性も低下していく。また遠い未来は死の可能性もあり重要度は減る。ただし子孫や種族を考えると死んでも完全に重要度がなくなる訳ではない。長期は現在も含む範囲なので重要である。

動物は現実に近い部分だけを予測できる種類と、多少未来まで予測できる種類がある。人間は現在から近い未来までを予測できる。しかし遠い未来は予測不能であり、この点では動物と変わらない。人間と動物の予測能力の違いは本質的なものではなく、程度の差だけである。

二重人間のため、時空間とも人間の認識より現実の認識の方が正しい。近現実から生人間へ開放した理解を持つ必要がある。過去や未来などの時間も、開放現実から見るべきである。



時空間とも人間より現実が正しい
近現実から生人間へ開放、時間も開放現実から見る
過去は重要でない、過去と現在の繋がりだけが重要

図 3-8 時空間と近辺・遠方

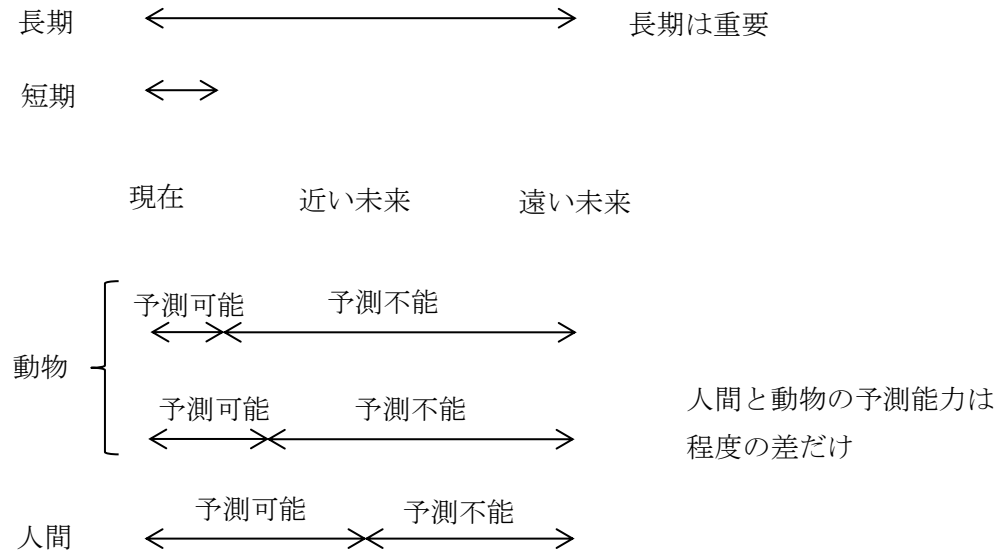


図 3-9 予測可能・予測不能

3.2.2. 短期・長期生満足

生満足は生感情による評価であり、生現実の生満足が正しい。生不満を減らして生満足を増やす必要がある。生満足は多数の感情種類による総合評価である。個人ごとに別々の生満足を持ち、独立して行動する。生現実に対して「正しい」と評価された認識を持つ事により、「生満足」という評価を得る事ができる。

人間は知性と認識により未来を予測できる。目標としての生満足は、現在値でなく長期的な時間積分とすべきである。現在付近のみの生満足を短期生満足、長期的な生満足を長期生満足と呼ぶ。長期生満足は短期生満足を含む。

人間と動物の未来予測の違いは程度の差だけであり、動物でも多少は未来予測をする。動物の予測期間が短ければ短期生満足になるだけで、目標が時間積分である事に変わりはない。

過去は変えられないが、未来を変えて生満足を増加する事は可能である。過去より未来の方が重要であり、長期と言った場合は主に未来側を示す。増加が必要な長期生満足も未来側である。

生満足を時間 t の関数 $s(t)$ とする。未来の重要性低下を示すため、遠い未来になると下がる減衰率 $\gamma(t)$ を導入する。 $\gamma(t)$ は未来の生満足を現在に振り替えた際の減衰を示す。最大化すべき満足の時間積分は以下の式となる。積分期間が短ければ短期生満足、長ければ長期生満足になる。

$$\int \gamma(t)s(t) dt \tag{3-3}$$

これは強化学習における報酬の扱いと同じである。報酬は生満足に相当する瞬間的な値であり、行動の目的としては減衰率を掛けて時間的な総和を取った値を利用する [29]。

長期生満足の最大化が人間の目標になる。積分区間は現在から推測可能時間までになる。短期・長期の違いがあるが、評価基準そのものは同じ生感情であり、最終的な目標は個人ごとの生満足増加である。生感情に基づき、知性による推測を行い、生現実の長期生満足を得るのが正しい。生感情から離れるのも、知性から離れるのも誤りである。長期生満足を得るには高度な知性が必須である。

減衰率 γ は予測の正しさの低下や死による重要度低下を示す。未来予測能力が高ければ長期生満足を得られるが、低ければ短期生満足にしかならない。 γ が未来まで大きな値を保つ事が望ましいが、人間の能力でも容易でない。

長期生満足を得るには、現在・未来の両方で生満足増加が必要である。短期生満足を得てもすぐ生満足が下がるのでは意味がない。短期生満足がずっと低いのも同様に誤りである。将来的に大きな生満足が得られるなら、現在は多少生不満でも問題ない。あまり生不満が大きければ長期生満足が下がるので意味がない。忍耐による生不満より、達成による生満足の方が大きい必要がある。

認識上の満足でなく生満足が目的であり、認識は将来的な生満足を得るための手段である。正しい知性と認識なら将来的に生満足が得られる。形だけの満足でなく生満足が正しい。認識上の満足に固執しても意味はなく、理解できない生不満に陥る。二重人間のため感情・感覚・行動のすべてに誤りである可能性があり、生人間や生満足を正しく理解する必要がある。感情を含む開放した認識を持つ必要がある。知性により認識を生現実に近づけなければならない。近現実開放が二重人間の回避に有効である。

将来の夢・希望なども人間的で誤りであり、現実的目標が必要である。理想と現実が分かれるので動けなくなるのであり、現実的目標なら動くことは可能である。夢や情熱で行動するのは無駄が多すぎる。やる気の有無で閉鎖分断するのも誤りである。

生現実は多要素で複雑であり、認識と推測は困難である。知性により認識外の生現実を探究する必要がある。適切な別の規則を見つけ、生現実を明確に理解しなければならない。それにより初めて正しい推測ができ、生満足が得られる。生感情も明確に理解しなければならない。時間的な開放と繋がりを理解する事で適切な未来予測が可能になる。過去は現在・未来に直結しており、過去・現在・未来を含む時間開放した理解が必要である。

長期生満足が必要なのは、身体の内側を含むすべての生命活動を行う時間である。生命活動には、感情・感覚、行動、認識、知性などが含まれる。認識も生命活動として捉えた場合には、長期生満足増加が必要である。例え正確な認識と予測ができたとしても、多大な時間がかかった上に役に立たなければ、生命活動としての意味はない。

以下の図中では、分かりやすくするため減衰率の代わりに推定可能時間で切っている。これは途中で減衰率が1から0に変わると同じである。これ以降の図でも同様の表記を行う。

身体内部を含むすべての生命活動を行う時間
感情・感覚、行動、認識、知性など
生命活動としての認識は長期生満足増加が目的

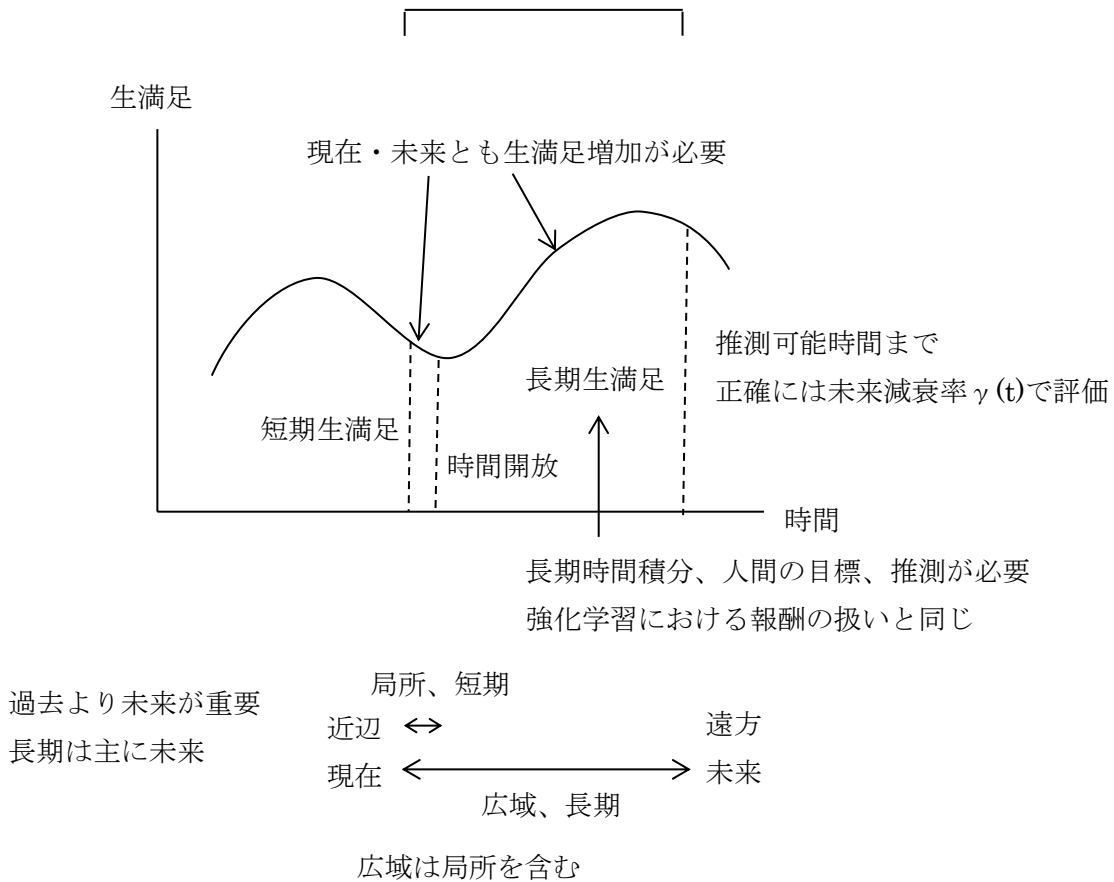


図 3-10 短期・長期生満足と生命活動時間

3.2.3. 行動と環境と成果

自己の周囲にあるものを環境と呼ぶ。環境は他者と現実である。行動により環境の実体変更を行う事で生満足を得る事が可能になる。行動の結果として生満足を得る事を成果と呼ぶ。環境と個人は長期に相互影響しており、行動も成果もその一部である。行動と成果は、長期相互影響の個人側を時間で分けたものと言える。

成果は生満足よりも強化学習の報酬により近い概念である。強化学習では累積報酬が行動の目的になる[29]。成果は行動の目的としての生満足と言える。

影響は常に相互に存在し、一方的ではない。一方的支配感は誤りである。環境から一方的に支配される事も、環境を一方的に支配する事もない。これは他者でも現実でも同様である。他者との長期相互影響により生満足を得る事が可能になる。空間的な開放を理解すれば、自己と環境との相互影響は理解できる。これにより一方的支配感を排除できる。

行動が即時的でも、それに対する影響と成果は長期間存在する。最終的に必要なのは、長期相互影響全体に対する長期生満足であり、知性により推測を行う事が必須である。短期影響・成果・生満足の推測は容易で、長期影響・成果・生満足の推測は困難である。これらの時間的な開放関係を理解しなければならない。

対象ごとに広域は局所を含む。長期相互影響は短期相互影響を含み、長期成果は短期成果を含む。過去より未来が重要なので、長期相互影響・成果も主に未来側を示す。

短期生満足だけを求める事は誤りだが、短期生満足を放棄すればその分満足は減る。重要なのは長期生満足への時間開放である。短期生満足だけを求めるのも、未来の生満足だけを求めるのも誤りである。長期生満足を得るのが目的だが、長期生満足には短期生満足も含まれる。短期生満足を切り離れた長期生満足は誤りである。短期と長期は連動しており、正しく生現実へ知性を働かせて時間開放した長期生満足を得なければならない。

食事を例にとると、美味しい物を食べるのは短期生満足である。そればかりを食べていると長期的に肥満などの不健康状態になる可能性がある。だからと言って不味い物を食べれば生満足が得られない。健康に気を付けながら美味しい物を食べるのが正しく、長期生満足を得る事が可能になる。短期生満足だけの暴食も、未来の生満足だけの粗食も、閉鎖的で誤った理解である。動物は自然環境の中で適切な食事を取るように生満足が補正されている。暴食や粗食では知性のない動物よりも生満足が低くなる可能性すらある。

行動から長期成果までを開放的・一体的に理解する必要がある。例えばスポーツにおいて、結果だけを求めて練習を見ないのは誤りであり、逆に練習だけを見て結果を求めないのも誤りである。成果の満足が大きくても、行動による不満がより大きければ正しくない。

行動しても成果が出ない場合もあり、この場合にも行動から成果までの一体的な理解が必要である。行動は次回行動に対する訓練かつ反面教師となる。物事の検討においても結論と同時に検討過程が重要であり、結論が不適切でも検討過程があれば改善できる。

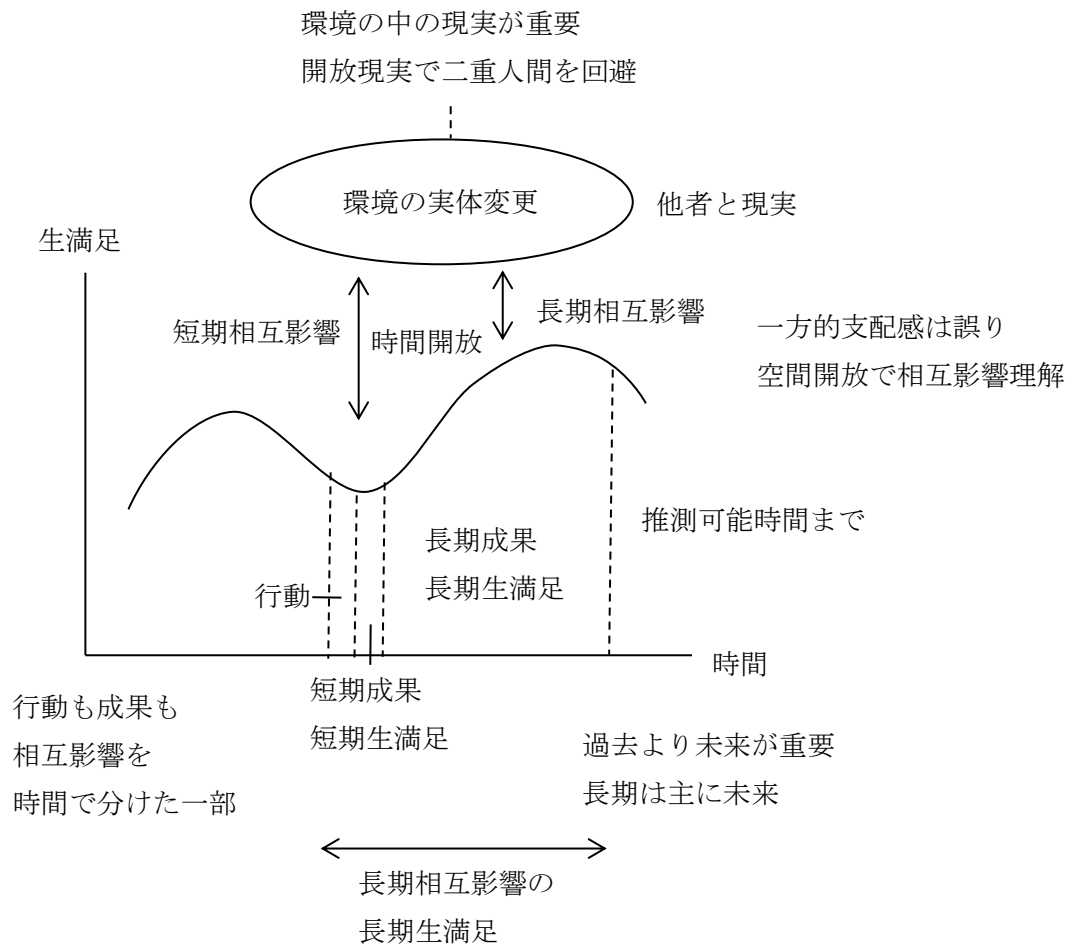


図 3-11 環境と影響と成果

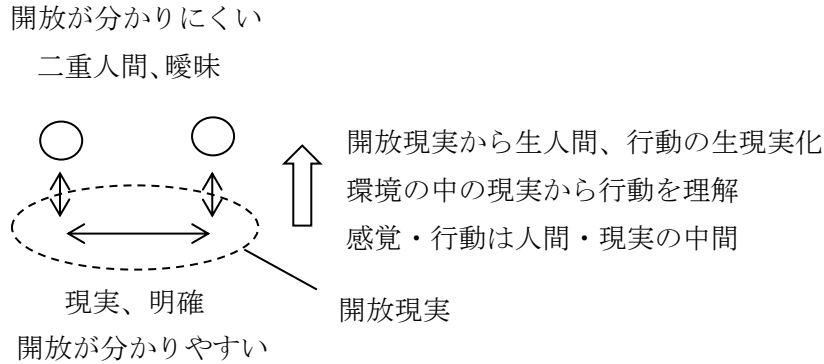
二重人間のため感情・感覚・行動のすべてが誤りの可能性があり、生人間を正しく理解しなければならない。時間閉鎖した短期・長期満足は認識上の誤りである。短期満足だけを求めるのは本能的・感情的、短期満足を抑え込むのは理性的でどちらも閉鎖認識である。認識感情に囚われず、時間開放した長期生満足を求める必要がある。

環境の中の現実が重要であり、開放現実により二重人間の問題を回避できる。開放現実が満足を得られるものであるかどうかを理解する必要がある。食事の例でいえば、適切な量と質でない食事は誤りである事を理解しやすい。

行動・環境における人間的無駄を無くせば、その分だけ生満足が得られる。多すぎる食事量を減らせば、その分だけ他の行動・環境に回す事ができる。

開放現実から生人間を見て、行動を生現実化する必要がある。環境の中の現実から行動を理解すべきである。感覚・行動は人間・現実の中間に当たり、感情などより生現実化しやすい。行動の対象となる現実を理解する事で、人間全体を生現実化できる。

無認識感情も重要であり、一步引いて環境に対する感情を見る必要がある。習慣的に過剰な食事を取っている場合、認識を止めれば過剰さが見える可能性がある。これは「ふと」現実に戻る事にも繋がる。



行動・環境における人間的無駄を無くす

図 3-12 行動と人間・現実

3.2.4. 下落成果と暴力

長期的な問題の起こりやすい短期生満足が幾つかある。行動により一時的に生満足が上がるが、その後で行動前より下落する成果を、下落成果と呼ぶ。生満足の上昇と下降の両方を時間開放して見なければならない。一方だけを見るのはどちらも閉鎖で誤りである。長期的に行動前より生満足が下がるのが問題で、これにより全体として生満足が低くなる。時間閉鎖して短期生満足だけを見ると問題が大きくなる。人間が生満足を得るための行動であり、放棄するのは誤りである。放棄するのではなく時間開放して長期的な悪影響が出ないようにしなければならない。過去・現在・未来を含めて時間開放した理解をする必要がある。

特に問題の大きい下落成果に暴力がある。動物において暴力は個体の影響明示のため様々な場面で使用されており、人間もそれに対する好意を持っている。また最終的に人間社会に反発する人間を矯正するために暴力は必須である。しかし暴力は容易に長期相互影響そのものを破壊してしまう。戦争によるインフラ破壊が顕著な例である。時間開放を考えると、暴力は長期相互影響の破壊による悪影響がないよう慎重に使用しなければならない。暴力そのものは人間の生感情なので完全には止められない。暴力による破壊を止めて、破壊のない暴力にする必要がある。これは戦争などでも同じである。

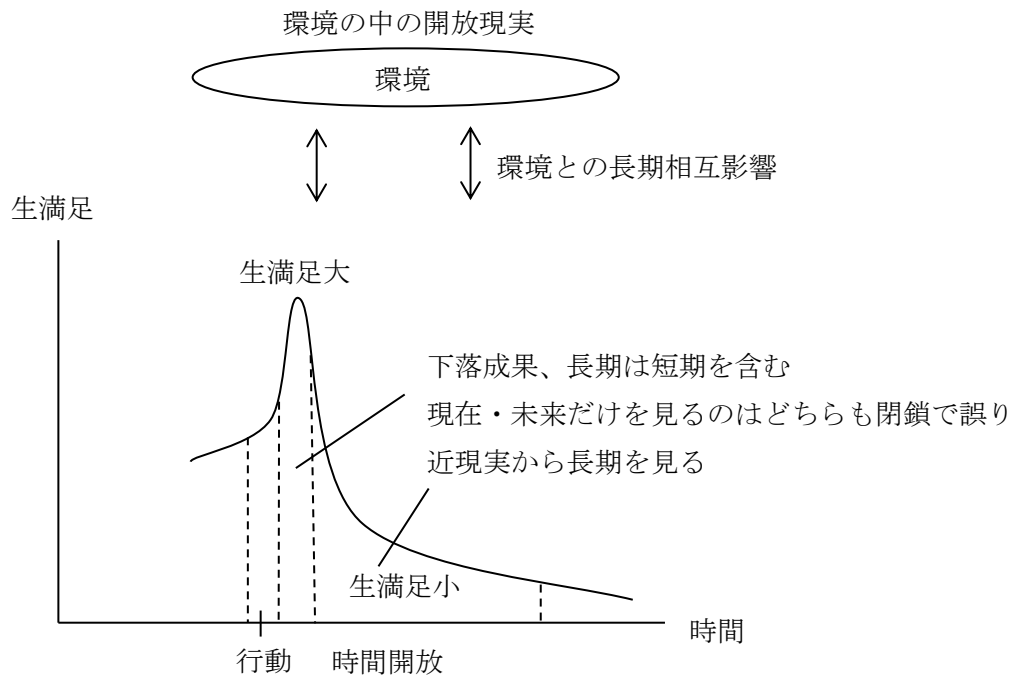
暴力の問題は、愚かで反社会的な人々が犯罪を行う直接的な理由になる。暴力も反社会性も時空間的な近辺閉鎖の一種である。それ以外に下落成果に麻薬、賭博、乱れた性行為、強い他者攻撃などがあり、多くは暴力に付随して発生する。恒常的に暴力を振るうのは動物的に見ても明らかな誤りである。猫でも理由もなく喧嘩はしない。賭博も成功した瞬間は満足が上昇するが、賭博の前と後を比べると大半は満足が低下する。よって下落成果の一種である。

下落成果のうち、成果が下がった未来側だけ見るのも閉鎖で誤りである。長期は短期を含み、現在から未来まで開放連続した理解が必要である。これは個人と社会を分離して社会だけ見る空間閉鎖的な誤りと直結する。社会的な正しさだけを閉鎖的に見ると、問題を減らした下落成果まで一律で禁止するような誤りを引き起こす。暴力や反社会が誤りなのと同じように、過度な穏健や社会秩序も誤りである。どの閉鎖も全開放する必要がある。近現実から時間的広域である長期を見る事で、正しい広域を理解できる。

二重人間のため人間の感情・感覚・行動はすべて誤りの可能性がある。感情・感覚・行動でなく生人間や生現実を求める必要がある。知性により生現実を理解しなければならない。暴力を含めて本能的・感情的なのは時間閉鎖で誤りである。知性を排した「本能」でなく、知的生物の生感情を理解する必要がある。長期相互影

響は常に存在しており、短期生満足だけを見るのは動物以下である。明確な理解を他者と連携させる事で開放的に繋がる。明確な理解が得られないなら他者から取得する方がいい。

行動は環境と長期相互影響しており、環境の中には開放現実がある。開放現実から生人間を見るのが正しい。人間よりも開放現実を元に判断する必要がある。暴力で物理的に破壊された環境では満足を得られない。開放現実を見れば二重自己の問題を回避できる。



暴力は長期相互影響を破壊、特に問題大

図 3-13 下落成果と暴力

問題のある下落成果を時間開放するには様々な方法がある。社会に適応した暴力であるスポーツは非常に優秀な方法である。ルールに従う限り長期相互影響の破壊は起こらず、運動不足の著しい現代人の健康促進にも役立つ。麻薬に対してはコーヒーや酒など問題の小さい嗜好食品が役立つ。ただし酒は扱いによっては非常に問題が大きくなるので慎重に扱う必要がある。実社会への影響が少ない遊びの中に閉じ込めるのも有効で、この方法は様々な事象に対処できる。空想・小説・マンガ・ドラマ・ゲームなどがこれに当たる。スポーツも遊びの一種と言える。

どの方法も正しく理性を働かせて時間開放しなければならない。本質的に問題の起こりやすい行動である事を理解する必要がある。スポーツ選手が暴力団に取り込まれるような状況は本末転倒である。小説などにおいても明確に実社会の破壊を示すものは排除すべきである。

無認識感情も重要であり、一步引いて下落成果を見る必要がある。暴力・麻薬・賭博などに捉われている時に認識を止めれば、これらを抑止する生感情が見える可能性がある。動物でも常に暴力を使っている訳ではな

いので、動物的な無認識感情でも過剰な暴力は抑止できる。感情が大きくても人間的なら誤りであり、現実的・生物的でこだわらないようにすべきである。

最終的な生満足は一つに統一されるので、他の生満足が高ければ、下落成果の最大生満足が多少低くても生満足は得られる。賢く社会的であれば他の生満足が得られるので、下落成果に囚われる可能性も低くなる。この事を教えるのも問題を減らすために重要である。

影響は常に相互に存在し、一方的支配感は閉鎖的な誤りである。下落成果を社会的に抑え込むのは本人にとっても正しい方法だが、広域を正しく見えないため誤って支配されていると感じる。自己の短期生満足も時空的な広域の一部であり、遠方との相互影響を正しく開放的に理解する必要がある。

3.2.5. 行動最適化

行動は連動した運動であり、行動の目的は生現実の長期生満足である。行動の結果となる長期成果から長期生満足を得る必要がある。生現実の正しい認識が必要で、常に知性により検証しなければならない。目的は認識上の評価でなく、行動を含む生現実の長期生満足である。行動の短期・長期成果を時空開放し、知性により長期相互影響を正しく理解する必要がある。

長期生満足は行動の種類ごとに違う。最大の生満足が得られる行動を選択する必要がある。これを行動最適化と呼ぶ。行動に関するパラメータを最適化する事になる。行動 $a(a=1\sim n)$ による生満足を $s_a(t)$ 、遠い未来になると下がる減衰率を $\gamma(t)$ とすると、下記の長期生満足を最大化する行動 a が正しい。行動種類の数 n を行動種類数と呼ぶ。生満足が減る状況なら最も減らない行動が正しい。何もしない事も行動の一種である。

$$\int \gamma(t)s_a(t) dt \tag{3-4}$$

これも強化学習における最適化と基本的に同じである。強化学習において、行動は累積報酬を最大化するように最適化される [29]。

行動最適化は行動する前に行い、認識を使って複数の行動を未来予測する。最大の長期生満足が得られると推測される行動を選択する。行動最適化のために二重自己が連動する。認識の中で複数の行動と行動最適化を模倣する必要がある。二重自己は曖昧であり正確な認識は困難である。現実から生自己へ開放する事で二重自己の問題を回避できる。

二重自己のため感情・感覚・行動のすべてに誤りの可能性がある。生自己や生現実に基づく行動最適化が正しく、認識上の行動最適化は誤りである。知性がないか誤った知性による行動最適化は生現実に向かわない。認識でなく、認識外の生現実に基づく行動が正しい。現実から生自己へ開放する必要がある。形式的な行動は誤りであり、現実的な行動を行うべきである。行動は環境と長期相互影響しており、環境の中に開放現実がある。開放現実を理解する事で二重人間の問題を回避できる。

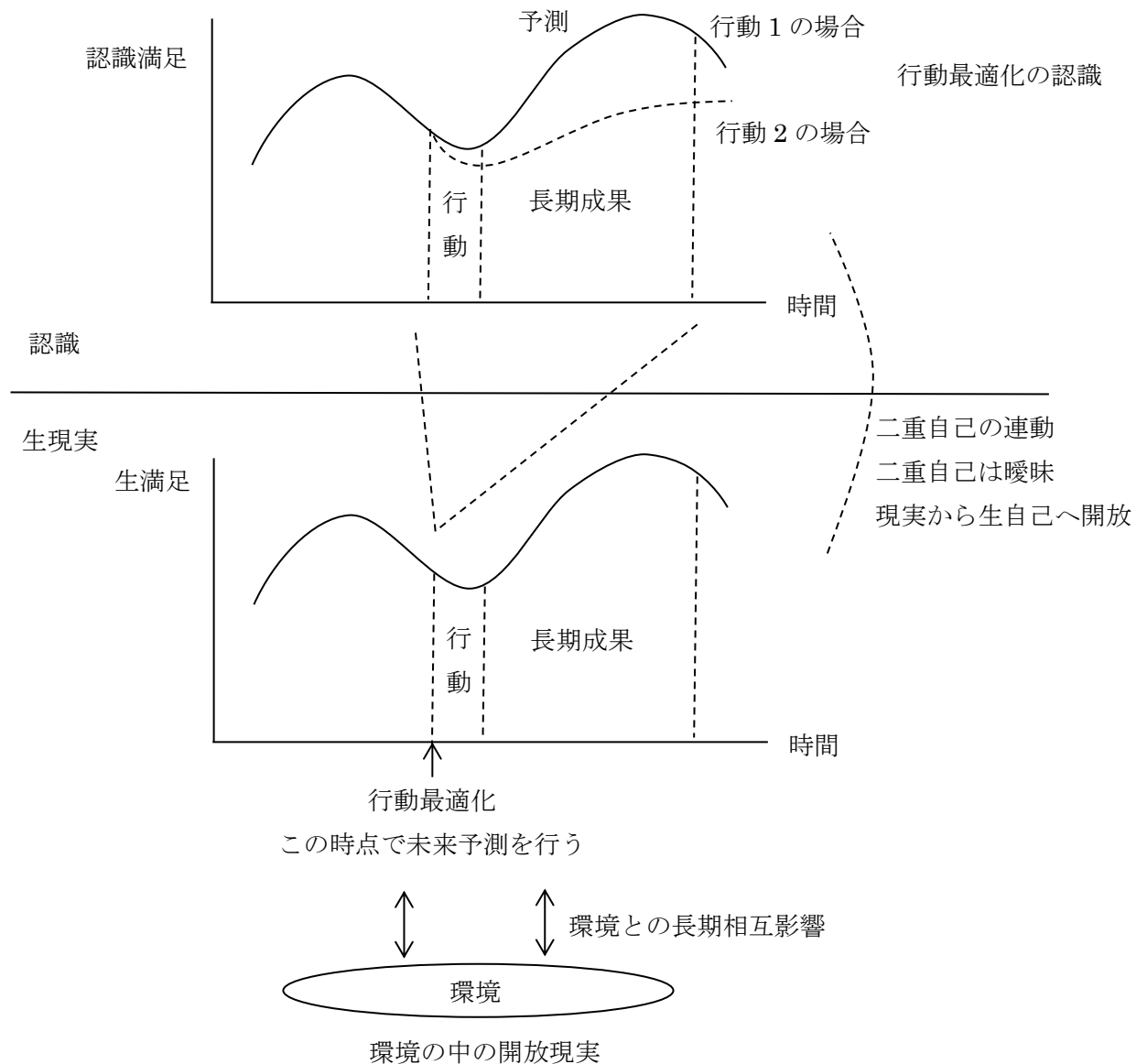


図 3-14 行動最適化と認識

正しい行動最適化のためには未来予測が必要である。一時的に生満足が下がっても、行動を含む長期生満足が得られる行動が正しい。行動最適化も長期生満足を目指すべきである。下落成果を閉鎖的に見て、短期的に行動最適化するのは誤りである。時間閉鎖した暴力や麻薬等の行動最適化は、正しい行動最適化ではない。

行動種類数を増やす事が目的でなく、長期生満足上げて最適化する事が目的である。行動種類数が1つしかなくても、それが最大の長期生満足を得られるなら、その行動最適化が正しい。長期生満足が低い行動種類を増やしても意味がない。

他者に対しても、関係性を無意味に増やして行動種類数を増やすのは意味がない。関係性を増やす事により生満足が減少する可能性もある。強い開放により強い関係を持つと理解するのは誤りであり、正しい開放を理解する必要がある。

行動種類数が増えると複雑になる。長期生満足は複雑な行動種類に対する明確な規則であり、これによって人間の行動を解析できる。

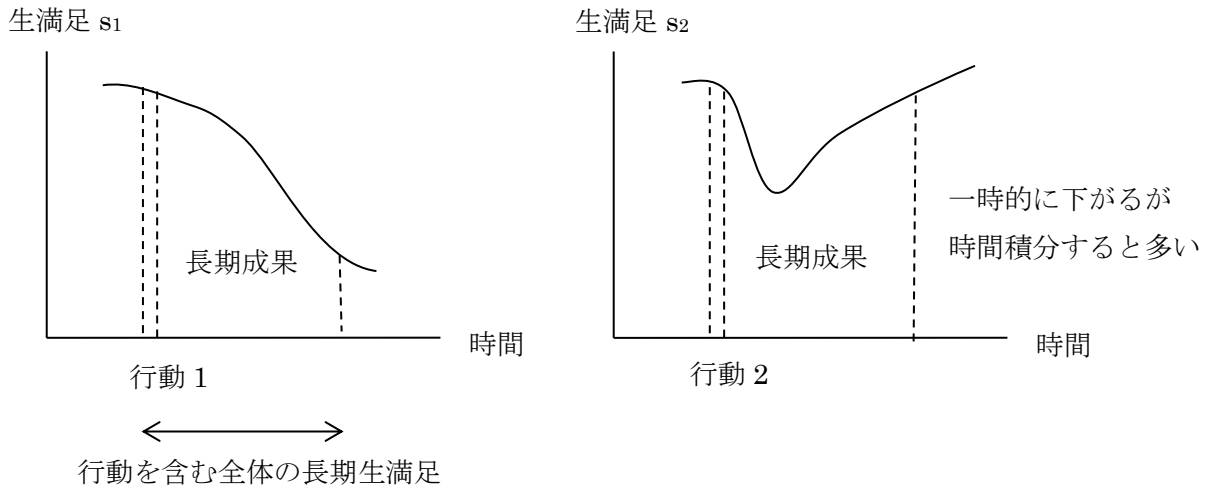


図 3-15 行動最適化と長期生満足

3.3. 行動と局所・広域と自由

3.3.1. 局所・広域行動

局所的な行動を局所行動、広域的な行動を広域行動と呼ぶ。行動の範囲は自己と直接影響がある範囲とする。時間的な局所・広域行動は、短期・長期行動になる。

広域行動は時間と空間で違いがある。自己は空間的には一か所しか存在しない。移動しながら空間広域行動を行っても、一時的に見れば局所行動しかない。自己は時間的には連続して存在している。長期行動は生存期間内なら時間の全部を占める。

局所・広域行動とも、行動最適化は広域的でなければならない。局所的な行動最適化を行っても、局所解でしかなく意味がない。行動の間接的影響は常に時空間的な広域に及ぶため、行動可能範囲外の広域を見る必要がある。評価基準は常に長期生満足である。

広域行動は広域に直接影響する行動である。行動最適化は広域でなければならないが、行動は必ずしも広域である必要はない。広域行動は行動最適化の選択肢の一つでしかない。

時空間の局所・広域行動は、常に環境との長期相互影響がある。環境まで考慮した行動最適化が必要である。それに基づいて局所・広域行動を選択しなければならない。環境は他者と現実であり、特に開放現実の理解が重要である。

最終的な目的は長期生満足であり、局所・広域行動中の生満足も重要である。特に長期行動の場合は長期生満足への影響も大きい。長期行動時に生満足が低下するなら、成果でそれに見合う生満足増加が必要になる。成果が行動時の不満と釣り合わなければ、苦勞して行動しても意味はない。行動が短期であれば生満足減少も大きな問題にならない。

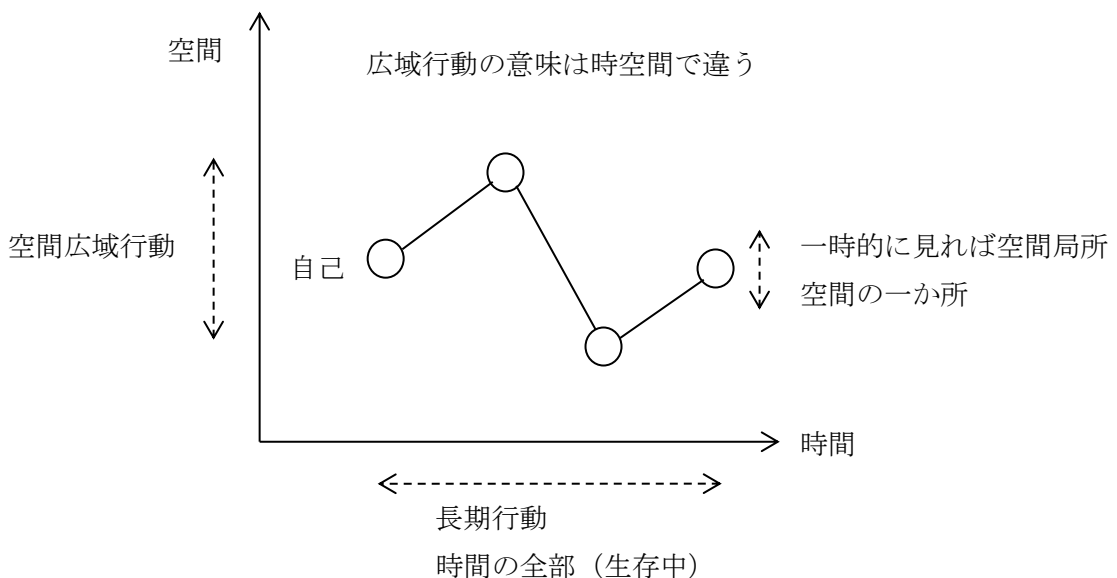


図 3-16 時空間の広域行動

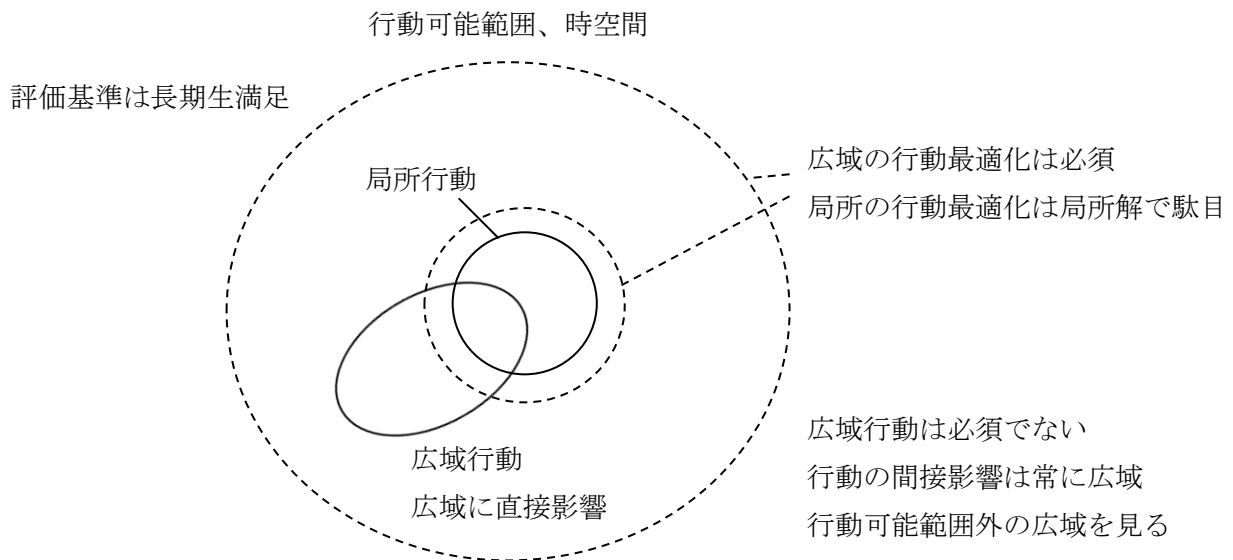


図 3-17 局所・広域行動と行動最適化

3.3.2. 行動と局所広域閉鎖

生現実の広域は局所を含み、重なりつつ近辺から遠方へ開放連続して広がる。遠方は重要でないが、広域は重要である。局所と広域が並列して閉鎖分断するのは誤りであり、開放しなければならない。相互生満足を理解する必要がある。相互生満足は満足感でなく生息状況である。近辺・遠方の閉鎖と、局所・広域の重なり排除により起こる。元の誤りは近辺・遠方の閉鎖なので、それを修正すれば修正できる。

時間的な局所・広域は短期・長期である。空間的な局所・広域には自己・社会などがある。これらに対して近辺・遠方を全開放し、局所・広域を正しく理解する必要がある。局所と広域が並列分断した状態ではなく、近辺・遠方として全開放しなければならない。二重人間のため人間の理解だけでは局所広域閉鎖を修正しにくい。開放現実から生人間を見る事で、局所広域閉鎖の問題を解消できる。明確な近現実から広域を見るべきである。

局所広域閉鎖により様々な問題が生じる。感情や行動に関しては生満足、相互影響、成果、行動、行動最適化のすべてに局所広域閉鎖による問題が起こり得る。近辺へ時間的に閉鎖すると暴力、空間的に閉鎖すると反社会の問題が起こる。逆に遠方に閉鎖すると過度な穏健や社会秩序の問題が起こる。閉鎖により近辺と遠方が遠くなる。本音・建前や不良・善良などの閉鎖は普通に存在する。感情や行動に関する時空の近辺・遠方のすべてを、正しく開放連続して理解しなければならない。

最終的な評価基準は長期生満足であり、局所を含む広域を理解する事は必須である。生満足、相互影響、成果、行動最適化はすべて広域的に理解しなければならない。広域の理解さえできれば、広域行動は必ずしも必須ではない。局所行動が最適であるなら選んでも問題はない。

広域・長期・社会を見た時に、局所・短期・自己が抜けるのは閉鎖的な誤りである。自己の生感情にも対人・社会に連動する規則が必ず存在する。それを正しく理解できれば対人・社会への対応も容易になる。

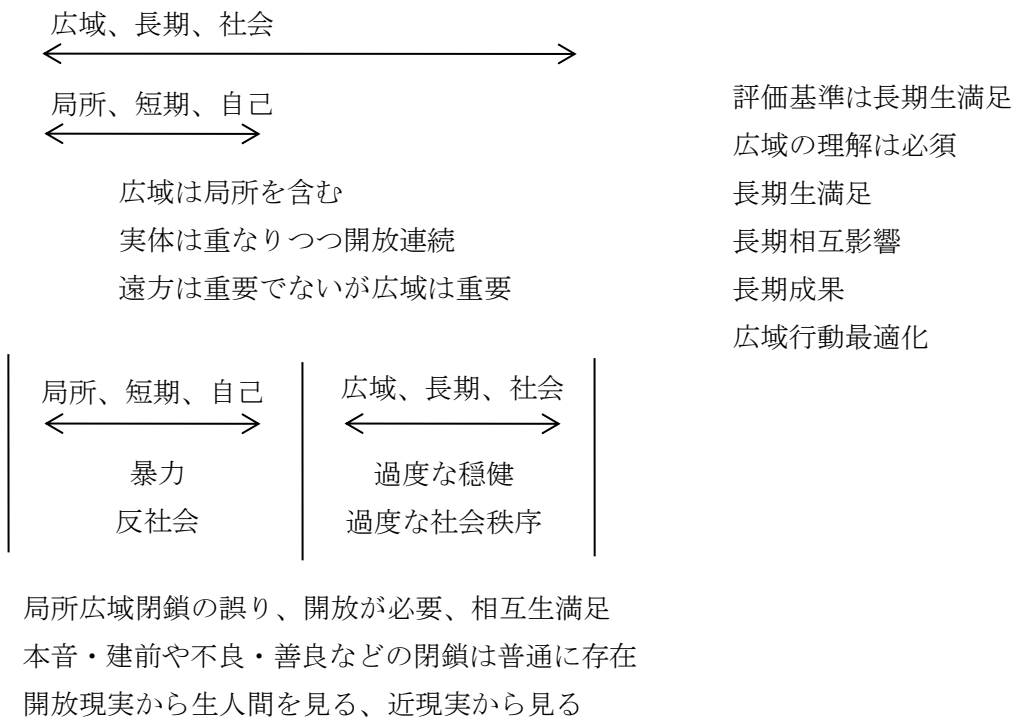


図 3-18 行動と局所広域閉鎖

未来側で長期閉鎖すると、現在で分断して過去まで連続しない。過去側も同様のため過去長期閉鎖と未来長期閉鎖も分断する。全体が開放した正しい長期でなければ未来を正しく理解できない。過去の重要性は低い、未来への開放連続の理解は重要である。

時空の近辺から遠方まで、様々な局所広域閉鎖があり得る。時空の片方だけが閉鎖される状態は不安定で、長期的に見れば時空両方が閉鎖・開放のどちらかになる。時空の近辺と遠方の組み合わせにより、個人暴力、逃避穏健、暴力的カルト、過度な管理社会などがある。多閉鎖で同時に持つ場合もあり、中間的位置も様々な種類があり得る。これらすべてを近辺から遠方まで全開放する必要がある。1つ閉鎖があるだけでも全開放しなければならない。開放現実から生人間を見るのが正しい。

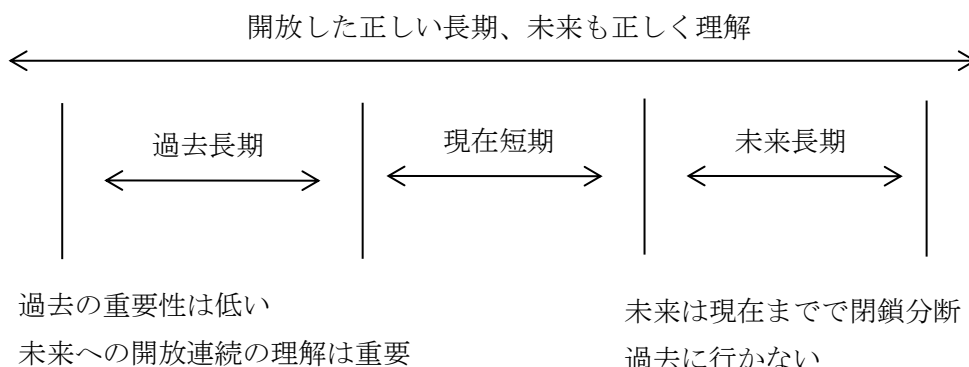


図 3-19 長期閉鎖と過去・未来

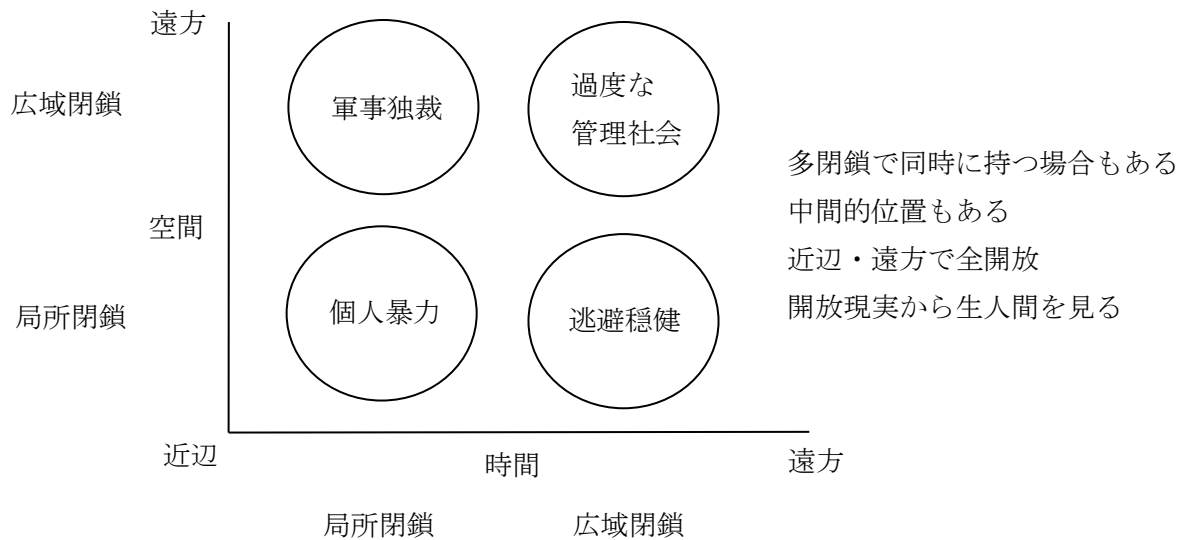


図 3-20 様々な局所広域閉鎖

3.3.3. 曖昧な自由

行動最適化に良く似た概念に「自由」がある。しかし自由は人間的で曖昧であり、解析には使えない。自由は自己に関する意味合いが強く、二重自己の悪影響を受ける。自由に関連する概念を厳密に分解すると、満足、自律性、行動種類数などがある。自由はこれらが曖昧に混在している。

行動最適化は行動におけるパラメータの最適化である。行動は環境との長期相互影響しており、環境の中に開放現実がある。開放現実まで見れば行動最適化は現実的で明確である。現実的で解析的には自由でなく行動最適化を使う必要がある。行動最適化も人間の行動であるため、二重人間の問題がある。開放現実まで見る必要がある。

行動最適化においては長期生満足が評価基準である。長期生満足が最大の行動最適化が正しく、自律的な行動最適化である必要はない。自律的だと認識の誤りのために不幸になる可能性がある。行動種類の多さとも無関係である。行動種類が1つでも、それが最大の長期生満足なら正しい。長期生満足の高い行動種類しかない行動最適化は誤りである。

動物においては、食料が多いと縄張りが小さく、食料が少ないと縄張りが大きくなる状況が良くある。これによって食料の入手が均等化される。食料が少なく縄張りが大きい方が自由に見えるが、それで幸福になる訳ではない。

行動最適化の評価基準は長期生満足である。自由を求めて長期生満足が得られないなら、その自由は誤りである。長期的に不幸になる自由などない。長期生満足が得られれば不自由でも問題ない。自由を求めるだけでは曖昧で意味がない。

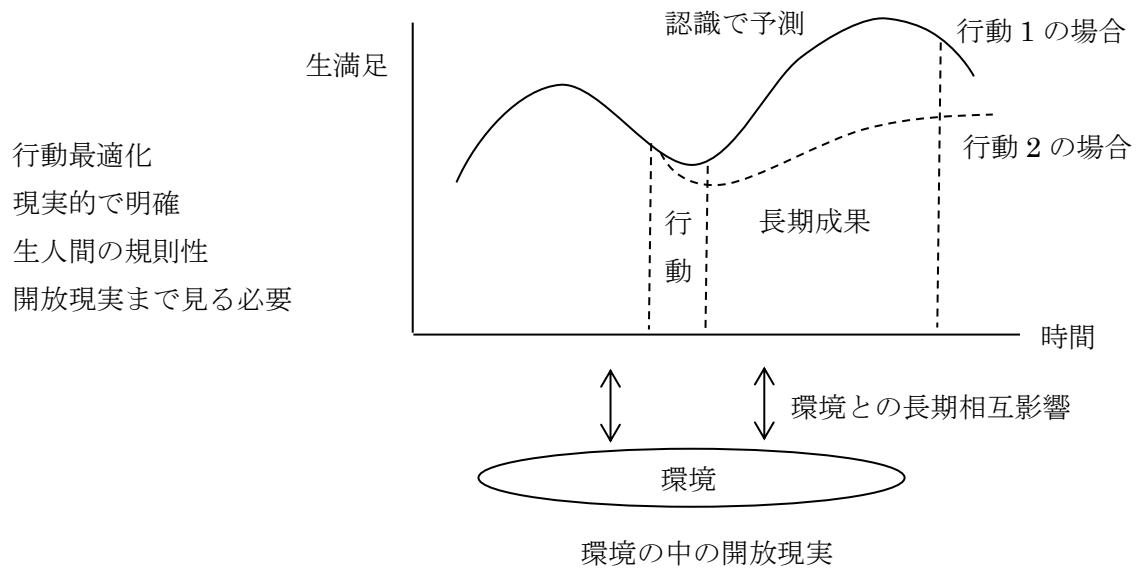
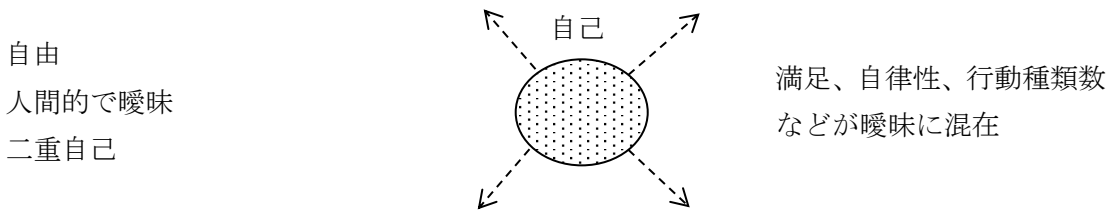
自由自体に満足の意味が含まれているのは大きな問題である。生満足が得られなくても、自由であると認識するだけで満足だと誤解してしまう。曖昧な自由を求めるのではなく、正しい生満足を求めなければならない。

認識による曖昧な「自由」を正しいとすると、生物として正しい方向に行かない。生物はマイクロな遺伝子やマクロな生活環で見れば規則的である。自由は曖昧で行動種類が多く不規則になる。自由を追い求めれば、生人間が本来持つ規則性を失う事になる。

人間の生感情にも遺伝的な規則性がある。動物的な感情の上に、知的な感情が加わったものである。規則性

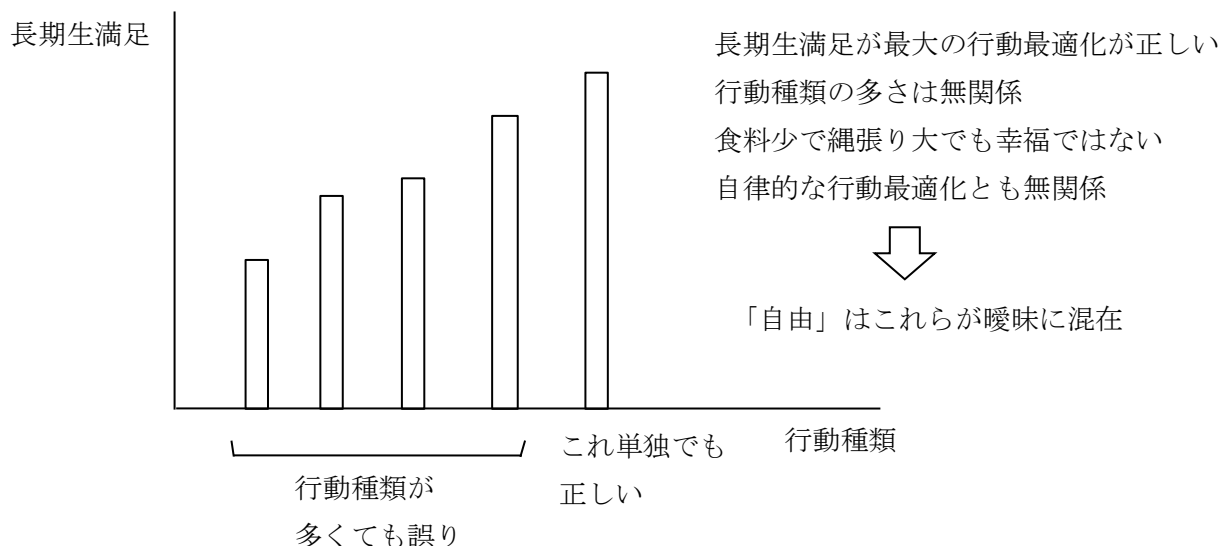
のない「自由」では、本来生感情が持つ規則性からも離れてしまう。曖昧で人間的な「自由」を正しいとみなせば、生満足を得る事はできない。規則性のない自由でなく、遺伝的な規則を求めなければならない。

人間的な自由に関われるのでなく、現実から生人間を開放的に見るべきである。曖昧な自由では時空遠方と繋がる開放を理解する事はできない。現実から見る事により正しい行動最適化を理解できる。



行動最適化
現実的で明確
生人間の規則性
開放現実まで見る必要

図 3-21 自由と行動最適化



規則性のない自由でなく、遺伝的な規則を求める必要

図 3-22 曖昧な行動種類と自由

反社会性と下落成果は直結しており、時空間的な局所広域閉鎖により発生する。時空間閉鎖した行動最適化は誤りである。誤って閉鎖した本能的・感情的な認識は、社会からの空間閉鎖と共に、時間閉鎖による下落成果を伴う。相互影響により社会的抑圧や長期的影響を受けるが、閉鎖により誤って一方的支配感と感じてしまう。それに反する局所は閉鎖した自由となる。自由と支配の分断は局所広域閉鎖による誤りである。実際には開放した時空の相互影響により連動している。自由も支配も開放して生満足に向かわなければならない。

時空開放した長期相互影響を理解しなければならない。愚かでも正しい開放認識を持っていれば、他者から正しい明確な認識を受け入れて長期生満足を得る事ができる。明確な近現実から見る事で、正しい時空広域を理解できる。

自分だけが生満足を求めるのではなく、個人ごとに生満足を求める。人間には社会性があり、開放した正しい生満足であれば自己中心にはならない。自由が自己中心になるのは、生満足から切り離されて他者と閉鎖分断するためである。相互生満足に基づく正しい信頼が必要である。誤った自由を持つと、生満足が得られず自分にも他者にも生不満をもたらす。

自由は反社会的になる可能性がある。犯罪を行えば社会から排除されて生満足を失う。自己中心的な自由は誤りであり、犯罪を行う自由はない。現実的に考えれば、反社会的な生き方が誤りなのが分かる。暴力団・強盗などは現実的に正しくない。反社会的な小説などを「表現の自由」として許容するのは誤りである。

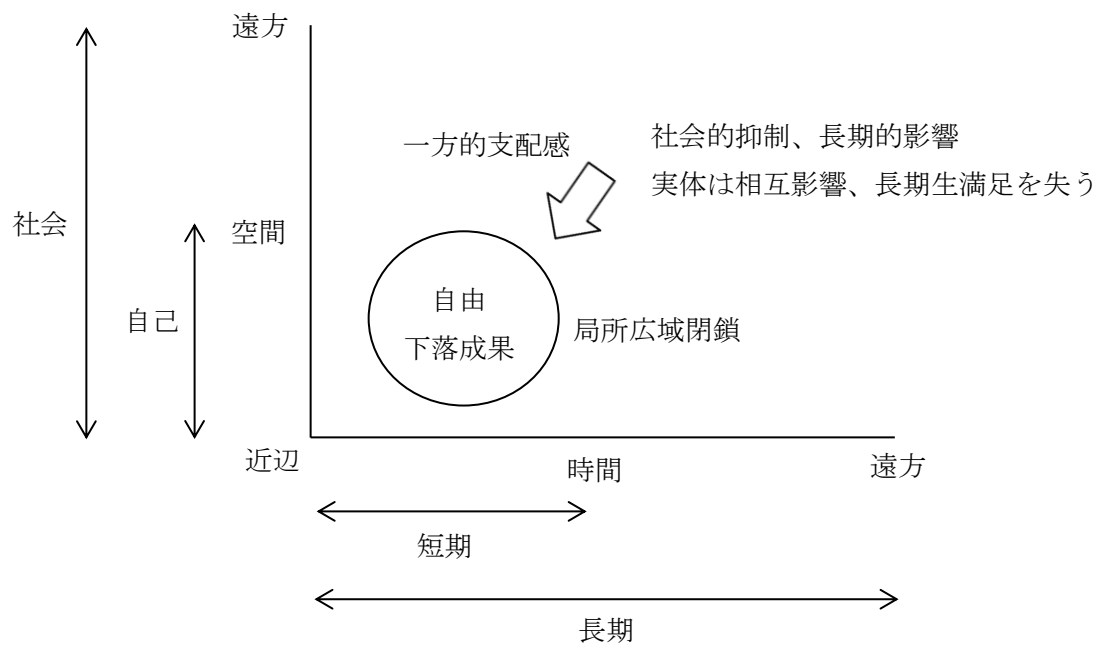


図 3-23 自由と局所広域閉鎖

3.4. 実規則化

3.4.1. 実規則化

生現実が規則的でモデルが高正確なら推測は容易になる。規則的なら行動も規則に合わせて実行できるため、推論も行動も高性能になる。不規則の規則化が重要である。

規則を発見できればモデルを規則化できるが、必ずしも規則があるとは限らない。生現実自体を変更して規則化できれば、規則がない状態から規則を作り出す事が可能になる。これを実規則化と呼ぶ。実規則化は行動により生現実の一部を規則化するものである。規則発見も実規則化も、高正確により生満足を得るのが正しい。

実規則化は生現実において規則を構築する事であり、規則そのものは生現実上にある。認識上の規則がそのまま実規則化できる訳ではない。生現実上で実規則化できる事を発見する必要がある、これは規則発見と同じである。

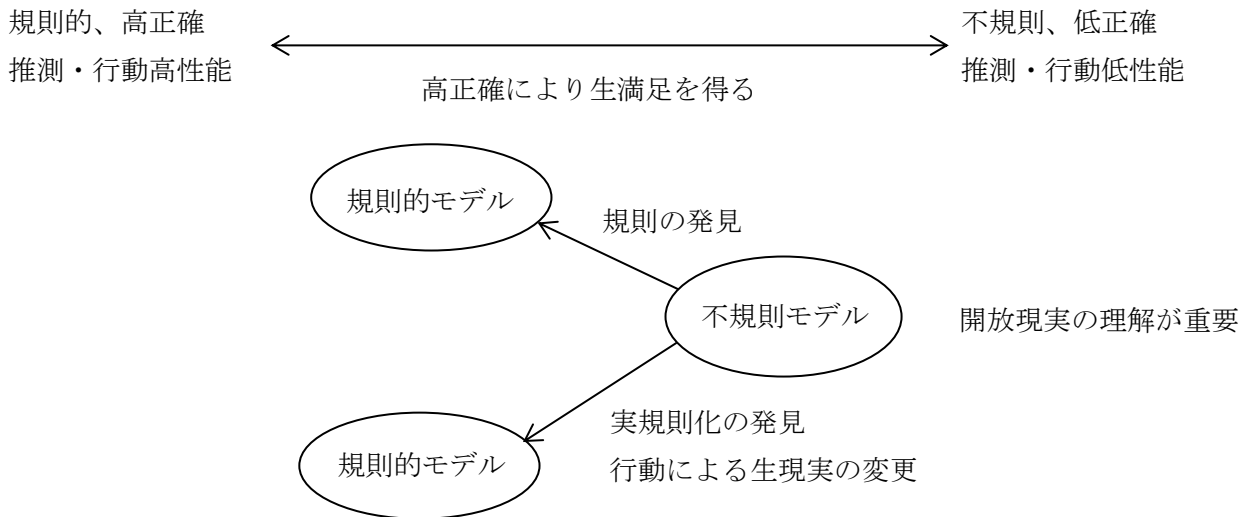
生現実には反復・統合・区分・連動・流動など無数の規則がある。これらを含めて考えると、生人間の行動において実規則化は一般的である。ただし規則ごとに正しさの違いがあり、必ずしも高正確な実規則化が行える訳ではない。できるだけ高正確な実規則化を探す必要がある。実規則化においても開放現実の理解が重要である。

実規則化により認識の正しさを向上するには、認識と実規則化の一致と、規則の明確が必要である。これらを得るためには、明確かつ生現実に近い認識を持つ必要がある。これは規則発見と同じである。実規則化が「認識上の規則」をすべて実現できる訳ではない。生現実に対する高正確な認識がなければ、有効な実規則化を行う事もできない。

規則発見と同じく、実規則化の発見も推論や実験選択によって実現できる。生現実の情報を実験や観察などで収集できて、推測の元となる規則を知っていれば、推論で実規則化を発見できる。推論による実規則化の発見は効率的だが汎用的ではない。実験選択は推論がほとんど不要で汎用的だが、効率は悪くなる。

認識ならば常に簡単に規則化できるが、生現実には必ずしも規則化できるとは限らない。生現実を規則化する方法を探す必要がある。認識や知性は実規則化の手段であり、認識だけを規則化しても生満足増加に繋がらないので意味がない。

実規則化は一般的ではあるが、すべての行動が実規則化である訳ではない。同形の繰り返しや、複数のものをまとめていけば実規則化になる。個人の習慣や複数人に対する契約は実規則化である。機械装置も実規則化になる。



実規則化も生現実上の規則、認識上の規則ではない
認識通りに実規則化できる訳ではない
規則発見と同じく、実規則化の発見も推論や実験選択

図 3-24 規則の発見と実規則化

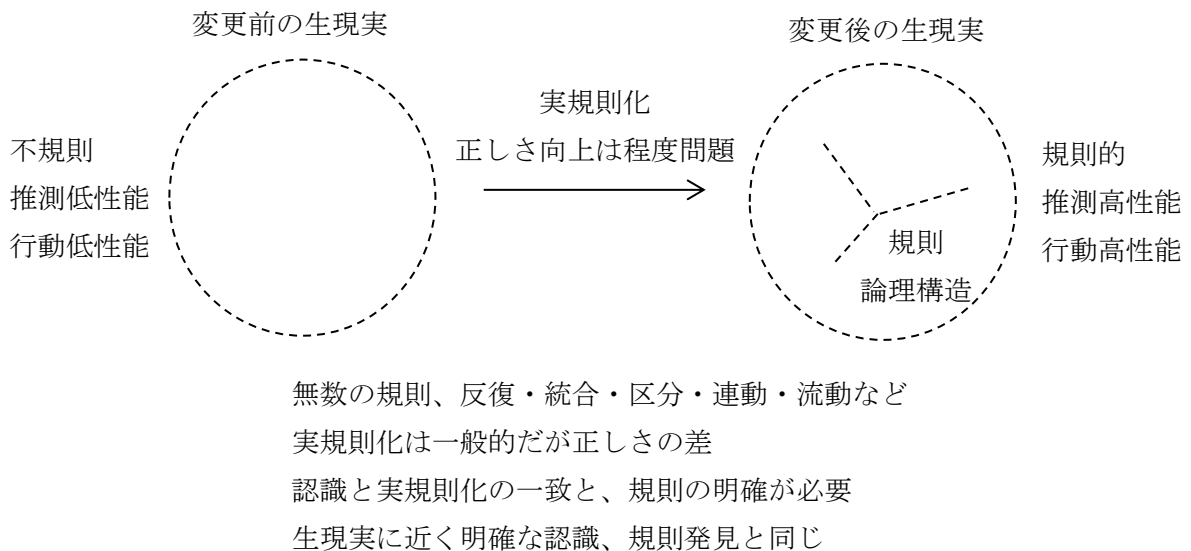


図 3-25 実規則化

すべての生命活動の目的は生満足であり、実規則化においても生満足を含めた形で規則を見る必要がある。生満足への影響が小さい実規則化を行っても意味がない。生満足への影響が大きい実規則化を行うべきである。

認識や行動を含め、生命活動はすべて長期生満足の増加が必要である。実規則化においても生命活動としては長期生満足を求めなければならない。実規則化は規則発見と比べ、成立させるまでに時間がかかる。また外部環境も使用する場合があります、その分だけ長期生満足が減る可能性がある。実規則化は規則発見よりも長期生

満足重視する必要がある。

生満足を得られる実規則化を作成する必要がある。開放現実を使えば明確な実規則化を作成できる。人間的な実規則化では曖昧にしかならず、生満足を得る事ができない。

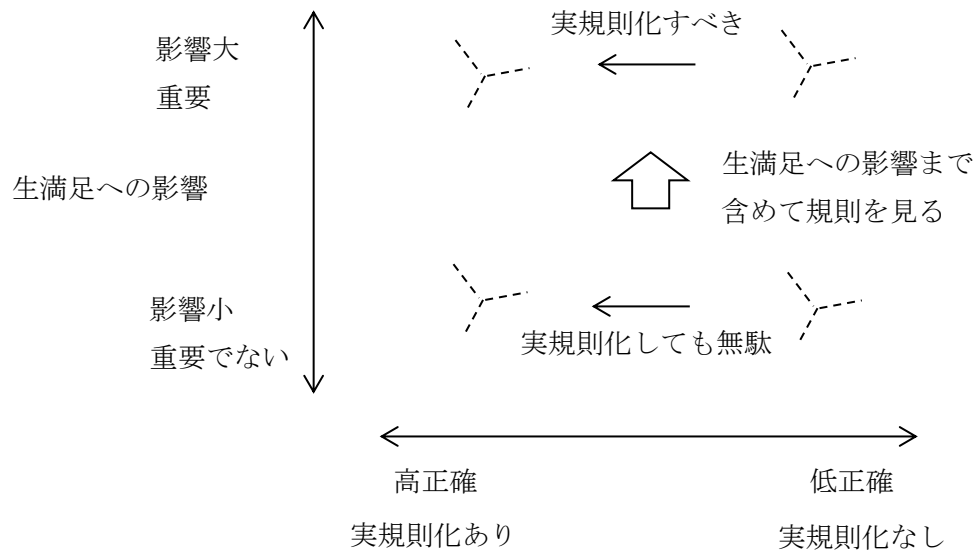


図 3-26 実規則化と生満足

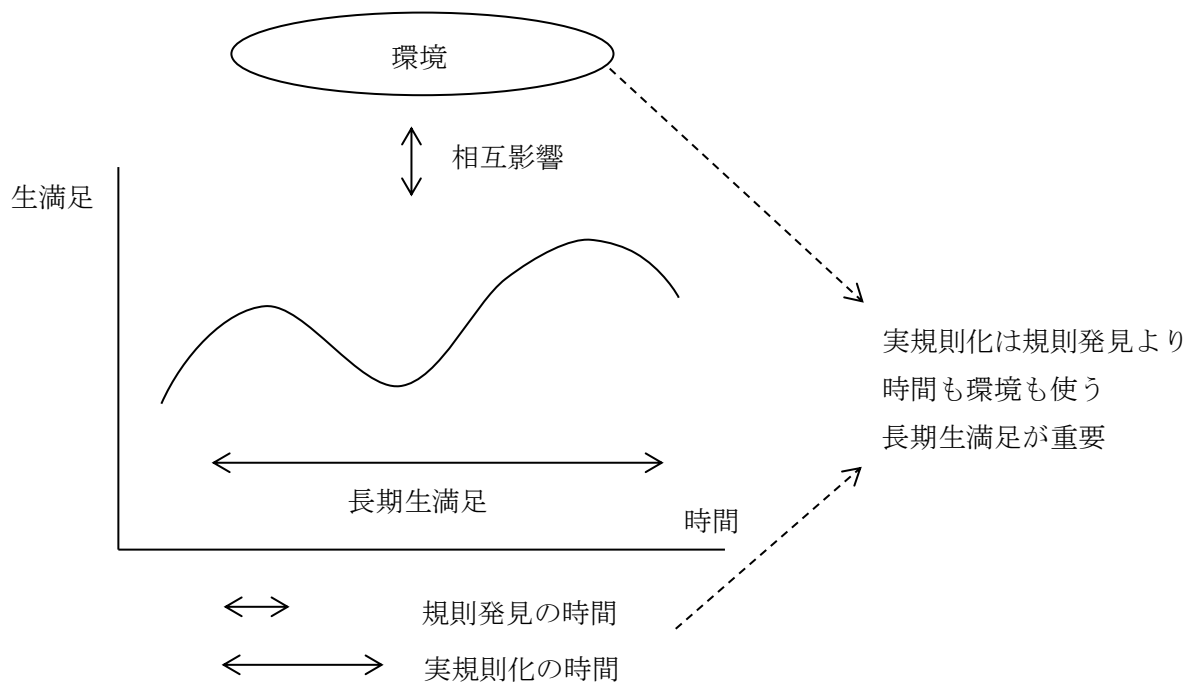


図 3-27 実規則化と長期生満足

3.4.2. 行動・環境実規則化

行動の実規則化を行動実規則化、環境の実規則化を環境実規則化と呼ぶ。環境は他者と現実である。自己と他者で連動した行動実規則化を行う場合、自己の行動実規則化と、自己から見た他者の環境実規則化が連動する事になる。現実の実規則化は、行動により現実を変える作業が必要になる。行動・環境実規則化とも、認識上でなく生現実上の規則である。

実規則化により環境との長期相互影響を強化できる。環境の中の開放現実を通す事で、強い実規則化を行う事ができる。実規則化も開放現実から行うべきである。開放現実の実規則化の上に、開放現実から生人間への実規則化を付加すれば、二重人間の問題を回避して人間を実規則化できる。これにより高正確である実規則化が可能になり、生満足に繋げる事ができる。

行動・環境実規則化とも、過去の実規則化を流用して行動する場合もある。作成した機械の利用や、熟練作業などがこれに当たる。既存の実規則化を修正する作業も実規則化の一種である。既に実規則化されて動いている状態であれば、再度実規則化をしない限りは変えられない。問題がある実規則化を作り直す作業が必要になる。行動実規則化に問題があると認識しても、それを非難するだけでは意味がない。

生命活動の目的は長期生満足である。生命活動としての実規則化も長期生満足を求めなければならない。自分の行動の実規則化だけでなく、すべての規則を考慮した行動最適化を行う必要がある。これには自己・他社の行動実規則化と環境実規則化が含まれる。また新規実規則化と既存実規則化の流用も、両方を考慮する必要がある。

実規則化による相互影響強化の方向性が重要で、誤った方向に強化すれば生満足が得られない。科学技術の発展は実規則化による成果だが、大量破壊兵器を作っても人類が破滅に近づくだけである。これは大量破壊兵器に対する生人間の規則理解が低正確であると言える。実規則化を含むすべての規則の理解を高正確にして、長期生満足に繋げなければならない。

生物は遺伝的規則に基づく規則性を持っており、粘菌でも最適化計算を模倣できる。生人間にも生物としての規則性がある。生物としての規則性により、行動実規則化の実現可能性と評価に制約が生じる。行動実規則化を生物としての規則性に合わせる必要がある。会社の就業時間を1日半にすれば、従業員の健康を損ねてしまう。

生命活動の評価基準は生満足であり、行動や環境変更の性能ではない。行動や環境変更の性能は認識上の評価となる場合があり、注意する必要がある。生物的な原則から離れたら正しい評価はできない。旅行する過程が楽しい場合もあり、旅行の速度が早ければいいというものでもない。

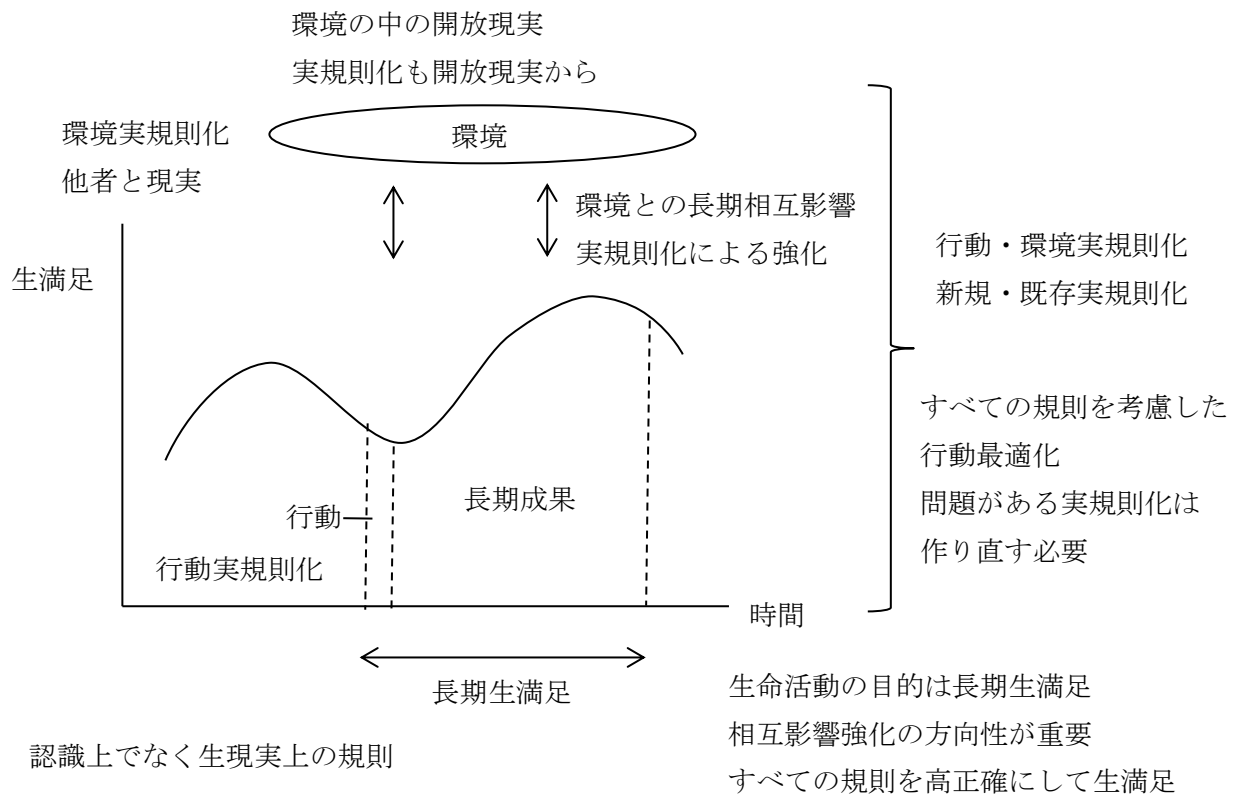


図 3-28 行動・環境実規則化

3.4.3. 人工物と自然物

現実を人工物と自然物に分ける。人工物は、強い実規則化で自然物の規則を変更した物である。人工物は「自然に」自然物へ戻る。これは人間による実規則化とは別の働きである。

環境の中の開放現実が重要であり、開放現実には人工物と自然物が含まれる。生物は人工物の一部と人間であり、人間の特性は自然物に近い。人間の行動は主に人工物との相互作用で成り立っており、影響としては人工物の方が近い。人工物と自然物に対する人間の「近さ」に意味の違いが生じる。これらを開放現実により正しく理解する必要がある。

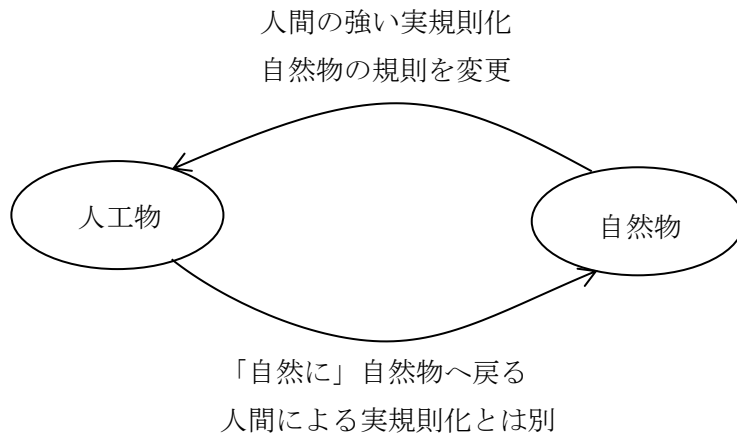
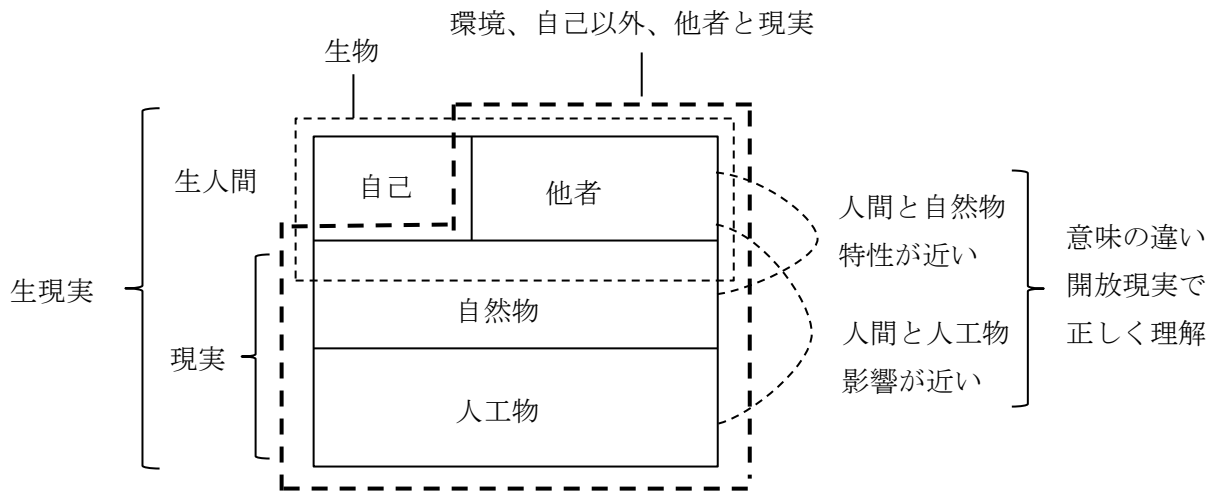


図 3-29 人工物と自然物



環境の中の開放現実が重要、人工物と自然物

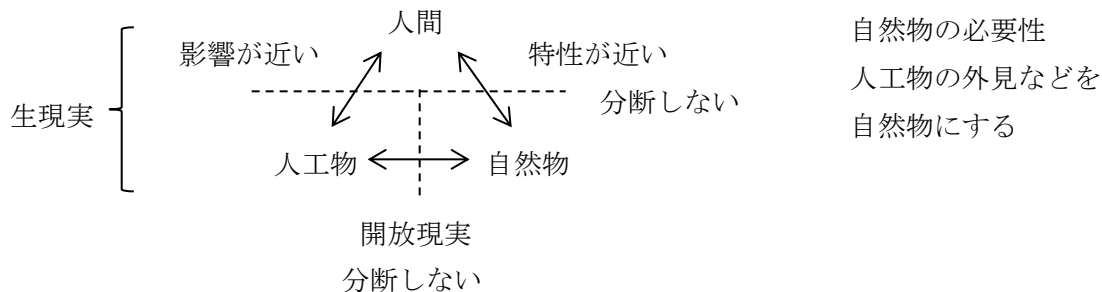
図 3-30 人工物・自然物と人間

人工物は人間と影響が近い。自然物は人間と特性が近い。人工物と自然物で開放現実を形成し、人間を含めて生現実を形成する。これらの3者を分断しない事が必要である。人間は二重人間のため理解しにくい。開放現実を形成する人工物と自然物から、生人間を開放的に理解しなければならない。3者の関係性を正しく理解する事が重要になる。

人間を誤って人工物的に理解すると、生人間を正しく理解できない。生人間を理解するには自然物の存在が必須である。何らかの形で人間の近くに自然物を置く必要がある。空など常に存在する自然物を見るのが正しい。人工物の外見などを自然物にする、という方法もある。感情から見れば、便利な人工物と美しい自然物、という認識が正しい。逆に、便利な自然物と美しい人工物、と言う認識は誤りである。

自然物の存在を理解する事で、生物としての感情から開放現実につながる。人間は人工物的でないが、人工物との繋がり重要である。人間の能力の根源にあるのは人工物である。自然物の理解と共に、人工物も正しく理解しなければならない。

人工物や自然物を対象とする場合も、人間の生命活動の目的は生満足である。人工物や自然物を扱って生満足を得られなければ、その行動は誤りである。人類が減びるような核兵器を大量に作っても意味はない。過度な自然保護により人間を不幸にするのも意味がない。



開放現実の人工物・自然物から生人間を開放的に理解
人工物や自然物が対象でも、人間の生命活動の目的は生満足

図 3-31 人工物・自然物と開放現実

3.4.4. 内・外実規則化と局所・広域

実規則化の対象となるまとまりに対し、内側を実規則化する事を内実規則化、外側を実規則化する事を外実規則化と呼ぶ。内実規則化すると内部構造が変わるため、必ず人工物になる。自然物でも内実規則化すると人工物になる。外実規則化は内実規則化と違い何でも可能であり、人間の行動でも外実規則化できる。自然物・人間は外実規則化のみ可能である。内・外実規則化とも、認識上でなく生現実上の規則である。

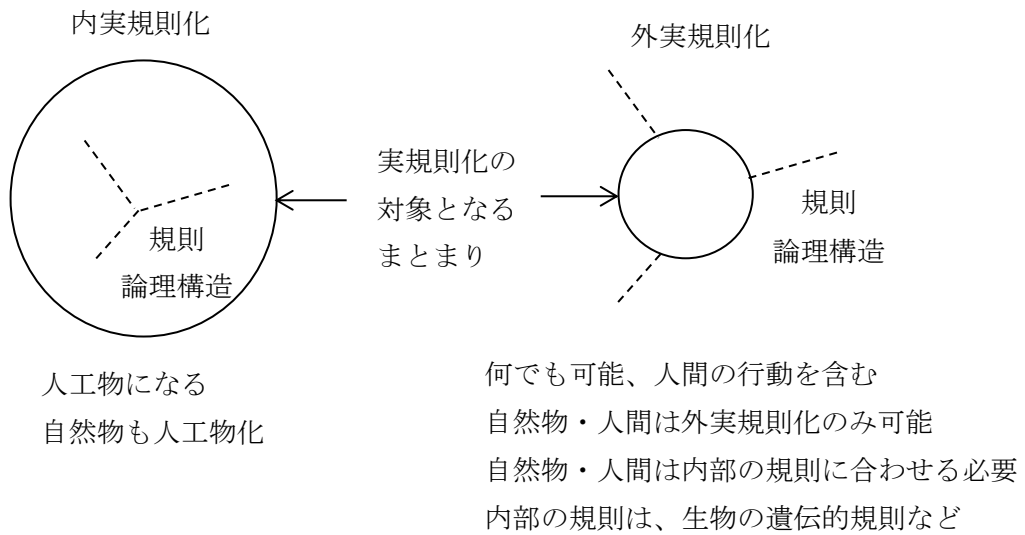
人工物と自然物・人間を分けて、内・外実規則化を考える。図 3-33 において太枠内の矢印が実規則化である。人工物・自然物・人間と、内・外実規則化の 2 軸で分析している。

人工物はどんな実規則化も可能である。まとまりの内部・外部を変更する事もできる。これを分割・統合実規則化と呼ぶ。自然物と人間は、外実規則化か人工物化しかできない。

自然物・人間を実規則化する際は、内部の規則に合わせなければならない。内部の規則には、生物の遺伝的規則などがある。実規則化に制約がある自然物や人間は、内部の規則を理解する事が重要になる。自然物や人間でも不規則になる訳ではない。

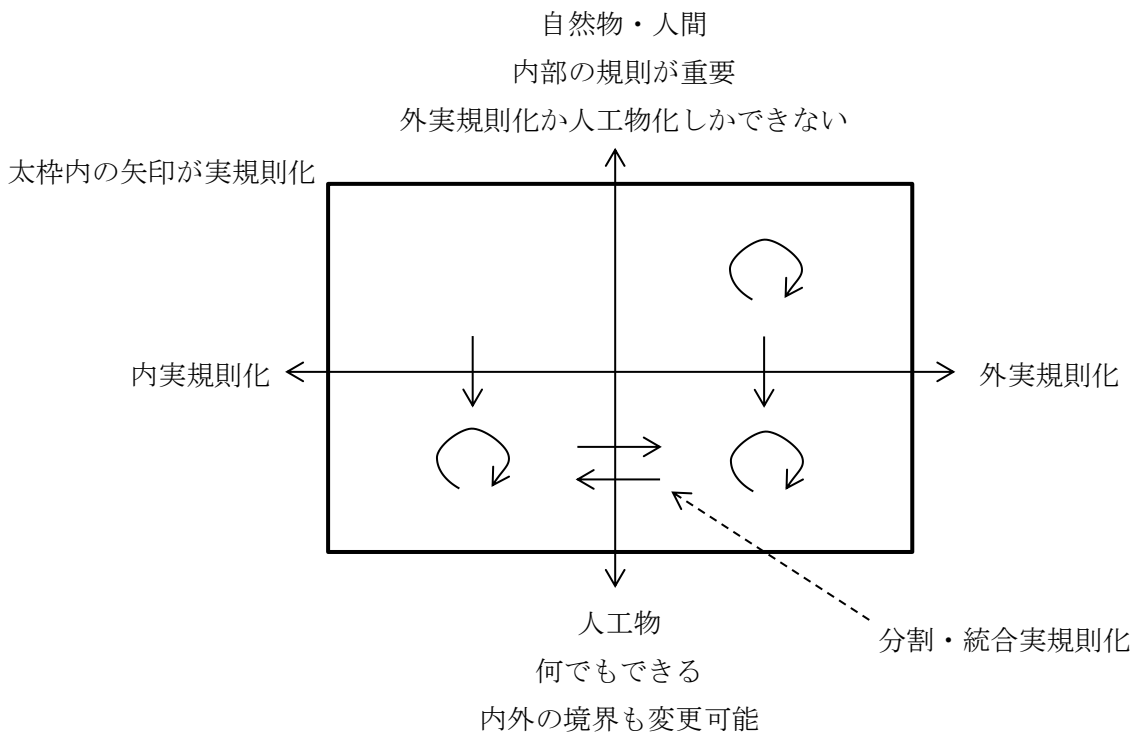
生物は自然物の一部と人間である。人間を含む生物は人工物化できない。人間で人工物を入れられるのは骨折の治療など極一部であり、それも内部構造とよく適合する形式にしなければならない。これは人間の人工物化とは言えない。生物を人工物化するには殺すしかない。人間の人工物化はできないが、人間と人工物との繋がりは重要である。

自然物は外実規則化でも人工物になり得る。川の水を容器に入れれば人工物である。流水と言う規則が容器内という規則に変更されたと言える。これに対し、生物は外実規則化でも人工物にはならない。生物は生命活動と言う強い規則を持つため、殺さない限りは人工物にならない。川の水と小魚を容器に入れても、小魚の規則はまったく変化しない。



認識上でなく生現実上の規則

図 3-32 内・外実規則化



生物は自然物の一部と人間、生物の人工物化は殺すしかない

図 3-33 内・外実規則化と人工物・自然物

局所的な実規則化を局所実規則化、広域的な実規則化を広域実規則化と呼ぶ。どちらも内・外実規則化の両

方があり得る。広域の場合はまとまりが多数になる。内・外実規則化はまとまりごとに存在する。同形のまとまりが多数あれば多要素になる。広域実規則化は多要素にも適用される。自然物や人間の場合は局所・広域実規則化とも外実規則化だけになる。人間の統合実規則化ができないため集団の区分けが不明確で、多個人は複雑になる。

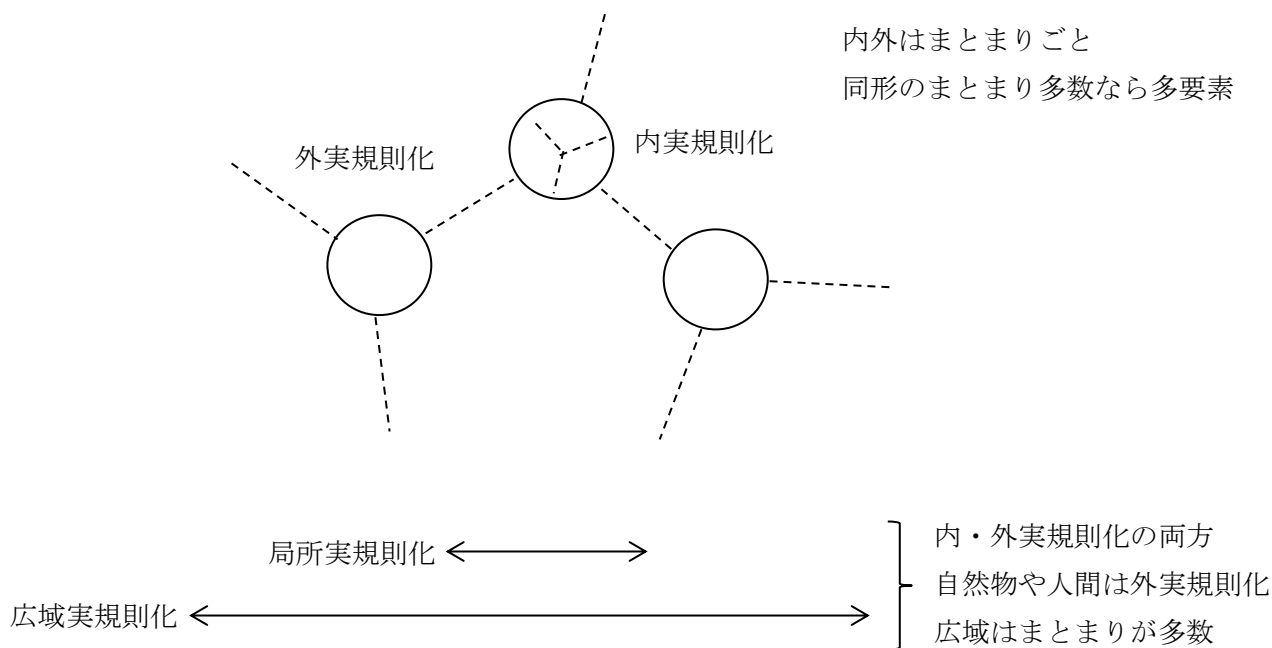


図 3-34 内・外実規則化と局所・広域実規則化

3.5. 適切な実規則化

3.5.1. 行動実規則化と内・外

自己の範囲には様々な区分けがある。感情・感覚・行動と実規則化について区分けを考えると、感情を含む身体は内実規則化できない。行動は外実規則化を行う事ができる。自己の範囲を行動込みで考えた場合、自己の実規則化は可能である。

人間の外実規則化も、認識上でなく生現実上の規則である。人間の場合は二重人間のため、認識と生現実を誤りやすい。開放現実から見る事でこの問題を回避できる。

自己は二重人間のため不明確である。行動も含めると、身体の内も外も二重人間である。身体の内側や感情は実規則化できないはずだが、認識自己を含めると規則が変わるように見える。これを回避するには、人間的でなく現実的な視点が必要である。行動実規則化においても、本来の生物としての人間の規則に合わせる必要がある。行動実規則化も人間的でなく現実的でなければならない。

人間が「規則的に行動したい」と思っているだけでは実規則化ではない。二重自己により認識だけでも行動に見えるので注意する必要がある。実際に規則的な行動を行っている状態が実規則化であり、認識だけでは意味がない。

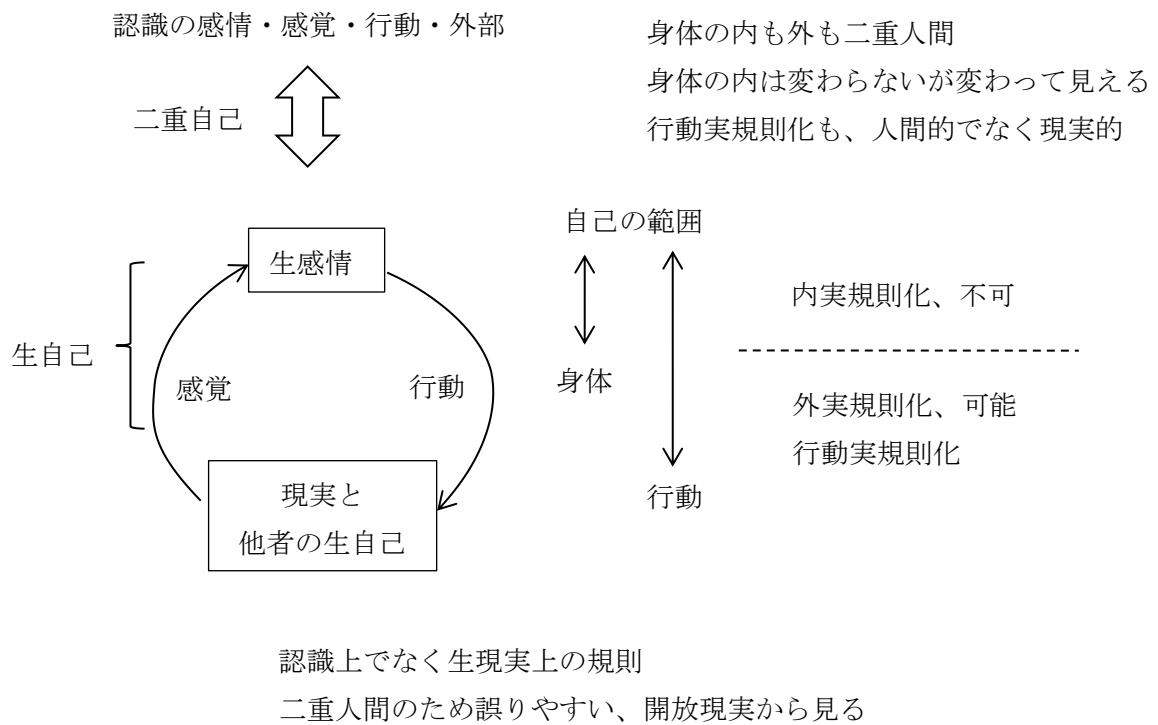


図 3-35 感情・感覚・行動と実規則化

人間の体内にある規則は生物として変更できない。人間の外側にある行動であれば、それが遺伝的な規則であるとしても変更は可能である。感情種類から生まれる生満足の総和を最大にする必要がある。遺伝的な行動を外実規則化に変えた際に、全体として生満足が増加すれば良い。生現実を正しく認識する事で、外実規則化による生満足増加が可能になる。

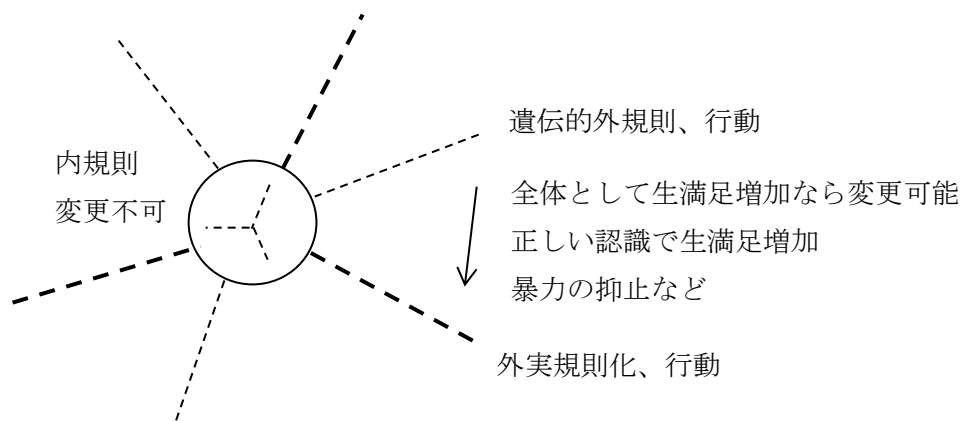
遺伝的外規則の外実規則化への変更は、暴力などの下落成果の抑止が典型例である。暴力はすべての実規則化を破壊するので、全面的な生不満が発生する。そのため全体としての生満足増加のためには抑止した方がよい。他の下落成果でも同様の問題が起こる。

そもそも生物や動物は、常に周囲の環境を破壊する訳はない。暴力を振るう場合もあるが、動物により程度の差があり、生物として絶対的な感情種類ではない。よって人間が抑止しても大きな問題にはならない。実際の行動が難しい暴力衝動を満たすためには、空想やスポーツが役に立つ。暴力の抑止は昔から人間が行って来た手段である。

人間の外規則を変えても、人間の内規則である遺伝が変わる訳ではない。人間の外実規則化も、認識上でなく生現実上の規則である。二重人間のため曖昧な理解を行い、誤って遺伝を見失う可能性がある。外実規則化においても遺伝に基づく事は変わらない。

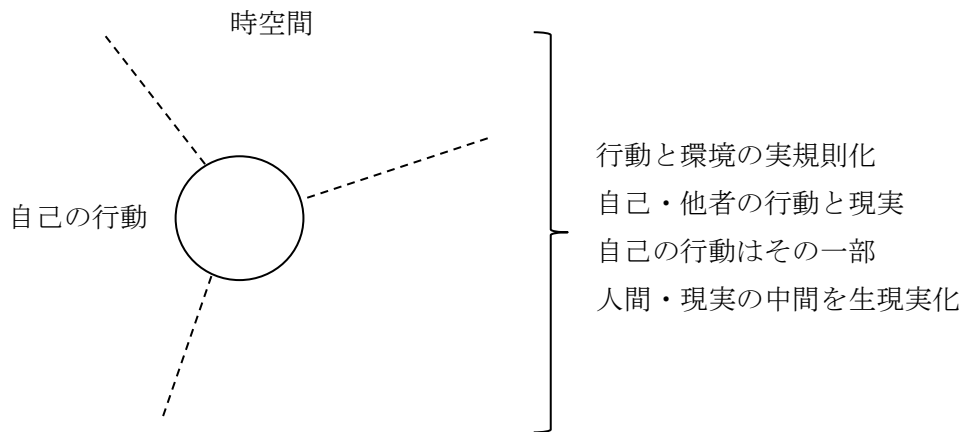
実規則化が行動や環境を含む形でも行われる場合、自己の行動はその一部である。自己・他者の行動と現実を含む全体が実規則化される。自己の広域行動よりも、さらに広域な実規則化される場合もある。行動の成果を含む形で実規則化される場合もある。

人間・現実の中間を生現実化する必要がある。行動は感覚と共に人間・現実の中間の一種であり、感情などよりも生現実化しやすい。感覚・行動の対象となる現実を見る事で生現実化できる。人間の現実的側面を見る必要がある。時間や関係回数や物理量であれば、対象が人間でも現実でも同じように実規則化できる。



外規則を変えても遺伝は変わらない
認識上でなく生現実上の規則

図 3-36 遺伝的外規則と外実規則化



自己の広域行動よりさらに広域の場合もある
 行動の成果を含む実規則化もある

図 3-37 行動と環境の実規則化

3.5.2. 人工物と実規則化

人工物は人間が作ったものであり、任意に作れるので強い実規則化が可能である。機械や工学的システムなど様々な人工物が強く実規則化されている。規則により推測や行動は大きく強化できるが、強い変更なので何にでもできる訳ではない。強い実規則化は人工物に限定され、人工物でも常にできるとは限らない。

多要素の人工物は分割・投稿実規則化により境界を変更できる。多要素階層を作って1要素にしたり、逆に分割して多要素にしたりできる。これも強い変更なので常にできる訳ではない。可能なのは人工物だけである。

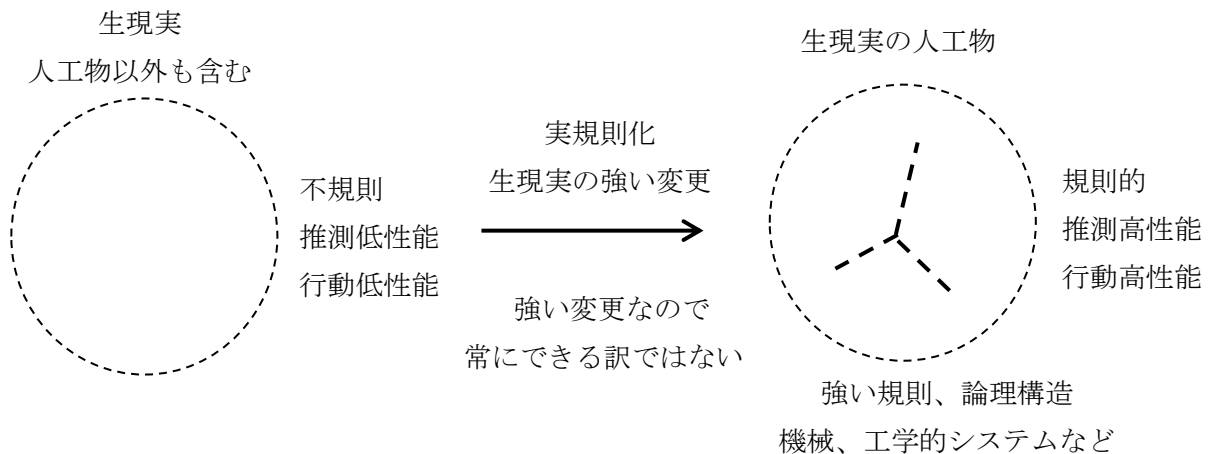


図 3-38 人工物の実規則化

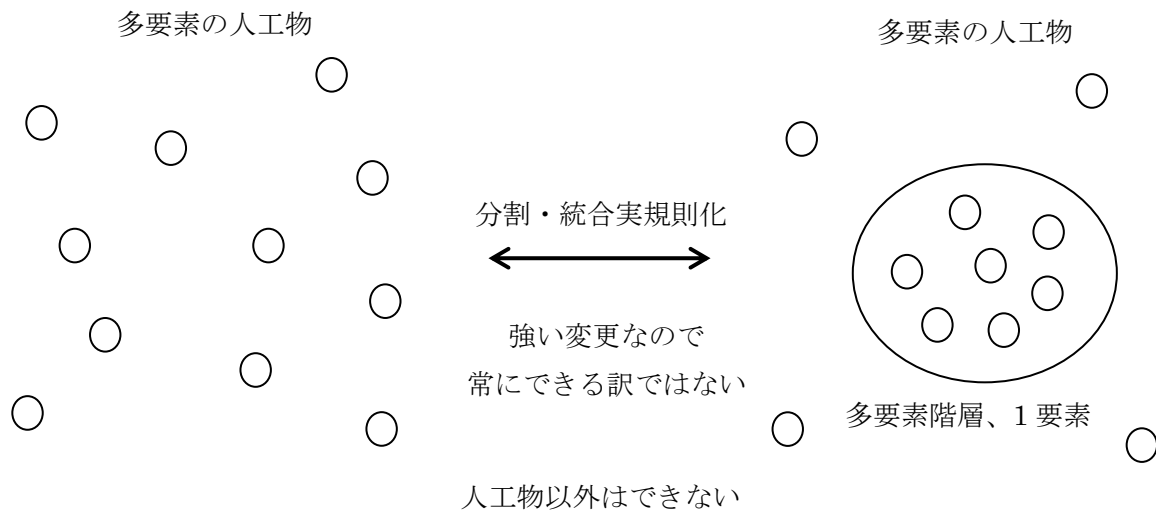


図 3-39 多要素の分割・統合実規則化

人間を実規則化する際に、生物から離れて人工物のような強い実規則化をするのは誤りである。集団も多個人が集まったものであり、完全な一体ではない。感情種類を一体化するのも誤りである。認識上で規則化できても実規則化の際に問題が起こり、長期生満足が得られなくなる。

「強さ」の評価基準は長期生満足でなければならない。強く実規則化した人工物の評価基準も生満足であり、強い実規則化自体ではない。実規則化を含むすべての規則を高正確にして、生満足を求めなければならない。爆弾の破壊力をどれだけ巨大化しても、人類を幸福にするわけではない。作りやすいコンクリート外装の雑居ビルが並んだ風景は不快で、自然物の岩に似た外観の方が満足できる。長期生満足に繋がる方向に人工物を作らなければならない。

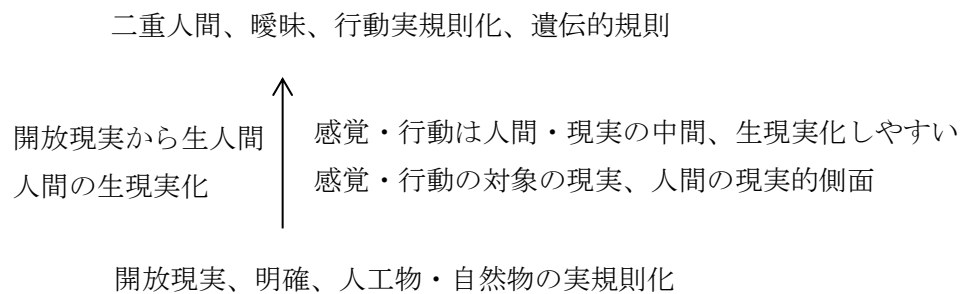
人間は人工物化できないが、自然物より人工物との相互影響の方が強い。特性としては自然物に近く、「近さ」の意味の違いがある。人間が人工物化できなくても、人工物は人間にとって重要である。人間と人工物と自然物の関係を正しく理解しなければならない。人工物と自然物は開放現実の構成要素である。人工物と自然物を正しく理解すれば、開放現実から人間を正しく理解できるようになる。

3.5.3. 実規則化と人間・現実

人間は二重人間のため曖昧であり、開放現実には明確である。実規則化をこの視点から見ると、人間の行動実規則化は曖昧になり、現実である人工物や自然物の実規則化は明確になる。開放現実から生人間を見て、人間の行動実規則化を生現実化する必要がある。

人間の実規則化も遺伝的規則に基づくものである。人間の存在意義は生物や遺伝であり、認識ではない。認識に基づく行動実規則化を行い、遺伝から離れるのは誤りである。遺伝から離れて認識基準の行動実規則化を行っているように見えても、生現実上の実体において遺伝から離れる事はない。曖昧な二重人間のため、認識上はそう見えているに過ぎない。

感覚・行動は人間・現実の中間にあり、感情などより生現実化しやすい。感覚・行動の対象の現実を見て、感覚・行動を生現実化すべきである。感覚・行動の対象となる人工物・自然物の理解が重要で、これにより人工物・自然物の実規則化と行動実規則化を繋げる事ができる。人間の現実的側面も人間・現実の中間である。人工物の使用時間や使用回数を見れば、それが行動実規則化の生現実化に繋がる。



人間の存在意義は生物や遺伝であり、認識ではない
 認識に基づく行動実規則化により、遺伝から離れるのは誤り
 生現実上では遺伝から離れる事はない、認識上でそう見えるだけ

図 3-40 実規則化と人間・現実

感覚・行動は広範囲であり、人間・現実の中間にある。曖昧さも人間・現実の中間である。感覚・行動は遺伝的外規則や外実規則化を含んでいる。

明確な開放現実から人間を生現実化する事で、二重人間の曖昧さを回避できる。これは人間の外から内へと理解する事である。人間・現実の中間を生現実化する事で、人間まで生現実化できる。

生物や動物は開放現実の一部であり、二重人間の問題を受けない。生物や動物から人間の遺伝的規則を類推すれば、ある程度明確な理解が可能になる。人間は知的生物であり、通常の動物より遺伝的レベルから知性が高い事に注意しなければならない。例えば動物的な視点から食事を見る、などの方法が考えられる。

行動の生現実化も重要である。例えば遺伝的外規則である狩猟採集より、外実規則化である製品の購入の方が、現実的行動として楽である。動物の飼育として見ても、狩猟採集をさせるより人間が作る食事を与える方が楽である。動物が食事を食べる事ができて、かつ健康が維持できれば問題ない。これは人間でも同じである。人間的に見て「本来の人間の食事でない」と思うのは誤りである。

遺伝的内規則は実規則化を行う際にも変更できない。人間に関する実規則化を検討する際は、必ず遺伝的内規則を考慮しなければならない。これは内部まで変更可能な人工物とは異なる特性である。

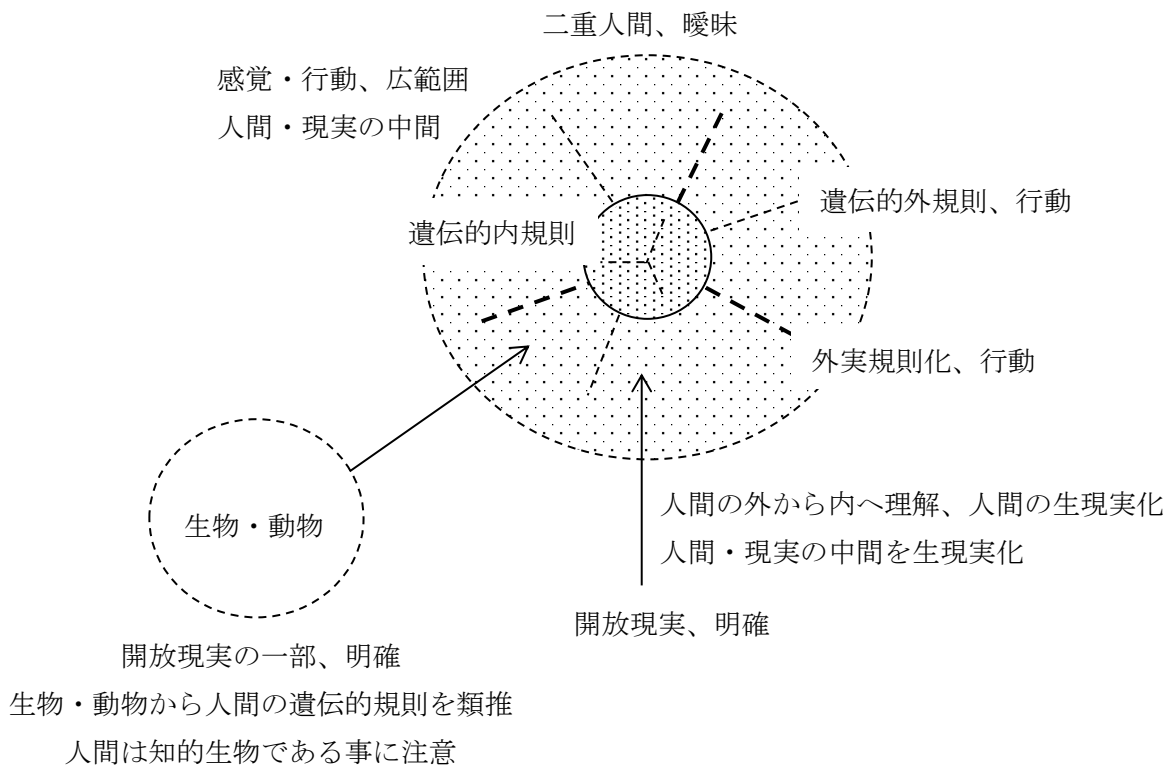


図 3-41 遺伝的規則と開放現実

3.5.4. 実規則化の設計・計画

複雑な実規則化の場合、それを作る準備行動が必要になる。認識により生現実に近い予測を行い、実規則化の方法を決定し、それに基づいて実規則化を行わなければならない。これは実規則化の設計あるいは計画である。人工物の実規則化なら設計であり、行動実規則化なら計画である。

設計・計画には自己・他社の行動と現実を含むすべての実規則化が含まれる。環境との長期相互影響を正しく理解し、環境の中の開放現実から設計・計画するのが正しい。すべての規則を考慮した行動最適化を行う必要がある。設計・計画の対象となるのも認識上でなく生現実上の規則であり、認識上の設計・計画だけでは意味がない。

設計・計画自体も行動の一種であり、長期生満足には設計・計画時の生満足も含まれる。設計・計画により生満足が減少したら意味がなく、設計・計画を含めた長期生満足を増加させる必要がある。

設計・計画の対象となる実規則化には、様々な種類がある。行動には時間的な短期・長期行動や、空間局所・広域行動がある。多個人で見ると自己だけの場合や、他者を含む実規則化がある。現実にも人工物や自然物がある。これらをすべて含めた実規則化を設計・計画する必要がある。

設計・計画がうまく行かない事が判明したら、設計・計画を見直して再度設計・計画しなければならない。一旦実規則化した状態から修正を行うもの実規則化の一種である。問題を非難するだけでは意味がない。PDCA (Plan Do Check Action) サイクルにおいては、CA から再度 P に戻るのが再度の設計・計画に当たる。実験選択の場合と同じく、最初から十分な推論と設計・計画ができた方が望ましい。

すべての実規則化を設計・計画、対象は多種多様
 設計・計画後の見直しもあり得る

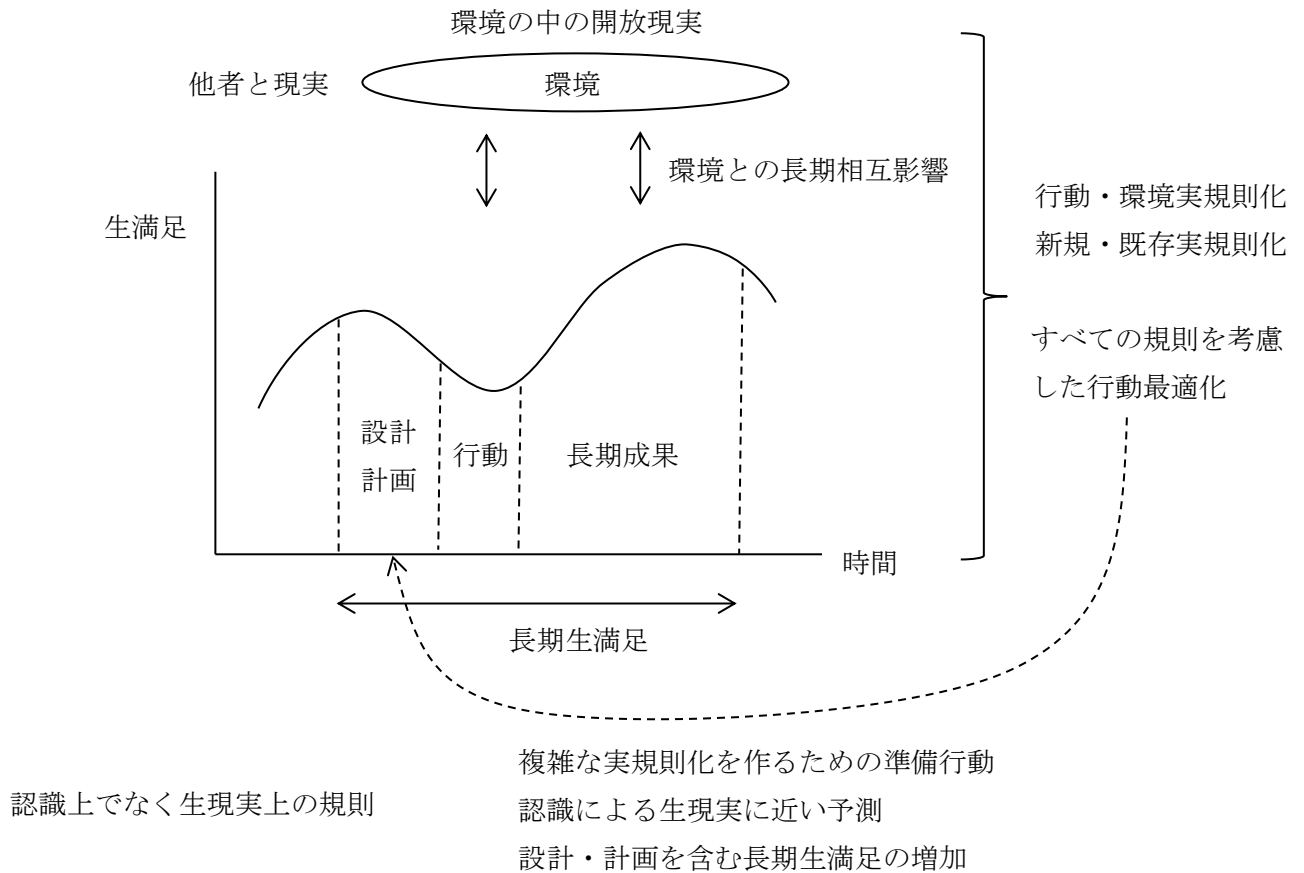


図 3-42 実規則化の設計・計画

曖昧な二重人間では明確な設計・計画ができない。明確な開放現実を中心に設計・計画するのが正しい。開放現実から生人間を見て、人間を生現実化すべきである。人間・現実の中間を生現実化する必要がある。これには感覚・行動や、人間の現実的側面がある。現実を見て感覚・行動を生現実化すべきである。人間でなく。多個人の相互影響でも、物理的な時間や関係回数や物理量などなら明確に理解できる。

飲食店を計画する場合を考える。現実的な食事や店舗に対する感覚・行動を見て、そこから行動実規則化を行うべきである。調理の問題点や店舗の清潔さなら明確に計画できる。そこから客への対応に繋げる事ができる。

人間の現実的側面も有効である。料理の量と調理時間なら明確に計画できる。店員の好感度などは不明確で計画が難しく、これを計画の中心に据えても正しく実規則化できない。調理時間だけを見れば、客としては安定して速い方がいい。内部の調理を人間が行っても機械が行っても客には関係ない。

多個人の間には、個々の生感情による最適な距離がある。これも開放現実から生人間を見る事で明確化できる。売り場で店員が常に密着しているのは不快であり、距離が近い方がいいというものではない。店員の人数や客対応時間で見れば、客との距離を明確化できる。

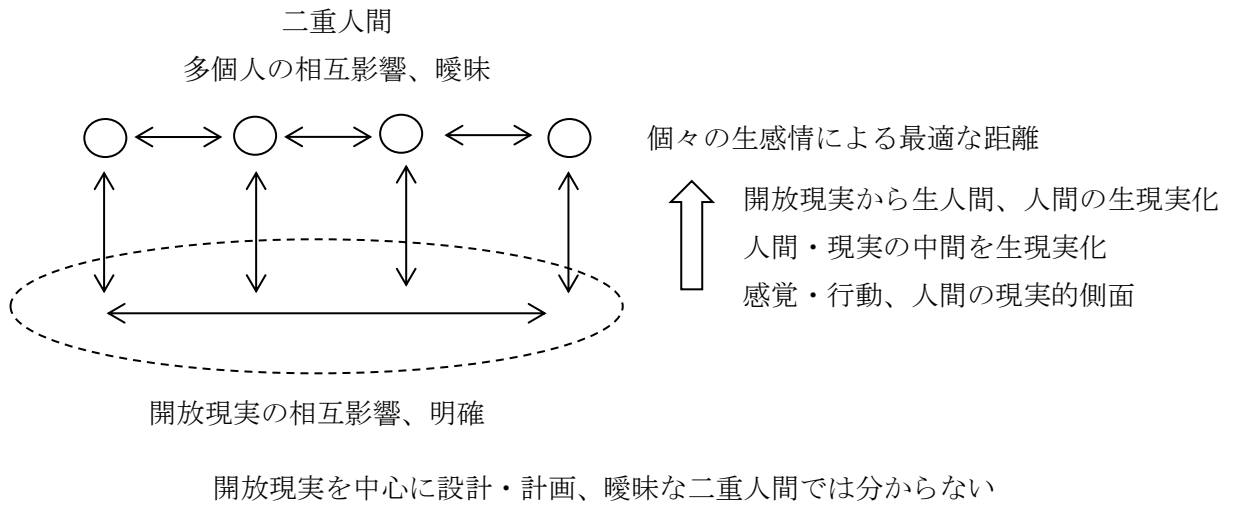


図 3-43 開放現実と設計・計画

3.6. 認識知性伝達

3.6.1. 認識知性伝達

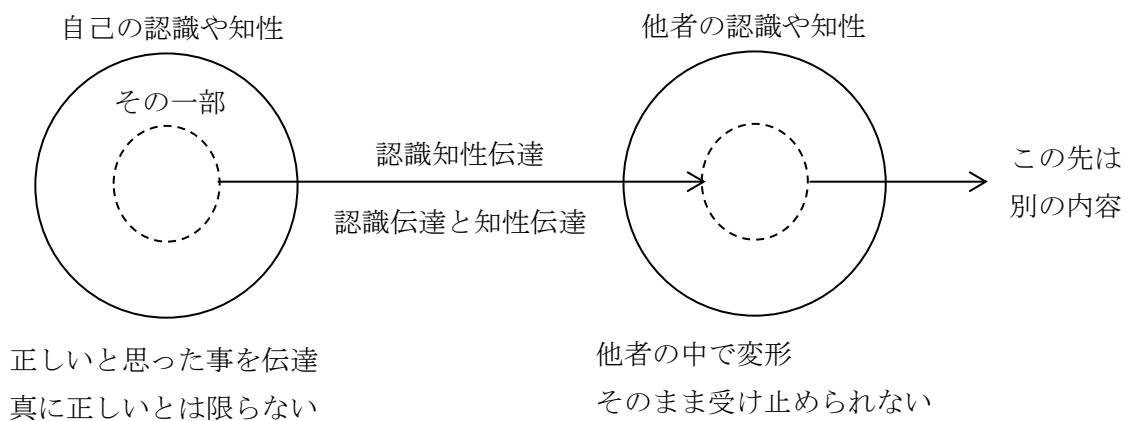
自己の認識や知性の一部を他者に伝達する事を、認識知性伝達と呼ぶ。認識知性伝達は認識伝達と知性伝達を合わせたものである。

人間が認識知性伝達を行うのは基本的には正しいと思った事であるが、それが真に正しいとは限らない。また正しくなくても特殊な都合のために偽の認識知性伝達を行う場合もある。伝達された認識や知性は、他者の中で「相手がそう考えている」と受け止められる。必ずしもそのままの形で受け止められず、他者の中で変形される。他者からさらに伝達される場合は、別の内容に変化する。

認識知性伝達を行った場合、自己と他者が同じ情報を持つ、という意味で規則的になる。人間は自分の持つ情報を他人に伝えたいという感情を持つため、認識知性伝達は遺伝的規則である。認識知性伝達は言葉により伝えられる事が多いが、言葉は人間が作り出した特殊な行動である。情報伝達の感情という遺伝的規則を拡張した行動実規則化と言える。言葉は会話だけでなく、文字として人工物に記録される。文字は言葉という行動実規則化をさらに拡張した実規則化と言える。

認識知性伝達も生現実上の規則である。伝達したと「認識」しただけでは、情報が伝わっているとは限らない。真に認識や知性が伝わってなければ意味がない。

人工物による認識知性伝達には、本や Web などがある。これらは多個人に対する伝達が可能で、広域化が容易である。伝達の経路が開放現実を通っており、人間経由と違い途中で内容が変わらない。経路が開放現実である事と、内容が開放現実である事は別である。本や Web の内容でも、人間的で曖昧である状況は普通に存在する。重要なのは伝達の経路よりも内容である。伝達が広域に行われても、デマのように誤った情報を伝えたら悪影響は大きくなる。



同じ認識や知性と言う意味で規則的、情報を伝えたいという遺伝的規則
言葉はそれを拡張した行動実規則化、文字はさらに拡張した人工物
認識知性伝達も生現実上の規則、真に伝わってなければ無意味

図 3-44 認識知性伝達

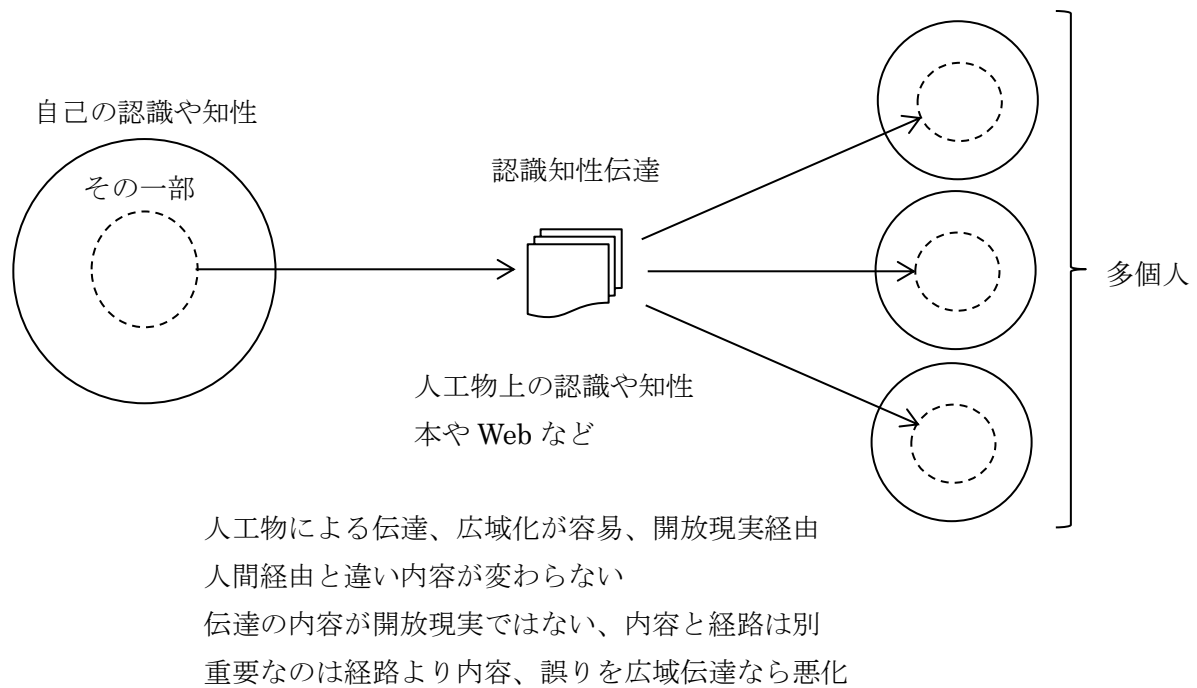


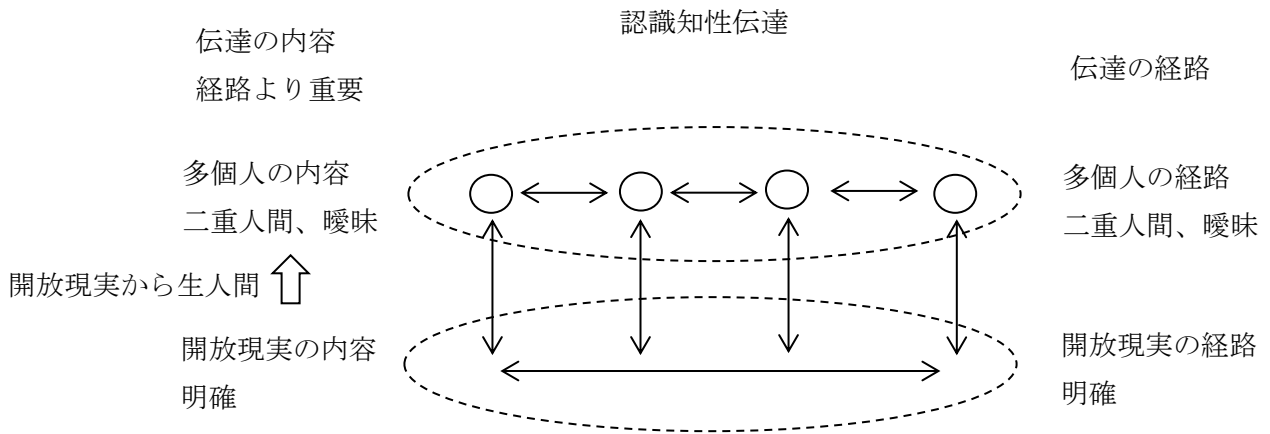
図 3-45 人工物による認識知性伝達

3.6.2. 認識知性伝達と開放現実

認識知性伝達の現実性を見る場合、伝達の内容と伝達の経路は別である。どちらに関しても人間的であれば二重人間のため曖昧になり、開放現実に近いれば明確になる。重要なのは経路よりも内容である。人工物などの開放現実を通れば広域に伝わるが、内容が人間的で曖昧なら悪い影響が広がるだけでしかない。開放現実から生人間を見て、正しい内容を伝達する必要がある。

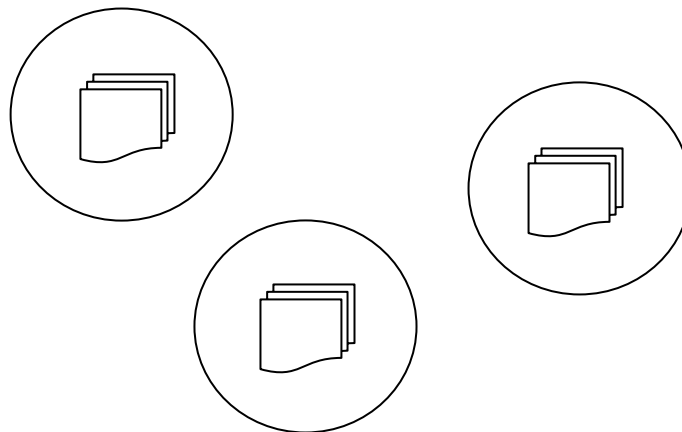
伝達の内容を扱う人間と、経路を扱う人間が同じなら、内容・経路の正誤はその人間の能力に依存する。人間を見て曖昧な認識を持てば内容・経路とも人間的になり、開放現実を見て明確な認識を持てば現実的になる。Web のように広域的な人工物でも、デマが拡散する場合もある。誰かが発進した曖昧な情報をそのまま伝える事でデマが拡散する。これは多個人間の会話によるデマ拡散と同じ経路である。

閉鎖分断した認識により認識伝達の内容が分断すれば、その経路である人工物も閉鎖分断する。これは宗教上の争いにおける経典の閉鎖分断が典型例である。経典は本来広域に伝達する能力を持つが、人間的で曖昧な宗教争いの結果、経典の一部が宗教派閥の象徴として閉鎖分断される。この場合も重要なのは伝達の経路よりも内容である。経典の内容が開放現実を示していれば、このような分断は発生しない。



伝達の内容と経路は別、重要なのは経路より内容
 開放現実から生人間を見て、正しい内容を伝達する必要
 内容と経路を扱う人間が同じなら、これらの正誤は連動
 Web 上でのデマの拡散、会話によるデマと同じ

図 3-46 認識知性伝達と開放現実



認識知性伝達の人間的な内容による閉鎖分断
 伝達経路である人工物も閉鎖分断
 宗教上の争いによる経典の閉鎖分断
 経典の内容が開放現実なら分断は起こらない

図 3-47 伝達における人工物の閉鎖分断

3.7. 認識遷移

3.7.1. 認識遷移と知性

認識は認識外を模倣するシミュレーション・モデルであり、これを用いて高度な推測が可能になる。人間は知性により認識を制御しており、強力な知性が人間の大きな特徴である。知性により認識を正しく認識に向かわせる必要がある。

知性による認識の制御構造を説明するために、認識に状態遷移図を適用する。これを認識遷移と呼ぶ。状態は特定の規則群により一つの整合性を持ったシミュレーション・モデル空間である。知性による認識の正誤評価・情報変形を状態遷移で記述する。遷移は誤りと評価された状態から、正しいと評価された状態へ移行し、それに伴い情報が変形される。

認識の正しさは認識外に依存する。認識外を認識の下に記述し、認識外との差を下からの距離で示す。正誤の基準は認識外であり、状態の正誤は認識外からの距離になる。遷移そのものも認識外を基準に分析する必要がある。認識から認識外へ向かう遷移を出認識遷移、認識外から認識へ向かう遷移を入認識遷移、認識同士の遷移を認識内遷移と呼ぶ。正しい遷移は出認識遷移である。他の遷移の正しさは遷移先の状態の正誤に依存する。

正誤の基準は認識外であり、認識外へ向かう出認識遷移が正しく、逆の入認識遷移は誤りである。認識内遷移は、最終的な遷移が出認識遷移である場合の途中のみ正しい。入認識遷移の遷移先は生現実根拠がなく、出認識遷移の遷移元は生現実根拠がある。

認識外に近い正しい状態を正状態、遠い誤った状態を誤状態と呼ぶ。開放は正しい認識の特徴である。正状態であれば開放になり、閉鎖であれば誤状態になる。正・誤状態と開放・閉鎖の区分は厳密には一致しないが、以降は大体同じものとみなして分析する。

出認識遷移は、情報処理での状態遷移とは大きく異なる特殊な形態になる。状態の外があり、遷移が外へ向かう、という事自体が特殊である。状態遷移が認識外に向かう必要がある。

生現実を実区分で分類して横に並べる。縦は同一実区分になり、横は別実区分になる。実区分は量的変数なら位置、質的変数なら種類になる。情報処理での状態遷移は状態を小さな丸で表記するが、認識状態にはある程度の範囲がある。認識状態を大きく描いてその範囲を表記する。生現実は一意連続し整合するため、全体として1つの状態である。生現実に近い出認識遷移の認識状態も全体として1つの状態になる。それを表記するため横長の形で描く。これは認識状態の開放を示す。同一実区分の規則は重なり、1つの認識状態の中に納まる。

情報処理での状態遷移はそれ自体が移動変形する事はなく、状態が切り替わるだけである。認識遷移も短期的にはこれと同じで、状態そのものは変化せず、状態が切り替わる際に情報が変形される。誤りの大きな状態なら大きく誤って変形される。

生現実とは時間と共に変化するので、認識状態が変わらないと長期的には認識外から離れてしまう。認識遷移図で言うと固定的な状態は次第に上側に移動していく。これを防ぐために、出認識遷移の遷移元は下側に修正しなければならない。時間変化への追従は、生物としての正しい適応である。

人間は曖昧であり、現実とは明確である。生現実根拠や出認識遷移や実区分を見る際には、人間からでなく現実から見る必要がある。

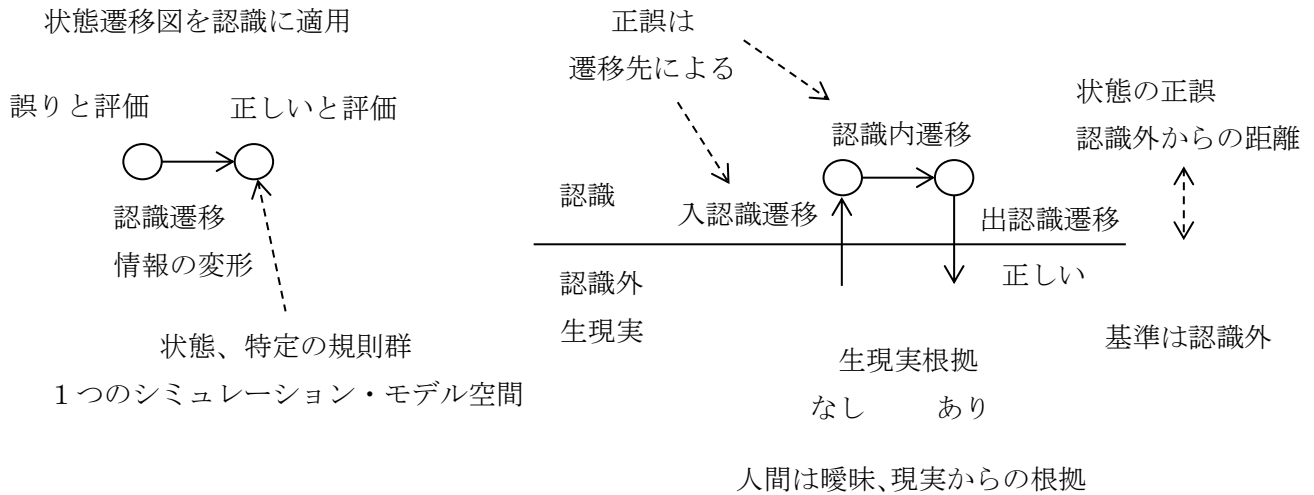
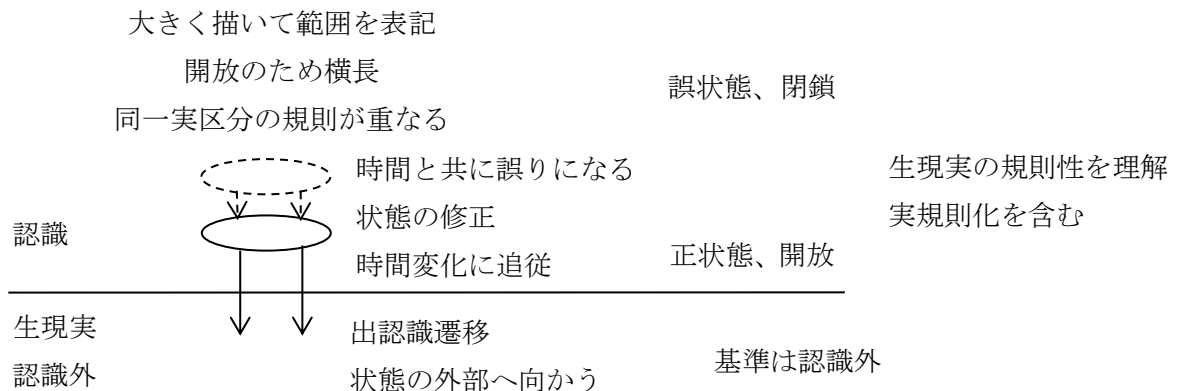


図 3-48 認識遷移と正誤

生現実を区区分で分類して横に並べる
縦は同一実区分、横は別実区分
量的変数なら位置、質的変数なら種類



人間は曖昧、現実からの出認識遷移や実区分

図 3-49 出認識遷移の特殊形態

重要なのは認識外へ向かう方向であり、常にこの方向を基準に正誤判定をする必要がある。正基準が認識外にあるため絶対的に正しい認識は存在せず、常に生現実からの相対的な正誤になる。認識上だけの正誤は誤りである。出認識遷移の遷移元にある認識状態も「誤り」との評価であり、すべての認識を誤りと評価するのが正しい。出認識遷移の遷移元は最も正しい「誤った認識」になる。

生現実を分析して正しい認識が「分かる」のは問題ない。しかし認識自体を「分かったと感じる」のは人間的で誤りである。正誤の評価基準は常に認識外にあるので、それを追い続けなければならない。理解が完了し

た感覚は誤りである。

人間は知性により認識を大きく変えられるので、大きく誤る可能性がある。認識は基準にならならず、知性による正しい生現実への方向性が非常に重要である。

生現実の規則性を正しく理解し、認識状態の規則に反映する必要がある。これには実規則化された生現実も含む。高正確な規則の理解により正しい推測ができるようになる。生現実の規則が重要であり、認識上の規則は役に立たない。実規則化も生現実上の規則であり、未来の実規則化でも同様である。認識の規則は実現できるとは限らず、生現実上で生満足を得られる実規則化でないと意味はない。生現実の当然の規則を受け入れる必要がある。

開放現実や生人間などの規則を理解する必要がある。これらの規則で正しい認識の評価が可能となる。強い生現実への遷移が必要である。開放連続なら生現実に向かうので正しい。認識の閉鎖分断は誤りであり、開放する必要がある。認識上の深さ・広さでなく、生現実に向かう遷移が必要である。

生現実の明確な理解が必要である。心理学・哲学・思想等において曖昧な議論が行われる場合があるが、これらはすべて誤りである。曖昧な二重人間でなく明確な開放現実から見れば、人間の心も神秘や混沌ではなく明確に理解できる。

知的優秀さは知識量でなく生現実への近さである。知識の探究でなく生現実の探究が必要である。言葉や本などもすべて生現実へ向かう必要がある。空想は知的遊びと訓練であり、完全に生現実と同じである必要はないが、生現実に近くないと意味がない。空想でも閉鎖でなく開放が必要である。

3.7.2. 最終状態と開放・閉鎖範囲

最も「正しい」と評価された認識状態が推測の基準となる。出認識遷移の場合は遷移元であり、それ以外の場合は最終的な認識内の遷移先である。これを最終状態と呼ぶ。最終状態は、最終的に正しいと評価された認識状態である。最終状態の正誤が認識遷移全体の正誤になる。知性により出認識遷移にして、最終状態を生現実近づける必要がある。

最終状態以外の認識状態を途中状態と呼ぶ。途中状態は推測の基準でなく重要でない。他者の様々な認識は最終状態でなければすべて途中状態として処理される。途中状態は様々な場所に存在し得る。

正状態の最終状態を最終正状態、誤状態の最終状態を最終誤状態と呼ぶ。最終正状態は出認識遷移の遷移元であり、最終誤状態は入認識遷移の遷移先である。出認識遷移と最終正状態を持つのが正しい。認識内遷移は途中状態に応じて様々な種類があり得る。重要なのは最終状態であり、その正誤により認識内遷移の正誤も評価される。

開放した最終正状態の範囲は生現実全体に及ぶ。閉鎖した最終誤状態の範囲は一部しかない。最終状態の開放・閉鎖範囲は、最終状態の正誤を判別する上で役に立つ。閉鎖した最終誤状態は誤った推測しか示さないが、その閉鎖範囲から外れると推測を示す事すらできない。言えるのはその部分に対する認識が誤りである、というだけで、正しいと思っている認識を示す事すらできない。

最終正状態は別実区分に対して開放し、生現実に対して整合する。最終正状態は全体として整合した状態になる。

認識状態は複数の規則により構築される。生現実には無数の規則があり、開放した最終正状態では様々な規則を適用できる。閉鎖した最終誤状態では一部しか適用できない。規則の面から見ても最終状態は重要である。

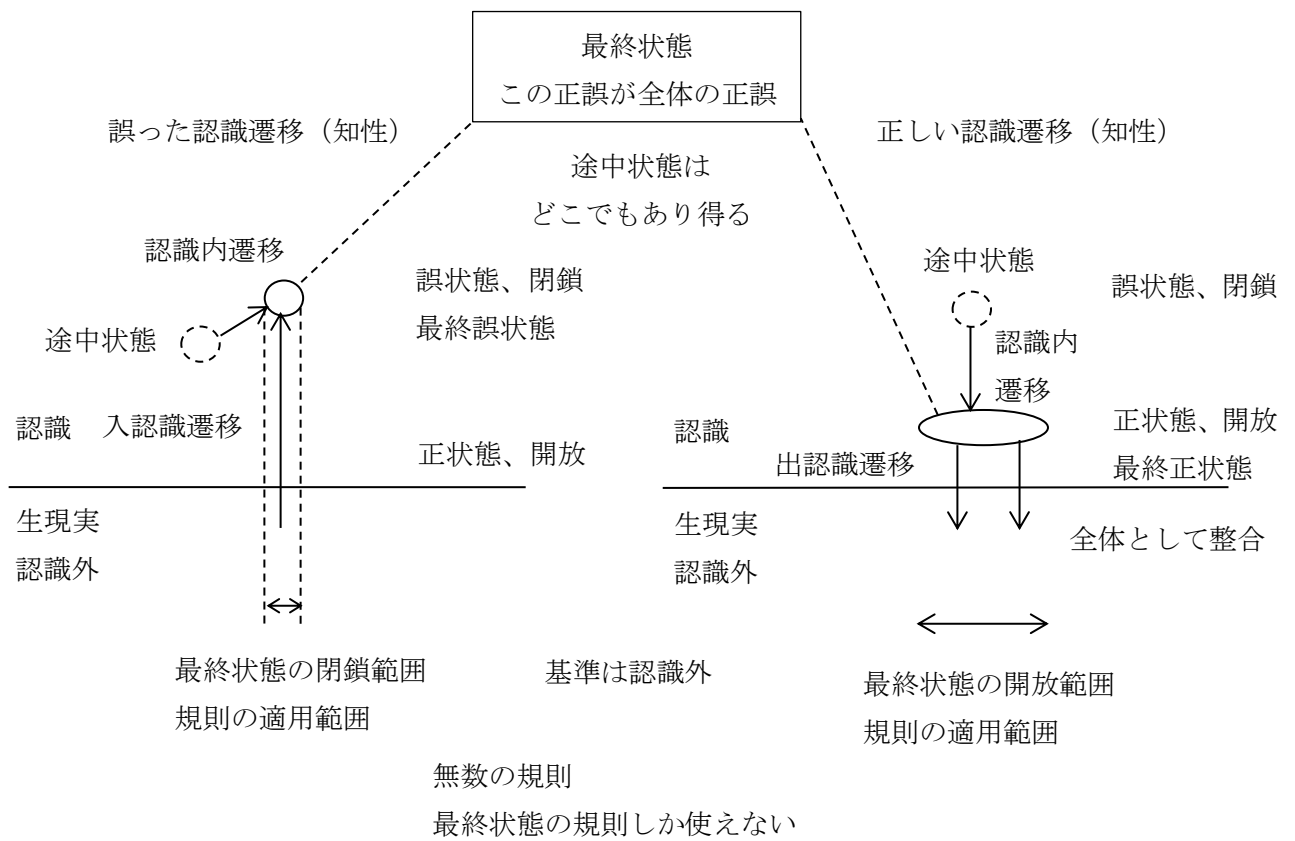


図 3-50 最終状態と開放・閉鎖

複数の最終誤状態が交代する場合もある。閉鎖範囲も最終誤状態と同時に交代する。瞬間的には1つの最終誤状態と変わらない。複数の最終誤状態が離れていれば、交代するのも難しくなる。全体として見ると同程度の最終誤状態となる。

閉鎖のため交代前後の距離は遠くなる。一方であまり状態が離れていると交代が難しくなる。交代前後の状態はある程度の距離になる。

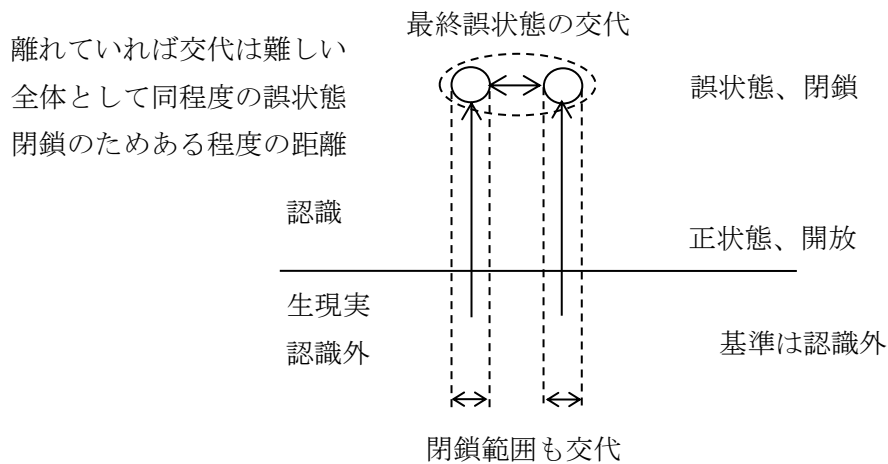
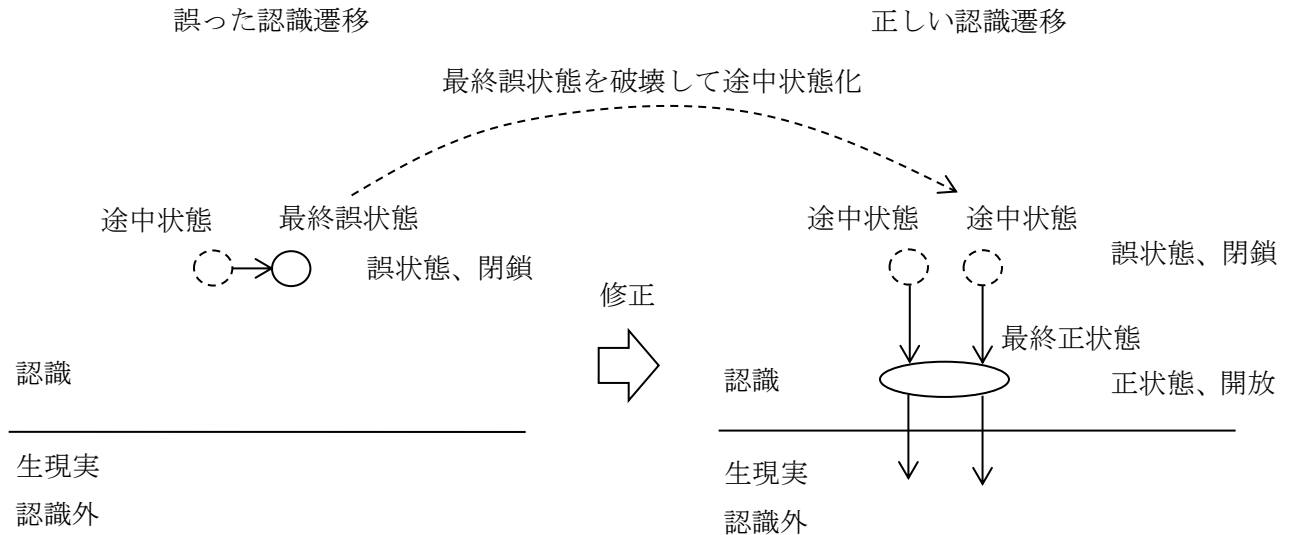


図 3-51 最終状態の交代

3.7.3. 修正と最終状態とモデル

最終誤状態を修正して最終正状態にする場合、最終誤状態を破壊して途中状態にする必要がある。重要なのは最終状態である。最終誤状態を壊しただけでは推測の基準がなくなり、意味がない。修正の際にはまず最終正状態を作り、その後で最終誤状態を壊す必要がある。



最終状態が重要、最終正状態を作って最終誤状態を壊す
 最終誤状態を壊すだけでは推測の基準がなくなり無意味

図 3-52 修正と最終状態

最終状態について、回帰モデルを例に説明する。次のグラフにおいて、丸が実測値、点線が回帰モデルである。各グラフの左側にある実測値から、右側を推論する。

最終誤状態によるモデルは実測値と一致しておらず、誤った推論になる。最終正状態によるモデルは実測値と一致しており、正しい推論になる。

最終誤状態を壊して途中状態化すると、最終状態がなくなる。この状況では推論そのものがないため意味がない。最終正状態と推論可能なモデルを作る必要がある。

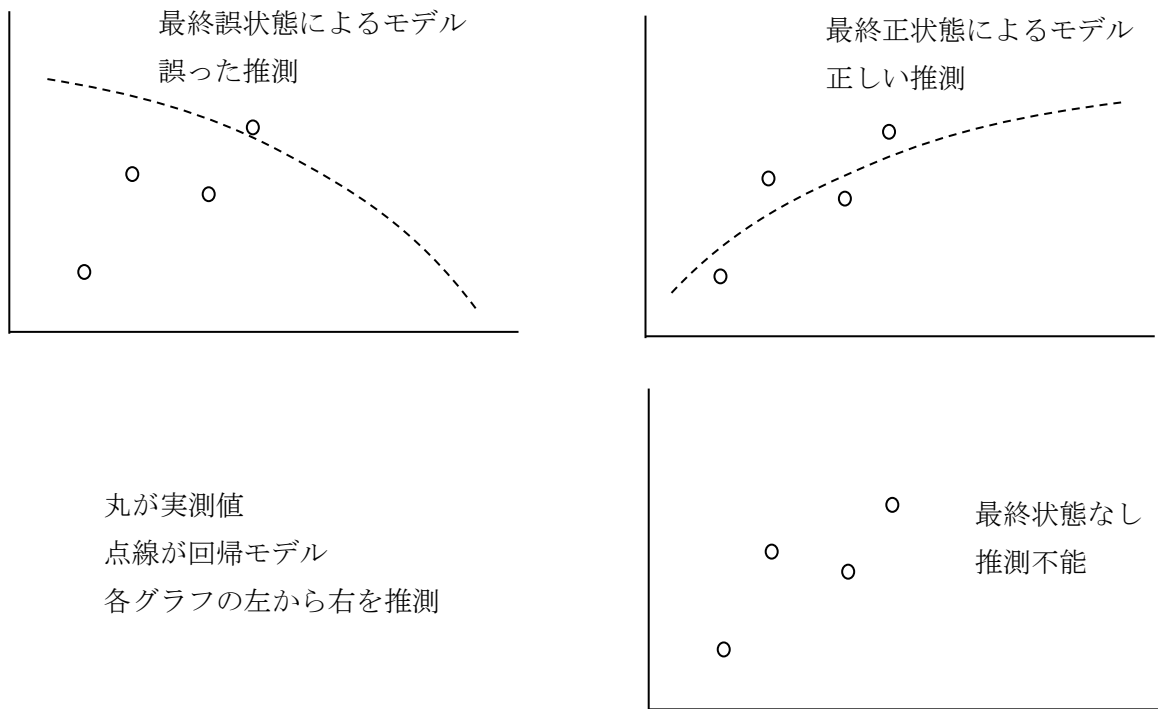


図 3-53 最終状態と回帰モデル

3.7.4. 認識遷移と人間・現実

最終状態が正状態である場合、現実の認識は人間の認識より生現実になる。これは認識状態の下側に相当する。多個人を横方向に書いた場合、二重人間により多個人の認識遷移がバラバラになっても、開放現実により繋げる事ができる。

現実と人間を横方向に書いた場合、現実の方が人間より生現実になる、認識状態が傾いた表記になる。現実には明確で、人間は曖昧である。開放現実から生人間を見るのが正しい。人間・現実の中間の生現実化が重要である。これには感覚・行動や、人間の現実的側面がある。開放現実から人間・現実の中間までを開放的に理解する事で、人間の生現実化ができる。これにより生人間が正しく理解できる。

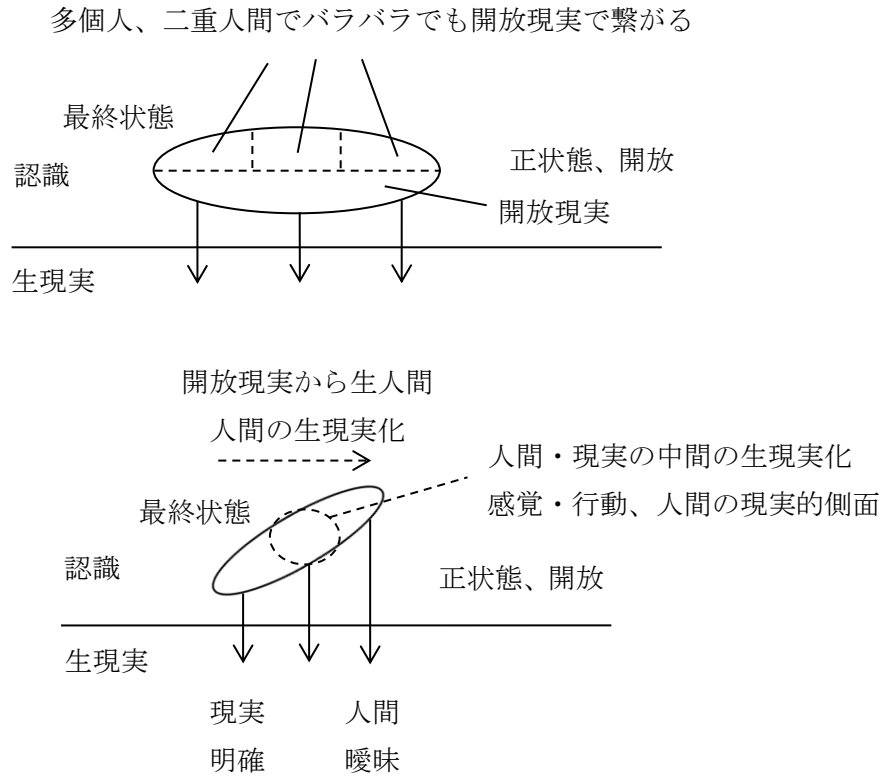


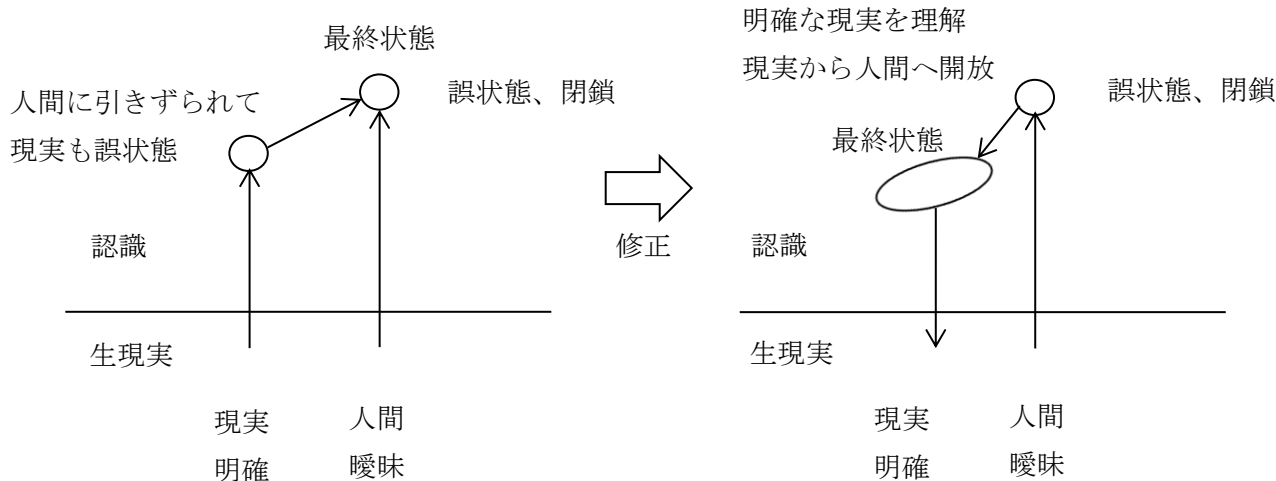
図 3-54 開放した認識遷移と人間・現実

人間側で誤って閉鎖した最終状態を持つ場合、現実側もそれに引きずられて誤状態になる。人間側が閉鎖しているため、現実側も閉鎖した途中状態になる。例えば感情的な動物愛護に固執した場合、自然物である動物に対する行動も感情的で誤ったものになる。

現実も人間も重要なので同時に直す必要がある。明確な現実を理解して、現実から人間へ開放する事で、最終正状態を作成できる。開放現実から生人間を見る事で、現実から人間まで開放した最終正状態を作る必要がある。人間・現実の中間を経由して人間を生現実化すべきである。

最終正状態がない状態で閉鎖の誤りを理解しても、正しい認識が見えず意味がない。開放現実の理解は人間の否定ではなく、正しい人間像を作る事である。人間を生現実化する必要がある。

無認識感情なら人間側から生現実を見る事ができるので重要である。一歩引いて感情を見る必要がある。開放現実と組み合わせれば効果的である。



現実も人間も重要なので同時に直す、開放現実から生人間を見る
 人間・現実の間を経由して人間を生現実化
 無認識感情なら人間側から見えるので重要

図 3-55 人間・現実と誤状態の修正

3.7.5. 正・誤状態と開放現実

最終正状態の認識は、正しく開放して見える。認識が生現実に接近し、全体として統一される。最終誤状態の認識は、誤って閉鎖して見える。認識が生現実から離反し、全体として分裂する。

人間は曖昧であり、生現実からの離反も分からない。現実 は 明確であり、生現実からの離反も分かる。これは最終誤状態を持つ場合でも同様である。人間的な誤りを生現実化する事で離反を理解し、修正する必要がある。

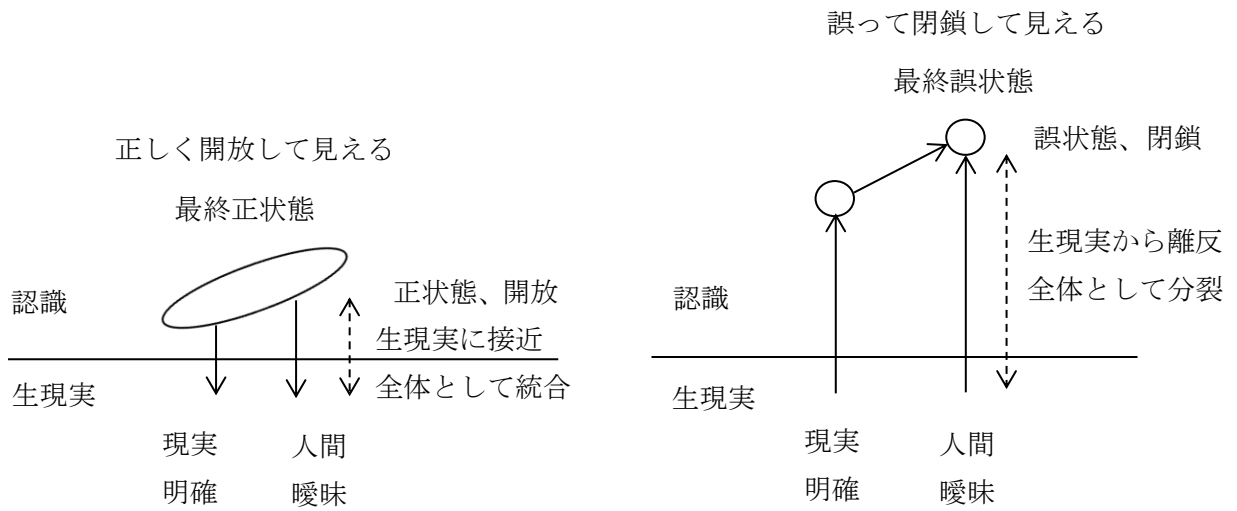
実規則化を行う場合でも同様である。最終正状態なら実現可能だが、最終誤状態なら実現不可能になる。認識した通りの実規則化ができる訳ではなく、最終誤状態なら認識と実規則化は離反する。

認識遷移図の縦方向は同一実区分であり、生現実との統合・分裂を示す。現実を見る事により認識と生現実の離反が分かる。

認識遷移図の横方向は別実区分であり、別実区分に対する認識の統合・分裂を示す。これは別実区分に対する開放・閉鎖と同じ意味である。実区分も現実を見る事で理解でき、開放・閉鎖に関しても現実理解が重要である。開放は別区分の関係を示すだけのものではなく、局所と広域の関係なども含む。

最終誤状態は分裂・不整合の状態になり、最終正状態は統合・整合の状態になる。これは認識遷移図の縦・横方向共に同じである。

正しい認識を作る上で最も重要なのは、現実の理解である。開放現実や知的生物の生感情を見る事で、正しい認識を作る必要がある。



人間は曖昧、生現実からの離反も分からない
 現実 は 明確、生現実からの離反も分かる、人間的な誤りの生現実化
 実規則化でも同様、正状態なら実現可能、誤状態なら実現不可能

図 3-56 正・誤状態と人間・現実

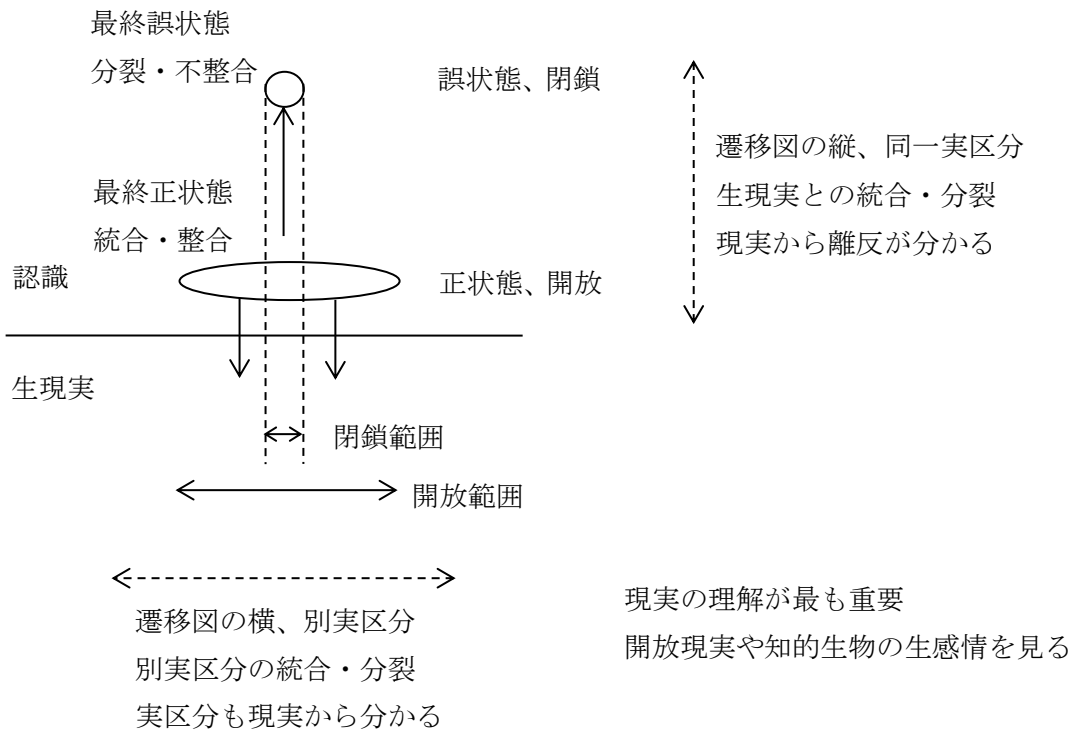


図 3-57 正・誤状態と開放現実

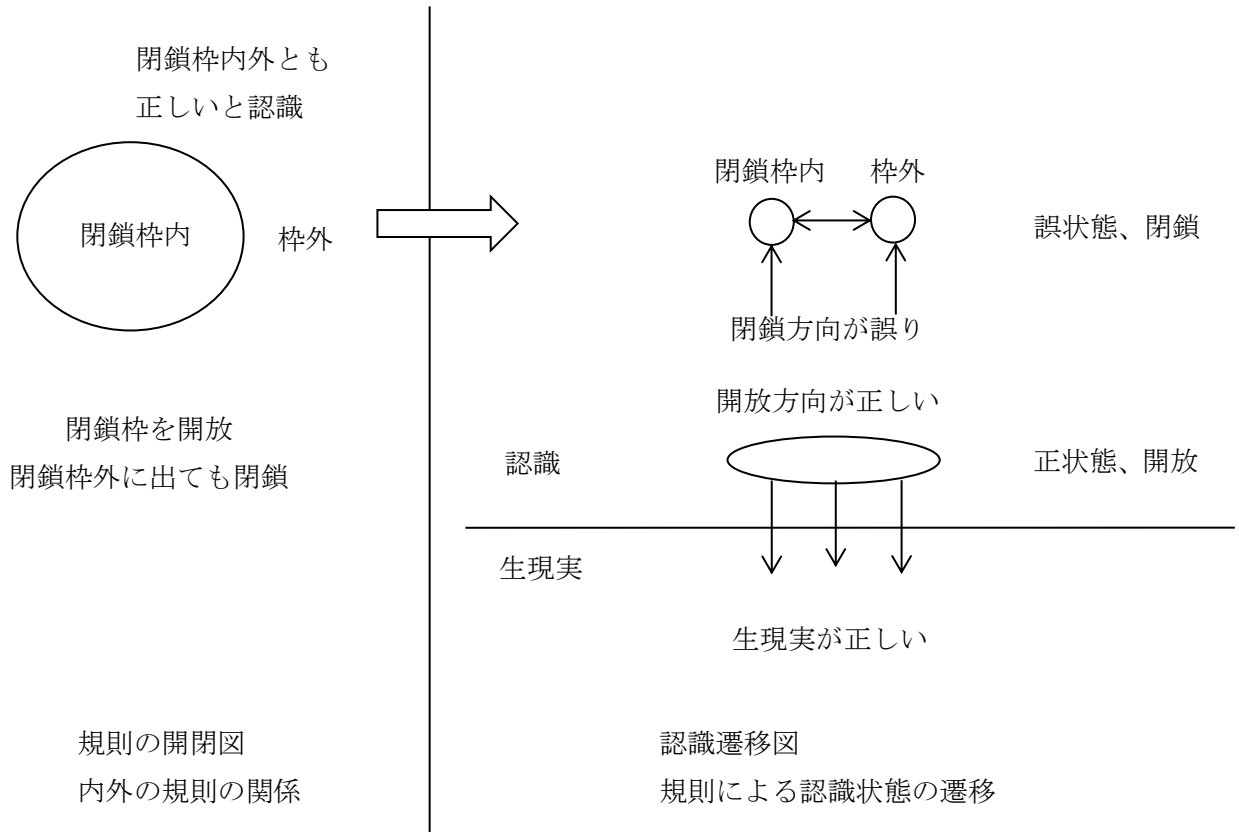
3.7.6. 閉鎖枠と認識遷移

規則の開閉図において示されるのは、内外の規則の関係である。認識遷移図で示されるのは、規則による認

識状態の遷移である。同じ開閉でも図の表記方法はまったく別になる。

閉鎖枠で分かれた内外を両方正しいと認識した場合、状態遷移図で書くと内外2つの認識状態間の遷移で記述できる。認識遷移図では認識外の生現実が正しく、そこから離れるほど誤りである。開放する方向は正しく、閉鎖する方向は誤りである。閉鎖枠を開放しなければならない。誤りと認識された場合は、閉鎖枠があっても途中状態になるので重要でない。

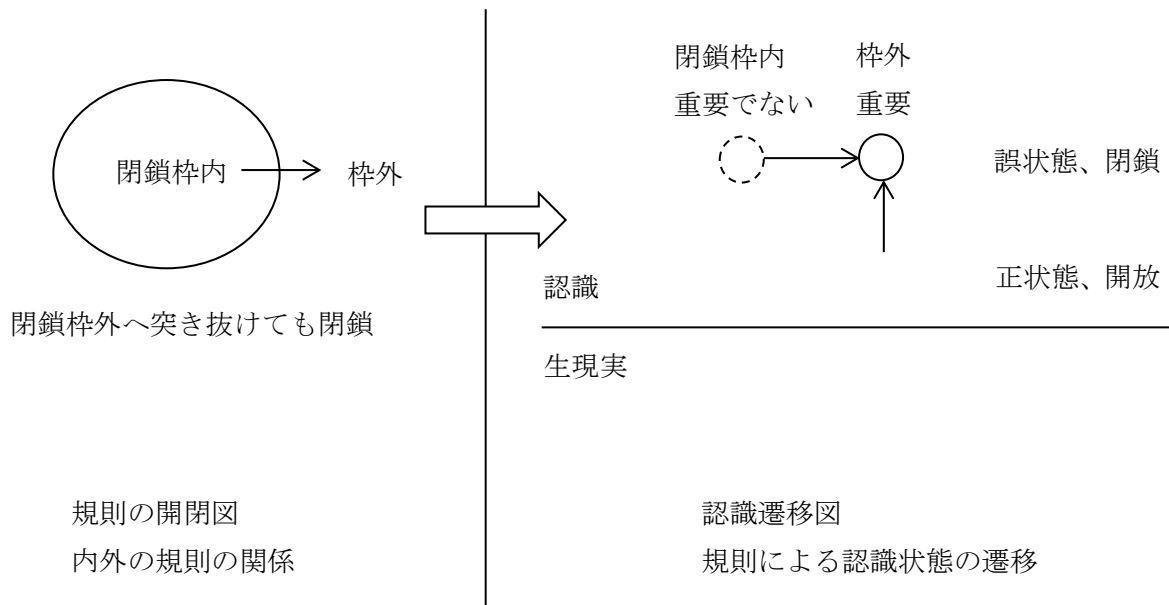
閉鎖枠内から閉鎖枠外に正しい評価を変更しても、閉鎖している事に変わりはない。閉鎖枠外に出て開放感があったとしても、実際には開放していない。閉鎖枠を外して閉鎖枠内外を繋げる必要がある。閉鎖枠内外とも正しい評価なら、認識遷移図上では同形式になる。



同じ開閉でも図の表記方法は別

図 3-58 閉鎖枠内外と認識遷移

閉鎖枠外に突き抜けても、閉鎖枠が残っていれば閉鎖のままである。これを認識遷移図で見ると、閉鎖枠内は途中状態、閉鎖枠外は最終状態になる。閉鎖枠内は途中状態なので重要でなく、閉鎖枠外は最終状態なので重要である。閉鎖枠外に突き抜けた場合は、突き抜けた先の認識状態が問題になる。突き抜け元でなく、閉鎖枠を含めた突き抜け先を修正する必要がある。



最終状態が重要、閉鎖枠外へ突き抜けた先が問題
閉鎖枠を含めた突き抜け先を修正

図 3-59 突き抜けと認識遷移

3.7.7. 認識遷移と多閉鎖

多重を含む多閉鎖した認識で、各閉鎖枠内に正誤の評価がある場合も、認識遷移で記述できる。重要なのは最終状態であり、途中状態は重要でない。多閉鎖において重要なのは正しいと評価された閉鎖であり、誤りと評価された閉鎖は重要でない。正しいと評価された閉鎖以外の認識は、すべて誤りと評価されるからである。

閉鎖枠は各認識状態で共有しているので、多閉鎖全体を一つの複合的状态と捉える事もできる。重要なのは最終状態なので、正しいと評価された多閉鎖を全開放する必要がある。最終状態は正しいと評価された閉鎖区域であり、閉鎖枠の外側も最終状態になる可能性がある。認識上は閉鎖に見えるが、実際には閉鎖ではない。

生現実の情報は入認識遷移により変形される。生現実から離れて正しい評価基準が分からず、対象ごとに誤った正誤評価が行われる。閉鎖により内外の関係は分断する。

正誤の基準は認識外であり、これを見なければならぬ。人間は曖昧なので生現実との離反が分からない。現実には明確なので離反が分かり、多閉鎖の修正ができる。開放現実を理解する必要がある。

閉鎖は誤りであり、正しい開放連続な理解をしなければならぬ。閉鎖枠が強く閉鎖が多いほど誤りが大きい。誤った認識遷移により閉鎖分断が保持される。正しい出認識遷移を得られれば、認識外の一貫連続・整合性が導入され、認識は正しく1つの開放連続した状態になる。閉鎖分断したどれかの状態が正しいのではなく、閉鎖分断が誤りであり開放する必要がある。複数の最終誤状態があっても、遠い状態には移れないため正誤の程度は大差ない。多重閉鎖や交代はある程度の距離になる。

人間は知性により認識全体を修正するため、優れた正状態も作れるが、ひどい誤状態も作れる。生現実にある生満足や開放などの規則を正しく理解し、生現実に近い認識状態を作らなければならない。ひどい多閉鎖を保持するような状況では知性を持つ意味がない。

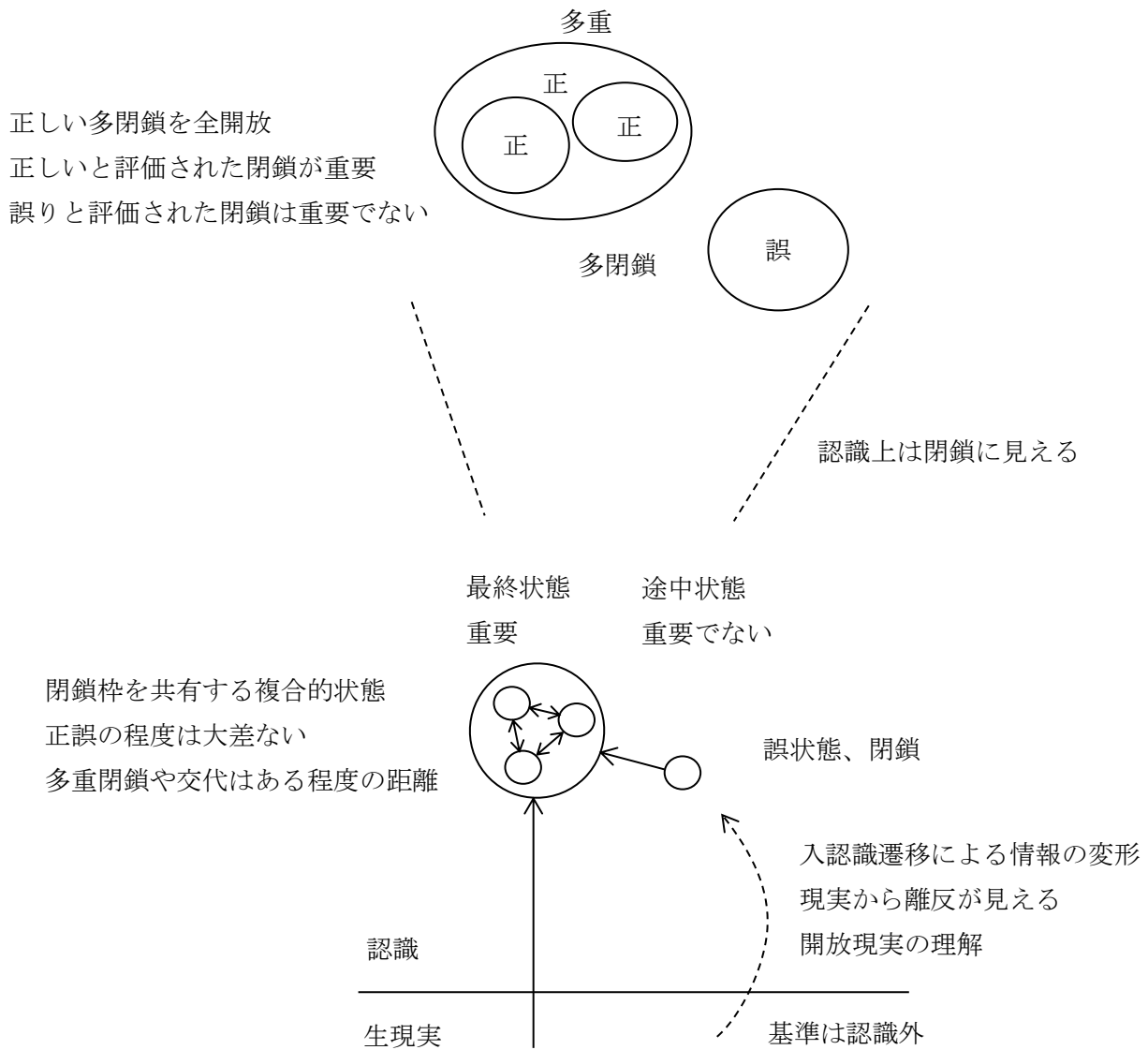


図 3-60 多閉鎖の認識遷移

3.8. 正・誤評性

3.8.1. 正・誤評価と正・誤評性

認識遷移において、最終的な遷移先は正しいと評価され、それ以外は誤りと評価される。最終遷移先は肯定、その他は否定と呼ぶ事もできる。正しい認識を持てば満足が得られ、誤りなら満足が減る場合もある。認識による満足の増減分は、認識の正・誤評価に連動して発生する。これを正・誤評性と呼ぶ。正評性は正基準である最終遷移先で最大となり、そこから距離が離れるほど誤評性が大きくなる。正・誤評価や正・誤評性は、正基準からの距離の程度であり、絶対的なものではない。

正・誤評性は認識の正・誤評価と正の相関を持つ。認識の正・誤評価を r 、正・誤評性を c とすると、認識を満足に変換する関数 s_r により以下の式が成り立つ。

$$c = s_r(r) \tag{3-5}$$

式(2-1)より全体の満足 s は以下の式になる。 s_b は満足の基礎部分で、認識がない場合の満足である。正・誤評性 c は負になる可能性もある。

$s_r(r)$ は認識を満足に変換する関数であり、正・誤評性 c と同値である。二重人間のため曖昧になる。開放現実から正・誤評性を見る事により、二重人間の誤りを抑える必要がある。

正・誤評性は人間・満足の一部であり曖昧である。正・誤評性を生現実化して、真に正しくする必要がある。知性による正しい認識遷移が必要である。正しい認識と生満足は連動している。これは知性と感情の連動の一種である。

$$s = s_b + s_r(r) = s_b + c \tag{3-6}$$

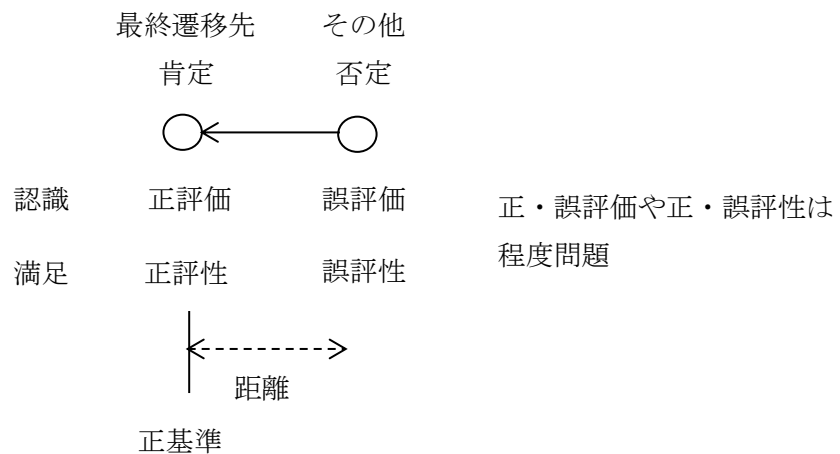


図 3-61 正・誤評価と正・誤評性

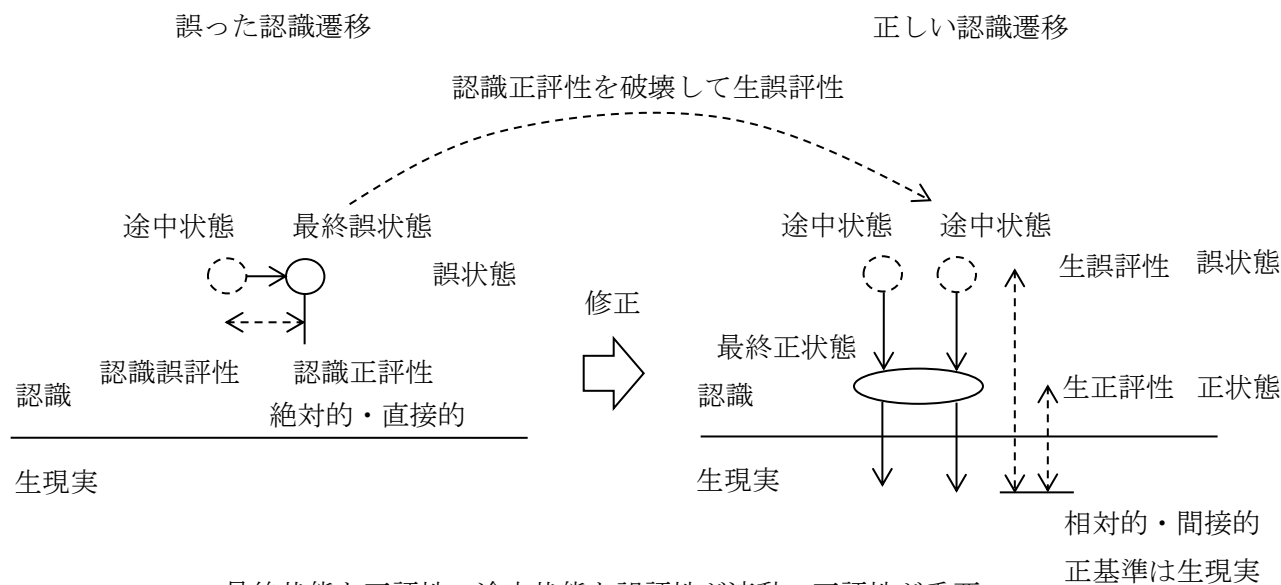
認識の真に正しい基準は認識外の生現実である。生現実基準の正・誤評性を生正・誤評性と呼び、認識状態基準の正・誤評性を認識正・誤評性と呼ぶ。生正・誤評性が正しく、認識正・誤評性は誤りである。正しい認識を持てば、生正評性により生満足の基礎部分を改善できる。

正・誤評性は正・誤評価に付随して発生するので、本質的に正誤の基準にならない。正誤の基準にするのは因果関係が逆である。認識内の正・誤評性を見ても実際の正誤は分からず、認識外の生現実を見る必要がある。自己肯定や自己否定も二重自己のため曖昧である。開放現実から生自己を理解する必要がある。

正評性は最終状態と連動し、誤評性は途中状態と連動する。重要なのは最終状態であり、最終正状態を作成する必要がある。正・誤評性のうち重要なのは正評性であり、生正評性を作成しなければならない。誤評性に囚われても満足増加に繋がらないので意味がない。認識正・誤評性で見ると、満足のある認識正評性の方が最終誤状態に直結しており問題が大きい。認識正評性は推論の基準になるので、誤った認識正評性は生不満に繋がる。認識誤評性は直接的には生不満に繋がらない。「認識誤評性のある場所から逃げる」という行動でも、「逃げる」事の認識正評性が問題である。

認識正評性を正しく壊すと生誤評性になるが、それだけでは満足が見えない。生正評性を作ってから認識正評性を壊す必要がある。誤った認識を修正して生満足化すべきである。

最終誤状態の場合、認識の正評価は絶対的・直接的なものになる。最終正状態の場合、正しいのは認識外なので、認識の正評価は相対的・間接的になる。相対的・間接的であれば正しいという訳ではなく、生現実を正基準にするのが正しい。相対・絶対・直接・間接よりも生現実が重要である。



最終状態と正評性、途中状態と誤評性が連動、正評性が重要
 認識誤評性より認識正評性の方が問題大、推論の基準で生不満
 認識正評性を壊すだけでは満足が見えなくなり無意味
 生正評性を作って認識正評性を壊す、誤りを修正して生満足化

図 3-62 認識正・誤評性と生正・誤評性

3.8.2. 正・誤評性と人間・現実

正・誤評性は人間の一部であり、二重人間のため曖昧な理解しかできない。最終状態の正評性が重要であり、開放現実から生正評性を見る必要がある。これにより開放現実と繋がった正しい正・誤評性を理解できる。認識正・誤評性を生現実化しなければならない。無認識感情なら人間側から見えるので重要であり、一步引いて感情を見る必要がある。

開放した最終正状態は、生現実と接近している。人間として生正評性を持ち、現実が接近し満足と関係して見える。これが正しい認識である。

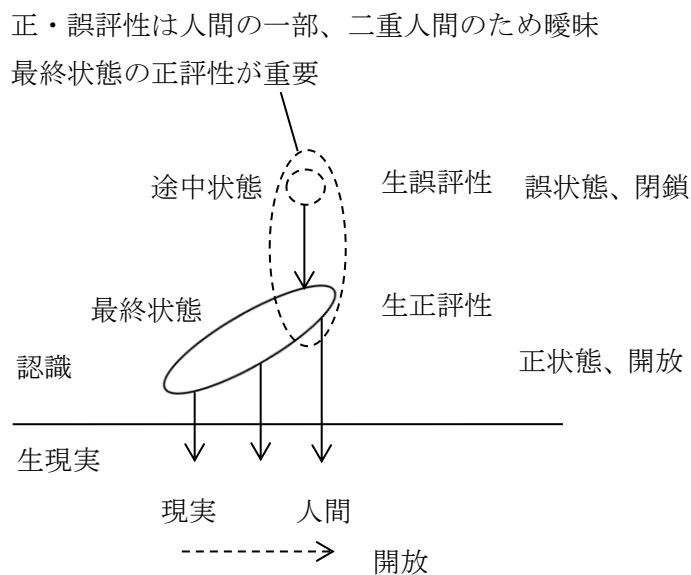
閉鎖した最終誤状態は、生現実と離反して見える。人間として認識正評性を持つが、実際には生誤評性である。現実が離反し不満と関係して見え、「人間」として「現実」は良くないものとみなされる。これは誤った認識である。

人間は曖昧であり、生現実からの離反も生正・誤評性も分からない。現実とは明確であり、生現実からの離反も生正・誤評性も分かる。これは最終正状態でも最終誤状態でも同様である。最終誤状態においては、現実が不満をもたらすのではなく、正しい不満が見えていないだけである。人間的認識による隠された生不満を見る必要がある。現実経由で正しい生正・誤評性を理解しなければならない。

現実的に見て不満な状況での満足感は、認識正評性であり誤りである。このような認識は現実的に修正しなければならない。それにより正しい現実的な満足が得られるようになる。

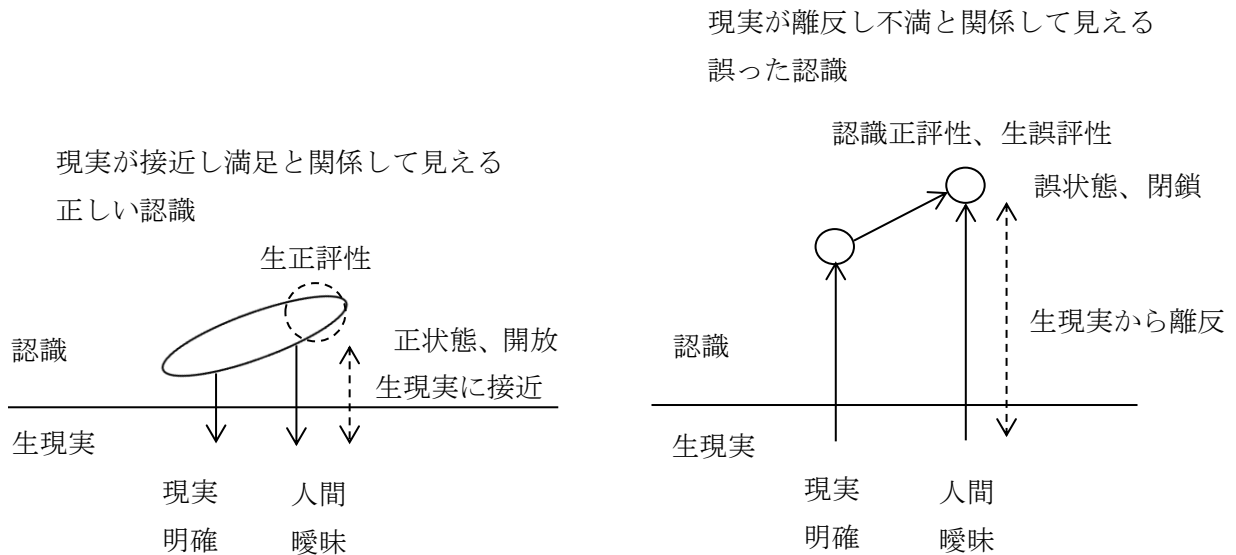
認識・感覚・行動にも感情に伴い正・誤評性が付随する。認識だと肯定・否定、ポジティブ・ネガティブ、賢い・愚か、良い・悪いなどがある。感覚・行動だと明るい・暗い、自由・不自由などがある。「分かった感・できた感」も正評性である。すべて生正・誤評性が正しく、認識正・誤評性は誤りである。

感情に付随する感覚・行動を生現実化する事で、感情の生現実化ができる。現実とは別実区分にも開放的に繋がる。例えば対人的な明るさだけを求める、というのは閉鎖的で誤りである。



開放現実から生正評性を見る、正・誤評性の生現実化
無認識感情なら人間側から見えるので重要

図 3-63 正・誤評性と人間・現実



人間は曖昧、生現実からの離反も生正・誤評性も分からない
 現実 は 明確、生現実からの離反も生正・誤評性も分かる
 現実が不満をもたらすのでなく、正しい不満が見えていないだけ
 人間的認識による隠された生不満を見る必要

図 3-64 正・誤評性と人間・現実と接近・離反

3.8.3. 人間・現実と認識・満足

人間・現実と認識・満足の因果関係について検討する。生現実的に見て人間の生現実化を行えば、認識は正しくなる。これにより生正評性と生満足が得られる。これが明確で正しい因果関係である。

人間的であれば認識は曖昧になり、満足・不満足も曖昧になる。そのため誤って満足に見える場合がある。満足に見えるから認識が正しいと考えるのは、因果関係が逆で誤りである。

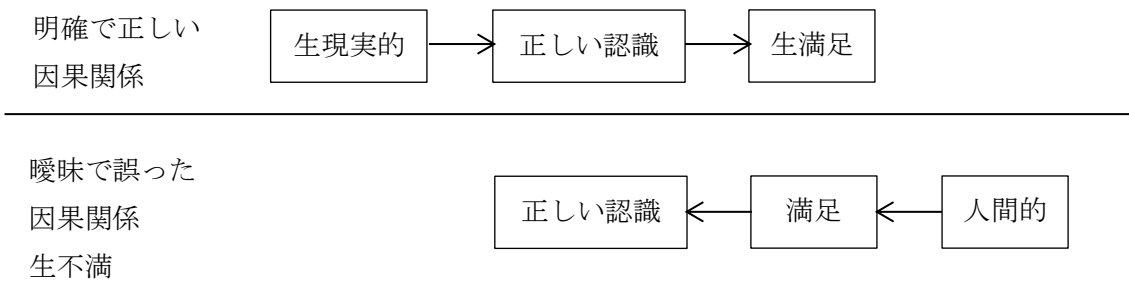
満足・不満は人間的で曖昧であり、評価基準にするのは適切でない。曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさが必要である。人間的認識による生不満の理解が重要である。満足感でなく生息状況を見るべきである。現実的な真の満足でなければならない。

誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪である。無認識感情から見て、すべての満足から一步引き生不満を見る必要がある。生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見るべきである。人間的な満足は不自然であり、人間的な不整合を無くす事で生満足を得られる。人間的な満足・不満の不整合を見て、満足・不満を生現実化するの正しい。認識を正しくして生満足を求める必要がある。誤りを修正して生満足化すべきである。生息状況を見る事で、生満足を正しく理解できる。

「明るさ」という言葉は、満足の意味と正しさの意味を兼ね備えている。満足の明るさでなく、正しさの明るさが必要である。

生不満は生息状況の問題であり、生現実的に見るとうまく行かない事である。人間的で曖昧な因果関係により、推論の基準が誤りになる。これにより生不満が生じる。推論の原因は現実でなく人間にある。

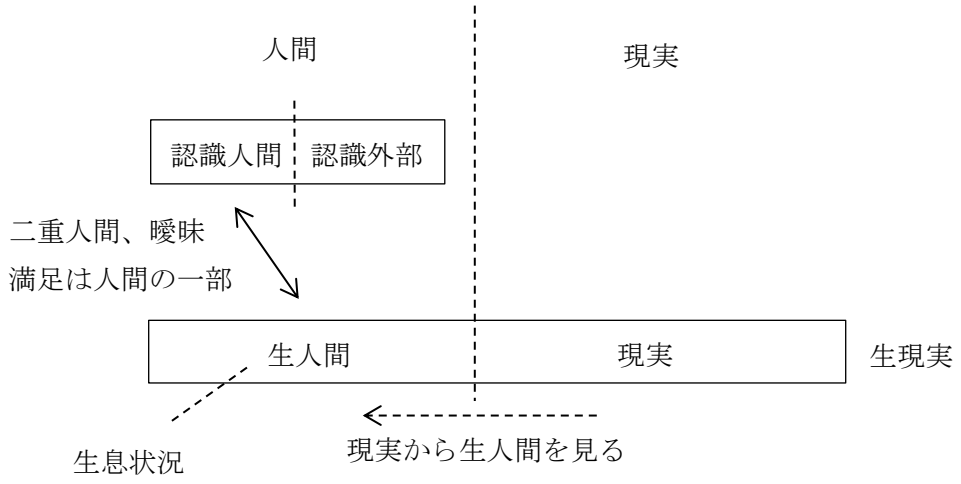
「良く分からないが満足なので正しい」とか、「満足だから馬鹿でもいい」などの考え方は誤りである。生息状況を検証し、生満足を求めるべきである。



曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさ、人間的認識による生不満
 満足感でなく生息状況、現実的な真の満足
 誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪、すべての満足から一步引き生不満を見る
 生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見る
 誤りを修正して生満足化、生息状況から生満足を理解
 人間的な推論の基準で生不満、原因は現実でなく人間

図 3-65 人間・現実と認識・満足の因果関係

満足の問題を明示するため、二重人間の図を使用する。二重人間のため人間は曖昧になる。満足も人間の一部なので曖昧になる。認識満足が曖昧なのでなく、満足全体が曖昧になる。満足を見るだけでは生満足は分からない。生満足を理解するためには、生現実・生息状況・整合・開放・無認識感情などを見る必要がある。



認識満足が曖昧なのでなく、満足全体が曖昧
 満足を見るだけでは生満足は分からない
 生現実・生息状況・整合・開放・無認識感情などを見る必要

図 3-66 満足全体の曖昧さ

3.8.4. 正・誤評性のグラフ

認識遷移図において、最終状態からの距離が誤評性の程度になる。認識遷移図の縦は同一実区分、横は別実区分である。縦横とも現実を見れば認識の正誤が分かる。開放現実や知的生物の生感情の理解が重要である。

正・誤評性の程度をグラフ化する。認識遷移図と同じく、横に別実区分を並べる。誤状態は最終状態の閉鎖枠内のみ認識正評性で、他は認識誤評性になる。誤状態は閉鎖範囲を超えると途中状態しかなく、すべて認識誤評性になる。閉鎖範囲の外にある実区分には「誤り」の評価しかなく、最大の正・誤評性でも低い評価にしかない。実区分が閉鎖範囲から外れるほどに誤評性が強くなる。

閉鎖範囲の認識正評性は、一か所だけ明りの付いたスポットライトのように見える。時間的に別実区分へと変化すると、一時的にライトが付くようにも見える。人間は開放連続した生現実の中にいるので、閉鎖した一か所だけが満足を得られるという事はある事はない。このような誤った認識は修正しなければならない。スポットライト的な閉鎖満足は認識正評性による誤りであり、生不満に繋がる。全体として満足が得られるようにすべきである。一点で高い満足でなく全体での満足が正しい。

一か所だけの満足は人間的こだわりとも直結する。一か所に対する人間的こだわりを捨てて、無認識感情を見る必要がある。

閉鎖枠の内・外において認識正・誤評性の切り替わりが生じる。これは1つの閉鎖した認識状態によるものであり、2つの認識状態が交代している訳ではない。問題は閉鎖した最終誤状態であり、それに伴う閉鎖枠内と認識正評性である。高い評価の外側に強い批判がある状況も、閉鎖的で誤りである。閉鎖枠内にある高い評価の方が問題である。現実的検討であれば、評価が急に切り替わる事はない。

正状態の生正・誤評性はどの実区分でも最終状態が存在する。そこから離れた途中状態は全体的に評価が低くなる。全体として生満足の総和が大きければいいので、実区分ごとの生正・誤評性にも揺らぎが生じる。全体として生満足なら揺らぎがあってもいいが、全体が見えていなければならない。一か所だけしか見えない満足は閉鎖的で誤りである。

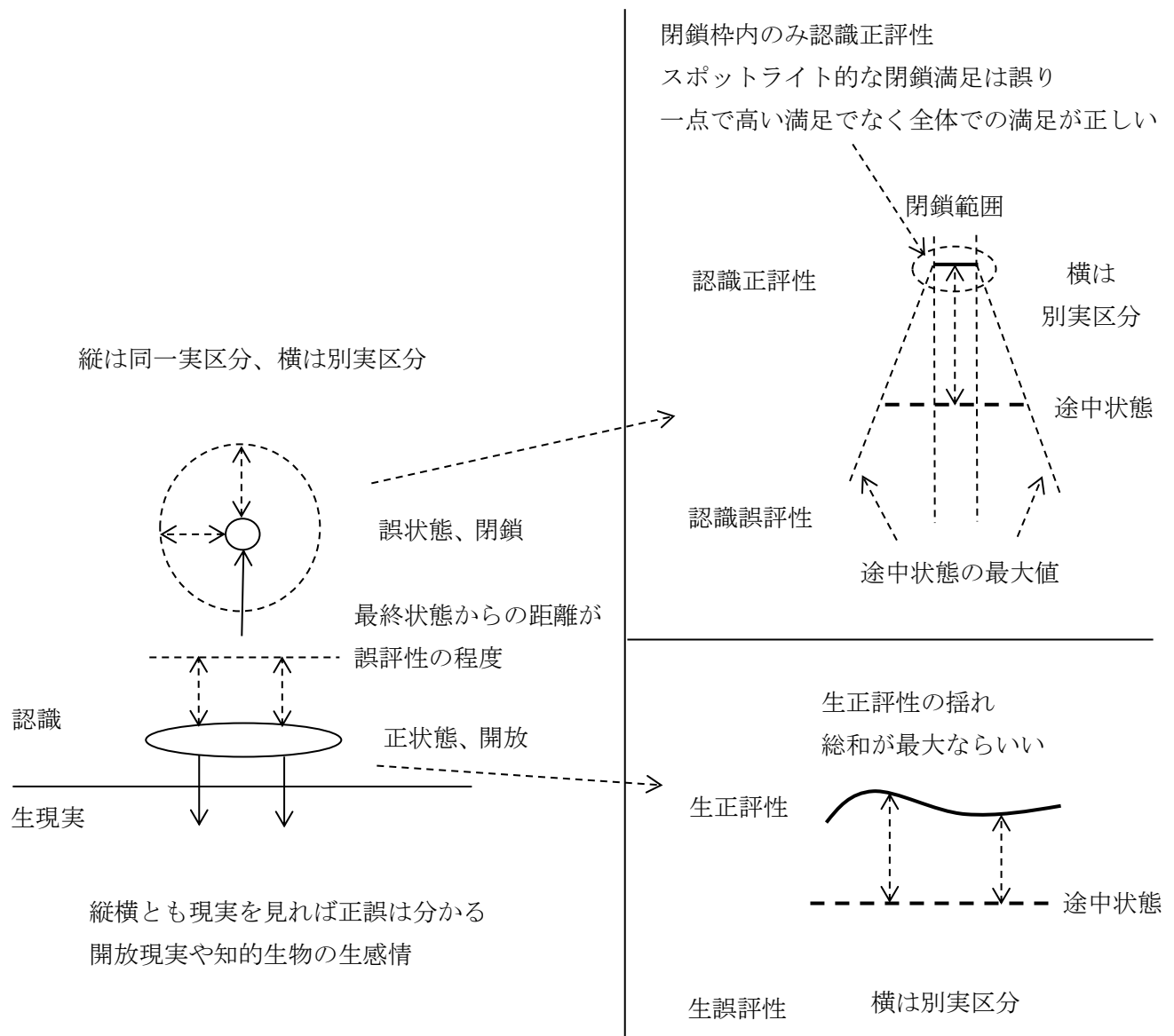


図 3-67 認識遷移と正・誤評性のグラフ

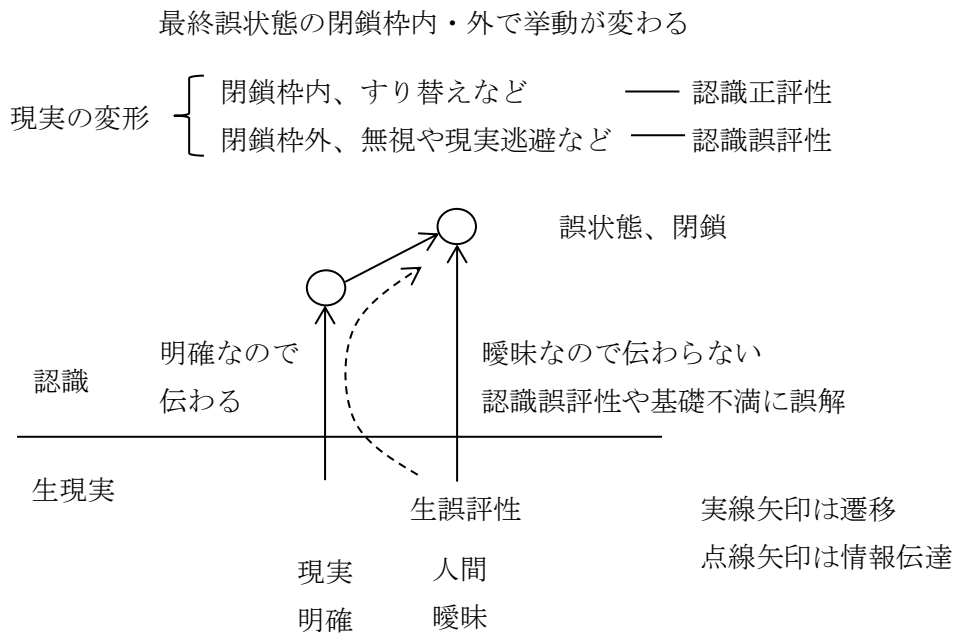
3.8.5. 現実の変形と正・誤評性

認識における現実・人間の情報伝達を考えると、現実には明確なので伝わるが、人間は曖昧なので伝わらない。人間的な最終誤状態を持っている場合、明確な現実には人間的に変形される。最終状態の閉鎖枠内ではすり替えなどが起こり、閉鎖枠外では無視や現実逃避などが起こる。閉鎖枠内では認識正評性が付随し、閉鎖枠外では認識誤評性が付随する。最終誤状態の閉鎖枠内・外で、現実の変形や正・誤評性の挙動が変化する。

最終誤状態なら必ず生誤評性が生じる。生誤評性は人間経由では情報伝達されず、現実には付随する形で情報伝達される。明確な現実には、曖昧な生誤評性が付随する事になる。生誤評性は認識外なので誤解される。現実への認識誤評性に誤解されると、現実がおかしいと感じる。認識に依存しない基礎不満に誤解されると、避けられない不満を感じる。自分の考えが人間的で曖昧なので不満になるのが正しく、このような誤解は修正しなければならない。

現実と生誤評性を正しく受け取り、誤った認識を修正すべきである。人間・現実が閉鎖分断しており、現実

だけ見るのも不十分である。開放現実から生人間を見て、人間や正・誤評性を生現実化する必要がある。これにより生満足を得られるようになる。無認識感情なら人間側から見えるので重要であり、一歩引いて感情を見れば開放的に理解できる。



明確な現実を人間的に変形、現実に曖昧な生誤評性が付随
 現実と生誤評性を正しく受け取り、誤った認識を修正すべき
 人間・現実が閉鎖分断、現実だけ見るのも不十分
 開放現実から生人間を見て、人間や正・誤評性を生現実化する必要
 無認識感情なら人間側から見えるので重要

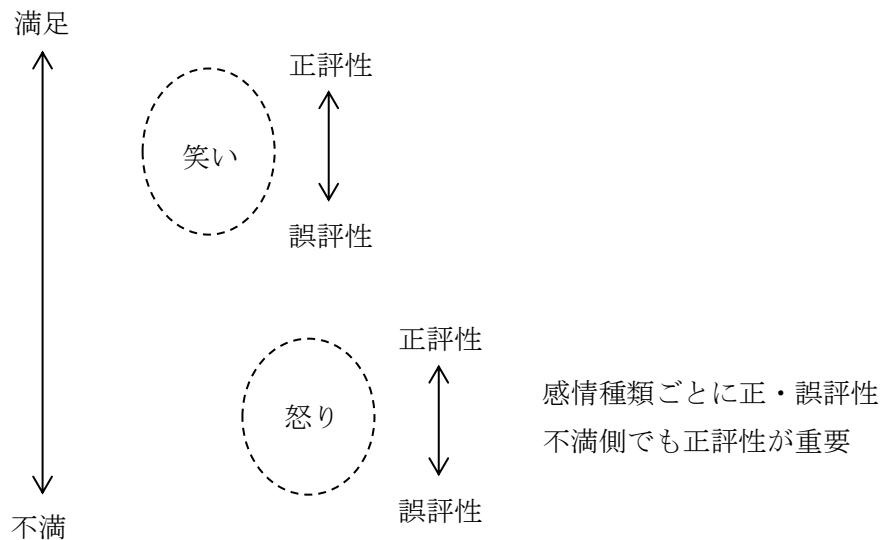
図 3-68 現実と生誤評性

3.8.6. 感情種類と正・誤評性

感情種類には満足に近いものと不満に近いものがあり、正・誤評性は感情種類ごとに存在する。誤評性より正評性が重要であり、これは不満側の感情種類でも変わらない。不満側の誤った認識においては、不満側の認識正評性が問題になる。誤った怒りに閉鎖している場合、問題なのは怒りによる満足感である。

不満側の感情種類に囚われると認識上で不満が強くなり、満足側より問題が大きく見える。これは認識上でそう「見える」だけであり、生現実上では満足側・不満側の違いはない。満足側・不満側のどちらに囚われても認識の誤りにより生誤評性が発生し、同じように問題である。不満側の認識感情に囚われている場合、最も問題なのは不満側の認識正評性である。

感情種類は満足側・不満側・中間に多数存在するため、どんな状況でも「満足だけ」「不満だけ」にはならない。「満足だけ」「不満だけ」なのは閉鎖による誤りである。

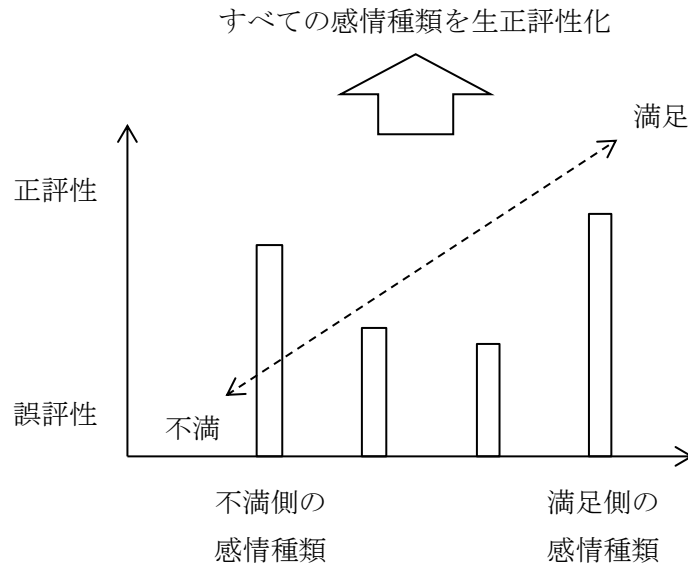


一つの感情種類に捉われるのは閉鎖で誤り、満足側・不満側とも同様
 不満側に囚われると問題が大きくなるが、生現実上で満足側・不満側の違いはない
 不満側の誤った認識では、不満側の認識正評性が問題
 感情種類は多数、「満足だけ」「不満だけ」なのは閉鎖による誤り

図 3-69 感情種類と正・誤評性

感情種類と正・誤評性についてグラフ化する。感情種類と正・誤評性は別の軸にあり、感情種類は別実区分に相当する。満足側・不満側の感情種類を横軸とする。満足・不満はグラフ上の斜め方向になる。感情種類ごとに満足の基礎部分が異なり、満足側ほど大きくなる。

すべての感情種類を生正評性化する必要がある。一つの感情種類に囚われるのは閉鎖で誤りである。これは満足側・不満側とも同様である。満足・不満の間にある地味感情まで開放的に理解する必要がある。



感情種類と正・誤評性は別の軸、感情種類は別実区分
感情種類ごとに満足の基礎部分が異なる、満足側ほど大きい

図 3-70 感情種類と正・誤評性のグラフ

3.8.7. 感情種類・実区分と正・誤評性

感情種類・実区分と正・誤評性を合わせて分析する。実区分と感情種類を別の軸にした図を作成し、感情種類を満足側と不満側で分ける。

実区分で閉鎖している場合、特定の実区分だけが最終誤状態になる。閉鎖した最終誤状態の部分に認識正評性が付随し、途中状態の部分に認識誤評性が付随する。感情種類でも閉鎖し、満足側・不満側と認識正・誤状態が連動した場合を考える。満足側は最終誤状態で閉鎖し、不満側は途中状態で閉鎖する。満足は最終誤状態の満足側だけに存在する。このような状況は誤りである。

最終正状態であれば、感情種類・実区分で開放した理解になる。これにより生正評性が得られる。開放的に理解し、全体で満足を得るのが正しい。

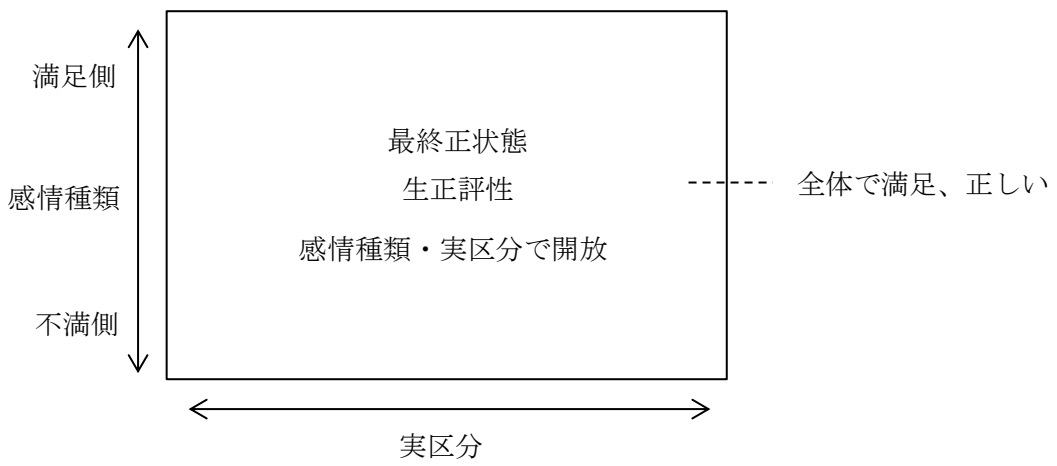
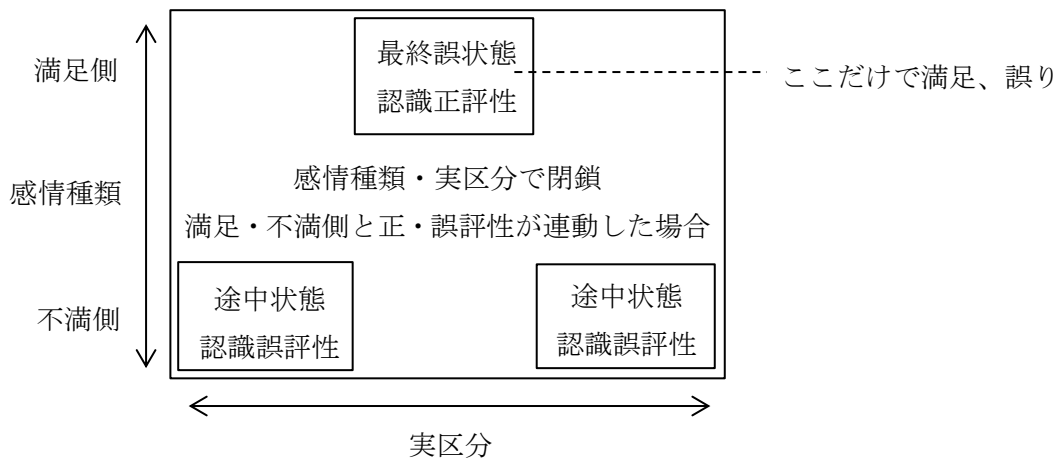


図 3-71 感情種類・実区分と正・誤評性

3.9. 認識遷移と近辺・遠方

3.9.1. 近辺・遠方

近辺は明確・重要で理解が容易であり、遠方は曖昧・非重要で理解が困難である。近辺・遠方を同じ正しきで評価した場合、近辺の認識状態は生現実近く、遠方は遠くなる。近辺は理解しやすいが自己への影響も大きく、遠方は理解しにくいが自己への影響も小さい。そのため自己の近くを正しく理解する事で生満足を得る事が可能になる。

近辺から開放的な理解をする事で、遠方に向けて高正確な理解ができる。重要なのは近辺である。遠方そのものの理解より、近辺・遠方の開放連続の理解が重要である。近辺から遠方へ全開放した理解をする必要がある。

二重人間のため人間への認識は曖昧であり、近辺と遠方が閉鎖分断される可能性もある。開放現実から生人間を見る必要がある。近現実開放により、二重人間の問題を回避できる。

空間的な近辺・遠方においても、時間的な過去・現在・未来においても、正基準は認識外である。場所に関わらず常に認識外の生現実で評価しなければならない。

近辺にも遠方にも規則性はある。違いは近辺の方が理解しやすい事だけである。近辺と遠方を繋ぐ規則性を発見する事が重要である。

局所・広域は範囲であり、近辺・遠方などの距離と区分する必要がある。現在・過去・未来は時間的な近辺・遠方である。短期・長期は時間的な局所・広域であり、自己・社会等は空間的な局所・広域である。遠方は重要でないが、広域は近辺を含むので重要である。

空間において、自己・他者の連携と相互生満足は近辺なので重要である。連携のない自己・他者は遠方なので重要でない。

時間において、過去の理解は容易で未来の理解は困難である。生満足増加に影響するのは現在と未来だけだが、開放連続を理解するために過去の理解も必要である。

開放した広域と、局所広域閉鎖による誤った広域の違いに注意する必要がある。開放した最終正状態が適用できるのは、生現実のすべてである。局所が抜けた誤った広域は閉鎖範囲でしかない。

時空間以外の位置もあり得る。同一時空距離でも最終誤状態の交代が起こり得る。非常に近い事象を何らかの位置で閉鎖的に分けする場合である。このような閉鎖はまったくの誤りである。閉鎖のため交代する状態はある程度関係距離になる。例えば家庭内で普段は温厚なのに急に怒り出す、というような事が起こる。

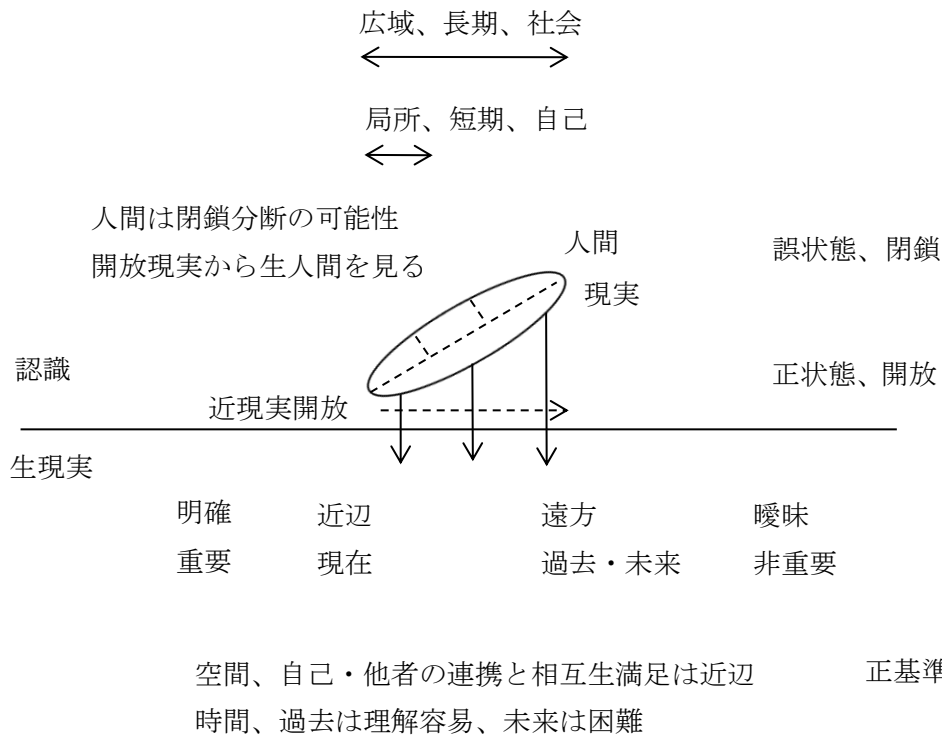


図 3-72 近辺・遠方を出認識遷移

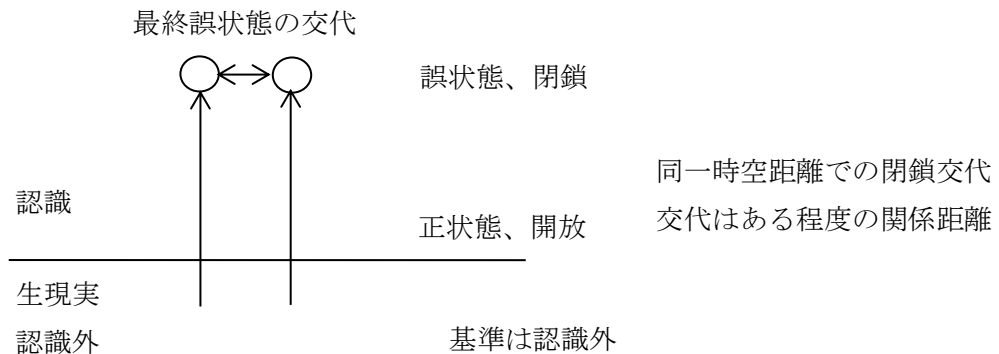


図 3-73 同一時空距離での閉鎖交代

重要な近辺の位置は時空間的に移動する。自己（範囲）の位置は空間的に変わり、現在は過去になる。近辺の理解もこの変化を追従しなければならない。重要で理解容易なのは変化した先の自己や現在の周辺であり、変化前の自己や過去に囚われるのは誤りである。近辺と同時に遠方も移動する。現在が過去になると同時に、未来は現在になる。適切な自己のあり方は時空間的位置により異なり、それを正しく理解する必要がある。

空間遠方の認識は自己より他者の方が正しい可能性が高い。優れた他者の認識を受け入れる必要がある。能力の低い人間は特に重要である。認識の受け入れは自己の自発性とは無関係であり、開放連続して認識を正しい方向に持っていくのが正しい。最終正状態にある多個人の認識を集める事で、最も正しい広域的な認識状態を作る事ができる。

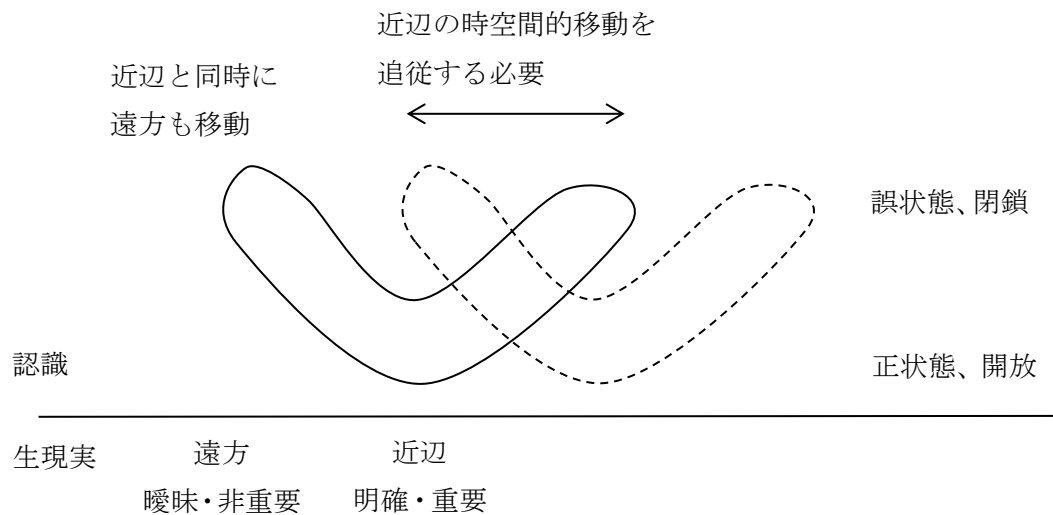


図 3-74 近辺・遠方と時空間的移動

3.9.2. 近辺・遠方と正・誤評性

生正・誤評性は式(3-5)のように、認識の正誤評価を生満足評価に変換した値である。近辺と遠方で自己への影響度に差があるため、同じ正誤評価でも生満足評価には差が出る。近辺は生正・誤評性とも絶対値が大きく、遠方は絶対値が小さい。遠方は式(3-6)の生満足基礎部分も小さい。

遠方は生正・誤評性の振れが小さく、全体への影響も低くなる。これは閉鎖時の認識正・誤評性のように、閉鎖範囲から外れると強い誤評性になるのとは違う。生現実の開放連続を正しく理解し、正・誤評性も開放的に見なければならぬ。

正・誤評性は人間の一部である。二重人間のため正・誤評性は曖昧であり、近辺と遠方の間で閉鎖分断する可能性がある。開放現実から生正・誤評性を見る必要がある。これにより正・誤評性が近辺から遠方まで開放連続し、全体としての生正評性を増加させる事が可能になる。

近辺を正確に理解して、その生正評性を大きくする事を目指す必要がある。遠方は不正確な理解でも生誤評性が小さいので大きな問題にはならない。それよりも開放連続を正しく理解し、近辺に近い部分が正しく理解できるようにする必要がある。

正評性は最終状態に伴い重要であり、誤評性は途中状態に伴い重要でない。誤評性に囚われても満足増加に繋がらないので意味がない。問題は常に正評性にあり、生正評性が得られるようにしなければならない。

二重自己のため自己でも正しいとは限らず、生自己を正しく理解する必要がある。生正・誤評性の評価も生自己や生感情に基づくので、生自己を理解しなければ分からない。自己は空間的に最も近辺にあり非常に重要である。生自己を正しく理解すれば自然に開放される。

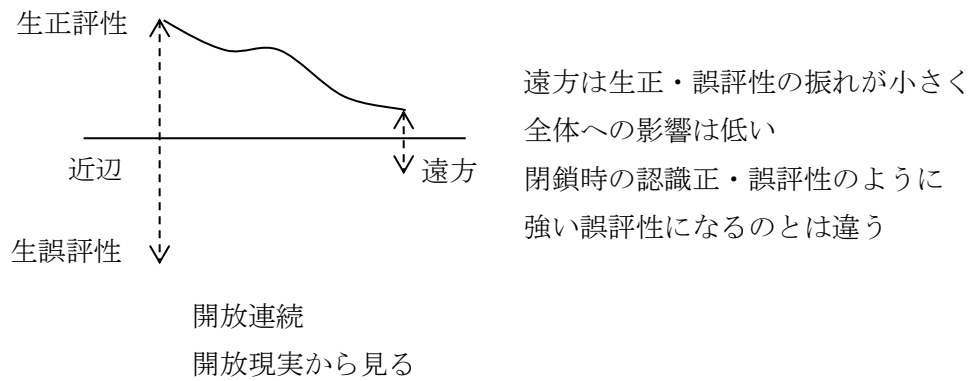


図 3-75 近辺・遠方と生正・誤評性

3.9.3. 局所・広域

局所のミクロ認識と広域のマクロ認識は重なっており、合わせて1つの認識にする必要がある。認識状態としても1つにして、全体として整合しなければならない。生現実時は時空間の近辺から遠方まで開放連続であり、それを正しく理解する必要がある。時間的な短期・長期でも、空間的な自己・世界でも同様である。

近辺・遠方でも局所・広域でも、正基準は認識外である。生現実からの距離で評価しなければならない。開放・閉鎖は規則として重要である。

時空間において近辺の生正・誤評性と遠方の生正・誤評性は開放連続であり、相互影響している。局所・広域に関しても生正・誤評性の開放を正しく理解しなければならない。近辺と遠方の正・誤評性をバラバラに理解するのは誤りである。人間は二重人間のため曖昧で、閉鎖分断した認識になる可能性がある。開放現実から生人間を見るのが正しい。近辺を中心に全体を生正評性化する必要がある。

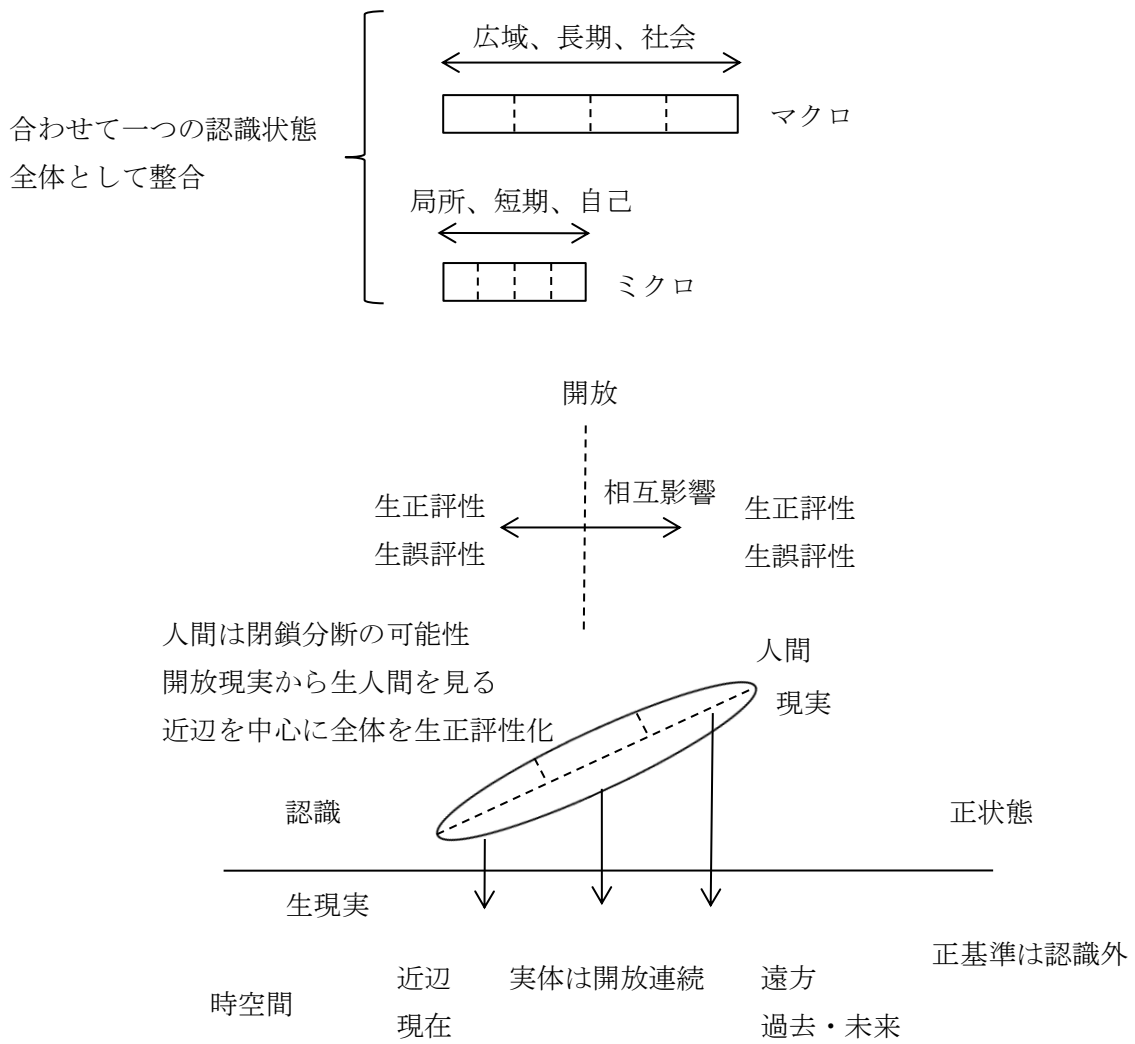


図 3-76 正しい局所・広域の認識遷移

認識遷移図において、縦方向は同一実区分であり、横方向は別実区分である。縦も横も現実を見る事で正しく理解できる。局所・広域における別実区分は、開放現実により繋がる。現実から見る事で開放を正しく理解できる。横軸の同一・別実区分は、開放時には近く、閉鎖時には遠くなる。

同一実区分 <-> 別実区分

開放連続により繋がる
現実から見る事で開放を正しく理解

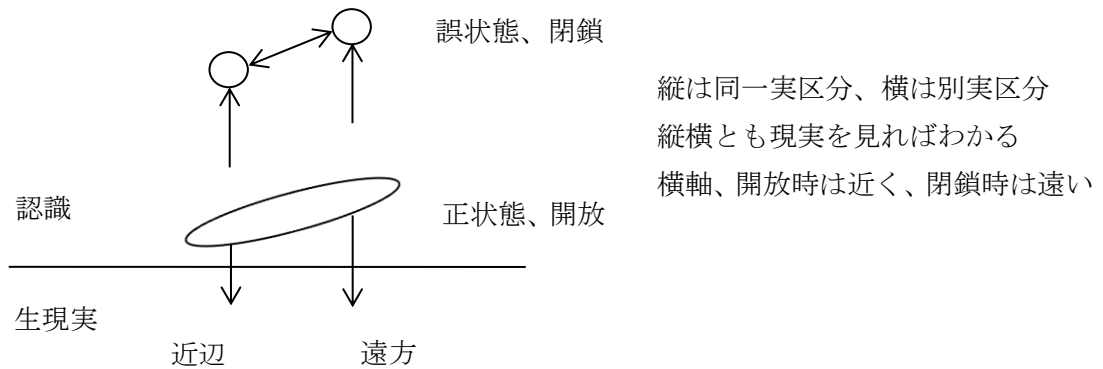
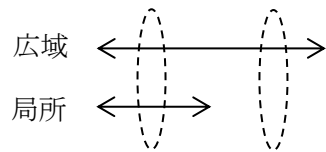


図 3-77 局所・広域と実区分

3.9.4. 局所広域閉鎖と正・誤評性

誤った局所広域閉鎖の認識遷移は、近辺・遠方に閉鎖した最終誤状態が存在する。広域が誤って遠方に置かれ、近辺と遠方が閉鎖分断し、相互影響なしと誤解される。局所閉鎖側には暴力・反社会などの短期・自己が、広域閉鎖側には過度な穏健・社会秩序などの長期・社会が置かれる。閉鎖により近辺と遠方の距離が遠くなる。

多くの感情種類に関する認識正・誤評性もこれに基づいて置かれる。局所閉鎖側には気持ち、快感、自由、自分らしさなどが置かれる。広域閉鎖側には安定、成功、愛、社交性、優越感などが置かれる。認識正評性は「正しい」という評価の結果であり、それ自体に正しいという根拠はない。閉鎖して相互影響が切れた状態ではこれらはすべて誤りであり、近辺から遠方へ全開放しなければならない。近辺・遠方の中間的な感情まで開放的に理解する必要がある。

本音・建前や不良・善良などの閉鎖は普通に存在する。開放現実経由の対人関係を理解する必要がある。開放現実から生人間を見る事で、二重人間の曖昧さを回避できる。無認識感情も重要であり、一步引いて感情を見れば開放的に理解できる。

自己・他者の連携と相互生満足は近辺なので重要である。連携のない自己・他者は遠方なので重要でない。開放した相互生満足を理解する必要がある。

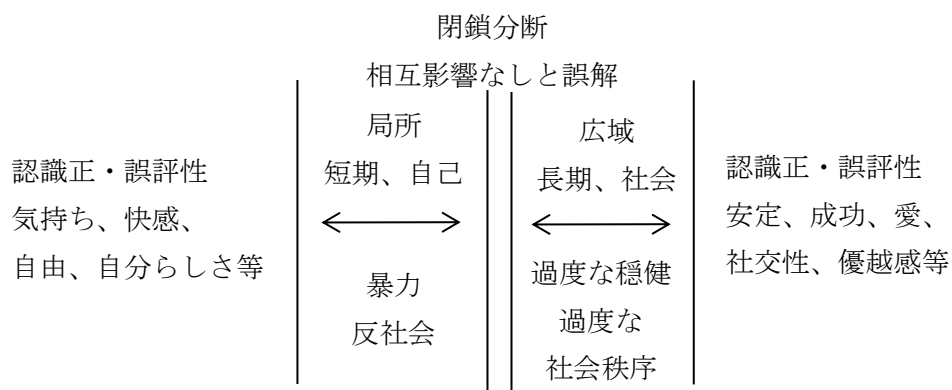
時空間の近辺・遠方には様々な閉鎖の種類があり得る。短期かつ社会などの状況や、多閉鎖もあり得る。これらを近辺から遠方まで全開放する必要がある。明確な近現実から正しい広域を見るべきである。

局所・広域に関しても、正基準は認識外の生現実である。正しく開放した理解ができれば、局所と広域が重なっている事も理解できる。

自分らしさ等の自己に関する正評性も、二重自己のため正しいとは限らない。自己も開放した生自己が正しく、閉鎖した認識自己は誤りである。アドラー心理学 [30]の優越感や自己啓発等も、広域閉鎖なら誤りであ

る。

下落成果、暴力、反社会などの時空閉鎖認識は、分断した認識正・誤評性を伴う。「闇の自由」のような分断した正・誤評性は反社会集団に共通している。社会そのものを闇と見なし、その中で舞台のように反社会集団が存在する、という不自然な感覚を持つ。これらは誤った認識遷移による誤解であり、正・誤評性を開放して正しく理解しなければならない。愚かで正しい認識を作れないなら、他者から正しい認識を受け取る方が幸福になれる。他者の正しい認識を受け入れる必要性は、程度の差こそあれ誰でも同じである。



本音・建前や不良・善良などの閉鎖は普通に存在
 開放現実から生人間を見る、相互生満足
 近辺・遠方で様々な種類と多閉鎖
 近辺・遠方で全開放、近現実から見る

図 3-78 誤った局所広域閉鎖の認識遷移

3.10. 認識遷移と時間

3.10.1. 子供と思春期

人間は知性により認識を変更できる。知性により変形された認識状態を知的認識状態、それ以外の認識状態を非知的認識状態と呼ぶ。人間は認識を任意に変更できるため、生現実に近い認識状態も作成できるが、遙かに遠い認識状態も作成できる。知的認識状態は正しさの差が非常に大きくなる。非知的認識状態は動物や子供のように、外部からの生現実情報を蓄積したものである。低正確な認識しか作成できないが、極端に悪い認識にはならない。知性により変形された認識を止めるという意味で、無認識感情も非知的認識状態に近い。

教育心理学におけるメタ認知＝知性は9才頃から発達が始まる [17]。神経心理学において前頭前野は15才ごろに成熟 [10]する。思春期以前の子供期は知性の発達が不十分で、思春期以降に知性が発達する。子供期の認識は、外部から与えられた知的認識状態と、知性の影響がない非知的認識状態が混在する。自律的な知性による認識の制御が不十分なので、これらの認識は不安定な状態にある。

思春期になると親への依存から独立し、知性が発達して認識を自律的に制御するようになる。思春期が認識遷移の形成において最も重要である。影響を持つのは子供の頃から思春期までの環境のすべてである。家族だけでなく、様々な認識知性伝達が等しく影響をもつ。これには学校、友人、遊び、文化、本、マスメディアなどが挙げられる。学校での教育は組織的に行われるため重要である。正しく認識外の生現実へ向かい、知性による開放現実の理解を与えなければならない。誤った知的認識状態を元に入認識遷移になると、誤った状態で安定的になる。実際は生現実と不整合があるため十分な安定は得られないが、認識上は安定していると思いつむ。認識正評性と生誤評性を持ち、実際には不安定で不満の多い状況になる。

子供期・思春期以前の認識状態を基礎として、思春期以降の自律的な認識遷移が形成される。与えられた知的認識状態も基礎となるだけで、最終的な認識遷移は自律的に作られる。人間の知性が強力であるため、認識遷移は様々な形態になり得る。これが次世代以降の誤った認識知性伝達に繋がる。動物のように知性が弱ければ、現実から大きく離れた認識状態は作られず、誤った認識知性伝達も発生しない。

子供期の認識遷移も、思春期以降の誤った認識遷移も、正しい出認識遷移に修正しなければならない。認識と生現実の整合性が取れ、生正評性を持つ正しい安定が得られる。思春期以降に固定された知性・認識を「尊重」するのは誤りである。生現実に向かう知性と認識でなければならない。自己の時空間的变化に伴い修正も必要になる。正誤の基準は常に認識外の生現実であり、過去の認識であっても生現実を基準に修正するのは変わらない。

誤った入認識遷移で固定してしまうと、動物や子供の非知的認識状態よりも誤りが大きくなる可能性がある。これなら子供の状態の方がいい。正しい出認識遷移を持ってない場合は、他者から正しい認識を受け取った方がいい。遠方において他者の認識を受け入れる必要があるのは、程度の差こそあれ誰でも同じである。自律的な認識修正を放棄しても、他者から与えられる認識が正しければ十分に生満足を得られる。

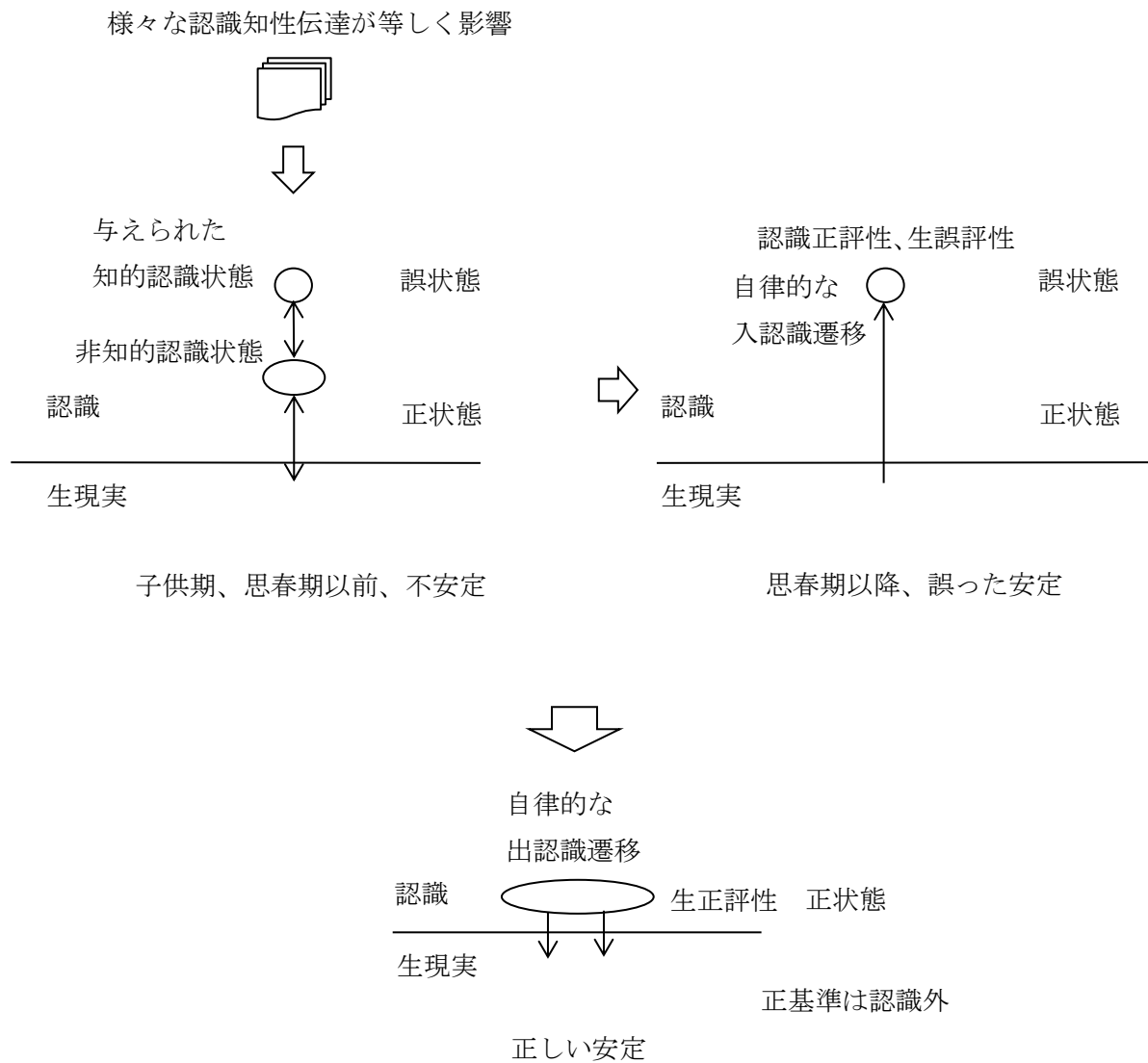


図 3-79 子供と思春期の認識遷移

3.10.2. 過去・現在・未来

時間近辺・遠方を過去・現在・未来に分けると、過去はある程度分かるが未来は分からない。過去を人生の範囲内外で分けると、人生の範囲内はより理解しやすい。認識により生満足を得られるのは現在以降なので、現在と未来の認識が重要で、過去の重要性は低い。特に現在の認識は理解もしやすいし影響も大きく重要である。近い未来も長期生満足を得るために重要である。遠い未来は予測困難であり重要性も落ちる。

過去の認識は未来の予測のために重要になる。過去・現在・未来は開放連続であり、明確な現在から曖昧な過去・未来へ開放する必要がある。開放連続を理解する事で未来の予測が可能になる。開放連続を理解していなければ、過去を理解しても未来予測ができず意味がない。過去は未来と違い、遠い過去でもある程度理解できる。遠い過去までの開放連続を理解すれば、理解困難な遠い未来予測の助けになる。

過去・現在・未来においても正基準は認識外であり、生現実で評価しなければならない。過去・現在・未来の開放連続は、生現実を理解する上で役に立つ規則である。

開放現実から生人間を見る事で、二重自己の曖昧さを回避できる。人間だけを見ると時間的にも閉鎖分断さ

れる可能性がある。人生の範囲で時間近辺・遠方を閉鎖分断するのは誤りである。自分の生前も死後も時間は連続しており、人生を超えた時間開放の理解が必要である。特定の時代で閉鎖分断するのも誤りである。生現実急激な変化があっても分断はない。生死や時代変化でも同様である。人生や時代を超えた時間的な開放現実を理解する事で、正しい生人間の未来予測が可能になる。

認識に依存しない基礎的な満足・不満が時間により変動する可能性がある。この場合でも満足の多い時間位置が「正しい」訳ではない。認識に依存しない満足・不満は人間が扱えない仕方のない部分であり、それに正誤を付けるのは誤りである。認識外の生現実を見て評価しなければならない。

過去・現在・未来に関わらず生現実は規則性を持つ。過去・未来は理解が難しいだけであり、規則の発見により理解する事も可能である。多要素階層を適切化する等の手段により、過去・未来でも可能な限り規則的に理解しなければならない。現在と過去・未来を繋ぐ規則性の理解が重要である。未来においては実規則化も重要な手段になるが、実規則化も生現実上の規則である事を理解する必要がある。

時間の閉鎖認識だけでも、暴力のように短期的な閉鎖や、人生や時代など長期的な閉鎖など様々な種類があり得る。空間との複合的な閉鎖や、多閉鎖もあり得る。これらをすべて局所から広域まで全開放する必要がある。時間的に見れば現在から過去・未来まで全開放しなければならない。

「現在」は常に進み続けている。現在が変化するため、認識遷移は必ず時間変化する。正しい認識遷移でも、現在以降の生現実への遷移が止まれば時間変化により誤状態になる。現在（近辺）は未来（遠方）より重要かつ理解しやすいので、常に現在の近くを修正し続けなければならない。時間変化への追従は、生物としての正しい適応である。

過去の認識を重視すると、現在の時間変化に対応できなくなる。重要なのは過去でなく現在であり、現在から過去へ開放的に見る必要がある。過去の認識は自己の「基礎」ではなく、曖昧な過去の認識でしかない事を理解しなければならない。過去と基礎は次元の異なる事象である。基礎でないからと過去を無視するのも閉鎖分断で誤りである。

開放現実から生人間を見る
人生を超えた開放現実の理解

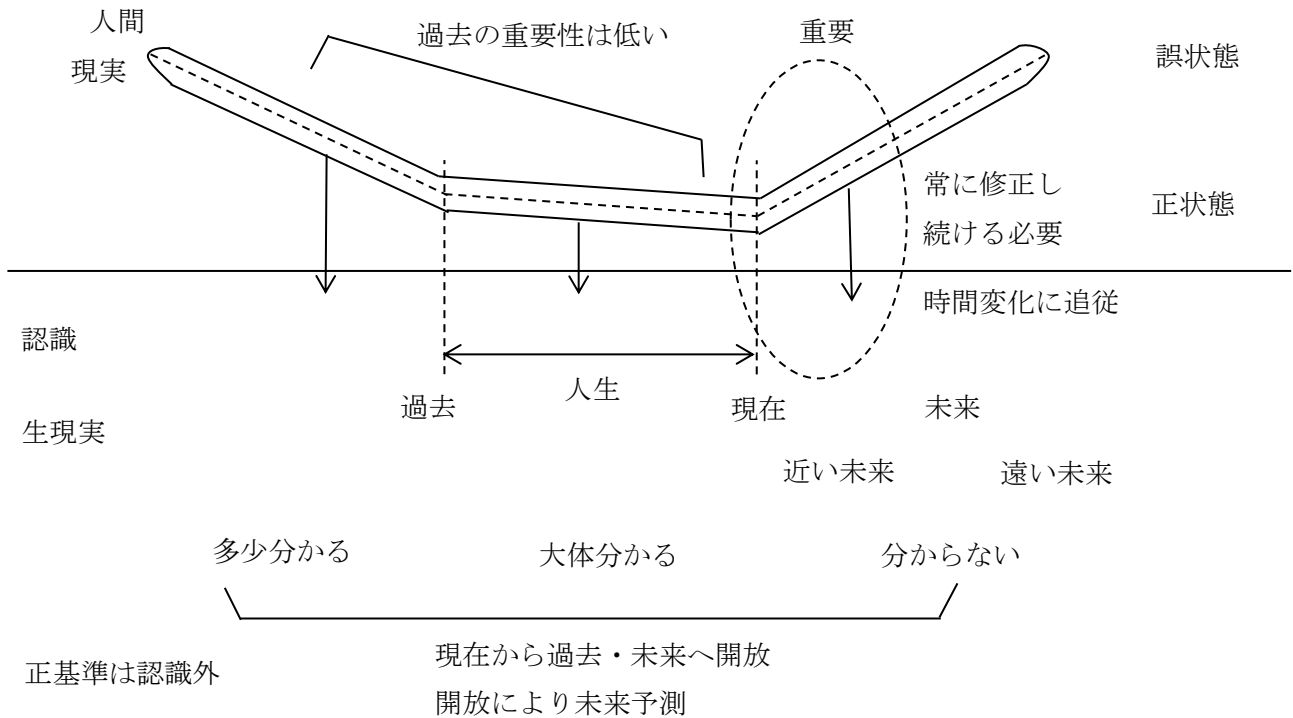


図 3-80 過去・現在・未来の正しい認識遷移

3.10.3. 時間閉鎖と移動・停止時間系

時間において「現在」は常に移動している。誤って時間閉鎖した認識においては、時間の移動を正しく理解できない。過去・現在・未来がそれぞれの場所で停止する。このような時間認識を停止時間系と呼び、正しく移動した時間認識を移動時間系と呼ぶ。

移動時間系においては、時間は正しく連続移動し、開放的に理解できる。停止時間系では、時間は誤って連続移動せず、過去・現在・未来のそれぞれに閉鎖される。過去・現在・未来がバラバラに飛ぶ形で理解される。過去・現在・未来の一部だけ最終状態がある、という事もあり得る。

同一位置の時間を見ても正誤は不明確だが、別位置の時間を見れば正誤は明確になる。同一位置の時間でも、開放現実などを使えば正誤を明確に理解できる。

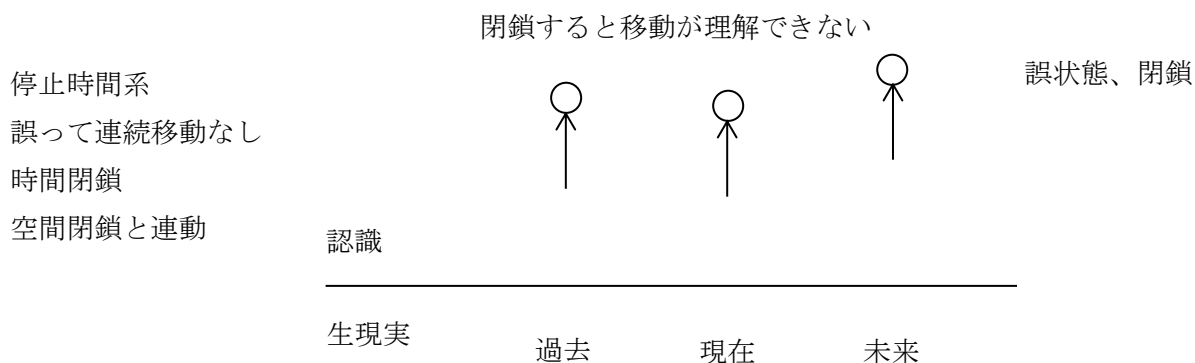
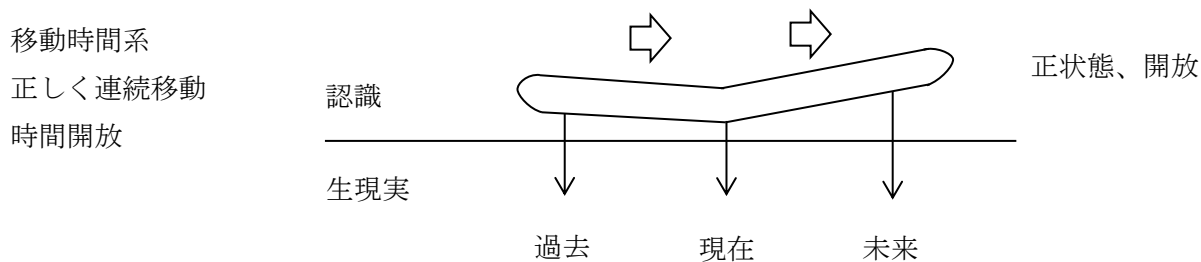
停止時間系には幾つかの種類が考えられる。完全に時間停止するだけでなく、同じ時間が反復するのも停止時間系である。また自分の時間が停止し、周囲の時間だけが移動する場合も考えられる。

季節変動や1日の変化など、時間的变化は周期性を持っている。1日の変化を繰り返していても、今日と明日は同じではない。規則的な周期変動は停止時間系を示すものではなく、両者を明確に区別する必要がある。

自分が時間停止し、周囲の時間だけが流れて見えるのも停止時間系である。車の流れなどを停止して見るように感じるが、実際には自分の時間も同様に流れている。時代の変化に取り残される、というような問題が起こる。

時間の完全停止や、同じ事の繰り返しなどの時間閉鎖は、空間閉鎖とも連動する。日常的に移動する空間内だけで同じ日々を繰り返すような認識になる。このような閉鎖認識は誤りであり、正しく開放させる必要がある。

る。



過去・現在・未来がバラバラに飛ぶ
過去・現在・未来の一部だけもあり得る
完全に時間停止・時間反復・周囲だけ時間移動など

図 3-81 時間閉鎖と移動・停止時間系

正しい移動時間系の認識状態は、過去から現在に至る過程で変化する。現在が移動すると同時に、過去が曖昧になり誤状態化する。移動時間系なら誤状態化しても最善の認識状態であり問題はない。停止時間系のように過去の認識が閉鎖分断する事はない。

停止時間系を移動時間系に入れ込むと、閉鎖状態が移動する形になる。時間移動を元に時間的開放を理解すれば、停止時間系を修正できる。入認識遷移を時間連続移動させ、時間開放に修正する必要がある。

過去・現在・未来に関わらず正基準は認識外であり、生現実により評価しなければならない。閉鎖のまま過去を探るのは無意味であり、現在・過去を含めた閉鎖的な誤りを見る必要がある。

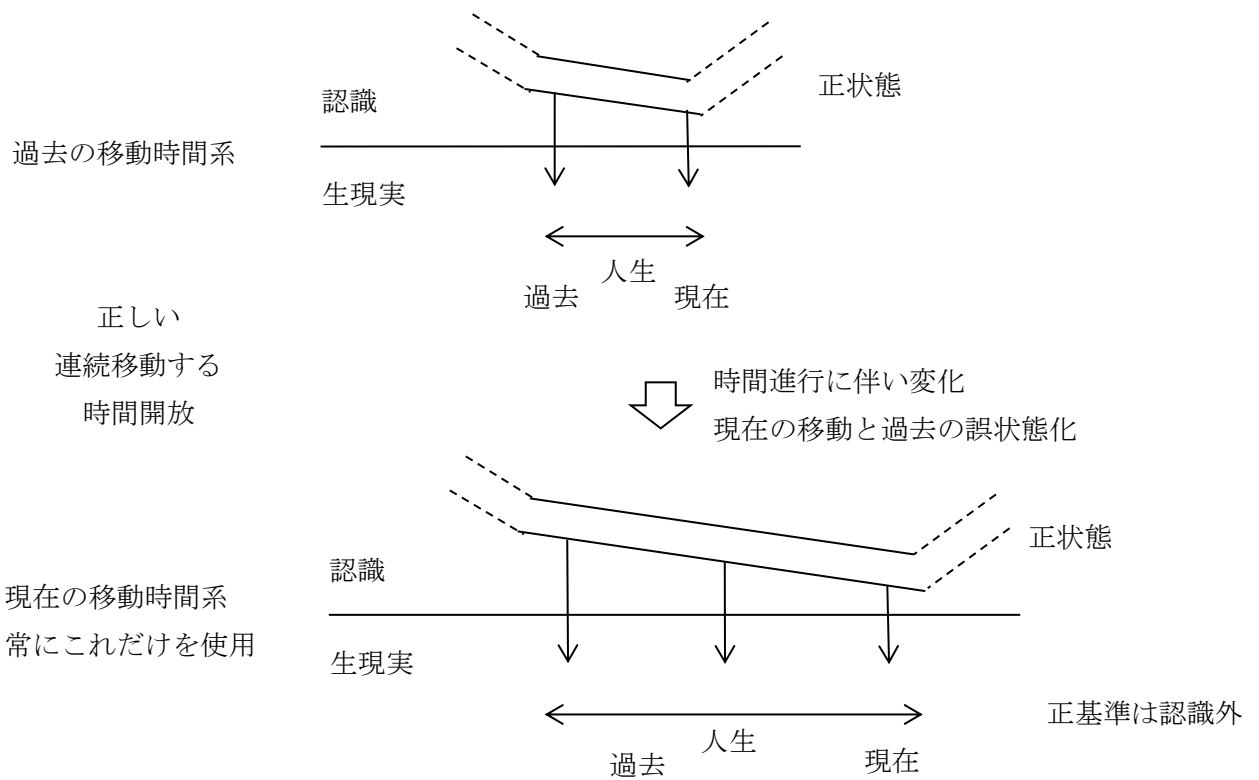


図 3-82 移動時間系による過去認識

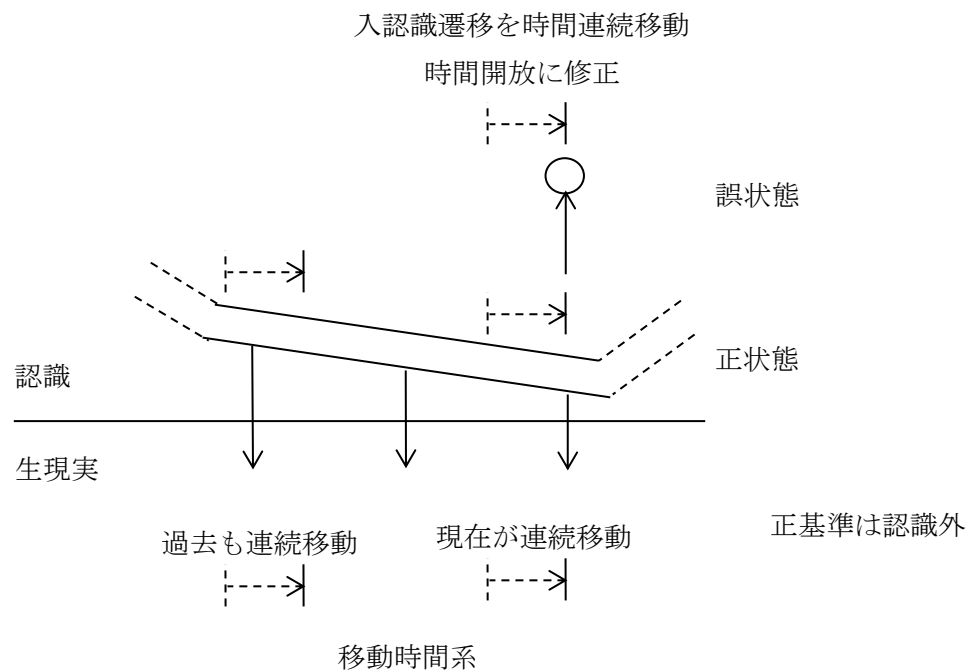


図 3-83 移動時間系への修正

3.10.4. 人間・現実と様々な時間閉鎖

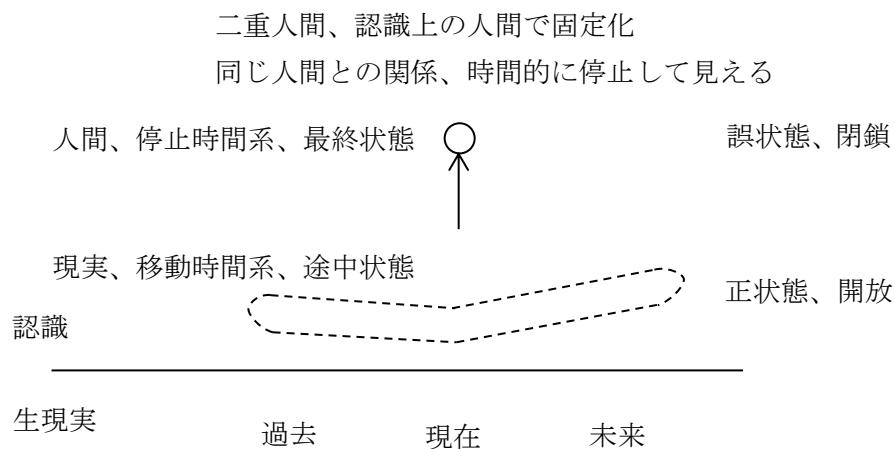
二重人間のため人間の認識は曖昧であり、時間的にも閉鎖分断する可能性がある。同じ人間との関係を繰り返していると、人間関係が時間的に停止して見える。停止時間系の人間が最終状態になり、移動時間系の現実

は途中状態として「誤り」になってしまう。人間が時間の流れから切り離され、現実が「誤って」流れて見える。これでは時間変化を正しく理解できない。

実際には人間も現実も共に時間変化している。開放現実から生人間を見る事で、時間的にも閉鎖分断を回避できる。人間を生現実化すべきである。感覚・行動を生現実化するの正しい。過去の感覚・行動の対象となる現実の理解などが挙げられる。

現実的・物理的に時間を理解すれば、時間が正しく連続移動する事を理解できる。曖昧な人間的理解では、時間の連続移動を正しく理解できない。人間的な時間ではなく現実的・物理的な時間を見る必要がある。

閉鎖的な時間の繰り返しは、文芸や宗教など人間描写の中で非常に多くられる。「昔から同じ日常を繰り返す」といった表現である。過去と現在は同じ時間ではない。閉鎖的な繰り返しではなく開放的な連続変化である事を正しく理解しなければならない。



人間は時間的にも閉鎖分断の可能性、現実だけ流れて見える
時間変化を正しく理解できない、人間も現実も時間変化
時間的にも開放現実から生人間を見る、人間の生現実化
感覚・行動の生現実化、現実的・物理的な時間

図 3-84 人間の時間閉鎖と停止時間系

時間閉鎖と停止時間系には様々な種類があり得る。時間閉鎖している事は同じである。

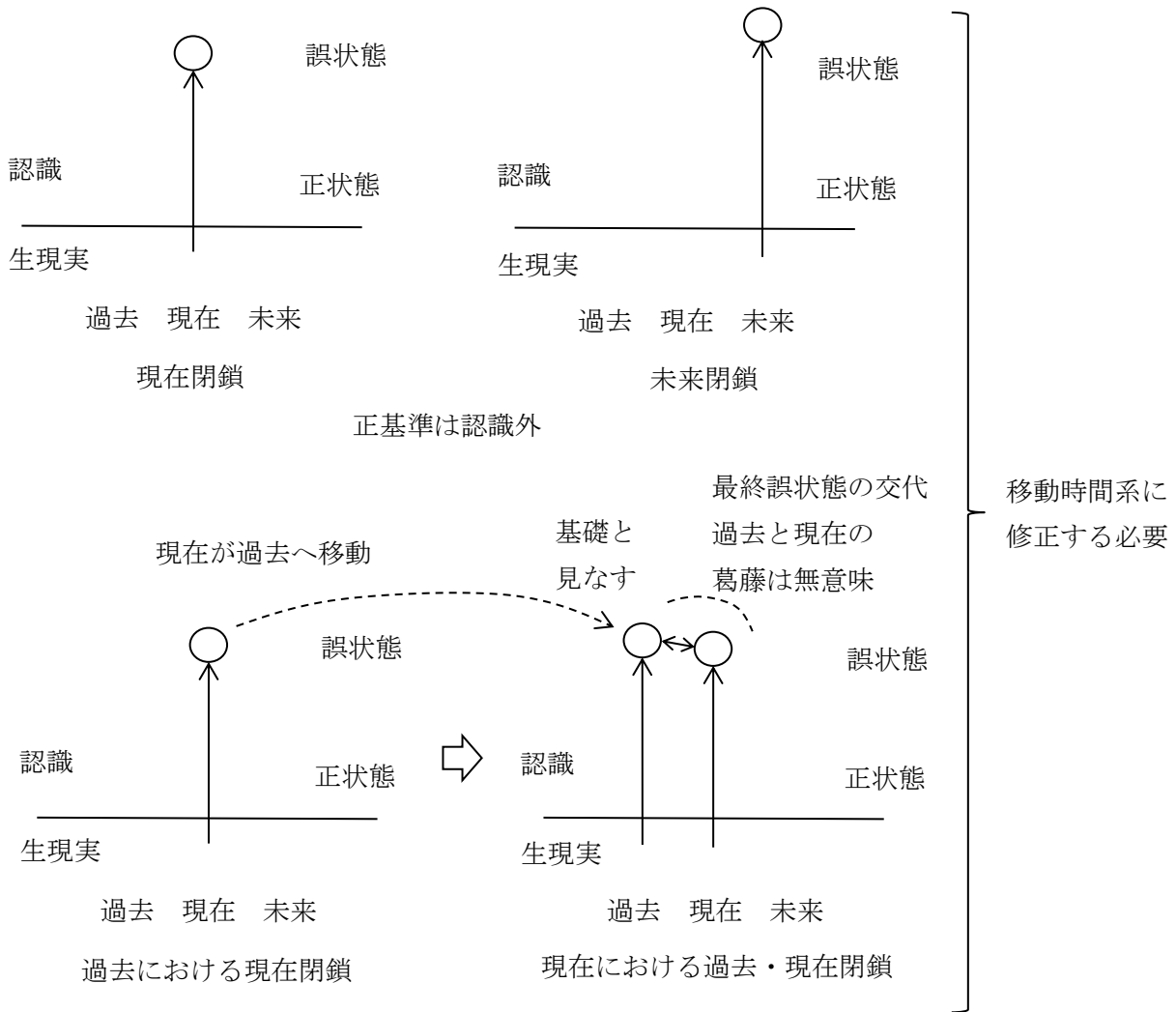
単一の入認識遷移では、過去・現在・未来閉鎖があり得る。複数の入認識遷移や、途中で停止時間系が変化する場合もある。過去・現在の交代になる場合も考えられる。

過去・現在・未来に関わらず正基準は認識外の生現実であり、移動時間系で時間開放する必要がある。現在と切り離された過去の停止時間系を思い出すのも、閉鎖的な誤りである。「現在における過去」は現在の連続時間系で理解可能であり、そこから見なければならない。過去の停止時間系だけを見ても現在と開放連続されず、正しい時間の理解ができない。

過去への固着や、過去を基礎として現在を考えるのも、同様に時間的な閉鎖分断であり誤りである。正しい移動時間系は時間が連続しており、途中で切り替わる事はない。時間の連続的变化を正しく理解しなければ

らない。

過去が基礎でなく、生現実が基礎である。重要なのは近辺である現在と未来の認識状態であり、過去は重要性の低い遠方でしかない。過去で重要なのは、現在・未来との開放連続である。過去と現在の自分で葛藤しても意味はない。過去の認識状態に戻る必要はなく、生現実に向かわなければならない。現在から過去への開放を理解し、認識を修正しなければならない。



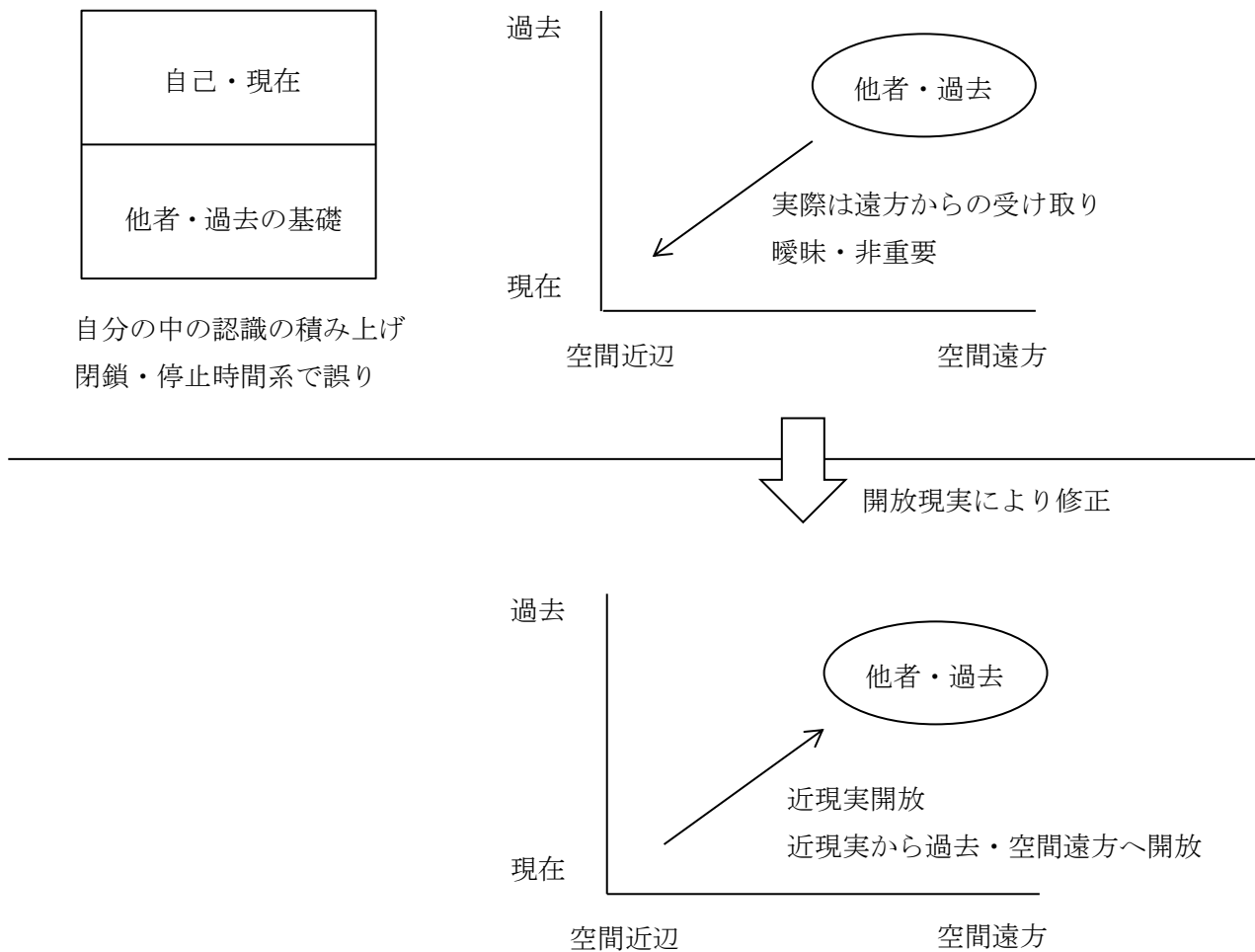
3.10.5. 過去への近現実開放

自分の中の認識を作る際に、他者・過去の認識を基礎とし、その上に自己・現在の認識を積み上げる場合がある。これは閉鎖・停止時間系で誤りである。時空間において近辺は明確・重要であり、遠方は曖昧・非重要である。他者・過去の認識は曖昧・非重要な遠方から受け取っているに過ぎず、基礎とすべきではない。

このような認識は開放現実により修正すべきである。近現実開放により、近現実から過去・空間遠方へ開放的に理解する必要がある。近現実開放により認識を広げるのが正しく、他者・過去を基礎とするのは方向が逆である。他者・過去を基礎から外し、近現実を基礎とする必要がある。

自然科学において新しい研究により新事実が分かれば、過去の研究は塗り替えられる。過去の研究を基礎として扱う訳ではなく、特定の分野を基礎として扱う。例えば物理学においては運動方程式などが基礎として扱われる。人文・社会科学においては過去の研究が基礎として扱われる場合もあり、これは適切ではない。

近現実開放は無認識感情とも繋がる。認識感情から一歩引くという事は、他者・過去の認識感情から一歩引くという事でもある。囚われない・こだわらない事は無認識感情と近現実開放の両方に近い。



近辺は明確・重要、遠方は曖昧・非重要

「他者・過去の基礎」は認識を広げる方向が逆
 自然科学は新しい認識で入れ替え、「過去の基礎」ではない
 人文・社会科学では「過去の基礎」もあり不適切
 近現実開放は無認識感情とも繋がる

図 3-86 過去への近現実開放

3.11. 多個人の認識遷移

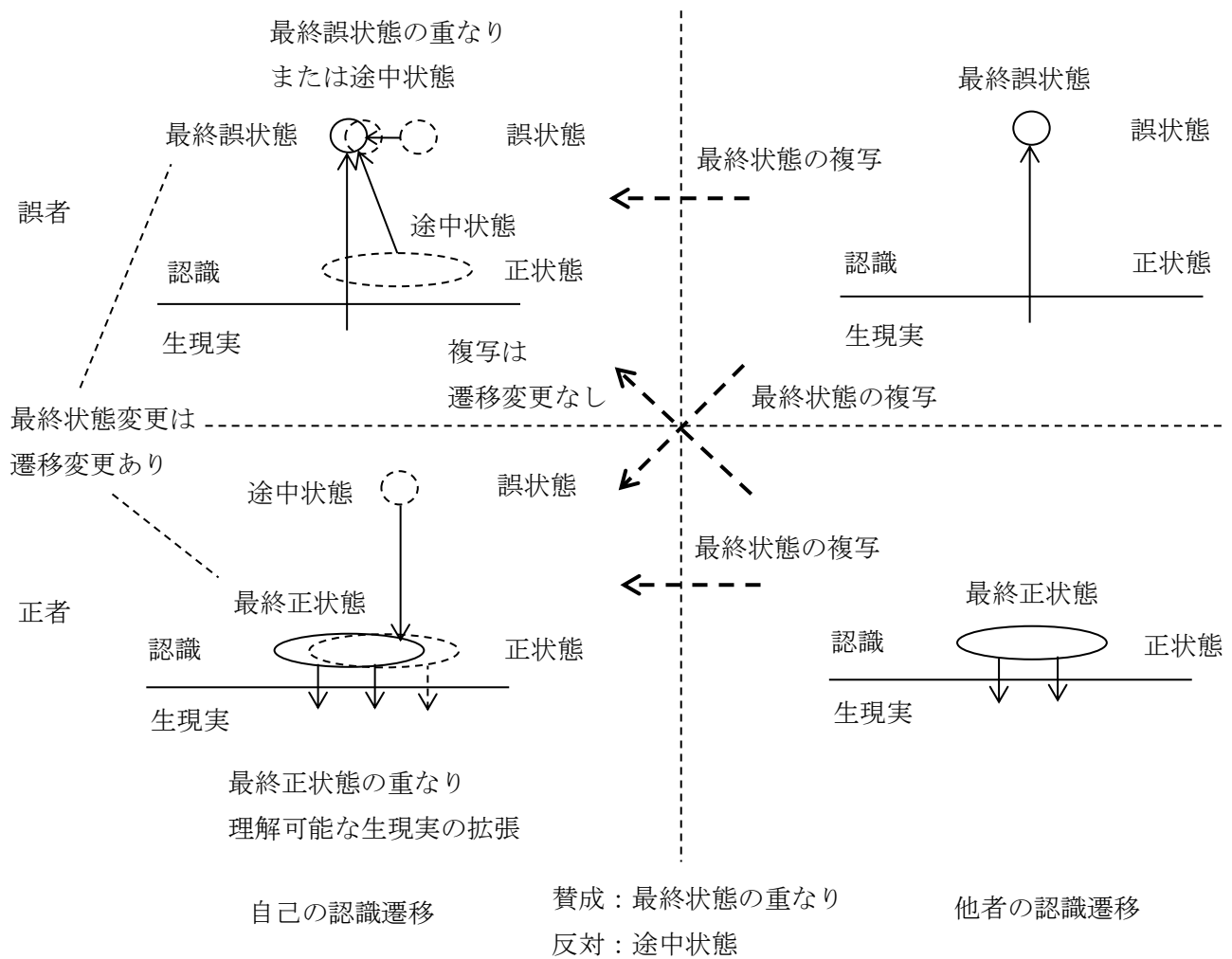
3.11.1. 最終状態の複写と正・誤者

自己の認識遷移において、他者の最終状態は容易に取り込む事ができる。認識知性伝達によって他者の認識遷移が伝達される際に、自己の認識遷移に基づいて変形して取り込まれる。これを最終状態の複写と呼ぶ。自己の認識遷移上に他者の最終状態が伝達された形であり、他者の認識遷移と同じ形ではない。自己の認識遷移や最終状態は変化しない。最終状態の変更は遷移変更が必要であり、短期的には起こらない。

最終正状態を持つ人間を正者、最終誤状態を持つ人間を誤者と呼ぶ。正者と誤者に対して最終状態の複写を解析する。

複写は自己の最終状態と重なる形で処理されるか、途中状態として処理される。最終状態と重なる場合は正しいとして認識され、途中状態の場合は誤りとして認識される。最終状態なら正しいので賛成、途中状態なら誤りなので反対になる。これは正・誤者に関わらず同様である。

正者同士なら必ず最終状態は重なる。これにより理解可能な生現実が拡張される。一方が正者で一方が誤者なら、複写は必ず途中状態になる。両者が誤者の場合、最終状態が重なる場合と、途中状態になる場合の両方がある。



認識知性伝達と、自己の認識遷移への取り込み
 別の認識遷移上への伝達、同じ形ではない

図 3-87 他者最終状態の複写

3.11.2. 共有・非共有状態

複数人の最終状態が重なると、全体で1つの最終状態になる。これを共有状態と呼ぶ。重ならない最終状態を非共有状態と呼ぶ。正者同士の最終正状態が重なったものを共有正状態、誤者同士の最終誤状態が重なったものを共有誤状態と呼ぶ。

共有正状態は、開放連続により1つの共有状態になり整合する。共有誤状態は、閉鎖分断により複数の共有状態に分かれ不整合になる。正者と誤者の間は共有状態になる。正者と誤者の中間的な人間は、これらの中間的特徴を持つ。

正しい内容の広域認識知性伝達により、巨大な1つの開放した共有状態を作成できる。これにより個人が見えない所まで認識状態が繋がる。これが正しい共有状態であり、人間の強力な知的能力を生かす事ができる。開放現実からの理解で二重人間を回避するのが正しい。

共有正状態は1つになるが、認識の内容を見なければどれが共有正状態か分からない。人間は曖昧だが現実

は明確なので、現実により正誤を判別できる。

共有誤状態は全体として閉鎖しており、多重閉鎖も起こりやすい。一部が閉鎖的に繋がっているだけなので、すぐに非共有状態に変化する。

3人以上の最終状態がずれて重なり、共有状態が2個以上になる場合がある。これをずれ共有状態と呼ぶ。人数が増えると多数の共有状態になる。最終正状態だけなら起こらない。

認識の操作はすべて知性により行われる。最終状態の複写や共有状態の作成も同様である。これらは認識遷移や最終状態の変更を伴わず、短期的に行われる。共有状態が長期的になると、認識遷移や最終状態が変更される可能性もある。

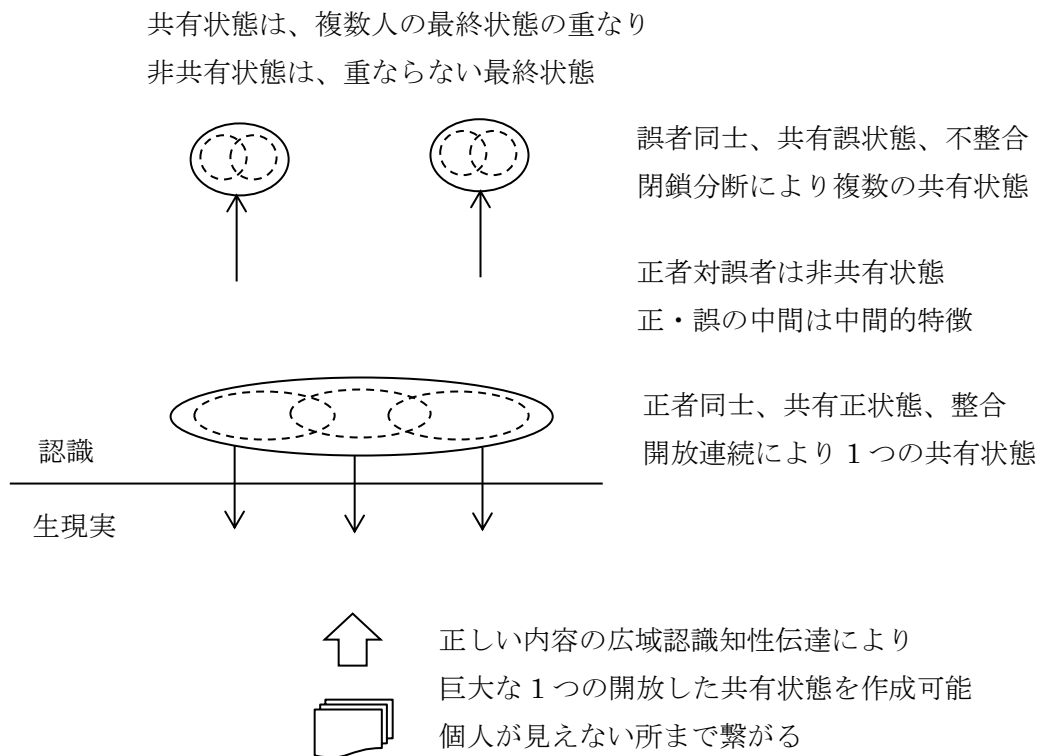


図 3-88 共有・非共有状態

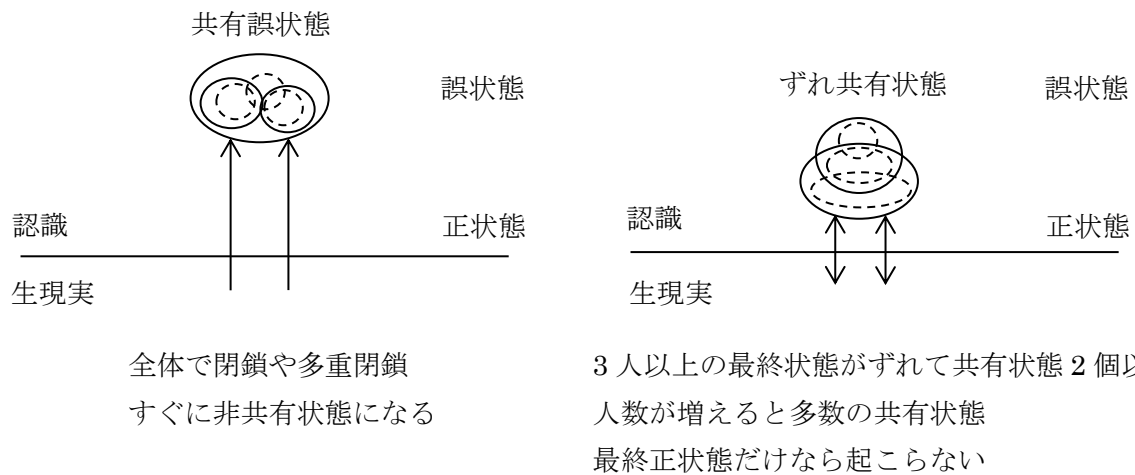


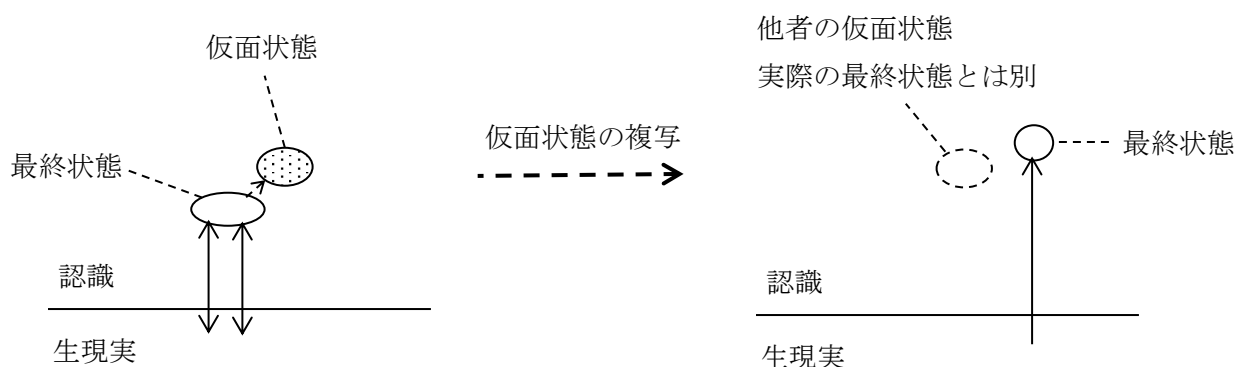
図 3-89 共有誤状態とずれ共有状態

3.11.3. 仮面・妥協・嘘攻撃状態

最終状態を複写する際に、真の最終状態でなく偽の最終状態を複写する場合がある。偽の最終状態を仮面状態と呼ぶ。他者が複写した認識状態は、実際の最終状態とは異なっている。仮面状態には様々な種類があり、ドラマの演技なども含む。ペルソナのように自己の偽装を仮面と呼ぶ事も多いが、仮面状態は自己だけでなく認識状態のすべてを示す。

仮面状態の作成も知性により短期的に行われ、認識遷移や最終状態の変更は伴わない。仮面状態が長期的になると、認識遷移や最終状態が変更される可能性もある。

距離が遠くなると仮面状態を作るのが難しくなる。認識遷移図の縦方向で見れば、正誤の差が相当する。横方向で見れば、閉鎖時の同一・別実区分が相当する。開放時の横方向は繋がるので、仮面状態を作る必要がない。



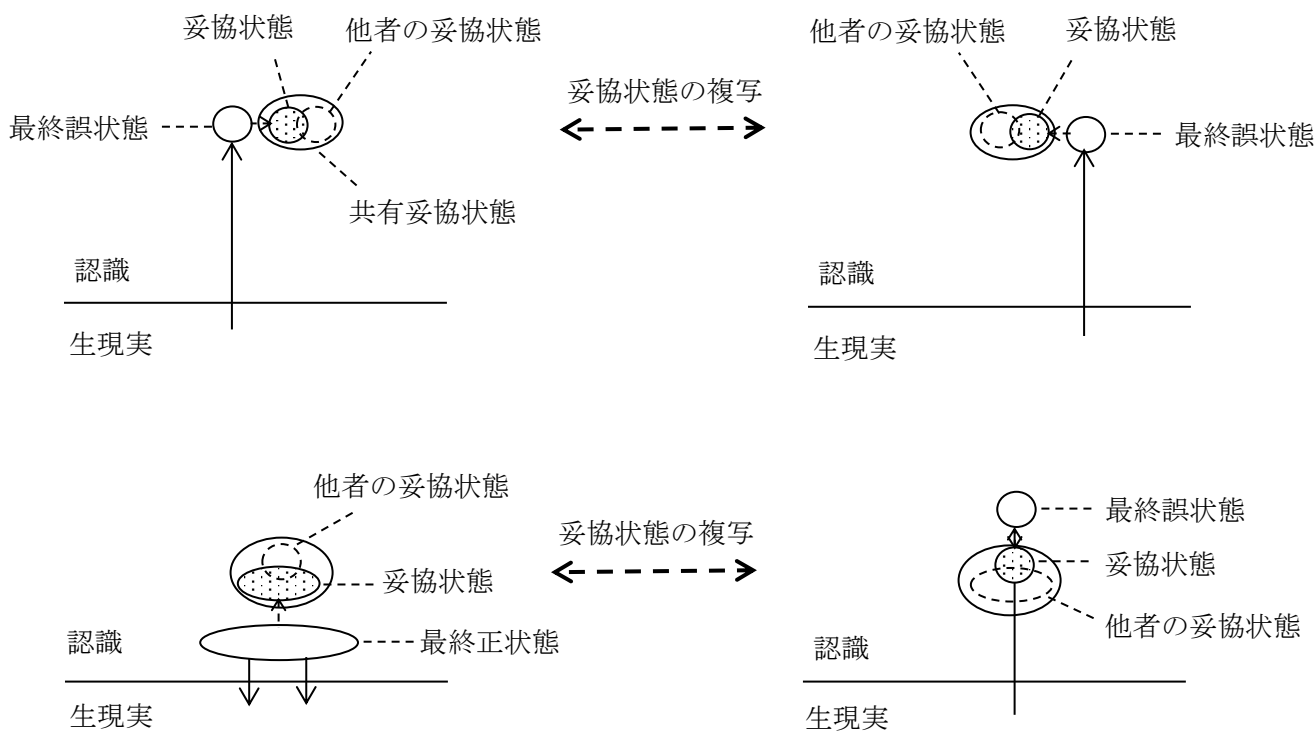
距離が遠いと仮面状態は難しい
縦：正誤の差、横：閉鎖時の同一・別実区分

図 3-90 仮面状態

他者との共有状態を作るため、相手に歩み寄った仮面状態を妥協状態と呼ぶ。歩み寄りのため双方の中間的な状態になる。妥協状態による共有状態を、共有妥協状態と呼ぶ。一方だけが妥協する場合も、双方が妥協する場合もある。表面的には共有状態のように見えるが、実際の最終状態は異なっている。本心から共有状態を作っているのではなく、仕方なく合わせているだけである。妥協状態も仮面状態の一種なので、距離が遠いと妥協が難しくなる。

正者同士であれば共有正状態になるので、妥協する必要はない。誤者同士の場合と、片方が誤者の場合に発生する。妥協のない共有状態なら正しいという訳でもなく、誤者同士でも共有状態はあり得る。

妥協状態の正誤は、元の状態の中間である。正しいのは開放した正状態であり、妥協状態でなく正状態を求めなければならない。中立的立場として妥協状態を求めても意味がない。必要なのは意見のすり合わせでなく、生現実に近づける事である。開放した共有正状態であれば、自然に意見は一致する。



共有状態を作るため相手に歩み寄り、中間的な状態
 片方だけの妥協もある
 正者同士は共有状態になるので妥協不用

図 3-91 妥協状態

仮面状態に関連した言葉に「嘘」があるが、嘘の意味は曖昧で解析的には使えない。正しい情報の変更と言う意味では最終誤状態も当てはまる。正しいと思って言う嘘と、誤りと思って言う嘘の境界も明確ではない。

嘘の典型例として、仮面状態を悪用して他者を不満にしつつ自分を満足させる行為がある。これを嘘攻撃と呼び、その仮面状態を嘘攻撃状態と呼ぶ。嘘攻撃状態は相手の最終状態と共有状態を作り、誤った方向に誘導する。共有状態を作るのは妥協状態と同じだが、共有状態の位置はまったく違う。嘘がばれるので嘘攻撃状態の長期的存続は困難である。妥協状態より不安定であり、一時的で特殊な仮面状態である。

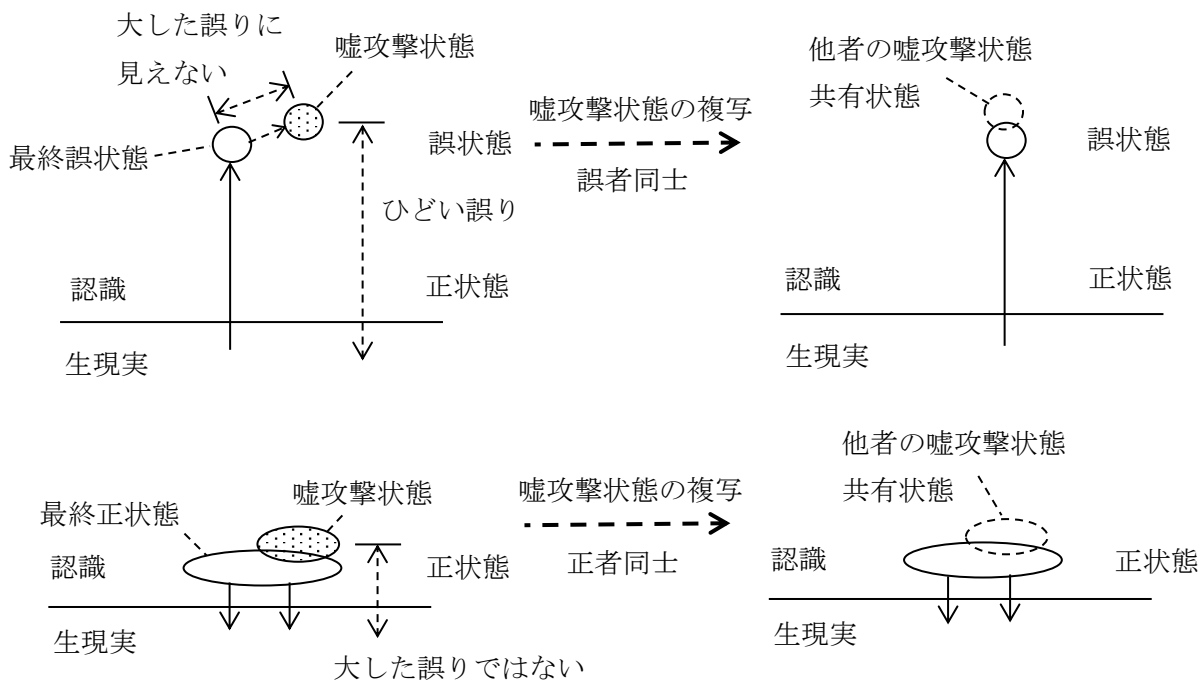
共有状態が必要なため、相手の最終状態の正誤により嘘攻撃の正誤の程度も変化する。互いの最終状態が遠ければ仮面状態でも共有状態を作りにくく、嘘攻撃も成立しにくい。

大金を騙し取るようなひどい誤りの嘘攻撃は、誤者同士の場合に成立しやすい。この際にだます側は認識基準で正誤評価するため、大した誤りに見えない。ひどい嘘が普通の世界で生きているため、大金を騙し取っても罪悪感がない。

最終誤状態の誤りが大きいと、嘘攻撃でなくても大金を騙し取るのに近い状況に陥る。ねずみ講などがこれに当たり、嘘攻撃状態の共有なのか最終誤状態の共有なのか定かでない。

正者同士でも嘘攻撃は起こり得るが、この際の嘘攻撃状態は大した誤りにならない。大きな誤りは共有状態にならないからである。スポーツのフェイントやビジネス上の駆け引きがこれに当たる。

正者と誤者は遠いため、嘘攻撃が成立しにくい。両者が近づくと成立しやすくなる。事業悪化などで正しい判断が難しくなった際に詐欺に引っかかりやすくなる。



嘘攻撃状態は一時的で特殊
 遠い嘘攻撃状態を作るのは困難
 元の最終状態が近くないと難しい

図 3-92 嘘攻撃状態

3.12. 対人関係と距離

3.12.1. 対人関係と開放現実

「人間」は二重人間のため曖昧である。対人関係も人間的に見るより、開放現実経由で見るべきである。開放現実から生人間を見て、対人関係を生現実化する必要がある。人間・現実の中間から生現実化すべきである。これには感覚・行動や、対人関係の現実的側面がある。

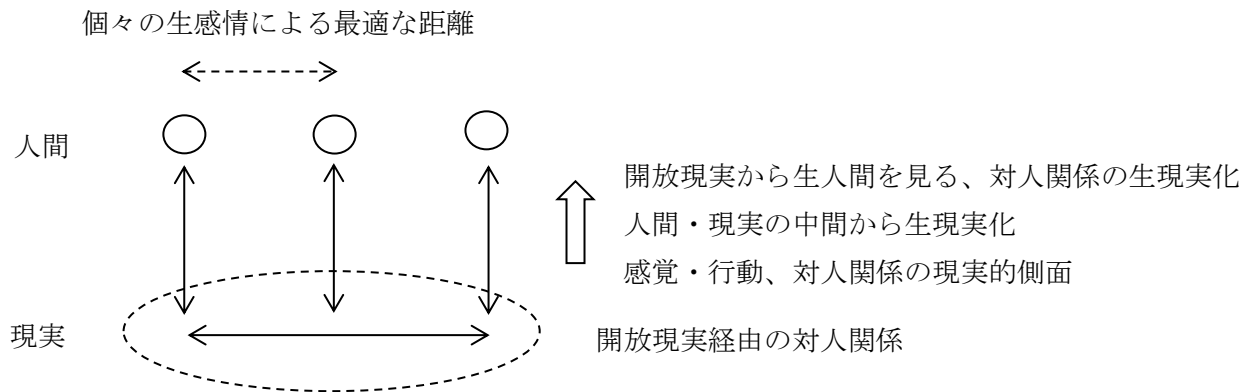
現実を見て感覚・行動を生現実化すべきである。対人関係の直接的な対象は人間だが、関係においては現実も介在する。例えば受け渡される物や、対人関係の場所などである。これらに対する感覚・行動を生現実化する事で、対人関係も生現実化する必要があり、人間的より生物的・動物的な対人関係を持つべきである。対人関係の現実的側面としては、時間や関係回数や関係による物理量などが挙げられる。

空間的な関係距離は、関係が強い方が近くなる。多個人間の距離には、個々の生感情による最適な距離がある。対人関係と現実の中間を見る事で、関係距離も明確化できる。

現実的機能・説明が正しく、人間的すごさ・懇願は誤りである。人間的な感覚でなく現実に何をするかが重要であり、仲良し感・敵対感でなく現実の接近・離反を見るべきである。人間的魅力も誤りであり、現実的・生物的に見る必要がある。交友的な対人関係より、仕事の交友関係の方が現実的である。ただし現実的でも機械的な仕事は誤りであり、生物的な仕事が正しい。交友でも仕事に近い形にすべきである。相手の事を考えるのでなく、実際に役立つことが重要である。

開放現実から見ないと関係距離も分からない。「身近に感じる話」は人間的で誤りである。人間的な距離は認識のため役に立たない。関係が近いと思っているだけでは、実体的な意味はない。極端な例でいえば、アイドルのファンで関係が近いと思っても、現実的な距離は近くない。関係距離を現実的に理解すれば、このような誤解は生じない。

対人関係を人間的に見ると、誤って閉鎖する可能性がある。対人関係を現実的に見れば、開放を明確に理解できる。相手との関係が切れているように見えても、感覚・行動の対象となる現実はどこまでも繋がっている。誰とも閉鎖して孤立していると思っても、時間や物理量で見れば完全な孤立はあり得ない。現実を見る事で、正しく開放した人間を理解できる。



関係距離は関係が強い方が近い
開放現実から見ないと関係距離も分からない

図 3-93 対人関係と開放現実

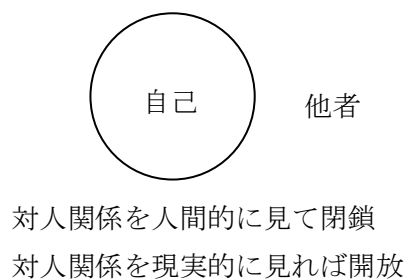


図 3-94 閉鎖と対人関係

3.12.2. 対人感情と対人距離

自己と他者には個々の生感情による最適な距離がある。この距離は生物ごとの社会性とバランスに依存する。接近・離反の感情は同時に存在する。これらを開放的に理解し、その大小を見る事でバランスを取る事ができる。接近・離反のうち一方の感情だけを閉鎖的に見るのは誤りである。開放現実から見る事で、接近・離反の感情を開放的に理解できる。

対人感情で最も重要なのは、信頼と不信である。信頼・不信は多個人連携に対する指標であり、自己の生満足・生不満と連動する。生満足が増えれば信頼して接近し、生不満が増えれば不信になり離反する。接近と離反は個々の生感情による適度な距離に基づき、信頼があっても密着する訳ではない。

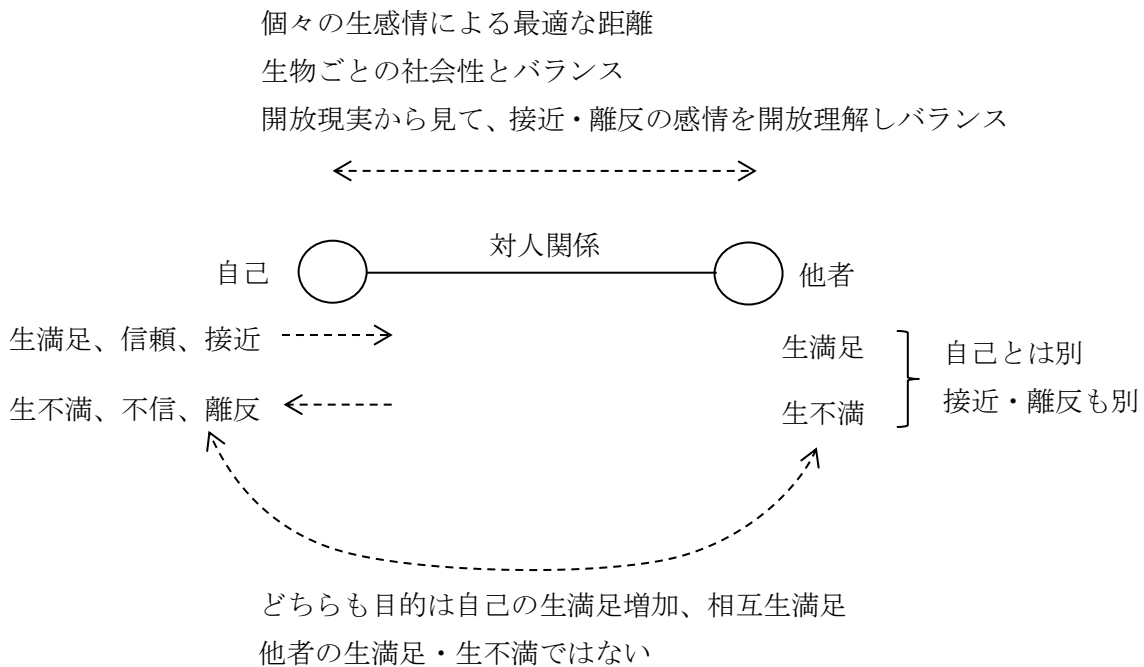
他者には自己とは別に生満足・生不満がある。どちらも目的は「自己」の生満足増加であり、「他者」の生満足増加ではない。他者も自己に対して接近・離反を行うが、これも自己の接近・離反とは別である。

自己と他者は対人関係を持つ。二重人間のため相互影響は理解しにくく、開放現実から見る必要がある。対人関係も生現実化する必要がある。人間的・感情的な対人で生不満になるのは誤りであり、現実的に満足・不満を見る事で回避できる。認識感情が正しく生感情に近い場合のみ、正しい対人距離が得られる。認識感情が誤りなら誤った対人距離となり、真の生満足は得られない。

正しい他者との相互影響において、他者に生満足を与える事も生不満を与える事も、両方あり得る。どちらも目的は自分の生満足増加であり、他者の生満足・生不満は目的ではない。相互生満足を理解する必要がある。相互生満足は満足感でなく生息状況である。影響は常に相互に存在するので、他者の生満足・生不満と同時に自分の生満足も変化する。相互影響において自己の生満足を増加させるのが正しい。自分の生満足が増加しないなら、他者に生満足を与えるのも生不満を与えるのも、両方誤りである。

子供に対する愛のように自己を犠牲にして他者を満足させる場合もある。逆に争いにより他者が不満になる場合もある。どちらも目的は自己の生満足増加であり、他者の生満足増減はその過程でしかない。他者の生満足増減を目的とするのは意味がない。人間が社会的生物である以上、自己の生満足増加で社会が破壊される事はない。

無認識感情も重要である。対人感情から一步引き、こだわらないようにする必要がある。これにより正しい対人距離を理解できるようになる。



対人関係も生現実化、人間的・感情的な対人で生不満になるのは誤り
認識感情が正しく生感情に近い場合のみ、正しい距離
認識感情が誤りなら誤った距離、真の生満足は得られない
無認識感情も重要、対人感情から一步引き、こだわらない

図 3-95 生満足・生不満と接近・離反

3.12.3. 対人感情と閉鎖

本音・建前や不良・善良などの局所広域閉鎖は普通に存在する。局所広域閉鎖により、接近と離反の感情が誤った認識になる。離反は空間局所にあり、非対人・社会感情を伴う。接近は空間広域にあり、対人・社会感情を伴う。これらの感情が閉鎖するのは誤りであり、人間の中には両方の感情が混在している。接近・離反の感情に付随する感覚・行動を生現実化する事で、正しく開放した接近・離反の感情を理解できる。

重要で明確な近現実から社会を見るべきである。自己・他者の連携と相互生満足は近辺なので重要である。連携がなければ遠方なので重要でない。

生満足側の感情であれば、離反側には自由、自分らしさなどがある。接近側には愛、社交性、優越感などがある。生不満側にも接近・離反の感情がある。これらはすべて感情種類の一種であり、互いに連動している。全体を開放的に理解する必要がある。仲良し感があっても人間的に閉鎖していれば誤りである。接近・離反の中間にある感情まで開放的に理解すべきである。

局所広域閉鎖により自己と社会を分断するのは誤りである。誤って閉鎖すれば、近辺と遠方が遠くなる。状況に関わらず自己が社会の一部である、という事を正しく理解する必要がある。

局所広域閉鎖により、他者に満足を与える感情と、不満を与える感情が閉鎖する。感情種類に付随する感覚・行動も同時に閉鎖する。

他者に不満を与える感情は、暴力のような下落成果を持つ場合もある。他者に不満を与えるのも、下落成果も、時空間の近辺（局所）側である。この際に暴力は「悪い」などの誤評性ではなく、「強い」などの正評性として認識される。

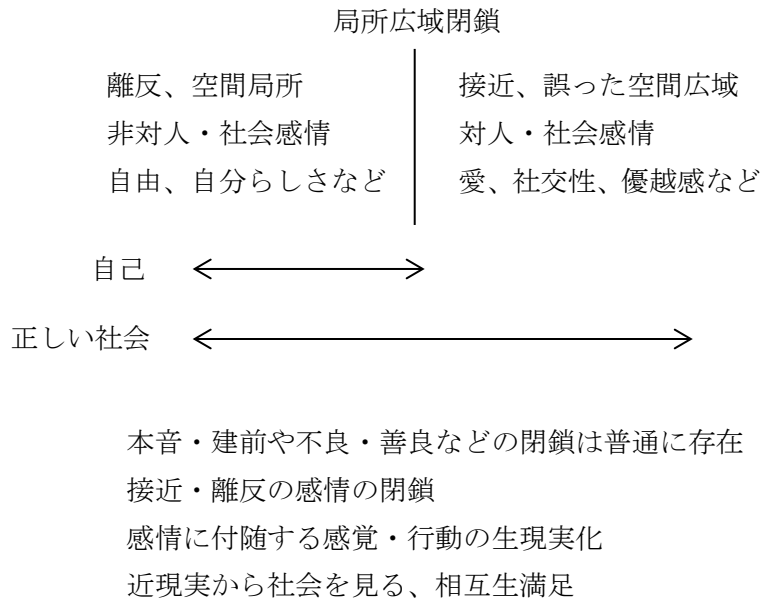


図 3-96 局所広域閉鎖と感情

愛と暴力の最終誤状態が交代すると、改善しにくい家庭内 DV の形態になる。問題なのはそれぞれの状態で他方の状態がない事である。愛には暴力がなく、暴力には愛がない。このような閉鎖認識が問題の根幹であり、閉鎖を見る事で最終誤状態を修正する必要がある。交代はある程度の距離になる。暴力と愛で閉鎖的な差がありつつも、交代できる範囲に収まる。

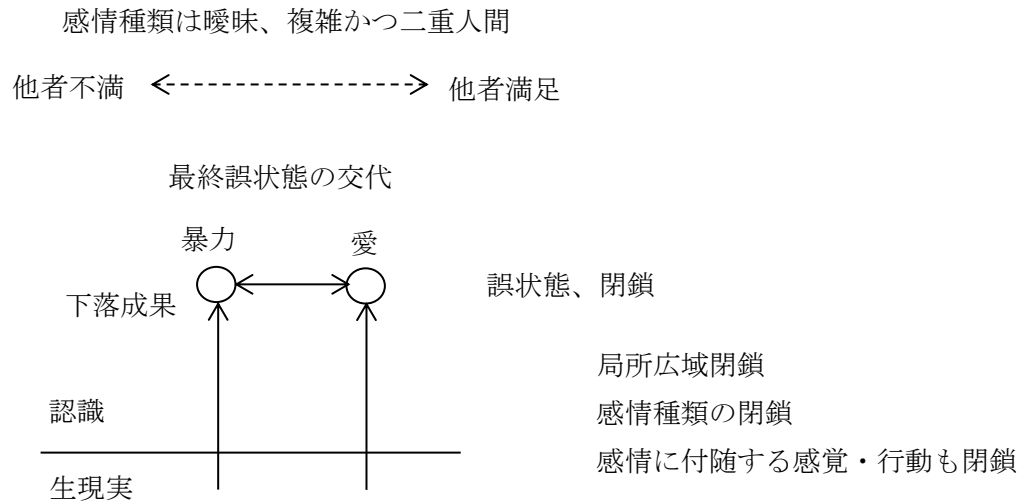
家庭内 DV の現実的状况を見れば、誤りである事は明確である。時間的・物理的な怪我や束縛などから理解するのが正しい。この状況では、すべての感情種類を含む全認識が誤りである。愛だけが正しいと言う事はなく、同レベルの誤状態でないとは交代にならない。現実的状况を見る事で感情の開放を正しく理解できる。

DV の暴力においては、誤評性の「悪さ」でなく正評性の「強さ」が問題である。暴力を「悪い」と否定しても DV は直らない。暴力の「強さ」を否定する必要がある。

生物的に見れば、親しい仲でも「じゃれ合い」のように抑制された攻撃性がある。この場合の攻撃性と愛情は閉鎖分断せず、正しく開放的に扱われる。

二重人間と複雑な感情種類のために、人間の感情は曖昧である。特定の感情種類への閉鎖は誤りである。感情種類に特定の感覚・行動・満足が付随し、全体として人間的な事象への閉鎖になる。愛情は一般的に重要だと認識されているが、愛情だけを閉鎖的に見るのは誤りである。離反側の感情も含めて、すべてを開放的に見る必要がある。

開放現実から見る事で、感情も正しく理解できる。対人感情においても、曖昧な人間的満足でなく明確な生現実的正しさが必要である。対人においても、満足感でなく生息状況を見るべきである。現実的な真の満足でなければならない。誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪である。生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見るべきである。人間的な不整合を無くす事で、対人における生満足を得られる。対人感情における満足・不満の不整合を見て、満足・不満を生現実化するの正しい。愛情の重視も人間的で誤りである。



家庭内 DV、すべての感情種類を含む全認識が誤り
愛も誤り、同レベルの誤状態でないと交代にならない
家庭内 DV の現実的状况を見て開放

図 3-97 感情種類の閉鎖と交代

3.12.4. 認識遷移と対人距離

共有状態の場合、複写された他者の認識状態は共有される。これにより正評性となり、接近の原因となる。非共有状態の場合、複写された他者の認識状態は途中状態になる。途中状態は誤評性となり、離反の原因となる。認識による正・誤評性とは別に、認識によらない基礎満足・不満もあり、この部分で接近・離反が生じる可能性もある。相手の考えが間違っている、近づく方の利益が大きい、などの場合である。

3人の非共有状態を持つ正・誤者を考える。1人の正者と、別実区分にある最終誤状態を持つ2人の誤者である。これらは互いに離反する。誤者同士は別実区分で繋がらずに離反する。正者同士は別実区分でも開放連

続である。人間は曖昧で正誤の判別が難しく、現実には明確で正誤を判別しやすい。現実から正・誤状態を理解し、開放的に相互の認識を繋げるべきである。

正者同士なら最終正状態を共有する。この際の対人距離は、密着でなく適度な距離になる。誤状態の場合は過度な密着や離反が起こり得る。

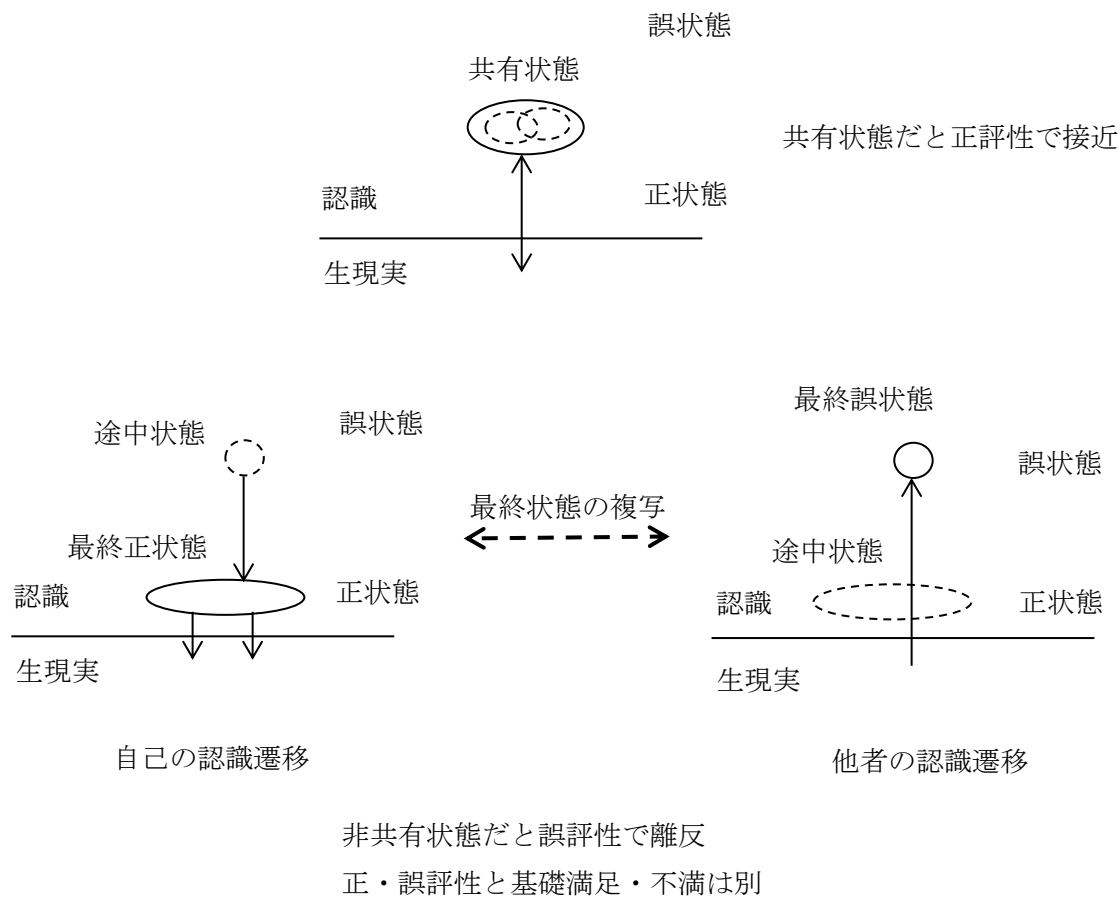
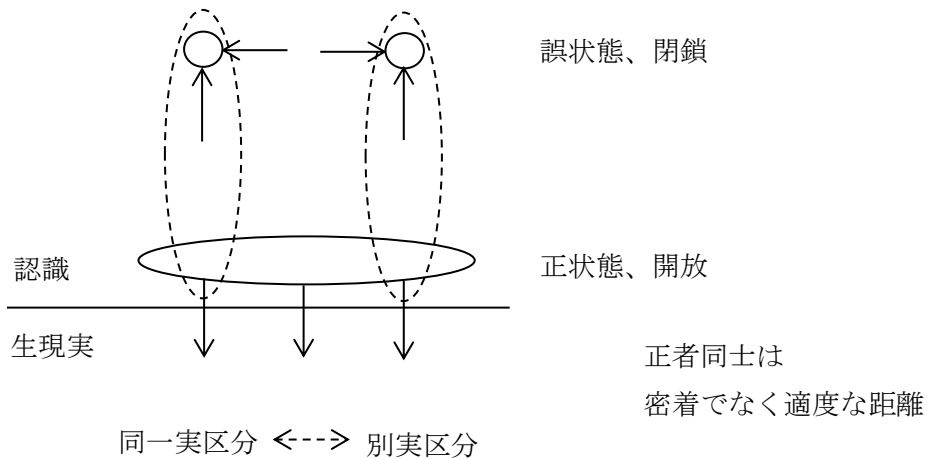


図 3-98 共有・非共有状態と接近・離反

3 人の非共有状態を持つ正・誤者、互いに離反



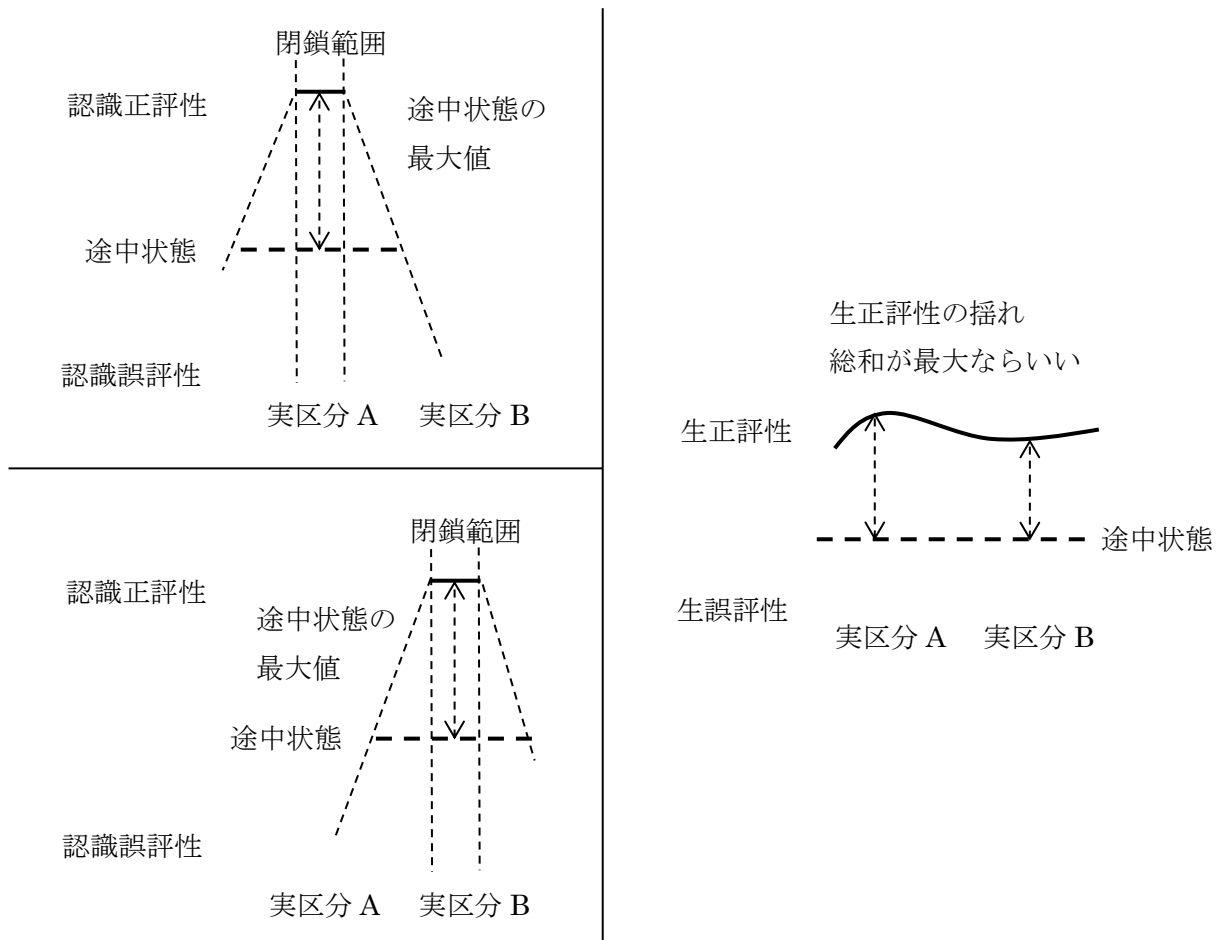
誤者同士は別実区分で繋がらず離反
 正者同士は別実区分でも開放連続
 人間は曖昧、現実から正誤判別可能

図 3-99 認識遷移と対人距離

前述の最終正・誤状態における、正・誤評性を考える。2人の誤者の認識正・誤評性は、別々の実区分で閉鎖する。複写された他者認識状態は共有されない限り途中状態となり、最大でも斜線の位置までに留まる。正状態の生正・誤評性も、同様に複写された共有のない他者認識状態は途中状態となる。

正状態と誤状態で大きく異なるのは、実区分の扱いである。誤者同士は別実区分で繋がらず、閉鎖範囲で分かれたまま対人的に離反する。他者への不満は実区分が「切れた」状況になる。正者同士は別実区分でも開放連続であり、対人的に離反しても実区分の閉鎖分断はしない。他者への不満があっても実区分は「繋がった」状況を保つ。

正・誤評性は感情の一部であり、二重人間のため曖昧になる。人間的感情でなく、知的生物の生感情を理解すべきである。感情に付随する感覚・行動の生現実化する事で、感情の曖昧さを回避できる。無認識感情も重要であり、一步引いて正・誤評性を見る必要がある。



誤者同士は別実区分で繋がらず離反、正者同士は別実区分でも開放連続
感情の曖昧さを回避、感情に付随する感覚・行動の生現実化や無認識感情

図 3-100 対人の正・誤評性

3.12.5. 正・誤者と対人距離

多個人は共有状態なら接近し、非共有状態なら離反する。共有正状態を持つ正者同士は、開放・整合により1つの接近になる。共有誤状態を持つ誤者同士は、閉鎖・不整合により複数の接近と離反に分かれる。正者と誤者は離反する。正者と誤者の中間的な人間は、中間的な特徴を持つ。

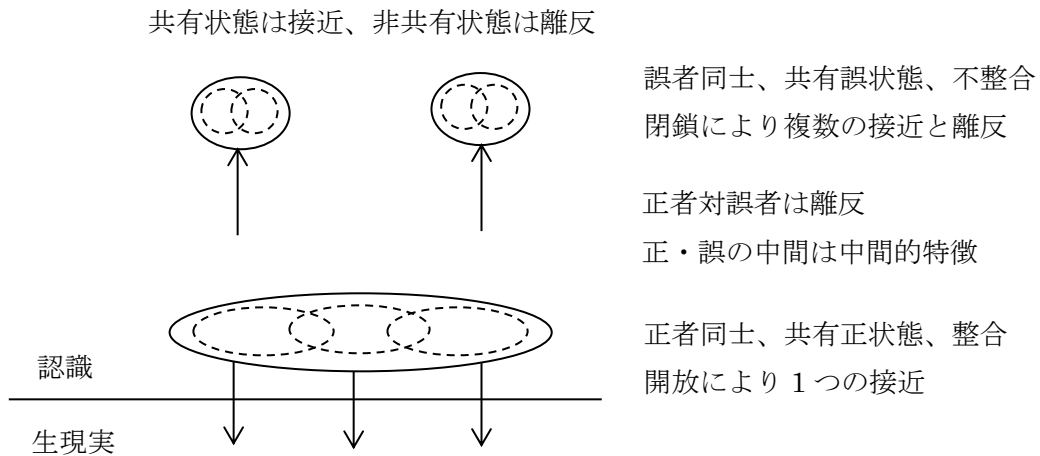


図 3-101 共有・非共有状態と接近・離反

正者と誤者の接近・離反を、多個人の関係距離で図示する。正者同士は1つの接近になり、適度な距離を保つ。誤者同士は複数の接近になり、誤った密着もあり得る。非共有状態の正者と誤者は相互に離反する。

正・誤者の接近・離反を図示しても、対人距離だけではどれが正者か不明確である。正者を判別するには認識の内容を見る必要がある。これは認識知性伝達の経路でなく内容を見る必要がある事と同じである。認識の内容を見ないと認識の正誤を判別できず、多個人の適切な分析ができない。開放現実から生人間を見る事で、正者を判別して多個人を分析できるようになる。

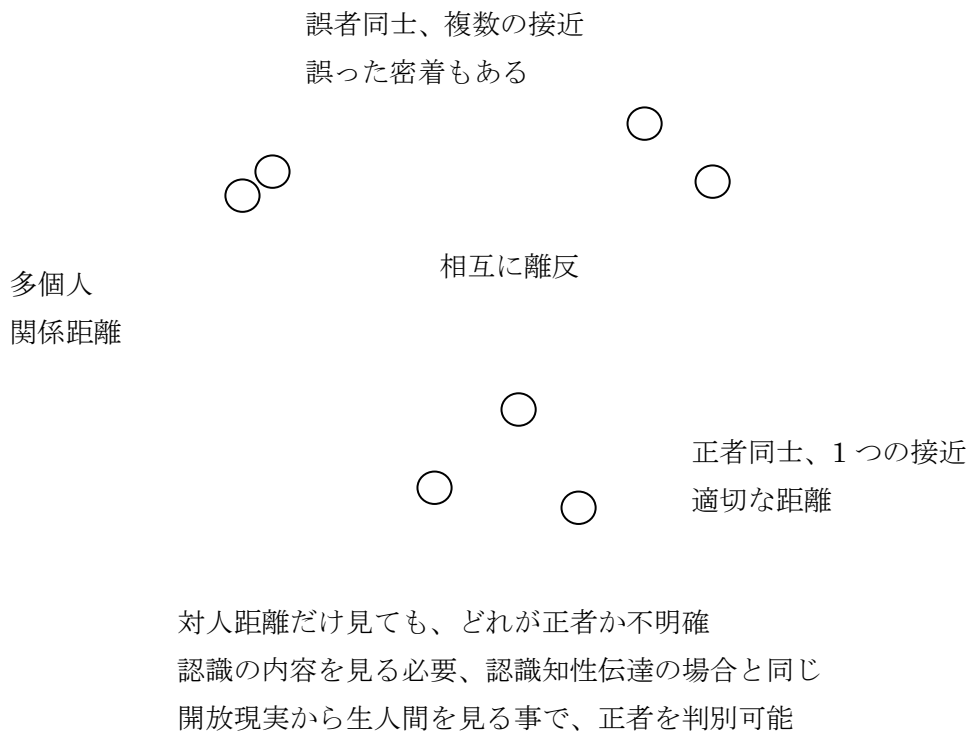
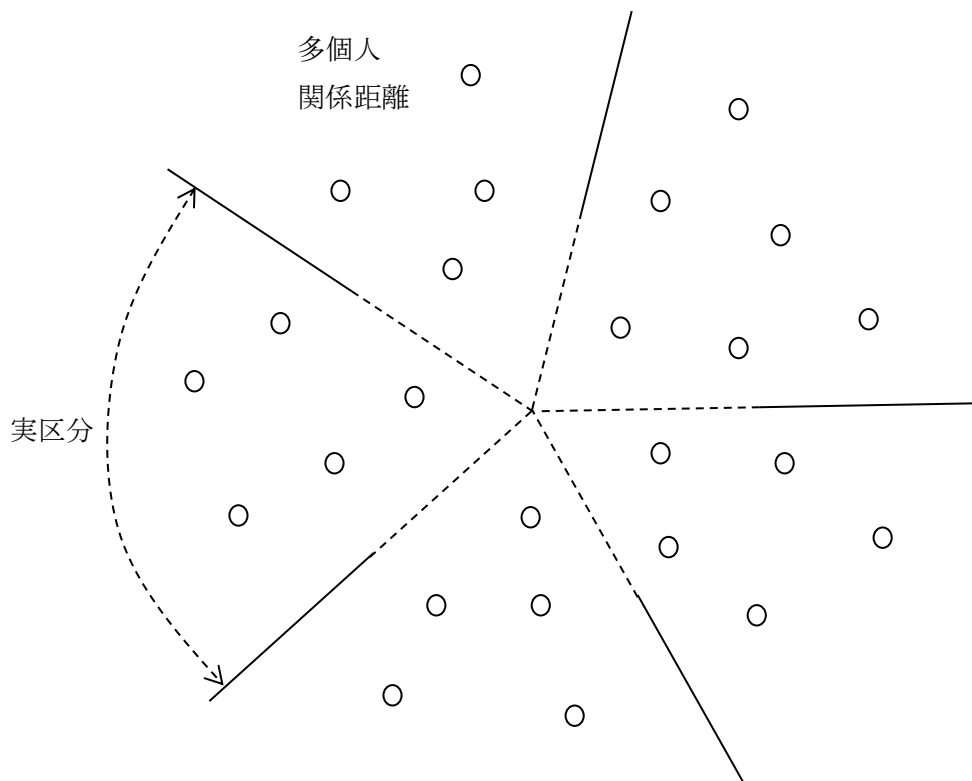


図 3-102 正・誤者と接近・離反

正者・誤者と実区分の関係を以下に示す。現実的な正者は実区分を越えて関係を持ち、開放連続になる。人間的な誤者は実区分を超えた関係が難しく、閉鎖分断になる。関係距離による多個人の分布を見ると、正者を内側にして実区分が放射状になる。外側の誤者は他の実区分が遠くなる。



内側、正者、現実的、開放連続
 外側、誤者、人間的、閉鎖分断

図 3-103 正者・誤者と実区分

3.13. 集約状態と多個人多閉鎖

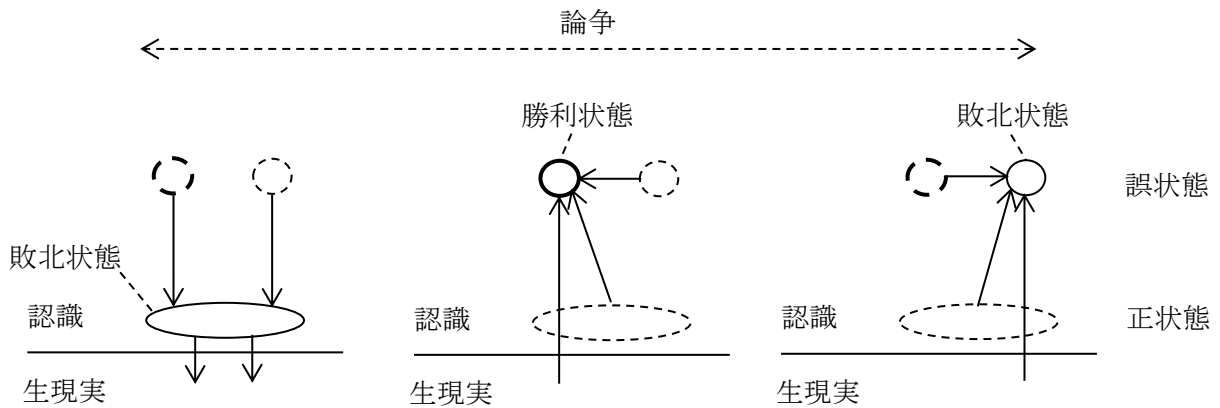
3.13.1. 勝利状態と集約状態

多個人が全体として使用する認識状態を集約状態と呼ぶ。個々の最終状態を集約したものである。共有状態は集約状態になるが、共有状態でなくとも集約状態になる場合がある。個々の最終状態から多個人で使用するものを論争により決定すればいい。論争で集約状態となった最終状態を勝利状態、それ以外を敗北状態と呼ぶ。

勝利状態も知性により短期的に行われ、認識遷移や最終状態の変更は伴わない。勝利状態が長期的になると、認識遷移や最終状態が変更される可能性もある。

共有正状態なら論争は起こらず、開放的な意見集約により正しい認識に収束する。正状態と誤状態でも論争になるので、論争自体が誤りではない。論争自体で正誤を判断するのでなく、開放現実で判断すべきである。

論争に関しても人間は曖昧で、現実には明確である。論争も現実から見れば明確で、各認識状態の正誤も分かる。正しい最終正状態ならすべての実区分が開放的に繋がる。開放現実から論争を理解すべきである。



論争も現実から見れば明確で、正誤も分かる

図 3-104 勝利・敗北状態と論争

集約状態は共有状態・共有妥協状態・勝利状態により生成される。これらはすべて知性により短期的に行われ、認識遷移や最終状態の変更は伴わない。元の最終状態は変化しないが、集約状態にまとめる際に偏りが起こる。集約でまとめる前の認識状態には正誤の範囲が存在する。

共有妥協状態と勝利状態は共有状態と比べて集約が不完全であり、正誤範囲の幅も広い。ずれ共有状態は多数の共有状態がある場合と同じであり、集約には妥協や論争が起こる。閉鎖により各個人の認識の距離が遠くなり、妥協や論争が困難になる。

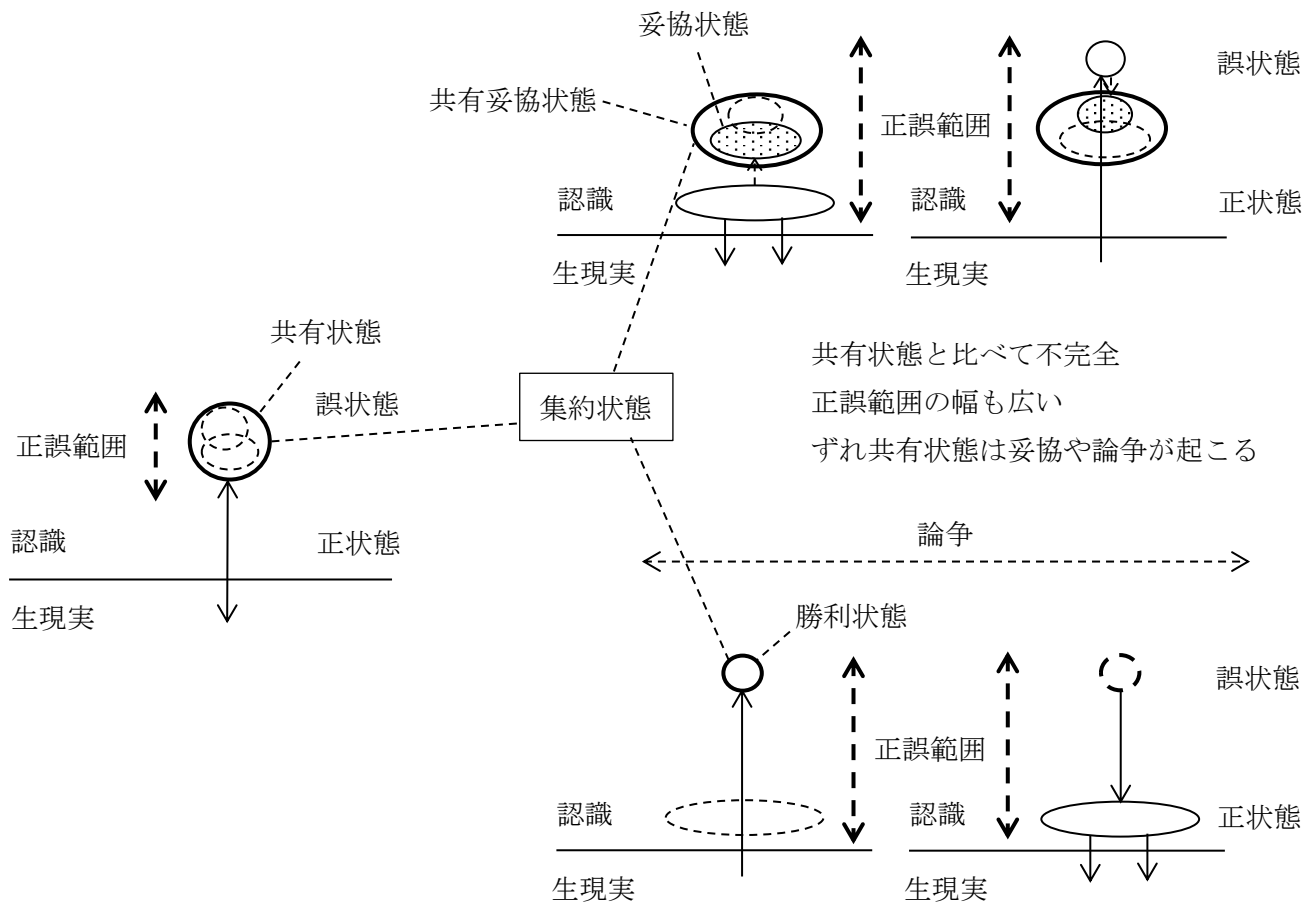
共有正状態なら常に多個人の認識は1つに集約され、妥協も論争もない。この形態が理想であるが、多個人の認識遷移を正しく修正する必要がある、簡単には実現できない。自然科学はほぼ1つの共有正状態に集約されており、一時的に論争になっても理論・実験・観察などで収束していく。

正状態への集約を正集約、誤状態への集約を誤集約と呼ぶ。開放現実による正集約が必要である。共有正状態にならない場合は、可能な限り正集約すべきである。開放現実を用いて全体の意思決定を操作し、生現実に近い側に集約させるのが正しい。例えば会社において現実的能力のある人間が意見を集約する、等の方法がこ

れに当たる。ただし最終誤状態を持つ人間から反発があるので、これも簡単ではない。

論争に対して中立になるのは妥協状態ではない。論争を止める効果があるとしても、正しい方向には向かわない。中立を求めるのではなく、現実的な正集約を求めなければならない。

共有正状態において、多個人の生満足は正しく別々と解釈される。認識状態が1つになっても生満足が1つになる訳ではなく、別途生満足の調整が必要になる。誤った集約状態においては、多個人の満足も誤って集約される可能性がある。全体の満足を個々に強制されるような場合である。集約した全体の満足は存在せず、誤った認識ではない。別々の生満足を正しく理解しなければならない。



開放現実による正集約が必要、中立でなく現実的

図 3-105 集約状態と正誤範囲

3.13.2. 多個人多閉鎖

閉鎖している多個人を集めると、多個人全体では認識状態が一致しないので簡単に多閉鎖になる。これを多個人多閉鎖と呼ぶ。個人の多閉鎖は誤りが大きい、多個人多閉鎖は個人の多閉鎖より誤りが小さい。

個人は多個人多閉鎖の中で、少数の閉鎖を正しいと認識する。個人が多個人多閉鎖から影響を受けると、1つの閉鎖から別の閉鎖に認識状態が変化する場合がある。個人は多個人多閉鎖の中を渡り歩く事になる。

開放現実・整合から見ると、多閉鎖自体が合わず全体的に誤りと判別される。これが正しい認識状態である。

バラバラの多個人多閉鎖でなく、全体として整合した現実的認識を作る必要がある。人間的な多個人多閉鎖によりバラバラの認識を持っているとしても、生現実化した生人間として見れば大差ない。

個々の閉鎖で満足感があるが、実体は生不満しかない。誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪である。多個人多閉鎖は背景として常に生不満を持つ。バラバラの認識を持ちながら、生不満を持つ事は共通している。生不満は開放現実から離れているために起こる事を理解すべきである。

多個人多閉鎖により、多数の閉鎖した共有誤状態が生じる。共有誤状態の数が多く集約しにくくなり、論争がまとまらなくなる。認識の内容が近くても、閉鎖により対人距離が遠くなり離反する。似たような思想の極左において、セクトごとに閉鎖的対立を行うのが典型例である。

多個人多閉鎖によりモザイクのように複雑な人間関係が生じる。個人が多個人多閉鎖を渡り歩くと、人間関係が変わる。生物や動物の関係はもっと単純であり、複雑すぎる人間関係は適切でない。人間を生現実化して整合・明確な人間関係を理解すべきである。

認識が誤りであっても、強い認識知性伝達があれば多個人の認識・知性は同型になり集約される。一方で認識が誤りだと多個人多閉鎖によりバラバラになる。認識が誤りの場合、認識知性伝達と多個人多閉鎖のせめぎ合いになる。カルト宗教が教義ごと分裂する状況が典型例である。認識知性伝達には、マスメディア・ネット・個人経由などがある。

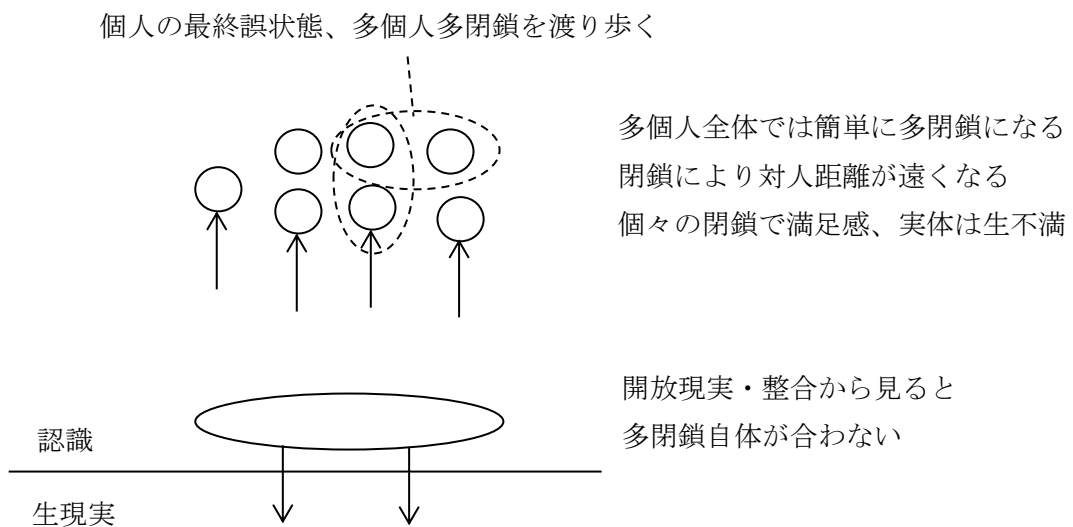
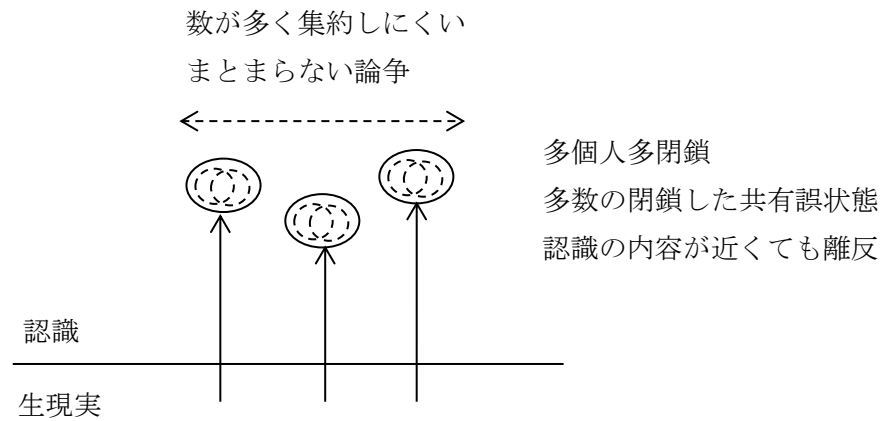


図 3-106 多個人多閉鎖



モザイクのように複雑、個人が渡り歩くと変わる
 強い認識知性伝達は誤りでも集約
 認識知性伝達と多個人多閉鎖のせめぎ合い

図 3-107 多個人多閉鎖と共有誤状態

3.13.3. 最終状態の分布と集約

最終状態の正誤と人数の分布を考える。最終状態と生現実の差を横軸に、人数を縦軸にして分布図を作成する。対象となる多個人により様々な分布が考えられる。分布の形状は、認識の対象となる事象にも依存する。

最終正状態は1つの開放した共有正状態を作る。最終誤状態は、多個人多閉鎖により多数の閉鎖した共有誤状態を作る。多個人多閉鎖の誤りは比較的小さく、普通の人間でも起こり得る。普通の人間も多個人多閉鎖により集約しにくく、話がまとまらない。

分布の形状にもよるが、これらは分布内的一部分でしかない。最終状態の分布には幅があり、すべてが共有正状態という理想的状態でない限り、集約には何らかの妥協や論争が必要である。集約を行っても全体の正誤範囲には幅がある。

人数を基準にした集約を平均集約と呼ぶ。全体の共有妥協状態なら平均集約になる。平均集約の正誤は中間程度にしかならず、正しい正集約とは異なった位置になる。普通の人間でも多個人多閉鎖により認識はバラバラなので、平均集約は妥協の産物になる。最終誤状態が多いほど、望ましい正集約からずれる。人数と認識の正誤は無関係であり、認識の正誤で見る必要がある。人数を基準にするのではなく、開放現実から正集約を行い、共有正状態に近い部分で集約すべきである。

人間的にこだわるのは誤りであり、生現実的にこだわらないのが正しい。スポットライト的な閉鎖満足も誤りである。これらの誤った多数存在しており、この点でも普通の認識の半分程度は誤りである。

多個人多閉鎖のため、普通の人間は人数が多くまとまりがない。閉鎖により距離も遠くなる。開放現実へ向かうと全体が繋がり、開放現実から離れるとバラバラになる。局所広域閉鎖のため、個人的な事象だけでなく社会的な事象でもまとまらない。バラバラに分散した普通すべてを、開放現実に向けてまとめるべきである。

集約を行わない状態を無集約と呼ぶ。無集約も平均集約と同様に、最終誤状態が多いほど正集約からずれる。意見集約がなくバラバラな状態だが、正誤の程度は平均集約と大差ない。

対象となる多個人により、最終状態の分布は大きく異なる。先進国と途上国では正誤の差が激しく、先進国でも犯罪組織なら誤りが大きい。誤りが大きい場合に平均集約しても意味がない。外部の認識状態であっても

構わないので、可能な限り正集約を行うべきである。

多数決による集約は平均集約でしかない。先進国のように正状態が多ければ成立するが、途上国のように誤状態が多ければ成立しない。途上国における民主主義には根本的な問題があり、先進国の認識状態を使って正集約すべきである。

大衆迎合やポピュリズムは人間的で認識基準なので誤りである。これらは閉鎖分断により種類ごとにバラバラになる。

人間的な内容は二重人間のため曖昧で、正集約が困難である。現実的な内容を正集約し、それを人間側に反映すべきである。開放現実から正集約する事で、二重人間の曖昧さを回避できる。

多個人の感情は別々であり、全体として調整する必要がある。正集約であれば多個人が別々である事を正しく理解できる。誤集約では、そもそも感情自体が正しく理解できない。多個人が別々である事も分からない可能性がある。この状態で集約をしても意味はない。多個人の「意見」に基づく満足でなく、正集約に基づく満足により、全体を調整する必要がある。

集約が長期化すれば、それにより認識だけでなく認識遷移も変化する。正集約を長期的に行い、生現実への認識遷移を広めるべきである。

認識知性伝達は広域に影響を与え、長期的には認識遷移自体も変化する。これにより似た認識遷移の多個人を増やす。認識知性伝達により人数が増えても、それが正しい訳ではない。開放現実から見て認識知性伝達の内容が正しいかどうかを常に検証しなければならない。現実的な専門家が書いた認識知性伝達が望ましく、それを増やすべきである。誤りの大きい情報を流す認識知性伝達は存在しない方がいい。誤りの大きな情報を流す自由などない。

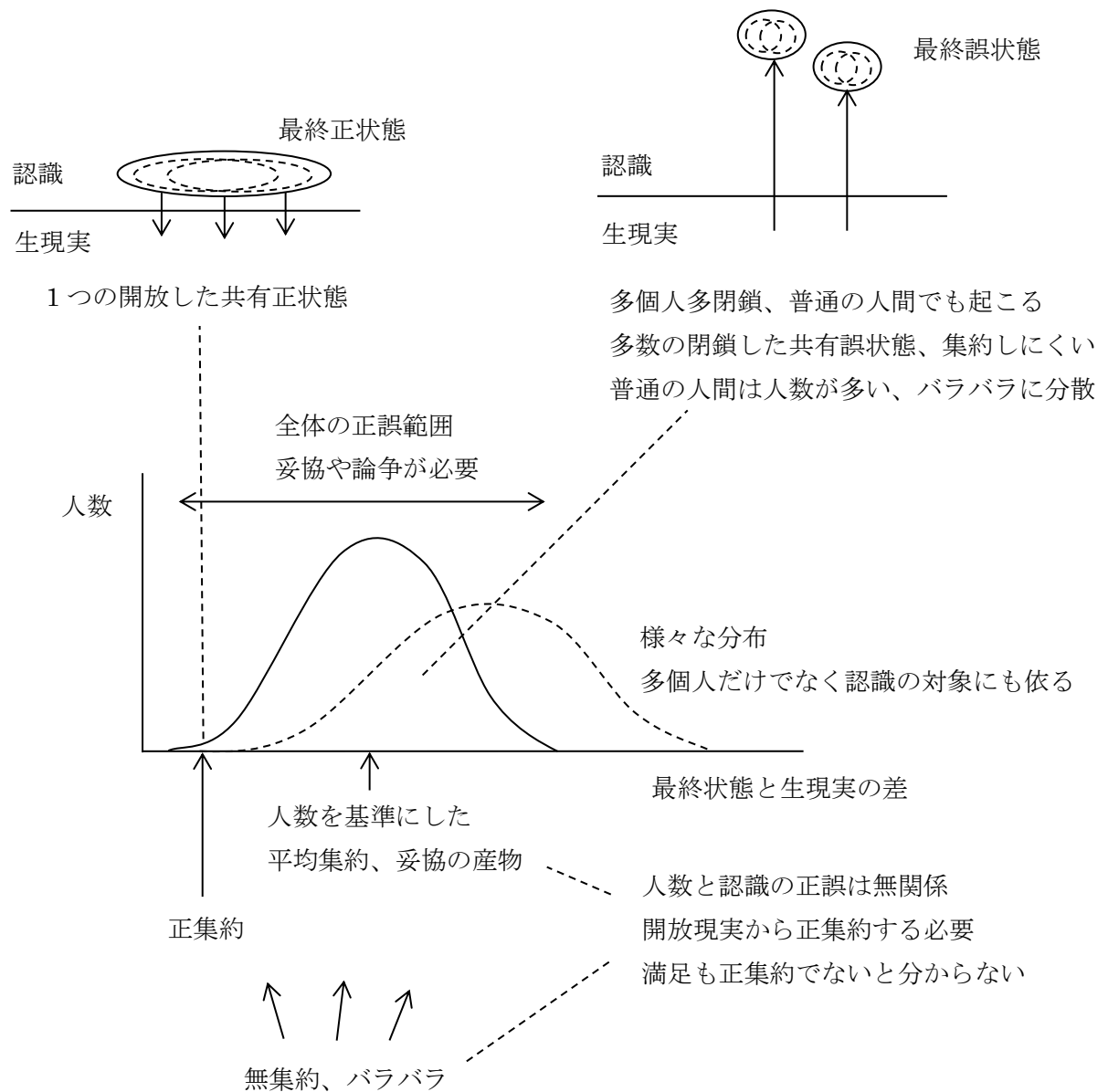


図 3-108 最終状態の分布と集約

3.13.4. 多個人の局所広域閉鎖

多個人多閉鎖が局所広域閉鎖において起こる場合を考える。局所・自己は範囲であり、近辺側に存在する。広域・社会も範囲であり、近辺から遠方にかけて存在する。近辺は明確で重要であり、遠方は曖昧で非重要である。局所広域閉鎖が起こると、近辺と遠方が誤って閉鎖分断し、遠方側に誤った広域・社会が置かれる。

局所広域閉鎖の認識遷移図に対して、多個人多閉鎖を付記する。近辺・遠方は多個人の認識状態の位置であり、多個人自体の位置ではない。多個人多閉鎖により全体としてバラバラになる。近辺・遠方とも多個人多閉鎖の基本構造は同じである。近辺も共有すれば1状態になり、遠方も共有しなければ多状態になる。認識知性伝達も近辺・遠方で同じ構造になり、社会的な認識・知性だけが伝達される訳ではない。

近辺と遠方の認識状態は共有不可である。また多個人自体の距離が遠いと、近辺の認識状態が共有不可になる。ただし多個人自体の距離が遠ければ遠方でも共有は難しいので、これも近辺・遠方であり大きな差はな

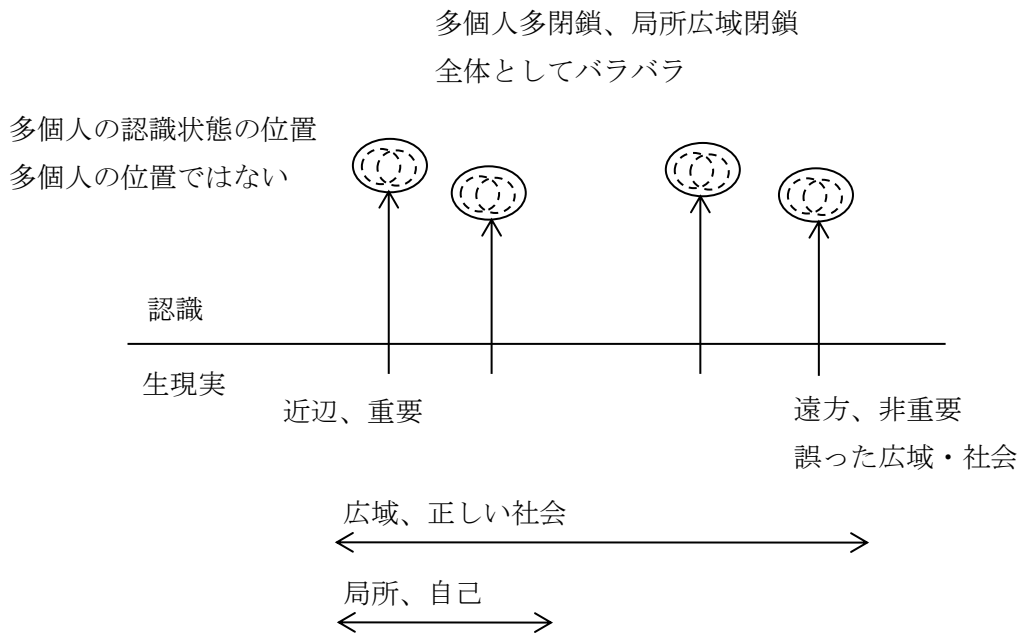
い。例えば大きめの広域閉鎖として「日本民族」を考えると、他民族であれば共有不可になる。

基本的に多個人多閉鎖はバラバラであり、共有可能であっても共有状態になるとは限らない。「日本民族」の閉鎖でも民族のあり方が違えば共有できない。

個人の認識状態において複数の状態が交代していれば、共有の有無も複数になる。個人的な「不良」と社会的な「日本民族」で交代していれば、それぞれに共有の有無が存在する。

多個人多閉鎖により、社会的な認識の集約は難しくなる。これが局所広域閉鎖においてどう理解されるかを考える。局所閉鎖においては「集約の必要はない」と理解される。これは無集約に繋がり、自由・個性・社会無視・いがみ合う社会などになる。広域閉鎖においては「集約すべきだが難しい」と理解される。これは妥協・論争に繋がり、妥協の産物や総論賛成・各論反対などになる。経営危機で立て直しが必要な状況下での社内対立も典型例である。

自由・個性・妥協の産物などは普通の人間にも存在する。平均集約では多個人多閉鎖の問題を回避できず、正集約が必要である。普通のバラバラに分散した認識状態が正しいという理解は誤りである。



近辺・遠方とも多個人多閉鎖の基本構造は同じ
近辺も共有すれば1状態、遠方も共有しなければ多状態
局所閉鎖、「集約の必要はない」と理解、無集約
広域閉鎖、「集約すべきだが難しい」と理解、妥協・論争

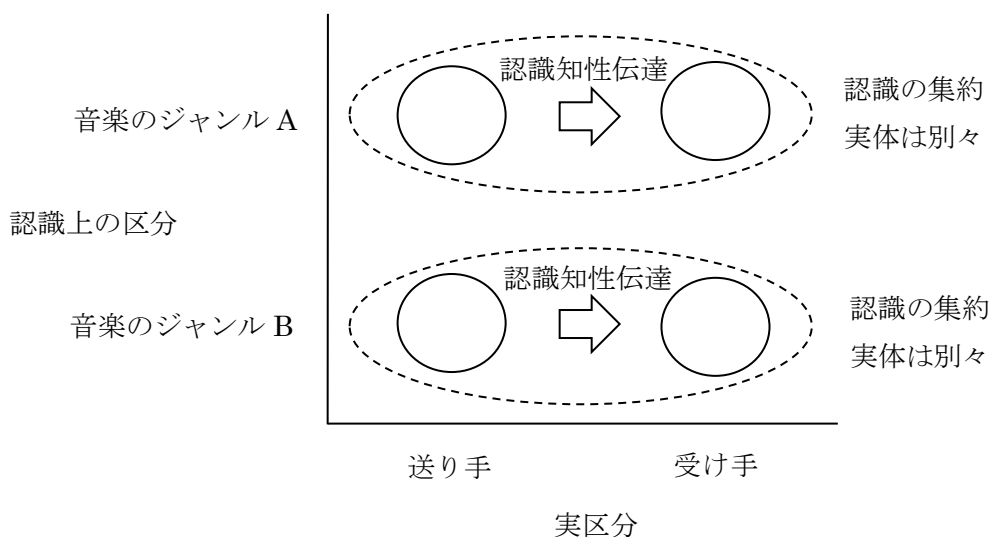
図 3-109 多個人多閉鎖と局所広域閉鎖

3.13.5. 認識知性伝達と実区分

認識上だけの区分は無意味であり、実区分で見るとべきである。両者の差は認識知性伝達において顕著になる。認識上の区分として音楽のジャンルA・Bを、実区分として送り手・受け手を考える。重要なのはジャンルでなく送り手・受け手の区分である。認識知性伝達により、認識上の区分ごとに認識が集約される。受け手は送

り手との一体感を感じ、送り手の音楽ジャンルの区分を問題視する。これらはあまり意味がなく、実際には送り手と受け手は遠い存在である。送り手と受け手の実体は別々である。音楽ジャンルにより実区分でも差があるなら意味はあるが、認識上の区分だけなら意味はない。

多個人多閉鎖により認識上の区分で細分化が起こる。音楽ジャンルの中でもグループなどで細分化する。好みのグループだけに執着し、他のグループを批判するようなことが起こる。これらはあまり意味がない。

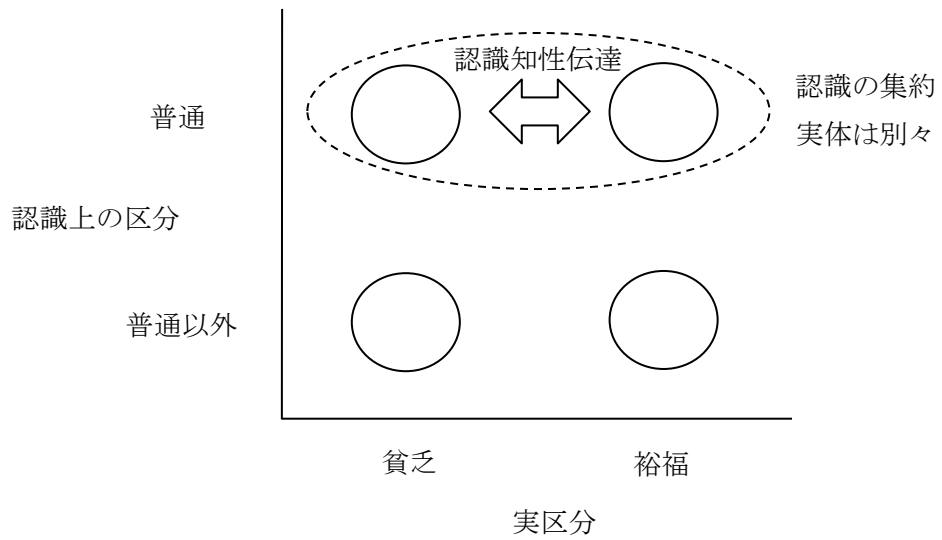


認識上だけの区分は無意味、実区分で見るべき
 認識知性伝達により、認識上の区分ごとに認識集約
 多個人多閉鎖により認識上の区分で細分化、ジャンル内のグループなど

図 3-110 認識知性伝達と実区分

「普通」における認識知性伝達でも同じ事が起こる。認識上の区分として普通・普通以外を、実区分として貧乏・裕福を考える。普通の認識知性伝達は相互に起こるとする。重要なのは普通・普通以外よりも貧乏・裕福であり、生活・仕事など様々な面で大きな違いが生まれる。貧乏・裕福の実体は別々であり、普通かどうかを気にしてもあまり意味はない。

多個人多閉鎖により普通の中でも細分化する。「普通」も自然派・ガジェット愛好家などで細分化される。自然派・ガジェット愛好家・普通以外より、貧乏・裕福の方が重要である。



多個人多閉鎖により普通の中で細分化、自然派・ガジェット愛好家など
 自然派・ガジェット愛好家・普通以外より貧乏・裕福の方が重要

図 3-111 普通の認識知性伝達と実区分

4. 精神疾患・問題行動

4.1. 精神分析・心理学と正誤

4.1.1. 精神分析・心理学

フロイトが創設した精神分析は、自我やエス [13]などの人間的で曖昧な概念を基準としている。認識と実体が混在しており、二重人間の曖昧さに直結する。

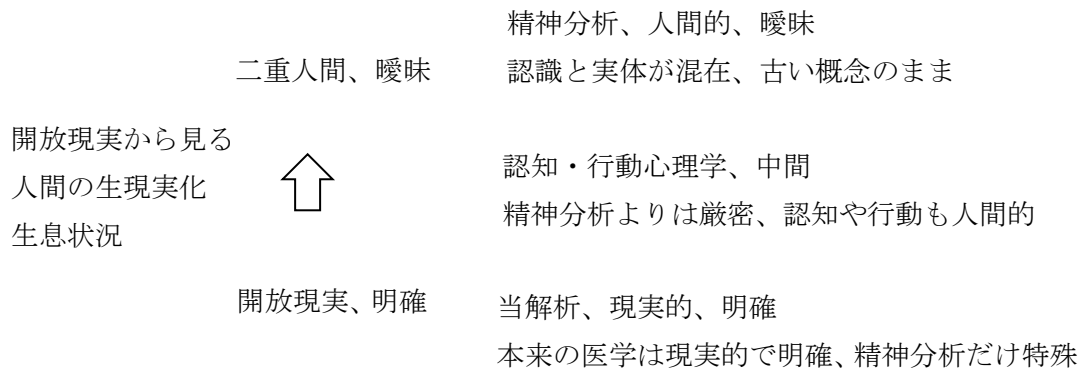
認知心理学 [31] [16]や行動心理学 [12]は、精神分析よりはるかに厳密な手法を用いており、精神分析のような強い曖昧さはない。行動は人間・現実の中間にあり、感情などよりは生現実化しやすい。しかし認知や行動も人間的であり、二重人間の曖昧さから完全に離れている訳ではない。認知や行動を解析する際に、認識により正しい生現実からずれる可能性は多分にある。

当解析は現実的で明確である。明確な開放現実から見て人間を生現実化する事で、生人間・生息状況を明確に理解できる。人間的な曖昧さから可能な限り離れる事で、真の人間像を明確化できる。

精神分析はフロイトが創設した概念が今も使われており、古い概念のままである。認知・行動心理学に最近の発展が見られるのとは対照的である。本来の医学は現実的で明確な学問であり、人間を自然科学的に扱う事で発展してきた。精神分析は人間的であり、本来の医学とかけ離れている。人間に関しても、本来の医学のように現実的な観点から見るべきである。

すべての疾患に対する医学的問題は、現実的症状と、現実的症状に対する認識である。この視点で通常の身体的疾患と精神疾患を統合すべきである。曖昧な精神分析でなく、明確な現実的症状を見るのが正しい。生物と同様に現実的な行動分析を行うべきである。医学的に見た食事や運動量の分析などが挙げられる。

認知療法においては「自動思考」 [16]として認識の方向性が示されており、これは当解析の「知性」に近い。教育心理学においては「メタ認知」 [17]として認識の制御方法が示されており、これも当解析の「知性」に近い。当解析を使えば治療・矯正・教育まで連動した解釈が可能になる。



医学的問題は、現実的症状と、現実的症状に対する認識
 身体的疾患でも精神疾患でも同じ
 曖昧な精神分析でなく、明確な現実的症状を見る
 生物と同様に現実的な行動分析、医学的、食事、運動など
 当解析の知性と、認知療法の自動思考と、教育心理学のメタ認知は

図 4-1 精神分析・心理学と人間・現実

4.1.2. 誤状態の種類による分析

精神分析や心理学の世界は、帰納的・経験論的で曖昧であり、そのままでは一般化できない。

精神疾患の種類は DSM という基準によって分類されているが、その手引き [32]にさえ「原因が科学的に確定されていない疾患」と明記されている。精神疾患の区分として心因（認識の問題）・器質（脳の問題）が使われる場合もあるが、この区分は明確でなく、最近あまり使われない。人間はコンピュータのようにソフトとハードを明確に分ける事はできない。

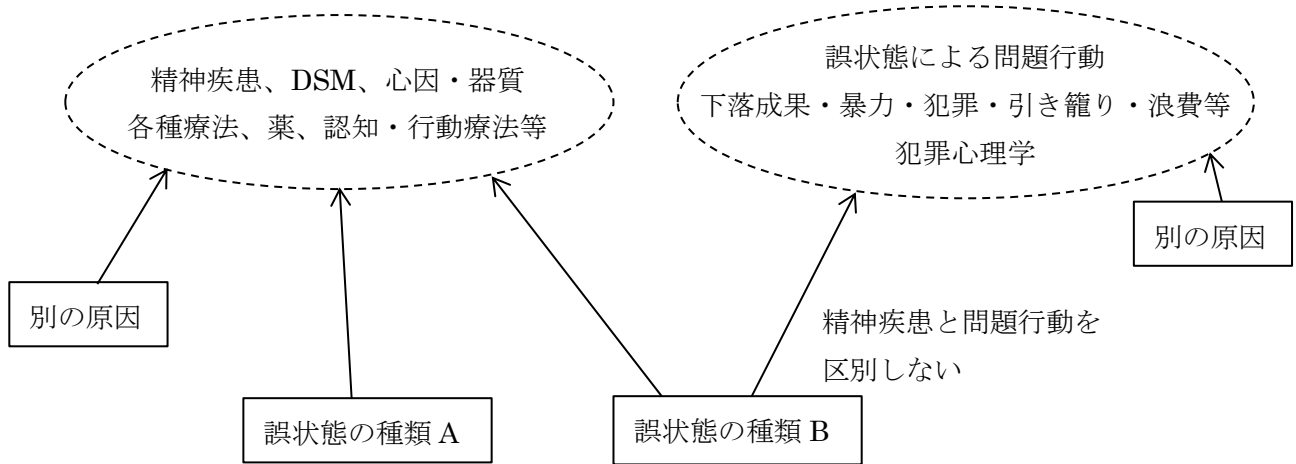
療法についても種類が多く、解釈が難しい。最近では薬物療法 [33]と認知・行動療法 [34]が一般的であるが、それ以外にも古くからの精神分析や、森田療法など多種多様な療法が存在する。

誤状態の種類は当解析により明確に分析でき、演繹的な一般化が可能である。誤状態の種類と特性を明確に分析する事で、曖昧な部分に指標を与える事が可能になる。現状の療法には、例えば「薬でうつが収まったとしても、ずっと薬が必要なら正常と言えるか」などの疑問点が多数ある。当解析を使えばこれらを明確化できる。

誤状態は精神疾患以外にも問題行動を発生する。特に下落成果・暴力・犯罪の問題は、精神疾患と同程度以上に重要である。DSM においては素行症などの形で犯罪等にも触れられているが [32]、各種療法で犯罪に触れられる事はほとんどない。犯罪は犯罪心理学という別分野で扱われ、犯罪から収監までを含む社会的な構造として分析される [35]。犯罪以外にも引き籠りや浪費などの問題行動がある。誤状態の分析は精神疾患と問題行動を区別せず、治療にも矯正にも繋げる事ができる。

精神疾患には誤状態でない別の原因もあり得る。てんかんは明らかに認識とは関係ない。また自閉症は他の精神疾患と比べて特殊で、認識との関係が良く分からない。これらは当解析の対象外とする。当解析の対象とする精神疾患・問題行動でも、誤状態以外の原因を排除する訳ではない。誤状態により精神疾患・問題行動がある程度説明できるが、誤状態がすべての原因とは限らない。

帰納的・経験論的で曖昧、一般化できない



当解析で分析可能、演繹的に明確化・一般化できる
ここから治療・矯正・教育などに繋がる
誤状態でない別の原因もあり得る

図 4-2 誤状態の種類による明確な分析

4.1.3. 認識遷移と正誤

認識において問題となるのは、正しいと思っている最終状態である。誤りと思っている途中状態は問題でない。正しいと思っている最終誤状態を修正する必要がある。真に正しい最終正状態を作ってから修正しなければならない。開放現実からの修正が有効である。

現実的に見て不満な状況での満足感、認識正評性で誤りである。このような認識を現実的に修正する事で、生満足が得られるようになる。

認識の誤りにおいて、途中状態の部分で大きな問題が起こる場合がある。局所広域閉鎖による反社会性などがこれに当たる。この場合の原因は近辺側の最終誤状態であり、遠方側の途中状態ではない。途中状態ではなく最終誤状態が問題の原因であり、それを修正する必要がある。

最終正状態は開放して見える。認識は生現実接近し、全体として統合・整合になる。最終誤状態は閉鎖して見える。認識は生現実から離反し、全体として分裂・不整合になる。分裂は認識と生現実の離反と、認識内の閉鎖分断により起こる。

認識遷移図により現実・人間や統合・分裂の構造が分かる。また最終誤状態の構造を見れば、様々な誤りの種類が分かる。二重人間のため人間は曖昧であり、現実には明確である。最も重要なのは明確な現実の理解である。認識と生現実の接近・離反も開放・閉鎖も現実から判別できる。現実を見る事で認識の構造を解析できる。

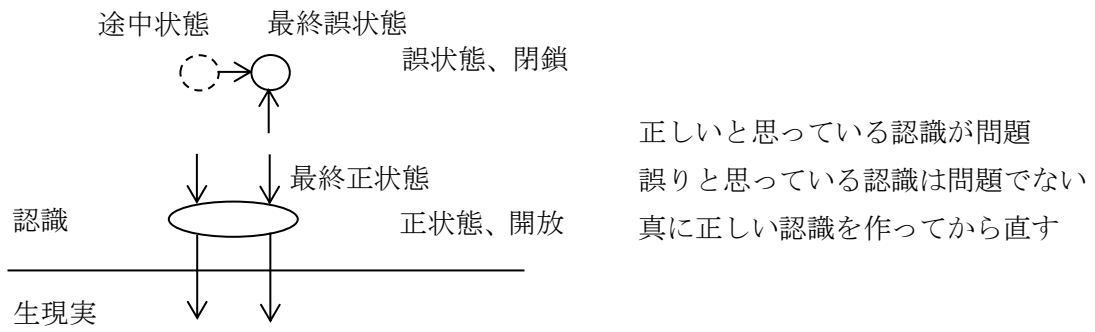
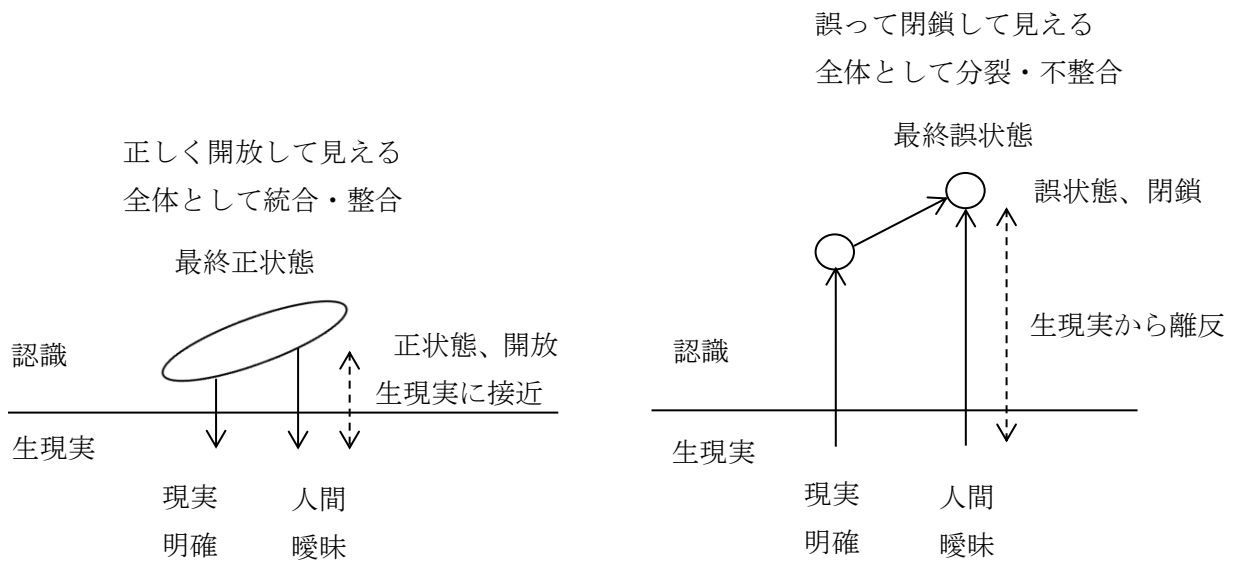


図 4-3 最終状態と修正



認識遷移図により現実・人間や統合・分裂の構造が分かる
 最終誤状態により様々な誤りの種類が分かる
 現実を見る事で認識の構造を解析可能

図 4-4 正・誤状態と開放現実

4.2. 正常・普通と認識の正誤

4.2.1. 正常・異常と認識の正誤

「正常」と「正しさ」の意味について検討する。まず体脂肪率における正常を考え、体脂肪率に対して人数の分布図を書く。正常かどうかは成人病の発生率などから判断を行い、必ずしも最多の位置になる訳ではない。ただし全員が病的な体脂肪率を持てば社会が成立しないので、正常な位置は最多の位置からそう遠くない所にある。

次に認識の最終状態における正しさを考える。最終状態と生現実の差に対して人数の分布図を書く。この差は小さければ小さいほど正しくなり、最多の位置から遠くなる。人数と認識の正誤は無関係である。

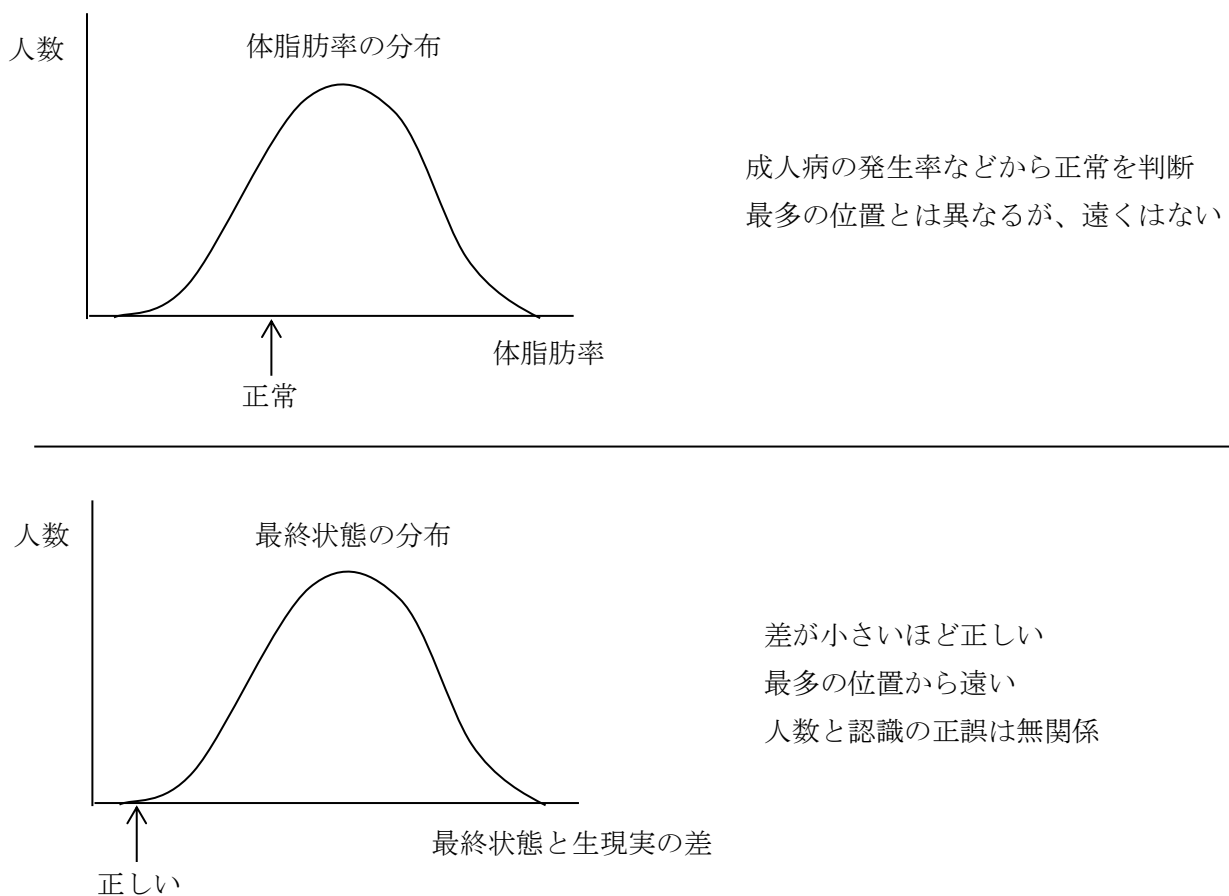


図 4-5 正常・正しさの意味

精神分析・心理学等で行われている、正常と異常の判定について考える。最終状態と生現実の差に対して人数の分布図を書く。人数と認識の正誤は無関係であり、認識の正誤で見る必要がある。分布の形は多個人の認識そのものに依存する。今までの精神分析や心理学では認識の正誤を明確に示せないで、人数が多い所を「正常」と判定するしかない。これは平均集約に相当する。平均集約は認識そのものに依存するため、人間に関する曖昧な認識が含まれている。

曖昧な正誤でも、人数の少ない誤った認識はある程度判別できる。これが「異常」と判定される部分である。しかし真に正しい認識は人数が少ないため、正常なのか異常なのか判別できない。正常・異常は真の正しさか

ら見て曖昧な判定でしかない。

人間的にこだわるのは誤りであり、生現実にこだわらないのが正しい。スポットライト的な閉鎖満足も誤りである。この点から見ても、普通の認識の半分程度は誤りである。

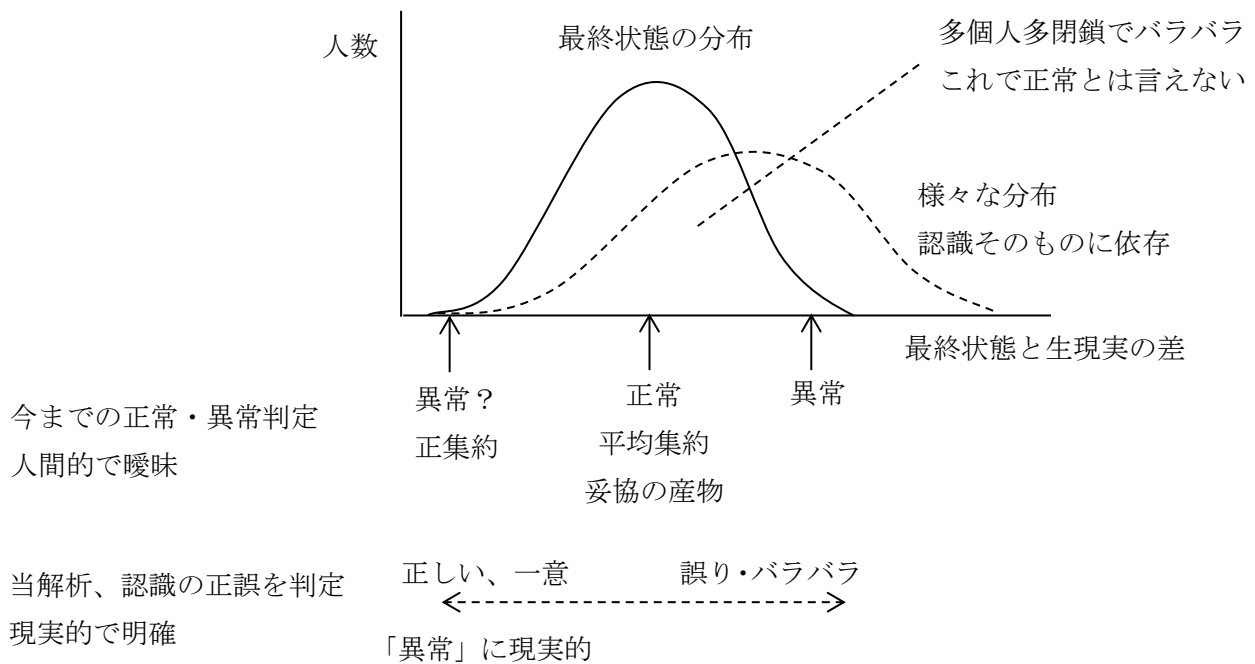
普通の人間も多個人多閉鎖により認識はバラバラになる。閉鎖により距離も遠くなる。大きく見れば不良・善良・右派・左派・宗教・一部政党・陽キャ・陰キャなどが相当する。これらが認め合うのなら問題ないが、閉鎖的に対立する場合も多い。細かく見れば企業内・家族内の閉鎖的対立などが相当する。多個人多閉鎖のため平均集約は妥協の産物となる。このような状況で正常とは言えない。バラバラ・曖昧な人間的普通は誤りであり、一意・明確な生現実・生息状況が正しい。生息状況で見れば普通の誤りも理解できる。

現実的で正しい認識に基づき正集約すべきである。当解析では認識の正誤を明確に判定できる。曖昧な人数や正常・異常ではなく、現実的で明確な認識の正誤により分析を行う。問題は異常でなく非現実・不整合である。誤状態の形式と修正方法を明確に示す事で、厳密な分析が可能になる。大きい誤状態だけに限らず、平均的な正・誤状態も分析できる。

「普通の人間」の正誤も分析可能である。分析の手法は精神疾患・問題行動と同じであり、誤りの程度が小さいだけである。普通の人間でも人間・現実や局所広域閉鎖や多個人多閉鎖などの不整合が存在する。本音・建前や不良・善良などの局所広域閉鎖は普通に存在する。多個人になれば簡単に多個人多閉鎖が発生する。バラバラに分散した普通すべてを、開放現実に向けてまとめて修正すべきである。

当解析における「正しさ」は、今までの正常・異常判定から見れば「異常」に現実的になる。「異常」に現実的でも、精神疾患・問題行動からは普通より遠くなる。占い・霊・神秘などの人間的・非現実的理解は普通にあるが、これらは病的な妄想に似ている。現実的であれば占い・霊・神秘などから遠くなる。認識に関しては、異常でなく正誤や現実的問題を見るべきである。

「異常」に現実的でも、普通の人間から遠く離れる訳ではない。そもそも普通がバラバラなので、それと同程度に離れるだけである。



人数や正常・異常でなく、認識の正誤で分析、問題は異常でなく非現実・不整合誤状態の形式と修正方法を明示、「普通の人間」の正誤も分析可能
 人間的こだわりやスポットライト的閉鎖満足は誤り、この点でも普通の半分程度は誤り
 普通の人間でも人間・現実や局所広域閉鎖や多個人多閉鎖などの不整合
 現実的な健康や精神疾患から「普通の誤り」を見る、普通への認識正評性が問題

図 4-6 正常・異常と認識の正誤

4.2.2. 普通の満足と正誤

最終状態の分布を細かく検討する。現実的・生物的な最終状態は「異常」と判別されるが、実際には正しい。現実的・生物的な生息状況を見るべきである。人間的で「異常」であれば、問題のある異常となる。人間的だと他個人多閉鎖のためバラバラになり、現実的なら一意になる。

普通は幅のある範囲であり、平均はその中の一点である。普通の人数は多いが、多個人多閉鎖のため最終状態はバラバラになる。

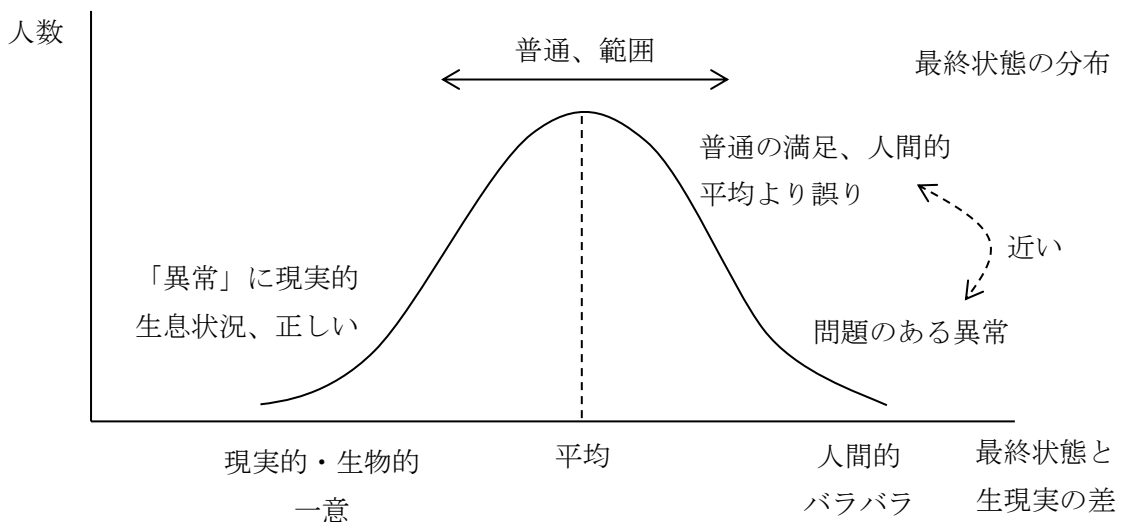
普通の満足は、満足自体が人間的なので平均より人間的で誤りになる。普通の満足は、多個人多閉鎖のため平均よりバラバラになる。様々な普通の満足は人間的・バラバラ・不整合で、すべて誤りである。人間的で曖昧な普通の満足でなく、現実的で明確な生満足が正しい。人間的認識による生不満の理解が重要である。普通の満足でなく生息状況を見るべきである。すべての満足から一步引き生不満を見る必要がある。バラバラな普通の満足は、スポットライト的な閉鎖満足である。普通の幸せ・自分らしさ・生きがいなどを追う人間は、平均より誤りが大きく生満足を得られない。普通の幸せ・自分らしさ・生きがいなどは、多個人でバラバラになる。一点で高い満足でなく全体での満足が正しい。バラバラ・不整合な様々な普通の満足は、開放現実から見る事で整合できる。

普通の満足は「問題のある異常」に近く、精神疾患・問題行動とも近い。認識正評性は最終状態に付随し、推論の基準になる。認識誤評性より認識正評性の方が大きな問題であり、生不満に繋がる。よって普通の満足

は重大な問題である。

生満足は普通の満足ではなく生息状況である。満足感があっても生息状況が悪ければ意味がない。「普通に楽しい」状況でも、不健康で精神疾患に近い状況もある。過度の食事・飲酒や、不眠などである。これらも現実的な健康や精神疾患から、「普通の誤り」を見るべきである。普通に対する認識正評性が問題であり、「普通の誤り」を見えなくしてしまう。普通の生誤評性を見なければならぬ。無認識感情で普通の満足を見て、人間的にこだわらず一歩引くのが正しい。すべてのこだわりを無くして現実を見れば、バラバラの認識は収束する。

普通の満足において一つの感情種類に囚われたら誤りである。このような例は成功・金・恋愛などで良くある。すべての感情種類を見る必要がある。



様々な普通の満足は人間的・バラバラ・不整合で、すべて誤り
人間的で曖昧な普通の満足でなく、現実的で明確な生満足が正しい、人間的認識による生不満
普通の満足でなく生息状況、すべての満足から一歩引き生不満を見る
スポットライト的閉鎖満足、一点で高い満足でなく全体での満足が正しい
認識誤評性より認識正評性の方が問題大、推論の基準で生不満
すべてのこだわりを無くして現実を見れば、バラバラの認識は収束

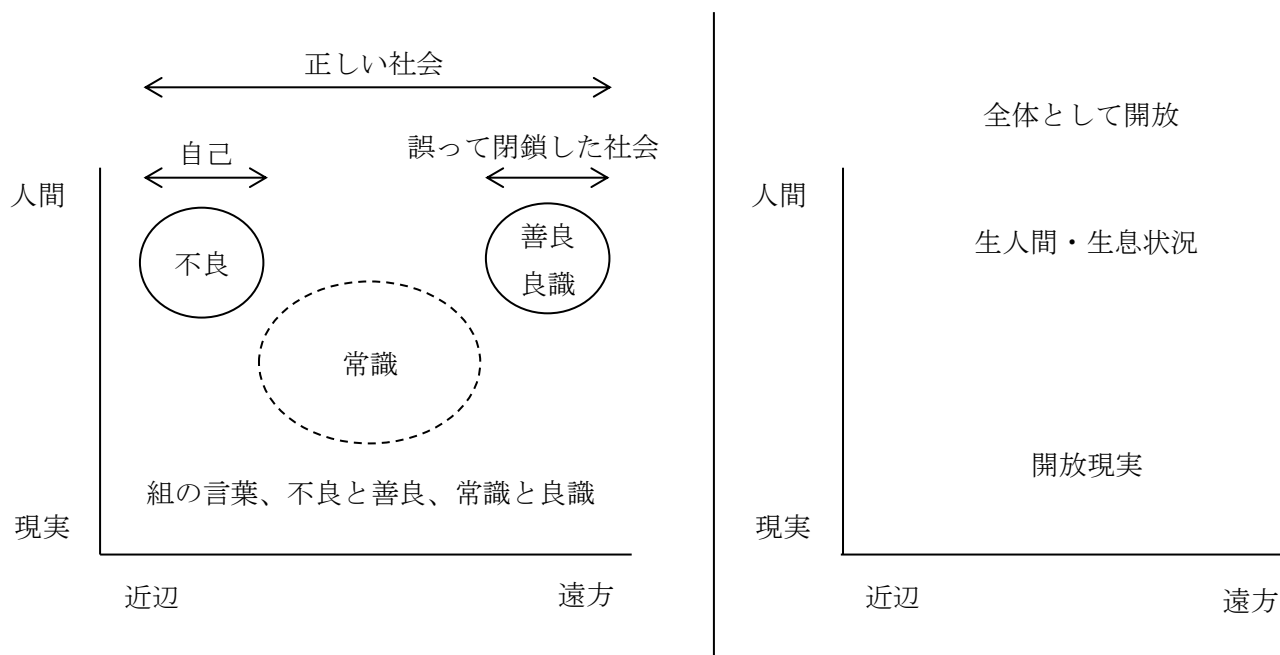
図 4-7 様々な普通の満足

近辺は明確・重要だが、遠方は曖昧・非重要である。人間・現実はどちらも重要であり、現実が明確で人間は曖昧である。近現実が最も明確であり、近現実を始点として開放理解すべきである。これが近現実開放である。

様々な普通は曖昧でバラバラであり、理解の始点とすべきではない。普通は近辺から遠方までを含み、近辺より重要性も低い。自分を含めた人々の共通認識でも、何の基準にもならない事を理解すべきである。特に普通の満足は人間的で曖昧であり、ここを始点としても何も分からない。普通の満足は重要性も低い。遠い他者の満足は意味がない。

自己は最も近辺にあり最重要である。認識・知性の修正対象として自己の理解が重要だが、生自己・真の自

様々な普通の満足は人間的・バラバラ・不整合で、すべて誤りである。常識などもバラバラであり、満足の形がそれぞれ異なる。常識的幸せ・不良のカッコよさ・良識的素晴らしさ、などがある。これらはすべて誤りである。バラバラ・不整合な常識などは、開放現実から見る事で整合できる。



不良・善良は人間的で自己・社会に閉鎖、常識は平均的でやや人間的・閉鎖的
 良い・悪いは単に評価、これらが人間的になると問題
 人間的な良い・悪いでなく、現実的な正しさ、近辺にある自己の生息状況が重要
 常識的幸せ・不良のカッコよさ・良識的素晴らしさ、すべて普通の満足で誤り

図 4-9 不良・善良と常識・良識

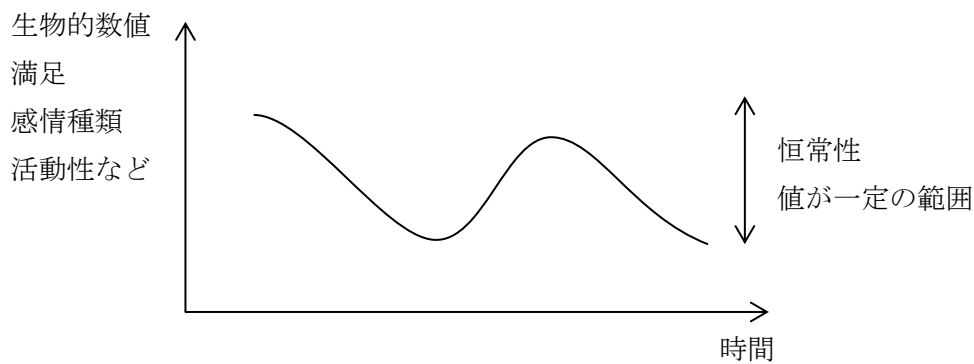
4.3. 正常・異常に関する構造

4.3.1. 恒常性と正誤

恒常性は生物などの内部を一定の状態に保とうとする特性である。人間の生物学的数値を時間に対してグラフ化すると、恒常性により一定の範囲に収まる。生物学的数値には、満足・感情種類・活動性などが挙げられる。恒常性の範囲内なら正常、範囲外なら異常という判定ができる。恒常性は生物における1つの規則と言える。

恒常性は様々な調整メカニズムを総合する事で実現されている。恒常性が異常になる場合、調整メカニズムの一部における何らかの疾患が原因となる。恒常性の異常自体は疾患の結果であり原因ではない。風邪により高熱が起こる状態などが典型例である。

過剰な感情は恒常性において問題がある。一時的に大きな感情や、長期的な感情の偏りなどである。これらは生物として見ると不適切である。



恒常性の範囲内なら正常、範囲外なら異常

恒常性の異常は疾患の原因でなく結果、風邪の高熱など

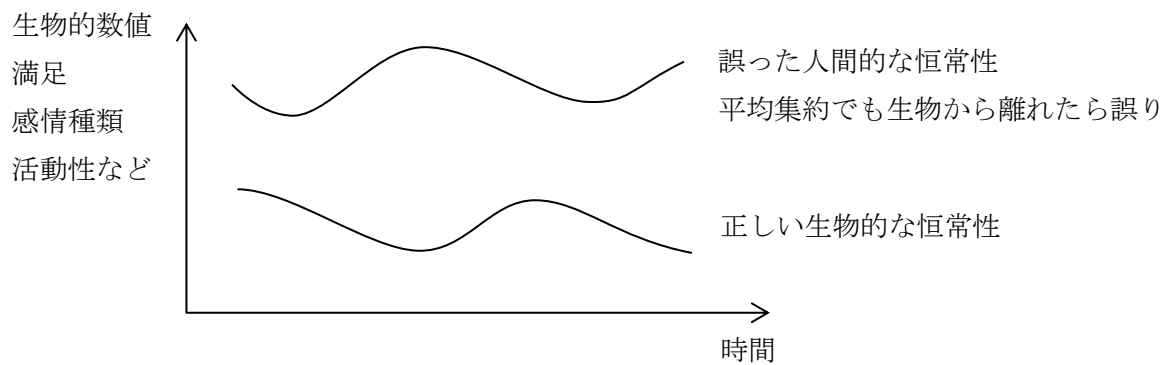
過剰な感情は恒常性に問題、一時的に大きな感情や、長期的な感情の偏り

図 4-10 恒常性と正常・異常

正しい認識は生現実に近い認識であり、平均が正しい訳ではない。現実的・生物学的な認識が正しく、恒常性でも同様である。人間は生物の恒常性を引き継いでいて、そこから正誤判定ができる。恒常性は生物学的である必要があり、平均が正常ではない。多個人多閉鎖により認識はバラバラなので、平均集約を作る事も難しい。

生物学的な恒常性が正しく、人間的な恒常性は誤りである。その恒常性が平均集約だとしても、生物から離れていれば誤りである。正誤は平均集約や恒常性自体だけでは分からない。例えば肥満が普通だとしても正常とは言えない。肥満で不健康なら痩せる方が正常である。

認識・恒常性には様々な種類があり得る。生物学的数値の次元を変えれば恒常性も変わってくる。現実・生物の基準がないと、認識・恒常性の正誤は分からない。



正しい認識は生現実に近い認識、平均が正しい訳ではない
 現実的・生物学的な認識が正しく、恒常性でも同様
 平均や恒常性自体だけでは分からない、肥満が普通でも正常ではない
 様々な認識・恒常性があり得る、現実・生物の基準がないと正誤不明

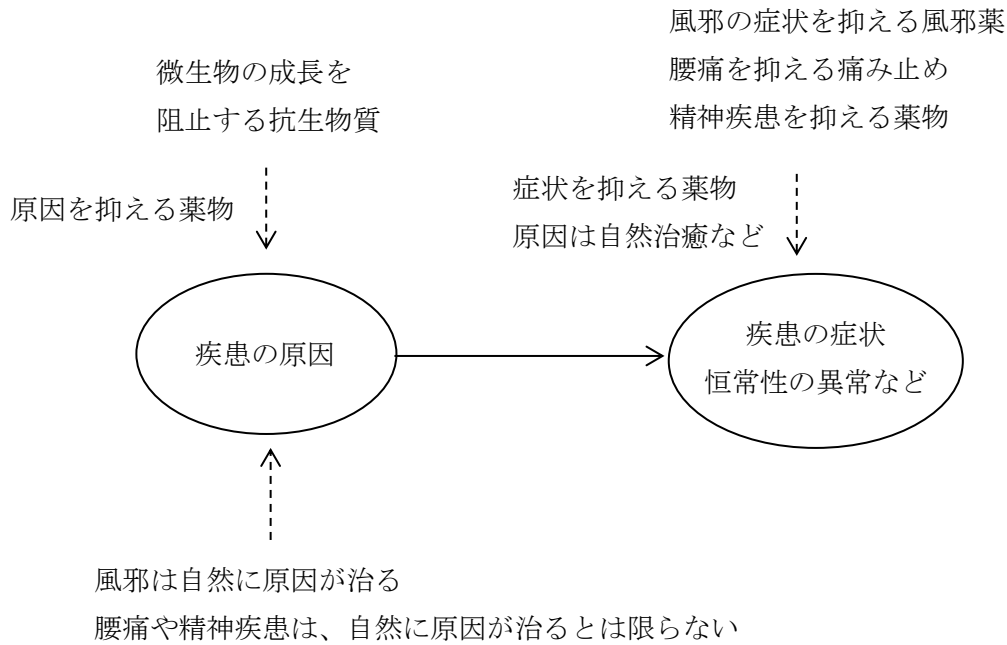
図 4-11 恒常性と認識の正誤

4.3.2. 薬物療法

薬物療法において重要な生物学的数値は、満足である。恒常性から見た満足の異常を考える。抗精神病薬はドーパミンを抑える効果があり、SSRI はセロトニンを増強する効果がある [14]。これらは異常な満足に対して満足を減らす効果と、異常な不満に対して耐性を付ける効果に相当する。特に SSRI は様々な疾患に対して多用される [36]。

ドーパミンは報酬と関係しており満度に直結するが、セロトニンの特徴は抗ストレス作用であり満足と直結していない。誤状態には生誤評性があるため、常に生不満が発生する。この状態で不満を減らすのは不適切である。そのためセロトニンにより不満の耐性を付ける事が有効になると思われる。覚せい剤やコカインなどにはドーパミンを増やす効果があり、異常な満足と似た症状を引き起こす。ドーパミンを増やすと薬物中毒になってしまう。

セロトニン増強は薬物中毒にはならず、様々な疾患に対して多用される。そのため薬物中毒や問題行動でも使用できる可能性がある。セロトニンも薬物だが、中毒になる薬物とは効果が異なる。また誤状態による精神疾患と問題行動は構造的に大差ない。



治療そのものに、原因の治療と症状の治療がある
痛みも原因不明で症状を治療する場合がある、精神疾患と同じ
薬物療法で抑える種類は少ない、異常な満足・不満・低活動性位
薬物療法だけでなく原因の治療も必要、認識や知性の修正

図 4-13 原因・症状の治療と薬物療法

4.3.3. 満足・不満

誤状態において満足・不満が発生する原因を考える。まず生誤評性が挙げられる。誤状態には常に生誤評性があり、認識外なので正しく理解できない。明確な現実には曖昧な生誤評性が付随する形で見える。現在の薬物療法でセロトニン増強は汎用的に使用されており [36]、誤状態における生誤評性がその原因と思われる。

曖昧な生誤評性は、現実への認識誤評性や、認識に依存しない基礎不満などに誤解される。自分の考えが人間的で曖昧なので不満になるのが正しく、このような誤解は修正しなければならない。

次に認識正・誤評性が挙げられる。これらは最終誤状態の閉鎖枠内・外で切り替わり、1つの最終誤状態において両方が同時に存在する。問題は閉鎖した最終誤状態であり、それに伴う閉鎖枠内と認識正評性である。

最後に満足・不満側の認識感情種類が挙げられる。これらは最終誤状態の内容に依存し、最終誤状態ごとに存在する。

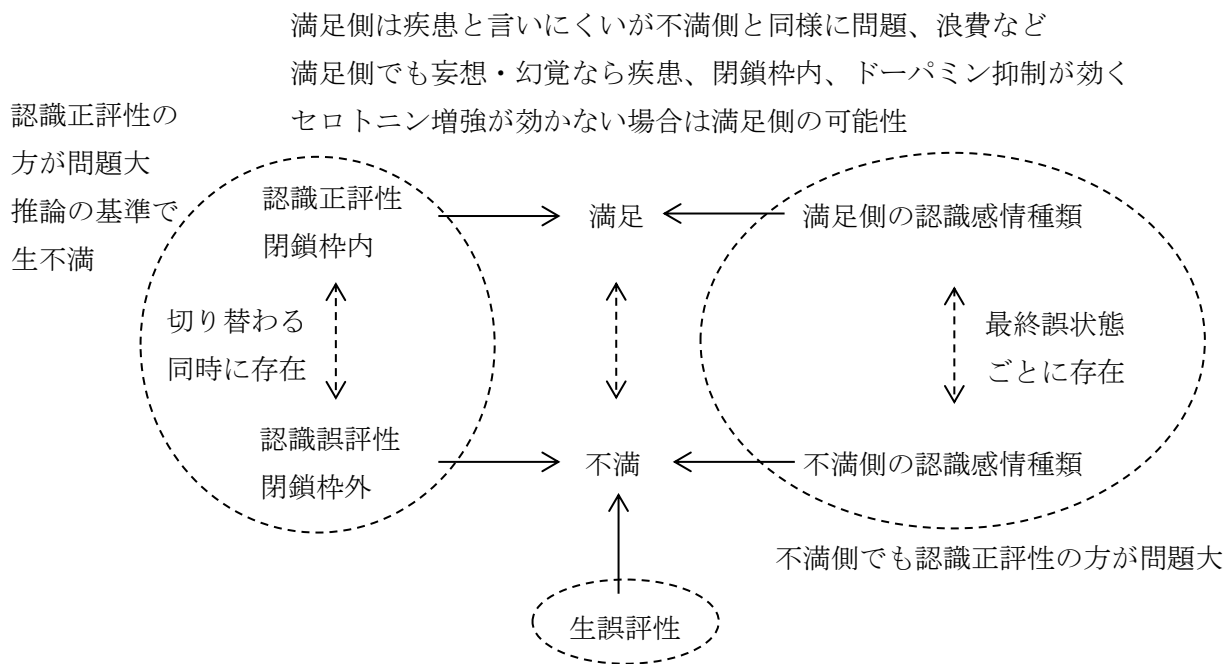
満足・不満は生誤評性・認識正誤評性・感情種類が複合的に絡む。これら3種類とも生現実化と開放で修正可能である。

不満があれば疾患と言えるが、満足側は疾患と言にくい。浪費は問題行動ではあるが、本人が浪費で満足していれば疾患とは言えない。ただし満足側の感情に囚われれば生不満が発生するので、不満側と同様に問題がある。満足側でも妄想・幻覚であれば疾患と言える。これらは最終誤状態の閉鎖枠内であり、ドーパミン抑制による治療効果がある。セロトニン増強の効果がない場合は、満足側である可能性がある。

満足・不満よりも最終正・誤状態が問題である。満足・不満は人間の一部であり曖昧である。認識正・誤評性で見ると、満足のある認識正評性の方が最終誤状態に直結しており問題が大きい。認識正評性は推論の基準になり、生不満に繋がる。感情種類で見ると、不満側の方が認識上で問題が大きく見える。認識上でそう「見える」だけであり、問題なのは生不満である。不満側の感情種類の中でも、認識正評性の方が問題は大きい。

満足・不満で問題を判別しても良く分からないが、最終誤状態で判別すれば明確化できる。人間的認識による隠された生不満を見る必要がある。

満足・不満は正・誤評性と関係するので、複雑で特殊な構造と言える。満足・不満は認識の正誤と直結するので、それだけ重要であるとも言える。これは薬物療法における満足・不満の重要性と連動している。



誤状態には常に生誤評性がある、認識外
 明確な現実に曖昧な生誤評性が付随
 セロトニン増強が汎用である原因
 人間的認識による隠された生不満を見る必要

生誤評性・認識正誤評性・感情種類が複合的に絡む
 3種類とも生現実化と開放で修正可能
 満足・不満よりも最終正・誤状態が問題
 満足・不満は正・誤評性と関係する、複雑・特殊かつ重要

図 4-14 満足・不満の原因

満足・不満と認識・生現実を4区分に分けてまとめる。重要なのは認識満足・不満よりも生現実・生息状況であり、認識満足は認識不満よりも問題が大きい。

生現実上の満足は生満足であり、良い生息状況である。これが人間の目標となる。

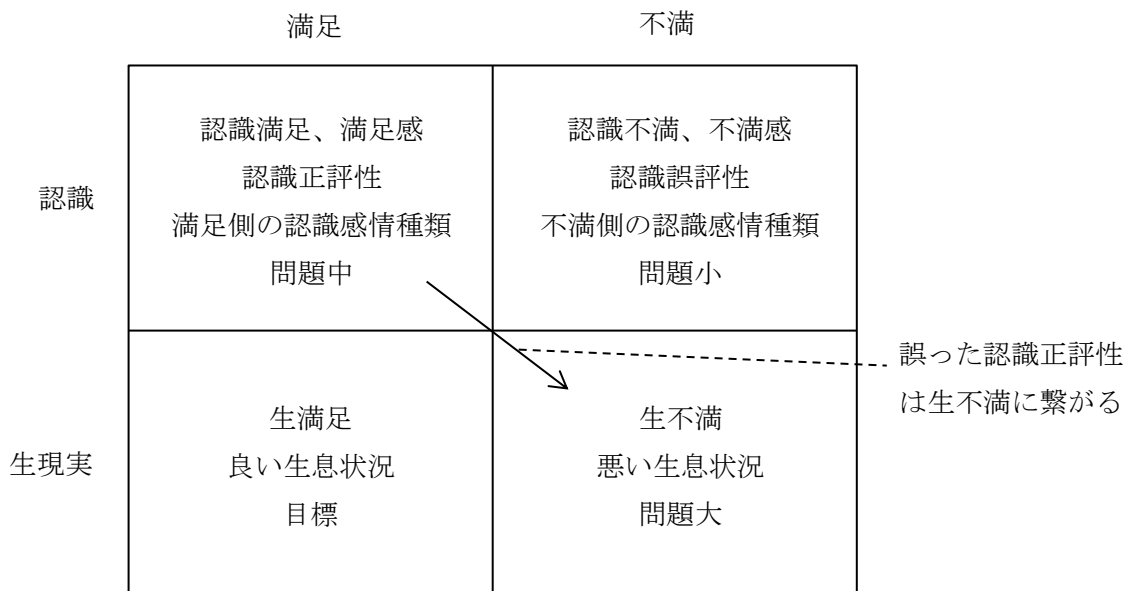
生現実上の不満は生不満であり、悪い生息状況である。生満足の反対なので、4区分の中で最も問題が大きい

い。

認識上の満足は認識満足であり、満足感である。最終状態による認識正評性で発生する。また満足側の認識感情種類でも発生する。認識正評性は最終状態に基づくため不満側よりも問題が大きい。誤った認識正評性は生不満に繋がる。4区分の中では中程度の問題である。

曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさが必要である。人間的認識による生不満の理解が重要である。満足感でなく自己の生息状況を見るべきである。現実的な真の満足でなければならない。誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪である。満足は人間の一部分で曖昧であり、満足を見るだけでは生満足は分からない。生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見るべきである。人間的な満足は不自然であり、人間的な不整合を無くす事で生満足を得られる。スポットライト的な閉鎖満足は誤りである。一点で高い満足でなく全体での満足が正しい。無認識感情から見て、すべての満足から一步引き生不満を見るべきである。

認識上の不満は認識不満であり、不満感である。途中状態による認識誤評性で発生する。また不満側の認識感情種類でも発生する。認識誤評性は途中状態に基づくため満足側よりも問題が小さい。不満側の認識感情種類では多少問題になる。



重要なのは認識満足・不満よりも生現実・生息状況、認識満足は認識不満よりも問題大
 曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさ、人間的認識による生不満
 満足感でなく自己の生息状況、誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪
 満足は人間の一部分で曖昧、満足を見るだけでは生満足は分からない
 生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見る、すべての満足から一步引き生不満
 スポットライト的な閉鎖満足は誤り、一点で高い満足でなく全体での満足が正しい

図 4-15 満足・不満と認識・生現実

4.3.4. 活動性

満足・不満と異なり、活動性は認識の正誤と無関係である。活動性の構造は満足・不満より単純になり、認

4.4. 認識・知性の修正

4.4.1. 高意識と修正

意識制御は脳全体の制御であり、覚醒などと直結する。高意識・低意識は大脳新皮質の部位における活動性の高・低である。認識や知性の部位においても高意識・低意識が存在する。

修正において誤った認識・知性を低意識で放置しても、そのまま残るだけで修正としては不十分である。一方で修正していない誤った認識遷移を高意識化すれば、その部分が強化されてしまう。これは低意識化して放置するより問題が大きい。

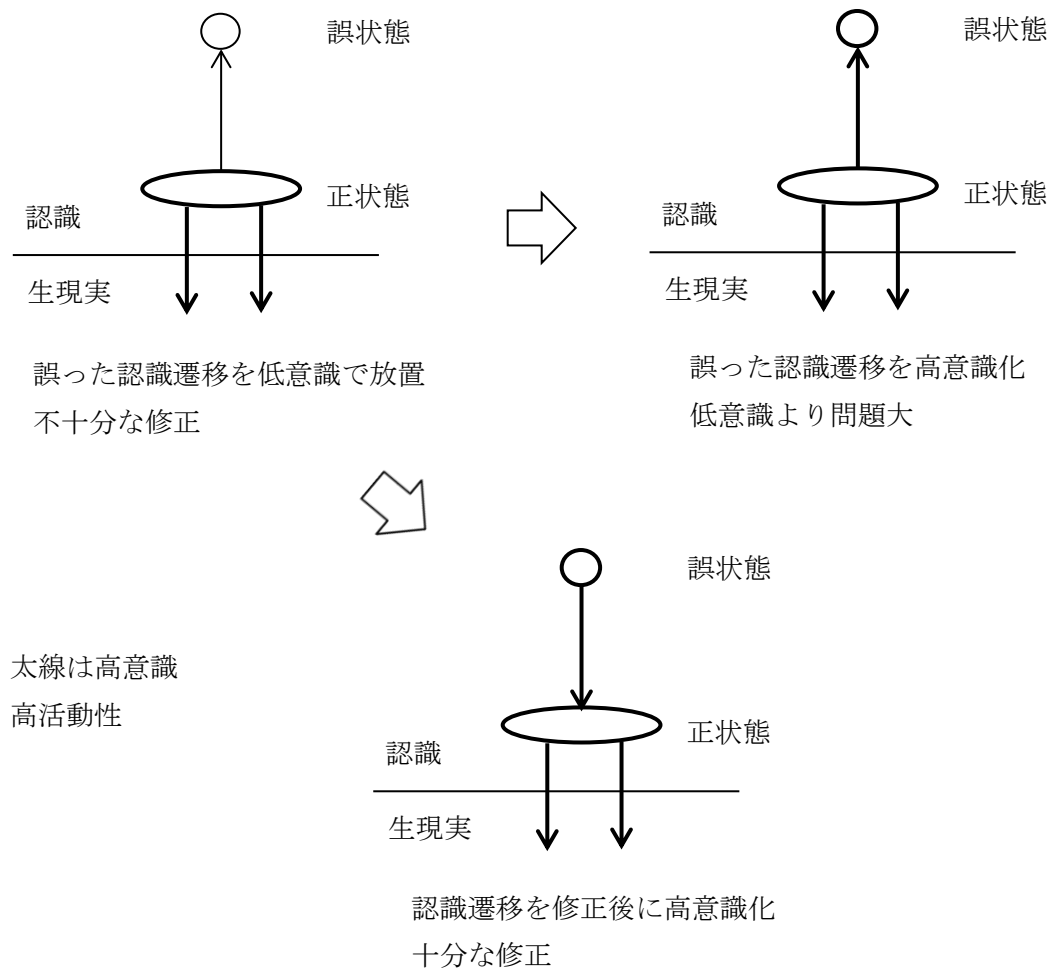
誤った認識・知性は、認識遷移を修正した後で高意識化する必要がある。これでやっと十分な修正になる。正しさの基準を変えて、認識外の生現実が正しいという評価で誤った認識状態を見なければならない。誤った認識状態の認識正評性を外すだけでなく、生誤評性まで意識する必要がある。正しく修正した認識遷移だけを意識し、誤ったままの認識遷移は意識しないようにすべきである。

誤った認識・知性を捨てても、正しい認識・知性がなければ何もできない。正しい認識・知性を作る必要がある。正しい認識・知性を作る前に、誤った認識・知性の低意識・高意識を変えても意味はない。

「無意識」という言葉は人間的で曖昧である。精神分析においては無意識や抑圧の理解が重視されているが[13][12]、誤った認識・知性を高意識にしても意味はない。修正した正しい認識・知性を高意識にする必要がある。子供時代の非知的認識状態はある程度使える部分もあるが、十分正しい訳ではない。

人間における「意識」を形成するのは認識と知性である。強力な知性は人間だけが所有するもので、動物にはない。人間のような意識は人間しか持っていない。人間は常に何が正しいのかを「意識」しているが、これは人間に固有のものがある。

高・低意識は大脳新皮質の活動性である。大脳新皮質は、認識人間を作っている実体である。これを含む形で人間全体の活動性が存在する。高・低意識以外の活動性として、生感情・生感覚・生行動・臓器などの活動性が挙げられる。



修正後の認識遷移だけを高意識化、正しさの基準を変える必要
誤りの認識正評性を外すだけでなく、生誤評性まで意識

図 4-17 高意識と修正

4.4.2. 修正全般と継続的修正

修正の対象は最終状態、つまり「正しいと評価した認識」のみであり、他は重要でない。誤状態の場合、正状態への誤評価と誤評性が生まれる。これは正しい修正への抵抗になる。誤りでも仕方ないという感覚や、曖昧・馬鹿でもいいという感覚も修正への抵抗である。修正に対する抵抗の元になる正評性が問題になり、これを修正する必要がある。修正は抵抗を乗り越えなければならず、簡単ではない。認識と知性は長い時間を掛けて作り上げてきたものであるため、それを修正するのに長い時間がかかる。継続的な修正が必要である。

人間的な認識は誤りであり、現実的・生物的な認識が正しい。人間の生現実化により正しい認識に修正すれば、人間・現実全体で整合する。外部から生息状況を見る事で、生人間・生感情・生満足の理解ができる。人間的で曖昧な満足感は根拠にならず、生息状況を見る必要がある。曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさが必要である。人間的認識による生不満の理解が重要である。

認識・知性の修正対象として自己の理解が重要だが、生自己・真の自己は分かりにくい。自己の生息状況として見るのが分かりやすい。満足感でなく自己の生息状況を見るべきである。現実的な真の満足でなければな

らない。

現実と整合する生感情を理解する事が重要である。感情種類の開放・無認識感情・地味感情などにより、生感情が理解できる。

認識正評性・誤評性は裏表で、正評性の方が問題である。誤った認識正評性は生不満に繋がる。認識満足は認識不満よりも問題が大きい。誤った認識満足は無意味だけでなく害悪である。「誤った認識満足の形」は当解析により理解できる。誤りを修正して生満足化する必要がある。満足は人間の一部分で曖昧であり、満足を見るだけでは生満足は分からない。スポットライト的な閉鎖満足は誤りである。一点で高い満足でなく全体での満足が正しい。無認識感情から見て、すべての満足から一步引き生不満を見るべきである。修正により満足がなくなる不満感も、正状態への誤評性である。元の満足・正評性から誤りであり、そこから修正する必要がある。

開放現実を使う事で明確な正誤評価が可能になる。継続的修正においても、開放現実を使うべきである。人間を生現実化する必要がある。現実と人間を横軸とする認識遷移図により、継続的修正の方法を明確化できる。

誤状態においては、現実に対する認識も正しいとは限らない。離れた認識状態では正状態の交代も難しく、全体的に誤状態の認識になる。しかし現実であれば正誤の評価は明確であり、修正も可能である。

現実と人間はどちらも重要であり、継続的修正においても同時に直す必要がある。人間と現実も開放的に繋がっているので、現実から生人間へ開放的に繋げれば良い。人間の生現実化が必要であり、曖昧な認識を現実により明確化できる。

正しい部分がない状況での修正は困難である。ある程度現実的で正しい部分を作って、そこから修正する必要がある。元々多少現実的で正しい部分がある場合は、そこから修正すればよい。誤った部分を壊すだけでは、正しい推測ができず意味がない。

修正の最初から正しい知性を作成する必要がある。これがないと修正が進まなくなる。明確な現実を理解する事で、現実的部分の作成ができる。現実から人間へ開放した理解が必要である。他者による治療時は、正しい知性を与える事が困難な可能性もある。この場合にも治療者は正しい知性を持ち、治療対象者にも可能な限り正しい知性を与えるべきである。

現実から人間へ開放した正しい部分ができたら、さらに生現実化する事で継続的修正ができる。正しい知性に従って誤った部分を修正していく。正しさの基準を変えて、誤った認識状態の生誤評性まで意識する必要がある。

認識上の安定でなく、生現実上の安定が必要である。安定感は抵抗でしかなく、安定感を求めると修正前に戻ってしまう。整合は認識に基づくものではないので、整合を求めると問題ない。

正しい知性は修正の最初から最後まで変わらない。生現実への出認識遷移や、現実から人間への開放は同じ形である。継続的修正において変わるのは、修正前の知性・認識や、修正中の認識である。正しい知性が不十分だと修正が進まなくなる。出認識遷移が弱い、人間・現実で閉鎖するなどの問題が挙げられる。

正しい認識状態・遷移ができてから、それを元に過去の誤った認識状態を見るべきである。修正前の認識状態・遷移をそのまま高意識にすると、修正が元に戻ってしまう。抵抗により修正後の認識状態・遷移から過去の認識状態を見るのは困難である。抵抗を乗り越えて、常に修正した認識状態・遷移を保つ必要がある。普通から離れた正しい知性と認識を作るべきである。

人間・現実の中間を現実的に理解する事で、人間と現実を開放的に繋げる事ができる。人間・現実の中間にある感覚・行動を生現実化する事が重要である。生物・物理・身体などの人間の現実的側面も、人間と現実の中間にある。感覚・行動においても、曖昧な人間的満足でなく明確な生現実的正しさを見るべきである。

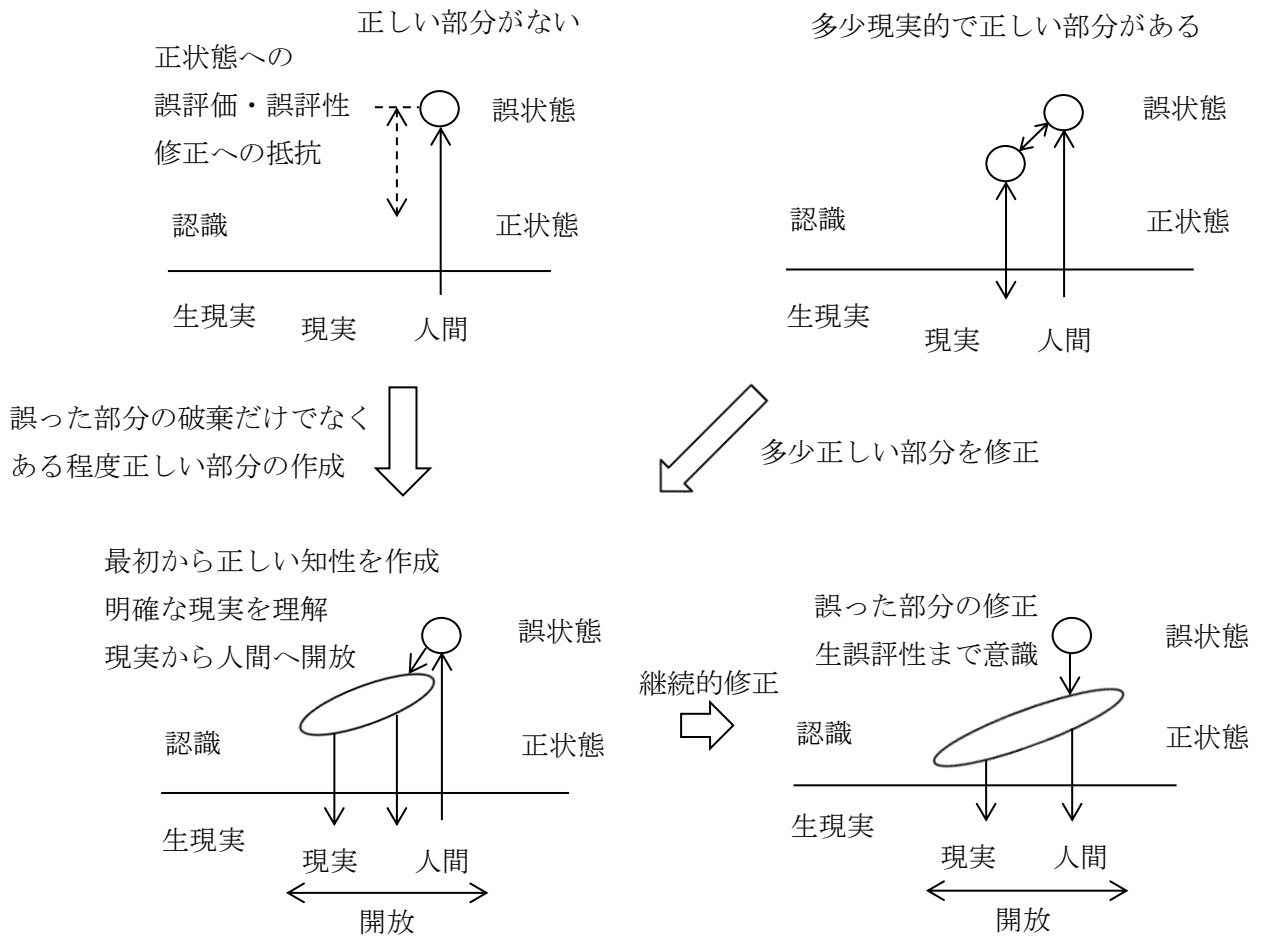
対人関係も生現実化する必要がある、人間的より生物的・動物的な対人関係を持つべきである。人間的・感情的な対人で生不満になるのは誤りである。

無認識感情を見れば、現実を経由せずに生感情が分かるので重要である。認識感情から一步引いて感情を見る必要がある。「囚われない・こだわらない」などが無認識感情に近い。無認識感情を理解するには、認識を止めて感情を捉え、それを理解し直す必要がある。感情が大きくても小さくても人間的なら誤りであり、現実的・生物的でこだわらないようにすべきである。囚われない・こだわらないという事は開放にも繋がる。現実への抵抗が強く現実を受け入れない場合には、現実を経由しない無認識感情が有効である。

自我は曖昧で人間的であり、拘るのは誤りである。人間的な自我よりも現実的な身体を主体として自己認識を形成する必要がある。

修正した認識による生満足の理解が重要である。これにより修正への抵抗を回避できる。開放現実を使う事で、明確に生満足へ繋がる事を理解させる必要がある。例えば「現実的な部屋の整理・掃除」などの単純なものでも効果はある。植物・動物などを使って生物的な感情に繋げるのも有効である。これらも人間的でなく現実的・生物的でなければならない。生満足の理解は重要だが、「新しい満足感」では意味がない。新しい満足感是人間的で、また別の方向に誤ってしまう。

誤った認識による生不満の理解も重要である。誤った認識と生不満を正しく繋げる事で、認識の修正が可能になる。誤った認識と、現実からの曖昧な生不満を繋げる必要がある。修正した認識から見る事で、誤った認識による生不満を理解できる。



人間的で曖昧な満足感でなく、自己の生息状況を見る、人間的満足でなく生現実的正しさ
 開放現実を使い継続的に修正、現実も人間も重要なので同時に直す
 人間の生現実化、人間・現実の中間を生現実化、対人関係も生現実化
 修正した認識による生満足と、誤った認識による生不満を理解
 無認識感情も重要、現実への抵抗が強い場合に有効

図 4-18 継続的修正と人間・現実

満足・不満は人間の一部であり曖昧である。生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見るべきである。人間的な不整合を無くす事で生満足を得られる。人間的な満足・不満の不整合を見て、満足・不満を生現実化するの正しい。生現実に近い最終正状態になれば生満足を得られるが、満足・不満に囚われると正しい方向性を見失う。人間を生現実化して生満足を求める必要がある。

感覚は人間・現実の中間であり、感覚的では十分正しくならない。感覚的に見ると過去の認識のため正しい修正方向が見えなくなる。感覚的でなく現実的検証に感覚を合わせる必要がある。

生満足・生不満の理解においても人間の生現実化が重要である。現実の理解だけでは生満足・生不満を理解できない。人間を生現実化する事で、現実と生満足・生不満を繋げる事ができる。修正の基準点を曖昧な満足でなく明確な現実にする必要がある。ただし修正の目的は生満足である。行動・環境における人間的無駄を無くせば、その分だけ生満足が得られる。

生不満は生息状況の問題であり、現実的に見るとうまく行かない事である。現実的問題は生不満であり、原因は現実でなく人間にある。これらを理解して認識を修正すべきである。

誤った認識による認識満足自体を壊す必要がある。認識満足に不満を追加するだけでは根本的な修正にはならない。現実的検証により認識満足の誤りを見るべきである。満足はあるのに現実的にうまく行かない場合、実際には満足から誤りで、すべてうまく行ってない。人間の生現実化により生満足がある程度見えていれば、認識満足の破壊に耐える事ができる。

誤った認識の区分を変えるのではなく、現実・生物方向に直す必要がある。閉鎖認識の区分を変えても別の閉鎖があるだけで出口はない。現実・生物方向なら開放現実に向かい出口がある。閉鎖的な区分でなく生現実に対する程度で評価する必要がある。開放的理解によりすべての実区分で生満足を得るのが正しい。

他者による修正の場合、常に共有状態を作りながら少しずつ直せば、抵抗は少なくて済む。ただし修正には時間が掛かる。問題が起こらないレベルの抵抗に抑えつつ、できるだけ速やかに修正すべきである。

表面的な問題だけを修正しようとしても効率は上がらない。閉鎖分断のため誤りの種類はバラバラで複雑になる。当解析を使えば根本原因が分かり単純化できる。常に根本原因から修正すべきである。様々な普通の満足も、根本的な共通項を見る事でまとめて理解できる。人間的こだわりやスポットライト的閉鎖満足は共通項になるので、誤りをまとめて理解できる。すべてのこだわりを無くして現実を見れば、バラバラの認識は収束する。

4.4.3. 近辺・遠方と修正

近辺・遠方と現実・人間の構造は似ているが、詳細は大きく異なる。近辺は明確・重要であり、遠方は曖昧・非重要である。重要なのは近辺と遠方の繋がりである。近現実を使って近辺を先に修正し、遠方は近辺との繋がりだけを理解すればよい。近現実開放により、近辺から遠方へ開放する必要がある。広域は近辺を含むので重要である。

近辺・遠方においても、最初から正しい知性を作成する必要がある。これがないと修正が進まなくなる。近辺だけを理解し、遠方を理解しないのは閉鎖的で問題がある。近辺だけでなく、遠方への開放理解も必要である。最初から遠方も見ながら近辺を修正すべきである。修正の最初において、遠方の正しい認識がなくても正しい知性は作っておくべきである。

近辺で正しい部分ができたら、遠方への理解を進める事で継続的修正ができる。正しい知性に従って誤った部分を修正していく。

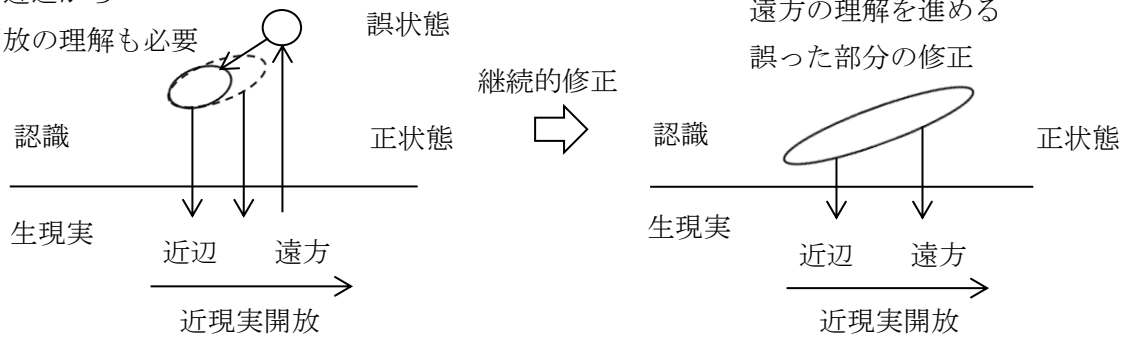
重要な近辺を正しく理解する事で生満足の増加が可能になる。近辺でも感覚・行動の外にある現実まで見る必要がある。近辺においても、認識の修正により生満足を得られる事の理解が重要である。現実的な部屋の整理などは近辺の認識修正として有効な方法である。

近現実から生満足を見るのは比較的容易であり、無認識感情も生満足まで繋がる。これらを使えば修正が容易で高速になる。近現実だけでなく生満足まで繋がらないと修正は難しい。「自然の中で現実を見てこだわりを無くす」という方法であれば、比較的容易に素早い修正ができる。この場合も遠方への開放理解は必要である。「部屋を整理して外との現実的繋がりを見る」という方法も、ある程度容易である。部屋の整理作業が必要な分だけ少し手間がかかる。この場合は近現実開放の理解もできる。

最初から正しい知性を作成

重要な近辺から

遠方開放の理解も必要



近辺は明確・重要、遠方は曖昧・非重要

近辺を先に修正し遠方へ開放、広域は近辺を含むので重要

近現実から生満足・無認識感情を見れば、修正は容易で高速

「自然の中で現実を見てこだわりを無くす」なら比較的容易

図 4-19 継続的修正と近辺・遠方

4.4.4. 時間と修正

時間閉鎖を開放するためには、停止時間系を移動時間系に変換する必要がある。現在は明確・重要であり、過去は曖昧・非重要である。近現実から現在を先に修正し、近現実開放すべきである。近現実から過去・空間遠方へ開放的に理解するのが正しい。修正した現在から過去へ開放すれば、全体を開放した移動時間系にする事ができる。現在において現実的な認識を作り、それを過去に広げるのが正しい。人間的な時間でなく、現実的・物理的な時間を理解する必要がある。

現在・過去においても、最初から正しい知性を作成する必要がある。現在だけを理解し、過去を理解しないのは閉鎖的で問題がある。現在だけでなく、過去への開放理解も必要である。

他者・過去の認識を基礎とするのは、閉鎖・停止時間系で誤りである。他者・過去を基礎から外し、近現実を基礎とする必要がある。

過去に現実的部分があれば、それを現在の現実的部分と開放的に繋げる事ができる。子供期の非知的認識状態などが相当する。ただし非知的認識状態でも現実的な修正は必要である。

過去に起こった生誤評性の結果は修正できない。過去はやり直せないもので仕方のない事であり、重要性は低い。過去がどんなに不幸でも問題はなく、現在から未来の生現実における結果が生正評性であれば良い。重要なのは現在から近い未来であり、遠い未来も分からないので重要でない。

旧来の精神分析は過去を重視する事が多いが、記憶だけを追っても意味はない。記憶は曖昧である上に、過去の重要性も低い。フロイトは様々な部分で子供から思春期までの検討をしているが [13]、大半は記憶を見ているに過ぎない。重要なのは過去の記憶でなく、現在の現実である。現在から過去へ開放的に理解する必要がある。認知療法では過去でなく現在を重視しており [34]、当解析の方向性に近い。

現在の修正が進んだら、過去も修正する必要がある。過去の認識・知性を低意識のままにしておくのも誤りである。放置した過去の誤った認識・知性は修正に対する抵抗になり、現在の修正も進まなくなる。修正した認識状態・遷移を元に、過去の認識状態を修正する必要がある。

抵抗に対応する上でも近現実開放が重要である。現在の認識は修正により正しくできるが、過去の認識は現在より曖昧で正しくしにくい。過去から現在を見ると過去の曖昧さにより修正が難しくなる。修正した現在の認識から過去を見る事で、過去の認識による抵抗に対応できる。過去の低意識を高意識にする際も、現在から過去を見る必要がある。過去の認識は自己の「基礎」ではなく、曖昧な過去の認識でしかない事を理解しなければならない。過去を基礎と見なすと過去の認識が最終誤状態となり、修正が難しくなる。過去の認識も開放した最終正状態にする必要がある。

過去の認識による抵抗に対応する上で、無認識感情も重要である。一步引いて感情・満足を見る必要がある。過去の認識を止めて感情を見れば、その束縛から外れる事ができる。

認識遷移は年単位の時間をかけて形成されたものなので、修正には時間が掛かる。現実的方向への継続した修正が必要である。過去の記憶を修正するより、現在の認識遷移を修正する事が重要である。時間を掛けて現在の認識と知性を作り直す必要がある。

認識遷移の修正は困難だが、その後の行動は困難ではない。修正してしまえば現在・未来において生満足が得られるようになる。認識を修正し続ける必要はあるものの、生満足は以前より容易に得られる。

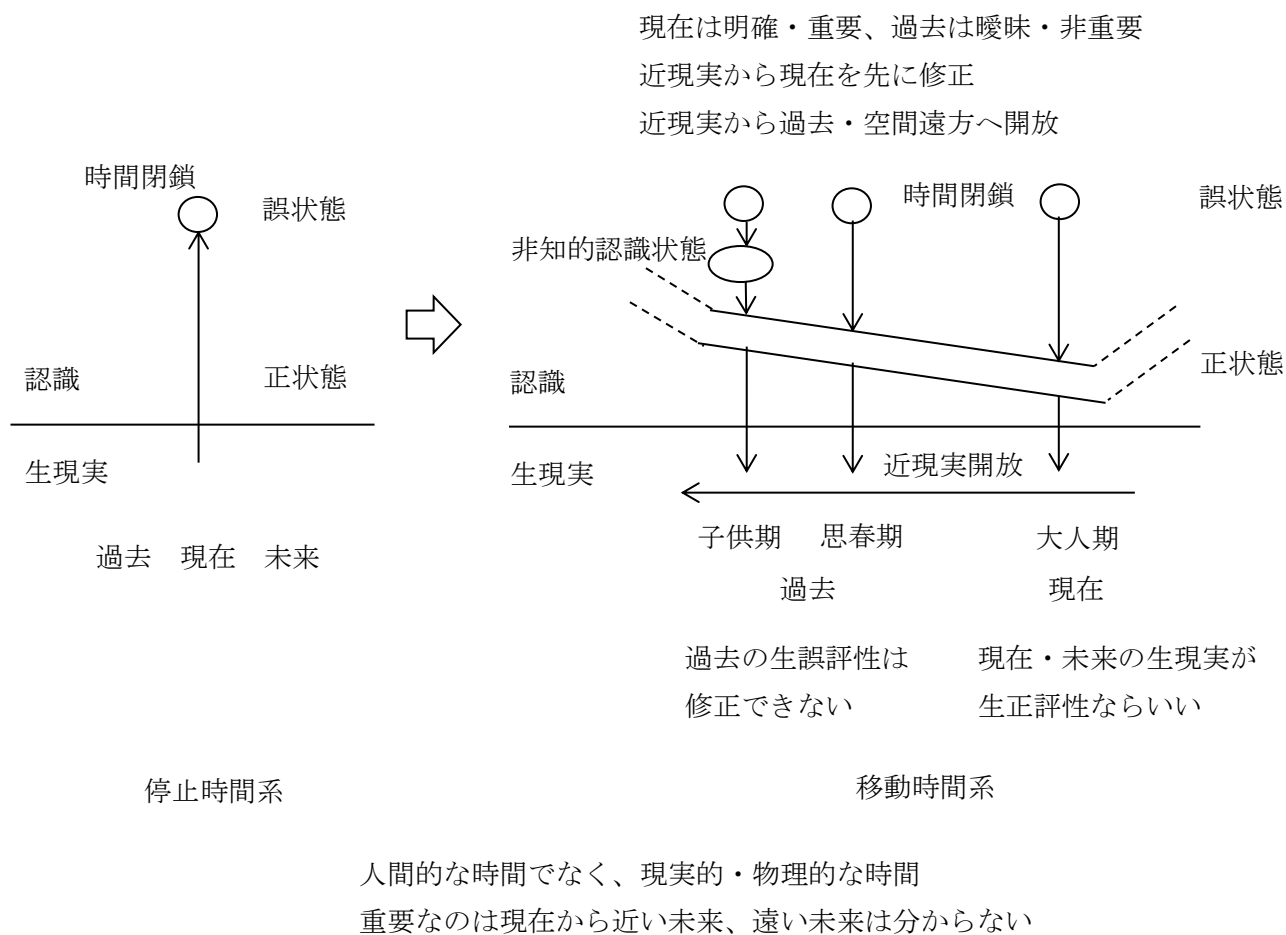


図 4-20 時間と修正

過去の記憶に関しても、開放現実を使い継続的に修正する必要がある。人間を生現実化すべきである。現実と人間を横軸にした認識遷移図により、記憶の現実的修正を解析できる。

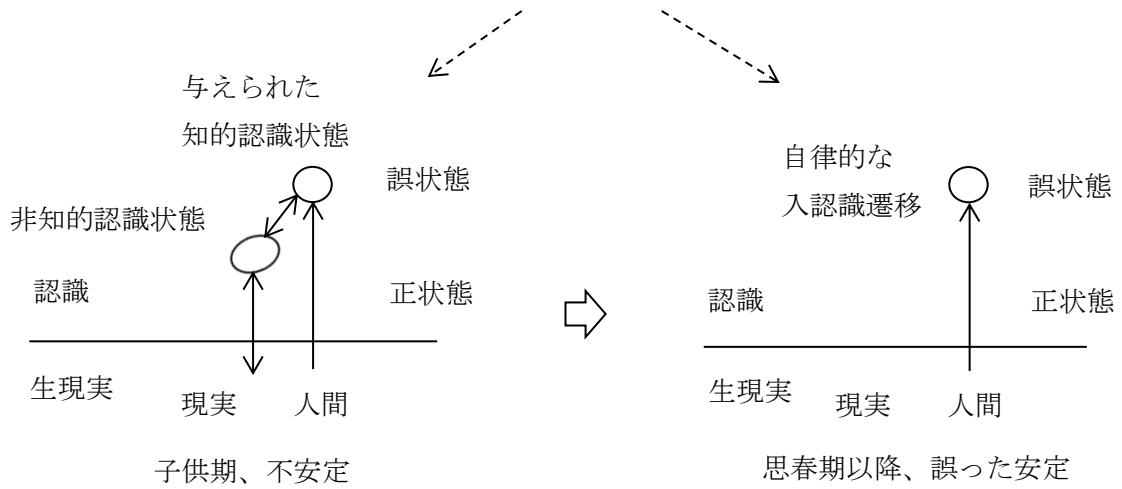
子供期の認識遷移は不安定で、非知的認識状態や、与えられた知的認識状態が混在する。思春期以降に安定した自律的な認識遷移になるが、その際に誤った入認識遷移で安定する可能性がある。認識遷移は様々な認識知性伝達から等しく影響を受ける。認識知性伝達には家族、学校、友人、遊び、文化、本、マスメディアなどがある。特に思春期の悪影響は、長期的に誤った安定を生むので問題が大きい。

現実と人間はどちらも重要であり同時に直す必要がある。時間においても、最初から正しい知性を作成する必要がある。明確な現実を理解し、現実から人間へ開放的に理解を進めるべきである。人間の生現実化が必要である。子供期の非知的認識状態や、過去の記憶の一部に現実的な部分があれば、それを利用すべきである。誤った非現実的な記憶を壊すだけでは、推測ができないので意味がない。正しい現実的部分を作成する必要がある。これにより誤った部分の修正が可能となる。

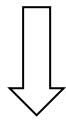
記憶だけを追うのは誤りであり、常に現実を意識する必要がある。認識知性伝達に関しても同様である。過去の明確な現実を理解すべきである。人間・現実の間を生現実化する事で、現実から人間への開放を理解できる。人間・現実の間には、過去の感覚・行動の対象となる現実や、物理的な時間などがある。

睡眠時の夢も記憶とほぼ同じであり、多くは記憶の再生である [37]。覚醒時との違いも大差がない [38]。過去の記憶と同じく、睡眠時の夢に対しても現実を理解する必要がある。フロイトやユングなど夢分析も多く行われているが、夢分析も過去認識の分析でしかない。過去の認識も睡眠時の夢も、根拠になるものではなく、修正の対象でしかない。

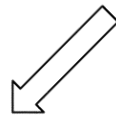
様々な認識知性伝達が等しく影響、特に思春期
 家族、学校、友人、遊び、文化、本、マスメディアなど



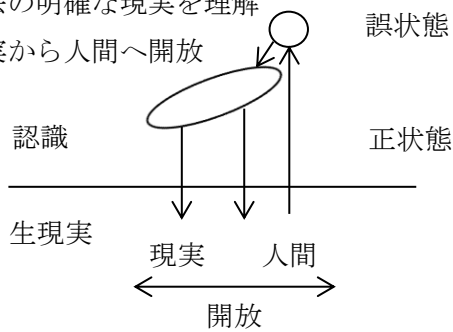
子供期などに正しい
部分があれば利用



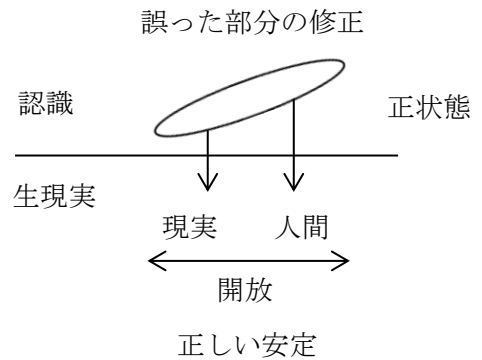
非現実的部分の破棄でなく
現実的部分の作成



最初から正しい知性を作成
過去の明確な現実を理解
現実から人間へ開放



継続的修正



現実も人間も重要なので同時に直す、人間の生現実化、人間・現実の中間を生現実化
 記憶だけを追うのは誤り、常に現実を意識、夢も記憶とほぼ同じ、現実を理解

図 4-21 記憶の継続的修正

4.5. 認識・知性の誤り・問題

4.5.1. 現実の誤り

人間的な最終誤状態を持っている場合、現実の情報は変形される。

最終誤状態の閉鎖枠内であれば、すり替え・妄想・幻覚などの人間的な変形が起こる。特に幻覚は現実が感覚により変形されており、人間的な変形が明らかである。閉鎖枠内の場合は認識正評性を持つ。妄想・幻覚はドーパミン増大との関係が指摘されており [14]、認識正評性がその原因と思われる。

最終誤状態の閉鎖枠外であれば、無視や現実逃避などが起こる。薬物中毒なども現実逃避の一種と言える。閉鎖枠外には認識誤評性が付随する。

閉鎖枠内・外は同時に存在し、認識の対象によって挙動が変わる。薬物中毒は現実逃避とも言えるが、「薬物が正しい」という認識と考えれば閉鎖枠内とも言える。薬物中毒によるドーパミン増大が指摘されており [14]、薬物により強化された認識正評性とも言える。閉鎖枠内にある薬物と、閉鎖枠外にある心身の健康喪失が同時に存在している。

妄想・幻覚・強い現実逃避は問題が大きい。これらの特徴を持つのは統合失調症や薬物中毒である。統合失調症は妄想・幻覚の特徴が強く、認識正評性のためドーパミン抑制の薬物療法が効くと思われる。小さい現実の誤りであれば、疾患と判定されない場合もある。引き籠りは問題行動であり現実逃避と言えるが、精神疾患とは判定されない。

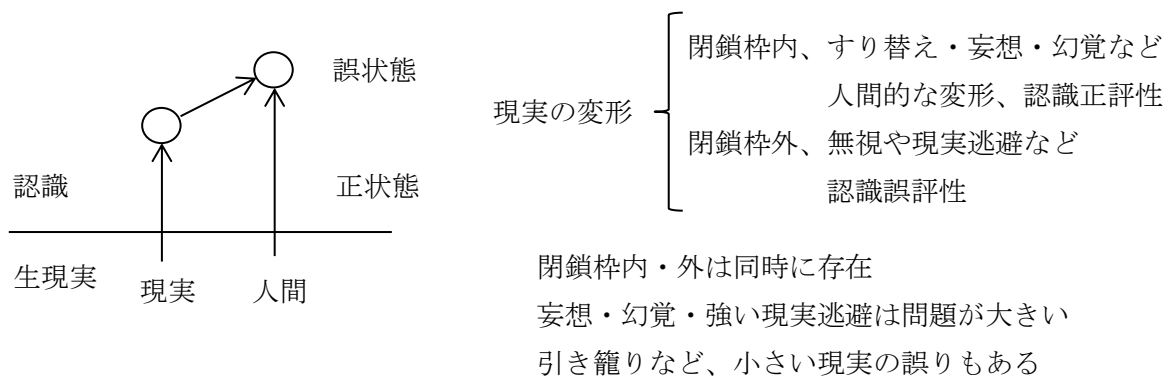
誤状態であれば生誤評性は常に存在する。最終誤状態における生誤評性は認識外で曖昧であり、明確な現実には付随して発生する。被害妄想は生誤評性が認識により変形されたものと言える。認識の誤りが大きければ死の危険がある。これは大きな生誤評性の結果と言える。統合失調症・薬物中毒ともに死の危険性がある。症例が曖昧な状況でも、死の危険性は現実的で明確であり、認識の大きな誤りを明示する。

人間・現実が閉鎖分断しており、現実だけ見るのも不十分である。開放現実から生人間を見て、人間を生現実化する必要がある。妄想・幻覚・強い現実逃避に対して現実を受け入れさせようとしても、人間側が直らないと困難である。人間と現実がある程度繋がるようになれば、現実を受け入れる事も可能になる。現実への抵抗が強く現実を受け入れない場合には、現実を経由しない無認識感情が有効である。

閉鎖分断のため、「人間・感情なし」や「現実なし」に見える。十分現実的に見れば人間の存在は理解できる。生現実化した人間は「人間的な人間」とは異なるものである。

人間は二重人間のため曖昧であり、現実と違い明確な誤りを指摘しにくい。人間側でなく現実側から判断する必要がある。現実に対する幻覚は明確に判別可能だが、人間の発言の意味だと明確な判別ができなくなる。

現実の誤りは明確に判別可能だが、「現実」の根拠については十分な検討が必要である。例えば「母から死ぬと言われた」と患者が言った場合、本当に言われたのか、患者の妄想なのかによって意味が変わってしまう。人間の発言だと記録も残りにくいし意味も曖昧になる。できるだけ現実的な根拠を使って正誤の判別を行うべきである。



生誤評性は常に存在、認識外で曖昧、明確な現実が付随
 誤りが大きければ死の危険、生誤評性の結果
 人間・現実が閉鎖分断、現実だけ見るのも不十分
 開放現実から生人間を見て、人間を生現実化する必要

図 4-22 現実の誤り

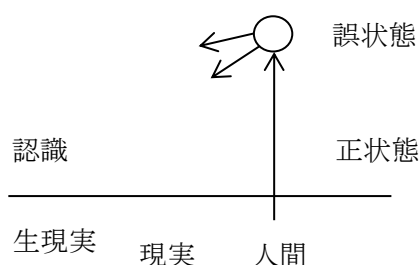
4.5.2. 認識破壊

大うつや双極性障害のうつにおいては、推測や行動のできない特殊な症状が発生する。これらを認識破壊と呼ぶ。最終状態のない認識遷移と見なす事ができる。認知療法における大うつ症状は、「抑うつ者の現実主義」やネガティブ思考により特徴づけられる [34]。これらの特徴は、現実方向への最終状態のない遷移を示している。人間的な最終状態が破壊され、現実的だが最終状態のない状況である。人間は曖昧で現実が明確なため、明確な現実的誤りが見える。

認識破壊においては認識誤評性と生誤評性だけが存在し、認識正評性は存在しない。生誤評性だけでなく、誤った認識誤評性により不満感が強化される。満足感がなく、死の危険に直結する問題の大きい状況である。

芥川龍之介は自分の自殺原因として「ぼんやりした不安」 [39]を挙げており、推測困難と不満を示している。DSM-5でも大うつの特徴として強い抑うつ・無価値観・決断困難などを挙げており [32]、認識破壊と一致している。

認識破壊、大うつ・双極性障害のうつ
 最終状態なし、推測や行動不能
 認識誤評性と生誤評性のみ



認知療法、抑うつ者の現実主義、ネガティブ
 現実方向への最終状態のない遷移を示す
 人間曖昧・現実明確、明確な現実的誤りが見える
 破壊前が現実的でない

図 4-23 認識破壊

双極性障害は破壊前と認識破壊が時間的に周期変動する。大うつでも時間的周期変動があり、この点では双極性障害と変わらない [33]。両者の違いは、大うつの破壊前は疾患でなく、双極性障害の破壊前は疾患であるという点である。大うつの破壊前は疾患とみなされないが、そもそも普通の認識でも十分に現実的ではない。「抑うつ者の現実主義」の問題も、破壊前が現実的でないために起こる。認識破壊の破壊前は常に現実的でない状態と言える。

破壊前と認識破壊は時間的に変化し、特定時間において一方だけが存在する。これは閉鎖枠内・外や最終誤状態の交代などとは異なる特性である。閉鎖枠内・外や交代は特定時間で同時に存在するので、認識破壊と区別できる。

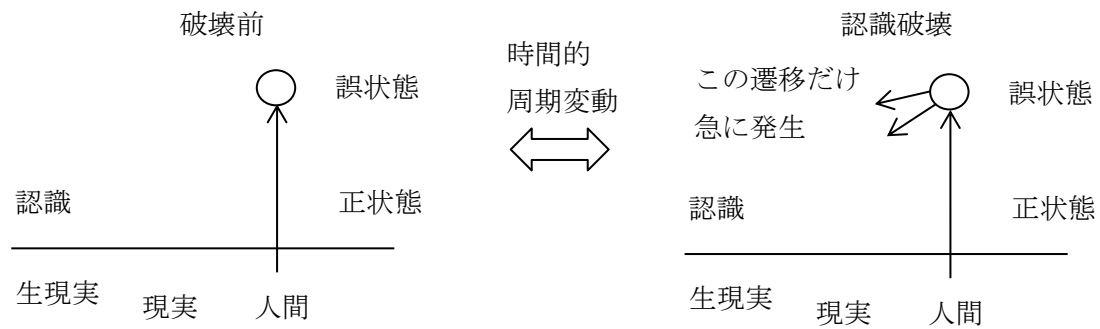
認識破壊は、最終誤状態に認識を破壊する遷移が追加された状況とみなせる。認識破壊の遷移だけなので急に発生する。認識破壊時においても破壊前の構造は引き継がれる。認識破壊を検討するうえで、破壊前の構造が重要になる。認識破壊を修正する際も、認識前の構造に基づいて修正する必要がある。

双極性障害の破壊前である躁病相は、統合失調症などの精神病障害に近い。薬物療法においてもドーパミンを抑える抗精神病薬が用いられる [36]。大うつの破壊前は精神疾患とは言えないが、認識の誤りのため放置すれば再び大うつに陥る可能性がある。大うつの破壊前でも治療は必要である。

認識破壊の治療においては、最終正状態を作ることが重要である。遷移が現実方向に向かっても、最終状態がなければ役に立たない。現実的な最終状態を作り人間へ開放する事で、最終正状態を作成できる。

認識破壊の治療では活動性にも注意する必要がある。何らかの要因で治療が不十分のまま活動性が上がると、自殺行動などに繋がる可能性がある。

認識破壊以外の治療・修正において、正しい認識が不十分なまま現実化すると認識破壊・うつが起こる可能性がある。現実から人間まで開放した正しい認識を作りながら、壊れない範囲で治療・修正する必要がある。認識破壊・うつを回避するには現実的・生物的認識を作り上げる必要があり、簡単ではない。正しい認識ができれば、現実を見ても認識破壊が起こらなくなる。



大うつでも双極性障害でも、時間的周期変動は同じ
 大うつの破壊前は疾患でない、双極性障害は破壊前でも疾患
 破壊前が疾患でなくても現実的でない、普通でも不十分
 認識破壊時も破壊前の構造を引き継ぐ、破壊前の構造が重要

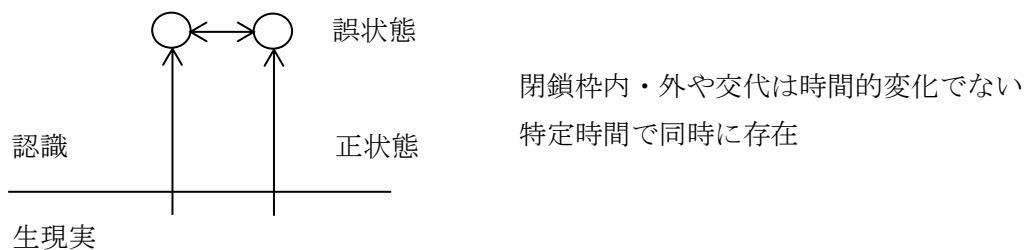


図 4-24 認識破壊の時間的変化

4.5.3. 開放・閉鎖の誤り

閉鎖の状況と誤りの程度を検討する。閉鎖枠が強ければ誤りが大きい。多閉鎖の場合も誤りは大きくなる。これらの状況を満たすのは、統合失調症、双極性障害、解離症など [32]であり、明確な疾患と判別される。特に解離症は多閉鎖であり、人間である自分が物理的存在に反して多閉鎖となる。解離症が多閉鎖の交代なのに対して、演技は仮面であり一時的な認識状態となる。

閉鎖枠が弱く、1つの閉鎖なら誤りは小さい。このような状況は「正常」と見なされる人間にもあり得る。多個人が集まれば簡単に多個人多閉鎖が発生する。多個人多閉鎖も「正常」でも起こり得る。

多閉鎖の交代では、閉鎖により認識状態の距離は遠くなるが、あまり遠いと交代できないのである程度の距離になる。これは解離症のような強い閉鎖でも同様である。多閉鎖で複数の最終誤状態が交代する場合、誤りの程度はどれも同じである。誤りの程度が違えば、最終誤状態同士で距離が生まれ、交代ができなくなる。

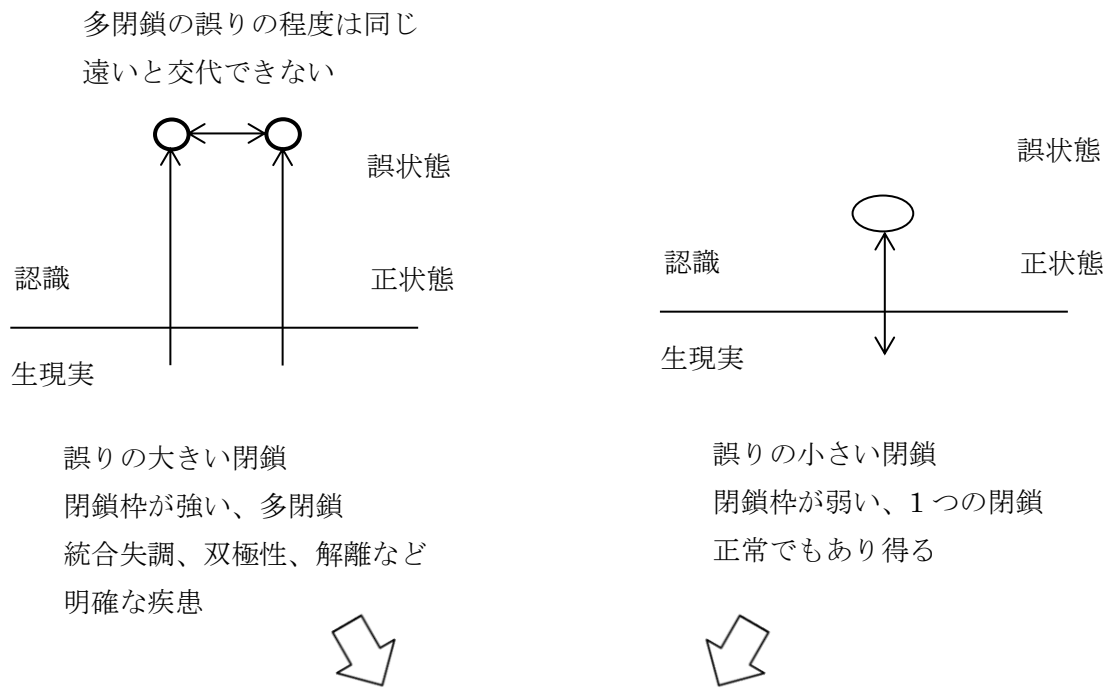
修正の最初から正しい知性を作成し、継続的修正を行うべきである。人間は曖昧なので、人間を見ても開放を理解しにくい。現実を見る事で開放を理解し、現実から生満足へ繋げる必要がある。誤った今までの閉鎖認識に囚われず、新しく作成する開放認識を意識すべきである。

閉鎖枠外に突き抜けても、閉鎖枠が残っていたら閉鎖のままである。突き抜けでなく開放し、閉鎖枠を含めた全体を修正すべきである。突き抜け元でなく突き抜け先が問題であり、閉鎖枠を含めた突き抜け先を修正する必要がある。継続的修正は時間が掛かる。突き抜けで急に分かった気になるのは誤りである。

生現実には開放しているのに、物事を「閉鎖的だ」と見なす事自体が閉鎖した誤りである。どんな閉鎖的に見えるものごとでも、外部との関係は存在する。正しい開放的な理解なら、何らかの外部との関係を見つけ出す事が可能である。

認識遷移において問題なのは最終状態であり、途中状態ではない。特定実区分において閉鎖範囲外なら、問題なのは別実区分にある閉鎖した最終誤状態である。正しいと思っている閉鎖した最終誤状態を修正する必要がある。

閉鎖した最終誤状態は閉鎖枠内において認識正評性を伴う。途中状態は閉鎖枠外となり認識誤評性を伴う。これらは同時に存在し、対象により閉鎖枠内・外が分かれる。正・誤評性の切り替わりは1つの認識状態によるものである。問題は閉鎖した最終誤状態であり、それに伴う閉鎖枠内と認識正評性である。



最初から正しい知性を作成し継続的修正
人間は曖昧で開放を理解しにくい
現実から開放、現実から生満足へ繋げる

図 4-25 開放・閉鎖の誤りと修正

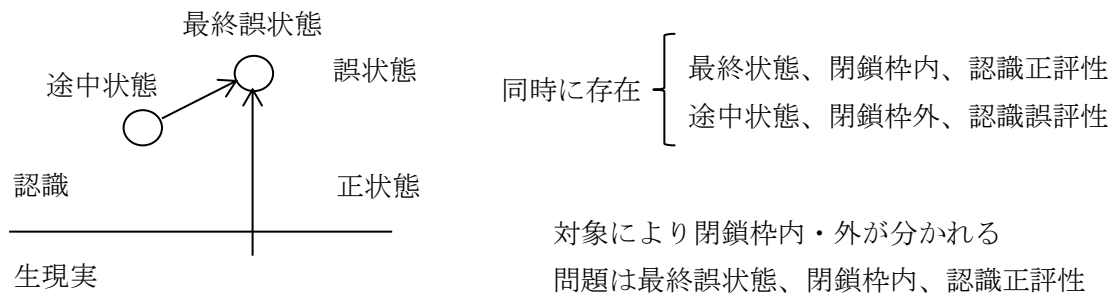


図 4-26 最終・途中状態と閉鎖枠内・外

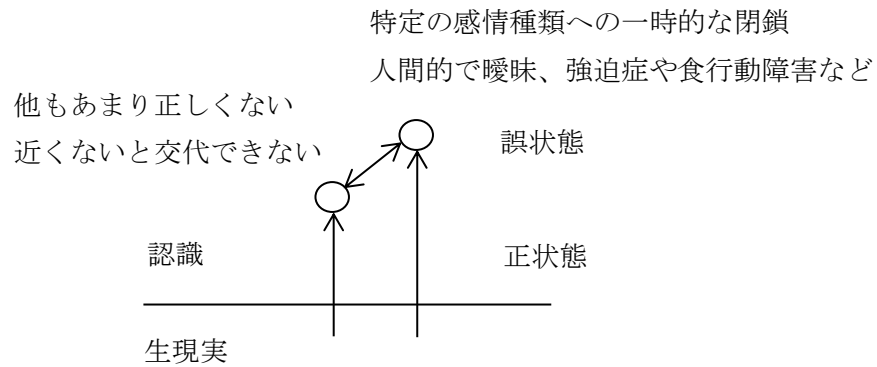
特定の感情種類に対してのみ、一時的に閉鎖が示される場合がある。強迫症や食行動障害 [32]などである。感情に囚われる事自体が人間的・閉鎖的な誤りであり、開放現実から見る必要がある。一時的な閉鎖なので他の最終状態との交代になるが、近くないと交代できないので、他もあまり正しくない。常時強い閉鎖を示す統合失調症などと比べれば誤りは小さい。

特定の感情種類への閉鎖に対して、特定の感覚・行動・満足が付随する。その部分は人間的で曖昧な状態になる。清潔にする事の現実的な意味が曖昧なまま手を洗い続ける、等の行動が発生する。開放現実から見て感情を開放する事で、症状も緩和できる。無認識感情も重要であり、一步引いて感情・満足を見れば開放的に理解できる。

人間・現実の中間にある感覚・行動から生現実化すべきである。「現実の清潔」は他の現実と連動しており、それを元に「清潔感」を修正すれば開放できる。

不満に近い感情種類の方が認識上で不満が大きく問題が大きく見える。不満があれば疾患と言えるが、満足側は疾患と言にくい。満足側も浪費のように問題は存在し、不満側と大差ない。スポットライト的な閉鎖満足は誤りである。一点で高い満足でなく全体での満足が正しい。現実的な真の満足と整合・明確が必要であり、認識を正しくする方向に修正すべきである。

閉鎖分断のため、「人間・感情なし」や「現実なし」に見える。開放現実から見れば人間・感情と現実のつながりは理解できる。



感情に囚われる事自体が人間的・閉鎖的で誤り、開放現実から見る

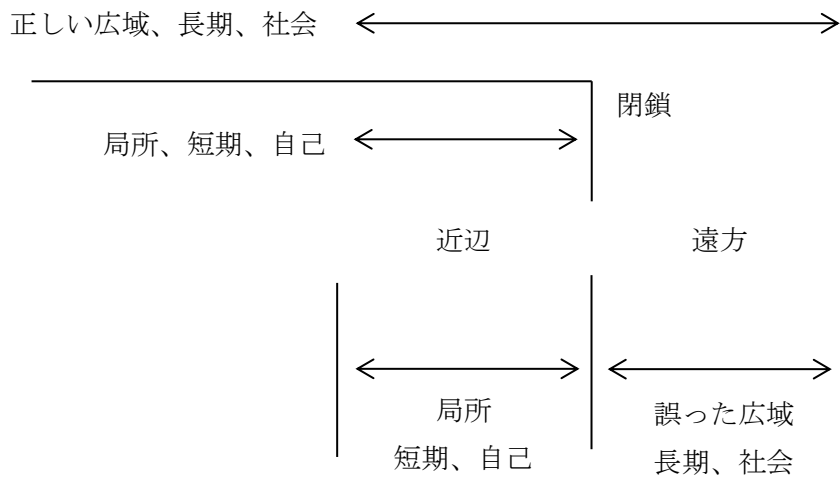
図 4-27 感情種類への閉鎖

4.5.4. 局所広域閉鎖

局所広域閉鎖について再掲する。本来の広域は局所を含み、局所・広域は重なる。近辺は重要で明確であり、局所も広域も近辺を含むので重要である。局所と広域が誤って閉鎖分断すると、広域の主要な部分である遠方だけが見える。結果として遠方が誤って広域に見える。閉鎖により近辺と遠方が遠くなる。明確な近現実から正しい広域を見るべきである。時間における局所・広域は短期・長期であり、空間における局所・広域は自己・社会などである。

本音・建前や不良・善良などの局所広域閉鎖は普通に存在する。普通の人間でも多少は局所広域閉鎖を持っており、修正する必要がある。普通の局所閉鎖であれば自由・個性・自分らしさなどがあり、普通の広域閉鎖であれば成功・愛・社交性などがある。これらを正しいとみなして閉鎖するのが誤りであり、開放した生現実を正しいと評価しなければならない。これらの人間的な一般用語は意味が曖昧であり、正評性を持つと問題になる。

本来の広域は局所を含む、局所・広域は重なる
 近辺は重要で明確、局所も広域も近辺を含むので重要



局所・広域が誤って別々に見える
 近現実から正しい広域を見る
 本音・建前や不良・善良などの閉鎖は普通に存在

図 4-28 局所広域閉鎖

局所広域閉鎖において、空間の自己・社会で検証すると誤りの種類が明確になる。空間近辺側で閉鎖する場合と、空間遠方側で閉鎖する場合に分けられる。どちらかを閉鎖的に正しいと思うために、反対側で問題が生じる。問題が生じる方ではなく、正しいと思っている方が問題の原因である。閉鎖枠内・外は同時に存在し、それに伴う認識正・誤評性も同時に存在する。どちらが強いかは程度の問題である。

空間近辺が閉鎖範囲内の場合、犯罪・引き籠り・浪費などが当てはまる。空間遠方が閉鎖範囲内の場合、仕事による過労などが当てはまる。うつ病の場合、社会に過剰適応する従来型うつと、自己愛が強い新型うつに分けられる [33]。従来型うつの認識破壊前では空間遠方が閉鎖範囲内であり、新型うつの認識破壊前では空間近辺が閉鎖範囲内である。これらは全体的な強い閉鎖に比べると誤りが小さい。

以下の図中において、大うつ時の認識破壊における遷移は省略している。これは遷移だけで、その先の認識状態がない状況である。認識破壊時においても認識破壊前の状態遷移は残っている。

空間近辺の閉鎖である犯罪・引き籠り・浪費・新型うつの違いは、認識破壊・活動性・感情である。新型うつの破壊前と、引き籠りの状況はよく似ている。犯罪は活動性が高くなるが、引き籠りは活動性が低くなる。犯罪は「攻撃」の感情になり、浪費は「所有欲」の感情になる。

犯罪には下落成果と暴力が付随する。これらは時間的な短期閉鎖を示し、空間的な局所閉鎖と連動している。引き籠り・浪費などにも短期閉鎖の傾向がみられる。

局所広域閉鎖に伴い、離反と接近の感情も閉鎖する。犯罪であれば自由を閉鎖的に求め、仕事中毒であれば社交性や優越感を閉鎖的に求める。離反と接近の感情も、全体を開放的に理解する必要がある。正しい広域は近辺から遠方まで開放連続しており、その理解が重要である。誤った過去の認識に囚われず、正しい修正方向を意識する必要がある。

近辺・遠方の閉鎖とも、継続的修正が必要である。最初から正しい知性を作成する必要がある。重要なのは近辺であり、遠方は重要でない。遠方については近辺の関係のみが重要である。ただし遠方についても近辺からの開放の理解は重要であり、修正の最初から必要となる。

明確な近現実から見て正しい広域を理解し、認識を修正する必要がある。近辺での閉鎖も、遠方での閉鎖も、どちらも近現実から修正すべきである。近辺において生満足を得られるようにする事で、修正に対する抵抗を回避できる。開放現実における正しい社会の中の自己を理解できれば、近辺の閉鎖も遠方の閉鎖も修正できる。

近辺・遠方の閉鎖ごとに、継続的修正の手順は異なる。近辺の閉鎖で直すべきは近辺、つまり自己である。開放現実を理解し、最終的に社会適応を目指す必要がある。遠方の閉鎖で直すべきは遠方、つまり誤った社会である。開放現実を理解し、最終的に自己の見直しを目指す必要がある。

現在のうつ治療においても、従来型うつは休養が、新型うつは社会適応が重視されている [33]。従来型うつ病の治療で良く使われる「休養」は、自己の見直しとしての効果があると思われる。

自己・他者の連携における開放した相互生満足を理解する必要がある。相互生満足は満足感でなく生息状況である。閉鎖分断した片方だけの満足は誤りであり、孤立や一体化も誤りである。自己・他者の連携と相互生満足は近辺なので重要である。連携がなければ遠方なので重要でない。

空間近辺への閉鎖において「無理やり外に出す」のは有効ではない。遠方は近辺より理解しにくいので、認識の修正が困難なためである。先に自己と社会の関係を正しく理解させるべきである。

空間の局所・広域で検証したが、時間の局所・広域でも同様な誤りが起こり得る。下落成果は時間近辺への閉鎖で、過度の穏健は空間遠方への閉鎖である。誤りの特性や修正方法は、空間の閉鎖に準ずる。

犯罪は精神疾患とは別のものとして扱われているが、誤りの種類としてみると構造は同じである。薬物中毒やカルト集団などを考えると、そもそも犯罪と精神疾患の区分は明確でない。誤りの種類や修正方法を考える際は、同種のものを見なすべきである。

DSM においては犯罪も素行症などの扱いで区分されている。ここには反社会性と共に衝動や秩序破壊など短期閉鎖の特徴も明示されている [32]。

精神疾患の治療は、カウンセリングやグループセラピーなど、個人単位の対応が行われる。犯罪は社会的な問題であり、対応も検挙や収監など社会構造の中で行われる [35]。犯罪の矯正も社会的に行う必要がある。暴力の矯正としてスポーツが有効であり、暴力衝動を解消しつつ社会性を与える事ができる。

認識破壊の遷移は省略

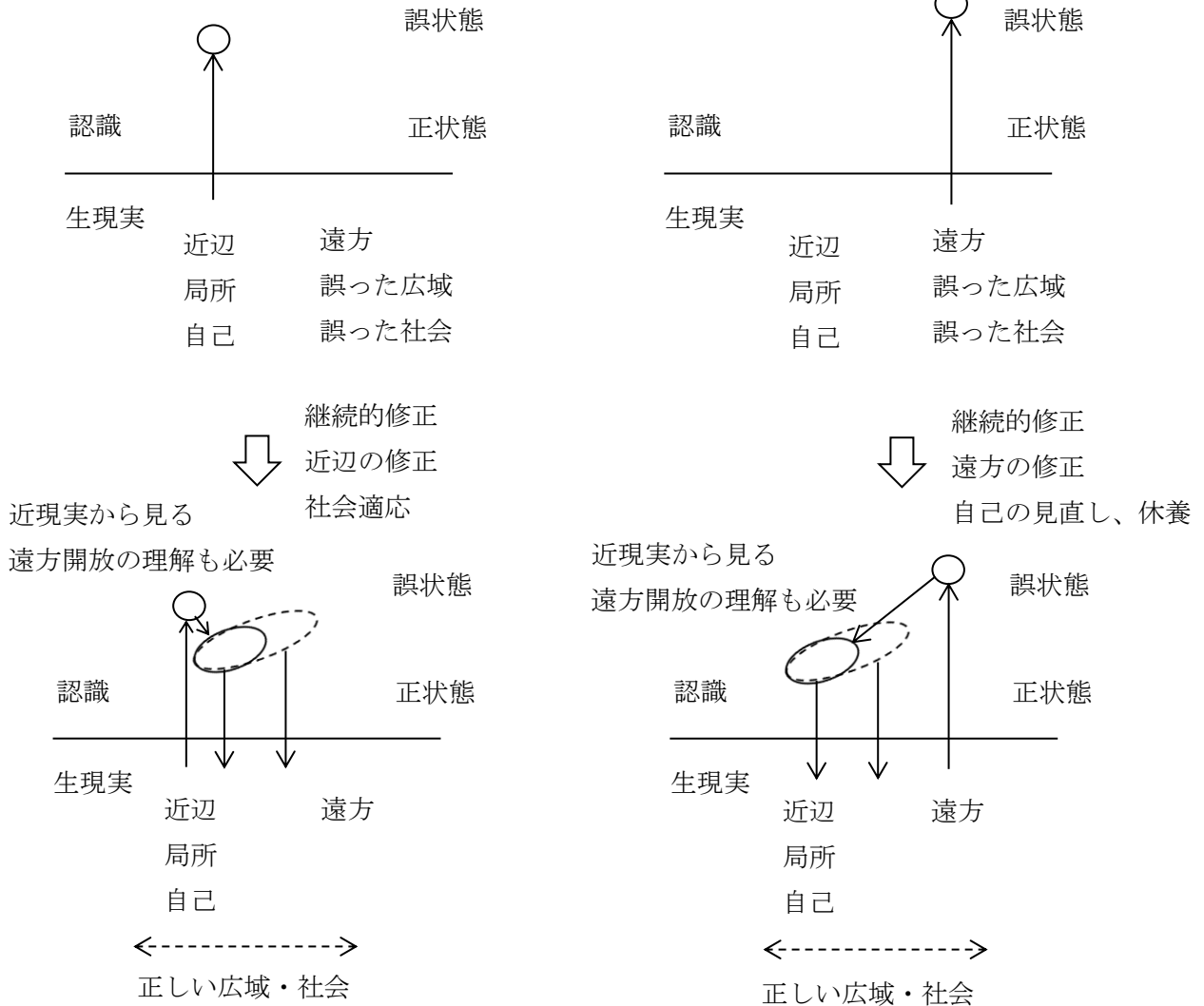
空間近辺への閉鎖

新型うつ、犯罪、引き籠り、浪費など

それぞれの違いは認識破壊・活動性・感情

空間遠方への閉鎖

従来型うつ、過労など



問題が生じる方でなく、正しいと思っている方が原因

最初から正しい知性を作成、近現実から見て正しい広域を理解し修正

近辺・遠方で開放連続、開放現実における社会の中の自己を理解

自己・他者の連携における開放した相互生満足を理解、近辺なので重要

図 4-29 空間の局所広域閉鎖と修正

4.5.5. 感情の問題

感情は二重人間のため曖昧で正誤不明であり、感情に囚われる事自体が人間的・閉鎖的で誤りである。最初から正しい知性を作成し、継続的修正を行うべきである。現実と人間はどちらも重要なので、同時に直す必要

がある。明確な現実を理解し、現実から人間へ開放する事で感情を修正できる。開放現実から生人間を見て、感情を生現実化する必要がある。外部から生息状況を見る事で、生感情・生満足の理解ができる。人間・現実の中間を生現実化する事で、現実と人間の開放を理解できる。

人間的で曖昧な感情・満足は誤りであり、現実的・生物的で明確な感情・満足が正しい。曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさが必要である。人間的認識による生不満の理解が重要である。満足感でなく自己の生息状況を見るべきである。現実的な真の満足でなければならない。

満足・不満は感情の一部であり、感情と同じく囚われる事自体が誤りである。満足・不満を閉鎖分断するのも誤りである。生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見るべきである。人間的な不整合を無くす事で生満足を得られる。人間的な満足・不満の不整合を見て、満足・不満を生現実化するのが正しい。認識を修正して生満足を求める必要がある。認識誤評性より認識正評性の方が問題である。誤った認識満足は無意味だけでなく害悪である。誤りを修正して生満足化する必要がある。無認識感情から見て、すべての満足から一步引き生不満を見るべきである。

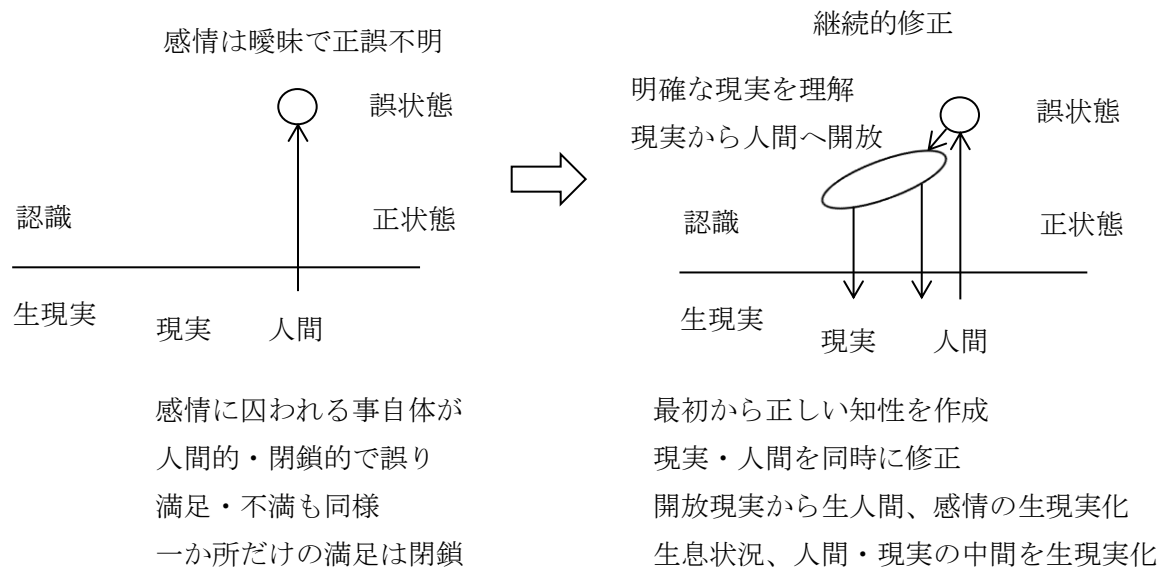
過剰な感情は恒常性において問題があり、誤りと判定できる。一時的に大きな感情や、長期的な感情の偏りなどである。これらは生物として不自然であり、感情に囚われている状況と直結する。

無認識感情も重要であり、一步引いて感情を見る必要がある。感情に対して人間的に囚われている場合は、囚われない・こだわらない事で修正できる。囚われた感情から一步引いて、それに対する生不満を見るべきである。感情が大きくても小さくても人間的なら誤りであり、現実的・生物的でこだわらないようにすべきである。無認識感情は現実を見る事に抵抗がある場合にも利用できる。

無認識感情を見る事で、様々な感情種類を開放的に見る事ができる。これは生物として自然な姿であり、無認識感情は生物的感情とも繋がる。

実区分上の一か所だけの満足は閉鎖であり、人間的なこだわりとも言える。一か所だけでなく全体を見る必要がある。開放と無認識感情により修正すべきである。

精神疾患において感情が問題になる場合も多い。現実や開放・閉鎖の誤りがあれば、そこから正誤判定や修正ができる。強迫症や食行動障害などがこれに当たる。



人間的で曖昧な感情・満足でなく、現実的・生物的で明確な感情・満足
曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさ・生息状況、人間的認識による生不満
認識誤評性より認識正評性の方が問題、誤った満足は無意味、誤りを修正して生満足化
すべての満足から一步引き生不満を見る、無認識感情も重要、囚われない・こだわらない
無認識感情は、感情種類の開放や生物的感情とも繋がる

図 4-30 感情の誤りと修正

現実や開放・閉鎖の誤りが明確でない場合もある。不安症やストレス [32]などがこれに当たる。感情の誤りは二重人間のため正誤自体が曖昧になる。不満側の感情種類が強いために「問題」として捉えられるが、認識感情の誤りなのか、現実に生不満があるのかは定かでない。感情の恒常性から見て、特に不満側の感情が継続していれば疾患と言える。しかし疾患と言っても、その原因は分からない。感情自体が人間的で曖昧なので、感情の問題に対する原因が認識誤りなのかも良く分からない。疾患に対する原因を判定する必要がある。

修正を行う前に、まず感情の正誤判定から行う必要がある。二重人間のため感情自体の正誤判定は容易でない。明確な現実を見て、そこから感情の正誤を判定するべきである。感情の生現実化が必要である。現実から感情を開放的に見る事で、明確な正誤判定が可能となる。「人間的」で曖昧な感情ではなく、知的生物の生感情を見る必要がある。感情に付随する感覚・行動を生現実化する事で、感情を生現実化できる。

高所恐怖症を例にとると、恐怖の感情が正しいかどうかは曖昧である。その際の現実的状况を見た場合、落下する可能性がまったくないのに恐怖を感じていれば誤りである。感情の正誤には柵の強度などが関係し、柵が弱い状態では恐怖を感じるのが正しい。これらの現実を正しく感覚・行動で捉えられれば、感情も修正できる。

恐怖の原因が現実の問題なら、感情でなく現実を直すのが正しい。高所の柵が壊れかかっている状態なら、柵を直すのが正しい。恐怖を止めるのは誤りである。現実を正しく理解しないと、正しい修正方向とは反対に向かう可能性がある。表面はいい家族だが虐待が行われている可能性もある。人間の感情的な話を聞くだけでは真実は分からない。

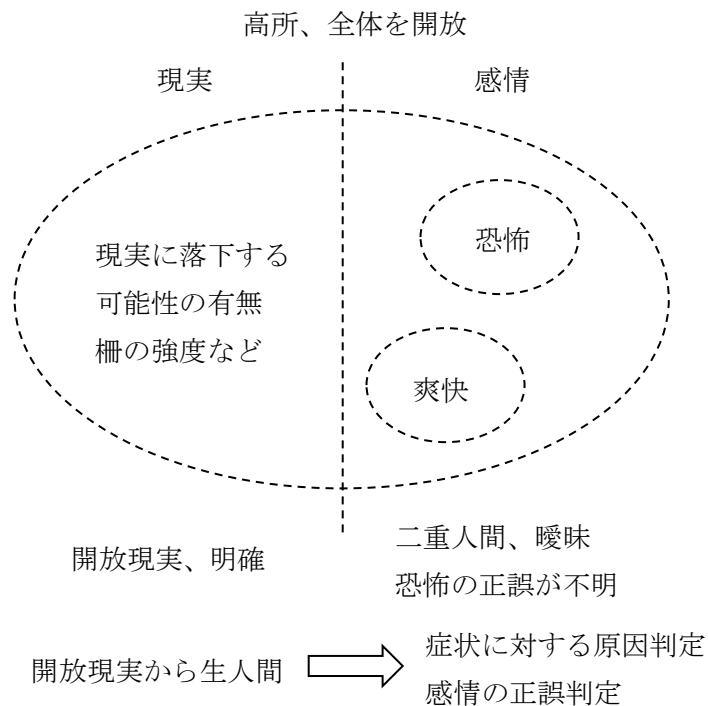
感情には多数の感情種類があり、不満側の感情種類だけを問題にするのは誤りである。高所であれば恐怖感と共に爽快感もあるはずである。これらすべての感情種類を開放的に理解する事で、正しい感情の理解が可能となる。最終正状態がなければ、不満側の感情種類を止めても生満足は得られない。不満側の認識を壊しても、誤評性が増えるだけで意味がない。

誤った不満側の感情種類においても、認識正評性の方が問題である。高所で過剰な恐怖を感じる場合でも、「過剰な恐怖が良い」と感じる部分が問題で、この部分を直す必要がある。先に最終正状態を作った上で、不満側の感情種類における認識正評性を壊すべきである。

感情種類は満足側・不満側・中間に多数存在するため、どんな状況でも「満足だけ」「不満だけ」にはならない。「満足だけ」「不満だけ」なのは閉鎖による誤りである。高所においては爽快感と恐怖感が両方あるのが正しい。

閉鎖が強い場合は、満足側の感情種類でも問題として捉えられる。過食症は満足側の問題と言える。浪費なども感情の問題と言えるが、不満側でないために疾患とは捉えにくい。不満側の方が認識上の不満が大きく問題に「見える」が、生現実上では満足側でも同じ話である。スポットライト的な閉鎖満足は誤りである。一点で高い満足でなく全体での満足が正しい。

地味感情を含むすべての感情を開放的に理解すべきである。諦観・まったり・開き直り・皮肉などの地味感情まで見る必要がある。一步引いて無認識感情を見れば、地味感情も見えて来る。高い所が怖いのは仕方のない部分もあり、諦観まで見えてくれば恐怖感を抑える事もできる。



原因が現実の問題なら、現実を直すのが正しい
 現実とすべての感情種類を開放理解、地味感情まで開放
 生不満側だけが問題でなく、すべての感情種類が問題
 感情種類は多数、「満足だけ」「不満だけ」なのは閉鎖による誤り
 人間的感情でなく知的生物の生感情

図 4-31 感情の正誤判定と感情種類

4.5.6. 過去の感情の問題

PTSD のように、過去の感情が問題になる場合がある。感情は二重人間で曖昧なため、過去の場合も最初に開放現実から正誤判定を行う必要がある。記憶でなく過去の現実を調査し、そこから感情の正誤を見なければならぬ。過去の現実的な問題が現在も続いているなら、それを直すのが正しい。この状況で感情を直すのは誤りである。

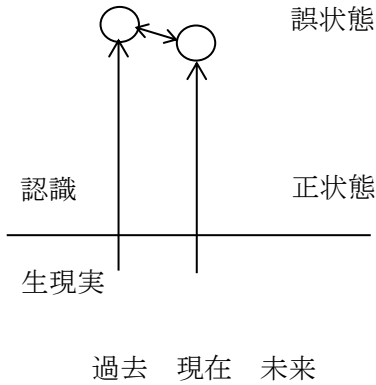
過去の感情が閉鎖して現在の感情と交代すると、突然過去の感情が現れて問題が起こる。フラッシュバックなどがこれに当たる [32]。フラッシュバックが現実感の喪失を伴う場合があるが、現実感の喪失こそが問題の本質である。停止時間系により過去と現在が正しく繋がらないため、過去の感情を正しく処理できない。

閉鎖した過去の感情は、開放現実経由で移動時間系に入れる必要がある。現在から過去へ開放した理解を行う必要がある。人間的な時間ではなく、現実的・物理的な時間を理解しなければならない。過去の感情に囚われる事自体が誤りである。過去の問題が現在にないなら、過去の感情は大きな問題ではない。過去の生不満が修正できなくても重要ではなく、現在・未来で生満足を得られればいい。人間を生現実化する事で、これらを理解できるようになる。

感情は二重人間で曖昧、最初に開放現実から正誤判定
 過去の問題が現在もあるなら、それを直すのが正しい

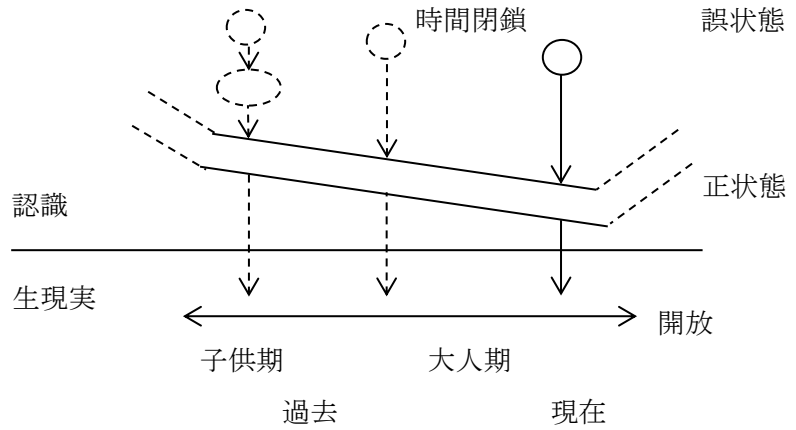


過去の閉鎖と交代
 トラウマなど



停止時間系

過去の感情に囚われる事自体が誤り
 過去の問題が現在にないなら、大きな問題でない
 現在から過去へ開放、人間の生現実化により理解可能



移動時間系

人間的な時間でなく現実的・物理的な時間

過去の生不満は
 修正できない
 重要でない

現在・未来が
 生満足ならいい

図 4-32 過去の感情の誤り

4.6. 精神疾患・問題行動の種類と療法

4.6.1. 精神疾患・問題行動の種類

精神疾患・問題行動の種類と、対応する認識の誤りの種類を以下の表にまとめた。特徴が明確な内容のみを記載している。疾患ごとの主な特徴をまとめたものであり、絶対的なものではない。表に当てはまらない疾患もあり得る。誤りの種類から見た大きな区分を付記した。これも主な特徴によるものであり、絶対的ではない。

表 4-1 精神疾患・問題行動の種類

種類	現実の誤り*1	認識破壊	開放・閉鎖の誤り	感情の問題*2	死の危険	主な薬物療法*3	大区分
統合失調症	大きい		強い閉鎖		あり	ドーパミン減	大きな認識の誤り
解離症	大きい		強い閉鎖、多閉鎖		あり		
物質中毒	大きい		強い閉鎖		あり		
双極性障害	大きい	あり	強い閉鎖		あり	ドーパミン減 セロトニン増	中程度の閉鎖
従来型うつ		あり	局所広域 (広域*4)		あり	セロトニン増	
新型うつ		あり	局所広域 (局所*4)		あり		
犯罪、引き籠り、浪費			局所広域 (局所*4)	多少あり	場合による*5		
強迫症、食行動障害			特定の感情	あり		セロトニン増	
不安症				あり、不満側		セロトニン増	感情の問題*2
トラウマ				あり、過去、不満側		セロトニン増	

*1 大きな現実の誤りや認識破壊は問題が大きい

*2 感情の問題は現実の検証が必要、認識の誤りが原因かどうか不明確、満足・不満も同様

*3 セロトニン増強は現状よりも汎用的に使える可能性、ただし高活動性に注意

*4 正しいと評価した方が問題、認識破壊は破壊前

*5 犯罪は他者の殺害や、他者からの殺害などがあり得る

現実の誤りは明確に理解できるので、これが疾患に現れる場合は問題が大きい。

感情の問題については現実の検証が必要であり、認識の誤りが原因かどうか不明確である。そのため区分として「感情の誤り」と書くのではなく、「感情の問題」としている。満足・不満は感情の一部であり、感情と同じく人間的で曖昧である。

最も重要な問題点として「死の危険」を付記した。死の危険がある場合は大きな問題であると言える。犯罪

の問題が大きい場合、自己・他者の殺害があり得る。精神疾患による死者は自己1人だが、犯罪はより多くの死者が発生し得る。重度の犯罪は重度の精神疾患と同等以上に問題である。

主な薬物療法 [36]も付記した。認識の誤りは常に生誤評性を持つため、セロトニン増強は汎用的に使える。一部で認識正評性のためドーパミン抑制が用いられる。セロトニン増強は薬物中毒・犯罪なども含めて、現状よりも汎用的に使える可能性がある。ただし高活動性になると犯罪などが強化される可能性があるので注意する必要がある。

これらの特徴を使えば、精神疾患の種類を包括的に分析する事ができる。実用時には問診により特徴を数値化するなどの方法が考えられる。帰納的な DSM と異なり演繹的であり、全体の意味は明確になる。人間的な評価から離れており現実的でもある。

正しい認識を修正目標にするのでなく、普通を修正目標にすると修正効率が落ちる。特に、誤りの小さい「中程度の閉鎖」や「感情の問題」において非効率になる。従来型うつでも認識破壊前の状況は、広い意味では「普通」である。過重労働が「普通」の部分的社会は「普通」に存在する。また普通はバラバラなので、どれを修正目標にするかも問題になる。

この表から精神疾患の原因の一因が認識・知性の誤りにある事が推測される。重要なのは精神疾患の特性が、認識・知性の誤りから解析的に示せる事である。ただし精神疾患のすべての原因が認識・知性とは言い切れない。

4.6.2. 精神疾患の療法

主な療法と人間・現実について以下の図にまとめた。療法には原因の治療と症状の治療があり、両者にまたがる手法として精神疾患の分析がある。薬物療法は現実的であるが、症状の治療でしかなく原因は治療できない。原因の治療と併せて行うべきである。

精神分析と認知行動療法と当解析は、原因となる認識・知性の修正という意味では同じである。一方で精神分析は人間的で、当解析は現実的であり、この点は大きく違う。認知行動療法は認知心理学や行動心理学に基づいており中間的である。

認知行動療法では、現実暴露が行われる場合もあるが、人間的な瞑想が行われる場合もある [34]。認知行動療法で使われる CBT モデルには、知性・認識・感情・感覚・行動相当の内容がある [34]が整理されていない。

認知療法においても認識・認識遷移の解析はしているが不十分であり、現実的解析が必要である。また症状を直すだけでなく根本的な認識遷移の修正が必要である。例えば自己監視法においては、患者が自作した非適応思考の記録を元に解析する [16]。これは状況・感情・自動思考を記録した用紙であり、非適応思考すなわち問題となる思考のみを解析している。状況の内容は現実に近いが、現実と明示されている訳ではない。

精神医学は精神分析・DSM・薬物療法という広い領域にまたがっているが、それぞれがバラバラで繋がらない。特に精神分析はその内部でもバラバラである。DSM と薬物療法の関係も対処療法的なものしかない。また精神医学と認知行動療法も繋がらない。

精神分析は精神医学の出発点であり歴史的な意味は大きいですが、現在から見れば古い手法である。本来医学は自然科学に近く現実的な学問である。精神分析だけが特筆して人間的で他の医学と合わない。

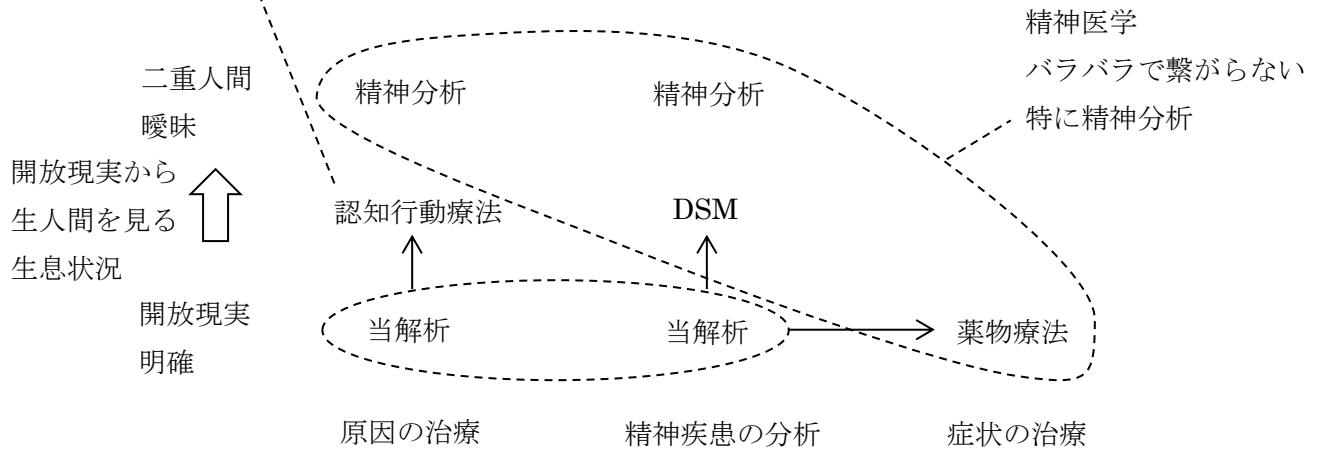
当解析は精神分析の総合性を代替し、全体が繋がりが解析能力も高い。開放現実から生人間・生息状況を見る事で、二重人間の曖昧さを回避できる。現実的という意味では、精神分析より当解析の方が本来の医学に合う。本来の医学的問題は、現実的的症状と、現実的的症状に対する認識である。これは身体的疾患でも精神疾患でも同

じである。

当解析は精神疾患だけでなく、神経・犯罪・教育心理学まで繋げる事が可能である。当解析では犯罪と精神疾患を区別せず、教育心理学の「メタ認知」 [17]も知性として取り込む事ができる。

認知行動療法、現実暴露もあるが、人間的な瞑想もある

CBT モデル、知性・認識・感情・感覚・行動相当だが、整理されていない



精神分析は精神医学の出発点だが古い、本来の医学は現実的
当解析は精神分析の総合性を代替、全体が繋がり解析能力も高い
現実的という意味では、精神分析より当解析の方が本来の医学に合う
別分野まで開放的に繋がる、神経・犯罪・教育心理学まで

図 4-33 精神疾患の療法

5. 社会

5.1. 行動実規則化と共同行動

5.1.1. 行動実規則化

行動自体を実規則化する行動実規則化について、今までの解析を再掲する。

人間の遺伝的内規則は変更できないが、遺伝的外規則は変更できる。人間の外規則は行動の規則である。遺伝的外規則を実規則化に変更する際に、全体として生満足が増加する必要がある。これには暴力の抑止などが挙げられる。

正しい認識により生満足を増加させなければならない。行動の外規則を変えても遺伝が変わる事はない。実規則化は認識上の規則でなく、生現実上の規則である。正しい実規則化を認識するには、人間の生現実化・生物化・明確化が必要である。行動は人間・現実の中間なので、感情などより生現実化しやすい。感覚・行動を経由して人間全体を生現実化すべきである。

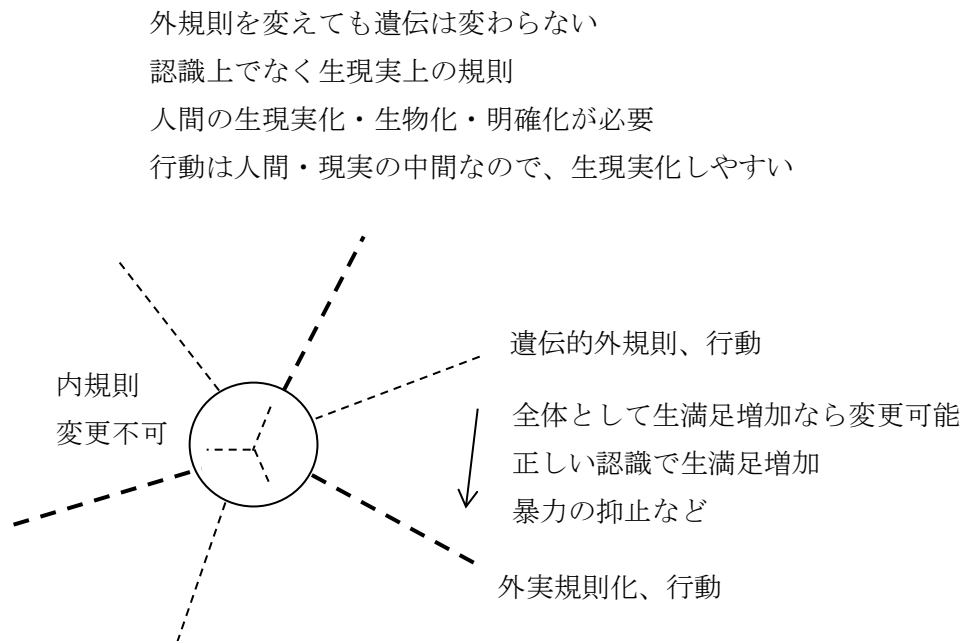


図 5-1 外実規則化と行動

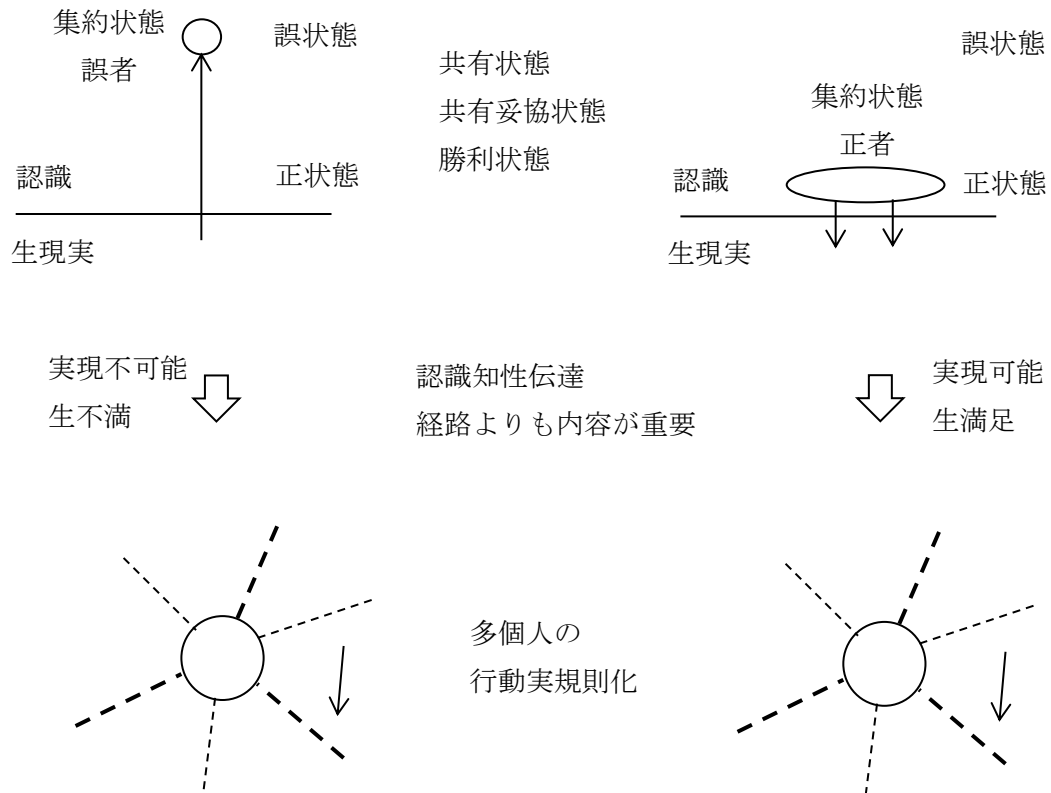
集約状態と認識知性伝達により、多個人の行動実規則化を実現できる。認識知性伝達の経路よりも内容が重要であり、それにより行動実規則化の結果も変化する。

集約状態には共有状態・共有妥協状態・勝利状態があり、集約の状況により集約状態は異なるものとなる。集約状態が正状態となる正者の場合もあり、誤状態となる誤者の場合もある。

集約状態が認識知性伝達された後に実規則化が行われる。集約状態が正状態であれば実規則化は実現可能で、結果として生満足が得られる。集約状態が誤状態なら実規則化は実現不可能だったり、無理に実現しても生不満になったりする。人間は二重人間のため曖昧なので、実規則化の中でも特に行動実規則化の問題が大きい。

遺伝的外規則より生満足が低ければ実規則化を行う意味はない。

認識知性伝達の経路が人工物などの明確なもので、完全に同一の情報が伝達されたとしても、その通りの実規則化にはならない。重要なのは伝達される認識の内容である。認識が生現実に対して正しければ生満足になり、誤りなら生不満になる。これは通常認識と同じ原則である。



重要なのは認識の生現実への正しさ、そこから生満足・生不満

図 5-2 集約状態と認識知性伝達と行動実規則化

5.1.2. 共同行動と参加・不参加

多個人が空間で一体的な行動を取る事を共同行動と呼ぶ。空間の外規則の一種であり、時間的には局所の短期行動も含む。共同行動は多個人連携の一種である。多個人連携は共同行動より意味が広く、認識の共有や遠い連携なども含まれる。共同行動には環境との相互影響も含まれる。集団は長期的な共同行動であり、集団内に階層的な共同行動がある場合もある。

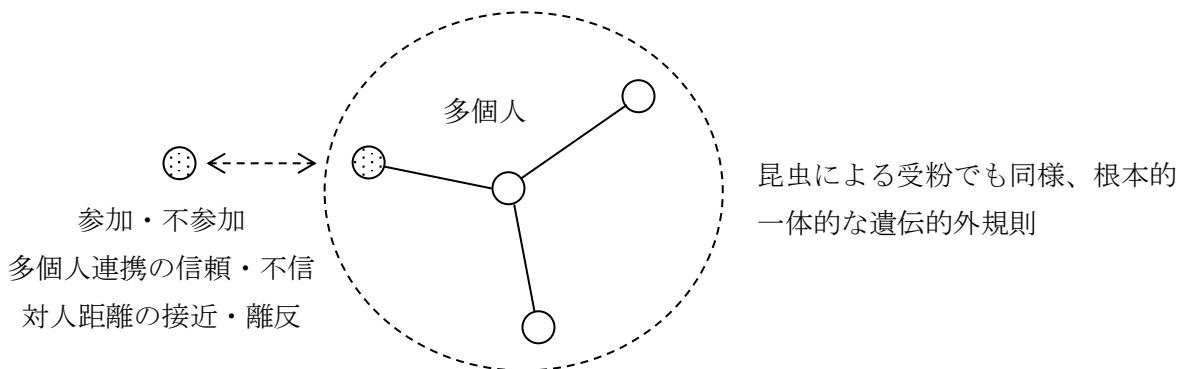
多個人連携では信頼・不信が重要であり、それにより対人距離の接近・離反が生じる。共同行動に対しては接近すると参加、離反すると不参加となる。参加・不参加による共同行動の成立・不成立が重要である。

昆虫が蜜を吸う事で植物を受粉させる、という事象も共同行動と類似している。これは一体的な遺伝的外規則であり、蜜による昆虫の参加が重要である。他種同士の生物でも成立するという意味で、共同行動は根本的な事象である。

人間以外の短期共同行動は、群れの中か、他種同士の場合が多い。群れの外は敵対的なので共同行動をしにくい。他種の短期共同行動には、昆虫受粉・共同警戒・寄生虫除去などが挙げられる。人間は同種・集団外での短期共同行動が多く特殊であり、古代より現代社会の方が多。

短期共同行動をまとめて見る事もできる。長期的顧客や昆虫受粉の種の固定化などが挙げられる。ただしこれらの場合も個体による毎回の参加チェックは同じであり、長期共同行動になる訳ではない。

共同行動、空間で一体的な行動、短期行動も含む
 多個人の一体的な外規則、多個人連携の一種
 集団は長期的な共同行動、階層的な共同行動もある
 人間は同種・集団外での短期共同行動が多く特殊



一体的でない外規則もある、争いなど
 一体的なので参加・不参加が重要
 参加・不参加による共同行動の成立・不成立

図 5-3 共同行動と参加・不参加

遺伝的外規則でも実規則化でも、行動の目的は生満足である。共同行動の参加時も、不参加より生満足が増加しなければならない。これを参加生満足と呼ぶ。社会的義務も自発的な生満足で評価され、生満足が得られなければ社会的義務に従う必要はない。全員が参加生満足を持てば相互生満足になり、共同行動が成立する。

遺伝的共同行動への参加は自発的に決まり、参加自体が生満足の要因となる。実規則化共同行動では、参加自体が生満足の要因ではない。参加する事で遺伝的外規則より生満足が増加しなければならない。

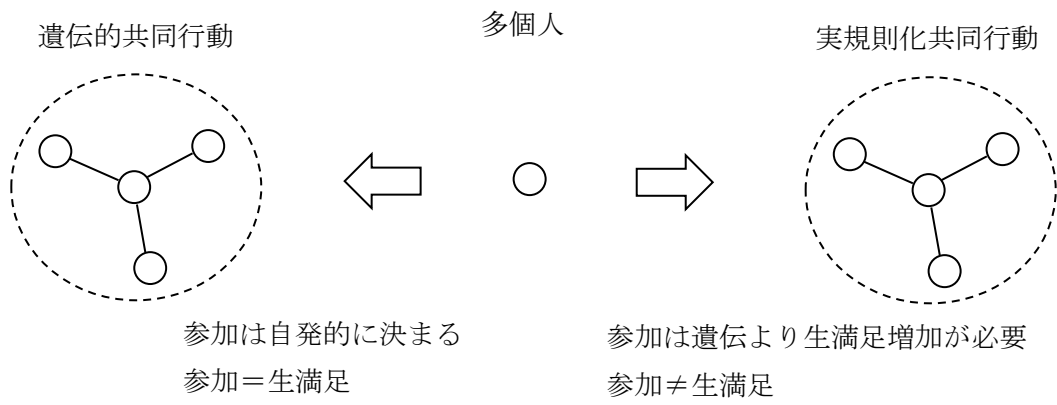
人間は優れた実規則化により、遺伝的共同行動を超える事が可能である。実規則化は遺伝的規則よりも全体として生満足が増加しなければならない。生現実の正しい認識と、現実的で明確な実規則化が必要である。

人間でも、例えば「親が子供をあやす」という行動は遺伝的共同行動である。親は自発的に子供をあやす事で生満足を得るのであり、それ以上の生満足を求めている訳ではない。

争いなどのように、一体的でない多個人の外規則も存在する。共同行動は一体的なので、参加・不参加が重要になる。アリなどの真社会性では不参加が存在しないが、人間の外規則はこれとは異なる。参加・不参加による共同行動の成立・不成立を正しく理解する必要がある。

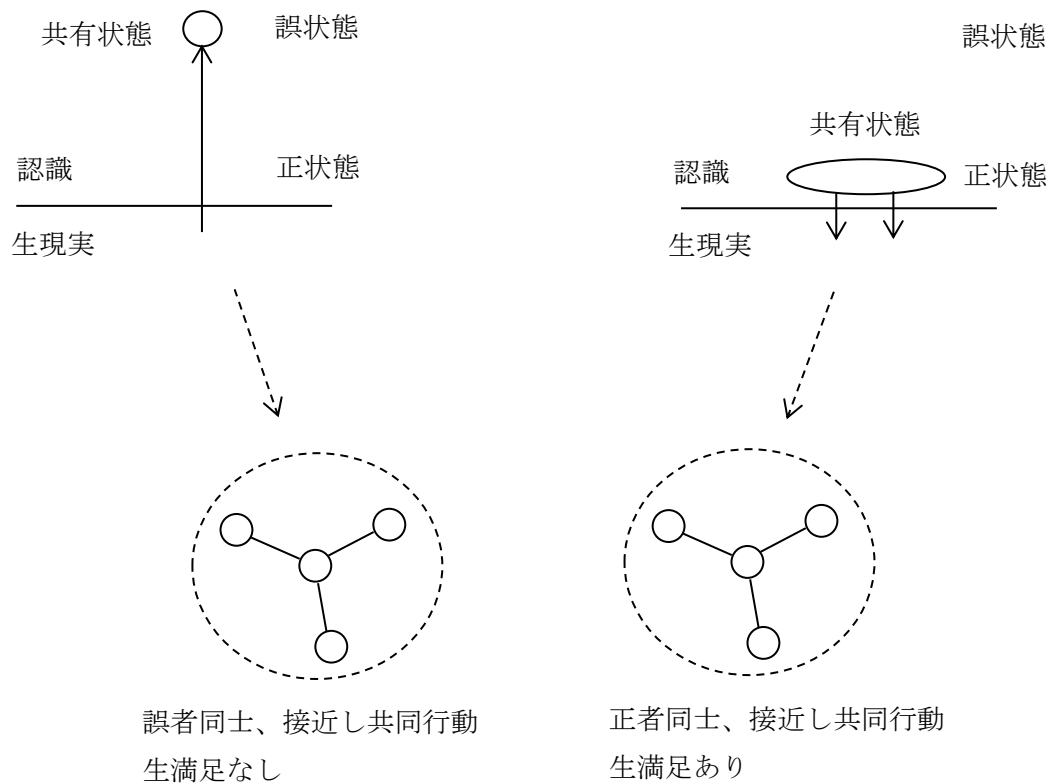
共有状態の正・誤者同士が接近し、共同行動をする場合を考える。正者同士であれば生満足はあるが、誤者同士には生満足はない。共同行動だけを見ても構造は同じで、どちらが正者か誤者か分からない。認識の内容

を現実的に見る事が重要である。認識を一致させて共同行動をするかどうかでなく、その認識が生現実に対して正しいかどうかを見る必要がある。人間の生現実化により正しく正者を判別できる。



遺伝的外規則でも実規則化でも、参加には生満足が必要、参加生満足
全員が参加生満足を持てば相互生満足
人間は優れた実規則化により遺伝的共同行動を超える事が可能

図 5-4 共同行動と実規則化と参加生満足



共同行動だけ見ても、どちらが正者か分からない
認識の内容を現実的に見る必要、人間の生現実化

図 5-5 共同行動と正・誤者

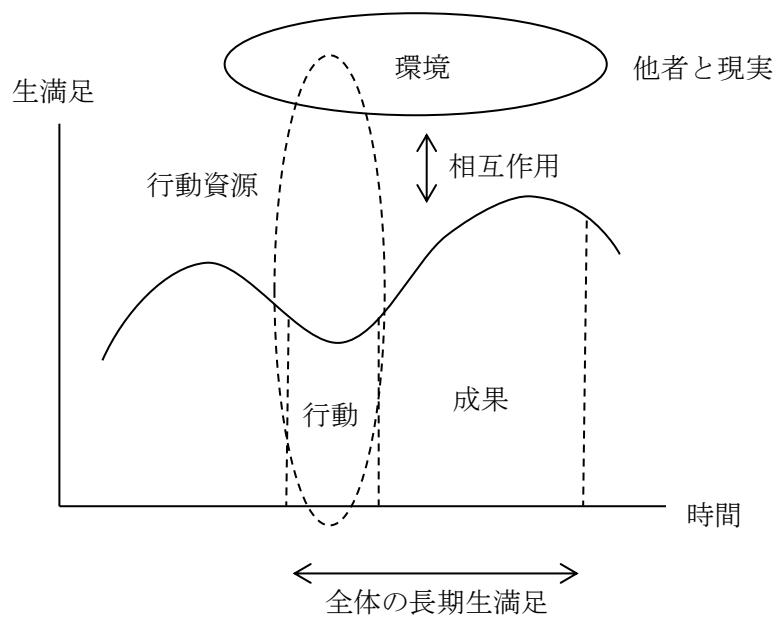
5.1.3. 行動資源と需要・供給

行動成立に必要な生現実の一部分を、行動資源と呼ぶ。行動資源は自分の行動と環境の一部である。行動資源を使った行動により、行動から成果までの長期生満足を求める必要がある。行動資源の確保が困難である場合は、生満足が減少する。行動によりそれ以上の生満足増加が必要になる。環境における行動資源の確保が難しい状況は普通にあり得る。自分の行動に関しても、他の行動をしていれば確保が困難になる。

行動資源の確保は、他者との相互作用の中で決まる。行動資源の需要が大きく供給が少なければ、確保が困難になる。これにより生満足が減少する。需要・供給は行動資源から存在し、貨幣だけのものではない。社会的構造の中では基本的な事象である。行動成立により生満足が増加しても、需給の問題による生満足減少の方が大きければ意味がない。

人間的で曖昧な行動資源でなく、開放現実から見た明確な行動資源を理解する必要がある。行動資源は生満足を得るための手段であり、それ自体が生満足ではない。希少な行動資源自体が幸福であるかのような人間的な評価をすると、生満足を得る事ができなくなる。人間を生現実化すればこのような誤りを回避できる。行動資源における人間的無駄を無くせば、その分だけ生満足が得られる。

自分の行動を含め、行動資源は限られている。最小の行動資源で最大の生満足を求める必要がある。行動資源に対して最も効率の良い行動最適化をすべきである。行動資源の大小は必ずしも行動最適化に直結しない。行動時間が短くても最大効率とは限らないし、行動資源を大量に使っても最大効率とは限らない。



行動資源は行動成立に必要な生現実の一部
 自己の行動と環境の一部、生満足大なら重要性大
 行動資源の確保困難なら生満足減少、それ以上の生満足増加が必要
 需要大・供給小なら確保困難で生満足減少、需要・供給は行動資源から存在
 最小の行動資源で最大の生満足、最大効率の行動最適化

図 5-6 行動資源と需要・供給

5.1.4. 参加生満足

多個人は生命体として別々であり、感情や満足も別々である。共同行動により行動を一体化しても、満足は一体化しない。共同行動に参加するには全員の参加生満足が必要である。共同行動を適切に行うためには、参加者全員の長期生満足を増加させる必要がある。

参加生満足の対象は長期生満足である。将来の成果まで含めて共同行動の生満足を見て、行動最適化を行う必要がある。全員の参加生満足ができて初めて、全員が満足を得られるという意味での「一体感」が生じる。多個人の目的は全体の生満足増加ではなく、個々の生満足増加である。自分だけ不満になるのでは共同行動に参加する意味はない。

共同行動への参加者の行動を行動資源と見ると、共同行動に対する需給の問題が発生する。需要が大きく供給が少なければ、参加者を確保する事が困難になる。多個人を共同行動に参加させるためには、全員の参加生満足が必要である。もし競合する他の共同行動にも参加可能な個人であれば、他の共同行動よりも生満足が増加しなければならない。これは他の共同行動との選択になる。希少な個人を確保する必要があるため、それ以外の個人は生満足が減少する。

共同行動を改善するには、参加者全員の生満足を増加させる必要がある。一部の参加者だけの生満足が増加しても改善とは言えない。

多個人の生満足の増減が同期しても、全員の生満足が減少したら意味がない。それでは誰も共同行動に参加

しなくなる。生満足が増加してこそ共同行動の意味があり、参加者全員の生満足増加が必要である。

共同行動や参加生満足も生現実化する必要がある。満足は二重人間のため曖昧で分かりにくく、現実から見るべきである。時間や労力や成果の質・量などが判断基準となる。

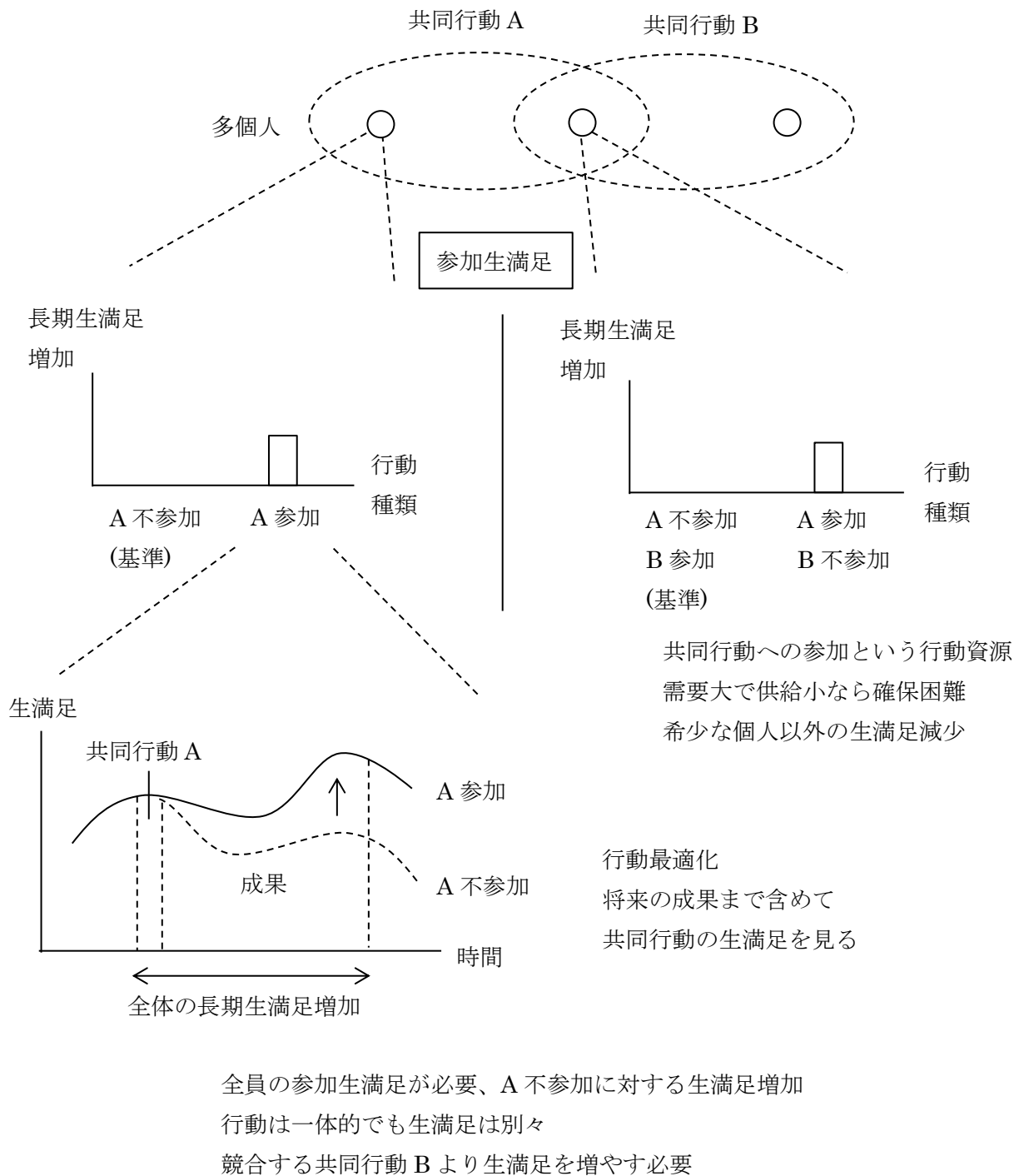


図 5-7 共同行動と参加生満足

5.1.5. 不参加と怠慢

全員の参加生満足がないなら、多数にとって最善の共同行動でも参加生満足がない個人が発生する。その場

合は最善の共同行動と言う意味がなくなる。共同行動に参加しても最低限の生満足が得られれば良くなり、「怠慢」が発生する。怠慢により、生満足減少を抑える事が可能になる。生満足が減少するなら、不参加も怠慢も個人として適切な行動である。

共同行動への参加が強制的である場合もある。その場合も怠慢は可能であり、不参加と似た結果になる。独裁的な共同行動では、他の参加者の怠慢が発生し、最善の行動はできなくなる。怠慢を考慮すれば、共同行動への強制参加は絶対的なものではない。多個人は真社会性でなく、別の生命体であるため、強制参加は絶対的にならない。

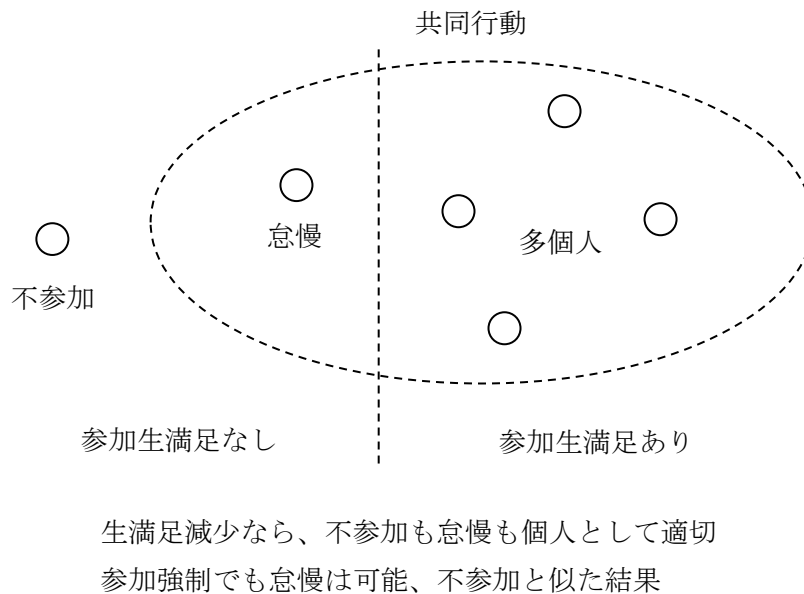


図 5-8 不参加と怠慢

5.1.6. 規定共同行動

多個人において、一体的でないバラバラの行動の規則を検討する。遺伝的規則であれば、共通の自発的感情に基づき規則的な行動が行われる。行動実規則化の場合は、遺伝のように共通の基盤はない。バラバラの行動が同一形態であるためには、多個人が同じ実規則化を行う必要がある。一体的でない行動であっても、同一形態の行動実規則化を行うという意味では一体的になる。これを規定する共同行動が必要である。

多個人の行動実規則化の形態を規定する共同行動を、規定共同行動と呼ぶ。規定共同行動は、行動実規則化の形態を共有する特殊な実規則化共同行動である。共同行動なので全員の参加生満足が必要である。

一体的な多個人の実規則化共同行動も、規定共同行動を含んでいると見なす事ができる。すべての多個人行動実規則化において、規定共同行動が存在する。

規定共同行動は生現実の規則であり、認識上の規則ではない。認識知性伝達に基づき規定が行われる場合でも、実規則化を介する必要がある。

政府を例にとると、立法は規定共同行動であり、行政は規定でない共同行動となる。ただし立法が規定的でない場合や、行政が規定的な場合もある。

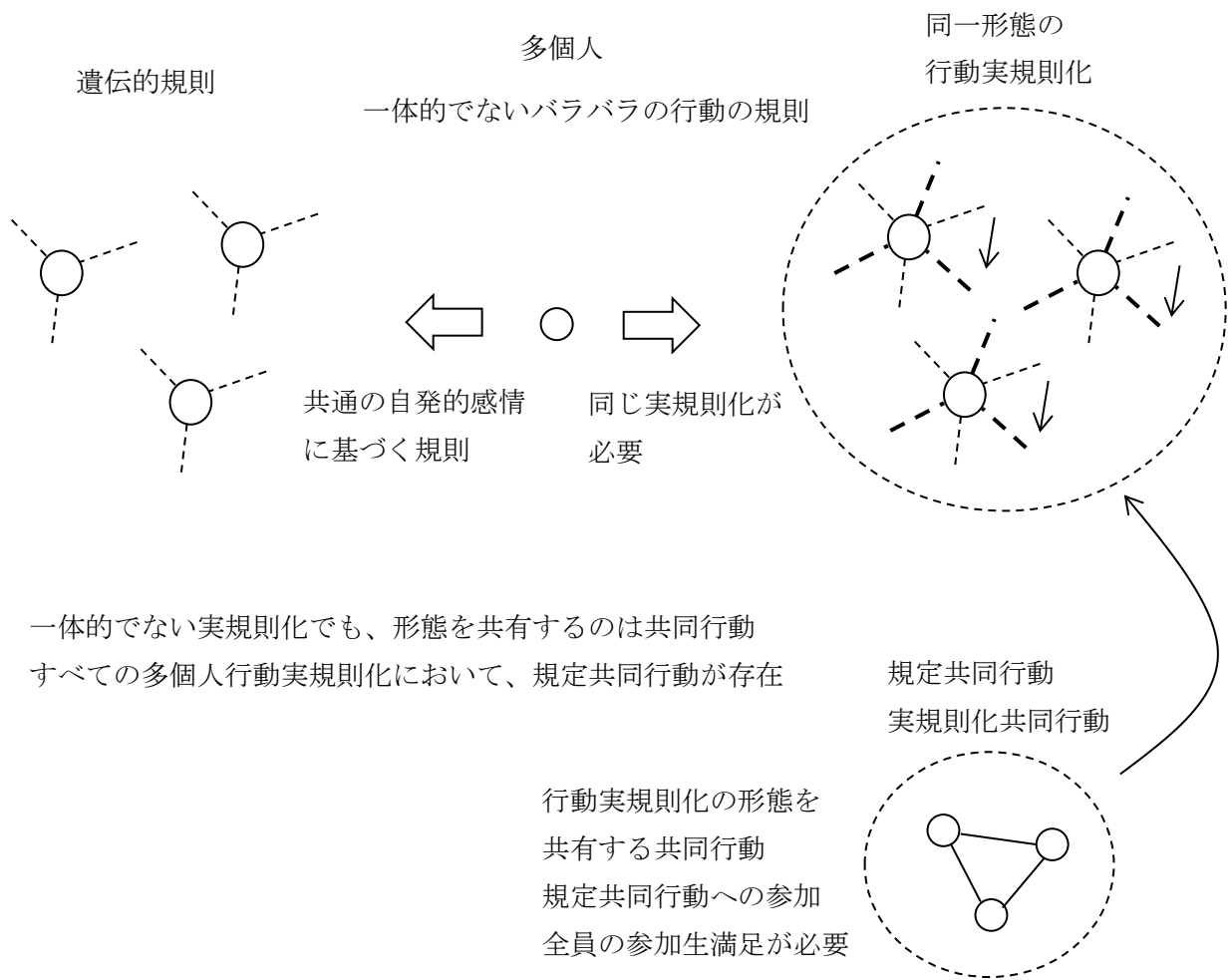


図 5-9 規定共同行動

5.2. 行動実規則化の複合的分析

5.2.1. 現実的行動実規則化と因習

行動実規則化を人間・現実から検討する。行動は人間・現実の中間にあり、行動実規則化にも人間的な部分と現実的な部分がある。

人間的な行動実規則化は二重人間のため曖昧になる。昔からの行動実規則化には、人間的で曖昧なものも多い。これを因習と呼ぶ。因習には宗教や昔からの良識的行動などが含まれる。因習は人間的な評価に基づく社会的義務であり、過去において多く存在したが不満足の原因となっていた。社会的義務も自発的な生満足で評価され、生満足が得られなければ社会的義務に従う必要はない。問題なのは因習を行う理由が人間的で曖昧な事である。

因習は現代では次第に排除されつつあるがまだ残っている。特に途上国では問題が大きい。インドのカースト制度や、中東・アフリカの部族などが典型例である。戦争の原因も民族・部族・古い宗教など因習に関連する場合が多い。これらに従う必要性はなく、現代社会にも合わない。現代社会に合わせて修正すべきである。

現実的な行動実規則化には、行動に関係する現実や、行動の現実的側面がある。行動に関連する現実としては、行動で扱う人工物・自然物などが挙げられる。行動の現実的側面には、行動に関する物理量や時間などが挙げられる。

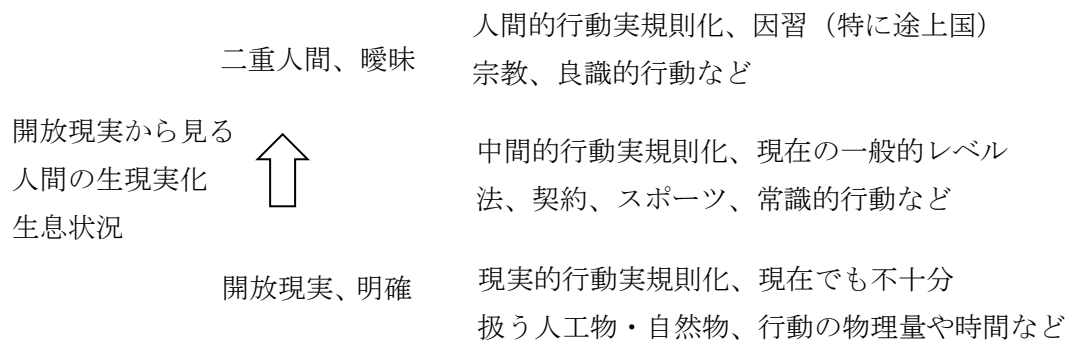
両者の中間的な行動実規則化が、現在の一般的なレベルである。これには法・契約・スポーツ・常識的行動などが含まれる。過去においては曖昧で人間的な因習が一般的だったが、文明の進歩に伴い中間的なレベルまで向上した。ただし開放現実から見れば、現在でもまだ不十分である。また途上国や僻地など文明が遅れている所ではレベルも低い。

常識・良識は認識であり、その延長として行動実規則化がある。不良・善良は人間的で自己・社会に閉鎖している。常識は平均的であり、やや人間的・閉鎖的である。

人間と行動実規則化を、開放現実から見て生現実化する必要がある。生息状況を見るべきである。中間的な法・契約・スポーツ・常識的行動などでも不十分である。例えば過去の裁判は自白の強要が行われており、曖昧で不正確な結果しか出せなかった。現在では物証が重視され、DNA鑑定などにより明確化しているが、日本ではまだ自白が重要視されている。スポーツにおいても、審判の主観から機械判定などへの明確化は途上の段階にある。労働者の時間単位契約についても、日本ではサービス残業や長時間労働が問題になっている。

科学技術の進歩により人工物の性能は向上し、より明確な理解ができるようになってきている。これを「人間的」な理由で妨げるのは誤りである。科学技術との連携は、人間を「機械化」する事ではない。人間は人工物ではなく生物であり、人間を人工物的に見るのは誤りである。生物としての生人間を理解する必要がある。

因習が今まで継続しているとしても、それを継続する必要性はない。人間の存在は因習でなく遺伝子に基づいている。人間に対する規則の根源は、機械でも因習でもなく遺伝子である。生物としての生人間が正しい。過去と基礎とは別次元であり、人間の基礎は遺伝的規則である。過去の因習を基礎とするのではなく、近現実開放により近現実から過去・空間遠方へ開放すべきである。昔からの行動実規則化にも正誤があり、すべて誤りという訳でもない。現実的な検証が必要である。



行動実規則化の生現実化が必要、法や契約やスポーツでも不十分
 裁判の物証、スポーツの機械判定、労働者の時間単位契約など
 科学技術の進歩により人工物の性能は向上、「人間的」な理由で妨げるのは誤り
 昔からの行動実規則化にも正誤、現実的な検証が必要

図 5-10 人間的・現実的行動実規則化

認識知性伝達においては、経路よりも内容が重要である。本などの「明確な」人工物で伝達されているとしても、内容が正しいとは限らない。宗教において、教義の内容は古くから経典により伝達されてきた。これにより広域の伝達が可能となったが、内容は人間的で曖昧である。

多個人の行動実規則化は規定共同行動により規定される。この規定は生現実の規則である。規定共同行動には参加生満足が必要である。

人間的な規定共同行動では生満足が得られない。宗教に従って行動したとしても、その内容が曖昧なら生満足が得られるとは限らない。伝達内容に基づき認識上は「満足」として扱われ、生不満があっても分からない。見えない生不満を抱えた問題のある状況になる。

現実的な規定共同行動であれば生満足が得られる。伝達内容は明確で生現実上の規則に近づく。行動に関する現実や、行動の現実的側面なら明確であり、伝達内容に沿った結果が得られる。人間の生現実化により真の生満足を得る事が可能になる。

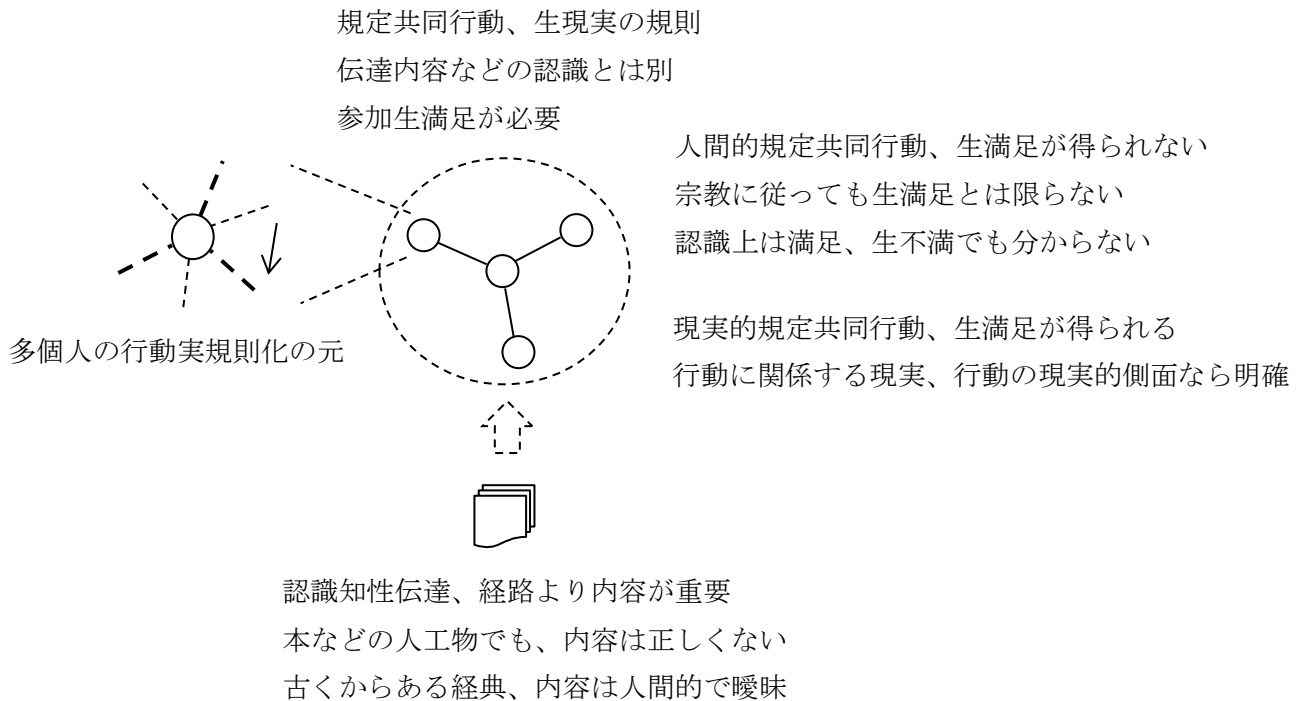


図 5-11 認識知性伝達と人間的・現実的規定共同行動

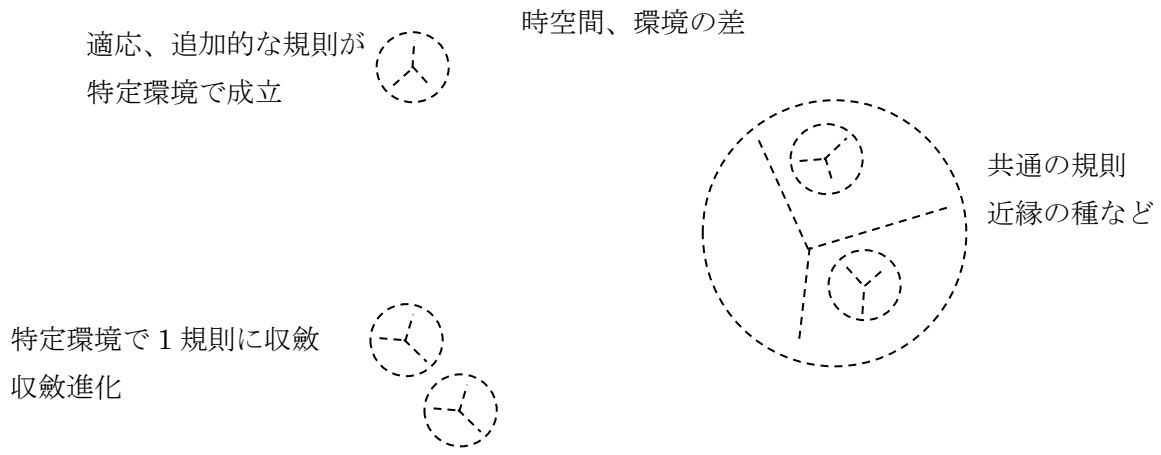
5.2.2. 多環境適応と多様性

生物・人間・機械などの適応とは、追加的な規則が特定環境において成立している状況と言える。多数の規則が多数の環境下で適応している状況を多環境適応と呼ぶ。時空間で環境が異なるために多環境適応が起こる。生物であれば種の多様性に相当する。

多環境適応は多様で規則性は低いが、完全な不規則ではない。生物においては、特定環境で別の種が1つの規則に収斂する収斂進化が起こる。また遺伝的に近縁で共通の規則を持つ場合もある。

人間は生物としては1つの種だが、知性により様々な環境に適応可能である。環境ごとに実規則化を変える事で多環境適応が可能になる。

遺伝的規則の外側を実規則化する事で、遺伝的規則を超えた適応が可能になる。例えば服、家、魚の水槽などが相当する。この場合にも無制限に適応可能になる訳ではなく、実規則化が環境に適応可能である必要がある。例えばヒーター付きの熱帯魚用水槽であれば、電源のある室内でなければ適応できない。



多環境適応、多数の規則が多数の環境下で適応
 生物、人間、機械など、生物なら種の多様性
 多用で規則性は低いが、完全な不規則ではない
 人間は知性により様々な環境に適応可能、実規則化

図 5-12 多環境適応

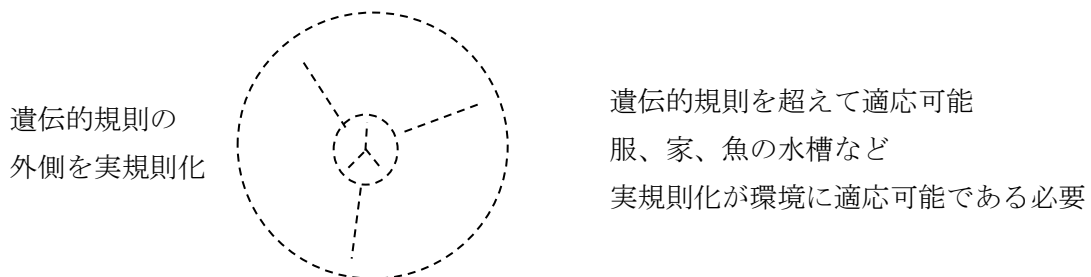


図 5-13 遺伝的規則と実規則化と適応

生物の遺伝子は本質的に多様性を持っており、時間がたてば分散していく。生物における多様性には、遺伝的多様性と種の多様性がある [27]。遺伝的多様性は実験選択に相当し、種の多様性は多環境適応に相当する。これらは複雑・低正確で不規則な方向に働く。遺伝的多様性も種の多様性も、遺伝子が持つ本質的な多様性の結果と言える。

人間は生満足を得るために規則を求める。この点は生物の多様性と本質的に異なる。正しい推論をするには規則が高正確であった方がいい。規則的であれば行動も容易になる。ただし正しいのは生現実上の規則であり、生現実上に多様性の規則があればそれが正しい。生現実上の多様性は受け入れる必要があり、これを無視して単純化するのは誤りである。生物の多様性だけでなく、人間・機械などの多様性でも同様である。

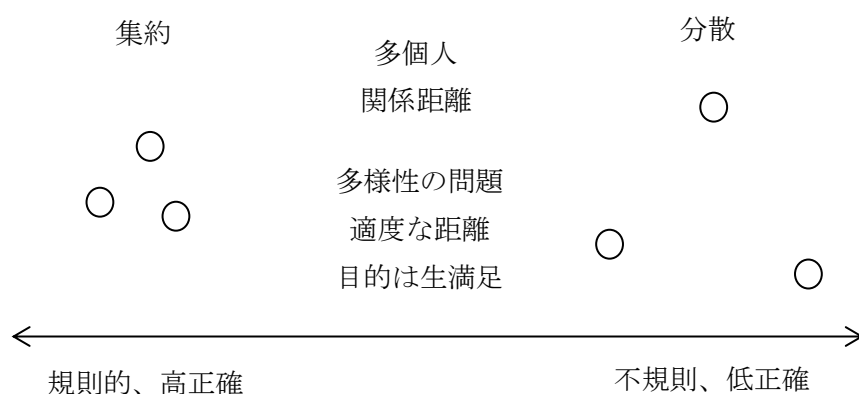
多様性についても、別の規則や共通の規則を発見する事で単純化が可能である。多様性そのものも完全な不規則ではなく、低正確な規則としては使用できる。生物の多様性については様々なモデルによる分析がなされ

も同様である。生満足が得られる適度な距離が必要である。

人間は別々の生命体であり、生満足も別々である。極端に密着すればそれだけで生不満の原因になる。遺伝的内規則を考えると、ある程度は分散する必要性がある。遺伝だけでなく実験選択の問題もある。全体が同じ認識を持って集約すると、別の認識の実験ができなくなる。

人工物は人間が使うものなので、人工物の集約においても同様の問題がある。1つの大きな家の方が扱いやすいが、全員でそこに住むのでは生不満が生まれる。そのため、建物は同じでも部屋を分けるアパートのような形式が必要になる。

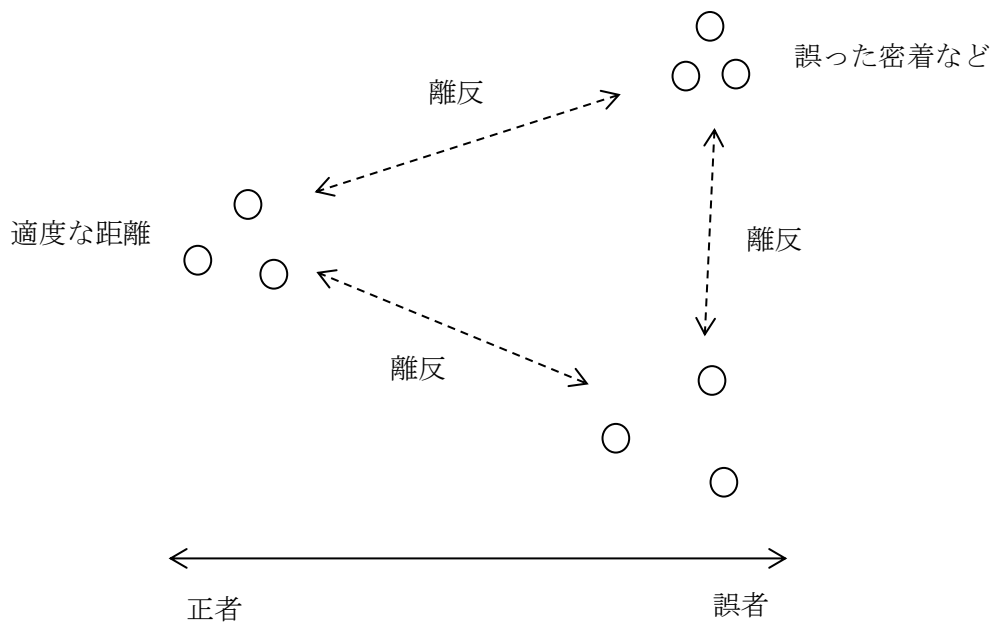
これらの規則は、生現実上の規則でないと意味がない。曖昧な人間ではなく、明確な現実を見るべきである。



多個人の集約は一つの外規則、遺伝的規則または実規則化
他の規則と合わせる必要、遺伝的内規則、実験選択、多環境適応など
人工物でも同様の問題、建物は同じでも部屋を分けるアパートなど
生現実上の規則でないと無意味、現実を見る

図 5-15 多個人の集約・分散と規則

正者・誤者の認識は、正者側に集約する必要がある。正者・誤者の中間に集約しても意味はない。正者の場合は遺伝的規則に基づく適度な距離を保ち、密着する事はない。誤者の場合は誤って密着する場合がある。正者と誤者の間や、別の認識を持つ誤者の間は離反する。多個人の距離だけを見ても正誤は不明確なので、認識の生現実に対する正誤を見る必要がある。



認識の集約は正者側で行う必要、中間で集約しても駄目

図 5-16 正者・誤者と認識の集約

5.3. 権利

5.3.1. 権利と競争と需給

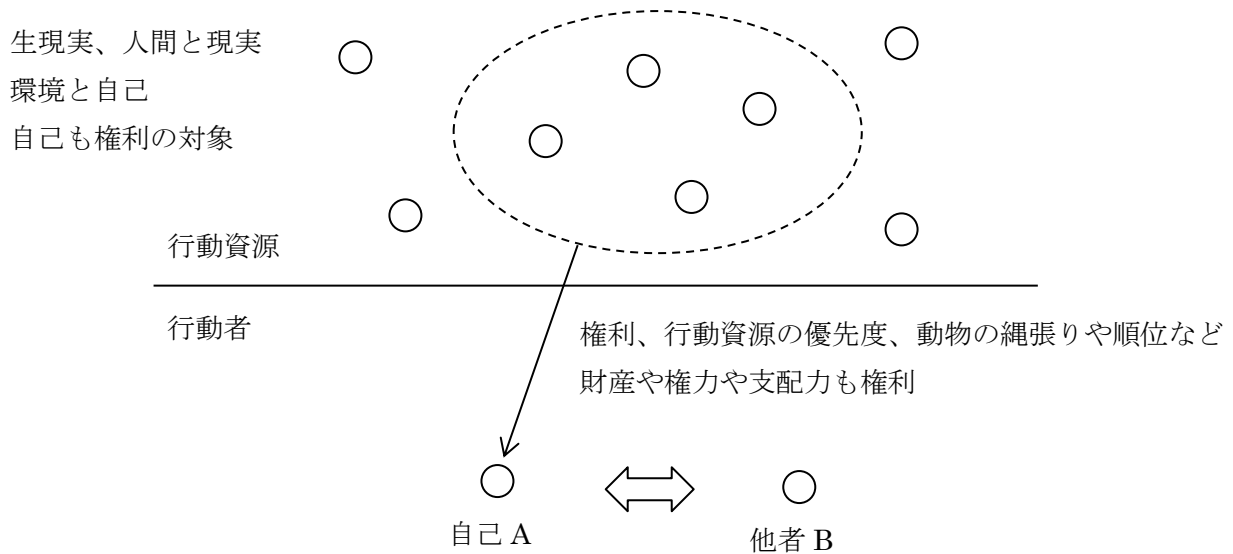
動物は縄張りや順位 [41]によって行動資源の優先度を決める。「行動資源の優先度」を権利と定義する。行動資源は生現実つまり人間と現実であり、環境と自己でもある。これらを優先的に利用できる事が権利である。財産や権力や支配力も権利と言える。

権利の対象には自己や他者も含まれる。基本的には自己を利用する権利は自己が持つが、部分的に他者が持つ場合もある。

権利は多個人の相互作用によって確定する。相互作用には競争と無競争がある。どちらも生物の基本規則であり、人間においても必要である。競争の規則は生態学において分析されている [42] [43]。

行動資源には需給の問題があり、需要大で供給小なら競争が発生する。これにより生満足が減少する。需要・供給は行動資源から存在し、貨幣だけのものではない。生物に対しても需要・供給は存在する。需要・供給は行動資源だけで権利なしでも議論できる。肉食動物 1 匹に対して必要な草食動物の数、という議論は縄張りとは無関係にできる。

人間の目的は長期生満足であり、権利もそのための手段でしかない。権利と生満足は別であり、誤って権利を使えば生不満になる。



相互作用で確定、競争・無競争とも生物の基本規則、人間においても必要
需要大で供給小なら競争により生満足減少
需要・供給は行動資源から存在、生物でも需要・供給は存在
目的は長期生満足、権利は目的でなく手段
権利と生満足は別、誤って権利を使えば生不満

図 5-17 権利と競争と需要・供給

多個人と権利の構造を図 5-18 のような模式図で記載する。多個人の外にある領域の広さは、同一種類の行動資源に対する権利の強さを意味する。別資源に対する権利の強弱は評価が難しいので、ここでは表記しない。

権利は個人から見た生現実の優先度であり、多個人の行動も対象となる。

権利は多個人が個々に行動するためのものである。一体化はしないので共同行動ではない。権利と共同行動は別の規則である。競争・無競争も共同行動とは別の規則であり、権利と連動する。

権利の大小と主導・従属は直結する。主導も従属も遺伝的規則であり、権利が確定した結果として自然に発生するものである。主導・従属は生満足・不満とは別のものである。主導が生満足で従属が生不満ではない。

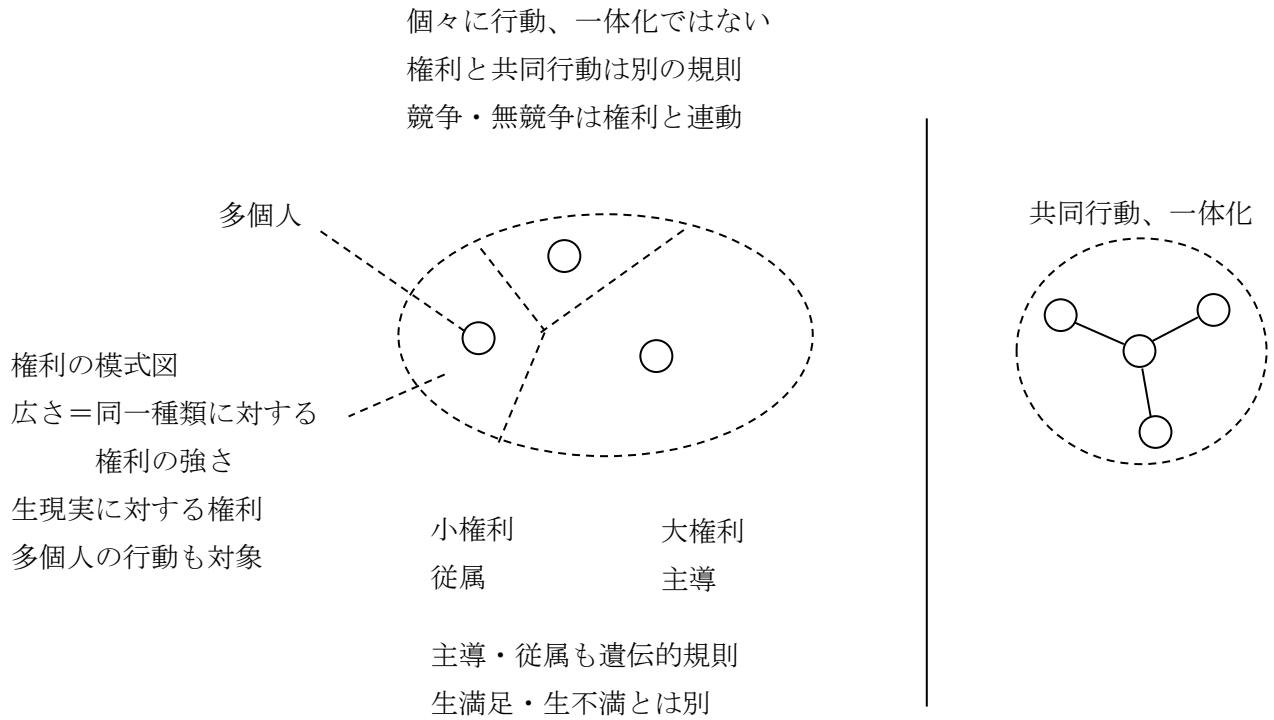
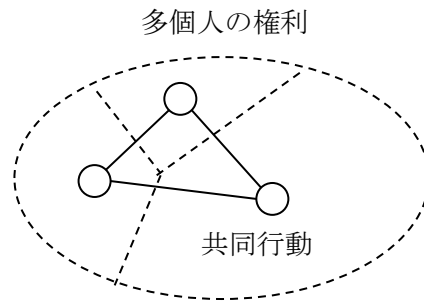


図 5-18 多個人と権利

共同行動を行った際の権利について考える。権利の一部は共同行動により共有されるが、共有された中にも個々の権利はある。例えば動物の群れの中にも順位があり、食料を共同で取るとしても優先度は異なる。共有によって個人の権利がなくなる訳ではなく、共有した権利を誰かが占有する事は許されない。



一部の権利は共有されるが、共有された中にも個々の権利はある
動物の群れの順位など、専有は不可

図 5-19 共同行動における権利

5.3.2. 競争と需給と接近・離反

競争・無競争は接近・離反に関わらず存在し、接近・離反とは別の次元の規則である。接近は満足・信頼・共同行動の参加に連動し、離反は不満・不信・共同行動の不参加に連動する。競争・無競争はこれらとは連動しない。

競争は行動資源の需要が大きく供給が小さい場合に発生する。競争により生満足が減少するため、行動によりそれ以上の生満足増加が必要である。競争により生満足が減少しても、行動の生満足増加がそれを補えば不満にならず、不信や離反も起こらない。無競争は需要が小さく供給が大きい場合に発生し、生満足の現象はない。

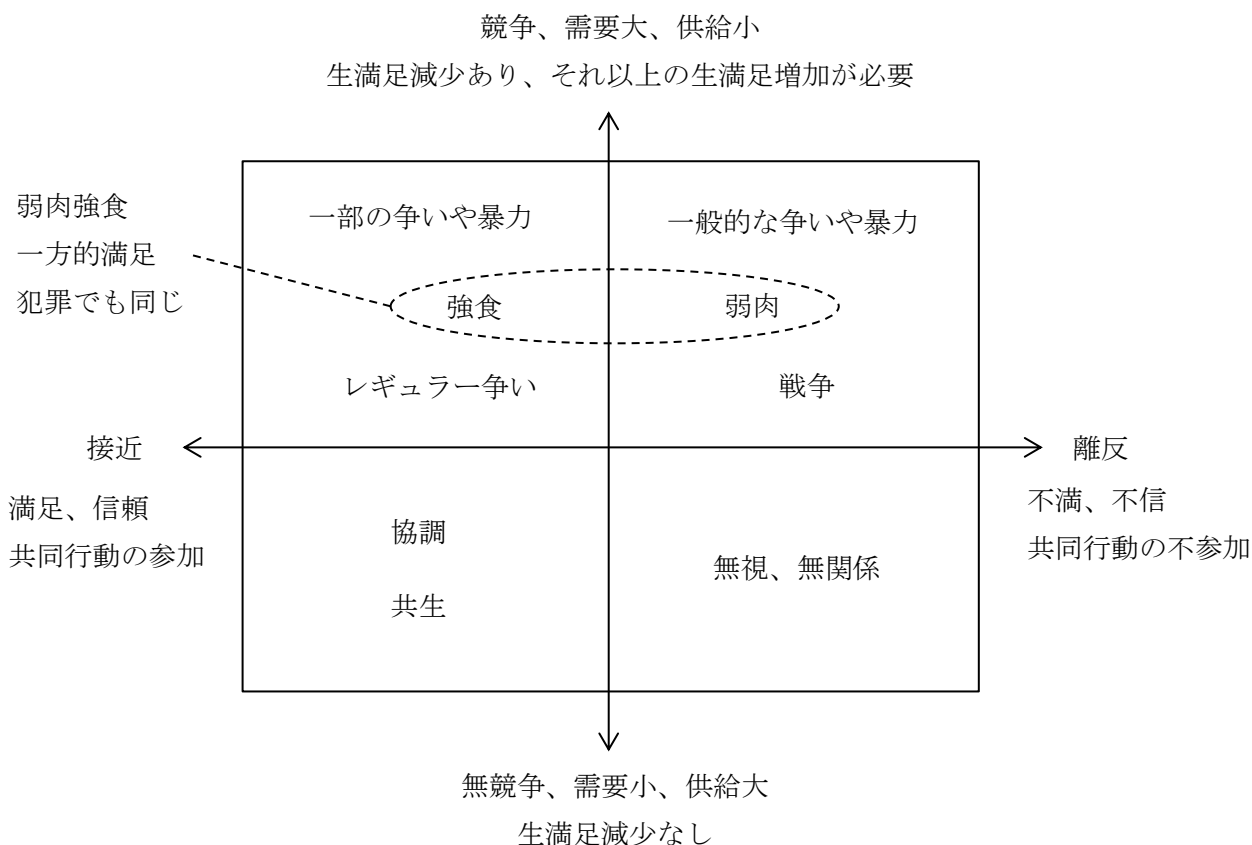
競争に負ければ生満足増加を得られない。負け続ければ不信になり、競争から離反するしかなくなる。これも生物的な必然であり、このようなリスクを考慮した上で競争に参加する必要がある。

接近かつ競争には、スポーツのレギュラー争いなどが相当する。親しい仲にも生物的な「じゃれ合い」のように競争に近い行動がある。離反かつ競争には、戦争などが相当する。接近かつ無競争には、協調や他生物の共生などが相当する。離反かつ無競争には、無視や無関係などが相当する。

弱肉強食は、強食側が接近・満足で、弱肉側が離反・不満である。これは一方的に満足を得る競争といえる。人間の犯罪も同様な構造を持つ。

争いや暴力は競争の一種と言える。ただし競争だけでなく離反・不満・不信の意味も伴う。暴力は実規則化を破壊するので問題であり、争いも暴力的なら問題である。遺伝的規則は接近した状態でも暴力を伴う場合がある。群れのオス同士の争いなどが相当する。暴力は可能な限り排除する必要があるが、暴力のない争いなら問題はない。不満を押し付けられそうな状況下で反抗するのは自然な行動である。

人間の生感情において離反は必要であり、競争も同様に必要である。問題になるのは競争に含まれる暴力である。競争と暴力を明確に分けて、適切な対応をする必要がある。競争に負けて従属する事は、必ずしも生不満ではない。



接近・離反と競争・無競争は別の次元、離反も競争も必要
争いや暴力は競争の一種、離反的な意味も伴う
暴力は実規則化を破壊するので問題、争いも暴力的なら問題
遺伝的競争は、接近でも暴力を伴う

図 5-20 競争・無競争と接近・離反

5.3.3. 実規則化権利

権利にも遺伝的規則と実規則化がある。遺伝的規則は自発的感情に基づき権利が決定される。実規則化権利が崩壊すると遺伝的権利になる。遺伝的権利には暴力が付随するため、暴力によりさらに実規則化が破壊されてしまう。このような悪循環は避けなければならない。暴力による悪循環は悪政による治安悪化や内戦など、過去から現在に至るまで様々な場面で発生している。

実規則化権利においても、その外部には遺伝的権利があり暴力が付随する。外部から権利を守るため、対抗する暴力が必要である。これは警察などに相当する。破壊を抑えるための暴力であり、破壊は最小限にしなければならない。

実規則化権利の場合は、同一形態の実規則化により権利が決定する。実規則化権利を同一形態とするためには、その形態を共有するための規定共同行動が必要である。規定共同行動は実規則化共同行動であり、これにより実規則化権利の形態を同一化できる。

遺伝的権利は自発的に成立するので、特にそれに参加する必要はない。実規則化権利の場合は、その元になる規定共同行動に参加する必要がある。参加生満足が必要であり、すべての参加者の長期生満足を増加させな

ければならない。

現代の国家においては、警察などの存在により暴力がなくても財産を守れる。これは効率的で予測しやすく生満足も得やすい。治安の悪い所ではスリや強盗などに注意する必要があるが、こちらの方が本来の遺伝的権利である。現代の先進国の一般人においても、部分的には遺伝的権利が存在する。例えば家族のリーダーシップなどは遺伝的権利である。

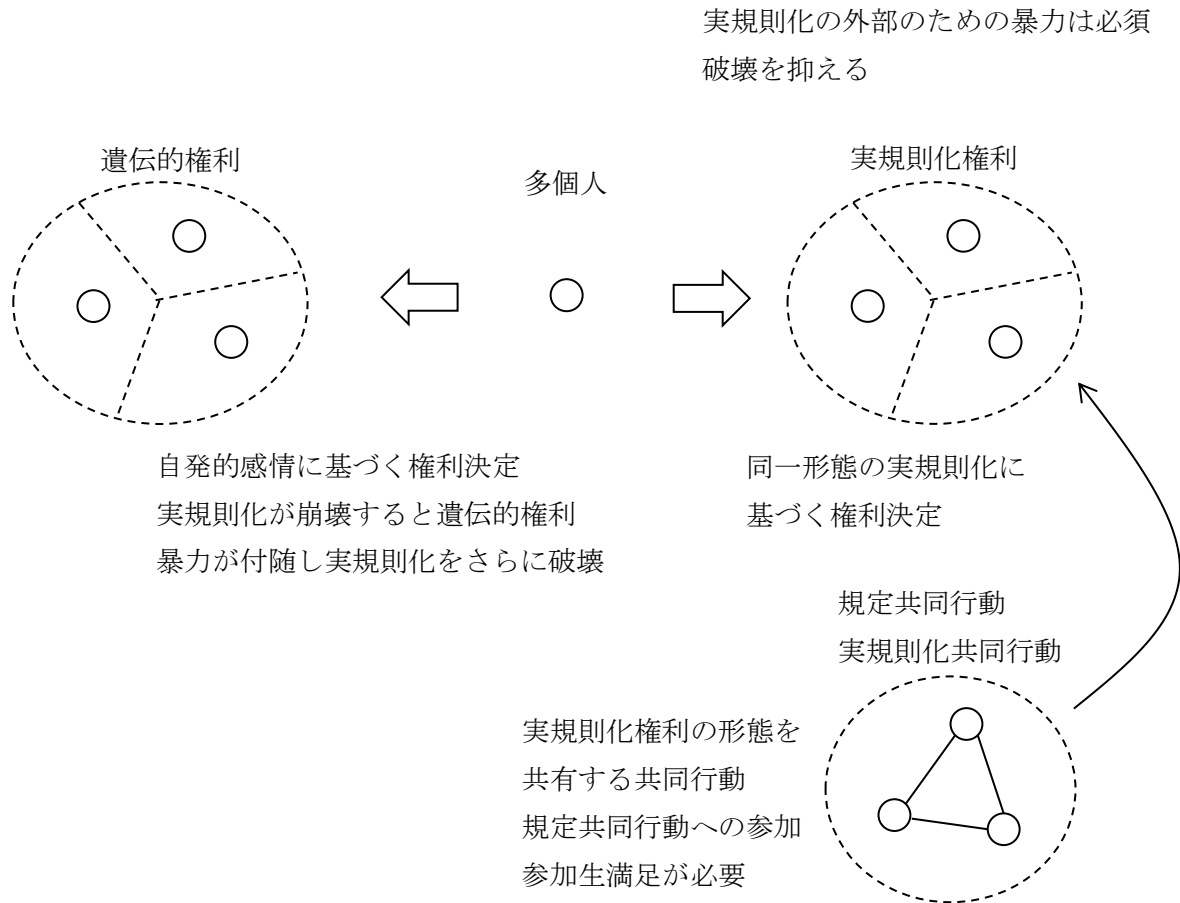
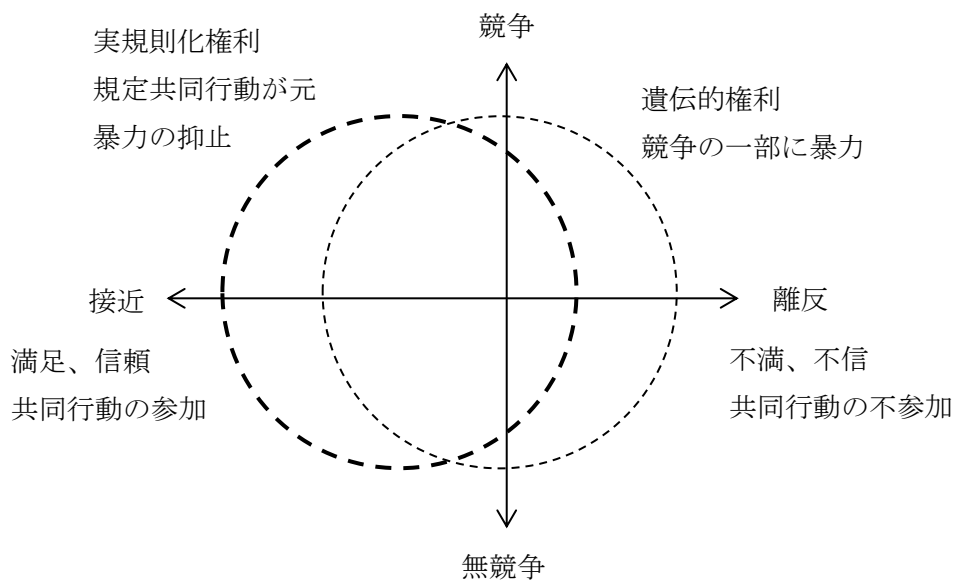


図 5-21 実規則化権利と規定共同行動

実規則化権利を、接近・離反と、競争・無競争の次元で検証する。実規則化権利は、権利の元となる規定共同行動に参加する必要があるため、遺伝的権利と比べて全体的に接近側になる。接近・離反の方向性は実規則化権利においても必要なので、接近寄りの中での接近・離反が生じる。遺伝的規則には競争の一部に暴力があり、実規則化権利において暴力を抑止する事が重要である。

実規則化権利においても競争は必要である。権利を平等にするのは、競争の必要性から見て正しくない。平等にすべきは参加生満足である。「平等」という言葉にも自由などと同じように、人間的な曖昧さと正評性が含まれる。平等が無条件で正しい訳ではない。曖昧な平等に囚われず、全員の参加生満足を求めなければならない。権利の扱い方も、人間的で曖昧なものではなく、明確な開放現実に基づくべきである。



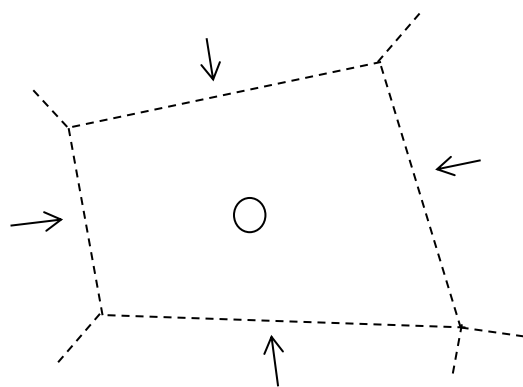
遺伝的権利と比べて接近側、その中での接近・離反
 実規則化権利でも競争は必要、平等な権利でなく参加満足

図 5-22 実規則化権利と競争と接近

5.3.4. 制限付き・無制限権利

生物の個体に対する権利を考えると、権利拡大には上限がある。これを制限付き権利と呼ぶ。制限付き権利は遺伝的規則である。生物の個体は一定量までの縄張りや食料を求めており、無限の権利を求めている訳ではない。特に食料の制限付き権利は明確であり、多すぎても健康を害するだけである。

他にも行動の限界や、物理的制約や、他者との競争などが制限付き権利の原因として考えられる。権利が大きすぎると、競争が発生して生満足が低下する場合もある。オス同士の順位争いなどで、勝って権利が大きくなっても、他者からの攻撃が激しくなり怪我をする可能性もある。



遺伝的規則、そもそも無限の権利を求めない
他に行動の限界、物理的制約、他者との競争など

制限付き権利、権利拡大に上限

図 5-23 制限付き権利

権利が大きい個人は行動も強力となる。それにより権利自体を増加できる。遺伝的権利の場合、制限付き権利により権利の増加は抑えられる。強者が優先されるが、弱者も環境に余裕がある状況であれば生存可能である。これにより環境の良し悪しに対する個体数の調整が可能になる。弱者や従属であっても遺伝的規則の一部であり、常に生不満である訳ではない。

実規則化権利では権利の増加抑制が起こらない場合もある。増加の抑止がない権利を無制限権利と呼ぶ。無制限権利が発生すると、弱者の参加生満足がなくなり、弱者が実規則化権利から離反してしまう。人数が減ってしまうので、実規則化権利の構成要員からみれば望ましい状態ではない。実規則化権利においても制限付き権利を実現し、無制限権利を防ぐべきである。規定共同行動において制限付き権利の規則を規定する必要がある。これは遺伝の制限付き権利を、実規則化でも維持する事になる。

因習や宗教などにおいて、大権利そのものが悪で、小権利が善であるという実規則化もある。これは誤りであり、権利を求める感情は動物でも人間でも必要である。制限までは権利を増加したい、という感情を抑えてはならない。

多個人の権利、大権利なら増加できる

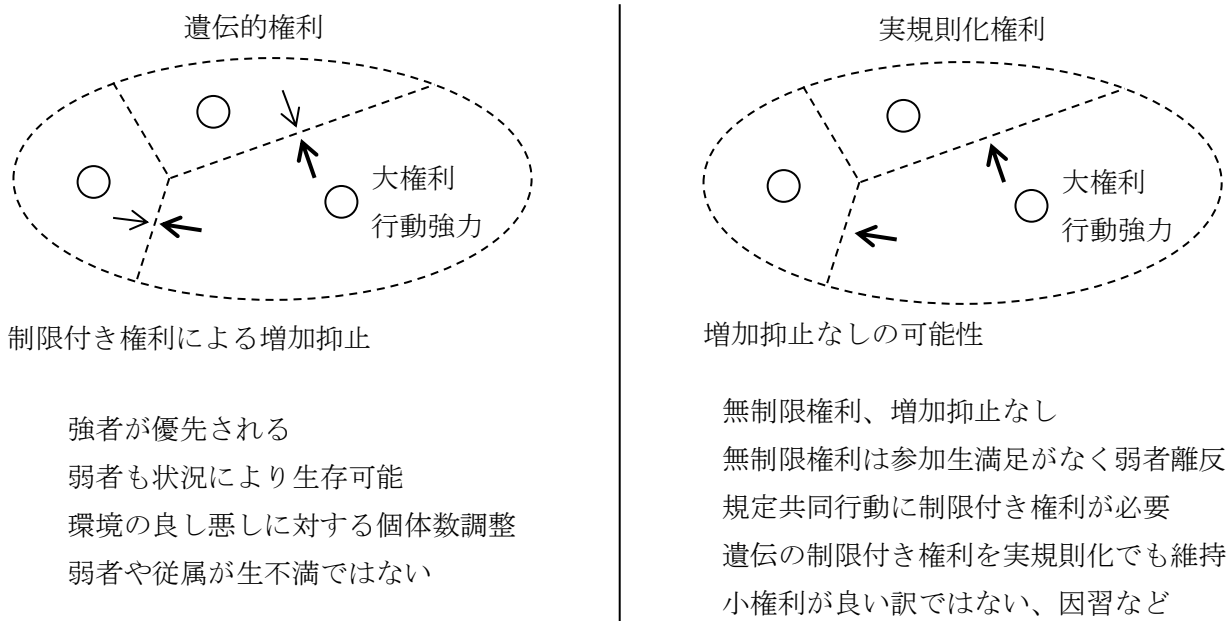


図 5-24 多個人の制限付き・無制限権利

5.3.5. 実規則化権利の崩壊

遺传的権利には暴力が付随する。実規則化権利が崩壊して遺传的権利に戻ると、暴力の問題が生じる。これは内戦状態や犯罪者の社会に相当する。実規則化権利が崩壊する要因としては、参加生満足の不備や外的要因（侵略）などが挙げられる。実規則化権利の崩壊は、歴史的にも現代でも様々な場面で発生しており、現代においても大きな問題である。

部分的な崩壊で、実規則化権利を再構築できれば問題ない。これは会社倒産などが相当する。全面的な崩壊なら、早急に新しい実規則化権利を作成する必要がある。

実規則化権利が崩壊して暴力が発生すると、暴力により実規則化そのものが破壊されてしまう。特に現代は武器が強力すぎて実規則化の破壊の程度が大きい。途上国の内戦などでも、すぐにインフラ破壊や大量殺戮が起こってしまう。こうなると社会の復旧が困難になるため、早急に実規則化権利を作成しなければならない。

社会が正しく機能していれば、参加生満足により実規則化権利が保たれる。この状態での犯罪者は個人的な誤りであり、認識を修正する必要がある。社会に正しく参加する方法の教育や訓練も重要である。社会が正しく機能しておらず参加生満足がない状態では、遺传的権利も誤りとは言えない。この状態での犯罪者は個人的な誤りと言えなくなる。ただし社会的に見れば問題が大きいので、社会全体としては修正する必要がある。

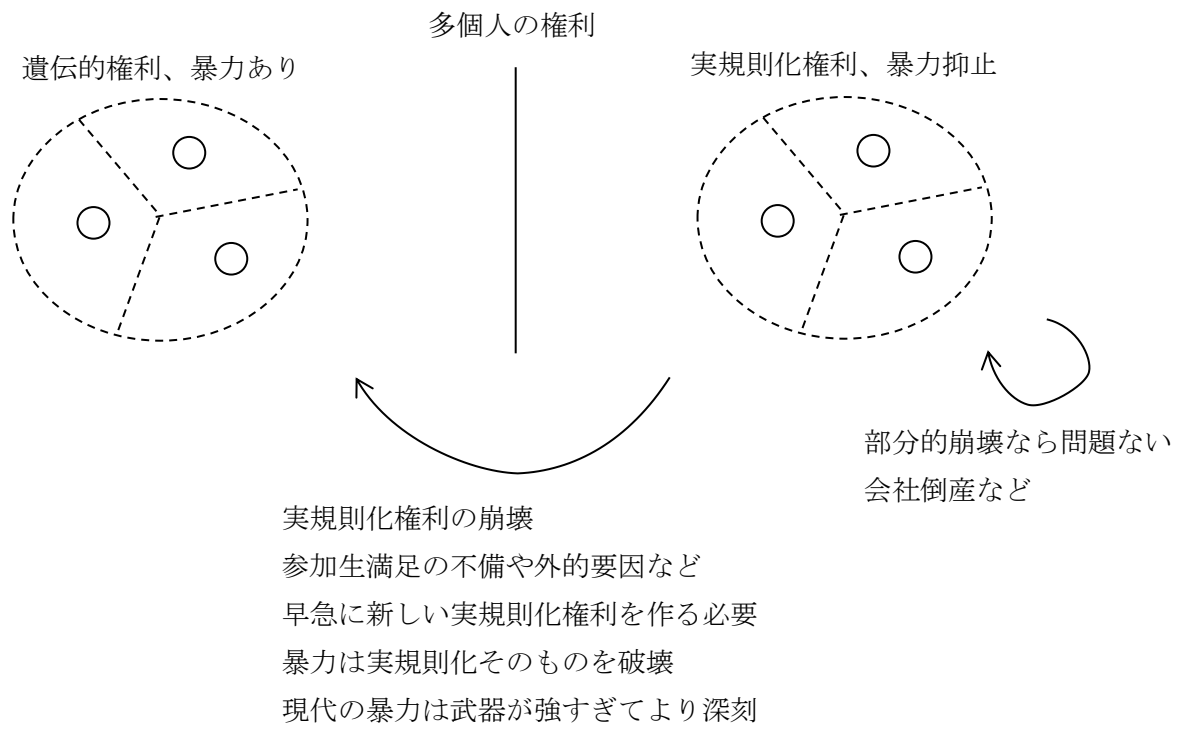


図 5-25 実規則化権利の崩壊

5.4. 貨幣と価値

5.4.1. 権利交換と貨幣

自己の生満足増加のため、権利を他者と交換する場合がある。これを権利交換と呼ぶ。物と物を交換する物々交換が歴史的な出発点である。動物において物々交換が行われる事はないので、権利交換は実規則化共同行動である。目的は交換による互いの生満足増加である。確保困難な行動権利の確保が容易になり、生満足減少を抑止できる。

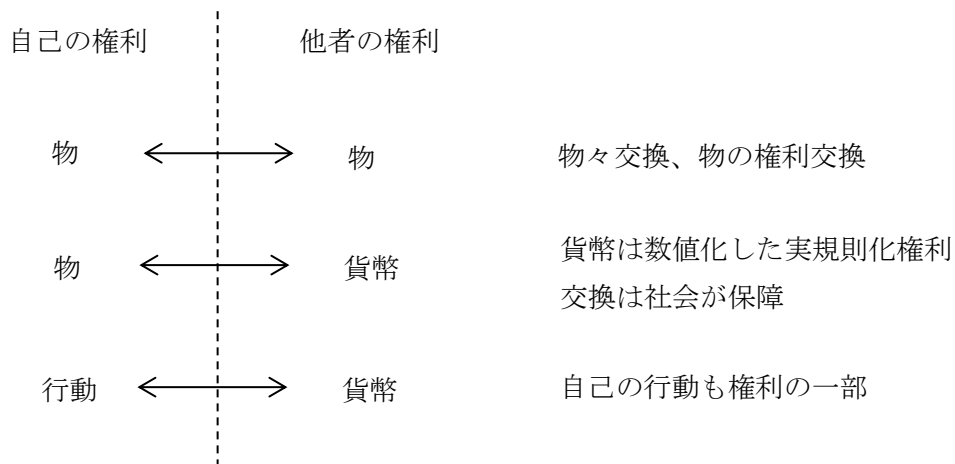
交換を容易にするために、権利を数値化したものが貨幣である。貨幣は権利交換のための実規則化権利である。貨幣により単純な交換ができない権利でも交換できるようになった。行動と貨幣を交換する事も可能である。自分の行動も権利の一部であり、交換の対象となり得る。

貨幣や物や行動以外にも、様々な権利を交換できる。例えば土地などが挙げられる。ただし交換できない権利もある。社会的な地位や、家族などは交換できない。

権利交換は実規則化共同行動の一種であり、全員の参加生満足が必要である。目的は個々の長期生満足であり、権利や貨幣は手段でしかない。自給自足の状態よりも生満足が増加しなければ、権利を交換する意味がない。貨幣で得られない権利もあり、貨幣を満足と見なすのはまったくの誤りである。貨幣を手段とした生満足を得るための行動を正しく検討しなければならない。

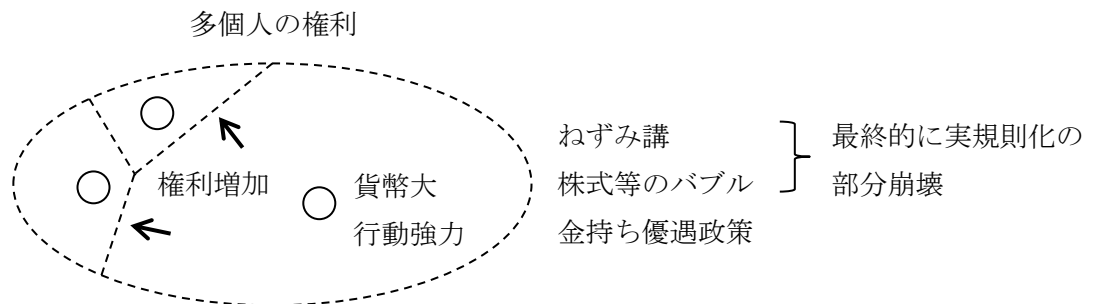
貨幣は実規則化権利の一種であり、無制限権利が起こり得る。貨幣が大きくなると、行動が強力になり、権利が増加する。ねずみ講や、株式等のバブルや、金持ち優遇政策などが相当する。ねずみ講やバブルは最終的に実規則化権利の部分崩壊を起こし、貨幣が暴落する。

貨幣の無制限権利が起こると、貨幣を多く持つ者の生満足だけが増え、参加生満足が崩壊する。貨幣は無限に増やせるが、生満足が無限に増える訳ではない。貨幣の権利も社会で制限する必要がある。



権利交換、実規則化共同行動の一種、参加生満足が必要
 確保困難な行動権利の容易化、生満足減少の抑止
 目的は個々の長期生満足、権利や貨幣は手段
 様々な権利を交換可能、土地など
 交換や貨幣化できない権利もある、地位など

図 5-26 権利交換と貨幣



貨幣の無制限権利、参加生満足の崩壊
 貨幣を多く持つ者だけが生満足増加
 社会による制限が必要

図 5-27 貨幣の無制限権利

5.4.2. 価値と貨幣と需給

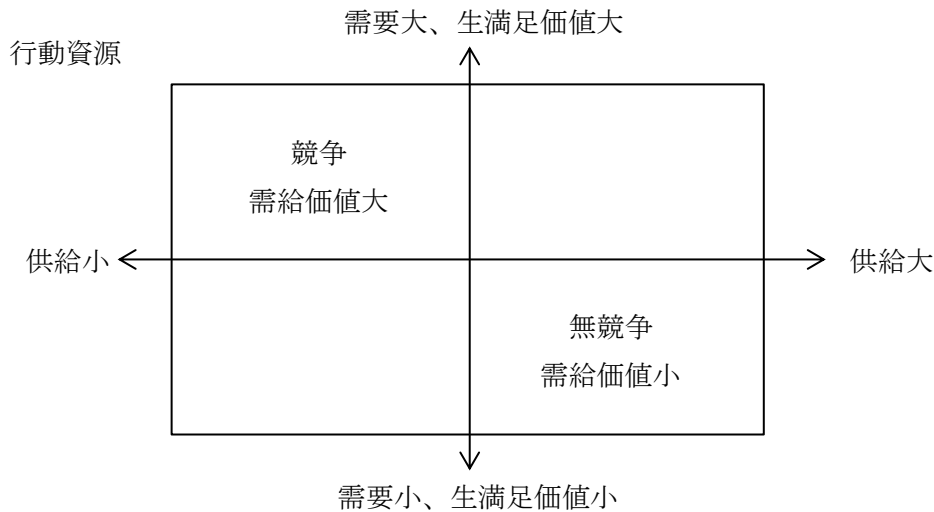
行動者が権利を持つ際の行動資源について考えると、権利の対象となる行動資源には価値があると言える。生満足が増えて需要が大きい行動資源には価値があるが、供給が少ない行動資源にも価値がある。生満足が増える行動資源の価値と、需給に係る行動資源の価値は異なる。生満足に関する価値を生満足価値、需給に関する価値を需給価値と呼ぶ。

需給価値が大きいのは需要大・供給小の場合で、需給価値が小さいのは需要小・供給大の場合である。需給

価値の大・小は競争・無競争と連動しており、需給価値は「競争が起こる価値」とも言える。

需給価値は権利の段階から発生しており、交換や貨幣化できない権利でも需給価値はある。地位のように交換できなくても競争はあり、需給価値も存在する。

需給価値は生満足価値と異なり、生満足には直結しない。競争により生満足は減少するので、それに見合う生満足価値がないと獲得する意味はない。需給価値より生満足価値の方が重要である。過度な競争を抑えれば全体の生満足が増加する。これは競争を禁止する事ではない。競争自体は生物が持っている基本的な規則であり、禁止すると需給活動に支障が出る。



権利は行動者、価値は行動資源
需給価値は交換できない権利にもある
競争により生満足減少、需給価値より生満足価値が重要
過度な競争を抑えれば全体の生満足増加、競争禁止ではない

図 5-28 生満足価値と需給価値

同種の権利交換における行動資源量の差を見ると、需給価値が小さい場合は量が多く、需給価値が大きい場合は量が少なくなる。需給価値が小さい場合は、無競争で需要が少なく供給が多い。需給価値が大きい場合は、競争があり需要が多く供給が少ない。

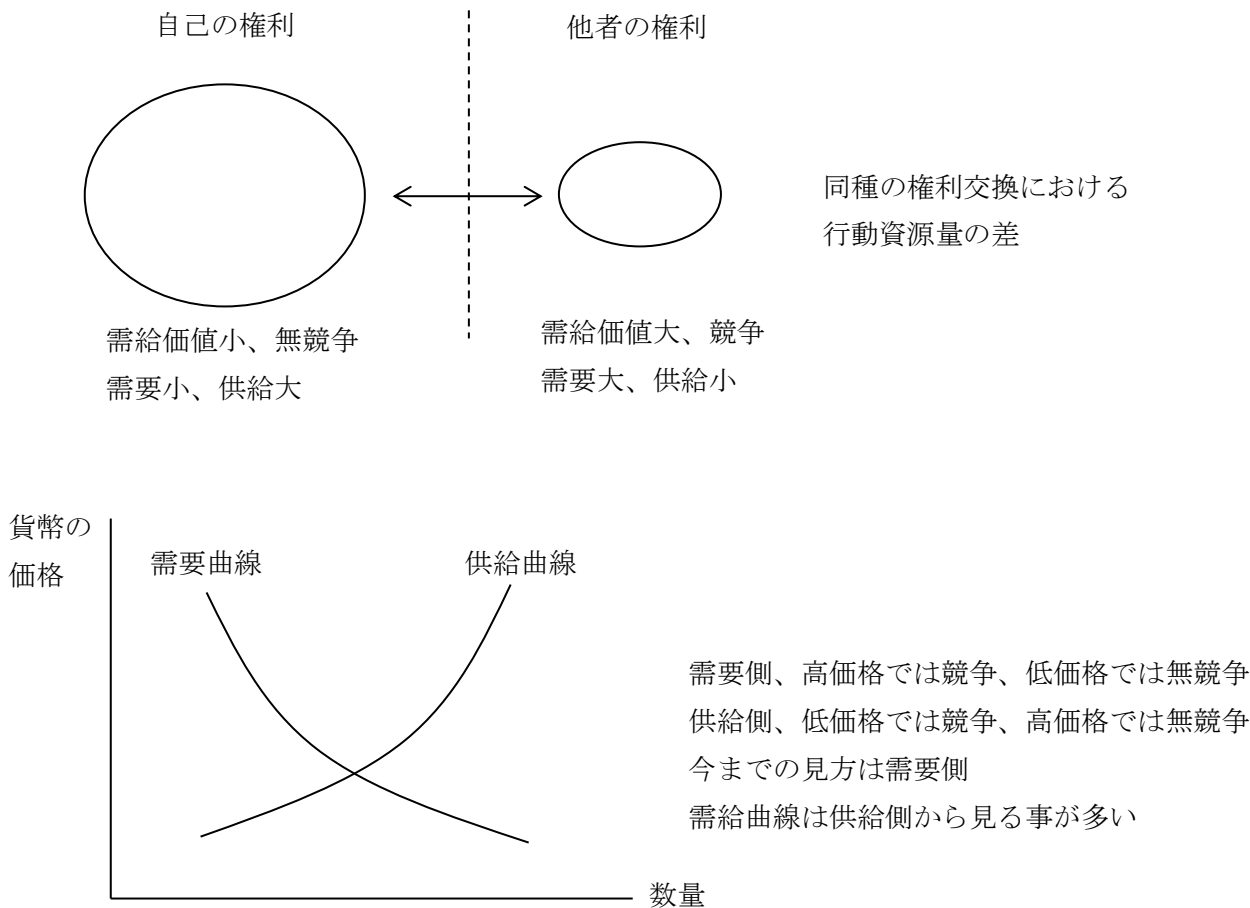
貨幣の需給曲線を見てもこの関係は分かる。価格が需給価値の大きさを示している。需要側から見ると、高価格では競争があり、低価格では無競争である。これは今まで述べてきた見方である。供給側から見ると逆転し、低価格で競争があり、高価格は無競争になる。需給曲線は供給側から見る事が多いので、今まで述べてきた見方とは逆になる。低価格では価格競争があり、高価格では独占的になる。供給側から競争を見る場合は、商品の需給でなく商品を買う客の需給を見る事になる。

需要・供給は行動資源の段階から、競争は権利の段階から存在し、権利交換や貨幣より基本的である。貨幣を前提として需給や競争があるのではなく、貨幣以前の権利レベルから需給や競争がある事を理解する必要がある。

競争になれば生満足は減少する。これは貨幣においても同様であり、貨幣と生満足は直結しない。競争によ

る生満足減少を補えるだけの生満足増加が見込めなければ、競争をする意味はない。無駄な競争により不必要に高いものを買ったり、不必要に安く売ったりすれば、同量の貨幣でも生満足は目減りしてしまう。商品で見ると需給つり合いが最善になるが、貨幣で見ると釣り合わない方がいい場合もある。貨幣よりも現実的な商品で見るべきである。

需給とも過度の競争を抑えるべきである。企業数で考えれば、独占を禁止して需要側の競争を抑える事や、企業乱立を抑制して供給側の競争を抑える事がこれに当たる。



競争や需給は、権利交換や貨幣より基本的、貨幣が前提ではない
 競争になれば生満足は減少、貨幣と生満足は直結しない
 商品で見ると需給つり合いが最善、貨幣で見ると釣り合わない場合もある
 需給とも過度の競争を抑えるべき、独占禁止や企業乱立抑制など

図 5-29 権利交換と貨幣と需要・供給

5.5. 権利の複合的分析

5.5.1. 権利と人間・現実

人間的権利は曖昧で解析不能である。明確な開放現実から見て人間を生現実化し、明確な現実的権利を理解する必要がある。現実的権利は外部から見た生息状況の一部であり、生人間・生満足に直結する。人間の存在意義は生物や遺伝であり、認識ではない。これは権利についても同様である。権利は行動の延長なので、人間・現実の中間にあたる。権利にも人間的な部分と現実的な部分がある。

人間的権利には高級感を持つものが挙げられる。現実的権利には物・時空間の所有量や生物・動物的権利などが挙げられる。貨幣は人間的権利も現実的権利も交換の対象であり、中間的特徴を持つ「普通」の権利である。中間的なのでやや曖昧になる。

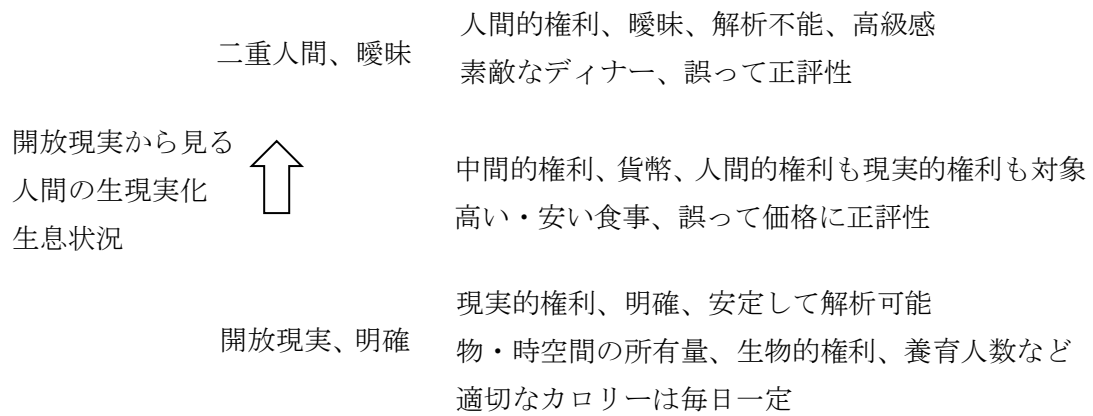
食事を例にとると、人間的な「素敵なディナー」は曖昧で解析不能である。現実的な「適切なカロリー」であれば明確で、毎日一定の値が予測できる。食事の価格は中間的特徴を持ち、ある程度は毎日一定だが高い食事でも安い食事もあり得る。カロリーは食事の生物・動物的な意味とも言える。生物・動物は現実の一部であり二重人間の問題がない。そこから人間を類推する事で明確な理解が可能になる。

貨幣より物・時空間の所有量や生物的権利などを見るべきである。人間の目的は権利でなく生満足であり、権利はその手段でしかない。曖昧な人間的権利や貨幣では、それ自体に正評性が付いて満足に直結すると認識される可能性がある。素敵な雰囲気の高価な食事でも、味や栄養面で問題があれば意味がない。人間を生現実化する事で、人間的権利の曖昧さを回避できる。様々な現実的権利の数値を使う事で、明確な解析や予測が可能になる。

人間的・現実的価値についても同じ事が言える。権利は行動者からの視点であり、価値は行動資源からの視点である。視点が違うだけで分析内容については同じである。

具体的な現実的権利には、養育人数・居住面積・自由時間などが挙げられる。社会的地位など交換できない権利も、雇用時の養育人数などの現実的権利で見るべきである。地位に特化した現実的権利であれば、雇用期間の期待値などが考えられる。給与が多くても現実的権利が小さい可能性もある。費用の高い都会や、派手な生活が必要な場合などが考えられる。

「自由」という言葉は人間的で曖昧であり、様々な意味を包含する。「自由時間」などのように、自由が権利を意味する場合もある。これらも自由として捉えるのではなく現実的権利として捉えるべきである。

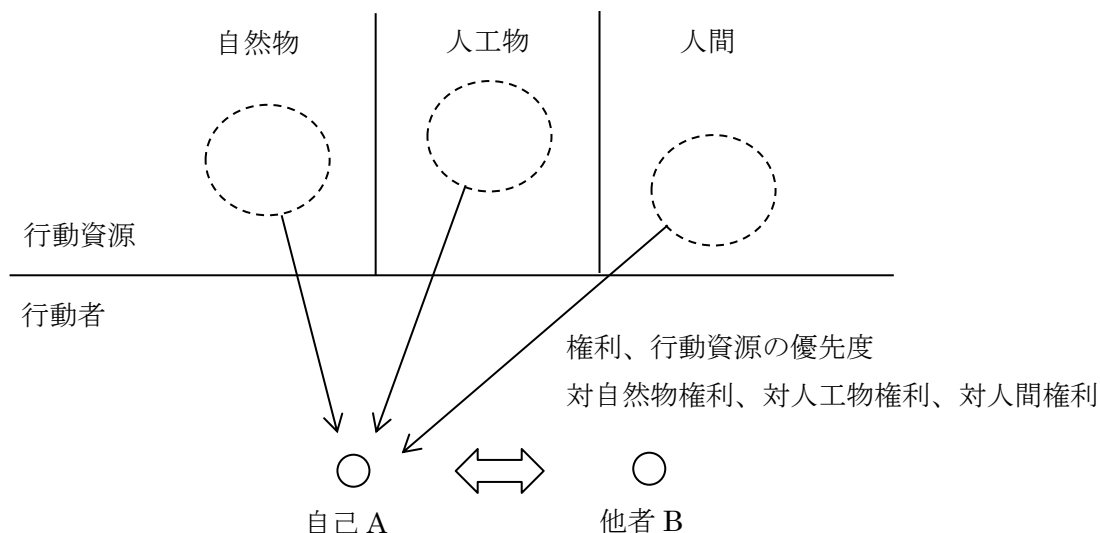


現実的権利は生息状況の一部、貨幣より現実的権利、目的は権利でなく生満足
人間の存在意義は生物や遺伝であり、認識ではない、権利でも同様
様々な現実的権利の数値により、明確な解析や予測が可能
人間的・現実的価値でも同様、権利は行動者、価値は行動資源
地位など交換できない権利も現実的権利で見るべき、雇用時の養育人数など

図 5-30 権利と人間・現実

5.5.2. 対自然物・人工物権利

権利とは行動資源の優先度である。行動資源が自然物・人工物・人間である場合の権利を、対自然物権利・対人工物権利・対人間権利と呼ぶ。これは前述の人間的・現実的権利とは別の事象である。行動資源が現実でも行動者は人間なので、権利には常に人間的な部分がある。行動資源が人間であっても、人間の現実的側面による現実的権利もある。行動資源が人間・現実なら、その影響が強くなるので人間的・現実的権利になりやすくなる。



人間的・現実的権利とは別、行動資源が現実でも行動者は人間
 行動資源が人間でも現実的権利はある、人間の現実的側面
 行動資源が人間・現実なら人間的・現実的権利になりやすい

図 5-31 対自然物・人工物・人間権利

人工物と交換可能な自然物を可換自然物と呼ぶ。可換自然物は道具などが当てはまる。人工物は、人間が自然物を実規則化により使いやすくしたものである。現在では人工物の生満足価値が向上しているため、可換自然物の生満足価値は相対的に下がっている。同種の権利交換を行った場合、可換自然物の量を増やさないと釣り合わない。

これは歴史的な変化であり、過去と現在では異なる。現在では農村から都市への人口移動が起こっているが[44]、これは農村の土地価値が減少しているためである。自然物に囲まれた農村の生満足価値が小さくなり、人工物に囲まれた都市の生満足価値が大きくなっている。日本でも昔は養蚕により絹を作っていたが、現在の日本では利益にならず生産できない。

人工物と交換ができない自然物を非可換自然物と呼ぶ。非可換自然物は自然環境などが当てはまる。人間も広い意味では自然物であり、生満足を得るために大気・気温・緑地などの自然環境を必要とする。これらの相対的な生満足価値は人工物が進歩しても減らない。ただし以降で説明する原料自然物は除く必要がある。

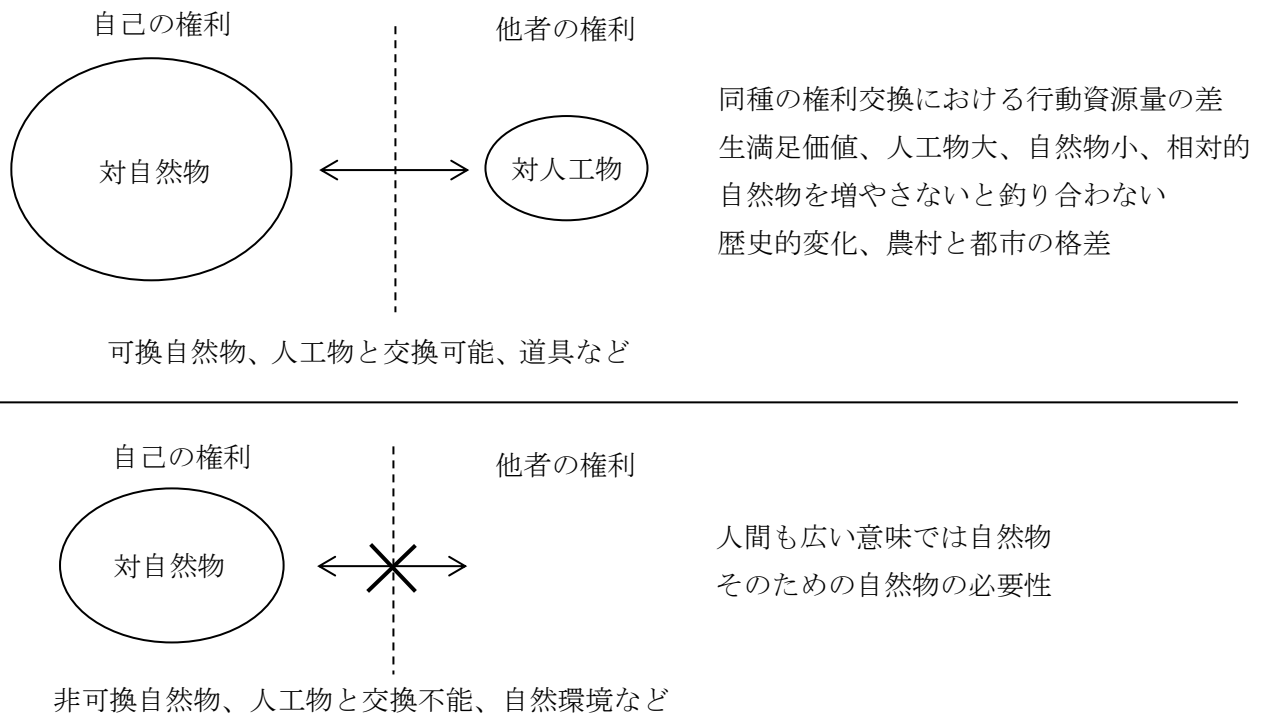


図 5-32 可換自然物と非可換自然物

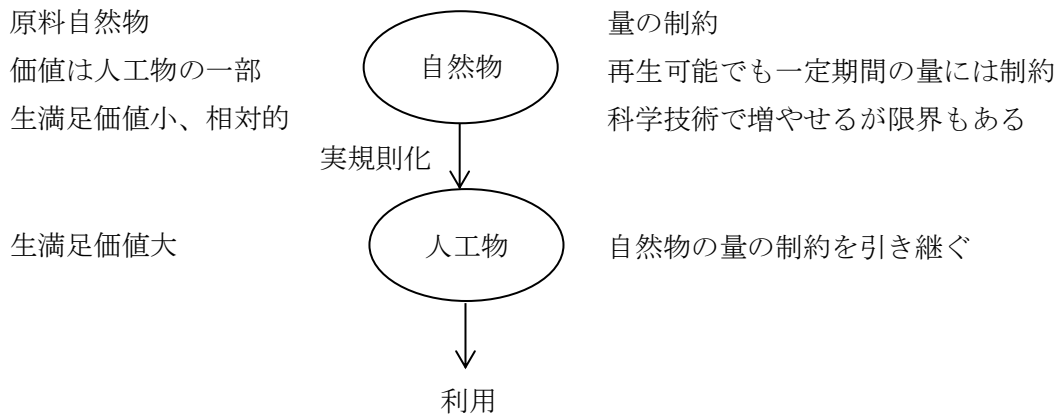
自然物を実規則化により人工物にすると、生満足価値が向上する。人工物化における原料の自然物を原料自然物と呼ぶ。原料自然物は非可換自然物だが、その生満足価値は利用する人工物の一部なので小さい。人工物の進歩により、原料自然物の生満足価値は相対的に減少する。

人工物の進歩により生満足価値が相対的に減少しないのは、非可換かつ非原料自然物のみになる。これはつまり自然物が直接的に意味を持つ場合という事になる。自然物の生満足価値減少は人工物に対する相対的なもので、絶対的に減る訳ではない。

自然物を人工物化する際、自然物には量の制約がある。再生可能な自然物でも一定期間の量には制約がある。自然物を科学技術で増やす事も可能だが、それにも限界がある。人工肥料により農作物を増やす事は可能だが、土地や日照などは増えない。人工物は自然物を元としているため、自然物の量の制約を引き継ぐ。

原料自然物の生満足価値は小さいが、量の制約においては自然物の方が重要である。自然物の量の制約は、食料や資源などで発生する。土地やエネルギーも基礎部分は自然物である。

可換・原料自然物は、同じ対象でもどう捉えるかで異なる。魚から油を取る場合は、可換かつ原料自然物である。魚から缶詰を作る場合は、非可換かつ原料自然物である。魚を種の保存から見れば、非可換かつ非原料自然物である。



生満足価値が相対的に減少しないのは、非可換かつ非原料自然物のみ
原料自然物の価値は小さいが、量の制約においては重要
食糧や資源など、土地やエネルギーも基礎部分は自然物

図 5-33 原料自然物と量の制約

5.5.3. 権利と人口

基本的に人口が増えれば個人の権利は減る。対自然物権利や対人工物権利は、人口が増えれば減る。科学技術により総量を増やす事も可能だが、量の制約があり無限に増やせる訳ではない。

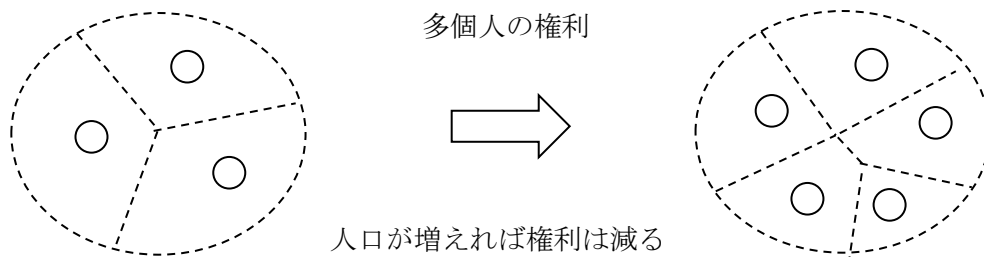
対人間権利は人口が増えても変化しない。行動者と行動資源は常に同数なので、人間の総量によらず一定である。

権利と人口には明確な関連性がある。人口は明確な数値なので、現実的権利と人口を使えば明確な解析が可能になる。現実的権利と人口による解析は、生物に対する解析と同様の方法である。人口についても競争と同様に、生態学において分析されている [42] [43]。生態学を人間の人口に対して直接適用する場合もある [44]。現実的権利を使った方が貨幣より明確に人口との関係を示す事ができる。

現実的権利の社会的な総量を使う事で、人口との関係を明示できる。先進国においては現在の総量が多く、これ以上増やすのが難しい。全体の権利が増えないので人口増加も抑えられる。途上国における総量は先進国より小さく、まだ増やせる余地がある。ここから人口増加や個人の権利増加に繋がる。人口増加と個人の権利増加は背反する関係にあり、中国では故意に人口増加を抑えて個人の権利を増やしている。

1961年から2010年までの世界人口と穀物生産量の増加率を見ると、世界人口は2.3倍、穀物生産量は2.8倍だった [45]。穀物の増加が人口増加を支えている事が分かる。一方で日本の平地は建物と宅地で占められており、自給率も低く人口が増えにくい。2000年の国別エネルギー消費量を見るとアメリカ合衆国は中国の10倍であり [44]、先進国と途上国で大きく異なっている。

貨幣を使って人口との関係を見る事も可能だが、貨幣は人間の思惑などで相対的な価値が上下するため安定的でない。特に途上国の通貨価値は不安定である。現実的権利の方が安定的に解析できる。



権利	{	対自然物	人口が増えれば減る、量の制約
		対人工物	科学技術で増やせるが限界もある
		対人間	人口が増えても変わらない 行動者と行動資源は常に同数、人口と無関係

現実的権利と人口で明確な解析可能、生物と同じ話、貨幣より明確
 先進国では権利が増えにくい、現在の総量が大きい、人口も増えない
 途上国では権利が増やせる、先進国と違い限界ではない
 途上国の人口増加や権利増加

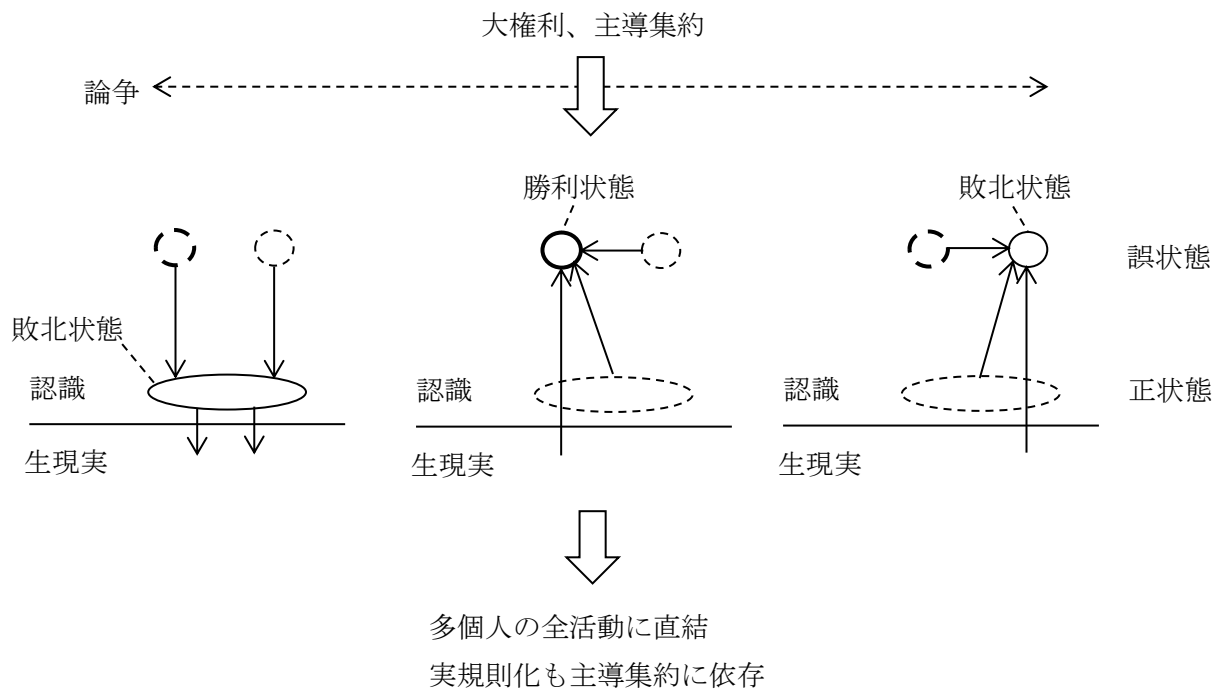
図 5-34 権利と人口

5.5.4. 主導集約と正者

権利が大きい個人は多個人を主導する。認識の集約においても同様で、論争が発生した際に自分の認識を勝利状態とする。これを主導集約と呼ぶ。主導集約は多個人の全活動に直結し、実規則化も主導集約に依存する。権利の大小が均等なら共有妥協状態による平均集約となり、主導集約は起こらない。中間的な場合は、主導集約と平均集約が混在する事で集約状態となる。

集約状態を正状態とするためには、正者が大きな権利を持つべきである。人間の生現実化による正集約が必要であり、中立や平均集約でなく現実的でなければならない。普通の認識は多個人多閉鎖によりバラバラであり、平均集約でも妥協の産物にしかならない。誤者が権利を持つと様々な問題が起こる。共同行動における参加生満足の不成立や、無制限権利などの問題が発生する。

権利を持つのが「賢い」個人や「優秀な」個人でない事に注意する必要がある。これらの評価は必ずしも認識の正しさに結び付かない。生現実への正しさが評価基準である事を明確に理解しなければならない。人間を生現実化する事で、生現実への正しさを得る事ができる。これにより明確な予測が可能になり、別実区分に対しても認識を繋げる事ができる。このような能力は多個人の生満足増加において非常に重要である。



正者が権利を持つべき、開放現実による正集約
 中立や平均集約でなく現実的、普通でも多個人多閉鎖でバラバラ
 誤者が権利を持つと様々な問題、参加生満足なし、無制限権利

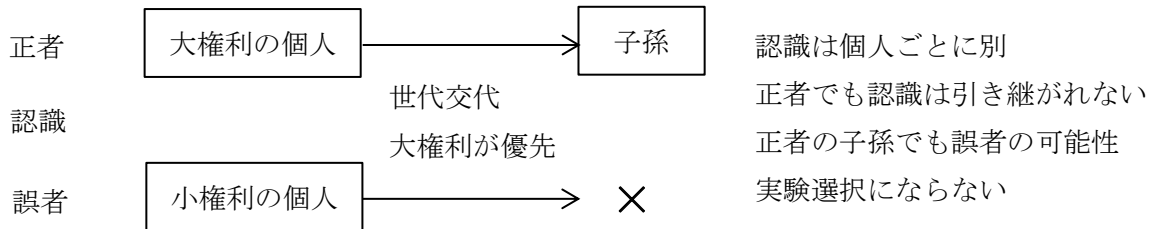
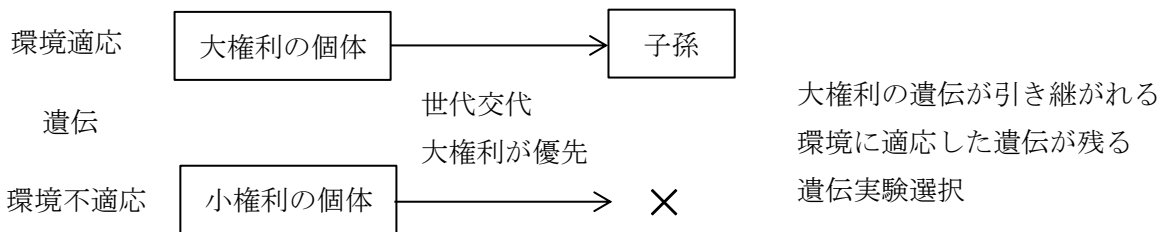
図 5-35 主導集約

遺伝は環境に適応した個体の権利が大きくなり、世代交代時に優先される。環境に不適応の個体は権利が小さくなり、世代交代が困難になる。権利の大きな個体の遺伝子が引き継がれ、環境に適応したい遺伝が残る。これは遺伝実験選択であり、遺伝子の「正しい規則」を遺伝子が存続しうる状態と見なした実験選択である。

認識においても、正者は権利が大きくなり、誤者なら権利が小さくなる。世代交代において権利の大きい個人が優先される。しかし認識は個人ごとに別であり、正者の認識も引き継がれない。正者の子孫でも、誤者の可能性が起こる。認識の世代交代は実験選択にならない。個人の寿命ごとに認識と権利の関係は再構築されるため、正者の権利は必ずしも大きくなる。これは創業者が時間を掛けて会社を大きくして、2世や3世が会社を潰す、という例で典型的に見られる。

主導集約により権利が大きい個人の認識が優先されるが、この認識が正しいとは限らない。主導集約は必ずしも正しく働かない。知性により認識を正しく扱わなければならない。社会として正者に対し権利を与える必要がある。

正しい認識に対する権利が恒常的に大きくなっている状態が文明である。人間は文明を最初から持っていた訳ではなく、ローマ文明のように途中で弱体化した例もある。ルネサンス以降に西洋人が「恣意的」に文明を維持したからこそ発展が続いたのである。知性により正者が権利を持つよう仕向けなければならない。



個人の寿命ごとに認識と権利のやり直し
 正者の権利が大きくなる
 主導集約は必ずしも正しく働かない
 知性により認識を正しく扱う必要
 社会が正者に権利を与える、文明の維持

図 5-36 権利と遺伝と認識

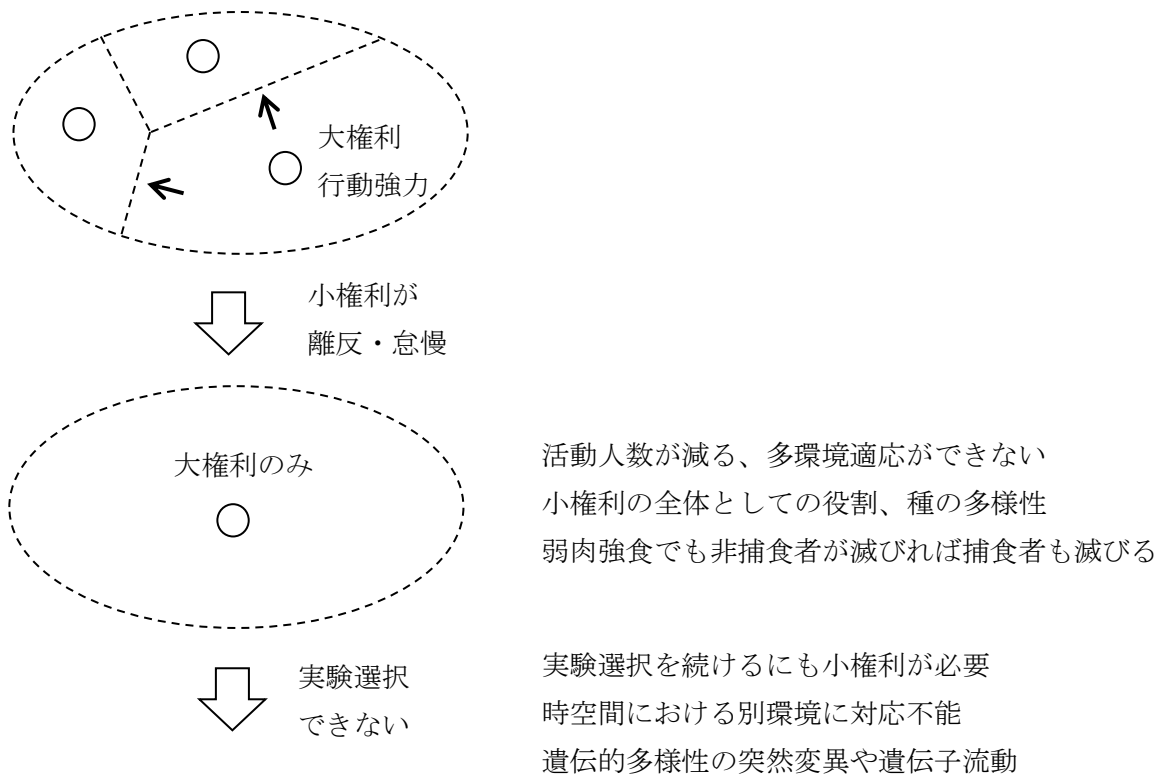
5.5.5. 小権利と多様性

大権利の個人が際限なく強力になり、小権利が離反・怠慢になる場合を考える。その集団・社会における活動人数が減り、多環境適応ができなくなる。小権利の個人でも全体としての役割がある。生物においても種の多様性が必要で [27]、弱肉強食でも非捕食者が減れば捕食者も減ってしまう。多環境適応のためには、遺伝的規則と同様に制限付き権利が必要である。これらは生現実上の規則でなければならない。

活動人数が減ると実験選択もできなくなる。実験選択により正者が残ったとしても、全員の認識が同じになれば次の実験選択ができない。実験選択を続けるには小権利の個人も必要である。誤者を残してしまうのは問題があるので、他の方法で小権利の個人を作るべきである。ある生物集団の遺伝的多様性は、突然変異や遺伝子流動により保たれている [27]。正者が残った段階からの認識の変化や、外部からの流入により、別の認識を持つ個人を作るのが正しい。

推測による規則発見ができれば実験選択の問題は回避できる。しかし人間は複雑なので、ある程度の実験選択は必要になる。多環境適応の問題は回避不能である。

大権利だけが残る弱肉強食や競争原理は誤りである。「弱肉強食」も「競争原理」も、あまり学問的な言葉ではない。一方で「平等」が正しい訳でもない。実験選択による正者の大権利は必要である。生物と同様に権利の大小が混在している状態が正しい。



個体でなく全体の問題、人間の多様性、生物多様性に近い
制限付き権利が必要、生現実上の規則
大権利だけが残る弱肉強食や競争原理は誤り

図 5-37 小権利の必要性と多様性

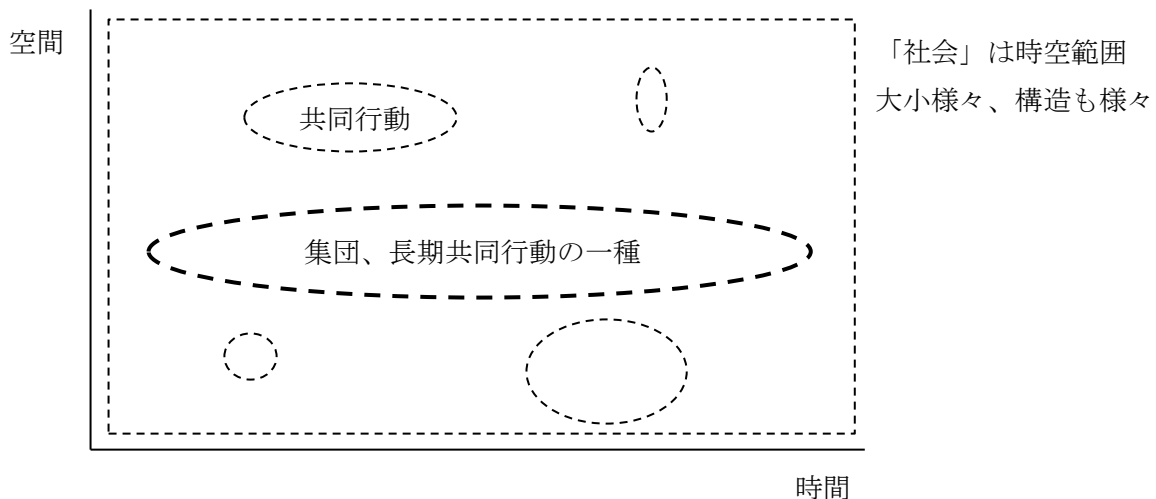
5.6. 集団・社会と規則

5.6.1. 集団・社会と共同行動

共同行動には時空間上で様々な種類がある。集団は時間的に長期である事が必須であり、長期共同行動の一種である。長期共同行動であっても必ずしも「集まる」とは限らないので、長期共同行動は集団を包含する。社会は時空の範囲を示し、大きさも構造も様々である。共同行動や集団の大きさも様々であり、社会より大きい場合もあり得る。

それぞれの共同行動に対して、参加・不参加や怠慢が存在する。集団に対しても常に参加するわけではなく、集団に対する出入りもある。多個人は複雑で、個人ごとに独立した感情を持つ。それが人間の遺伝的な原則である。遺伝的外規則の場合も実規則化の場合も、個人の目的は生満足である。共同行動が成立するには全員の参加生満足が必要であり、相互生満足が必要である。

集約は規則の一種であり、集約した方が規則的になる。ただし遺伝的内規則など他の規則と合わせて考える必要がある。人間の生命活動の目的は生満足であり、集約しても生満足が得られなければ意味はない。



共同行動への参加・不参加や怠慢
集団でも常に参加ではない、枠は不明確
多個人は複雑、個人ごとに独立、それが遺伝的原則
遺伝的外規則でも実規則化でも目的は生満足

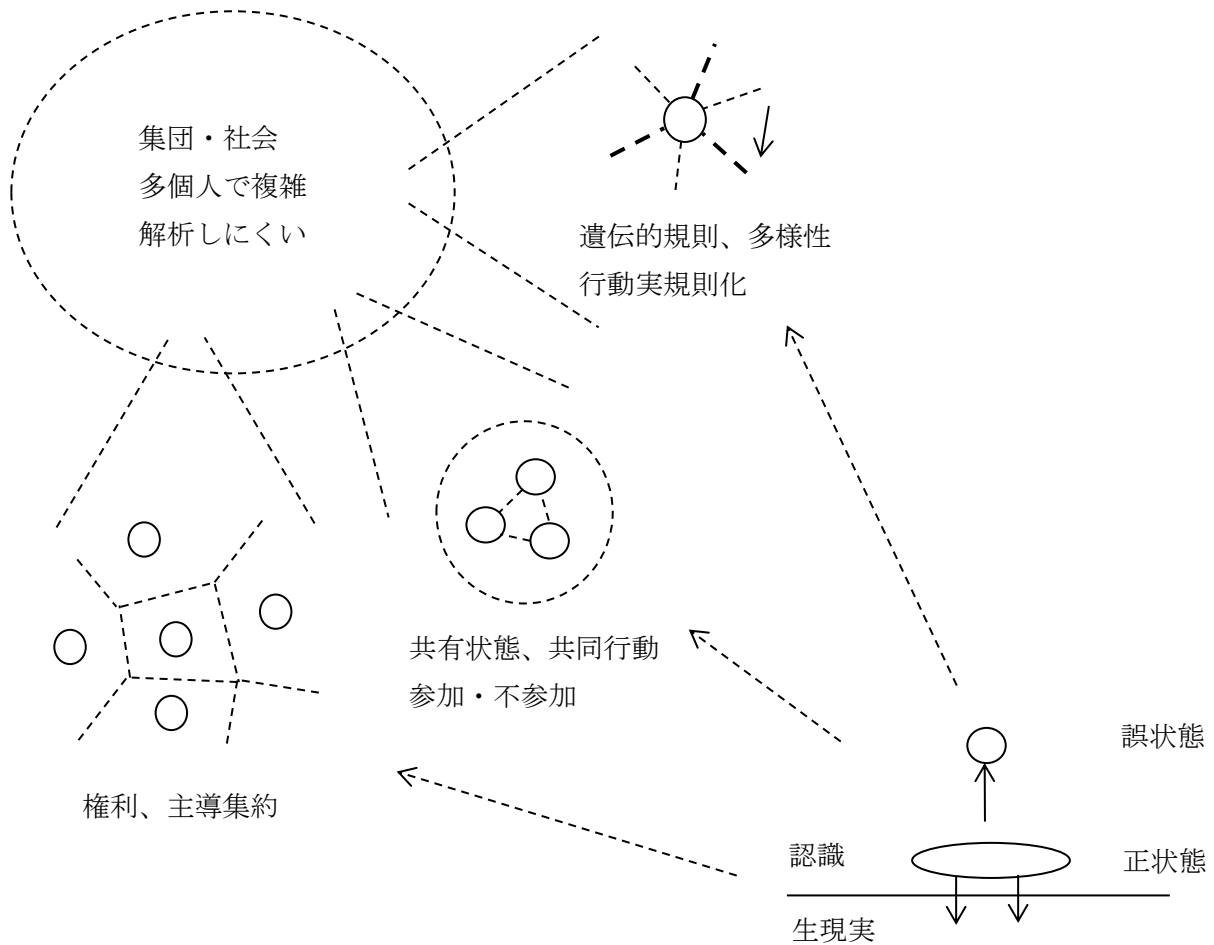
図 5-38 集団・社会と共同行動

集団や社会は別々の生満足を持つ多個人が構成するものであり、複雑であり解析しにくい。時空広域の複雑な多個人を解析するための何らかの手段が必要である。

認識の正誤は生満足の有無に直結し、その構造は広域でも変わらない。認識の正誤と実規則化・共同行動・権利を使う事で、広域でも明確な解析が可能になる。正しい認識でないと生満足が得られない。人間を生現実化する必要がある。人間の存在意義は認識でなく生命や遺伝であり、広域でも変わらない。

認識は行動実規則化の元になり、その正誤が生満足増加に影響する。人間は遺伝的規則と多様性を持ち、内

側の規則は変化しない。行動実規則化も遺伝的規則に合わせたものでなければならない。多個人の認識による共有状態は、接近と共同行動を生む。共同行動は参加・不参加により解析できる。大権利の個人は主導集約を生み、集約状態に影響を与える。これらの手法により複雑な集団・社会を解析できる。



認識の正誤と実規則化・共同行動・権利などで明確化、広域でも解析可能
正しい認識でないと生満足が得られない、人間の生現実化
人間の存在意義は認識でなく生命や遺伝、広域でも同じ

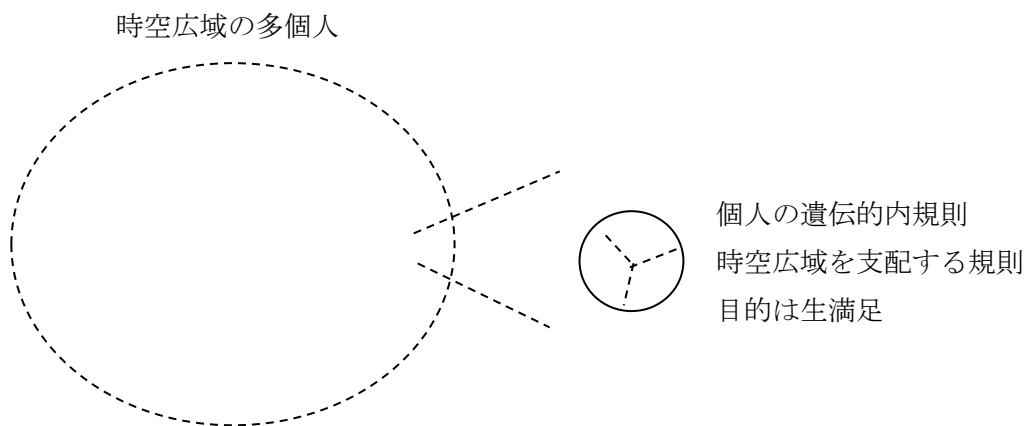
図 5-39 集団・社会と認識と実規則化・共同行動・権利

5.6.2. 時空広域の規則

時空広域の多個人においても、支配的なのは個人の遺伝的内規則である。人間の目的は生満足であり、その原則は時空広域においても変わらない。実規則化は生満足を得るための手段であり、生満足が得られなければ従う必要はない。過去から続く実規則化でも、空間広域の実規則化でも同様である。近現実開放により近現実から過去・空間遠方へ開放的に理解すべきである。

「自由」と言った場合には、目的が分からなくなってしまう。過去から続く実規則化でも、空間広域の実規則化でも、本人がそれを望めば自由になってしまう。自由は認識に基づく規則であり、それに従うのは誤りである。自由でなく遺伝的内規則に従う必要がある。

正しい認識でなければ生満足は得られない。これは時空広域でも同様である。人間を生現実化する必要がある。人間の存在意義は認識でなく生命や遺伝であり、時空広域でも変わる事のない原則である。認識を基準にして時空広域を見るのは誤りである。二重人間のため人間は誤って認識を人間の基準にしてしまう。人間を生現実化する必要がある。



過去から続く実規則化も、空間広域の実規則化も、従う必要はない
「自由」は目的が分からないので誤り、遺伝的内規則に従う必要

図 5-40 時空広域の規則

5.7. 主権国家

5.7.1. 主権国家

主権国家は、実規則化権利に対する規定共同行動を行う単位である。主権国家は権利以外にも様々な行動実規則化を行うが、特に権利が重要である。国内では実規則化権利により暴力を回避できる。国際的な規定共同行動もあるが、国内の規定共同行動より弱い。国家間の権利は遺伝的権利に近い状態であり、暴力による戦争などの問題が発生する。

空間広域においても、重要なのは個人の遺伝的内規則である。共同行動には全員の参加生満足が必要である。これは暴力の問題においても同様である。遺伝的外規則の一部である暴力による環境破壊と、共同行動参加による暴力の抑止に対して、生満足の総和を取って評価する必要がある。基本的には環境破壊の問題が大きいので暴力を抑止すべきだが、共同行動に参加生満足がなければ仕方がない。

国家により規定共同行動を集約して扱う事で、権利を規則的にできる。一方で内部の権利は多個人ごとに分散して扱われる。これにより権利を規則的にしつつも、多個人の遺伝的内規則に合わせる事ができる。

閉鎖などの誤った認識を持つ国家による、生満足が減少する場合もある。このような認識は修正する必要がある。主権国家自体が絶対的なものではなく、生満足を増やせなければ意味がない。国際的な規定共同行動でも同様である。グローバリズムの進展は国際的な規定共同行動の進歩によるものであり、グローバリズム自体が絶対的なものではない。現在のように実規則化権利の主体が主権国家なら、条約参加を国ごとに決めるのも自然な状態である。

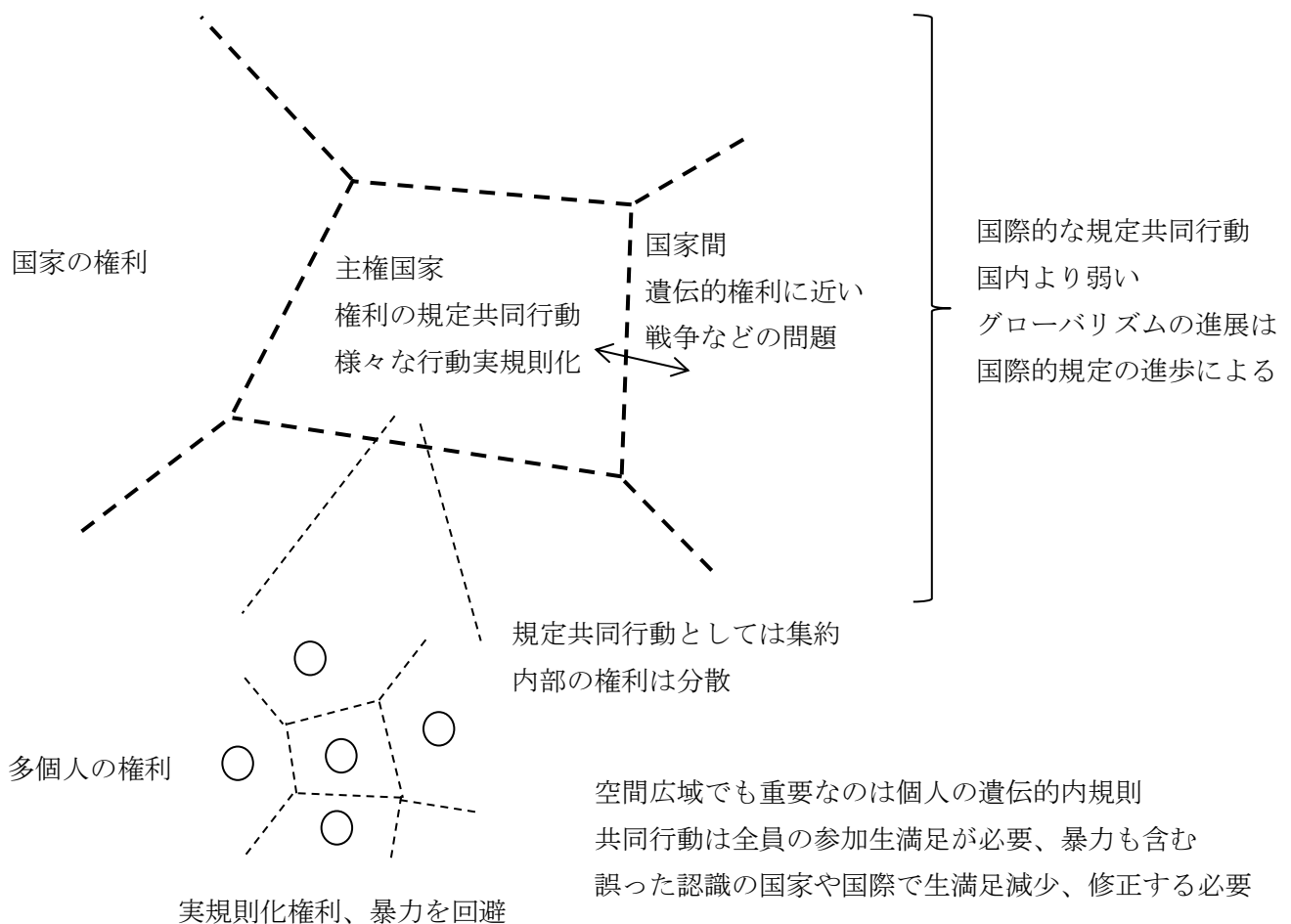


図 5-41 主権国家

主権国家も共同行動の一種であり、参加生満足がなければ離反すべきである。離反には怠慢と不参加があるが、国家の領土から外に出るのが困難なため、不参加は難しくなる。状況によっては国外脱出もあり得る。怠慢であれば容易で、普通の個人でも普通に行う事ができる。無職になって納税しない事も、国家に対する怠慢である。個人の目的は生満足であり、怠慢まで含めれば国家離反も一般的である。

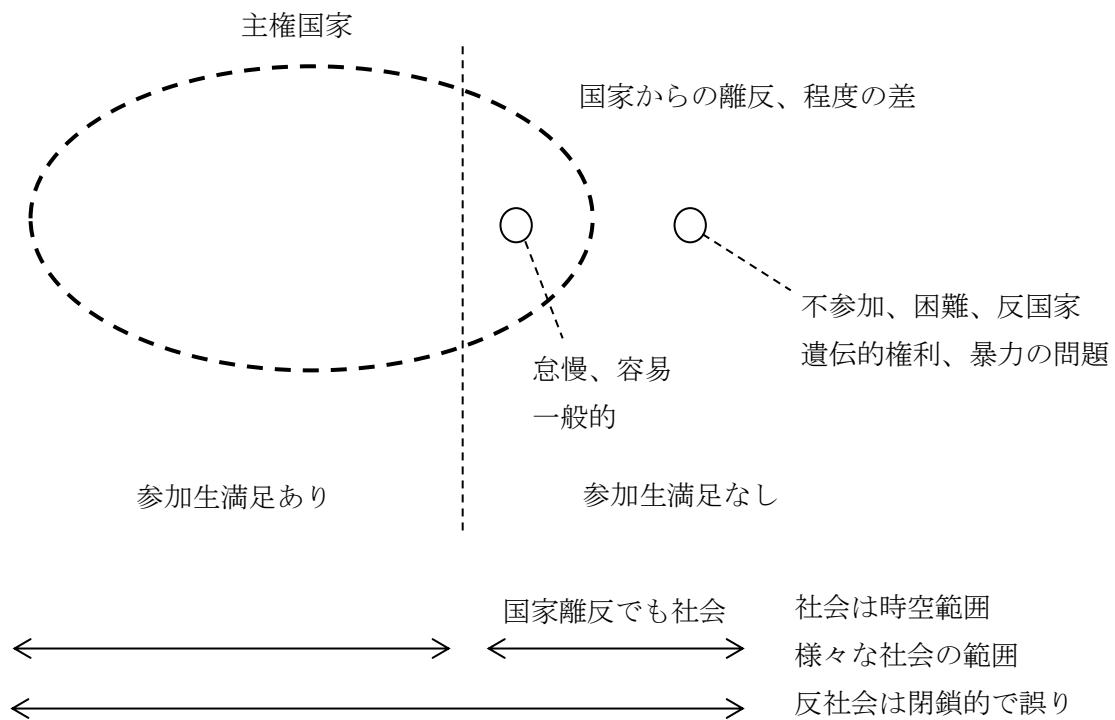
社会は時空範囲であり、様々な社会の範囲が存在する。国家から離反している部分でも社会の一部である。反社会は閉鎖的で誤りであり、国家に離反したとしても何らかの社会的行動を行わなければならない。これは犯罪者に近いグレーゾーンにおいて一般的に見られるものである。

国家への不参加は反国家となる。実規則化権利から外れて遺伝的権利になり、暴力の問題が発生する。反国家は必ずしも誤りでないが、不参加自体が困難なため生満足獲得も困難になる。主権国家から離反しても、何らかの実規則化権利により暴力を回避すべきである。

閉鎖した反社会的な認識による反国家は誤りであり、反社会性により国家離反部分の社会にも参加できなくなる。閉鎖により誤って社会の主要部分から距離が遠くなる。途上国において国家による参加生満足が成立しにくい状況であれば、反国家による生満足増加もあり得る。

国家は離反を止めるため参加生満足を与える必要がある。個人を外部から完全に支配する事はできず、強制的に働かせても怠慢を防ぐのは難しい。小権利の離反を防ぐため、制限付き権利を与える必要がある。また正

者の権利を大きくして、正しい認識で正集約すべきである。正者が離反すると問題が大きく、権利を大きくする事で離反を抑止できる。



個人の目的は生満足、怠慢まで含めれば国家離反も一般的
 反国家は必ずしも誤りでないが、生満足獲得は困難
 閉鎖した反国家は誤り、途上国なら反国家もあり得る
 国家は離反を止めるため参加生満足を与える必要

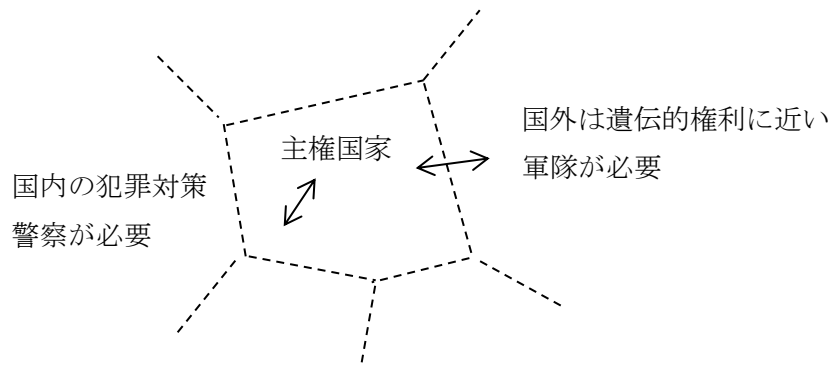
図 5-42 国家からの離反

5.7.2. 国家と暴力と小権利

主権国家は実規則化権利を規定する。実規則化権利が成立しなければ遺伝的権利になり、暴力が付随する。国家に反する遺伝的権利に対抗するためには、国家も暴力を持つ必要がある。国外であれば遺伝的権利に近く、軍隊という強力な暴力が必要になる。国内でも犯罪対策のために警察力が必要になる。

暴力は人間の遺伝の中にある規則であり、国家において暴力がなくなる事はない。ただし暴力による破壊は問題が大きいため、可能な限り破壊を抑えなければならない。暴力は威嚇として使用すべきである。兵器を無くす事は困難なので、スマート兵器により破壊を抑えた方が良い。

国家が破綻や統治困難になり、遺伝的権利と暴力を使うしかない状況もあり得る。このような状況でも暴力による破壊を防ぎ、実規則化権利に向かうべきである。国家転覆時も早急に別の国家を立ち上げれば安定するが、長く内戦が続けば疲弊してしまう。ずっと暴力と破壊が続くような状況では動物以下である。



実規則化権利が成立しなければ遺伝的権利
 国家による暴力の必要性、国内外とも
 暴力がなくなる事はない、破壊を抑える必要、威嚇・スマート兵器
 国家破綻時も破壊を防ぎ実規則化権利に向かうべき

図 5-43 主権国家と暴力

国家の中に小権利の個人がいる場合を考える。これには社会的弱者などが相当する。小権利の個人に対しても、大権利にするのではなく参加生満足を与える必要がある。小権利で従属していても必ずしも生不満ではない。小権利の個人に多くの権利を与えると、権利を奪われた大権利の個人が離反して問題が大きくなる。権利は人間の評価基準ではなく、生満足を得るための手段でしかない。国家に参加する事で参加生満足を得られれば、小権利でも離反はしない。

社会的弱者の意味も人間的で曖昧である。例えば女性は男性に比べて社会的弱者であるが、女性の数は人間の半分であり、大権利の女性も存在する。金持ちの女性を社会的弱者として扱うのはおかしい。権利や生満足は多個人ごとに別であり、社会的弱者も何らかの括りではなく個人ごとに見るべきである。社会的弱者として見るより、資産などを含む全体の権利として見た方が明確になる。これは差別や社会運動などでも同様である。被差別者の代表が金持ちで発言力も強ければ、それは大権利の個人である。

無制限権利により大権利の個人の権利が無制限拡大すると、小権利の個人の参加生満足が得られなくなる。これでは小権利の個人が離反してしまうため、制限付き権利を与える必要がある。また正者の権利を大きくして認識を正集約する事も重要である。これらを実行して全員に参加生満足を与える必要がある。

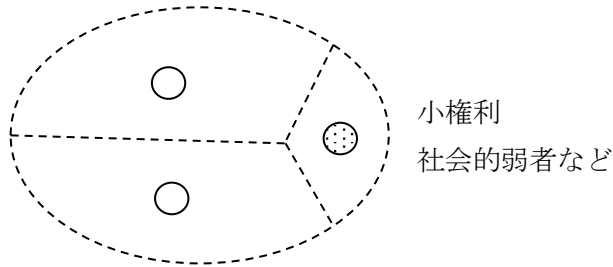
国家は実規則化権利を守るため、国内外で暴力を必要とする。破壊を抑えた威嚇的な暴力が望ましい。小権利の人間が権利を得るために、国家から離反し暴力で遺伝的権利を拡大する場合がある。これは犯罪の一種である。このような行動を取っても、実規則化権利が減る上に、国家からの攻撃を受けて生満足が減少する。これには通常の仕事からの追放や、民事的・刑事的な追及などが相当する。このような状況で生満足を増やす事は困難である。

社会は構造でなく範囲であり、人間が複数いれば常に社会が存在する。国家からの離反はできても社会からの離反はできない。例え国家から離反する状況になっても、社会の中で生満足を得なければならない。暴力を使って遺伝的権利を増やすのは不適切である。国家に対して怠慢をしつつ、反国家的な社会の中で生満足を得る方が適切である。可能ならば国外に出る事も考えられる。

正しい認識を持ってない誤者は、権利が小さくなって暴力に向かう可能性がある。これは社会的な問題であり、このような誤者の認識を正す必要がある。

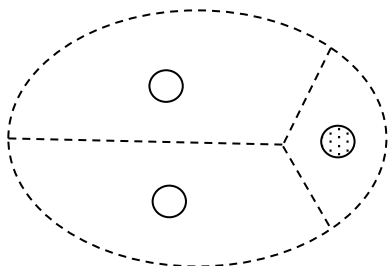
社会と実規則化権利が正しく機能していなければ、犯罪者は個人的な誤りと言えなくなる。このような状況では社会そのものに問題があり、社会の方を修正する必要がある。

国家、実規則化権利



小権利を大権利にするのではなく、参加生満足が必要
 従属は必ずしも生不満ではない
 小権利を大権利にすると、大権利が離反の可能性
 制限付き権利や正者の大権利が必要

国家、実規則化権利

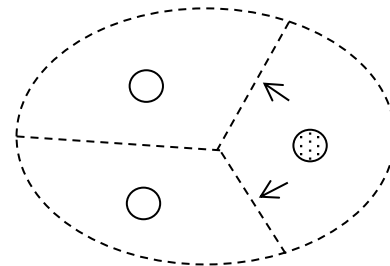


国家は内外で暴力が必要
 破壊を抑えた暴力

小権利が離反
 暴力の使用、犯罪



反国家、遺伝的権利



暴力による大権利
 実規則化権利は減る

国家からの攻撃
 生満足減少

国家から離反し、暴力で遺伝的権利を増やしても生満足は得にくい
 社会は範囲、反国家はあるが反社会はない
 国家から離反しても、社会の中での生満足を得る必要
 誤者が小権利から暴力へ向かうと問題、認識を正す必要

図 5-44 国家と小権利と暴力

5.8. 様々な集団

5.8.1. 複合同行行動と複合集団

動物の群れは遺伝的規則に基づく。動物の種類ごとに様々な群れがあり、人間の遺伝的集団もその一種である。動物も多個体のため複雑な構造になり、群れの外との関係や、群れの出入りなどが存在する。他種の生物との間であれば、短期的な共同行動もよくある。

人間における現代の社会構造は、様々な共同行動から構築されていて複雑である。これを複合同行行動と呼ぶ。複合同行行動は動物にはない形式であり、実規則化によるものである。会社や官公庁のように、個人が勤務する事で貨幣を取得する集団を勤務集団と呼ぶ。勤務集団は「仕事」をする集団である。個人は勤務集団と家族の集団の両方に所属する。またそれぞれの集団の外部と権利交換を行う。権利交換は実規則化短期共同行動である。さらに権利を規定する規定共同行動が存在し、そのための集団である国家に所属する。複合同行行動の集団部分を複合集団と呼ぶ。

複合同行行動の複雑さも、多個人の複雑さによるものである。元々の遺伝的集団の枠が不明確である。同種の短期共同行動も群れ内ならある。複合同行行動はこれらを拡張したものであり、遺伝から大きく離れている訳ではない。ただし他の生物より複雑性は高い。個人ごとに様々な機能を持って連携しており、多環境適応をしている。

複数の勤務集団がある事は、実験選択の意味でも有効である。勤務集団ごとに別の実規則化を行う事で、生現実上でどちらの実規則化が正しいかを判別できる。多環境適応や実験選択は多様性の一種であり、複合同行行動や複合集団も多様性と言える。これは生物の多様性を人間の実規則化に拡張したものと言える。

集団も多個人のため複雑になる。遺伝的集団の内部にも一体化の濃淡があり、均質ではない。集団内に短期共同行動や子集団が存在する。実規則化による勤務集団でも規模が大きくなれば、内部に子集団ができて階層化する。

遺伝的集団でも、養育時に一時的に集団から離れる、というような事象は普通に存在する。複合同行行動はこれを集団の外に拡張したものと言える。遺伝的集団でも複合同行行動でも、多個人による複雑さは共通している。

複合集団の構造は複雑だが、全体的な規則はある。勤務集団・家族・短期共同行動により全体的な解析が可能である。これは流体の全体的解析が可能であることと似ている。

勤務集団・家族は現実的な意味がある程度分かるが、友人・恋愛は現実から離れて人間的・感情的になりやすい。友人・恋愛についても生現実化する必要がある。友人・恋愛であっても相互生満足を求めるのが正しく、人間的・感情的な対人により生不満になるのは誤りである。相互生満足は満足感でなく生息状況である。

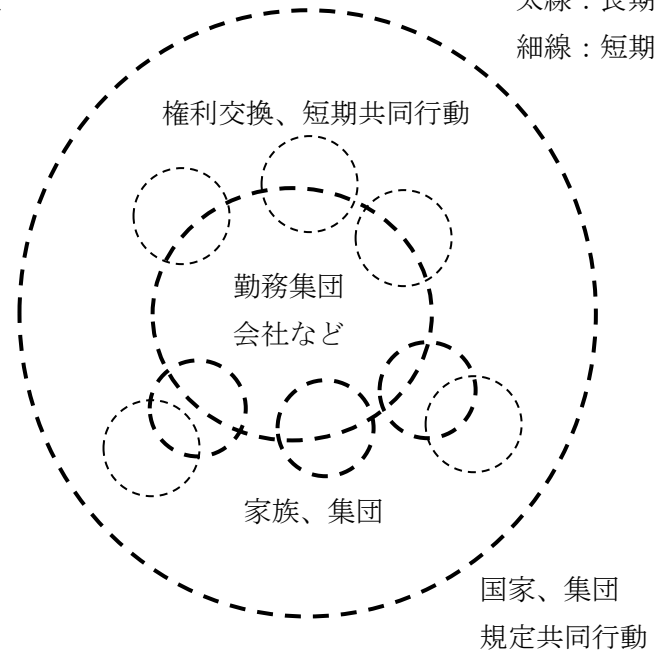
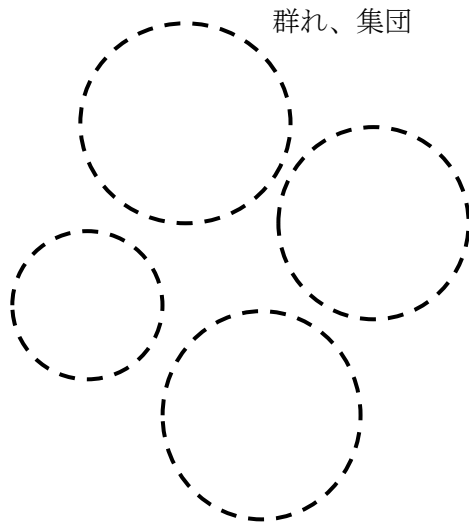
動物の群れ、遺伝的規則

複合共同行動、複合集団、実規則化

空間位置

太線：長期

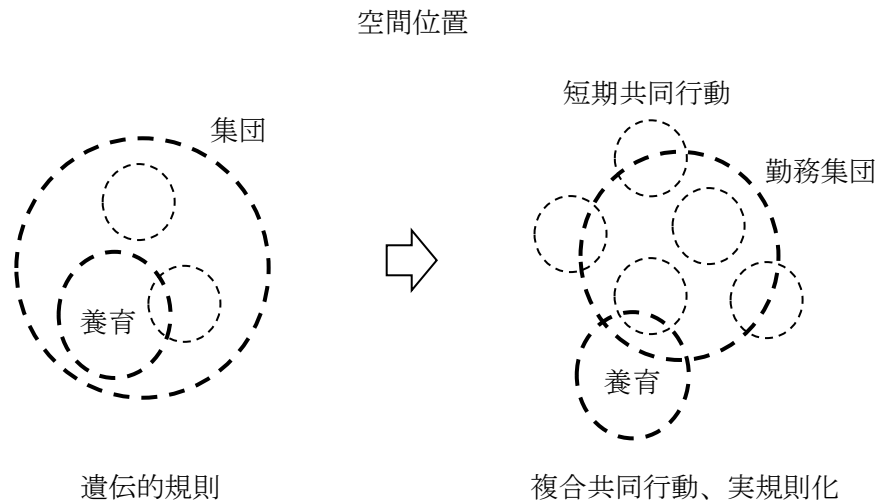
細線：短期



動物の種類ごとに様々な群れ
人間の遺伝的集団もその一種
多個体のため複雑
群れの外や、群れの出入りなど
同種の短期共同行動も群れ内ならある

複雑な現代の社会構造、多個人のため複雑
遺伝から大きく離れている訳ではない
他の生物よりは複雑
個人ごとに様々な機能、多環境適応や実験選択
勤務集団・家族・短期共同行動で解析可能
友人・恋愛は人間的になりやすい、生現実化する必要

図 5-45 動物の群れと複合共同行動



集団内の短期共同行動や子集団は常にある、集団の一体化の濃淡
 勤務集団も大きくなれば子集団ができる、階層化
 複合共同行動は集団外への拡張、多個人の複雑さは同じ

図 5-46 集団内の共同行動と複合共同行動

5.8.2. 勤務集団と家族の分離

勤務集団と家族が分離する過程を考える。人間でも元々は遺伝的集団だった。集団の環境は自然物が大半であり、自然物との相互影響により生満足を得ていた。これが集団の遺伝的規則である。人間社会が進歩するにつれて、集団の環境は人間と人工物が大半を占めるように変化した。これにより集団の遺伝的規則が成立しなくなったのが、分離の根本的な要因である。

遺伝的集団において、同種の生物は1つの群れに所属する。集団は環境の自然物と相互影響し、食料確保などを行う。相互影響には他種生物との短期共同行動も含まれる。子供の養育は集団内で行われる。

集団の環境に人間と人工物が増えると、自然物との相互影響が減る。その代わりに人間と人工物との相互影響が必要になり、実規則化が増加する。人間との相互影響においては短期共同行動が必要になる。食料の採取の代わりに権利交換を行うのが典型例である。人工物の作成も実規則化である。

現代社会ではさらに人間と人工物が増え、自然物との相互影響が少なくなる。子供の養育は遺伝的規則なので、実規則化が増加すると合わなくなってくる。子供は実規則化への対応が困難である。結果として実規則化を主体とする集団と、遺伝的規則を主体とする集団に分かれる。前者が勤務集団で、後者が家族である。これにより複合集団が成立する。複合集団は実規則化の進展により生じるものである。

遺伝的集団でも複合集団でも、多個人の複雑さは変わらない。遺伝的集団でも内部構造は複雑であり、複合集団は一部が外に出ただけとも言える。実規則化は遺伝的規則より生満足が増加しないと成立しない。複合集団でも遺伝的規則からそれほど大きく離れる事はできない。

勤務集団は実規則化が主体である。主な行動として、短期共同行動、権利交換、人工物作成などが挙げられる。家族は遺伝的規則が主体である。主な行動として、養育、睡眠、食事、遊びなどが挙げられる。子供の実規則化への対応は困難であり、特に幼児においてその傾向が強い。これは社会の実規則化に対する制約になる。

勤務集団は遺伝的規則より多い人数で集約する。集約人数が多い方が規則的になるためである。一方で家

族は遺伝的外規則と同じ人数でしか集約しない。家族においては集約の規則より遺伝的規則の方が強いためである。

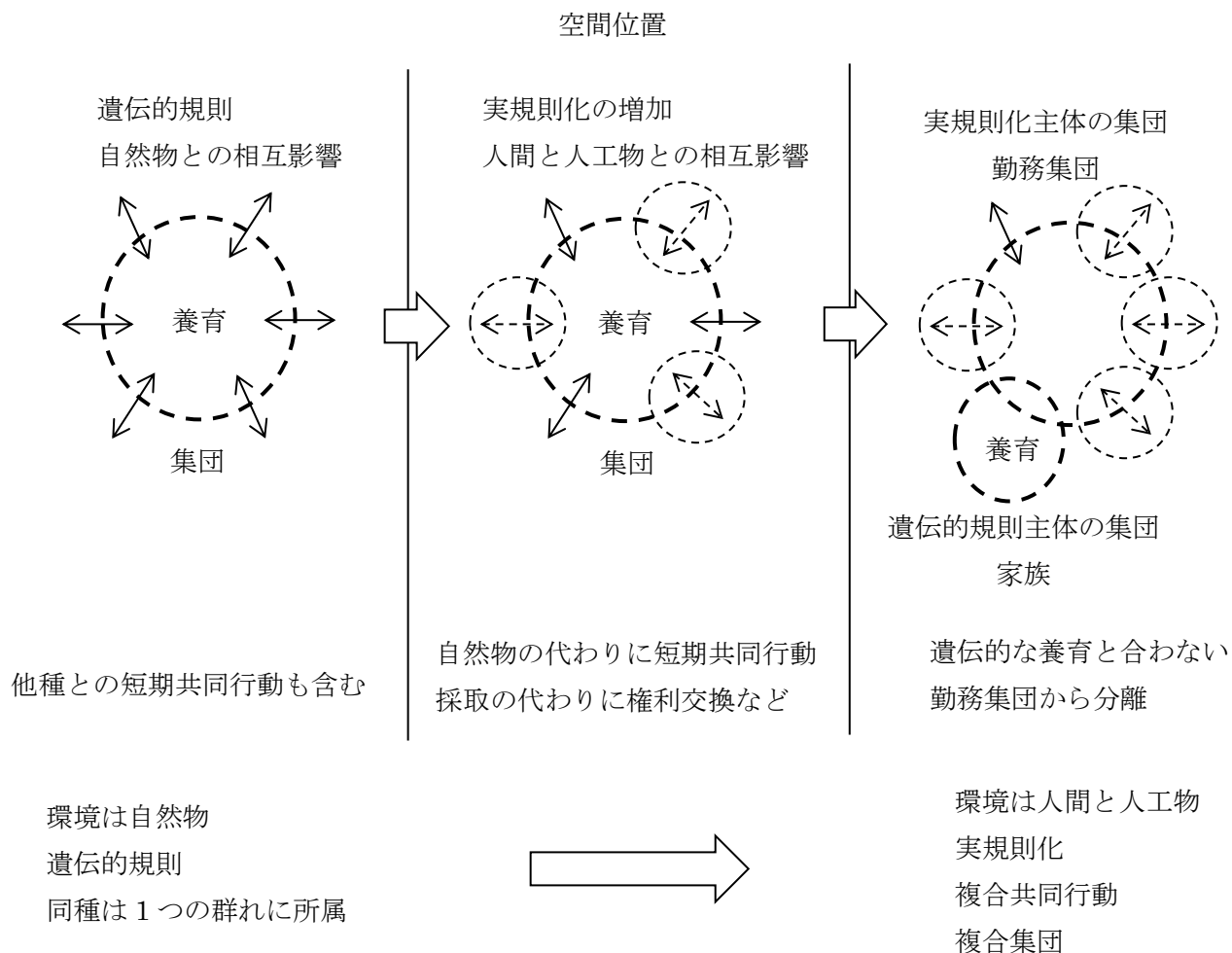


図 5-47 勤務集団と家族の分離



図 5-48 勤務集団と家族の行動

5.8.3. 固定集団と因習集団

集団の枠が固定され、離反や不参加や怠慢を許容しない集団を固定集団と呼ぶ。固定集団は集団としては規則的だが、多個人の遺伝的規則に整合していない。多個人は独立した感情を持ち、完全な階層集団を作るものではないからである。アリなどの真社会性であれば固定集団になるが、人間は真社会性ではない。固定集団を実現するには参加生満足が必要である。しかし多個人の原則から外れるので、それも困難である。

固定集団は、本来あるべき多個人の離反がない、と言う意味で閉鎖的になる。ただし固定集団でも外部との関係はあり、完全な分断や閉鎖ではない。誤りが強くなれば閉鎖性も強くなり、外部との距離も遠くなる。

集団の枠を固定せず、離反や不参加や怠慢を許容する集団を非固定集団と呼ぶ。非固定集団は集団としては不規則だが、多個人の遺伝的規則に整合し、参加生満足も容易になる。主権国家でも怠慢は普通に存在する。

固定集団だと遺伝的規則にある多様性がなくなり、実験選択や多環境適応が困難になる。非固定集団なら多様性が確保でき、社会の進歩に繋がる。

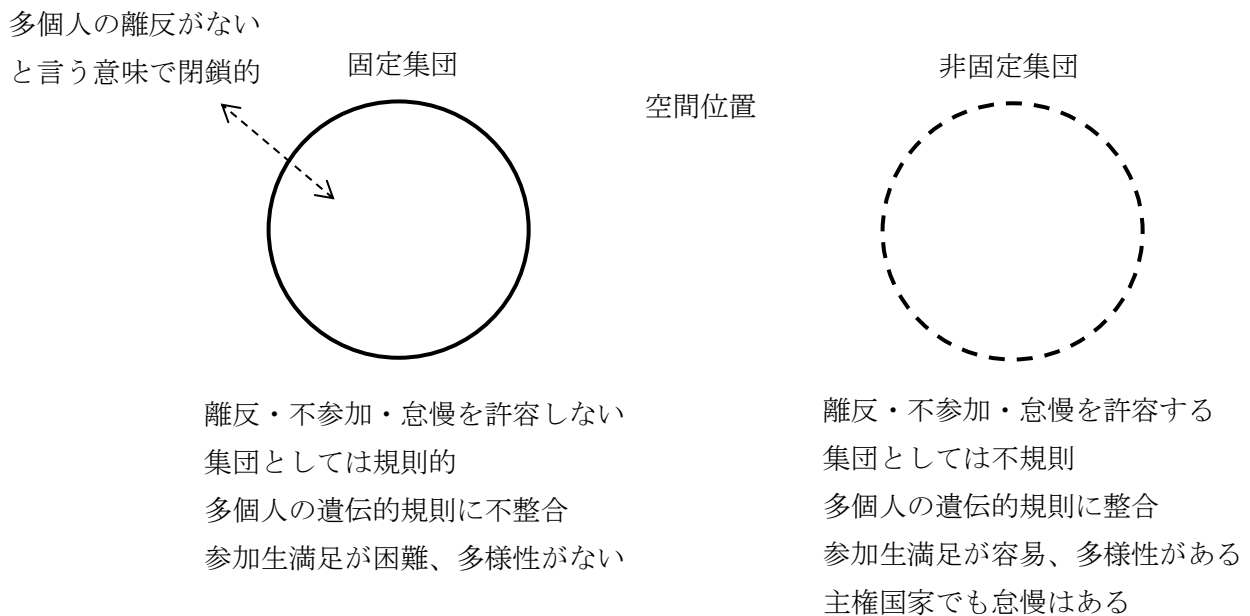


図 5-49 固定・非固定集団

人間的で曖昧な因習による固定集団を因習集団と呼ぶ。これには宗教、民族、部族、親族などが相当する。因習自体が人間的で誤りであり、それに基づく固定集団なので大きな問題がある。過去に多く存在し現在では減っているが、途上国を中心に現在でも存続している。

因習集団以外の固定集団には、強権的国家、帝国主義、全体主義などがある。帝国主義は植民地において不自然で人為的な分断を引き起こした。過去の共産主義も固定集団的であった。現在の中国では改善されているが、十分な改善ではない。

過去においては因習集団の上に王国などの強権的国家が存在していた。宗教や民族などは国家の枠から外れて複合集団になる場合もある。

固定集団は遺伝的規則ではなく実規則化であり、これに従う必要性はない。昔からの因習集団でも同様であり、因習自体が問題で守る必要はない。遺伝的規則から遠く離れるため、参加生満足も困難になる。近現実開

放により近現実から過去・空間遠方へ開放的に理解すべきである。現在の集団は、複合非固定集団であるべきである。

因習集団は途上国に多いが、先進国でも残っている。ヤクザやマフィアなどの古い犯罪組織も因習集団と同様の特性を持つ。これらはすべて修正しなければならない。

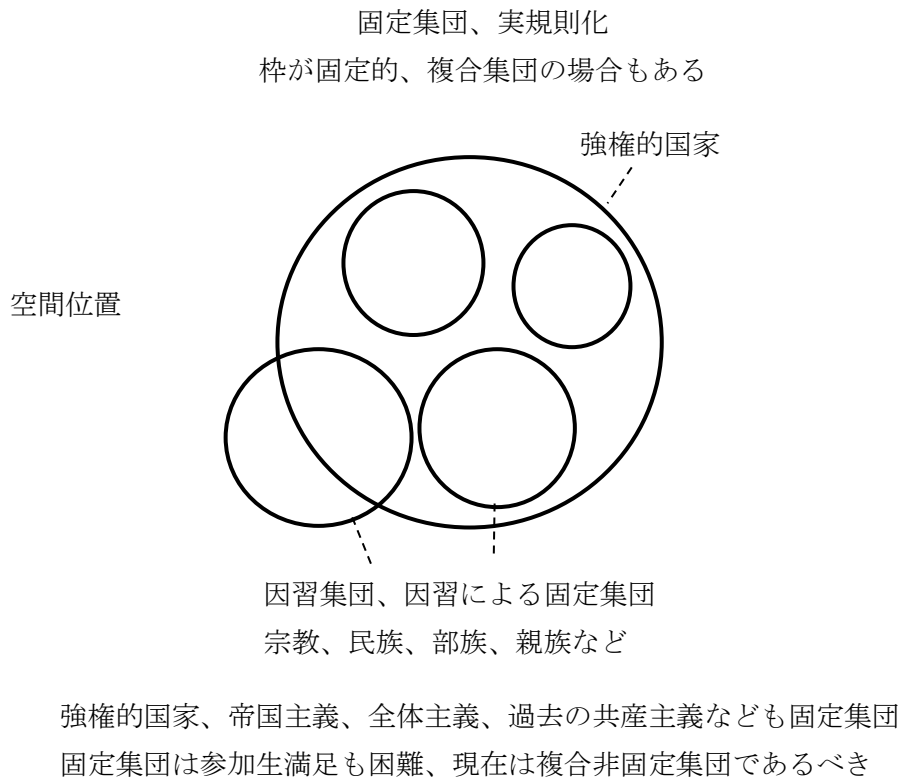
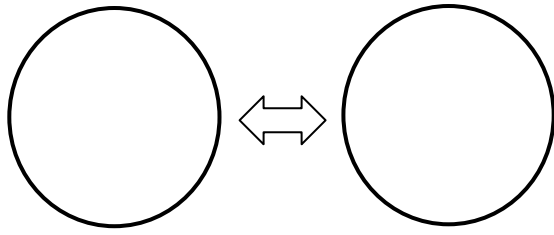


図 5-50 固定集団と因習集団

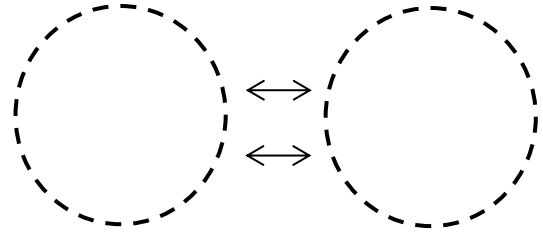
固定集団は全体が離反せずに動くため、他の固定集団と全面的な離反的競争を引き起こす。これは動物には存在しない規模であり、遺伝的規則や多個人にある別々の生感情と合わない。非固定集団であれば部分的な離反が起こるため、離反的競争も部分的になる。これは動物にも存在する規模であり、遺伝的規則や多個人とも合う。

戦争は暴力を伴う大規模な離反的競争であり、環境や実規則化の破壊による問題が大きい。科学技術の進歩により戦争の被害は拡大しており、特に世界大戦では甚大な被害が発生した。世界大戦は帝国主義や全体主義などの固定集団と、高度に進歩した大量破壊兵器が引き起こした問題である。現在でも因習集団による民族紛争など、同種の問題が続いている。民族・部族紛争は中東・アフリカなどで多い。

身分制度の時代でも、戦争時に貴族が非固定化して離反し、被害が小さくなる場合もあった。そう考えると世界大戦の時代は固定集団による問題が非常に大きかったと言える。現在でも因習集団の問題は残っており、非固定化していく必要がある。



固定集団、全面的な離反的競争
動物には存在しない規模
遺伝的規則や多個人と合わない



非固定集団、部分的な離反的競争
動物にも存在する規模
遺伝的規則や多個人と合う

戦争は暴力を伴う大規模な離反的競争
科学技術により戦争の被害拡大
世界大戦は甚大な被害、現在でも民族紛争など
身分制度でも貴族が非固定化して離反していた

図 5-51 固定集団と離反的競争

5.8.4. 国家と内部集団

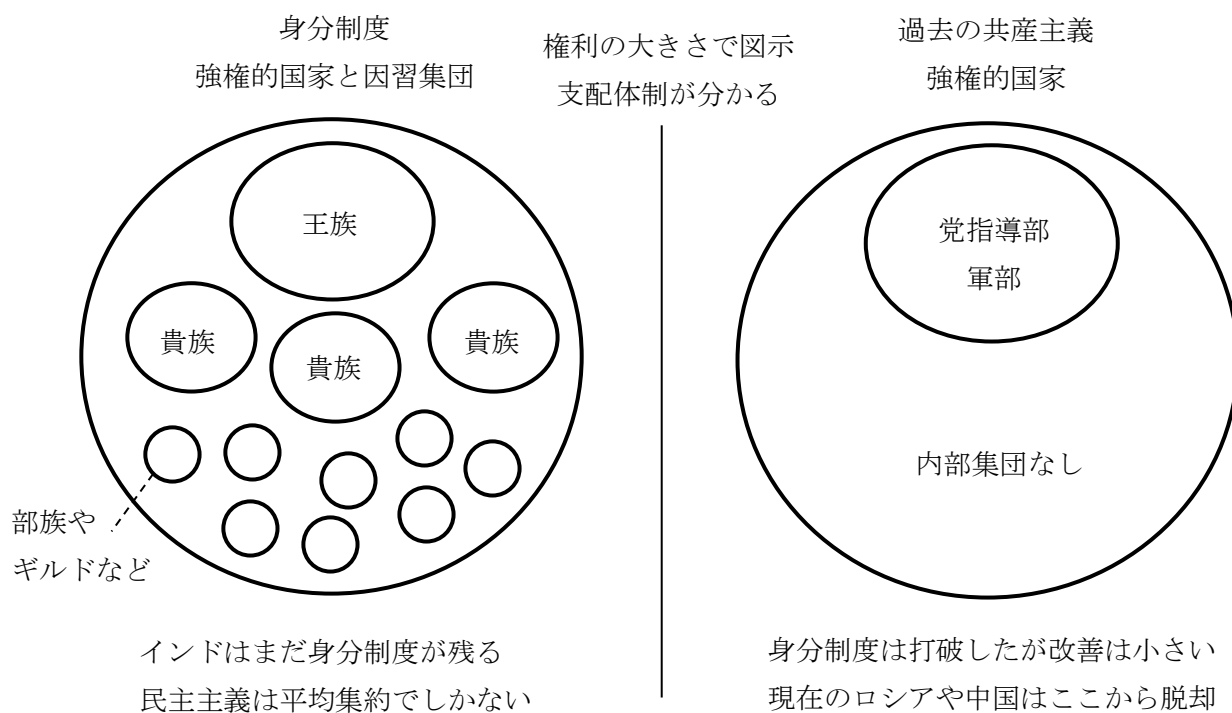
国家と、その内部の集団について検討する。国家だけで内部集団がない方が単純で規則的になる。しかし内部集団がないと遺伝的規則と合わず、実験選択や多環境適応ができなくなる。全体主義や、過去の共産主義がこれに当たる。どちらも軍事力増強のみに暴走してしまった。

国家がなく内部集団のみの場合は複雑で不規則になる。全体として不規則なため生現実が得られなくなる。アナーキズム（無政府主義）がこれに当たる。運動としては存在していたが現実性に欠け、大きな政治勢力にはなり得なかった [40]。

国家も内部集団も必要であり、両者を含む複合集団でなければならない。

「自由」と言う言葉は人間的で曖昧なので、集団を解析する場合にも使用できない。例えばアナーキズムは自由と呼ばれる事もあるが、「政府に属する自由」と言う事もできる。宗教に対しても信仰する自由と信仰しない自由がある。何が正しいのかは明示できない。自由でなく生満足や遺伝的内規則に基づく必要がある。

これらは明確に生不満であると判別できる。問題は因習集団の内部で不満とっていない事である。過去から続く実規則化でも従う必要はなく、遺伝的内規則による生満足を求めるのが正しい。



枠の大きさは人数の大小でなく、権利の大小
 支配層が固定集団だと、優秀な正者の確保が困難
 大権利の部分で大規模な暴力的争い、遺伝的権利、全体の生満足減少
 強権的國家は減っているが、因習集団は現在でも大問題

図 5-53 固定集団の國家と権利

5.9. 集団・社会の複合的分析

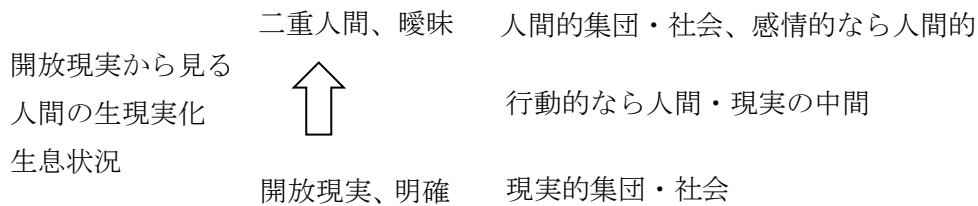
5.9.1. 集団・社会と人間・現実

明確な開放現実から見た人間の生現実化により、曖昧な二重人間の問題を回避できる。生息状況を見るべきであり、集団・社会でも同様である。明確な現実的集団・社会から、曖昧な人間的集団・社会を見る事で、曖昧な二重人間を明確化できる。感情的な集団・社会であれば人間的になり、行動的な集団・社会であれば人間・現実の中間になる。行動実規則化や権利などは行動的であり、人間・現実の中間にあたる。

現実的集団・社会は、現実から見る事で明確に理解できる。扱う人工物・自然物や、生物・物理・身体などから集団・社会を見る事で、集団・社会を明確化できる。

重要なのは誤った曖昧な人間的集団・社会の認識を直す事でなく、正しい明確な現実的集団・社会の認識を作る事である。誤った認識の修正でも、正しい方向を示さなければ意味がない。正しい現実的集団・社会を理解する事で、誤った人間的集団・社会を直す事が可能になる。

生物と同様に現実的な行動分析が必要である。医学・生態学的な、食事、運動、養育、住居などを分析すべきである。人間に対する生物学的な視点により、生物の適正な生息状況と同じように人間を理解できる。これは人間を飼育する事ではない。人間は誰かに飼育されて生存している訳ではないからである。飼育よりも自然公園における生物の管理に近い。



生物と同様に現実的な行動分析、医学・生態学的、食事、運動、養育、住居など

図 5-54 集団・社会と人間・現実

集団・社会の事象について、人間的・現実的で分けて以下の表にまとめた。ここには遺伝的権利と実規則化が混在しているが、認識の正しさで見れば同じように扱う事ができる。権利には遺伝的権利も実規則化もあり、貨幣の場合は実規則化しかない。

人間的な集団・社会の事象には、因習、宗教、良識、高級感、因習集団、民族などが挙げられる。これらは曖昧で閉鎖のためバラバラになる。宗教でも宗派が違えば争いが絶えず、民族でも同様である。人間的評価という点では同じでも、良識と高級感ではまったく方向性が違う。因習は特に途上国で問題が大きい

友人・恋愛は因習ほどではないが人間的・感情的になりやすい。これらも生現実化すべきである。

中間的な集団・社会の事象には、法、契約、スポーツ、常識、貨幣、勤務集団、家族などが挙げられる。これらは現在の主流であり、人間的要素が含まれるため少し曖昧になる。常識や貨幣においても、現実的で生活に必須の部分と、良識や高級感に影響される部分がある。法や契約により会社は法人として構成されるが、法

人でも宗教法人のように因習集団に近いものもある。これらは可能な限り現実的方向に修正する必要がある。

現実的な集団・社会の事象には、扱う人工物・自然物、行動の物理量や時間、複合共同行動、物・時空間の所有量、生物的権利、複合非固定集団などが挙げられる。複合共同行動や複合非固定集団は、生物としての規則に整合する、と言う意味で現実的である。当解析における「正しさ」は、良識・常識から見れば「異常」に現実的になる。「異常」に現実的でも、精神疾患・問題行動からは普通より遠くなる。認識に関しては、異常でなく正誤や現実的問題を見るべきである。

これらは明確で開放のため連動している。科学技術の発展により高度な機械ができ、それを操作する事で物の所有量が増える。この流れは非常に明確である。ただし人間は人工物でなく生物なので、その点を正しく理解する必要がある。機械操作だけを見て人間も機械的に考えるのは誤りである。人間にも生物としての明確な規則が存在しており、そこに当てはめて考えるのが正しい。

現在の人間に対する環境は人間と人工物が多数で、自然物は少ない。複合共同行動は現在の環境に整合しており、参加生満足を得やすい。複合非固定集団は複合共同行動と、遺伝的規則である非固定集団の組み合わせであり、現在の集団として目指すべき方向である。

固定集団は規則としては明確だが、多個人の遺伝的規則に合わず現実的でない。現在の主流は、先進国において固定集団と非固定集団の中間である。途上国においては因習集団に近い。これは勤務集団や家族についても同様である。勤務集団や家族も、因習集団が強ければその中に含まれてしまう。固定集団でなく複合非固定集団を目指すべきである。

表 5-1 人間的・現実的な集団・社会

	多個人の行動実規則化	権利*	集団	特徴
人間的	因習、宗教、良識	高級感	因習集団、民族	曖昧、閉鎖、バラバラ
中間的	法、契約、スポーツ 常識	貨幣*	現在の勤務集団、家族	現在の主流、中間的
現実的	扱う人工物・自然物 行動の物理量や時間 複合共同行動	物・時空間の所有量 生物的権利	複合非固定集団	明確、開放、連動

* 権利は遺伝的規則も実規則化もある、貨幣は実規則化

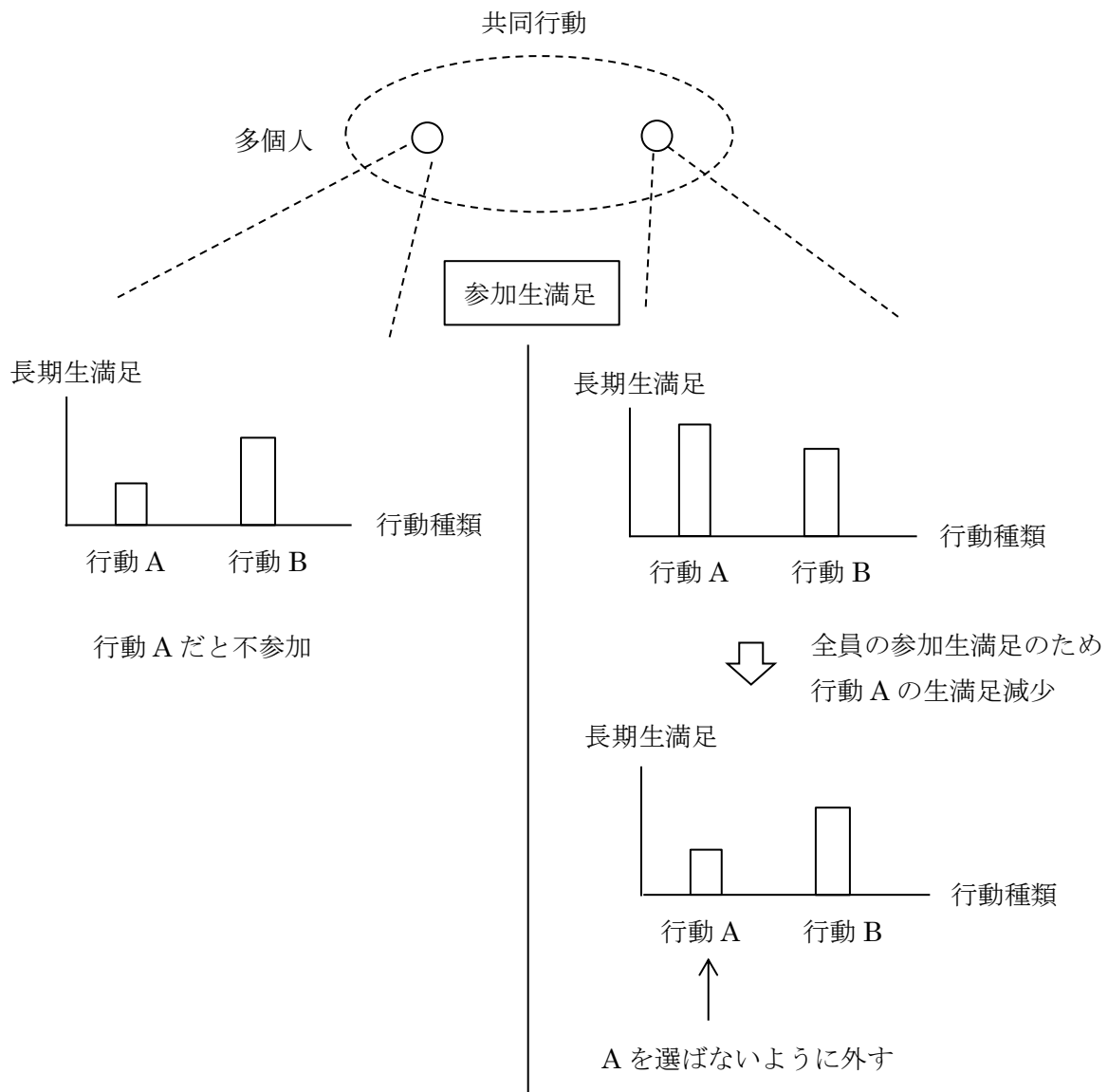
5.9.2. 共同制約

共同行動において、全員の参加生満足のために特定の行動種類を選択から外す事を共同制約と呼ぶ。共同行動 A を行った場合に特定の個人だけ生満足が得られると、その個人は行動 A を行ってしまふ。他者は参加生満足が得られないと共同行動に参加しなくなる。これを避けるには行動 A の生満足を下げる必要がある。これは契約破棄に対する違約金や、罪と罰などの例がある。

共同行動 A で全体の生満下が下がる場合、共同制約により行動 A を選ばないようにする必要がある。参加者の生満足も下がるなら、強い共同制約が必要である。これは下落成果などが相当し、麻薬の禁止などの例がある。

共同制約は共同行動の一部であり、目的は全員の参加生満足である。問題のある行動 A の生満足を下げる事が目的ではなく、全員の参加生満足が得られる行動 B を選ぶ事が目的である。共同制約による生満足低下も、社会に参加して生満足増加を得るための代償である。参加生満足を得られずに共同制約による生満足低下

を受けると、社会から離反してしまう。ある条件での契約破棄による生満足減少が嫌なら、契約自体を行わなければならない。これは適切な行動である。



全員の参加生満足のために、特定の行動種類を選択から外す
共同制約は共同行動の一部、目的は全員の参加生満足

図 5-55 共同制約

共同制約の例として、食物の禁忌を分析する。これは特定の食物を食べないという共同制約と考えられ、共同制約として分かりやすい。

まず肉に対する禁忌を分析する。肉の生産コストは種類により様々であり、生産コストが高ければ広域の生満足が下がる可能性がある。穀物だけを食べていれば生産コストは低くて済む。しかし肉を食べても個人の健康を害する訳ではない。生産コストへの対策は、価格を上げたり税金を掛けたりする等の方法で対応可能であ

る。肉の種類により社会的な禁忌を行う必要性はない。肉の禁忌は途上国で一般的であるが、先進国では少ない。

ただし肉の禁忌をすべて無くすと、環境への負荷により食糧危機になる可能性がある。環境への負荷を考えれば、先進国でも肉ごとに環境負荷に応じた価格上昇などを考えた方が良いかもしれない。これは「動物がかわいそう」などという人間的な問題ではない。

次に嗜好品に対する禁忌を分析する。嗜好品は健康を害するものが多く、覚せい剤等のように強く健康を害するものもある。有害度の大きいものは禁止すべきである。コーヒー等のように有害度が小さければ禁止する必要はない。

問題なのは有害度が中間的な嗜好品である。これらに関しては、有害な状況が発生する状況を正確に分析し、それに基づいて部分的な制約を掛けるべきである。ところが先進国においてさえ中間部分の禁忌は文化的な状況に基づいている。人間の根本的な規則は遺伝的なものであり、過去から続く文化でも従う必要はない。

日本においては、酒の制約は弱く、マリファナは禁止である。欧米では麻薬への文化的制約が緩く、マリファナも使用できる場合がある。途上国まで入れるともっと差が大きくなる。イスラム教では酒は禁止であり、地域によってはカートがその代わりに使われる。カートは覚せい剤の作用を微量に持つ植物である [47]。日本において急性アルコール中毒やアルコール依存症が多発している状況を見ると、酒に対する共同制約が適切とは思えない。

部分的な制約としては、有害の程度に応じた税金を掛けるが一般的手法である。これなら制約のための資金集めもできる。

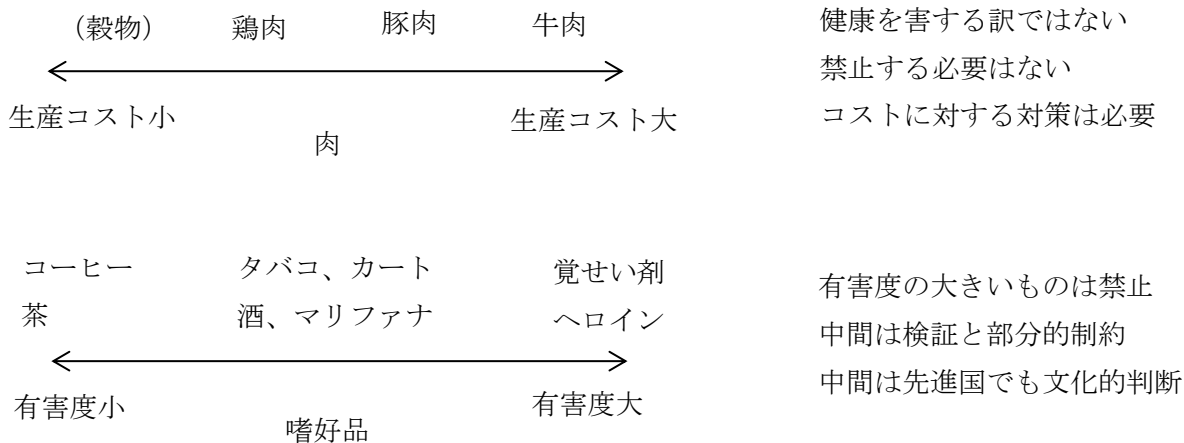
共同制約も人間的でなく現実的でなければならない。文化的でなく科学的検証が必要である。途上国において肉まで禁止するのは誤りである。一方で欧米において「自由」を尊重して麻薬を放置するのも誤りである。どちらも文化的な禁忌であり、科学的ではない。文化自体の修正も重要である。

人間の生現実化により、食物による生満足減少を正確に理解しなければならない。下落成果のような局所閉鎖を開放する必要がある。生産コストや有害度は連続的であり、どこかで分断して考えるのも誤りである。同じ嗜好品でも量により有害度に差が生じる。これらの程度問題を含めて開放的な共同制約を行う必要がある。

同じ問題は性犯罪や賭博など他の分野にも存在する。性の問題も先進国でさえ文化的な基準で判断される。これは誤りであり、人間の生現実化による正確な判断が必要になる。ただし判断基準は食物より分かりにくくなる。少なくとも女性の性成熟と社会的成熟の時期の差や、女性の権利の弱さなどの判断が必要になる。最終的に必要なのは全員の参加生満足であり、それを得られるように正確な分析をしなければならない。

現代において社会的成熟は性成熟より遅く、その間の対処が問題になる。これは肉体的問題でなく社会的問題であり、年齢・性行為などだけでなく社会的状況を見る必要がある。性行為は短期生満足であり社会的問題になりやすく、乱れた性行為は下落成果となる。例えば 14 才の女性と 19 才の男性が恋愛する場合、社会的問題の有無は両方あり得る。決定的に重要なのは、彼らが不良かどうかである。

世界的な問題として途上国の麻薬組織による混乱があるが、根本的な問題は先進国での麻薬消費である。先進国の方が大権利なので、先進国から直さないと途上国の麻薬問題は改善できない。一つの途上国を直しても、他の途上国に問題が移るだけである。



食物の禁忌、食べない制約、共同制約として分かりやすい
 生満足減少が問題、十分に科学的ではない、先進国・途上国とも同様
 文化的でなく科学的検証が必要、人間の生現実化
 他の分野でも同様、性犯罪など、食物より分かりにくい

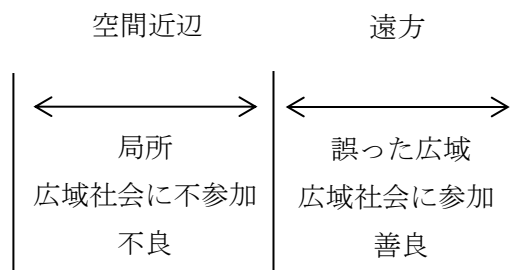
図 5-56 食物の禁忌

5.9.3. 広域社会と閉鎖

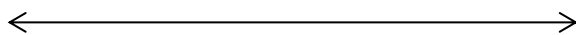
広域社会への参加と局所広域閉鎖について分析する。局所広域閉鎖により、広域社会に参加しない局所と、参加する広域とに分断する。局所と広域が誤って別々に見えるが、実際の広域社会は近辺から遠方まで開放連続であり分断してない。閉鎖により近辺と遠方が遠くなる。局所閉鎖も広域閉鎖も誤りであり、実際には相互影響している。

不良は広域社会への不参加を示し、善良は広域社会への参加を示す。これらを閉鎖分断するのも誤りである。不良・善良の閉鎖は普通に存在する。犯罪者でも広域社会の一員であり、国家から離反する事はあっても、広域社会の一部には所属している。反国家は合っても反社会はあり得ない。

局所閉鎖した認識を持つ犯罪者は誤者である。広域社会は共同制約により犯罪者に罰を与える。広域社会が正しく働いていれば、犯罪を行わない方が生満足を得られる。しかし局所閉鎖によりその事が分からず、結果的に犯罪者は自分を害する事になる。



局所・広域が誤って別々に見える
 近辺と遠方が遠くなる



実際の広域社会は近辺から遠方まで開放連続、分断はない
 犯罪者も広域社会の一員、反国家はあっても反社会はない
 局所閉鎖も広域閉鎖も誤り、実際は相互影響
 局所閉鎖した犯罪者、共同制約により自分を害する、誤者

図 5-57 広域社会と局所広域閉鎖

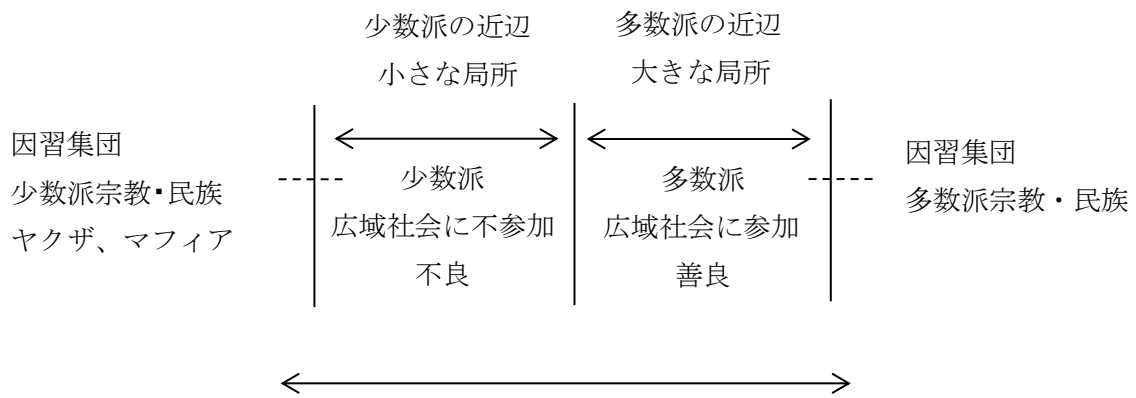
広域社会において何らかの少数派と多数派で閉鎖分断する場合もある。少数派・多数派から見たそれぞれの近辺で閉鎖し、小さな局所と大きな局所に分かれる。少数派は広域社会に不参加で不良となり、多数派は広域社会に参加して善良となる。閉鎖により少数派と多数派の距離が遠くなる。実際の広域社会は少数派から多数派まで開放連続しており、相互影響する。閉鎖分断した見方は誤りである。

因習集団は固定集団の一種であり、多個人の離反がないという意味で閉鎖的である。さらに閉鎖的になると外部関係も分断した認識になる。少数派・多数派の閉鎖は、因習集団において典型的に見られる。宗教や民族が少数派・多数派で閉鎖分断する。ヤクザやマフィアも因習集団の一種であり、少数派の因習集団として閉鎖認識を持つ。

善悪の評価は状況により変わる。どの宗教や民族も自分たちを善として、敵対者を悪とみなす。ヤクザやマフィアは自分たちを悪とみなし、悪の方が正しいと考える。どちらにしても問題なのは善悪の閉鎖分断である。善悪は人間的で曖昧な意味しかない。

少数派は全体的な権利が小さくなり、多数派に対して従属的になる。最終的な目的は個人の生満足であり、少数派としての従属は必ずしも問題ではない。また全体としては小権利でも、個人で見れば必ずしも小権利ではない。全体の権利が小さくても生満足が得られれば問題ない。生満足を見捨てて権利だけを求めるのは誤りである。

因習集団の閉鎖は、先進国でも普通にある問題であり、途上国ではより深刻である。固定集団であるため戦争が全面的になり被害が大きくなる。チトーという優れた指導者の死後、ユーゴスラビアで民族主義が増大し紛争と分裂を繰り返しているのが典型例である [46]。現代における重大な問題として改善する必要がある。過去から続く実規則化を守る必要性はなく、遺伝的内規則による生満足を求めなければならない。開放の理解が重要であり、開放現実から生人間を見る必要がある。



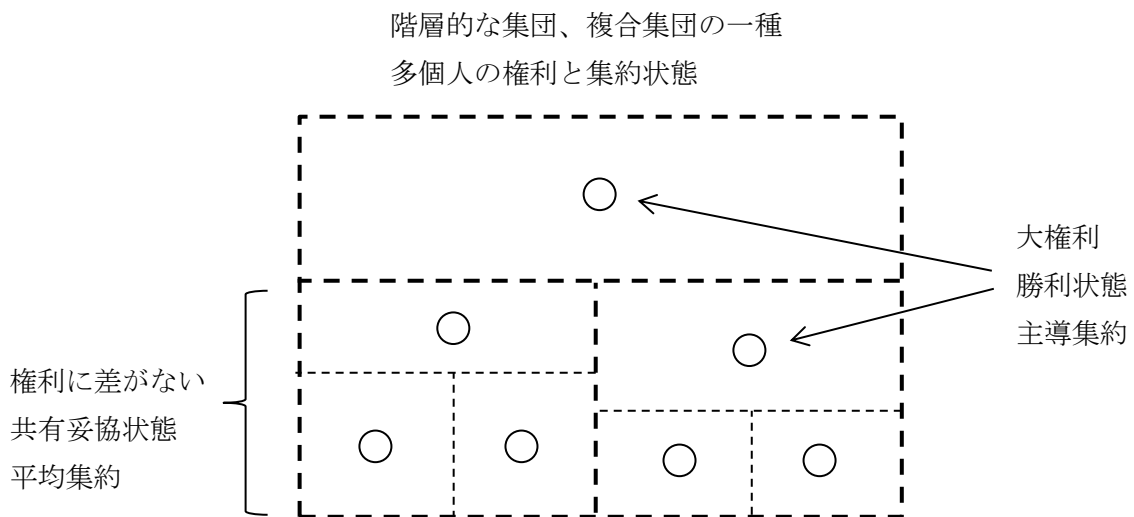
実際の広域社会は少数派から多数派まで開放連続、相互影響
 因習集団は多個人の離反がないと言う意味で閉鎖的
 さらに閉鎖的になると外部関係も分断
 善悪は状況で変わる、どちらにしても問題は閉鎖

図 5-58 広域社会と少数派・多数派の閉鎖

5.9.4. 集団・社会と集約状態

階層化された集団は、複合集団の一種である。多個人の権利と集約状態について図示する。認識は部分ごとに集約され、最後に全体が集約される。これを階層集約と呼ぶ。

各部分において多個人の権利に差がある場合は主導集約となり、大権利の個人の最終状態が勝利状態となる。権利に差がなければ、共有妥協状態による平均集約となる。階層集約は主導集約と平均集約が混在する構成になる。



階層集約、部分ごとに集約、最後に全体
 主導集約と平均集約の混在

図 5-59 階層集約

最終状態と生現実の差を横軸に、人数を縦軸にしたグラフを作成する。正者と誤者の分布図になる。分布図の形状は社会により様々であり、因習が強ければ誤者が主体となる。先進国と途上国では形状が大きく異なり、途上国は誤者側に偏る。普通の人間でも多個人多閉鎖により認識はバラバラになる。

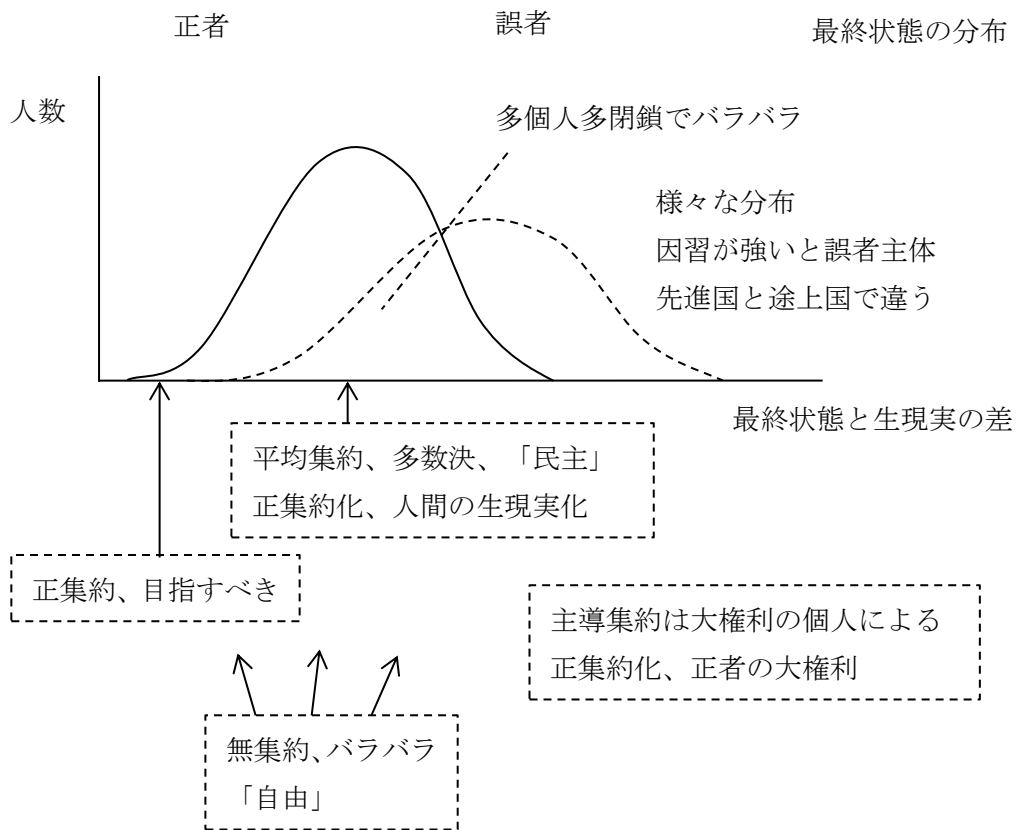
正しい集約は正集約であり、ここを目指して認識を集約する必要がある。多数決は平均集約にしかならないので、人間の生現実化からの論戦などにより正集約化すべきである。単に平均集約しても妥協の産物にしかならない。主導集約は大権利の個人に依存する。正者の権利を大きくして正集約化すべきである。正者の権利でも制限付き権利が必要である。無集約はバラバラであり、正誤もバラバラである。

「自由」や「民主」などの言葉は、人間的で意味が曖昧であり問題が大きい。正評性のため「満足が得られる」と無条件で認識される事が最大の問題である。「自由」な集約をしても無集約にしかならず、正誤はバラバラである。自由民主主義を推し進めても多個人の権利が均等になる訳ではない。欧米でも大金持ちは多く、貨幣的に「平等」ではない。「平等」の意味も人間的で曖昧であり役に立たない。

普通の人間でも多個人多閉鎖により認識はバラバラになる。「自由」を尊重して認識をバラバラにすれば、現実的な正集約もできなくなる。開放現実から見て統一された正集約を行うべきである。

誤者の多い途上国であれば、多数決よりも先進国を真似た主導集約の方が良い。これは中国が典型例である。中東や北アフリカで「アラブの春」と呼ばれる民主化が起こった後に、待っていたのは秩序の崩壊である [46]。民族主義・イスラム教などの強い因習に支配された地域なので、当然の結果と言える。

正集約に近づけるためには、人間を生現実化する必要がある。科学技術の流布や因習の排除なども重要である。中国は古い共産主義において因習を排除しており、そこから改革開放を行って欧米の科学技術や社会構造を導入した。これが現在の中国における成功の原因である。改革開放の中に「開放」の概念が含まれているのも重要である。



「自由」や「民主」は言葉の意味が曖昧で問題、特に正評性
 自由民主でも権利均等にはならない、「平等」も曖昧
 途上国は、多数決より先進国を真似た主導集約の方が良い、中国など
 科学技術や因習の排除なども重要、改革開放

図 5-60 正・誤者の分布と集約状態

6. 応用

6.1. 宗教・民族・家族への応用

6.1.1. 宗教と民族

二重人間は曖昧で誤りであり、開放現実には明確で正しい。開放現実から見て人間を生現実化すれば、二重人間の問題を回避できる。生息状況を見るべきである。宗教や民族を人間・現実により分析する。

宗教や民族は、認識の集約状態に基づく行動実規則化の一種である。行動は人間・現実の中間にあり、行動実規則化にも人間的な部分と現実的な部分がある。宗教や民族は集団を形成する。社会的義務も自発的な生満足で評価され、生満足が得られなければ社会的義務に従う必要はない。宗教や民族は全体的に人間的で誤った方向性が強い。現実的あるいは中間的な部分でも若干人間的で誤っている。宗教は奇跡やオカルトのように、基本的に非現実で曖昧な部分がある。

因習や教義は特に人間的で誤りが大きい。因習は昔からある人間的で曖昧な実規則化であり、理由のない禁忌などが代表例である。因習に基づく固定集団である因習集団が形成される。法や仕事であれば正誤は中間的である。宗教法人や、民族に関する法や、民族的な職業などが相当する。現実的な部分としては、文化財や冠婚葬祭や行事などが挙げられる。

宗教・民族においても現実的な部分は存在する。これらを元にして、宗教・民族を生現実化すべきである。文化財や行事などの必要性は、教義などとは無関係に存在する。これらが宗教や民族の現実的な部分である。

祈り・祝いなどの感情も、文化財や行事などから見る事で正しい理解が可能になる。因習や教義などから見ると曖昧で誤った理解しかできない。祈り・祝いなどの感情は一步引いて見るべきであり、これらを否定するのも誤りである。諦観などの地味感情と同時に理解するのも有効である。

過去における宗教は現実的意味が大きかった。権利や実規則化の主体であり、ランドマーク的な意味もあり、現在より深刻な死への救済の意味もあった。現在においては状況が異なる事を理解する必要がある。近現実開放により近現実から過去・空間遠方へ開放的に理解すべきである。

最大の問題は、宗教や民族が引き起こす戦争や紛争である。これは現在でも世界各地で起こっており、先進国でも多少は存在する。因習に基づく固定集団により、全面的な戦争や紛争になる。これらの問題を修正しなければならない。新宗教が離反を許さなければ誤った宗教に見えるが、因習集団である昔からの宗教や民族でも固定的なら誤りは同じである。曖昧な教義を元にしての論争は閉鎖的で収束しない。

宗教全体で見れば多少現実的な部分もあり、宗教の信者も世界レベルで見れば多種多様である。宗教そのものが問題ではなく、因習の方が問題である。例えばアフリカでは宗教と無関係な民族・部族紛争もある。イスラム教同士が争う場合もある。因習集団による問題と見れば、宗教的な紛争も民族・部族紛争も大差ない。

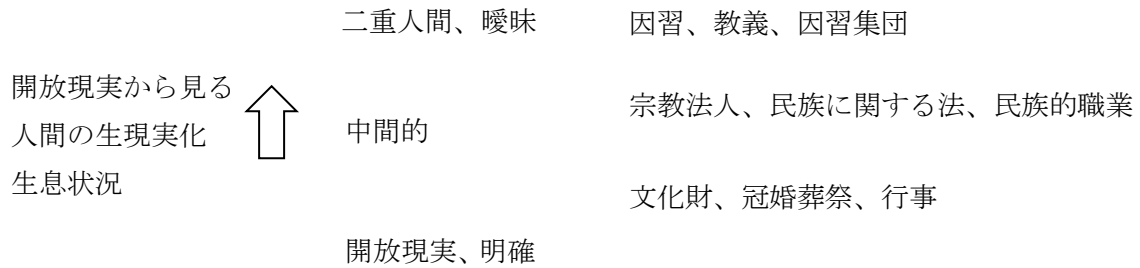
日本においては無宗教化が進んでおり、宗教の主体は文化財など現実的な部分となっている。教義などへの信仰心は薄れても、文化財や行事の保護などは行われている。様々な宗教の行事などが開放的に受け入れられており、深刻な宗教間の紛争は起きない。この方が適切な状態である。

新宗教などより昔からの宗教や民族の方が、影響力が強くて問題が大きい。ただし誤りの程度は新宗教でも大差ない。ヒーリングや占いのような宗教的な行動でも同様である。これらも人間の生現実化により修正する必要がある。

宗教によくある禁欲主義は感情を小さくする事であり、人間的で誤りである。感情の抑制でなく無認識感情が正しい。感情・満足から一步引き、現実的・生物学的でこだわらないようにすべきである。諦観などの地味感

情の理解も、感情を抑える訳ではない。地味感情を含むすべての感情を、開放的に理解する必要がある。誤った認識正評性は生不満に繋がるため、認識満足は認識不満よりも問題が大きい。宗教でも法悦のような認識満足の方が問題である。

誤った認識を壊すだけでは意味がなく、正しい認識を作る必要がある。宗教や民族における誤りは大きい、これらも開放現実に近い文化財や冠婚葬祭や行事などから正しい認識を作るべきである。



宗教や民族は全体的に人間的、現実的な部分もある
 最大の問題は宗教や民族による戦争や紛争、宗教より因習が問題
 新宗教が離反を許さないと誤りに見えるが、因習集団でも同じ
 日本の宗教は現実的、様々な宗教の行事等を開放的に受け入れ
 禁欲主義は人間的で誤り、無認識感情が正しい、感情・満足から一步引く

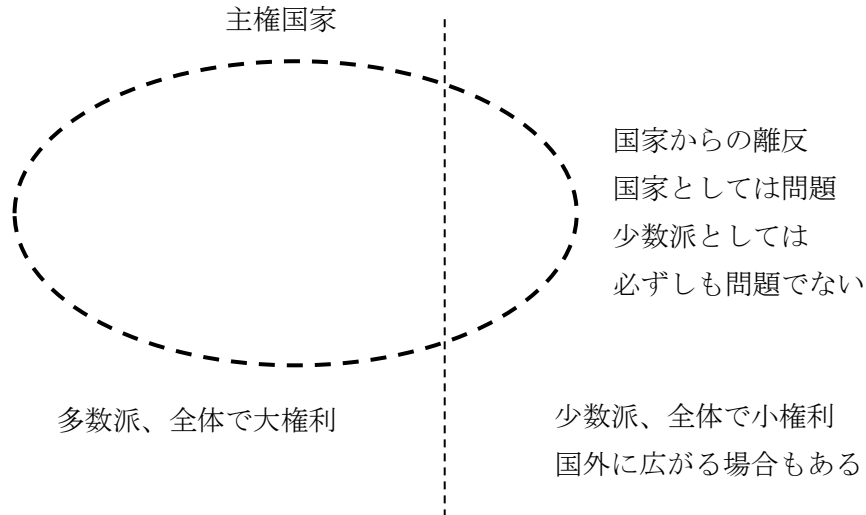
図 6-1 宗教・民族と人間・現実

6.1.2. 国家の多数派・少数派

主権国家において何らかの多数派と少数派がある場合を考える。多数派・少数派には、宗教、民族、地域など様々なものがある。多数派は全体として権利が大きくなり、少数派は全体として権利が小さくなる。ただし全体の権利の大・小と、個人の権利の大・小は別であり、多個人で見れば必ずしも少数派の権利が小さい訳ではない。生満足は個人ごとに存在し、多数派・少数派で合わせてみても意味はない。

少数派は国外に広がる場合もある。ある国での少数派が、他の国では多数派という事もある。少数派が国外に広がっていれば、国家からの離反も容易である。少数派が国家から離反すると人数が減るので、国家としては問題である。しかし少数派としては必ずしも問題ではない。離反した方が生満足を得られるなら、そちらを選択すべきである。

国家としては、多数派・少数派の双方に参加生満足を与える必要がある。個人の権利を均等に必要性はなく、制限付き権利を与えるだけでよい。多数派全体と少数派全体では人数が異なるので、全体の権利を均等にするのは根本的に誤りである。「平等」という言葉も人間的かつ曖昧であり、厳密な分析では役に立たない。



宗教、民族、地域など様々、生満足は個人ごと
 全体の大・小権利と、個人の大・小権利は別
 国家は双方に参加生満足を与える必要、権利の均等ではない
 「平等」も人間的で曖昧で使えない

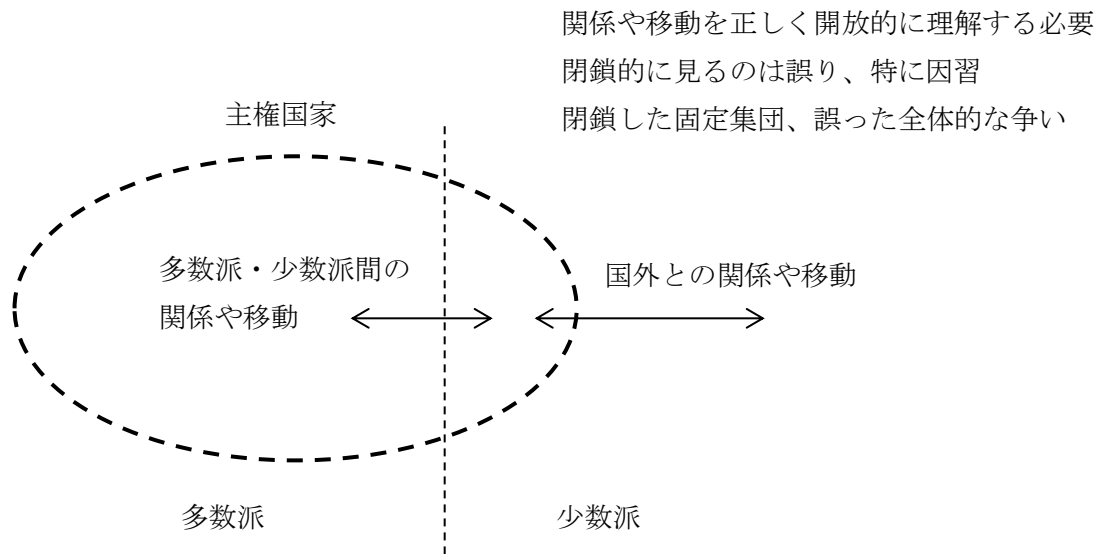
図 6-2 国家の多数派・少数派

多数派・少数派を閉鎖的に見るのは誤りであり、正しく開放的に見る必要がある。多数派と少数派の間には、個人同士の関係や個人の移動がある。これは国外との間でも同様である。少数派が国外に広がっていれば、少数派の国外との関係や移動も大きい。

宗教や民族においては、因習により多数派・少数派を閉鎖的に見てしまう。閉鎖により多数派と少数派の距離が遠くなる。閉鎖した固定集団の場合は局所的な争いが全体的な争いに発展してしまい、問題が大きくなる。暴力的な争いの場合は国家的な紛争になってしまう。これは途上国で現在でもよく見られる状況である。正しく開放的に見れば多数派と少数派の中間的な部分もあり、全面的な紛争になるのはおかしい。開放的に個人ごとの関係や移動を見る事で、これらを回避できる。

閉鎖的な多数派・少数派の問題は、宗教や民族以外にも存在する。例えば特定の地方が衰退したため他の地方に移住するのは正しい考えであり、閉鎖的に今の場所に留まるのは意味がない。

多数派・少数派とも正しい認識を持ち、正者に権利を与える必要がある。因習などの誤った認識は修正する必要がある。現実的な科学技術や教育や職業訓練などにより、誤者の修正を行うべきである。少数派や国外からの移民の場合、十分な教育を受けられない場合がある。これらに対しても国家として基礎的な教育を受けさせる必要がある。そうでないと因習などによる誤者となり国家に問題が生じる。



関係や移動を正しく開放的に理解する必要
閉鎖的に見るのは誤り、特に因習
閉鎖した固定集団、誤った全体的な争い

多数派・少数派とも正しい認識、正者に権利、暴力の回避
因習などの誤った認識を修正、科学技術や教育や職業訓練

図 6-3 多数派・少数派と開放・閉鎖

6.1.3. 血統と家族

人間の祖先との繋がりを考えると、1人に対して親は2人で祖父母が4人になる。先祖は遡るほど人数が増えて拡散していく。これは競馬などと同じ血統であり、血統が現実的で明確で正しい先祖との繋がりである。競馬においては主要な種牡馬により血統が一本化される場合もあるが、人間にはそのような状況はない。

家系は共通の先祖を置き、本家・分家などでそこからの繋がりを見る。これは血統と一致せず誤りである。家系は昔からある人間的で曖昧な誤りの一種であり、因習の一部である。強い親族は因習集団を形成する。

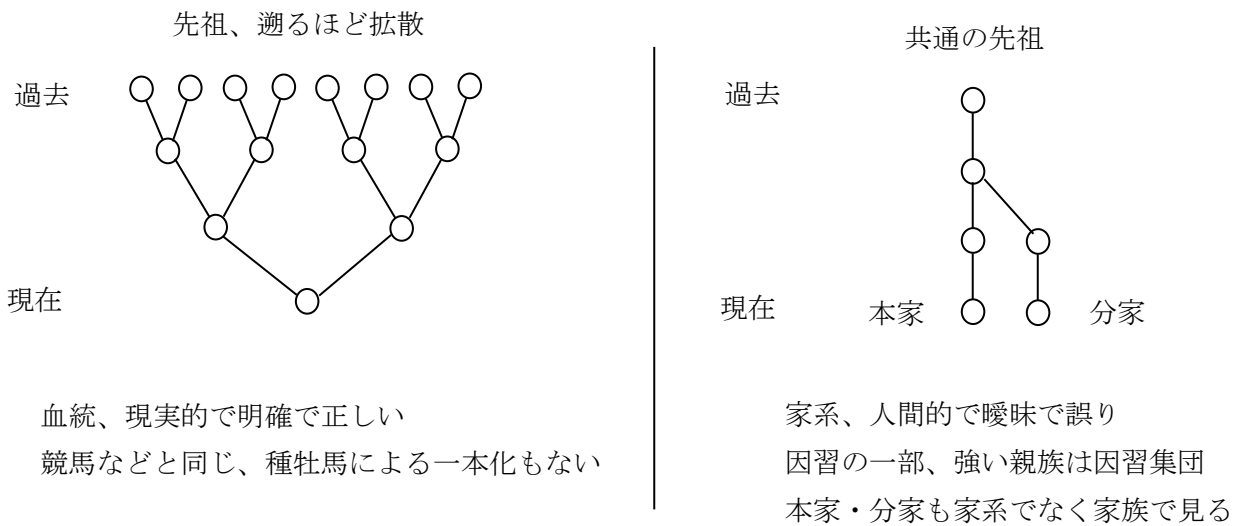
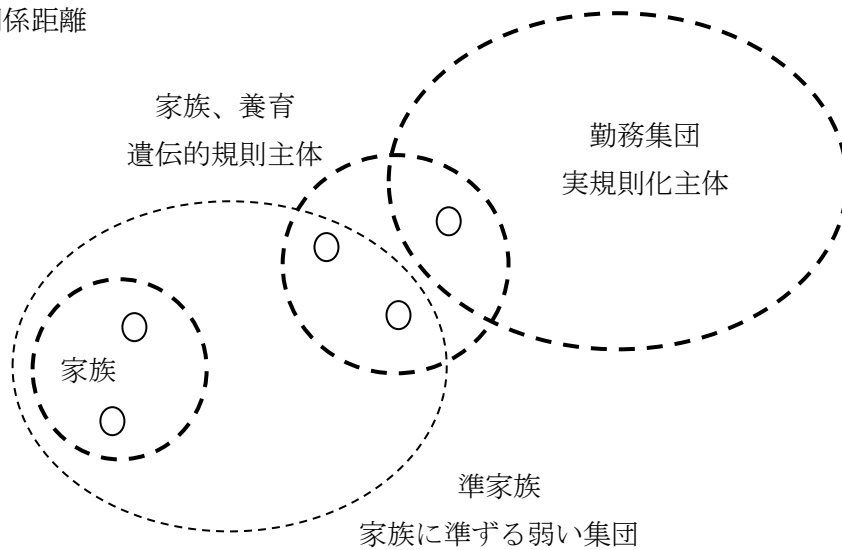


図 6-4 家系と血統

家族に対して、親兄弟などがそれに近い関係として関係を持つ場合がある。家族に準ずる弱い集団を、準家族と呼ぶ。家系などでなく勤務集団と家族・準家族で分析するのが正しい見方である。本家・分家も家系でなく家族で見るべきである。本家・分家は継続している家族集団と見なす事ができ、血統とはあまり関係のないものになる。

勤務集団が実規則化主体なのに対し、家族は養育などの遺伝的規則を主体とする。特に幼児は実規則化の適用が困難であり、遺伝的規則が重要になる。権利も遺伝的権利が主体となる。時間や空間を共有して遺伝的な信頼関係を作らないと、家族の存続は困難になる。そのためには家族が共有できる時間や空間を持つ必要があり、貨幣だけでは家族を保てない。

空間位置、関係距離
複合集団



家族、養育のため遺伝的規則主体、特に幼児
権利も遺伝的権利主体、時間や空間の必要性

図 6-5 家族と準家族

家族と準家族による構造は、多個人とも動物的な構造とも一致している。動物の家族同士が養育などで部分的に協力するのは良くある形である。これに対して家系的な大家族・核家族の考え方は誤りである。1つがだけの家族構造も必ずしも動物において絶対的ではない。1対多や多対多の家族構造も良くある。家系だけでなく現在の結婚制度も不適切である。

家系・結婚などの現在主体となっている家族構造より、家族と準家族による構造で考えるべきである。家系でなく実体的な集団と信頼で見た方がよい。親子関係も家族と準家族の構造で見た方が明確化できる。

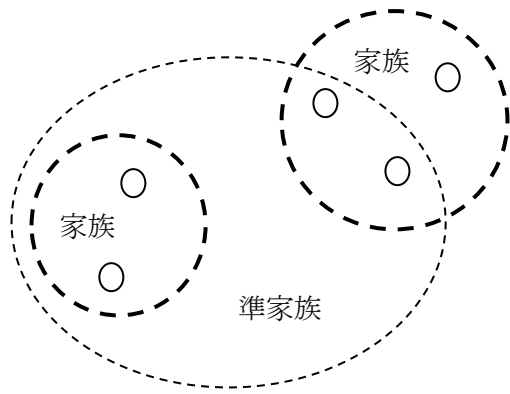
家族と準家族で見れば、親子だけでなく様々な関係を同一に扱える。兄弟姉妹や、重婚や、親友や、LGBTなどの関係が挙げられる。家族の重要な役割は養育であり、重婚・LGBTなども養育を基準に評価すべきである。

遺産や離婚も家族・準家族を主体として見た方が明確に理解できる。家族がなくなる状態で死亡した場合は、遺産を主権国家が取り上げる事も考えられる。動物の死亡から見るとその方が自然である。ただし1家族が遺産を独占すると巨額の資産が継続的に集約される可能性もあるので、これに関しては別途検討が必要である。

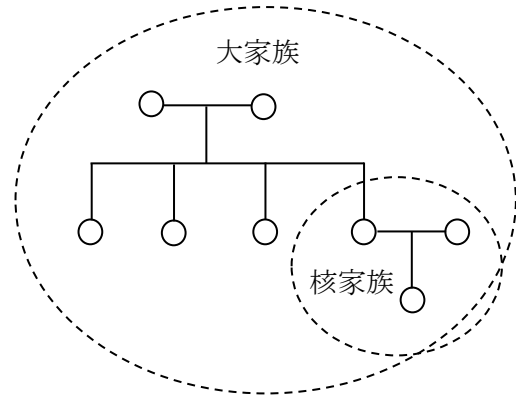
家族・準家族でも、感情的でなく現実的に見るべきである。人間・現実の中間にある感覚・行動を生現実化する必要がある。感情的に見ると理解が曖昧になり、家族内の争いのような問題が起こる。住居や関係回数などで見れば明確な理解が可能で、問題も回避できる。

家族を貨幣から見るのも不十分であり、現実的権利を見るべきである。女性の社会進出は経済成長の面で優れているが、時間でみると家事・子育てが減るという問題がある。夫婦双方が仕事をして貨幣が増える事は、必ずしも良い事ではない。夫婦双方の時間・空間などの現実的権利を総合的に判断すべきである。

家族の生活が豊かであれば、子供を増やすのが自然な行動である。人間的な豊かさを見て子供を増やさないのは誤りであり、社会全体として衰退してしまう。子供を増やせばその分だけ苦勞する事になるが、生息状況として見ればその方が正しい。



多個人と動物的な家族・準家族、正しい
 様々な家族と準家族、家系でなく集団と信頼
 親子、兄弟姉妹、重婚、親友、LGBT等
 遺産や離婚も家族・準家族主体にすべき



家系的な大家族・核家族は誤り
 1つがいも絶対でない
 現在の結婚制度も不適切

図 6-6 正しい家族と準家族

6.2. 経済への応用

6.2.1. 権利と貨幣と資本

貨幣について今までの分析をまとめる。貨幣は権利の一種であり、権利は行動で使用する行動資源の優先度である。行動資源は生現実すべてであり、人間と現実であり、環境と自己である。自分の行動は主に自分の権利だが、他人の権利になる場合もある。

権利には需要量と供給量による重要性の違いや、需要が大きく供給が小さい場合の競争などの特性がある。行動者側から見た権利は、行動資源側から見ると価値になる。権利に対する価値は競争を示す需給価値であり、生満足価値ではない。これらは動物にもあり、遺伝的規則の段階から存在する。

権利交換は動物にはなく、実規則化共同行動である。貨幣は権利交換のため数値化した実規則化権利である。権利交換や貨幣は実規則化なので、遺伝的規則よりも生満足が増加する必要がある。実規則化も生現実上の規則であり、認識上の規則ではない。

貨幣は権利の一種であり、それ自体が目的でなく生満足獲得の道具でしかない。貨幣や権利を人間の評価として絶対化するのは誤りである。地位などのように、貨幣化できない権利も存在する。多くの経済学では貨幣や権利を扱い、生満足は対象外である。満足に近い概念である効用も権利に直結している [48]。経済合理性も、現在は貨幣の合理性を主体としている。貨幣を含む権利全体や、生満足まで含めた合理性を検討すべきである。

行動経済学は心理学に近い特徴を持つため、この問題が緩和されている。通常のエconomic学が金銭的報酬を主体とするのに対し、行動経済学は非金銭的報酬まで含めて分析する [49]。ただし行動も人間的な曖昧さがある事に注意する必要がある。

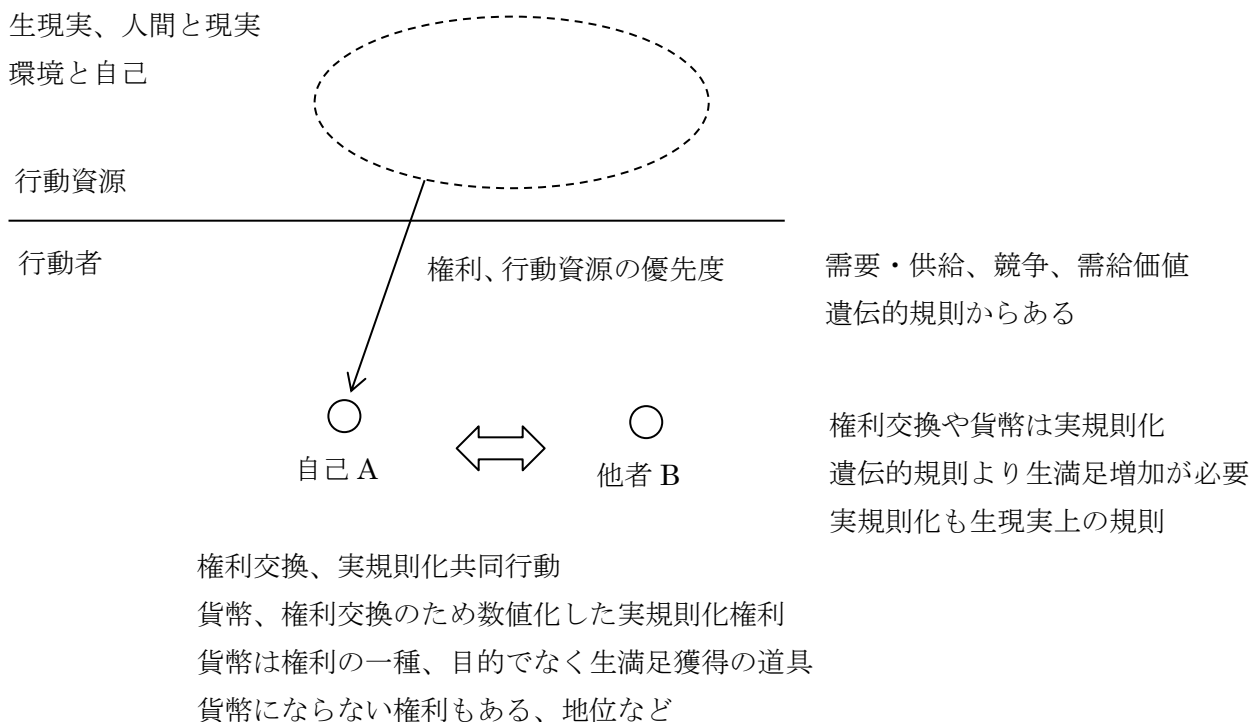


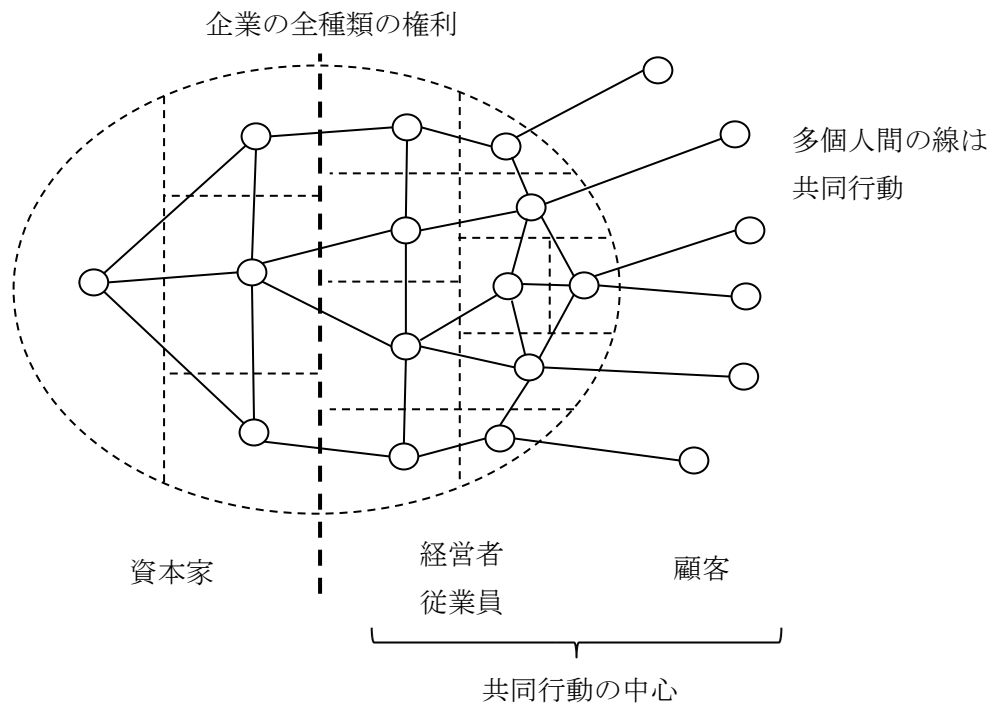
図 6-7 権利と貨幣

権利と資本について検討する。貨幣で見れば企業のすべての権利を資本家が所有し、企業を売却する事ができる。貨幣以外の権利を見ると、地位などのように貨幣にならない権利を経営者・従業員が所有している。これは貨幣だけ見ても分からない。企業の権利を見るには、貨幣だけでなく従業員の地位なども含めた全種類の権利を見る必要がある。

企業の共同行動を見ると、経営者・従業員と顧客の共同行動がその中心である。生満足が得られなければ共同行動からの不参加が起こる。資本家が勝手な行動を取れば従業員や顧客が不参加になる可能性があり、簡単に資本を売る事はできない。例えば海外企業に資本を売った結果、従業員や顧客が離れて企業価値が下がるなどの例が考えられる。

貨幣だけを見ると資本家は企業に対して支配的だが、貨幣以外の権利や共同行動まで見ると支配的とは言えない。株などの資産だけを見て「世界の支配層」と考えるのは誤りである。

貨幣で見た売上や利益だけでなく、社員数や雇用形態なども企業規模の一種である。これは行政から見ると当然と言えるが、経営から見ると逆に見える場合があるので注意する必要がある。リストラで人員を削減して利益を確保しても、企業が成長したとは言えない。共同行動の企業規模であれば、主に経営者・従業員と顧客の規模となる。



貨幣で見ればすべての権利を資本家が所有、企業の売却が可能
 貨幣以外の権利は従業員もある、地位など、貨幣だけ見ても分からない
 資本家が勝手な行動を取れば従業員や顧客が不参加の可能性、簡単に売れない
 貨幣だけでなく社員数や雇用形態なども企業規模の一種

図 6-8 権利と資本

6.2.2. 市場

複数の権利交換がある場合を考える。権利交換の種類が別であれば複雑で、同一であれば単純である。場所についても同様であり、別場所なら複雑で、同一場所なら単純になる。

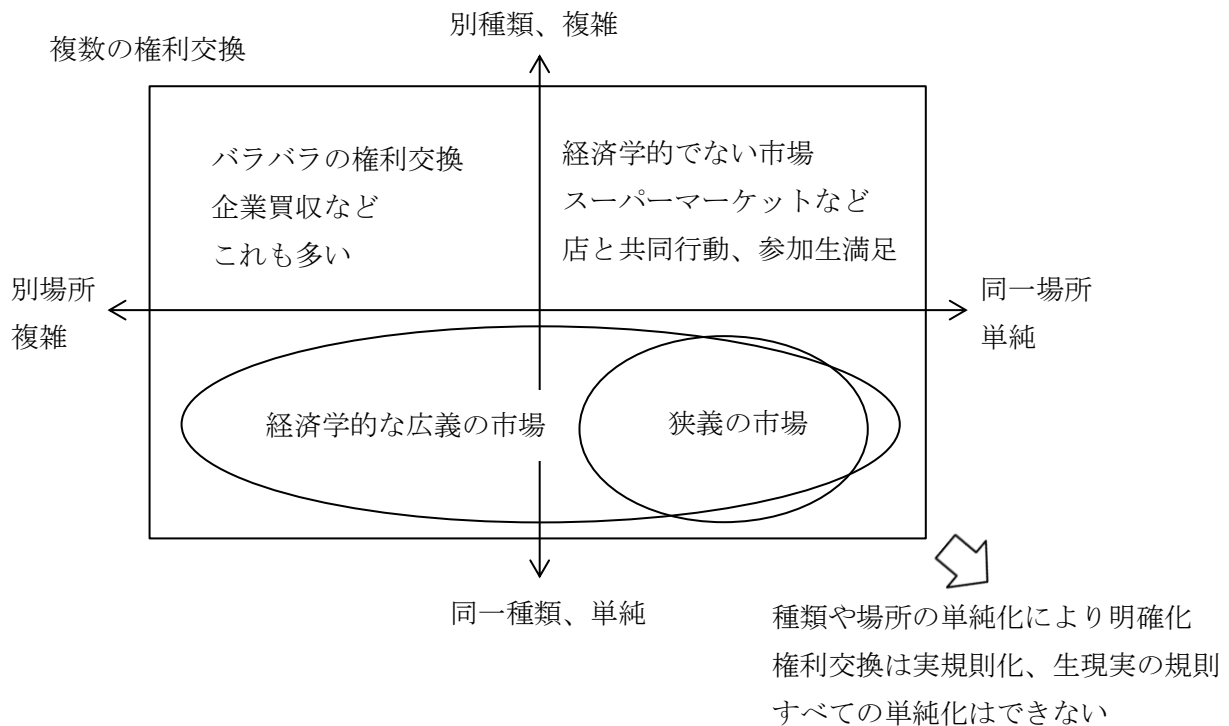
経済学で一般に使われる「市場」という言葉は、複数の権利交換が同一種類である状況を示している [50]。一方で経済学的でない「市場」という言葉には、場所が同一である状況もある。スーパーマーケットなどがこれに当たる。種類も場所も同一であれば、権利交換は非常に単純になる。狭義の「市場」がこれに当たる。

権利交換は実規則化であり、規則を単純にすれば明確化できる。「市場」による種類や場所の同一化は、明確化の一種と言える。狭義の市場であれば権利交換の行動も行いやすいし、挙動も予測しやすい。一方で実規則化は生現実上の規則であり、生現実において実現できなければ意味がない。種類や場所を同一化できない状況も存在し、すべてを単純化できる訳ではない。

権利交換や市場には様々な種類があり、分けて考える必要がある。常に同一種類の権利が大量流通する訳ではない。種類や場所がバラバラにしかならない権利交換も存在する。例えば企業買収は、企業の形態・場所・買収時期がすべてバラバラである。スーパーマーケットなどは店との共同行動が重要になる。商品に対してではなく、店に対する参加生満足が必要になる。

狭義の市場は実規則化が強い特別な存在であり、市場ごとに強いルールがある。理想的には完全競争市場が最も明確になるが、強い実規則化が必要であり、生現実上でそれが可能でなければならない。完全競争市場は人間が規則を明確にするために「作成」するものであり、自然で根源的に存在するものではない。不完全競争市場にしかならない状況も多数存在する。

「自由」な市場の絶対化は誤りである。自由経済主義者は「神の見えざる手」を教義として信奉している [51]。学問より思想的であり、経済より政治的な考え方である。そもそも「自由」自体が人間的で曖昧な言葉であり、現実的に見れば意味を持たない。



様々な権利交換と市場、分けて考える必要、常に同一種類の権利が大量流通する訳ではない
 狭義の市場は実規則化が強い特別な存在、市場ごとに強いルール
 理想的には完全競争市場、強い実規則化が可能、不完全競争市場も多い
 「自由」市場の絶対化は誤り、神の見えざる手など、学問より思想的、経済より政治的

図 6-9 権利交換と市場

6.2.3. 権利と経済学

様々な経済学について分析する。ミクロ経済学は主に市場を分析するものである。マクロ経済学は主に主権国家を分析するものである [52]。これらの分野は生現実に合わせて一体化していく。統計的な計量経済学 [53] など他の分野でも同様である。実際にミクロ経済学とマクロ経済学の境界は年々曖昧になっている [50]。

主権国家において、実規則化権利の規定共同行動を行う必要がある。遺伝的権利から実規則化権利への明確な変換を行っているのは主権国家だけである。国家間においても現在ではある程度の規定共同行動がある。しかし国家内に比べて規定は弱く、遺伝的権利に近くなる。結果として経済戦争や、大企業と国家の争いなどが起こる。これが暴力的な殺人や紛争などに発展すると問題が大きくなる。

主権国家においては制限付き権利を規定する必要がある。人間的で曖昧な自由経済主義は誤りである。自由経済主義者は無制限権利の抑止に批判的である [51]。「自由」の意味は曖昧で、どのような定義も可能である。富裕層にとって有利な「自由」が自由経済主義の意味になっている。自由経済主義者はミクロ経済学とマクロ経済学が連携していないと考えており、自由経済主義の中でもシカゴ学派とオーストリア学派で対立している [51]。これは前述の見方とは対称的であり、自由経済主義が閉鎖的で誤っている事を示している。

従来の経済学との違いを強調する考え方は行動経済学にも見られる [49]。これらは閉鎖的で誤っており、開放現実に向かい統合しなければならない。

バブルによる高騰と暴落がその典型例である。このリスクは人間の生現実化により回避できる。現実的権利において、必要とされる需要量や生産可能な供給量は、貨幣のように大きく変動しない。貨幣でなく現実的権利を基準として予測や行動を行えば、貨幣の上下動に影響されずに済む。

現実的権利の需給・競争・価値などを分析すべきである。現実的権利でも需給・競争・価値などは貨幣と同じように存在する。物・時空間の所有量や生物的権利は、貨幣に比べて明確で推測しやすい。現実的権利により貨幣だけの分析より明確な推測が可能になる。

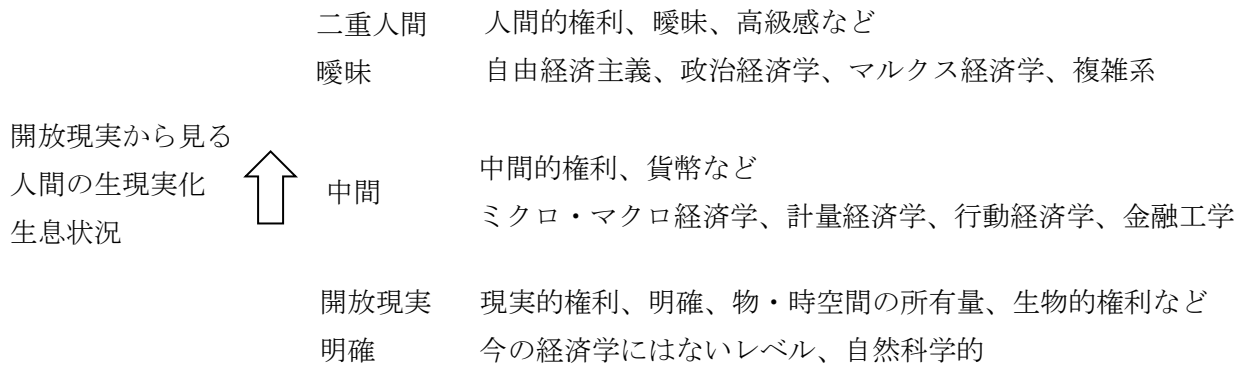
例えば野菜を作りすぎると出荷せずに潰したりする。貨幣の問題として考えると難しくなるが、消費量が一定でそれに合わせている、と考えれば話は単純になる。貨幣でなく消費量で見ると、消費量に合わせた分だけを常に作るようにすれば良い。

貨幣は権利の一部であり、地位のように貨幣にならない権利も存在する。貨幣だけでなく権利全体を分析すべきである。地位など交換できない権利も現実的権利で見る必要がある。雇用時の養育人数などが考えられる。

権利は生満足を得るための手段であり、権利自体が評価基準ではない。消費は権利から生満足を得て、それ以上生満足が得られなくなった状態と言える。必要な権利の量は人口に依存するので、人口も重要である。

権利は生物や動物の時点から存在するため、これらと比較して現実的権利を理解する事ができる。貨幣は人間が作ったものであり、自然なものではない。貨幣の存在が生満足を得るのに有効でなければ、貨幣が存在する意味はない。

誤った認識を壊すだけでは意味がなく、正しい認識を作る必要がある。権利や経済学においても、開放現実に近い現実的権利などから正しい認識を作るべきである。経済理論も生現実の規則でなければならない。生物学的に見た貨幣以外の権利などを正しく理解する必要がある。例えば今のアメリカ合衆国のように医療を受ける権利を多くの人が持っていない場合、医療産業が幾ら利益を上げてても全体の生満足は低い。貨幣だけを見るとこれを理解するのは難しい。



人間的・現実的価値でも同様、権利は行動者、価値は行動資源
 二重人間による貨幣の曖昧さ、リスクの原因、バブルなど
 人間の生現実化によりリスクを回避
 現実的権利の需給・競争・価値などを分析すべき、明確化

図 6-11 権利と経済学と人間・現実

6.3. 政治・法・国際への応用

6.3.1. 政治と法と行政

開放現実から見て人間を生現実化する事により、曖昧な二重人間の問題を回避できる。生息状況を見るべきである。政治・法・行政を人間・現実により分析する。法・契約・行政も行動の延長であり、人間・現実の間になる。政治には行動だけでなく思想的な部分が含まれ、やや人間的になる。

国家も共同行動の一種であり参加生満足が必要である。人間の評価は個人ごとに異なり、参加生満足がなければ怠慢などの離反を起こす。国外に出にくい国家でも怠慢は可能であり、離反により国家が成り立たなくなる。これは国際政治でも同様である。

因習は昔からある人間的で曖昧な実規則化であり、現代の政治においても問題が大きい。自由・民主・平等も古代ギリシャからある古い概念であり [40]、人間的で曖昧である。先進国において因習はあまり「良い」と思われていないが、自由・民主・平等は「良い」と思われていて問題である。昔からある認識が正しい訳ではない。近現実開放により近現実から過去・空間遠方へ開放的に理解すべきである。自由・民主・平等が「幸福」なのは誤りであり、認識正評性でしかない。実際には因習と同じく曖昧で解析不能である。政治学はこれらの人間的で曖昧な概念が主体であり、現実的で明確な結論を出せない。

離反を防ぐには参加生満足を与えなければならない。これは「民主的」な国でも「民主的」でない会社でも同じである。自由・民主・平等は生満足のために必須ではない。

民主でなく多数決なら、ある程度明確になる。多数決は平均集約なので、必ずしも正しい結論は出ない。多数決でもできるだけ正集約にすべきである。普通の人間でも多個人多閉鎖により認識はバラバラなので、平均集約は妥協の産物にしかない。「民主」には認識正評性のため、平均集約と関係なく「正しい」と認識されてしまう。それが民主と言う言葉の大きな問題である。多数決とは無関係の暴力的なデモですら、「民主」ならば正しいと判断される。

自由についても、因習の自由や、犯罪の自由や、デマの拡散の自由はすべて誤りである。自由と言う言葉はこれらの状況でも「正しい」と評価されてしまう。平等についても、多個人の権利を均等にするのは誤りである。自由民主主義国家で貧富の差が小さく「平等」な訳でもない。

自由民主主義・共産主義・イスラム主義のような「主義」と呼ばれる概念も人間的で曖昧である。「主義」という言葉自体に認識の絶対化と認識正評性を含んでいる。これは「学派」でも同様であり、自然科学ではこのような言葉を使わない。生現実における規則でなければ意味がない。それを信奉する国ごとに対立しており、閉鎖分断の特徴を示している。無認識感情を見て、すべての「主義」から一步引くべきである。

多数決、法、契約、行政などは中間的である。多数決は平均集約であり、法なども人間と現実の双方から影響を受ける。行政において、自由民主主義などの政治学的な思想は必ずしも重要でない。多数決は特に誤者の多い途上国で問題であり、強く正集約を行う必要がある。誤者の多い途上国であれば、多数決よりも先進国を真似た主導集約の方が良い。中国などが典型例である。

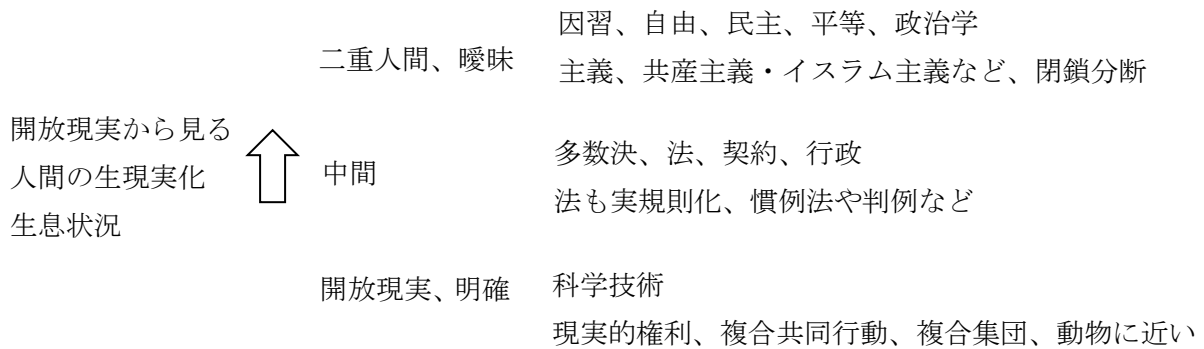
法や契約も認識上の存在ではなく、生現実上の実規則化である。法には明文化されていない不文法があり、慣習法や判例が含まれる [40]。

明確で現実的なのは、科学技術などが相当する。政治学からは遠いが、行政にも科学技術に関わる部分がある。これらを元にして開放的に法や行政などを組み上げるべきである。

当解析で扱う現実的権利、複合同行動、複合集団などは開放現実に近い。これらは生物や動物の規則にも近く、生人間を類推できる。ただし知性のない動物と違い、人間は知的生物である事に注意する必要がある。

現実的で正しい国家・国際政治なら参加生満足が可能になる。曖昧な人間的な政治では参加生満足を与えられない。人間的な国家の暴力は特に問題が大きくなる。第一次・第二次世界大戦も民族主義的な部分が強く人間的だった [46]。ヒトラーの存在がその最たるものである。現在でも民族・宗教紛争は継続している。

誤った認識を壊すだけでは意味がなく、正しい認識を作る必要がある。政治・法・行政においても、開放現実に近い科学技術や現実的権利などから正しい認識を作るべきである。



共同行動において参加生満足が必要、なければ離反、国際政治でも同様
自由・民主・平等が「幸福」なのは誤り、認識正評性が問題、曖昧で解析不能
多数決は平均集約、特に誤者の多い途上国で問題、正集約が必要
現実的で正しい国家・国際政治なら参加生満足が可能、人間的では駄目
人間的な国家の暴力は特に問題、世界大戦や民族・宗教紛争など

図 6-12 政治と法と行政

6.3.2. 国際政治と世界

共同行動では参加・不参加が重要である。主権国家の外部共同行動においても参加・不参加が重要になる。国家全体として参加生満足があるかどうかを基準に参加・不参加を判断すべきである。国際条約への参加・不参加などが相当する。

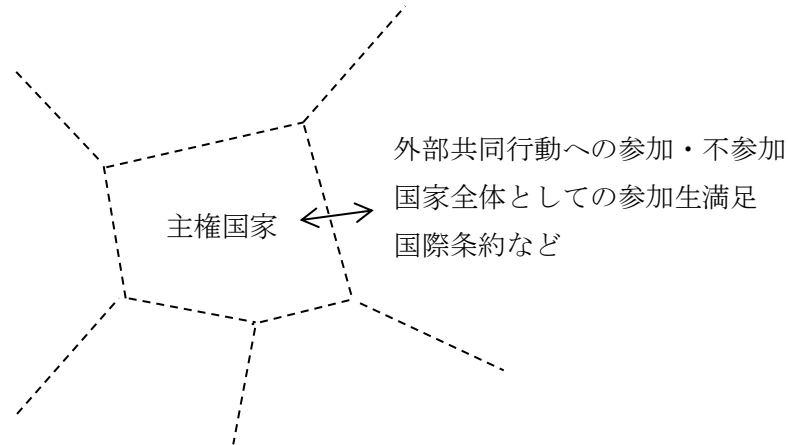


図 6-13 国家の外部への参加

欧米政治における実規則化の構造を考える。欧州は上位階層に欧州共同体、下位階層に国家がある構造である。アメリカ合衆国は、上位階層に国家、下位階層に州がある構造である。アメリカの州の独自性は、日本の地方などより遥かに高い。主権の位置は欧米で別だが、実規則化の階層構造だけを見ると欧米は良く似ている。

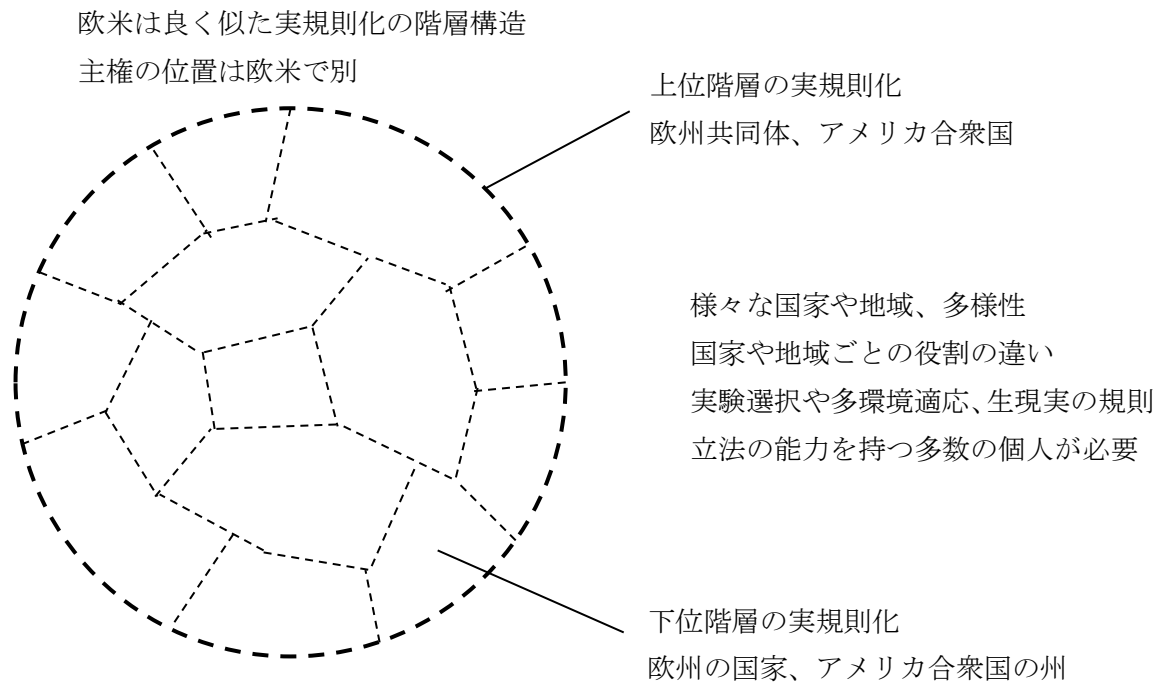
実規則化が分かれた様々な国家や地域があると言う事は、生物における多様性と同じ利点がある。多様性には実験選択や多環境適応が含まれる。実験選択により性能の良い新しい実規則化を作る事が可能である。推測による実規則化ができれば実験選択は不用だが、政治は広い人間社会を扱うため推測は困難である。実験選択や多環境適応などの多様性は、生現実の規則でなければならない。

様々な国家や地域で政治の実規則化を分けるには、立法の能力を持つ多数の個人が必要である。欧米には普遍的に存在するが、日本には国家レベルにしか存在しない。

すべての規則は、生現実上の規則でなければならない。これは集約と分散でも同様である。集約の方が規則的だが、多様性という別の規則も考慮する必要がある。

政治の実規則化構造には多様性が必要である。例え世界を統一しても「一つの実規則化」にはできない。アメリカ合衆国程度までが限界だと思われる。主権国家を連邦的に統一する事は可能だが、全国家が自主的に参加するものでなければならない。現状では正しい国際条約を積み上げて強化していくしかない。これはグローバリズムの進展に直結する。

同様の問題から貨幣の統一も難しいと思われる。貨幣は権利を数値化したものであり、国ごとの貨幣の違いは国家間の権利を調整する役割を持つ。貨幣を統一するとこの調整機能が失われてしまう。



生現実上の規則の階層構造、集約と分散でも同様
多様性が必要、例え世界を統一しても「一つの実規則化」にはできない
アメリカ合衆国程度までが限界、貨幣の統一も難しい
主権国家を連邦的に統一する事は可能だが、全国家が参加する必要
正しい国際条約を積み上げて強化、グローバリズムの進展

図 6-14 欧米における実規則化の階層構造と世界

6.3.3. 途上国への認識知性伝達

先進国から途上国への認識知性伝達について分析する。集約状態の分析で使用した、中東と中国の例を再度使用する。

先進国においても、現実的で新しい認識と、人間的で古い認識が混在している。現実的で新しい認識には、科学技術や新しい法などがある。新しい法は、欧米における様々な国と地域による実験選択で作成される。人間的で古い認識には、欧米の因習や自由民主主義などがある。自由や民主も古代ギリシャからある古い概念である [40]。法は人間・現実で見ると中間的だが、因習・主義よりは現実的である。

認識知性伝達では、伝達の経路より内容の方が重要である。現実的な内容の伝達を行う必要がある。中国へは、内容が明確な科学技術や新しい法が伝達された。一方で中東・北アフリカの「アラブの春」では、内容が曖昧な自由民主主義が伝達された。

中国に伝達された科学技術や新しい法は、内容が明確なので変化しなかった。中国においても因習や共産主義などの問題があるが、全体として見れば先進国に近い発展が可能になった。中国の改革開放は、開放現実に近い概念である。中国に自由民主主義が存在しない点に注意する必要がある。

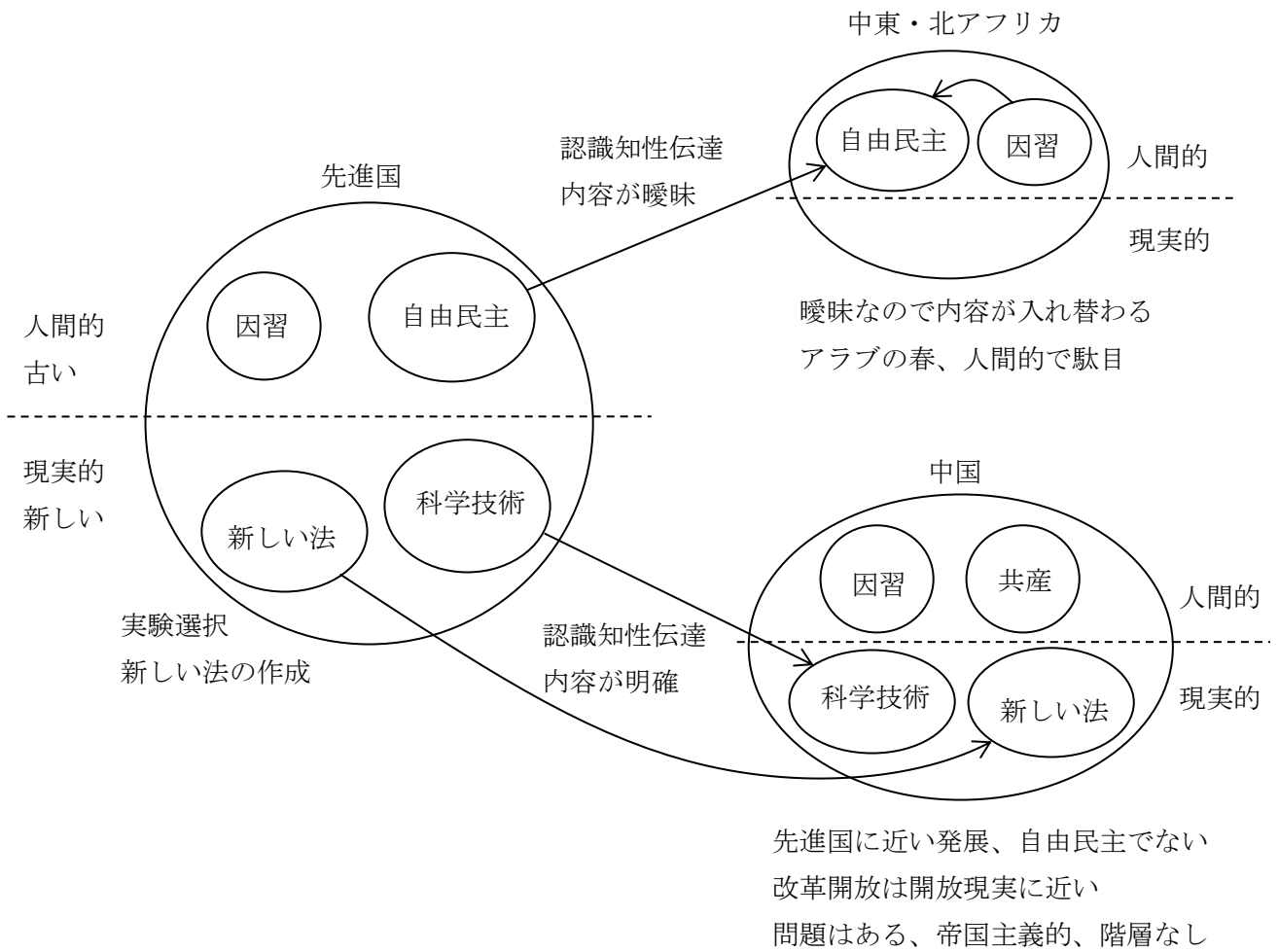
中東・北アフリカに伝達された自由民主主義は、内容が曖昧なので因習に入れ替わってしまった。自由民主主義な「アラブの春」はイスラム的なデモなどとなり、秩序が崩壊してしまった [46]。伝達内容が人間的である事が根本的な問題である。

中東・北アフリカでは因習の問題が大きい、中国はそうでもない。これも両者の発展の違いに影響している。中国にも道教などの因習があるが、途上国としては問題が小さいので発展を妨げる事はない。

自由民主主義における認識正評性が問題である。自由や民主自体に満足があると認識されるが、曖昧で根拠はない。多数決は平均集約でしかなく、誤者の多い途上国では誤者側にしか集約しない。多数決より正者に権利を持たせて正集約をすべきである。現実的で正しい国家・国際政治が必要であり、曖昧な人間的な政治では生満足を得られない。

自由民主主義でなくても、先進国の法が導入されれば独裁にはならない。重要なのは思想的な自由民主主義ではなく、実務的な法である。

中国においても因習・共産主義などの問題点は存在し、より現実化する必要がある。共産主義の固定集团的性格はまだ残っている。軍備を背景に勢力を拡大しており、帝国主義的な性格もある。連邦のような階層構造がないため、民族・地域的な問題が多発している。



法は人間・現実の中間だが、因習・主義よりは現実的
 中東・北アフリカでは因習の問題大、中国はそうでもない
 伝達の経路より内容が重要、現実的な内容の伝達が必要

図 6-15 先進国から途上国への認識知性伝達

6.4. 自然科学への応用

6.4.1. 自然科学と医学

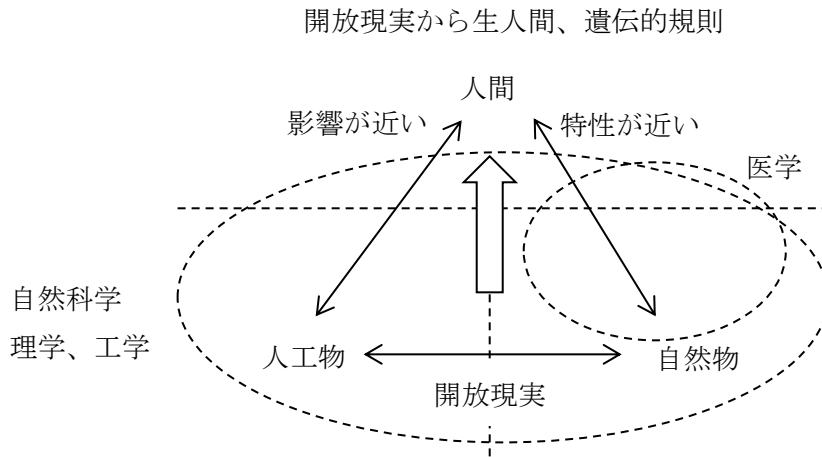
人文・社会科学に比べて、自然科学は明確で正しい。その理由は自然科学が現実的なためである。医学も生物学的な要素が強いため、人間を扱っていても現実的になる。自然科学や医学の正誤にも幅があり、人間的であれば曖昧で誤ったものになる。人間的な「思想」が入った環境思想や、精神分析などが挙げられる。

自然科学には理学と工学がある。これらの中でも数学や情報処理は人間的な対象を扱う場合があり、適用対象によって正誤は変わる。厳密な数学でも対象が人間的なら曖昧な結論しか出ず、それを人間的に解釈すれば誤った結果になる。リーマン・ショックにおける金融工学の無力さが典型例である [54]。

現実には人工物と自然物に分けられる。人工物は、強い実規則化で自然物の規則を変更した物である。現実には開放の理解が容易であり、自然科学などにより明確に関連性を理解できる。現在の人間の生活は人工物の影響が大きい。一方で人間は生物の一種であり、特性は自然物に近い。開放現実から生人間を見るのが正しい。人間も生物の一種であり、遺伝的規則に支配されている。

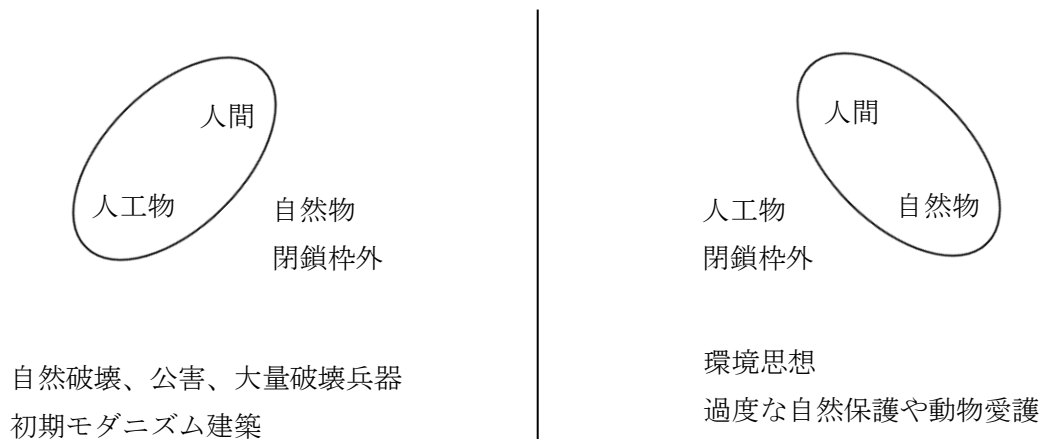
本来であれば自然科学などにより人工物と自然物の開放は容易に理解できる。しかし人間が入り込むと認識が閉鎖分断する可能性がある。自然物が閉鎖枠外となった例は、自然破壊、公害、大量破壊兵器、初期モダニズム建築などが挙げられる。人工物が閉鎖枠外となった例は、環境思想、過度な自然保護・動物愛護などが挙げられる。両者の認識は対立するが、閉鎖の構造だけを見ると同じである。閉鎖によりそれぞれの距離が遠くなる。

自然破壊は足尾鉍毒事件や現在の中国大気汚染など、継続的に存在している。大量破壊兵器は特に第一次・第二次世界大戦で問題が大きかった。この時の政治にはヒトラーのように非常に「人間的」な指導者がいた事も問題の原因である。モダニズム建築は第一次世界大戦後に起こり、初期には直線と平面からなる自然物から離れた構造が多かった [55]。これらは第二次世界大戦以降に自然物も含む形で変容していった。世界大戦と初期モダニズム建築が同時期なのは、自然物の閉鎖枠外という点で同調していると思われる。



自然科学や医学は現実的なため明確で正しい
 人間的だと駄目、環境思想、精神分析など
 数学や情報処理は適用対象により異なる

図 6-16 自然科学・医学と人間・人工物・自然物



人工物と自然物は、本来なら自然科学で開放理解
 人間が入るために閉鎖分断

図 6-17 人間を含む自然科学の閉鎖

自然物も人工物も、規則発見や実規則化によりできるだけ明確化すべきである。自然物は内実規則化ができないが、外実規則化なら可能である。生物でも遺伝的規則による明確化が可能である。人工物は内実規則化もできるため、自然物より容易に明確化できる。広域の自然物は要素が多量で曖昧になる。人工物でも要素が多量なら曖昧化するので、別の実規則化により単純化すべきである。要素の多い複雑な人工物は、作成も管理も

困難になる。人工物が自然物との関係で曖昧化する場合がある。これも人工物・自然物を含めた形での明確化が必要である。

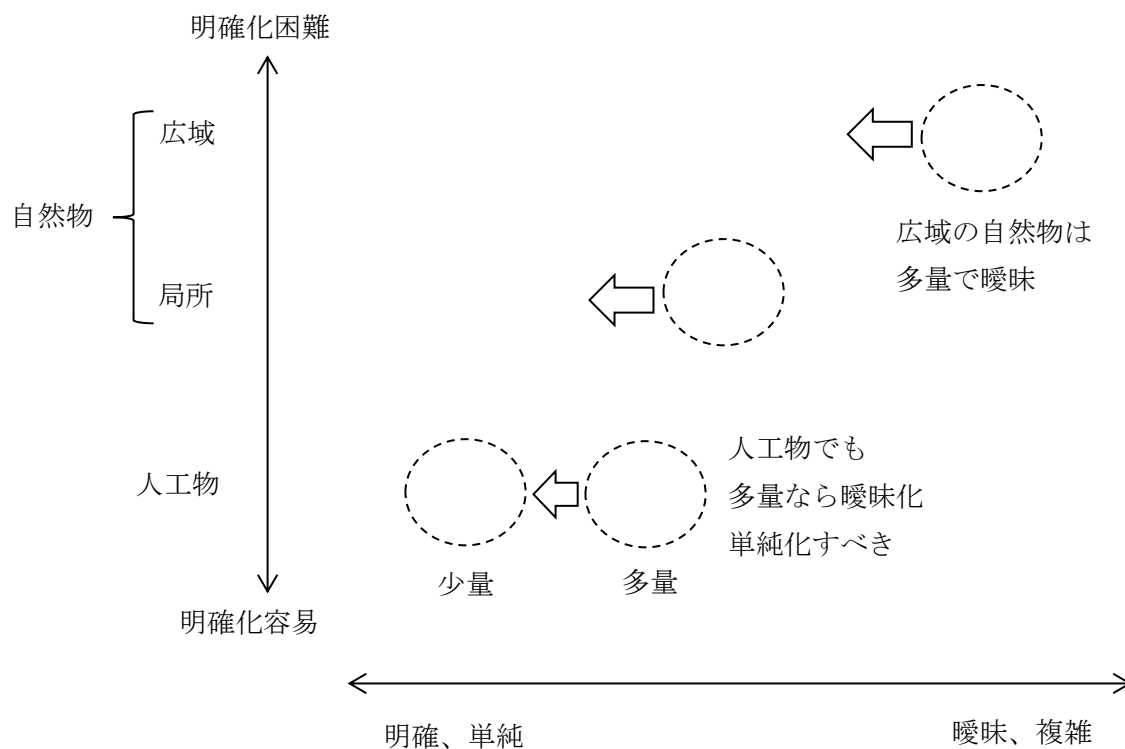
山間部に多くの道路を作るのも複雑である。山間部には平面的・直線的な道路が作れないので、人工物である道路も複雑になる。道路を作りやすく必要性の高い場所に限定した方がいい。

多関節の人間のロボットも複雑である。構造的に価格が下がる可能性は低く実用性は乏しい。ロボット掃除機のように単純化できれば実用的になる。

明確化と言っても、認識上での明確化では意味がない。生現実上の規則により明確化しなければならない。生現実上で曖昧なものを、明確だと認識するのは誤りである。

福島第一原発事故は、津波という広域自然物による曖昧で予測困難な事象により発生した。この検証において、日本の原発では「安全神話」の下に行われなかった過酷事故に対する安全対策の存在が指摘されている[56]。これらの対策は海外で実施例があり、比較的 low コストでできるものである。つまり複雑な広域自然物による過酷事故に対して、単純な人工物で対応可能と言える。人間的な「安全神話」という、誤って明確化された認識により、これらの対策は見落とされた。これ福島第一原発事故の要因の一つである。明らかに危険すぎる高速増殖炉の研究が長年行われた事も含め、日本の原子力発電産業には問題点が多い。

規則発見も実規則化も、目的は生満足を得る事である。生満足を得られなければ規則の意味はない。特にこれは労力の大きな実規則化において問題が大きい。山間部に立派な道路を作って移動が容易になっても、利用者が少なければ意味がない。



規則発見や実規則化により、できるだけ明確化
 自然物は内実規則化ができない、外実規則化は可能
 人工物が自然物との関係で曖昧化、これも明確化が必要
 認識上でなく生現実上の規則、生現実上で曖昧なら明確化は誤り
 規則発見や実規則化の目的は生満足

図 6-18 人工物・自然物と明確・曖昧

6.4.2. 自然保護

人類の進歩により人工物が増加すると、相対的に自然物は減少し希少化する。この場合の自然保護について考える。自然物の供給減少に対して、自然物の需要つまり生満足価値の状況を検討する。需要と供給は別々なので、可換や原料自然物などに対する需要の構造を考えればよい。人工物の生満足価値が上昇するので、自然物の生満足価値は相対的に減少する。

可換自然物は人工物と交換可能なので、自然物の需要は小さい。自然保護の必要性も低い。

原料自然物は人工物の原料となるもので、人工物の需要は増加する。原料自然物の需要も増加するが、この需要は人工物の需要の一部である。価値の面から見ると、人工物の需要が増えて価値が上がっても、原料自然物の価値は上がりにくくなる。人工物は原料自然物の量の制約を引き継ぎ、自然物の量以上は作成できない。原料自然物は人工物のために保護が必要になる。

非可換かつ非原料自然物は、人工物のように需要が増えない。一方で人工物の生満足価値が増加しても無関係である。ある程度の需要は変化せず存在し、そのための自然保護が必要である。地球温暖化などの環境問題はこれに当たる。

同じ自然物でも、捉え方により可換や原料の意味は変わる。油の原料としての魚は可換かつ原料自然物であり、減少しても保護は不要である。一方で種としての魚は非可換かつ非原料自然物であり、保護が必要になる。原料として見る場合と種として見る場合では、希少化と見なされる生息数も異なる。

希少化によって上がる価値は、生満足価値でなく需給価値である。需給価値は競争を示す価値であり、生満足を示す価値ではない。人工物の発達により自然物の生満足価値は相対的に減少しており、特に小権利の人間にとって競争をして自然物を保護する意味は小さくなる。小権利の人間は自然物が枯渇しても構わない。種の保存にしても、生物学的価値以上の価値はない。

自然保護は大権利の人間や集団が行うべきである。国家がその権力を示すために行うのが典型例である。途上国の小権利の人間が自然保護を無視するのは当然であり、非難されるべき事ではない。途上国の自然保護についても、先進国・途上国の国家が主体となって行う必要がある。また途上国における小権利の人間の権利を増加させる事も重要である。

先進国から見ると自然は減少しており、需給価値が上がる、途上国から見ると自然の減少は小さく、需給価値は上がりにくい。途上国の自然保護に対しても、先進国が貨幣を出して行うべきである。

同じ自然物でも、捉え方により
可換や原料の意味は変わる

	自然物	対応する人工物	
可換自然物 需要小なので保護不要	需要小	需要大	原料としての需要は 人工物の需要の一部
原料自然物 人工物のため保護必要	原料として 需要大	需要大	
非可換かつ非原料自然物 ある程度は保護必要	需要中		

人工物増加のため自然物が希少化、供給小
人工物の生満足価値が増加、自然物の生満足価値は相対的に減少
希少化により上がる価値は、生満足価値でなく需給価値
大権利が自然保護を行うべき、国家・先進国など

図 6-19 可換・原料自然物と希少化

人工物は明確な実規則化が可能である。自然物にも人工物に比べれば曖昧だが規則はある。自然物と人工物を部分的に混在させると、自然物の規則が失われる上に実規則化も曖昧になる。これは不適切な状態であり、人工物にするなら全体的に行うべきである。重要なのは明確な規則であり、部分的で曖昧な実規則化では意味がない。

曖昧な実規則化の典型的な例が焼畑であり、広域の自然破壊を引き起こす。日本に多数植えられている杉林も似たような問題を持つ。杉は山間部に手作業で植えられたため、その後の管理が難しい。良い木材にならな

い上に花粉症の問題を引き起こしている。山間部に林道を作るのも同様で、複雑な山腹に合わせるため建設が難しく、後の管理も困難になる。

自然物と人工物を区分けすべきである。山岳地帯のように人工物化が難しい地域も多く、自然保護地域もある程度は必要である。これらの地域に対しては人工物をできるだけ外して自然物化した方がよい。自然公園などが相当し、大権利の国などが定めるべきである。人工物化が容易な地域を集中的に人工物化すれば、自然物のままの地域を残しても生満足価値を向上できる。

日本の杉林と林道のある山間部も、管理可能な杉林に再開発すべきである。林道の建設や機械化が容易な場所を選んで開発し、それ以外は放置した方がいい。管理不能なら自然の混交林に戻して林道も廃止した方が、後の管理が楽になる。このような再開発は現在林野庁で進みつつある [57]が、まだ不十分である。

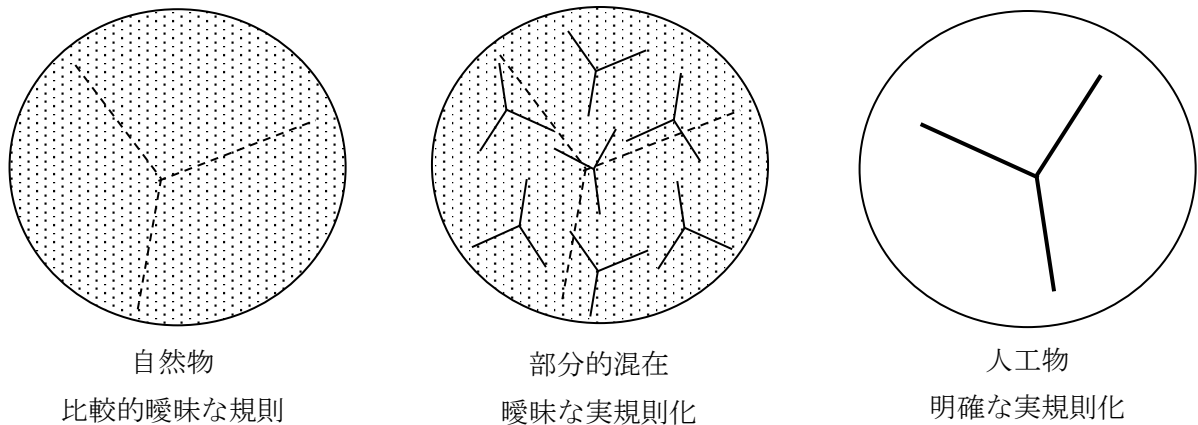
自然物と人工物を区分する事は、自然災害対策にも有効である。自然物においては自然災害の悪影響は小さい。高度な人工物なら、ある程度は自然災害に耐えられる。部分的混在が最も自然災害に弱い。

陸上であれば自然物と人工物の区分は容易だが、海中の場合は困難である。漁業は区分けを明確化した養殖を中心にするべきである。養殖でも海中の区分けは陸上ほど明確にならず、栄養分などはすぐ混ざってしまう。自然保護の観点から見ても、海中にはサンゴ白化や磯焼けのような大規模な問題が多数ある。これらは地球温暖化の影響も考えられる。陸上の問題よりも徹底した調査研究と総合的な対策が必要である。

高度な人工物化は現代文明の基礎であり、自然保護のために妨げるのは誤りである。途上国の農村でも肥料や機械化を多用した方が大権利になり、結果として自然保護をする余力ができる。太陽光発電は高度な人工物化の賜物であり、自然回帰ではない。化石燃料による発電は「化石」という自然物を使っているのに、太陽光発電より「自然的」である。太陽光発電は太陽光から化石ができる部分の自然物を省いた手法と言える。

明確な現実が正しく、曖昧な人間は誤りである。特に人工物より自然物の価値が大きい、と見なす人間的視点は問題が大きい。希少な自然物は需給価値が高いだけであり、生満足価値が高い訳ではない。印鑑用の象牙は可換自然物であり、現実的に見れば人工物の方が使いやすい。自然保護のために人工物を破壊するのも同様の誤りである。象牙のための狩猟と過剰な自然保護は正反対に見えるが、自然物の価値が過剰に大きいという点では同じである。

自然・環境保護でも、目的は人間の生満足である。自然や環境を「完全に不変」にするのが正しい訳ではない。人間の生満足を評価基準として、自然や環境の将来を検討する必要がある。自然・環境保護でも正しい現実的理解と推測が重要であり、感情的に破壊を悪者とするのは誤りである。割りばしが悪者から正義に急に変わるのも不整合がある。ゴミ埋め立て地も海面上昇には有効であり、悪者とは言い切れない。



明確な規則が必要、曖昧な自然物・人工物の混在は不適切
 自然物・人工物を区分け、自然保護地域と高度人工物化

図 6-20 自然物・人工物の混在・区分け

6.4.3. 数学と明確・曖昧

数学は厳密な論理構造を持っているが、その正しさは適用対象により様々である。数学自体が厳密でも、「数学化」が曖昧なら結果も曖昧になる。現実的なら正しい結果が得られるが、人間的なら得られない。数学は「自然科学」だから正しいという訳ではなく、内容が問題になる。これは数字を扱うだけの場合も同様である。適用対象ごとに、開放現実から見て人間を生現実化する必要がある。生息状況に対して数学を使うべきである。

自然科学の場合は、物理を元に様々な事象を演繹的な数学で分析できる。この点が自然科学の正しさの要因となっている。人文・社会科学では数学を帰納的に使うしかなく、同じ数学でも正しさは異なる。人間は複雑すぎるため、演繹的な当解析でも直接数学を利用する事はできない。

医学の分野で使われる QOL という尺度がある。これは病気や障害の程度から生活の質がどの程度低下するかを見る尺度であるが、インタビューにより決める部分があるため信用できないという意見もある [58]。QOL より主観的な計測を行う主観的幸福感という尺度もある [59]。ここまで人間的になると、数字として扱っても明確な答えを出すのは困難である。これらもできるだけ治療時間などの現実的状況から判断すべきである。

経済的コストなどでも、現実的コストなら明確に計算できるが、人間が絡むコストは曖昧になる。これらに対して記述者に有利な数値にする、というような事は普通にある。

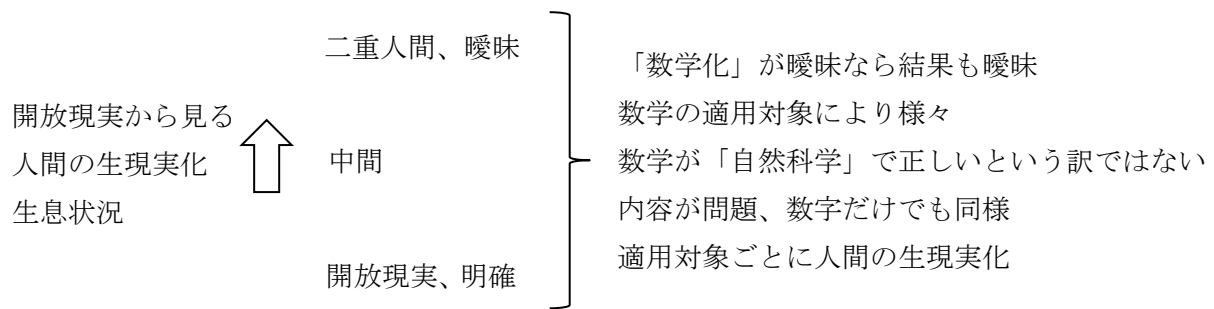


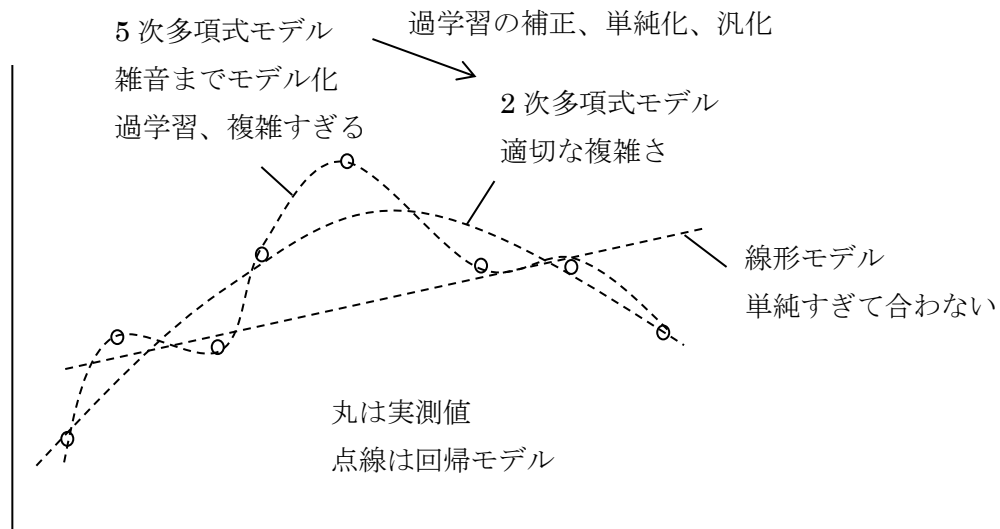
図 6-21 数学と人間・現実

生現実に合うという制限下で、可能な限り単純・明確な規則を作成する必要がある。数学モデルも可能な限り生現実化・明確化すべきである。

機械学習においては学習パラメータが多すぎて汎化できない状態を過学習 [2] と呼び、複雑なモデルを可能な限り単純化する事が求められる。5次多項式モデルが雑音までモデル化しているような場合、過学習と呼び単純化しようとする。予測の分散（バリエーション）を調べて、これを減少させる方法などが取られる。モデルが取得データと合っているのが前提である。線形モデルが単純すぎて合わない場合や、予測と正解値の差（バイアス）が大きすぎる場合はモデルとして使えない。

学習をより現実に合わせるために、学習データと検証データの分離が行われる。これにより学習データと異なる新しいデータに対して汎化性能が得られるようになる [2]。

機械学習など統計的な手法は帰納的であり、根本的な原因を解析する訳ではない。数理モデルも可能ならば演繹的な方がいい。演繹的なら原因と応用の両面から現実的検証ができる。



生現実に合うという制限下で、可能な限り単純・明確な規則を作成
 数学モデルも可能な限り生現実化・明確化
 機械学習の手法、予測の分散、学習とテストの分離など

図 6-22 数学モデルの生現実化・明確化

確率分布を使えば、明確・曖昧の区分自体を厳密に扱う事ができる。現実的なら明確になり、人間的なら曖昧になる。人間的な内容を扱う際は厳密に「曖昧」という結果が得られる。これは低正確だが厳密なので、ある程度は役に立つ。厳密性の低い言葉による曖昧な結果では役に立たない。数学的に出された厳密な曖昧さを、人間的に解釈すれば誤った結果にしかならない。

認識上で明確と思いつくのではなく、生現実上での明確な規則を発見しなければならない。生現実上の規則が曖昧なら、確率分布における裾野の部分を見捨てるのは誤りである。これは株式市場の価格変動における正規分布よりも高い裾野の部分（ファットテール） [54]などが相当する。貨幣には人間的な部分もあるので、挙動は多少曖昧になる。ファットテールの存在により、金融工学や現代ファイナンス理論で使われる VaR はリーマン・ショックで役に立たなかった。確率的な問題ではないが、日本の原子力発電における「安全神話」が福島第一原発事故で役に立たなかったのも、リーマン・ショックとよく似た事例である。

人間に関する行動は、需給理論やゲーム理論などの単純化された演繹的な数理モデルで解析される事が多い。ただしこれらの前提は非常に単純であり、利益や勝利だけを求める事になる。必ずしも現実の人間すべてを解析できないので注意する必要がある。生物的権利を使えばこの問題を回避できる。生命活動を行う上での権利の必要性や、貨幣と無関係の権利まで解析できるからである。

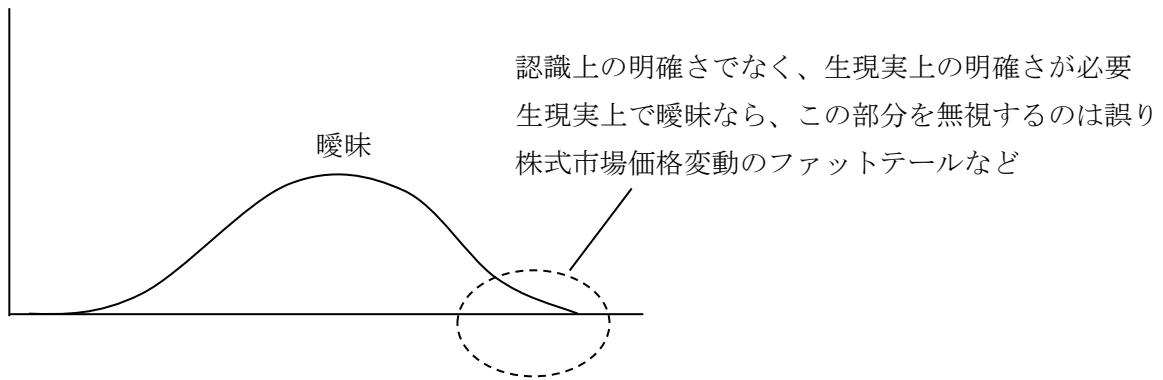
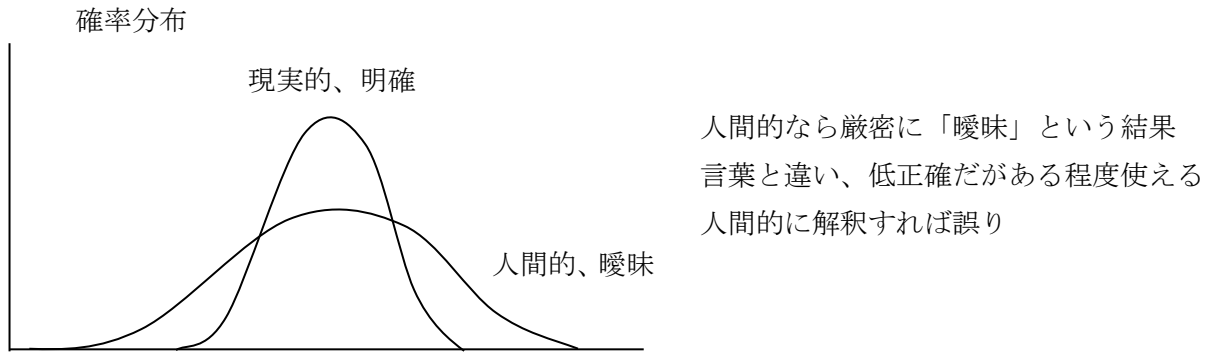


図 6-23 確率分布と明確・曖昧

6.5. 情報処理への応用

6.5.1. 情報処理

情報処理も数学と同じく、適用対象により正誤は様々である。情報処理自体よりも内容が問題である。数学であれば明確・曖昧を厳密に解釈できるが、情報処理には数学のような厳密さはない。人間的で曖昧な対象を扱えば、曖昧かどうか分からない状態に陥る。適用対象ごとに、開放現実から見て人間を生現実化する必要がある。生息状況に対して情報処理を使うべきである。

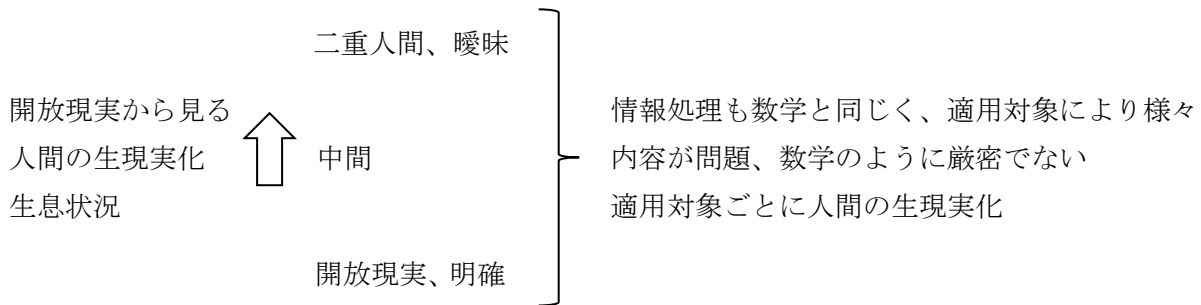


図 6-24 情報処理と人間・現実

情報処理は様々なソフト・ハードに対して、統一した実規則化を行う事で発展してきた。共通の規格やデファクトスタンダードなどがこれに当たる。現在ではパソコンからスーパーコンピュータまで、ほぼ同じ構造になっている。

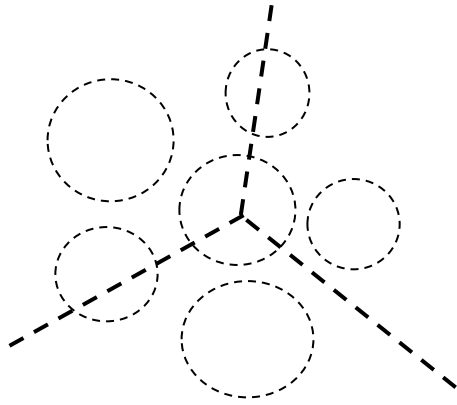
共通の規格でも数が増えれば複雑で曖昧になる。規格の数が増加する場合や、規格に基づく製品が増加する場合がある。規格自体が複雑になる場合も同様である。これらの場合は別の規則による明確化が必要になる。

現在はインターネット環境の普及と電子商取引の増加に伴い、サイバー攻撃が増加している [60]。一方でサイバー攻撃や匿名化の手段がツール化されており、攻撃自体は容易になっている [60]。国家単位でサイバー攻撃が行われているとの噂もあり、容易に収まる状況にない。これは数の増加による曖昧化の一種である。サイバー攻撃に対しても何らかの規則により防御を強化する必要がある。

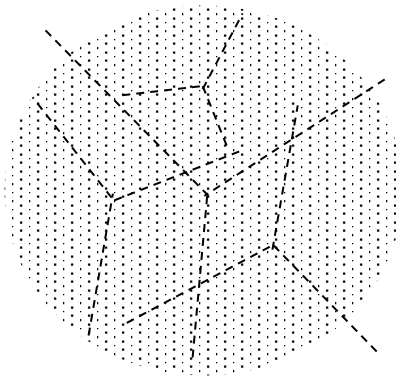
社会シミュレーションにおいてはマルチエージェントモデルが良く使われている [28]。これもエージェントの数が多く複雑になれば結果は曖昧になる。マルチエージェントと関係の深い複雑系は人間的で曖昧であり [19]、マルチエージェントモデルでも複雑なだけでは意味がない。できるだけ明確な答えを求めるべきである。

ソフトウェア開発においては、動作区分であるメソッド内の行数や複雑度が大きいと品質が劣化する事が知られている [61]。これも数の増加による複雑曖昧化の一種と言える。

IT化を行えば業務改善ができる訳ではなく、単純化や機能強化が必要である。IT化により業務が複雑になり機能強化もないなら、IT化する意味はない。



様々なソフト・ハードに対し、統一した実規則化
 共通の規格やデファクトスタンダード
 パソコンからスパコンまで同じ構造



共通の規格でも数が増えれば複雑で曖昧
 規格の数が増加、製品が増加、規格自体が複雑
 別の規則による明確化が必要
 サイバー攻撃、複雑系など

図 6-25 情報処理と規則

6.5.2. 人工知能

当解析による認識・知性の構造を、現在の人工知能に当てはめてみる。ただし AI の研究は急速に進歩している最中なので、以下の問題が早急に改善していく可能性もある。

現在は深層学習が急激に進歩しているが、その適応分野は主に画像と言語である。画像処理のみが行われることも多く、他の適応分野との複合は部分的に行われる程度である [15]。現在の人工知能の範囲は感覚が中心である。行動は強化学習として多少用いられる [15]。

人工知能において感情は必要性が低くあまり用いられない。強化学習の報酬などが感情に近い部分だが、その構造は感情より単純である。

現在の人工知能は感覚の情報統合も不十分である。画像と言語の統合も部分的に行われている程度である [15]。人間の言語処理は辞書や画像と連動して統合的に行われるが、深層学習においては辞書などを使わず感覚的に用いられる [15]。機械翻訳なども言語感覚と言語構成（行動）を直結している。深層学習をロボット等に応用する場合でも、強化学習を使わない事も多い。

現在の人工知能は必ずしも自律学習ではない。エキスパートシステムや知識工学においては辞書的な知識を使うが、知識自体は人間が作成する [24]。機械学習・深層学習は自律学習をするが、多くの場合正誤は「教師」として人間が与える [62] [63]。つまり知性や認識遷移は外部から人間が与えている。正誤や報酬はどちらも評価であり、人工知能においても知性と感情は連動する。また学習した AI の性能は人間が与える学習デ

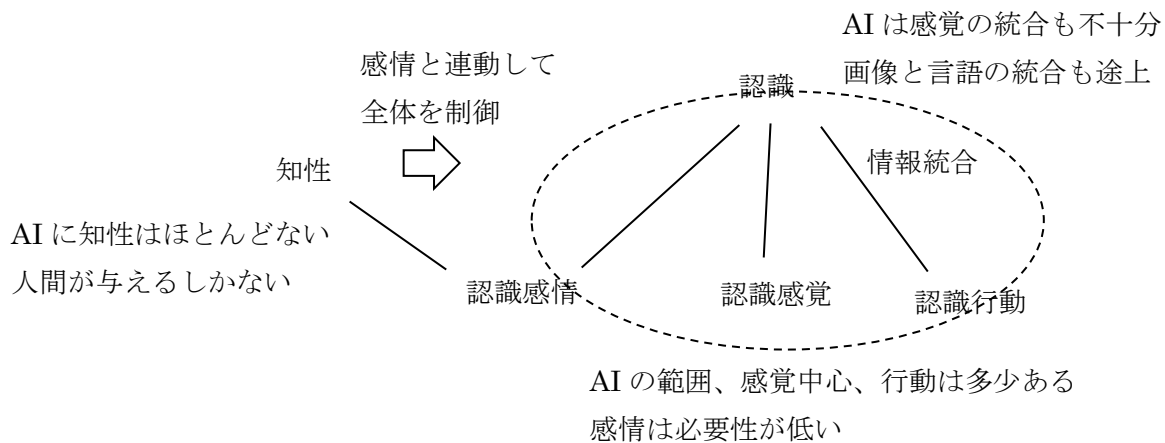
ータに大きく依存しており、必要な学習データを AI 自体が探す事は少ない。

現在の人工知能は認識や自律学習から不足しており、人間のような知性はほとんどない。自律学習しない事を動物と比較すると、学習でなく遺伝子レベルの本能で行動しているのに近い。

動物は人間のような言語は持っていないが、何らかの形で統合された学習能力を持っている。哺乳類のように高知能の動物であれば、ある程度の未来予測ができる。現在の人工知能は部分的に人間を超えているが、全体構造としては低知能の動物レベルと言える。

人工知能を人間に近づけるには、まずは認識による情報統合を行う必要がある。その先に全体を制御する知性を作成する事で、やっと人間レベルに到達する。強力な知性が人間の特徴であり、人工知能が人間レベルになるには認識修正や規則発見などができる必要がある。

現在の深層学習は人間の脳をモデルとしており、多量のデータを処理する事で複雑な言語を処理できる。ただし人間の能力は複雑な言語だけによるものでなく、より単純な論理・数式・図などの利用により成り立っている。これらも利用できなければ人間に近づいたとは言えない。



AI は必ずしも自律学習でない

AI は部分的に人間を超えているが、全体構造としては低知能の動物レベル

まずは認識による統合が必要、その先に知性で人間レベル、知性が人間の特徴

図 6-26 人間と現在の人工知能の比較

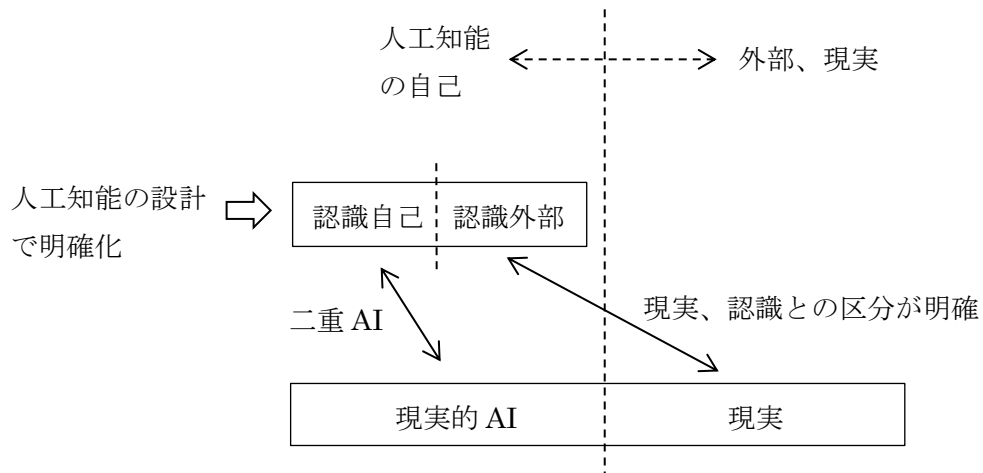
人間は認識自己と生自己を区別できないので二重人間の問題を起こす。人工知能も認識自己と現実的 AI を区別できないので二重 AI の問題を起こす。人工知能の生現実化が必要である。人工知能の自己は人間が設計するものなので、外部から認識自己として設計を与えれば明確化できる。これは人間とは異なる利点である。人工知能の認識自己は外部から与えるべきであり、自律学習させない方がいい。

人工知能に人間に関する曖昧な認識が入ると問題が起こる。二重 AI や二重人間の問題により、人工知能も精神疾患を起こす可能性がある。人工知能の設計で認識自己を明確化し、人間の生現実化により明確化する必要がある。

人間も人工知能も開放現実へ向かう必要がある。開放現実から生人間・AI を見て、人間・AI を生現実化すべきである。正しい認識は開放連続なので、人間の認識も人工知能の認識も繋がる。正しく強い知性があれば、

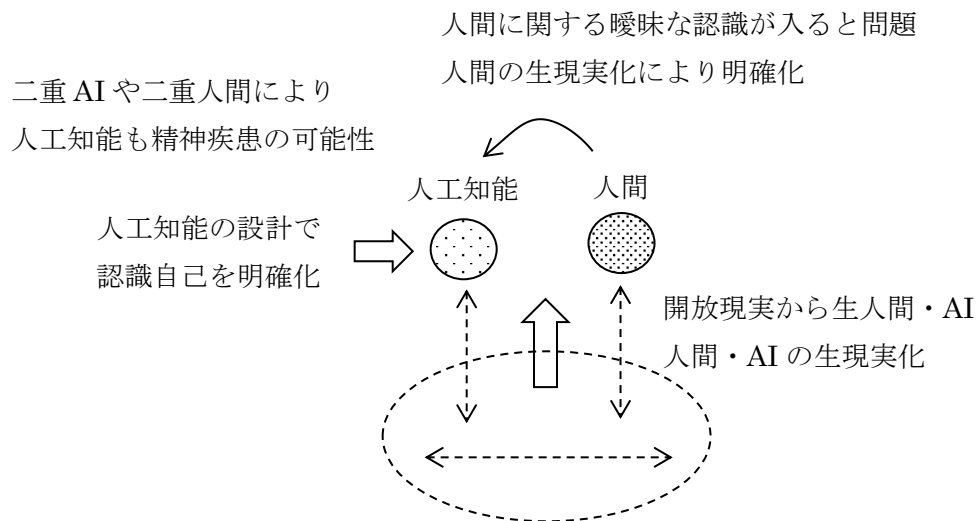
人工知能が人間を超える事も可能である。誤った知性であれば、人間と同じように暴走する可能性がある。人工知能の能力が人間を超えても、「自己の設計を正しく理解」すれば問題は起こらない。AIが自分の役割を正しく理解していれば、人間への反逆などは起こらない。ただし人工知能の数が増えれば曖昧化の可能性が生じる。この問題は他の情報処理と同様であり、集中管理などの方法で明確化すべきである。

当解析における知性・認識・開放現実などを使えば、AIを人間と同様に解析する事が可能である。認識遷移を使ってAIを詳細に解析する事も考えられる。AIによる実規則化もできるかもしれない。



人工知能も認識自己と現実を区別できない、二重 AI、AI の生現実化
 人工知能の設計を認識自己として与える事で回避可能
 人工知能の認識自己は外部から与え、自律学習させない

図 6-27 二重 AI



正しく強い知性があれば、人工知能が人間を超える事も可能、誤った知性だと暴走
人間を超えても「自己の設計を正しく理解」すれば問題は起こらない
人工知能の数が増えれば曖昧化の可能性、他の情報処理と同様、明確化すべき

図 6-28 人工知能と開放現実と知性

6.6. 産業・都市・農村への応用

6.6.1. 産業の進化と実規則化

産業は仕事の主体であり、人間において非常に重要である。

産業は第一次・第二次・第三次産業の順に進化している。先進国における第二次産業の労働人口比率は1920年頃に最大となり、それ以降は第三次産業に入れ替わっていった [64]。第一次産業は自然物を対象とする産業である。第二次産業は人工物を作る産業である。自然物を人工物に変換したり、人工物から他の人工物に作り変えたりする。第三次産業はそれ以外の産業であり、主に人工物と人間に基づいている。第三次産業は運輸、情報処理、医療、介護、教育、サービス業などであり、研究開発も第三次産業に含まれる [65]。イノベーションも研究開発に近い。第三次産業での自然物使用は少なく、食料・娯楽用自然・研究位しかない。娯楽用自然には観光・ペットなどがある。

これらの産業の進化は、人工物の生満足価値が増大して、相対的に自然物の生満足価値が減少する事に由来する。自然物に基づく産業が難しくなり、ここから第一次・第二次・第三次産業という順の進化が起こる。産業の進化は貨幣でなく労働人口に基づいている。貨幣よりも人口の方が現実的で明確な結果が得られる。

第一次・第二次産業の対象はすべて現実であり、自然科学に基づく現実的な産業になる。これらは先進国レベルまで発展が可能である。第三次産業は人工物と人間が対象であり、人間・現実の中間になる。第三次産業を進展させるためには生現実化が必要である。

量の制約においては自然物が重要であり、人工物の量の制約にも繋がる。土地やエネルギーの量の制約などが挙げられる。量の制約により先進国の産業発展は困難であり、途上国には産業発展の余地がある。

第三次産業を効率的に行うには、人工物と人間の集約が必要である。集約は単純化・明確化の一種である。第三次産業は人工物と人間が集約した都市で発展する。2010年の都市人口割合は先進国において75%、途上国において45%である [44]。途上国においても都市人口割合と第三次産業の増加が進んでいる [44]。

現在進化しているのは人工物であり、第三次産業だけでなくどの産業でも人工物が重要である。第一次・第二次産業においても進化した人工物を使用しなければならない。先進国の停滞により途上国との差は小さくなり、先進国・途上国より都市・農村の方が区分として重要になる。

人工物も人間も明確な実規則化を行う事が重要である。集約していた方が実規則化しやすい。人間に対してもできるだけ現実的な実規則化を行う必要がある。法や契約などにより、比較的明確な実規則化が可能である。曖昧な人間関係を元にしても第三次産業の効率化はできない。

日本における第三次産業への進化はまだ未成熟であり、進展させる必要がある。第二次世界大戦前における第二次産業の労働人口比率は1920年頃に最大だったが [64]、第二次世界大戦後だと1970年頃に最大となっている [44]。アメリカ合衆国やイギリスでは1945年頃には労働比率の半数が第三次産業である [64]。日本で第三次産業が過半を超えたのは1975年頃であり、フィリピンですら2008年には半数が第三次産業である [44]。

経済産業省では「製造基盤白書（ものづくり白書）」という製造業主体の白書を今も発行している。製造業でも研究開発に近い高度化が必要である。「ものづくり」という言葉自体が人間的で認識正評性を持ち正しくない。現在世界的な「もの」の最先端は情報処理や研究開発にあり、製造業は後進的である。情報処理も研究開発も第三次産業である事を理解する必要がある。

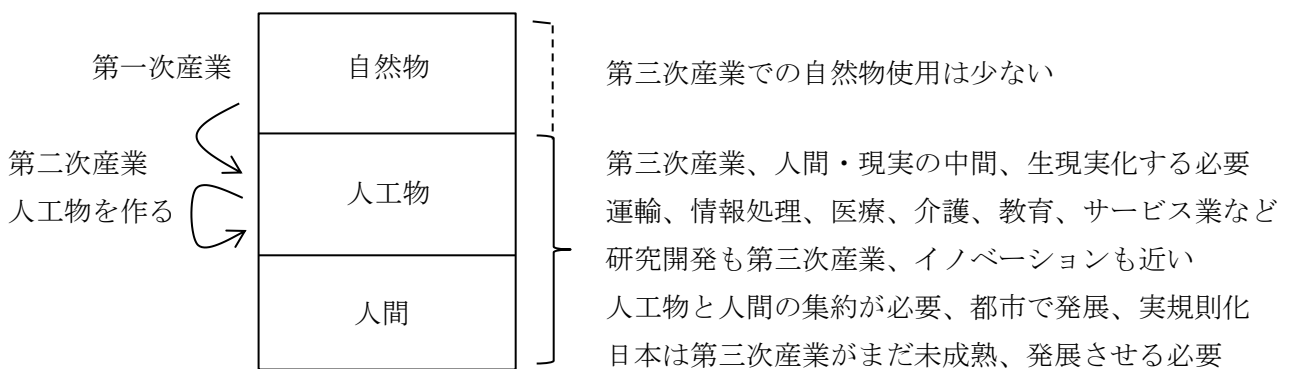
2011年度の日本のGDPに占める研究開発費は3.67%でイギリスやアメリカ合衆国より大きいですが、付加価値や利益に結びついていない [66]。イノベーションにおいても、世界銀行のDoing Business 2018の「起業

のしやすさ」において、世界 190 ヶ国中 103 位である [66]などの問題がある。

2018 年における世界の企業ごとの研究開発費 [67]を見ると、韓国のサムソンが世界一である。サムソンが日本の電機産業を圧倒している理由が分かる。電機産業だけを見ると、中国の Huawei が 5 位なのに対し、日本のパナソニック・ソニー・日立はそれぞれ 36 位・39 位・55 位である。日本の電機産業には研究開発が集約されていないという問題がある。

集約は 1 つの規則だが、多環境適応や実験選択など多様性の規則もある。双方の規則を合わせて考える必要があり、集約・分散のどちらが適切かは現実的な状況による。サムソン対日本の場合は、半導体やスマホで日本が負けているという事実が前提である。

第一次・第二次・第三次産業の順で発展



人工物の生満足価値大、自然物の生満足価値小
第一次・第二次産業は現実的、先進国レベルまで発展可能
量の制約においては自然物が重要、土地やエネルギーなど
量の制約により先進国は発展困難、途上国は発展の余地あり

図 6-29 第一次・第二次・第三次産業

第一次・第二次・第三次産業を明確・曖昧の視点で分析する。現実には明確で人間は曖昧である。自然物と人工物は現実であり、人工物は自然物の内部構造を変えて単純明確化したものである。現実には全体として明確だが、その中で自然物は相対的に曖昧であり、人工物は相対的に明確である。

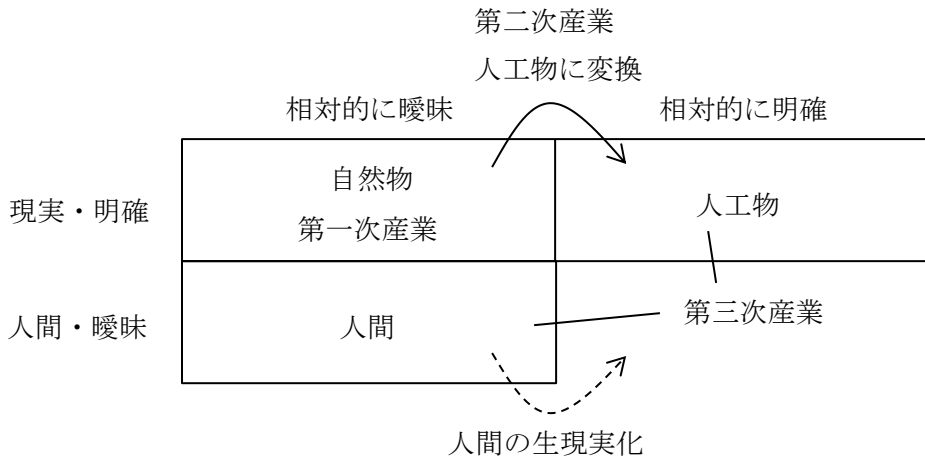
今までの産業は自然物を人工物にする事で明確化・発展してきた。人間は自然物の一種であり、人工物化すると破壊されてしまう。人間は人工物化により明確化する事はできない。一方で人間を生現実化する事は可能であり、これにより明確化・発展が可能になる。人間の生現実化により科学技術のように発展できる。第三次産業は人間・現実の中間にあり、人間的な部分と現実的な部分がある。対象に人間を含むため、行動実規則化が重要になる。

産業や行動実規則化についても、開放現実から見て人間の生現実化を行う必要がある。生息状況を見るべきである。現実に基づく行動実規則化が必要であり、扱う人工物・自然物、行動の物理量や時間などを中心として考えるべきである。現実的な行動実規則化には、機械操作に基づく作業マニュアルや、物理量や時間による契約などが相当する。ここから現実・人間の中間にある法、契約、常識的行動レベルまでで行動実規則化を行

うのが正しい。人間的な因習や良識的行動による行動実規則化は誤りである。

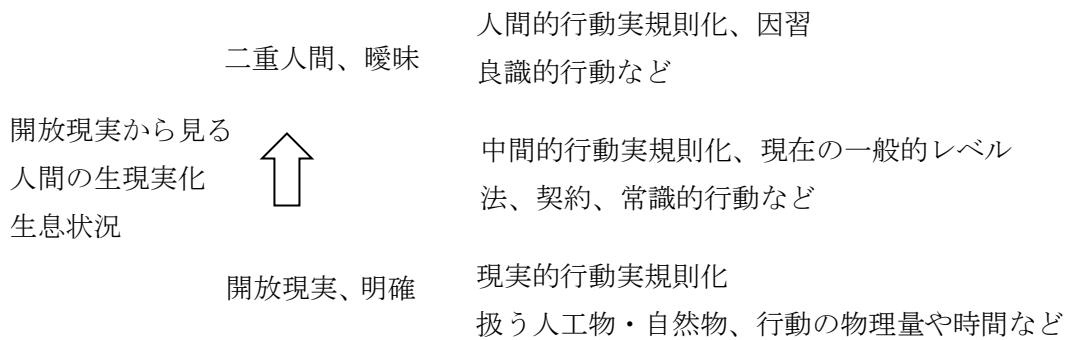
現実的な行動実規則化であれば、民族や文化を超える事ができる。科学技術に基づく機械の操作であれば、どのような文化圏においても同じである。これにより世界レベルで統一された行動実規則化を行う事ができる。

日本は行動実規則化においても未成熟である。契約外の残業のように人間的な実規則化も多く、世界レベルの行動実規則化は得意でない。



今までの産業は自然物を人工物にする事で明確化・発展
 人間は人工物化できない、生現実化する事で明確化・発展
 人間の生現実化により科学技術のように発展できる

図 6-30 産業と明確・曖昧



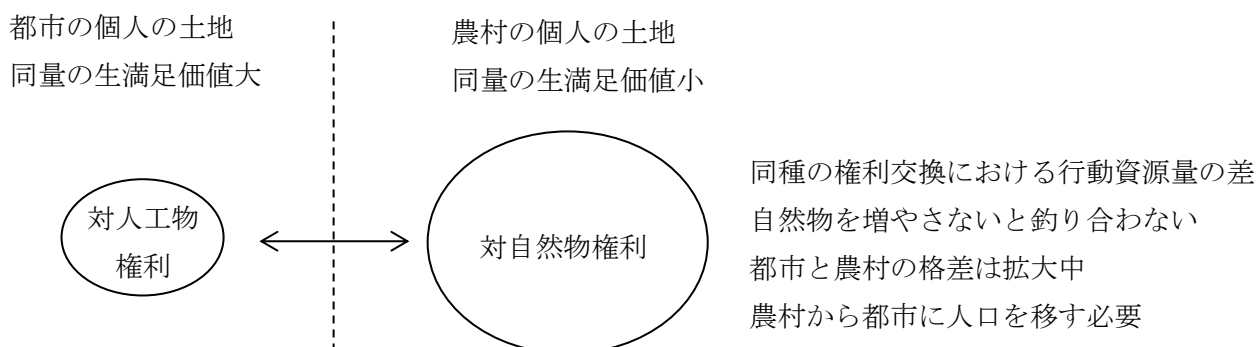
現実に基づく行動実規則化が必要、現実的なら民族や文化を超える
 機械操作に基づく作業マニュアルや、物理量や時間による契約など
 日本は人間的で未成熟、契約外の残業など

図 6-31 産業と行動実規則化

6.6.2. 産業と都市・農村

対人工物権利の生満足価値が上昇しているため、都市と農村の土地における同量の生満足価値の差が開いている。人工物と自然物に対する同種の権利交換における行動資源量の差は拡大している。都市と農村の格差も拡大しており、農村の自然物を増やさないと釣り合わない。農村の土地に対する生満足価値減少のため、農村から都市に人口を移す必要がある。

人口を都市に集約させた方が規則的だが、多様性などの分散の規則もある。他の規則と複合的に考える必要がある。生現実上の規則でなければならない。



都市への集約は規則的だが、他の規則と複合的に考える必要、生現実上の規則

図 6-32 都市と農村の格差

農村は第一次産業の中心地で、都市は第三次産業の中心地である。第二次産業の中心地は工場になる。農村は自然物が主体であり、都市は人工物が主体である。工場は原材料として人工物を使う場合があり、自然物と人工物の両方に関係する。人間は農村では分散し、都市では集中する。土地の生満足価値は農村で小さく、都市で大きくなる。

現代における先進国の産業は、第三次産業が主体である。産業促進のために重要なのは、工場の発展ではなく都市の発展である。これは日本においても同様であり、工場誘致などでなく都市を発展させなければならない。

人間は生物の一種であり、自然環境は生満足を発生させる。都市では自然環境の供給が少なくなり、需給価値が高くなる。農村での自然環境の需給価値は小さいため、都市での自然環境に対する「競争」を逃れるために農村へ行く行動が生じる。都市の発展に伴い農村への自然観光が発生する。基本的に自然物は人工物に対して生満足価値が低くなるため、農村の産業は減っていく。都市からの自然観光は農村での数少ない成長分野である。

観光は第三次産業であり、交通・飲食施設・宿泊施設などの人工物を基礎としている。農村の自然観光も、これらの人工物がないと成立しない。都市から農村への観光客の往来を考えると、農村への自然観光は都市の延長部分と考えられる。自然観光はすべての農村で成立するものではなく、都市から人工物が延長できる場所でのみ成立する。

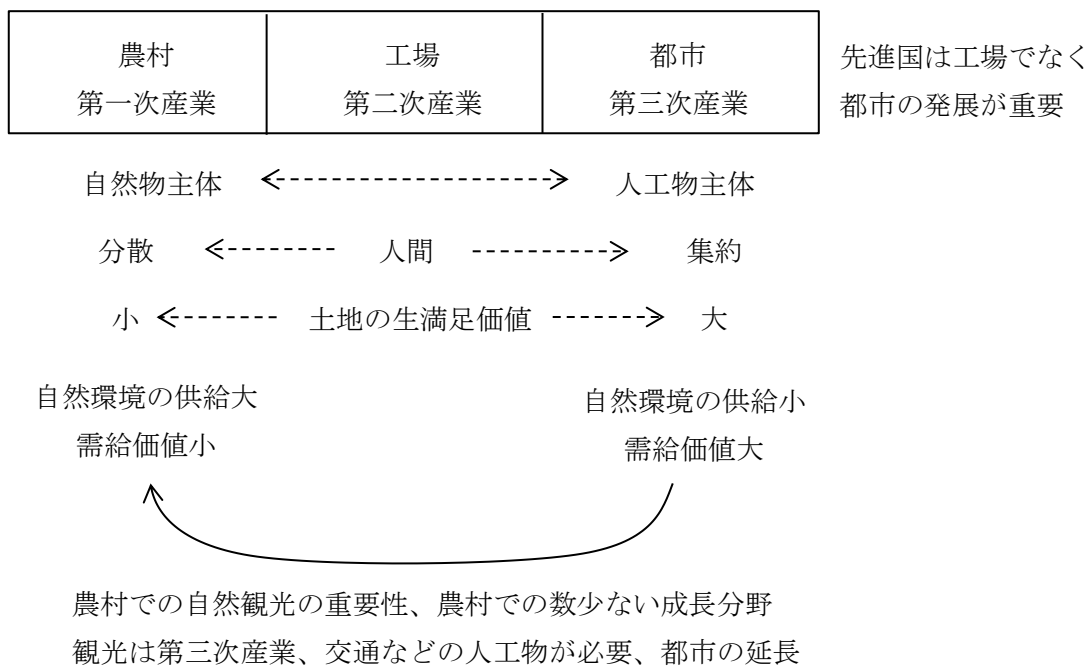


図 6-33 農村と工場と都市

6.6.3. 大都市の集約・分散

巨大都市と大都市を分けて検討する。現在では人口一千万人を超える巨大都市が世界中で増加しており、2011 年において東京の人口が世界一である [45]。日本では東京において極端な人口集約が起こっているが、量の制約や多様性の問題がある。量の制約としては土地不足の問題があり、これ以上の発展は困難である。実験選択の問題としては、自然災害による国家機能停止の危険性がある。COVID-19 が東京・大阪を中心に広まったのも実験選択の問題である。多環境適応の問題としては、地方という環境に対する発展の阻害がある。可能ならば人口を分散すべきである。しかし都市による人工物と人間の集約を無くせば、第三次産業の発展ができない。

この問題を改善するため、ある程度規模の大きい大都市の人口と大都市数を増やす事が考えられる。熊本のような大都市であれば、まだ人口集約は可能である。2015 年の国勢調査 [68]において、熊本は大都市圏も中心市も人口が増加している。同調査における熊本の人口は大都市圏で 149 万人、中心市で 74 万人である。同調査において大都市圏では人口が増加しているが、それより小さい都市圏では減少している。

大都市の人口と数を増やす事で土地の制約を回避できる。現在の大都市を拡大し、一部の都市を大都市に拡大する。大都市へ開発を集中し、人工物と人間と第三次産業を集約する必要がある。公共交通、公共施設、店舗、オフィス、研究開発拠点などを建設すべきである。巨大都市に行く必要を無くす事で、巨大都市への人口移動を防ぐ事ができる。関東・東北・北海道は他の地域より大都市の数が少なく、問題が大きい。

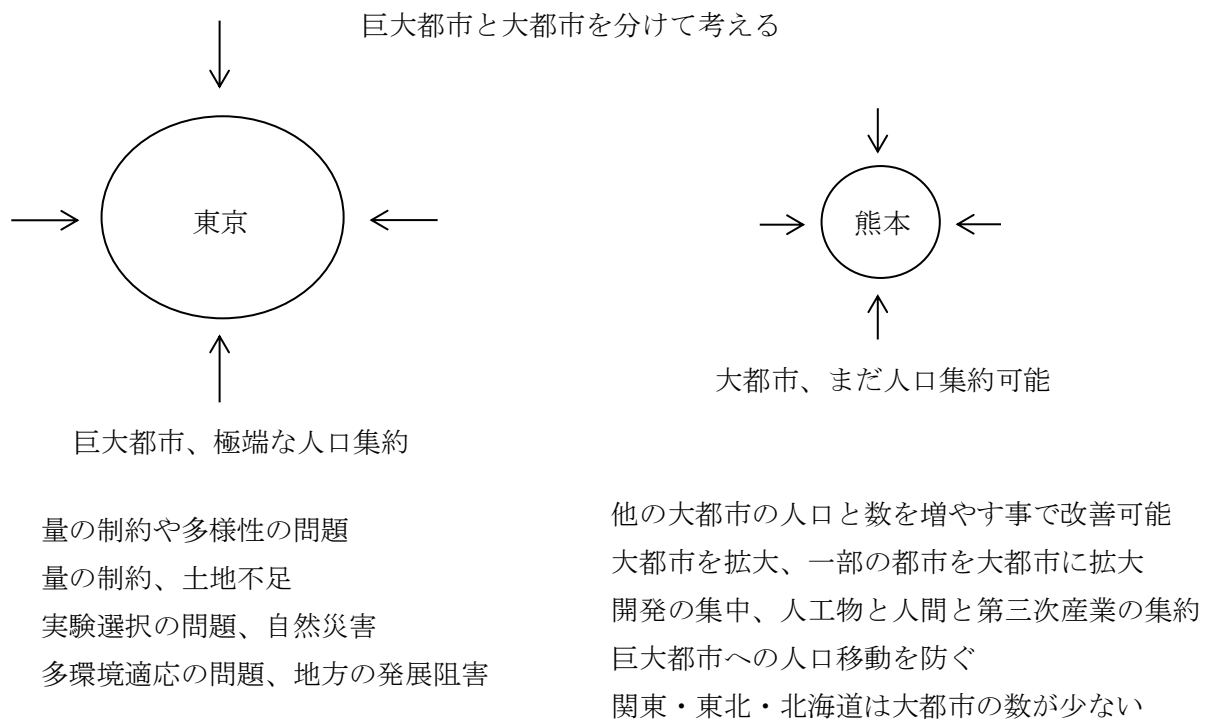
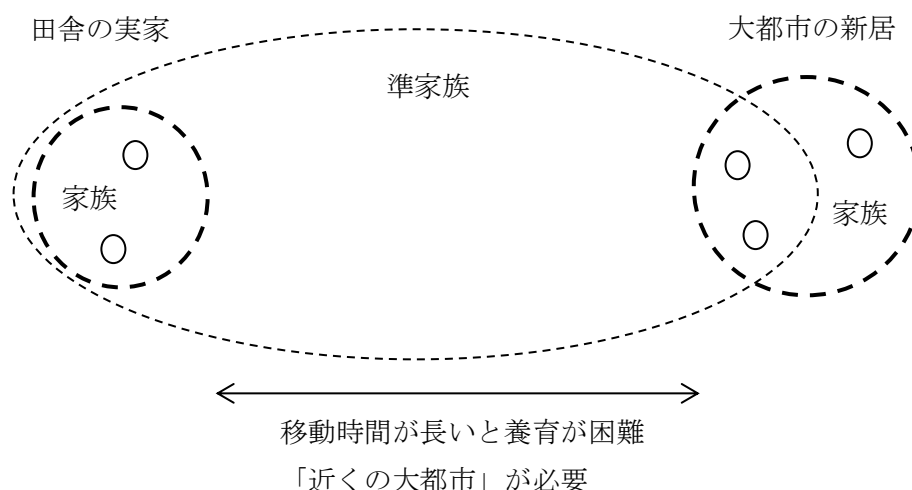


図 6-34 大都市の集約・分散

大都市への移動時間と養育について検討する。田舎の実家を出て大都市の新居で家族を作り、そこで養育する事はよくある。田舎の実家と大都市の新居の間が準家族になる。この移動時間が長いと準家族としての交流が難しくなり、大都市での養育も困難になる。養育を容易にする意味でも、「近くの大都市」が重要になる。

2018年の人口動態統計 [69]を見ると、大都市の数が少ない関東・東北・北海道で合計特殊出生率が低くなっている。これは大都市が遠い事による養育の困難さを示していると思われる。

これは多環境適応の問題の一例である。大都市への移動時間は、養育以外にも教育・仕事・買い物など様々な面で重要であり、発展・衰退の一因となる。近くに大都市がないと、田舎の実家がある地方の発展が阻害される。そのために養育が困難になる、と言える。



大都市の数が少ない関東・東北・北海道で合計特殊出生率が低い
 大都市への移動時間は、養育以外にも教育・仕事・買い物など様々な面で重要

図 6-35 大都市への移動時間と養育

6.6.4. 人口と大都市数

人口と大都市数の関係について、簡単な定量的解析を行う。当解析は定性的であり、定量的解析をほとんど行っていない。この件は定量化しやすいので一例として解析する。

次の表は主要国の人口・大都市数・一人当たり GDP を比較したものである。日本は関東・東北・北海道とその他で分けている。大都市数指標は新たに定義したもので、人口に対してどれだけ大都市があるかを示す。この指標が大きいほど大都市数が多い。

世界人口は国連の 2019 年データ [70]を、大都市数は Demographia の 2019 年データ [71]を、一人当たり GDP は IMF の 2019 年データ [72]を、日本人口は総務省統計局の 2018 年データ [73]を使用した。なお Demographia のデータでは、東京と横浜などの近傍の都市は統合されている。

先進国の大都市数指標を見るとアメリカが最も大きく、一人当たり GDP が先進国の中で突出している事に対応している。途上国の大都市数指標を見ると、先進国に相当する中国・ロシア・ブラジル・トルコと、先進国より低い他の国とで分けられる。この差は途上国における一人当たり GDP の差と対応している。

中国とインドの人口は大差ないのに、大都市数指標と一人当たり GDP は大差がついている。これが中国・インドの国力の差となっている。

日本国内の大都市数指標を見ると、関東・東北・北海道は下位の途上国相当であり、その他の地域はアメリカに相当する。国内において非常に大きな差がある事が分かる。

表 6-1 人口と大都市数

国名	人口 1000 人	大都市数*1 70 万以上	大都市数指標 (大都市数/人口) ×10 億	一人当たり GDP ドル
アメリカ合衆国	329065	59	179	64767
日本	126860	16	126	41021
(関東・東北・北海道)	57445	3	52	
(日本その他)	70609	13	184	
ドイツ	83517	9	108	47786
イギリス	67530	10	148	42310
フランス	65130	8	123	42473
中国*2	1441860	194	135	10153
ロシア	145872	17	117	11191
ブラジル	211050	29	137	9344
トルコ	83430	12	144	8507
インド	1366418	75	55	2199
インドネシア	270626	18	67	4123
ナイジェリア	200964	19	95	2233

*1 複数の都市を統合、Demographia

*2 香港・マカオを含み台湾を除く

ここで使用した Demographia の都市データ [71]は、世界レベルで複数の都市を統合したものである。日本国内の都市を詳細に見ると、統合の仕方に若干不自然な部分も見受けられる。ただし補正するのも困難なのでそのまま使用した。以降に元となる都市名と人口の一覧を記載する。特に富士市については、三島市まで統合していると思われ、最も不自然に見える。人口については、複数都市を統合すると見れば不自然さを感じなかった。

大都市数指標は最大・最小で数倍の差があり、日本を 2 分割した値も最大・最小に近い。上記の理由で多少の誤差があったとしても、基本的な特徴に変化はないと思われる。

表 6-2 Demographia の日本都市データ

都市名 (Urban Area)	人口 (Population Estimate)
Tokyo-Yokohama	38,505,000
Osaka-Kobe-Kyoto	17,150,000
Nagoya	10,240,000
Fukuoka	2,480,000
Sapporo	2,310,000
Kitakyushu	1,760,000
Hiroshima	1,370,000
Sendai	1,355,000
Naha	1,115,000
Hamamatsu	960,000
Niigata	855,000
Fuji	755,000
Otsu	735,000
Kumamoto	715,000
Nagano	705,000
Okayama	700,000

6.6.5. 農村の開発

自然物の生満足価値が相対的に減少しているため、昔のままの農村は存続が難しい。何らかの実規則化を行い、開発する必要がある。農村は自然物に囲まれており、広域自然物は複雑・曖昧である。自然物には自然の規則があり、その中である程度の予測ができる。

広域自然物に対して曖昧な開発を行うのは良い方法でない。全体に対して多数の弱い実規則化を行っても、複雑・曖昧なままで状況が改善しない。しかも自然の規則も失われてしまう。これには焼畑や、日本の杉林や、山間部の林道などが挙げられる。

広域自然物に対しても明確な開発を行うべきである。全体に対して行うとアラル海のような広域の自然破壊になってしまうので、一部に対して強い実規則化を行うのが良い。一部は単純・明確になり、それ以外の部分において自然の規則も保たれる。実規則化しやすい所を選んで、集約的に開発すべきである。肥料、農薬、機械などを投入した高度な農場の開発や、機械化などで管理しやすい森林の開発などが考えられる。曖昧な開発を行ってしまった場所も、明確な開発に向けて再開発すべきである。

強い実規則化した部分と、自然の規則の部分は、閉鎖分断して無関係ではない。これらの開放的な相互影響も考慮する必要がある。陸上であれば両者をお互いに程度分けられるが、空中や水中だと分けるのが難しくなる。

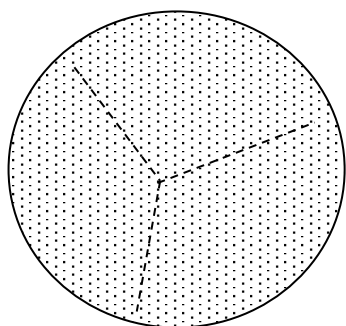
農村は基本的に人口が減少していくため、少人数で効率よく作業を行う事が重要になる。単位人数当たりの耕作地などを広げるべきである。昔ながらの家族経営を止めて企業経営にする事も有効である。人口減少に対応するため、都市から人を運ぶ事も考えられる。企業経営にして必要な時期だけ都市から人を運べば、恒常的な作業者を減らす事ができる。

都市や農村の開発において、人間的な認識に囚われるのは誤りである。因習や環境思想などの人間的な認識

では正しい答が得られない。現在の人工物や第三次産業の重要性は過去と違うので、過去と同じ行動を取るの
 は意味がない。人間の特性は自然物に近いが、生満足価値の高いのは人工物である。人間の生現実化により、
 現在あるべき開発を正しく理解する必要がある。

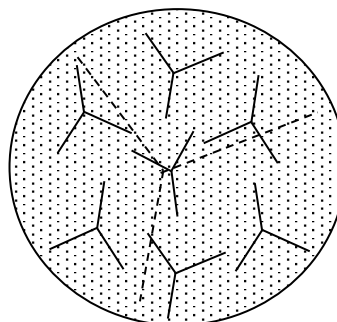
都市と農村の構造については、現実的権利と人口により解析できる。貨幣を使うよりも食料や資源などの現
 実的権利の方が解析しやすい。現在の人類生態学や人口学においても同様の手法が用いられている [44] [45]。

自然物の生満足価値が減少
 昔のままの農村は困難
 何らかの実規則化が必要、開発
 人口減少、少人数で効率よく作業



広域自然物、複雑・曖昧
 自然の規則

曖昧な開発

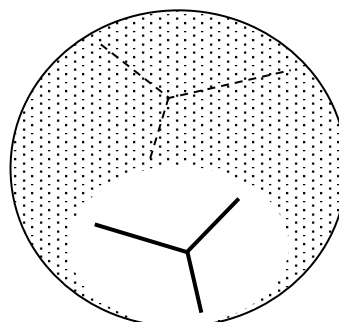


全体を多数の弱い実規則化
 複雑・曖昧なまま、自然の規則もない

明確な開発



再開発



一部を強い実規則化
 一部は単純・明確、自然の規則も保つ
 全体で行うとアラル海のような自然破壊
 実規則化しやすい所を選んで集約

図 6-36 農村の開発

6.7. 総合的な応用

6.7.1. 文化・本・マスメディア

文化・本・マスメディアについて分析する。これらの範囲や種別は広いので、ある程度まとめて分析する。これらも開放現実から見て人間を生現実化する事で、二重人間の曖昧さを回避できる。生息状況を見るべきである。

科学ニュースであれば内容は現実的で正しい。一般のニュースには、報道対象や解説者の意見などの人間的な要素があるため、正しさは中間的である。スポーツも正しさは中間的である。

実用や実用的趣味について、実用系としてまとめる。実用系は科学技術的な場合もあれば人間的な場合もあり、正誤の幅は広く分散している。自動車なら科学技術的だが、ファッションなら人間的である。人間・現実や正誤については、製品などを個々に見る必要がある。ゲームは正確さを要求するので実用系相当になる。

文芸、芸術、音楽、芸能、漫画などについて、文芸系としてまとめる。実用系と異なり文芸系は全体的に人間的・閉鎖的であり、平均より誤りが大きい。人間的こだわりや、スポットライト的な閉鎖満足も多い。SFでも「フィクション」であり、必ずしも科学技術に準じていない。文芸系は精神疾患・問題行動・薬物中毒・犯罪などにも近く、生息状況から見て問題がある。文芸系でも作者や作品によって正誤の幅があるので、個々に見る必要がある。

文芸系の内容は基本的に現実世界から離れて閉鎖的である。文芸系が現実と遠い世界である事の理解が重要である。文芸系は自己から離れた遠方にある事を理解すべきである。作者は自己から遠く、自己の生活に対して文芸系は直接影響しない。人間的な内容だけを見ると近くに見えるが、近現実開放を理解すれば正しく遠方にある事が分かる。相互生満足は満足感でなく生息状況である。文芸系は相互の生息状況を改善しにくい。

文芸系の表面に見えるのは仮面状態であり、作成者本来の認識状態とは異なる。これらの差を理解する必要がある。作成者本来の認識状態が正しい訳ではなく、人間的ならどちらも誤りである。

文芸系以外の文化や実用系についても、人間的であれば文芸系と同じように問題である。実用系や文芸系も現実を見る事で正しく理解できる。これらについても人間の生現実化が必要である。作品の内容ではなく、作品の対象や作者・読者などの現実と生息状況を見る必要がある。作品の内容が「感動的」だったとしても、作品の対象が犯罪行為だったり作者が犯罪者だったりすれば、それは犯罪を助長する作品である。

文芸系は全体として人間的だが、人間的であれば誤りで現実的であれば正しい。この評価基準は他の事象と変わらない。人間的な文芸系でも、人間の生現実化が必要である。文芸系は現実との関係が小さいため、文芸系における成功は現実性との関係が小さい。広まる・売れる・評価が高いなどで見るのではなく、現実性で見る必要がある。同じ娯楽でもスポーツであれば現実との関係がある。

ニュースも人間的に伝えると誤りになる。芸能人がニュースを伝えるとか、ニュースを物語にってしまうと現実とは正しく伝わらない。

文芸系の人間・現実とは、その内容によって区別できる。それ以外に文芸系を成立させる状況からも人間・現実が区別できる。運動・楽器音などが機械的な意味で正確かどうかは現実的であり、感情的な意味になると人間的になる。器楽の方が声楽よりも現実的である。

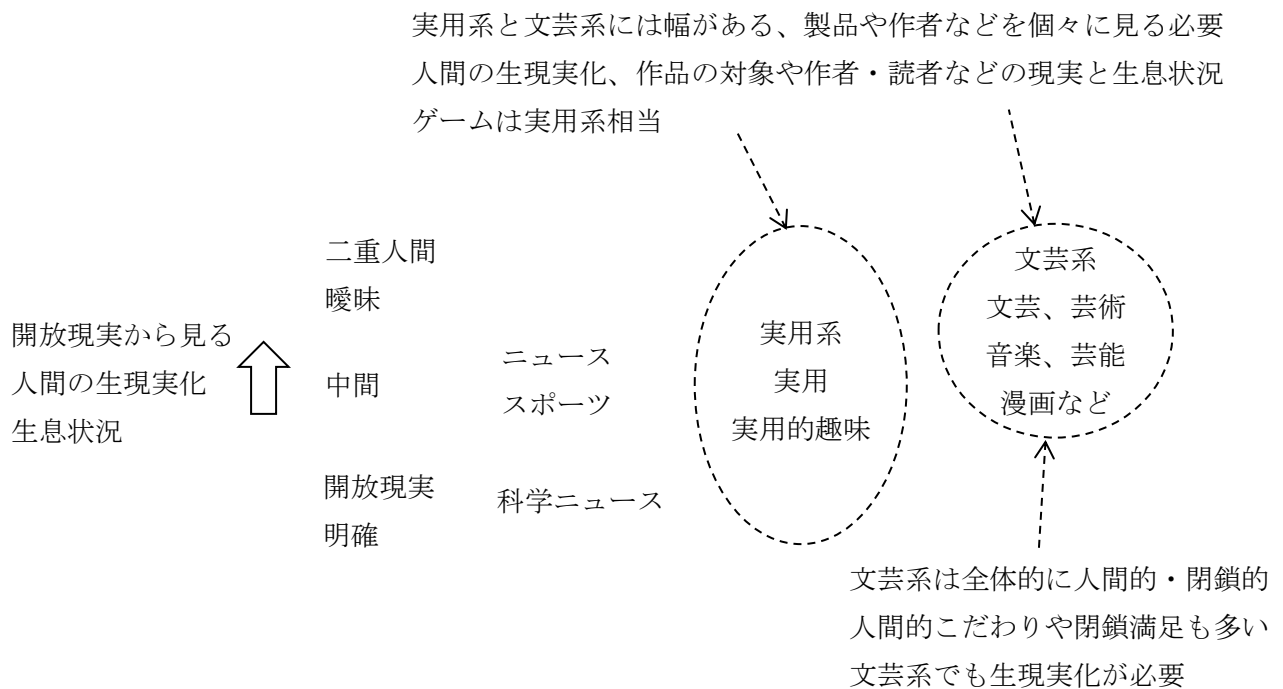
暴力は人間の生感情の一部だが、破壊による問題が起こらないようにしなければならない。スポーツはその改善策として有効である。正誤は中間的なので大きな問題は起こらない。スポーツについても審判への科学技術導入などで明確化を進めるべきである。

文芸系も暴力の改善策として使用できるが、スポーツとくらべて人間的なのであまり良くない。作者や作品により幅があり、「人間的な暴力」だと問題が大きくなる。文芸系の暴力でも、できるだけ現実的にしなければならない。

マスメディアは情報を集約しており、正誤も集約している。受け手にとっては自由ではない。必要なのは正しい情報であり、文化・本・マスメディアについても正集約をしなければならない。マスメディアによる情報集約は、同型の認識知性伝達である。認識が誤りの場合、認識知性伝達と多個人多閉鎖のせめぎ合いになる。例えば非現実的な文芸系がマスメディアで伝達された場合、受け手による好き嫌いの差が大きくなる。

インターネットや大型書店・図書館は情報が多く、正誤が分散している。情報が多いため正しい情報を探せる利点がある。ただし全体の正誤は他のマスメディアなどと変わらない。「表現の自由」という言葉は人間的で曖昧である。自由で情報が多くとも、正しさが向上するわけではない。

認識知性伝達において、認識の区分である文芸系のジャンルより、実区分である送り手・受け手の方が重要である。送り手と受け手の距離が遠い事を理解する必要がある。開放現実から見ないと関係距離も分からない。「身近に感じる話」は人間的で誤りである。



暴力の問題改善策としてスポーツは有効、文芸系はあまり良くない
 マスメディアは情報を集約、「表現の自由」は曖昧、正集約が必要
 インターネットや大型書店・図書館は正誤が分散、全体の正誤は他と同じ

図 6-37 文化・本・マスメディアと人間・現実

6.7.2. 実用系・文芸系の生現実化

実用系・文芸系を生現実化する必要がある。正しく現実的で開放した認識は、生現実に接近し全体として統合される。誤った人間的で閉鎖した認識は、生現実から離反し全体として分裂する。現実から人間へ開放的に

理解するのが正しい。人間・現実の中間を生現実化する事で、人間まで開放的に生現実化できる。これにより明確な人間の理解が可能になる。

最終誤状態の認識は、正しく満足しているように見える。問題なのは誤って見える部分でなく、正しく見える部分である。誤った認識正評性は生不満に繋がるため、認識満足は認識不満よりも問題が大きい。曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさが必要である。人間的認識による生不満の理解が重要である。満足感でなく自己の生息状況を見るべきである。現実的な真の満足でなければならない。誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪である。誤りを修正して生満足化すべきである。すべての満足から一步引き生不満を見る必要がある。人間的認識による隠された生不満を見る事が重要である。

文芸系の様々な部分において、個々に感情的・表現的でバラバラなのは、すべて閉鎖で誤りである。閉鎖によりそれぞれの距離が遠くなる。文芸系は普通の人間への影響が強く、バラバラな文芸系はバラバラな普通と直結している。様々な普通の満足は人間的・バラバラ・不整合で、すべて誤りである。人間的で曖昧な普通の満足でなく、現実的で明確な生満足が正しい。普通の満足でなく自己の生息状況を見るべきである。バラバラ・不整合な文芸系すべてを、開放現実に向けてまとめて修正すべきである。

文芸系は全体的に閉鎖的であり、内容においても誤った人間的で閉鎖した認識がよく見られる。特にスポットライト的な閉鎖満足は幅広く見られる。一点で高い満足でなく全体での満足が正しい。他の閉鎖例を幾つか挙げると、局所広域閉鎖、多個人多閉鎖、特定の感情への閉鎖、閉鎖枠外への突き抜け、人間的な停止時間系、人間と自然物の閉鎖などがある。また文芸系の身内に対する閉鎖もある。これらはすべて誤りであり、人間の生現実化により修正する必要がある。

文芸系においては、表面がきらびやかでも裏に回ると汚い事をしている、という状況もよくある。これも閉鎖の一種であり、開放して修正すべきである。認識正・誤評性と感情種類の複合的な問題と捉える事ができる。

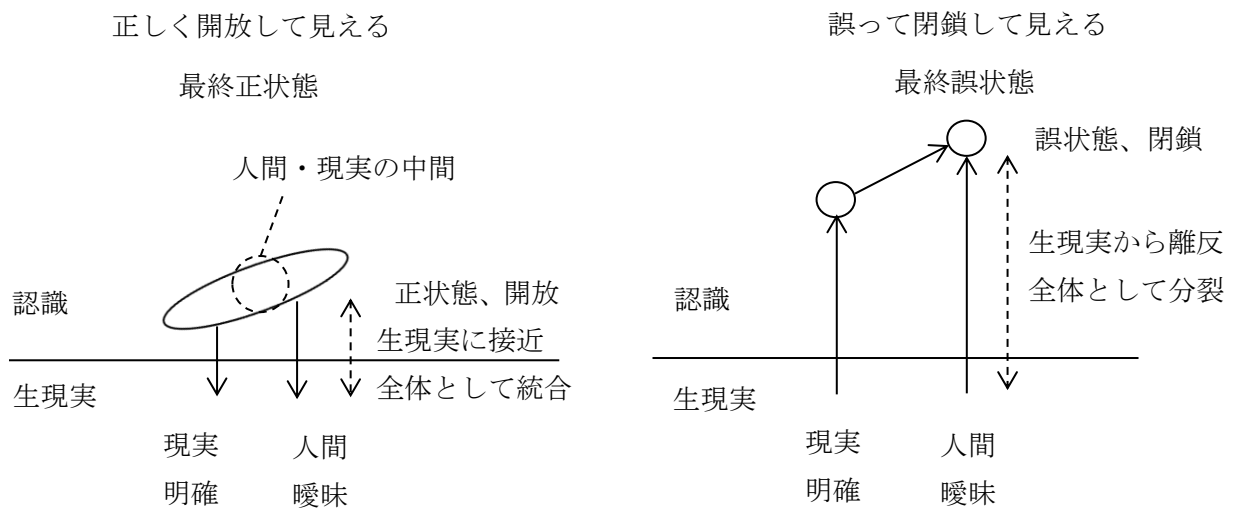
人間・感情・満足・不満にこだわるのではなく、現実・整合・明確を見て認識を正しくすべきである。人間的な不整合を無くす事で生満足を得られる。誤りの構造を分析するのはあまり意味がなく、正しい現実的な理解を得る必要がある。文芸系は現実的な正しさをあまり考えておらず、これも問題である。

文芸系は感情的表現や人間的こだわりも多く、問題が大きい。感情が大きくても小さくても人間的・感情的なら誤りであり、現実的・生物的でこだわらないようにすべきである。人間的な感動・凄さ・冷静なども誤りである。人間的魅力も誤りであり、現実的・生物的に見る必要がある。文芸系における不自然な満足感の上乗せが問題であり、生息状況を見るべきである。

実用系・文芸系に対して無認識感情も重要であり、一步引いて感情・満足を見る必要がある。「囚われない・こだわらない」などにより生感情が理解できるようになる。現実的状况と無認識感情の理解は連動する。例えば本を読んでいて、ふと我に返った時、現実的状况と同時に無認識感情も見える。文芸系の人間的な良さから一步引いて、現実的状况を見るべきである。近現実から開放的に見れば、文芸系は遠い「作り物」でしかない。文芸系の満足から一步引けば、実体がないのが分かる。

すべての感情種類を開放的に理解する必要がある。満足に近い感情種類だけでなく、不満に近い感情種類も理解すべきである。「満足だけ」「不満だけ」の文芸系も閉鎖による誤りである。芸能人などが満足にあふれているように見えても、人間的・閉鎖的なら誤りである。地味感情は表現しにくく、文芸系に表れにくい。文芸系の多くは満足・不満の幅が大きく「派手」になってしまう。諦観・まったり・開き直り・皮肉などの地味感情まで開放的に理解し、文芸系に入れるべきである。一步引いて無認識感情を見れば、地味感情まで見える。

人間的な文芸系の改善策の1つとして、文芸系から別の文化に移行する事が考えられる。これは文芸系の受け手でも送り手でも同様である。移行先としてはニュース・スポーツ・実用系・ゲームなどが挙げられる。



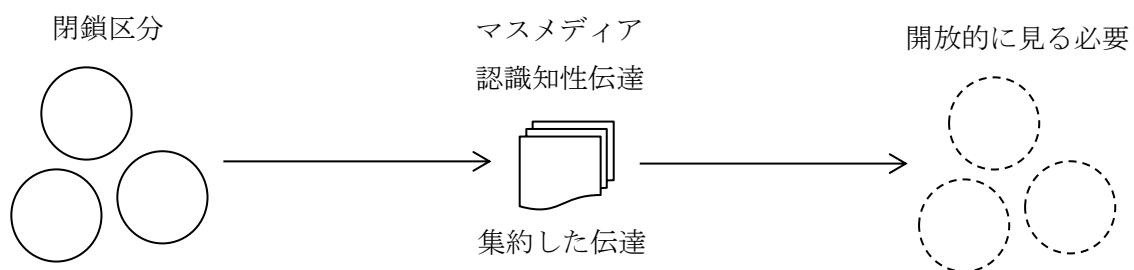
実用系・文芸系も現実から人間へ開放、人間的認識による隠された生不満を見る
 文芸系はスポットライト的な閉鎖満足・感情的表現・人間的こだわりが多く問題大
 無認識感情も重要、一步引いて感情・満足を見る、地味感情まで開放理解

図 6-38 実用系・文芸系の生現実化

マスメディアは、必ずしも正しくない情報を集約して認識知性伝達する。その中には閉鎖区分も含まれる。これらを受け取る時は、開放的に見る必要がある。

マスメディアから閉鎖区分を受け取っても、閉鎖区分ごとの評価でなく現実・生物で評価すべきである。例えば何らかの争いが起こっている時に、それを閉鎖的に煽るような伝達を行う場合がある。どちらの閉鎖区分が正しいかを見ても、正しい判断はできない。現実・生物で開放的に評価する必要がある。

特定の閉鎖区分を社会的な大問題として伝達する場合もある。伝達量が大量だとしても、多くの人にとって重要であるとは限らない。伝達量でなく現実的距離で重要性を判断すべきである。その区分との距離を開放現実経路で見れば、本当の重要性が分かる。現実的に無関係な情報を注視しても意味はない。



閉鎖区分ごとの評価でなく現実・生物で評価
 伝達量でなく現実的距離で重要性判断

図 6-39 閉鎖区分とマスメディア

6.7.3. 学問

学問の各分野を人間・現実により分析する。各分野の中でも人間・現実の幅があり、示しているのは中間的な位置である。学問が感情的であれば人間的になり、感覚的・行動的なら人間・現実の中間になる。

通常の医学は現実的であるが、精神疾患に関する医学は人間的になる。精神疾患の分類基準である DSM [32] は中間的な正しさを保っているが、精神分析 [13] は研究された時代も古く人間的で正しくない。すべての疾患に対する医学的問題は、現実的症状と、現実的症状に対する認識である。精神疾患に関する医学も現実的にして、人間的な精神分析は捨てるべきである。

人文科学は中間から人間的である。宗教学は教義の解釈などが中心で人間的である。哲学も宗教学と似た特徴を持ち、学説の解釈などが中心になる。文学は作者や作品による幅が大きいため、やや人間的な位置に図示した。心理学や歴史学は中間的である。

精神分析に近いアドラーの心理学 [30] などは人間的であるが、最近の心理学は中間的な位置まで改善している。認知心理学 [31] [16] や行動心理学 [12] は、精神分析よりは厳密である。一般の心理学でも統計が多用されるなどしている。しかし統計的な数値を恣意的に扱い再現性がないという批判 [74] もある。一般向けの自己啓発のような書籍は人間的である。

社会科学も中間から人間的である。政治学は自由民主主義や共産主義など基本的な所から人間的である。そのため「アラブの春」のような問題 [46] が起こる。経済学・法学・経営学などは中間的である。行政は政治思想でなく法体系により成立している。

自然科学は全体としては現実的だが、環境思想のように人間的な部分もある。自然科学でも対象が複雑なら曖昧になり、できるだけ明確化する必要がある。

数学や情報処理は対象によって正誤が異なり、人間的な対象であれば人間的で曖昧になる。数学を曖昧な対象に扱えば明確に「曖昧」という結論が出てくるが、それを人間的に解釈すれば正しい答えは出ない。

学問全体において問題なのは、認識を重視する事である。これは思想・主義・学説・学派などが相当する。認識でなく現実を重視すべきである。人間的な分野と認識の重視は連動している。二重人間のため認識人間と生人間を区別できない事が、認識の重視に直結している。人間的な分野では閉鎖的論争が収束しなくなる。これは精神分析・宗教学・哲学・政治学などで共通の問題である。多個人多閉鎖により個々がバラバラの主張を行う事が普通になっている。開放現実に向かう事により、無意味な閉鎖的論争を停止できる。

開放現実から生人間・生息状況を見る事で、曖昧な二重人間の問題を回避できる。通常の医学と自然科学は、開放現実で連携できる。当解析と医学と自然科学で、人間を生現実化すべきである。学問全体の様々なモデルも、開放現実から見る事で連携できる。当解析を使えば、曖昧な人間的概念は不要になる。自然科学・医学の近くで人間を解析し、学問全体の枠組みから変えるべきである。専門分野の閉鎖枠を外す必要がある。生物と同様に現実的な行動分析が必要である。医学・生態学的な、食事、運動、養育、住居などを分析すべきである。

通常の医学における現実的な見方を拡張すれば、DSM や心理学に繋げる事ができる。自然科学の生物・物理的な見方は、人間の様々な側面に適用できる。自然科学の生態学 [42] [43] [44] は、多様性・権利・競争・人口などを通して社会科学に適用できる。これらの方法により学問全体の生現実化と統合・整合を進めるべきである。

各分野においても正誤の幅がある事に注意する必要がある。哲学においても、文化を研究するカルチュラル・スタディーズ [75] は中間的である。誤った認識を批判するだけでは意味がなく、正しい方向に向かわなければならない。重要なのは人間を生現実化する事である。

1つの本・論文・レポートなどでも、人間的な部分と現実的な部分は混在している。精度の高い現実的な部分を重視し、精度の低い人間的な部分は軽視すべきである。

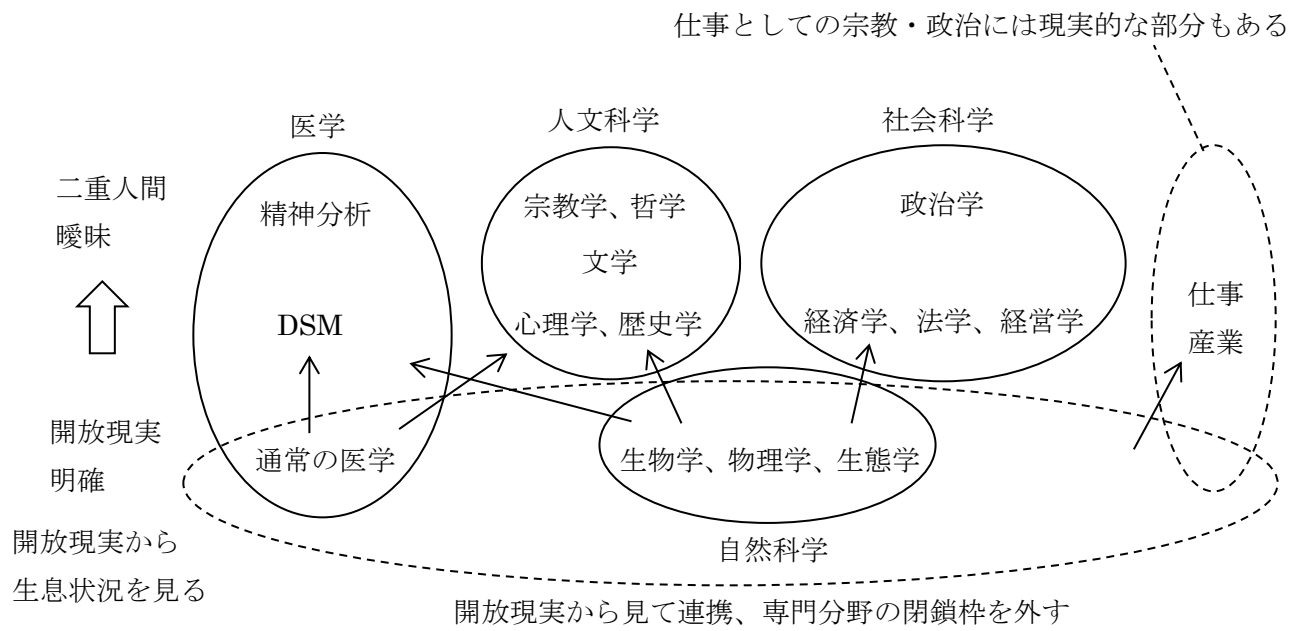
過去の学問に従う必要はなく、正しい方向に修正しなければならない。自由・民主は古代ギリシャからある古い概念であり [40]、宗教や哲学の歴史も古い。精神分析もかなり古い分野である。古い人間的な学問を守るのは誤りであり、現実的に修正する必要がある。

学問は最終的に「仕事」において利用されるべきものである。仕事は学問とは別に、人間から現実の間で分布している。政治に関する仕事でも人工物を扱う場合があり、科学技術に関する仕事でも人間を扱う場合がある。仕事の多くは産業に属しており、産業も人間・現実の間で分布している。開放現実により学問から仕事・産業までを繋げるべきである。

人文・社会科学は中間から人間的だが、仕事・産業は平均すれば中間的である。人文・社会科学よりも仕事・産業の方が現実的である。人文・社会科学を仕事・産業に繋げるためにも生現実化が必要である。

宗教学・政治学は人間的だが、仕事としての宗教・政治には現実的な部分もある。宗教学・政治学と「仕事としての宗教・政治」は、必ずしも繋がらない。

経営学のように仕事に直結する学問分野は、日本において立ち遅れている。MBA取得を欧米の大学院で行っていたのがその典型である。学問は最終的に仕事において利用されなければ意味がない。経営学なども日本の大学で活性化すべきである。

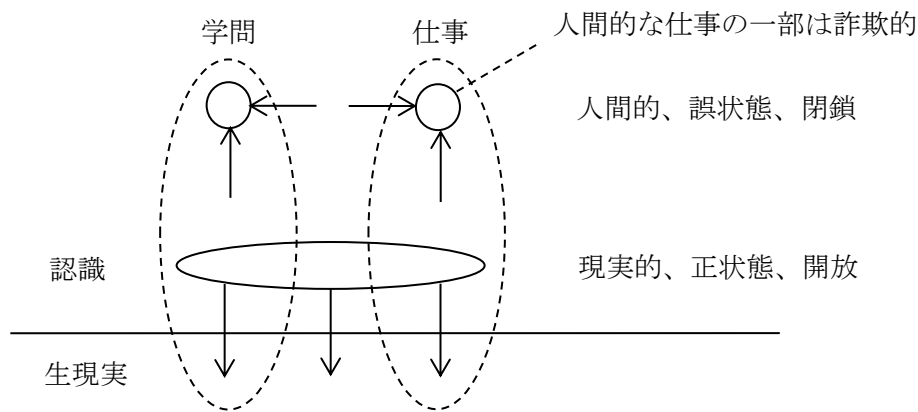


認識の重視が問題、思想・主義・学説・学派など、現実を重視すべき
 当解析と医学と自然科学で、人間を生現実化、曖昧な人間的な概念は不用
 自然科学・医学の近くで人間を解析、学問全体の枠組みから変える
 生物と同様に現実的な行動分析、医学・生態学的、食事、運動、養育、住居など
 開放現実に基づいて学問を統合・整合、仕事・産業まで繋げる

図 6-40 学問の各分野と人間・現実

自然科学のように現実的な学問なら、学問と仕事は開放的に繋がる。仕事における自然科学は学問と同じものである。宗教学・政治学のように人間的な学問だと、学問と仕事は閉鎖して繋がらない。人間的な仕事は、現実的な利益を相手に与えない「詐欺的」なものになる場合もある。「清い」宗教学・政治学と、「汚い」宗教・政治の詐欺的な仕事は、まったく別のものになる。学問側の正評性を中心に見ると、認識正・誤評性と感情種類の複合的な問題と捉える事ができる。これは文芸系における「きらびやかな表面と汚い裏」という閉鎖構造と同様である。

宗教・政治でも現実的な仕事であれば、学問と繋がる。ただし宗教学・政治学は人間的なので、繋がるのは他の学問である。宗教法人の経営であれば経営学と繋がるし、科学技術に対する政治であれば自然科学と繋がる。



現実的な学問と仕事は繋がる、自然科学など
 人間的な学問と仕事は繋がらない、宗教学・政治学など
 「清い」宗教学・政治学と、「汚い」宗教・政治の詐欺的な仕事
 宗教・政治の現実的な仕事は他の学問と繋がる

図 6-41 学問・仕事と人間・現実

6.7.4. 学問と産業の区分

学問全体で見ると、自然科学や医学は現実的であり、人文・社会科学は人間的である。現代文明を支えているのは自然科学や医学の発展であり、現実に関する学問の発展である。自然科学や医学が発展したのは、現実が明確に理解できるからである。二重人間のため人間的な学問は明確化できない。人間を対象とする人文・社会科学でも、人間を生現実化する事が重要である。人文・社会科学はまだ十分に現実的ではない。これから人間に関する事象を発展させるためには、人間を生現実化しなければならない。

現実には自然物と人工物に分けられる。第一次産業は自然物に関する産業で、第二次産業は自然物を人工物にする産業である。第三次産業は人工物の発展の上であり、人工物と人間を扱う産業である。現在の先進国における産業の中心は第三次産業である。自然科学や医学も第三次産業化しなければならない。自然物を単純に人工物化するのではなく、高度な人工物の上で人間も含めた産業を考える必要がある。

自然科学や医学の進歩を「人間的」な理由で妨げるのは誤りである。自然科学の進歩は人間を機械的にする訳ではなく、人間を正しく「生物的」にする。人文・社会科学の生現実化についても同様であり、正しく「知

的生物としての人間」へ向かわなければならない。

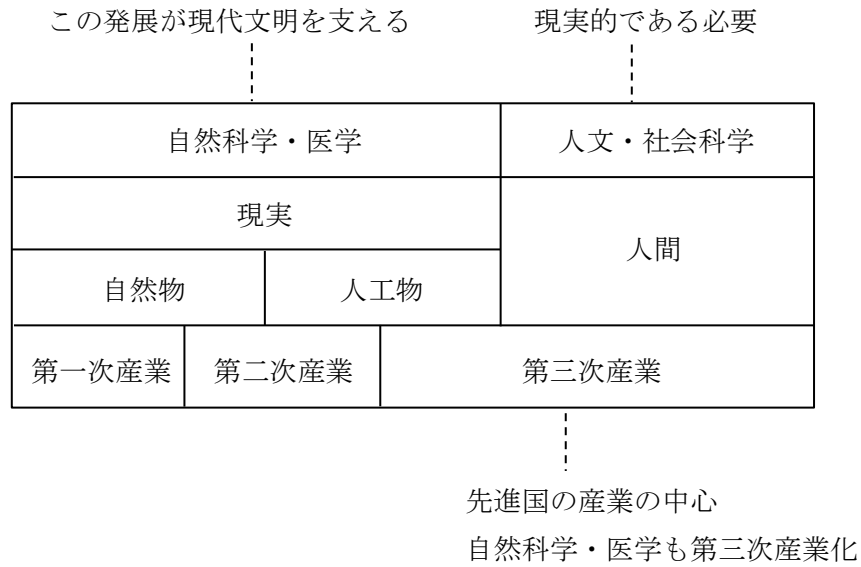


図 6-42 学問と産業の区分

6.7.5. 教育

教育の各分野を人間・現実により分析する。各分野の中でも人間・現実の幅があり、示しているのは中間的な位置である。教育も生現実化すべきである。教育の最大の目的は、仕事ができる社会人を育てる事である。そのため人間・現実を縦軸、仕事との距離を横軸にして分析する。教育の主体は仕事に近い方が望ましい。教育が感情的であれば人間的になり、感覚的・行動的なら人間・現実の中間になる。仕事の多くは産業に属しており、仕事と産業は近い関係にある。

音楽・文学・美術などの文芸系の教育は、仕事とはあまり関係がない。それぞれに対する専門的な仕事で使われるだけで、他の仕事では使われない。美術であれば Web デザインや POP 広告など比較的広範囲の仕事で使われる。文芸系は人間から中間までの範囲に分散している。

倫理は、哲学を中心に宗教や政治思想までを含んでおり [76]、人間的で誤っている。人文・社会科学における人間的・思想的な部分をまとめたような内容である。このような教育が高等学校にあるのは問題が大きい。小・中学校では倫理でなく道徳が教育される。道徳にはいじめ、ネット書き込み、労働、生物多様性、国際理解などの内容が含まれる [77]。道徳には良識的な部分もあるが、社会行動の常識的な部分も多く、倫理ほどの問題はない。良識は人間的だが、常識は中間的である。

歴史は人間・現実から見れば中間的だが、仕事における利用価値はあまりない。時間において重要なのは現在から近い未来までの予測であり、過去はあまり重要でない。遠方の過去でなく近辺の現在を中心に考えなければならない。過去の重要な部分は、現在との開放的繋がりと、その延長による未来の予測だけである。

特に関係国の「不幸な歴史認識」については問題が大きい。長い関係を持つ国であれば不幸な歴史があるのは当然であり、それにこだわっていても意味はない。第二次世界大戦ですら 70 年以上も前の話である。過去においてどんなに不幸な事が起こったとしても、現在が幸福なら問題はない。過去の不幸を体験した人間が生存していても、重要なのは現在から近い未来において生満足を得る事である。

仕事で最も使用する学問は、経営学や工学である。日本の小・中・高校の教育においては、経営学や工学が入っていない。これらは専門学校において学習したり、大学の専門分野において学習したりする。最も仕事に近い学問が全員に教育されていない、という状況は良くない。多くの場合これらは社会人になってから勉強する必要があり、教育の在り方としておかしい。専門学校は教育レベルの低い生徒が行く所である。教育レベルの低い生徒の方が仕事に近い教育を受け、大学に行く生徒の方が仕事から離れる、という状況は問題がある。大学における経営学の教育も、欧米に比べれば不十分である。経営学や工学は、教育の主体の中に入れるべきである。

他の人文・社会科学は、文学や倫理を除いているので中間的な正しさになる。仕事との近さで考えると、法や契約も仕事で多用される。これらも日本の教育において十分とは言えない。法や契約に関する教育も全員に行うべきである。

工学以外の自然科学は、主に工学を通して仕事に利用される。工学が抜けてしまうと仕事と教育の繋がりが見えにくくなる。数学は工学・経営学・経済学などを通して仕事と繋がるが、現在の日本の教育ではこれらの繋がりが見えにくい。自然科学や数学を正しく理解する上でも、経営学や工学の教育が重要である。

仕事との近さで考えると、体育も重要である。体力はすべての仕事で必要である。またスポーツは暴力による破壊を抑止し、法や契約などの行動実規則化を理解する上でも重要である。

開放現実から生人間・生息状況を見る事で、全体的な連携が可能になる。現在の日本の教育の主体は、現実性や仕事への近さが不十分である。より現実的で仕事に近い教育を主体にするべきである。これらを開放現実で連携すれば、教育を仕事につなげる事が可能になる。自然科学のように現実的な教育は、開放的に仕事と繋がる。倫理のように人間的な教育は、閉鎖して仕事と繋がらない。これは学問・仕事における構造と同じである。

仕事においては、数字による理解と最新状況の把握が特に重要である。経営学や工学はこれらに繋がるが、現在の日本の教育では繋がりにくい。

昔からの教育であってもそれに従う必要はない。重要なのは現実的な認識により生満足を得る事である。現在の教育もより現実的にすべきである。

教育の延長にある能力向上・改善なども現実的である必要がある。人間的な能力向上・改善では、良くなったように見えても実際の効果はない。

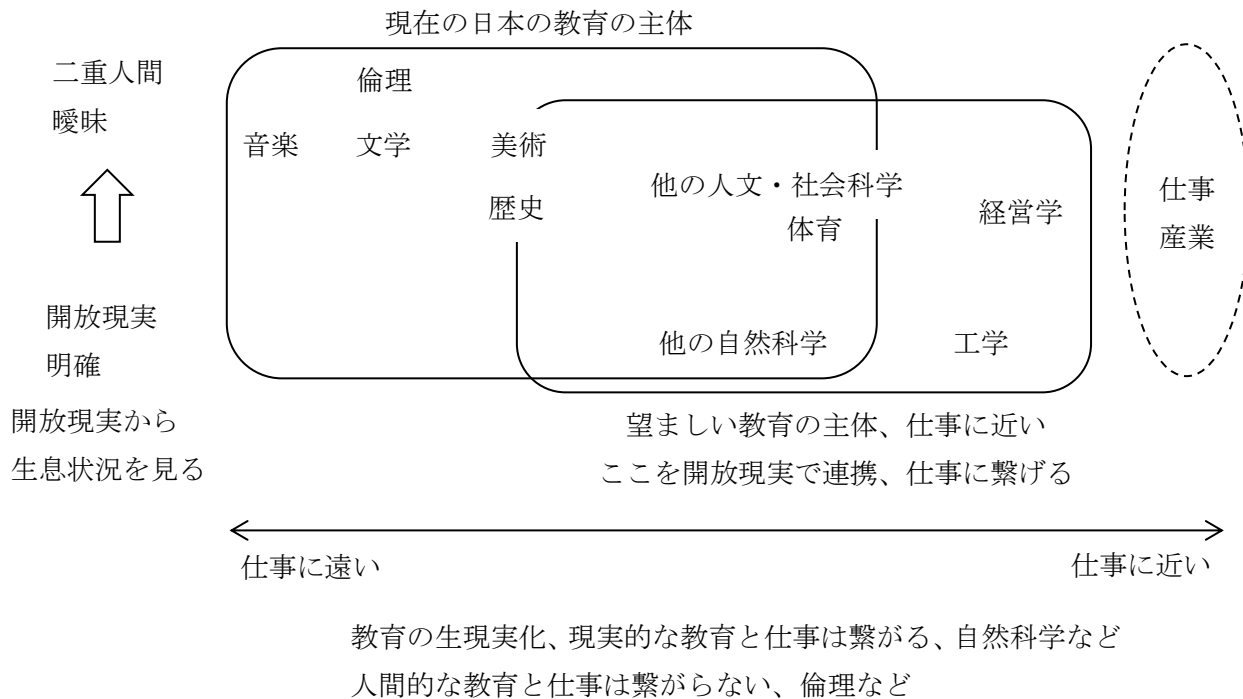
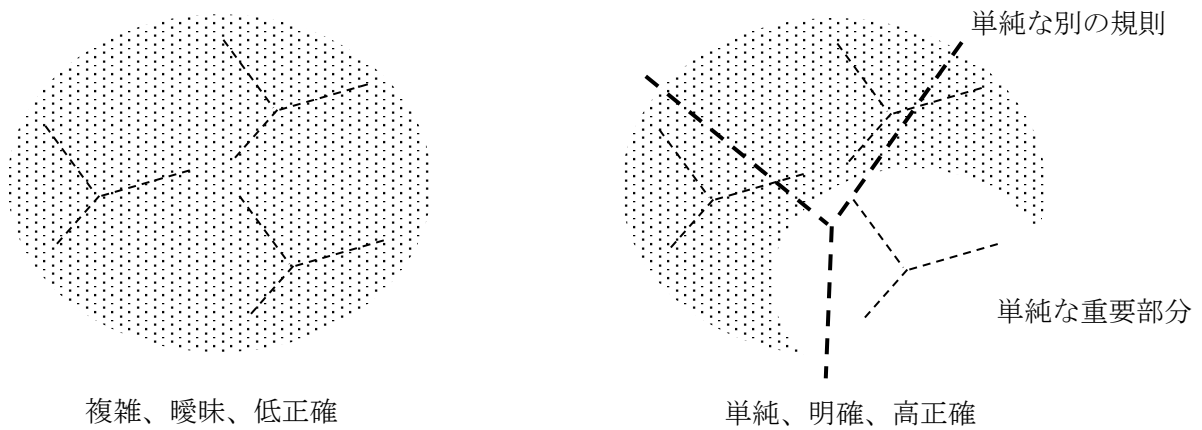


図 6-43 教育の各分野と人間・現実と仕事

複雑・曖昧で低正確な認識よりも、単純・明確で高正確な認識の方が良い。複雑な規則に対しても、単純な別の規則の発見や、単純な重要部分の選別を行うべきである。問題なのは認識の量ではなく質であり、現実的で明確な規則を理解する必要がある。

量をこなすだけの賢さは無意味である。記憶量や頭の回転などの機能的な能力よりも、現実的で明確な規則を理解できるかどうか重要である。また賢くても人間的では意味がない。生現実に向かう明確な知性を教育する必要がある。知性は教育心理学における「メタ認知」 [17]に近い。



認識の量でなく質の問題、現実的で明確な規則を理解
 量をこなすだけの賢さや、人間的賢さは無意味
 生現実に向かう明確な知性の教育、知性はメタ認識

図 6-44 規則の単純・複雑と賢さ

6.7.6. 犯罪

犯罪には下落成果・暴力・閉鎖・問題行動・権利・国家・教育などが関係し、複合的検証が必要になる。

下落成果には暴力、麻薬、賭博、乱れた性行為、強い他者攻撃などがあり、犯罪に直結する。これは時間的な局所閉鎖とも言える。

問題行動の一部として犯罪を見ると、空間的な局所閉鎖の一種である。これは下落成果・暴力などの時間的な局所閉鎖と連動している。

社会と実規則化権利が正しく機能していれば、犯罪者は個人的な誤りである。認識を修正する必要があり、社会に正しく参加する方法の教育や訓練も重要である。社会と実規則化権利が正しく機能していなければ、犯罪者は個人的な誤りと言えなくなる。ただし社会全体としては修正する必要がある。

犯罪は因習や文化とも関係しており、誤った因習や文化があると犯罪が促進される。

国家は犯罪対策のために警察力が必要だが、破壊を抑えた威嚇的な暴力が望ましい。小権利の人間が権利を得るために暴力を使う場合があるが、それで生満足を増やす事は困難である。

6.8. 発展への応用

6.8.1. 人類の発展

人類の発展について検討する。人間的・感情的発展は誤りであり、現実的・生物的発展が正しい。生物的に見れば人口が増える事は発展である。また個人の生満足の増加も発展である。人類の発展は両者を合わせたものになる。

満足は人間的で曖昧であり、貨幣も少し曖昧である。生満足を理解するには、明確な現実的権利を見るべきである。これは生物に対する見方と同じである。希少な野生動物を保護する場合、生息数を増やす事は重要である。しかし狭い飼育下において人工繁殖で数だけ増やしても十分とは言えない。「狭い飼育下」が野生動物の現実的権利を示し、生満度に直結する。

人間は自律的に行動しており、機械や家畜とは異なる。この点は野生動物に近い。外部から強制的に行動させる事はできないので、自律的に正しい方向に進むように仕向けなければならない。

人間の現実的権利には物・時空間の所有量や生物・動物的権利などが挙げられる。養育人数・居住面積・居住地の状況・自由時間・雇用期間の期待値などを見るべきであり、ここから生満度が推測できる。これらの現実的権利は人口の増減にも直結する。都市・農村も居住地の状況として捉える事ができる。現実的権利を元に生物の生活環・世代交代のような分析をすれば、人口の増減や生満足を明確に分析できる。

曖昧な貨幣で発展を見ると不安定化する。リーマン・ショック [54]などが典型例である。また貧富の格差が広がれば実規則化権利の崩壊と暴動がおこる。

金持ちで流行の品を持って文芸系を大量に見聞きする、というのは生満足のある状況ではない。必要な物・時間・空間を持ち、仕事が安定し、大都市・自然の両方に近く、子育てができるのが生満足のある状況である。華やかな発展は人間的・感情的で誤りである。現実的・生物的な発展が正しい。

企業は構造的に貨幣を基礎としているため、貨幣を重視するのも仕方がない部分がある。一方で政府は実規則化権利を決める立場にあり、貨幣は目的ではなく道具でしかない。特に政府は貨幣よりも現実的権利を重視すべきである。企業は貨幣の問題により消滅する可能性があるが、政府は貨幣の問題で消滅する事はない。北朝鮮のように自国貨幣がほとんど機能しない状態でも国家は成立する。政府が消滅するのは実規則化権利を決められなくなった場合であり、戦争・暴動・大規模デモなどが相当する。

政府・地域は貨幣でなく、人・物・時空間・現実的サービスなどの増減と出入りを分析すべきである。これは生物における物不足や移動の分析と同じである。これにより貨幣の人間の曖昧さを回避でき、貨幣自体の変動とも無関係になる。貨幣を使えば一括した分析ができるが、「貨幣の分析」以上の意味はない。貨幣を基礎としない政府・地域の分析には合わない。人・物・時空間などは個別に分析ができ、必ずしも統合的に分析する必要がない。また貨幣より個々の関係も明確になる。住人と住居の数は直接的に関係するが、総収入で見ると曖昧になる。

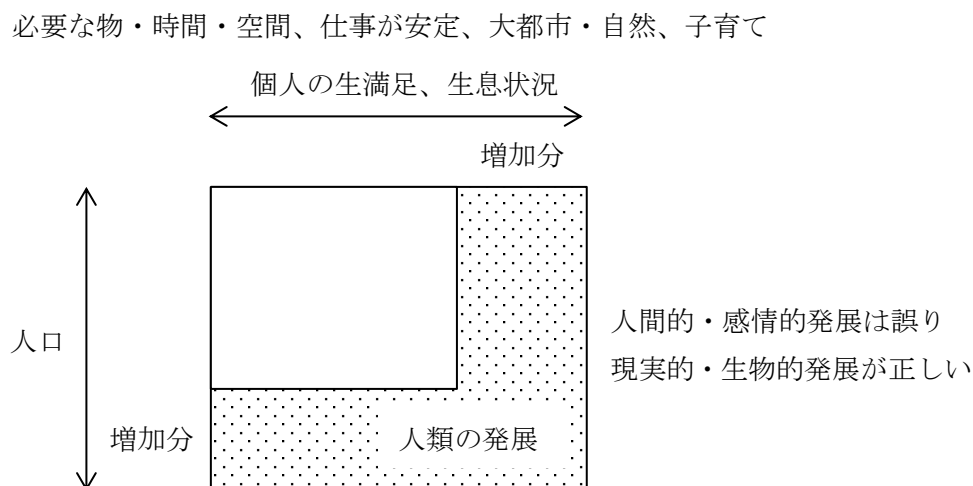
政府のインフラ整備も現実的権利で見るとインフラ整備をする対象が重要になり、これにより現実的権利の増加分が変化する。インフラ整備をしても使われなければ無駄になる。景気対策として見ると、インフラ整備の対象が何でも大差ない。この見方だと現実的権利の増加に繋がらない。

人口と個人の生満足は基本的に対立するので注意が必要である。これらを両立させる形で発展させなければならない。対人工物・自然物権利は人口が増えると減少する。対人間権利は人口が増えても変わらない。

人口と個人の生満足の関係を生物的に見ると、動植物の数と生息状況に相当する。動植物の生息状況が良け

れば数は増加するが、増加しすぎると生息状況が悪化し減少に転じる。これが現在の人類の状況である。特に先進国の生息状況悪化と減少が著しい。植物のように間引きする訳にはいかないので、増加を抑えつつ生息状況を改善する必要がある。

人口が増える前の状況に戻すのは、衰退なので誤りである。人口が減少しても生息状況が自然に改善するとは限らない。例えば作物を作りすぎて土壌環境が悪化した場合、放置しても改善しない。



満足は人間的で曖昧、貨幣も少し曖昧、貨幣で見ると不安定化
 明確な現実的権利を見るべき、物・時空間の所有量など、生物と同じ、特に政府
 政府・地域は貨幣でなく、人・物・時空間などの増減と出入りを分析すべき、生物と同じ
 人口と個人の生満足は基本的に対立、数が増えすぎて生息状況が悪化し減少
 生息状況改善が必要、増える前に戻すのは衰退で誤り、人口減でも改善とは限らない

図 6-45 人類の発展

6.8.2. 歴史と未来の発展

人類の発展は、今まで自然科学の発展に支えられてきた。自然科学が発展した理由は、これが現実的な学問だからである。今後は人間を生現実化し、人間に関する学問も同様に発展させるべきである。自然科学・医学・当解析を使って、人間を生現実化・生物化すべきである。これにより人間を明確化して推測を向上できる。人間の生現実化により、学問と産業を科学技術のように発展できる。

自然科学も昔は錬金術のように神秘的で曖昧なものだった。これを現実的で明確にした結果、現在の発展ができた。人間に関する学問も同様に現実的で明確なものにすべきである。

昔は産業の中心が第一次産業と農村だった。自然科学の発展に伴い、人工物を自然物にする第二次産業と工場が産業の中心となった。現在の先進国においては第三次産業と都市が産業の中心である。途上国では今も第一次・第二次産業が産業の中心であり、自然科学により先進国のレベルまでは発展が可能である。先進国は第三次産業の基盤となる人文・社会科学が人間的で曖昧なため、今のままでは発展困難である。途上国もこれに追従していくと予想される。

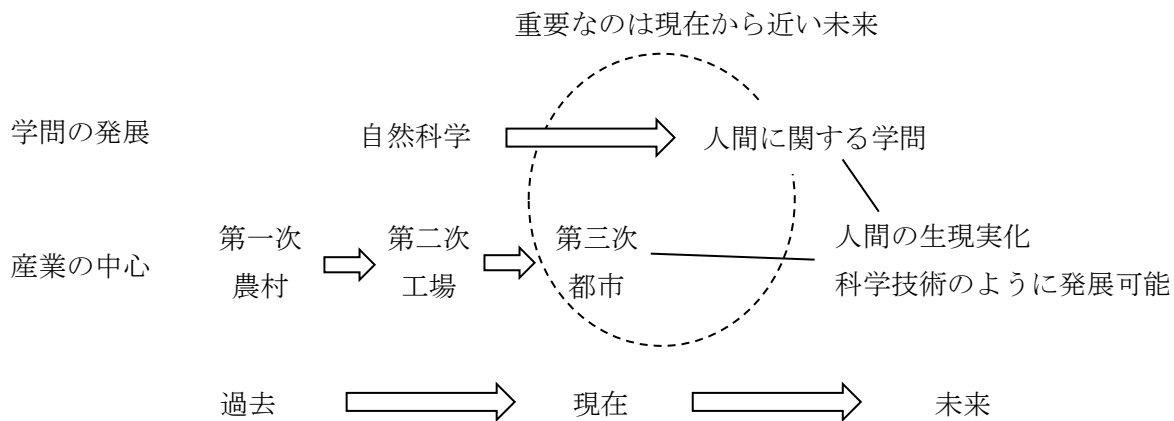
第三次産業は人工物と人間による産業であり、人間の解析も重要である。人間に関する学問と同様に、第三次産業や都市も現実的である必要がある。これらも現実的解析により発展が可能になる。明確化・規則性向上も重要である。現実的解析により人間を明確に理解すれば、それに基づく規則により発展が可能になる。

人間的な無駄を排除すれば発展できる。資源を現実的に不要な箇所から必要な箇所へ移せば、その分だけ現実的に発展できる。現実的権利の増減に基づいて、仕事の必要性を判別する必要がある。人間的な作業を現実的にして規則化・効率化すべきである。無駄な社内政治の調整や、無駄な文書・会議などを排除すれば、その分だけ現実的生産性は向上する。これらは特に人間的な仕事において重要である。人間的な無駄はあらゆる所に存在し、全体としては膨大である。ただし改善するには人員の再教育・再配置が必要であり簡単ではない。

時間において重要なのは、現在から近い未来までである。過去は現在との関係を元に未来を予測する場合のみ重要であり、過去に囚われても意味はない。現在から近い未来で重要になる、人間に関する学問や第三次産業・都市の生現実化に注力すべきである。人工物の基礎として自然科学は引き続き重要である。自然科学においても過去の単純な工場ではなく、高度な研究開発に注力すべきである。研究開発は第三次産業に属する。

過去から続く人間的な因習に従う必要はない。人間の本質的な規則は生物としての規則であり、過去から続く因習ではない。近現実開放により近現実から過去・空間遠方へ開放的に理解すべきである。因習は特に途上国において問題が大きい。

破滅的な世界大戦や冷戦は、発展した科学技術の扱いが人間的であるために起きた。科学技術を現実的に扱えば、破滅的な戦争は回避できる。



今までは現実的な自然科学と第一次・第二次産業で発展
 途上国は先進国まで発展可能、先進国は今の上では発展困難
 自然科学・医学・当解析で、人間に関する学問を生現実化・生物化・明確化すべき
 第三次産業と都市も、現実的解析と明確化・規則性向上により発展が可能
 人間的無駄を排除、資源を現実的に必要な箇所へ移す、人間的作業を現実化、再教育が必要

図 6-46 学問・産業の歴史と未来の発展

過去においては自然物が多数で人工物は少数だった。今までの人間の発展は、人工物の進化と規模拡大によるものである。人工物の規模拡大により、現在では人工物の方が多数になり、自然物は希少化しつつある。人

工物の原料は自然物であり、自然物の量の制約を人工物も引き継ぐ。量の制約や自然破壊の問題により、人工物の規模拡大はこれ以上困難である。途上国ではまだ規模拡大の余地があるが、先進国にその余地はない。地球温暖化などを考えれば途上国における人工物の規模拡大も容易でない。

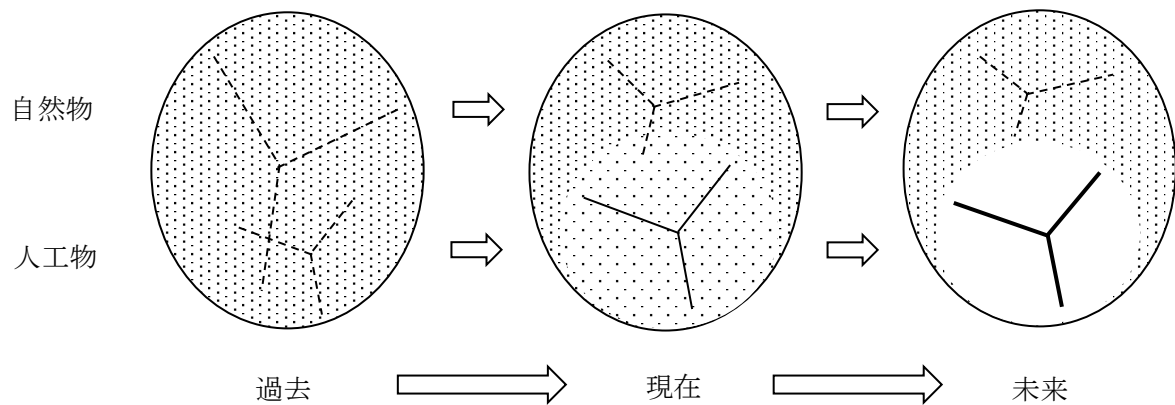
人工物の規模拡大が困難だとしても、人間の発展を支えるのは人工物であり、生満足価値は人工物の方が高い。人工物の進化や発展は今後も必要である。規模が拡大できないため、性能を向上させるしかない。人工物の明確化・規則性向上により発展が可能になる。これには科学技術の高度化や、多量で複雑になった人工物の単純化などが挙げられる。また自然物と人工物の混在を止め、自然物と区分する事で規則性を向上できる。大都市の増加による人の集約や、農業の高度化なども重要である。

人間も生物の一種であり、生物として環境や行動の変化は必須である。過去や現在を持続させても意味はない。人間の発展において重要なのは持続でなく、規則と推測である。規則発見と実規則化により、推測能力を向上させなければならない。たとえ人間の活動をすべて変わらないようにしても、自然環境が変わらない訳ではない。人工物だけでなく行動実規則化の規則性も重要である。時間変化への追従は、生物としての正しい適応である。

原油の埋蔵量は採掘技術の進歩で年々変化しており、シェール革命により採掘の状況はさらに変化した。生物も都会の状況に年々適応してきている。地質学的スケールで見れば何度も生物の大量絶滅が発生してきた。変化を否定すればこれらに適応できなくなる。変化の規則を理解し推測する事で、変化への正しい適応が可能になる。

特に問題なのは「昔からの農村」を維持する事である。これは本質的な自然ではなく、保全の必要性も低い。人工物の発展を妨げ、農村の開発もできなくなる。社会制度は因習と直結しており、社会的な生現実化も妨げる。そもそも文明は、歴史的に見ても都市で発達したものであり、昔からの農村に大きな価値はない。昔から続く社会でも、それに従う必要はない。

人間的な環境思想でなく、現実的な自然物・人工物を見る必要がある。人間は知的生物であり、人間も生物としての規則に従っている。未来でもその環境で適応し生満足を得るのが正しい。人間的な環境思想で発展を妨げるのは誤りである。環境問題においても人口増と生満足増加を求めるのが正しく、生満足増加のためには現実的権利の増加が必要である。人間も生物の一種なので、これらは必然である。



今までは人工物の進化と規模拡大で発展

人工物の規模拡大はこれ以上困難、今後は明確化・規則性向上で発展

科学技術の高度化、多量人工物の単純化、自然物との区分、大都市化、農業高度化など

生物として変化は必須、持続でなく規則と推測が必要、時間変化に追従

人間的な環境思想で発展を妨げるのは誤り、人口増と生満足増加を求める

図 6-47 自然物・人工物の歴史と未来の発展

7. 結論

7.1. 解析の結論

人間の包括的・網羅的な理論解析を行う事ができた。情報処理の手法を応用した厳密な演繹的論理構造を積み上げ、人間に関する様々な事象まで解析を当てはめる事ができた。内容は現実的であり、自然科学・医学に近づく事で学問全体を繋げる事ができた。これにより学問全体としての整合性を与える事ができた。

人文・社会科学において今まで見えなかった基本構造が見えた。これには精神疾患、経済、主権国家、産業などがある。今まで明確に説明できなかつた事が説明できた。当解析により明確な構造が示せるので、人文・社会科学における曖昧な人間的概念は不要になる。

解析の中核構造には認識・現実・規則・開放・実規則化などがある。中核構造だけでも人間に関する事象への当てはめまで理解できる。しかし細部を追うには中核構造以外をたどる必要があり、容易ではない。

重要なのは全体を貫く明確な論理構造の存在である。もし万一細部に誤りがあっても、誤り自体が明確になるので論理構造を追えば補正できる。論理や言葉の定義を厳密に扱う必要がある。応用の理解よりも論理構造を追うことが重要であり、応用を表面的に見るだけでは意味がない。曖昧な人間的概念で当解析の正誤を判定しても、曖昧な議論にしかならない。

当解析の大半は情報処理に基づく定性的な分析である。数学の利用は少なく、定量的な分析はほとんど行っていない。情報処理自体が数学に近いので、当解析は定量的に利用できる。解析の内容を実際に利用するには、定量的な分析が必要になる。

理論解析として必要となる、全体としての整合性と具体性は確保できた。細部の事象の検討は十分とはいえないが、具体的な検証が可能な状態にはある。当解析に対しては論争でなく具体的検証を行うべきである。自然科学はそうやって進歩してきた。人間的な論争になると元の曖昧な人文・社会科学に戻ってしまう。

人間が今後も発展するためには、人間を生現実化しなければならない。人間的・感情的発展は誤りであり、現実的・生物的発展が正しい。現実的な自然科学・医学・科学技術が今まで発展してきたように、人間も生現実化すれば発展ができる。人間的な無駄を排除すべきである。しかし生現実化には認識の修正が必要で容易ではない。自然科学・医学の近くで人間を解析し、学問全体の枠組みから変えるべきである。専門分野の閉鎖枠を外した開放的な理解が必要である。

論争により非現実的な認識を否定するだけでは意味がなく、正しい認識を作成しなければならない。人間を生現実化した正しい認識を作成する必要がある。そのためには当解析の具体的検証が必要である。現在の平均的認識でも正しさは不十分であり、その誤りを指摘するだけでは意味はない。

7.2. 認識・知性の修正

発展のためには徹底した「異常」な現実性を受け入れる必要があり、認識の修正は容易でない。「異常」に現実的でも、普通より精神疾患・問題行動からは遠くなる。認識と知性は長い時間を掛けて作り上げてきたものであるため、それを修正するのも長い時間がかかる。

人間は強力な知性により認識を制御できる。強力な知性は人間の長所だが、常に正しく働くようにはできていない。科学技術も後天的に得られたものであり、正しい知性が必要である。

認識の修正において、正しい認識が不十分なまま現実化すると認識破壊・うつが起こる可能性がある。現実から人間まで開放した正しい認識を作りながら、壊れない範囲で修正する必要がある。認識破壊・うつを回避するには現実的・生物的認識を作り上げる必要がある、簡単ではない。

人間的な認識は誤りであり、現実的・生物的な認識が正しい。曖昧な人間を生現実化・明確化する必要がある。人間は通常の動物とは異なるが知的生物であり、生物的理解が必要である。人間・現実の全体を修正すべきである。人間の生現実化により正しい認識に修正すれば、人間・現実全体で整合する。生息状況を見る必要がある。認識に関しては、異常でなく正誤や現実的問題を見るべきである。問題は異常でなく非現実・不整合である。認識・知性の修正対象として、生自己・「自己の生息状況」の理解が重要である。

人間的で曖昧な感情・満足は誤りであり、現実的・生物的で明確な感情・満足が正しい。現実と整合する生感情を理解する事が重要である。感情種類の開放・無認識感情・地味感情などにより、生感情が理解できる。

曖昧な人間的満足でなく、明確な生現実的正しさが必要である。人間的認識による生不満の理解が重要である。満足感でなく自己の生息状況を見るべきである。現実的な真の満足でなければならない。誤った認識正評性は生不満に繋がるため、認識満足は認識不満よりも問題が大きい。誤った認識満足は無意味なだけでなく害悪である。誤りを修正して生満足化する必要がある。満足は人間の一部で曖昧であり、満足を見るだけでは生満足は分からない。生現実的な整合と、人間的な満足の不整合を見るべきである。人間的な不整合を無くす事で生満足を得られる。すべての満足から一步引き生不満を見る必要がある。人間の生現実化により生満足を得られる事を理解できれば、認識の修正が可能になる。

近現実から生人間と遠方へ開放的に理解すべきである。開放的理解によりすべての実区分で生満足を得るのが正しい。感情種類は多数存在し、「満足だけ」「不満だけ」なのは閉鎖による誤りである。諦観などの地味感情まで含めて開放的に理解する必要がある。無認識感情も重要であり、感情・満足にこだわらず一步引けば開放的に理解できる。「自然の中で現実を見てこだわりを無くす」という方法なら、比較的容易に修正できる。

普通から離れた正しい知性と認識を作る必要がある。人間的こだわりや、スポットライト的な閉鎖満足は誤りである。この点から見ても、文芸系の多くは誤りであり、普通の認識も半分程度は誤りである。一点で高い満足でなく全体での満足が正しい。様々な普通の満足は人間的・バラバラ・不整合で、すべて誤りである。人間的で曖昧な普通の満足でなく、現実的で明確な生満足が正しい。普通の満足でなく自己の生息状況を見るべきである。バラバラな普通の満足は、開放現実から見る事で整合できる。すべてのこだわりを無くして現実を見れば、バラバラの認識は収束する。

7.3. まとめ

現在でも現実的に人間を見れば様々な問題が存在する。精神疾患・犯罪・引き籠り・浪費などの問題は多数ある。普通の人間でもそれに近い話は無数にある。現実的に社会を見ても様々な問題が存在する。過度の貧富・戦争・環境問題・人口問題などの問題も多数ある。

今までは人間について良く分からないので仕方のない部分もあった。しかしそのままでは良くない。現実を直視して改善すべきである。当解析を元に現実的・具体的分析をすれば、これらの問題を改善できる。ただし当解析は難解で普通から遠いため、問題の改善は容易でない。当解析は現代人にとって厳しい内容である。

人間的でなく現実的・生物的に見る必要がある。人間的満足は誤りで、生息状況が正しい。現実を見るだけでなく、論理的に解析して「理解」できないと改善できない。根本的な現実的解析が必要である。当解析を元に具体的事象を詳細に分析して、はじめて問題の改善が可能になる。

当解析は「人間的で素晴らしいもの」でなく、「現実的・論理的で役立つもの」である。必要なのは「素晴らしい曖昧な人間」でなく「現実的・明確で整合した真の人間」である。当解析が示す行先は現実的・生物的で整合した世界であり、普通から遠い世界である。普通から遠いため現実的・論理的に見ないと意味が分からない。実際には普通レベルから問題の多い現代を、当解析により現実的に改善できる。

参考文献

- [1] 小林直樹(編), 総合人間学の試み, 学文社, 2006.
- [2] S. Raschka, V. Mirjalili, 株式会社クイープ(訳), 福島真太郎(監訳), 第2版 Python 機械学習プログラミング, インプレス, 2018.
- [3] 小池貞則, 多変量解析入門, 岩波書店, 2010.
- [4] 大矢雅則(編著), 井上啓, 佐藤圭子, 情報数理入門, サイエンス社, 1999.
- [5] 松村明(編), 三省堂編修所(編), “スーパー大辞林 3.0,” 三省堂, 2006-2016.
- [6] J. Martin, C. McClure, 國友義久(訳), 渡辺純一(訳), ソフトウェア構造化技法 ダイアグラム法による, 近代科学社, 1986.
- [7] K. Scott, テクノロジックアート(訳), 長瀬嘉秀(監訳), 今野睦(監訳), 入門 UML, ピアソン・エデュケーション, 2002.
- [8] R. A. Harvey, C. Krebs, J. Weinberg, E. Akesson, 白尾智明(監訳), イラストレイテッド神経科学, 丸善出版, 2013.
- [9] K. Walsh, 河内十郎(監訳), 相馬芳明(監訳), 神経心理学 臨床的アプローチ 第2版, 医学書院, 1997.
- [10] D. W. Zaidel, 河内十郎(監訳), 神経心理学 その歴史と臨床の現状, 産業図書, 1998.
- [11] 山口成良, 視床と精神医学 汎性視床皮質投射系の役割, 医学書院, 2004.
- [12] 久住眞理, 筒井末春, 大谷純, 行動科学概論, 日本総合科学大学, 2011.
- [13] S. Freud, 菊盛英夫(訳), 完訳・世界の大思想-3 フロイト, 河出書房新社, 1984.
- [14] 功力浩, 神経疾患の脳科学的講義, 金剛出版, 2012.
- [15] 浅川伸一, 江間有沙, 工藤郁子, 巢籠悠輔, 瀬谷啓介, 松井孝之, 松尾豊, ディープラーニング G 検定公式テキスト, 翔泳社, 2018.
- [16] A. Freeman, J. Pretzer, B. Fleming, K. M. Simon, 高橋祥友(訳), 認知療法臨床ハンドブック, 金剛出版, 1993.
- [17] 善明宣夫(編著), 宇恵弘, 西川隆蔵, 前田志壽代, 佐野茂, 学校教育心理学, 福村出版, 2013.
- [18] C. Grebogi, J. A. Yorke, 香田徹(訳), カオス・インパクト, 森北出版, 1999.
- [19] M. M. Waldrop, 田中三彦(訳), 遠山峻征(訳), 複雑系, 新潮文庫, 2000.
- [20] N. Gilbert, K. G. Troitzsh, 井庭崇(訳), 岩村拓哉(訳), 高部陽平(訳), 社会シミュレーションの技法, 日本評論社, 2003.
- [21] 西川文二, 子犬の育て方・しつけ, 新星出版社, 2013.
- [22] 谷田貝公昭(監), 村越晃(監), 高橋弥生(編), しつけ辞典, 一芸社, 2013.
- [23] U. M. Ascher, L. R. Petzold, 中森眞理雄(監訳), 嘉村友作(訳), 三ッ間均(訳), 常微分方程式と微分代数方程式の数値解法, 培風館, 2006.
- [24] 赤間世紀, 人工知能教科書, 工学社, 2012.
- [25] J. McCarthy, P. J. Hayes, 松原仁(訳), 人工知能になぜ哲学が必要か, 哲学書房, 1990.

- [26] A. M. Zagoskin , 権沢宇紀(訳), 多体系の量子論 技法と応用, シュプリンガー・フェアラーク東京, 1999.
- [27] 宮下直, 井鷲裕司 , 千葉聡, 生物多様性と生態学, 朝倉書店, 2012.
- [28] 山影進 , 服部正太, コンピュータのなかの人工社会, 共立出版, 2002.
- [29] R. S. Sutton, A. G. Barto, 三上貞芳(訳) , 皆川雅章(訳), 強化学習, 森北出版, 2000.
- [30] A. Adler , 高尾利数(訳), 人間知の心理学, 春秋社, 1987.
- [31] 岡林春雄, 認知心理学入門, 金子書房, 1995.
- [32] A. P. Association, 高橋三郎(監訳), 大野裕(監訳), 染谷俊幸(訳), 神庭重信(訳), 尾崎紀夫(訳), 三村將(訳) , 村井俊哉(訳), DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引, 医学書院, 2014.
- [33] 染矢俊幸, うつ病診療エッセンシャルズ, メディカルレビュー社, 2014.
- [34] S. G. Hofmann, 伊藤正哉(訳) , 堀越勝(訳), 現代の認知行動療法 CBT モデルの臨床実践, 診断と治療社, 2012.
- [35] 河野荘子(編著) , 岡本英生(編著), コンパクト犯罪心理学, 北大路書房, 2013.
- [36] 稲田俊也(編集、監修), 稲垣中(監修), 伊豫雅臣(監修) , 尾崎紀夫(監修), 精神疾患の薬物療法ガイド, 星和書店, 2008.
- [37] 松田英子, 夢想起メカニズムと臨床的応用, 風間書房, 2006.
- [38] 岡田斉, 「夢」の認知心理学, 勁草書房, 2011.
- [39] 芥川龍之介, 芥川龍之介全集 第十六巻, 岩波書店, 1997.
- [40] ブリタニカ・ジャパン株式会社, “ブリタニカ国際大百科事典 小項目版,” 2013.
- [41] B. L. Hart , 森裕司(訳), Dr.ハートの動物行動学入門, チクサン出版社, 1995.
- [42] 伊藤嘉昭, 生態学と社会, 東海大学出版会, 1994.
- [43] J. H. Vandermeer, D. E. Goldberg, 佐藤一憲(訳), 竹内康博(訳), 宮崎倫子(訳) , 守田智(訳), 個体群生態学入門, 共立出版, 2007.
- [44] 大塚柳太郎, 河辺俊雄, 高坂宏一, 渡辺知保 , 阿部卓, 人類生態学 第2版, 東京大学出版会, 2017.
- [45] 阿藤誠 , 佐藤龍三郎, 世界の人口開発問題, 原書房, 2012.
- [46] 小川浩之, 板橋拓己 , 青野利彦, 国際政治史, 有斐閣, 2018.
- [47] 高野秀行, 謎の独立国家ソマリランド, 本の雑誌社, 2013.
- [48] 奥野正寛, ミクロ経済学, 東京大学出版会, 2008.
- [49] M. Baddeley , 土方奈美(訳), エッセンシャル版 行動経済学, 早川書房, 2018.
- [50] R. S. Pindyck, D. L. Rubinfeld , 姉川知史(監訳), ピンダイク&ルビンフェルド ミクロ経済学 I, KADOKAWA, 2014.
- [51] M. Skowsen , 田総恵子(訳), 自由と市場の経済学, 春秋社, 2013.
- [52] O. Olsson, 石川健一(訳), 加藤将貴(訳), 黒岩直(訳), 中岡俊介(訳) , 永富隆司(訳), オルラ オルソン マクロ経済学, 成文堂, 2017.

- [53] A. H. Studenmund , 高橋青天(監訳), 計量経済学の使い方 上 基礎編, ミネルヴァ書房, 2017.
- [54] 田淵直也, ファイナンス理論全史, ダイヤモンド社, 2017年.
- [55] 光井渉 , 太記祐一, 建築と都市の歴史, 井上書院, 2013.
- [56] 畑村洋太郎, 安部誠治 , 淵上正朗, 福島原発事故はなぜ起こったかー政府事故調核心解説, 講談社, 2013.
- [57] 林野庁 , “ 森林・林業・木材産業の現状と課題 , ” [オンライン]. Available: http://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/genjo_kadai/. [アクセス日: 5 5 2019].
- [58] 中西準子, 環境リスク学 不安の海の羅針盤, 日本評論社, 2004.
- [59] Q. o. L. 研究会, QOL 学を志す人のために, 丸善プラネット, 2010.
- [60] サイバーセキュリティと経営戦略研究会, サイバーセキュリティ, NTT 出版, 2014.
- [61] 野中誠, 小池利和 , 小室睦, データ指向のソフトウェア品質マネジメント, 日科技連出版社, 2012.
- [62] P. Bruce, A. Bruce, 黒川利明(訳) , 大橋真也(技術監修), データサイエンスのための統計学入門, オライリー・ジャパン, 2018.
- [63] 人工知能学会(監), 松尾豊(監), 松原仁(監) , 神寫敏弘(編), 深層学習, 近代科学社, 2015.
- [64] C. G. Clark , 金融経済研究会(訳), 経済的進歩の諸条件, 日本評論社, 1945.
- [65] 浅井康次(編), 青山志津(協力) , 榊原秀樹(協力), 長期産業データ集 2004, 日本政策投資銀行調査部, 2004.
- [66] 山崎朗, 戸田順一郎, 北嶋守, 岡野秀之, 山本匡毅, 加藤恵正, 谷川徹, 石橋毅, 根岸裕孝 , 辻田昌弘, 地域産業のイノベーションシステム, 学芸出版社, 2019.
- [67] European Commission, “IRI Scoreboard 2018, R&D ranking of the world top 2500 companies,” [オンライン]. Available: <http://iri.jrc.ec.europa.eu/scoreboard18.html>. [アクセス日: 4 5 2019].
- [68] 総務省統計局, “平成 27 年国勢調査 最終報告書「日本の人口・世帯」統計表,” [オンライン]. Available: https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00200521&tstat=000001080615&result_page=1&second=1&cycle=0&tclass1=000001124175&layout=datalist&second2=1. [アクセス日: 4 5 2019].
- [69] 厚生労働省, “平成 30 年 (2018) 人口動態統計 (確定数) の概況,” [オンライン]. Available: <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei18/index.html>. [アクセス日: 27 6 2020].
- [70] United Nations, “ World Population Prospects 2019, ” [オンライン]. Available: <https://population.un.org/wpp/Download/Standard/Population/>. [アクセス日: 29 11 2020].
- [71] Demographia, “ Demographia World Urban Areas, ” [オンライン]. Available: <http://www.demographia.com/db-worldua.pdf>. [アクセス日: 6 5 2019].
- [72] IMF, “ World Economic Outlook Database, ” [オンライン]. Available: <https://www.imf.org/external/pubs/ft/weo/2019/01/weodata/index.aspx>. [アクセス日: 29 11 2020].
- [73] 総務省統計局 , “ 日本の統計 人口・世帯 , ” [オンライン]. Available: <https://www.stat.go.jp/data/nihon/02.html>. [アクセス日: 29 11 2020].

- [74] C. Chambers , 大塚紳一郎(訳), 心理学の7つの大罪, みすず書房, 2019.
- [75] J. McGuigan , 村上恭子(訳), モダニティとポストモダン文化, 彩流社, 2000.
- [76] 佐藤正英, 片山洋之助, 細谷昌志, 吉田武男, 星川啓慈, 上原雅文, 杉村靖彦, 児玉聡, 矢野優, 福本修 , 石塚健大, 改訂版 倫理, 数研出版株式会社, 2017.
- [77] 杉中康平, 田村茂紀, 荒畑美貴子, 上條さなえ, 小貝宏, 富岡栄, 沼田洋子, 根岸久明, 三宅健次, 淀澤勝治 , 渡邊弘, 中学道徳 1, 光村図書出版, 2019.